TS転生令嬢は『カウンター悪役令嬢』を目指す

緑茶わいん

前世でとことん女運の悪かった男子高校生が生まれ変わったのは、紅の髪と瞳を持つ公爵令嬢だった。

しかし、記憶が取り戻すまでの彼女は我が儘放題の悪役令嬢予備軍。

このままだと悪意渦巻く女の園で嫌いだった悪い女の仲間入りをすることになる。

だったら、いっそのこと『悪役令嬢にとっての悪役令嬢』になってやる。

男としてのプライドをすり減らしながら、公爵令嬢リディアーヌ・シルヴェストルは奮闘する。

※同性愛者のサブキャラがいるためガールズラブタグを付けています

※小説家になろうにも投稿しています。

※主人公イメージ画像（ｎｏｂｅｌＡＩ製）



目次

序章：屋敷内の悪意 1
我が儘お嬢様、前世の記憶を取り戻す 1
病み上がりの令嬢と公爵家の人々 1
病み上がりの令嬢と公爵家の人々 2 16
病み上がりの令嬢と公爵家の人々 3 31
病み上がりの令嬢と公爵家の人々 4 44
王子、襲来 60
王子、襲来 2 72
王子、襲来 3 87
屋敷内の悪意 101
屋敷内の悪意 2 115
130

屋敷内の悪意　3……146
屋敷内の悪意　4……162
屋敷内の悪意　5……175
閑話
公爵令嬢の休日……191
第一章：カウンター悪役令嬢への道
公爵家のお仕事と公爵令嬢……205
公爵家のお仕事と公爵令嬢　2……222
カウンター悪役令嬢への道……236
カウンター悪役令嬢への道　2……251
カウンター悪役令嬢への道　3……265
カウンター悪役令嬢への道　4……279
カウンター悪役令嬢への道　5……293

紅髪の公爵令嬢：リオネル誕生パーティ（前編）……312
紅髪の公爵令嬢：リオネル誕生パーティ（後編）……328
閑話……343
貴族女性とお洒落な商談……343
屋敷の変化と長女の我が儘……356
優秀な姉と平凡な妹……369
第二章：魔女と魔女の弟子……381
《紅蓮の魔女》と呼ばれる少女……381
《紅蓮の魔女》と呼ばれる少女　2……395
モレ伯爵家での問答……409
モレ伯爵家での問答　2……423
魔女の秘密部屋……436
魔女の秘密部屋　2……450

公爵令嬢の専属騎士……463
公爵令嬢の専属騎士　2……477
バルト家への訪問……491
バルト家への訪問　2……505
魔女の秘密部屋再び……519
悪役令嬢とカウンター悪役令嬢……532
悪役令嬢とカウンター悪役令嬢　2……545
魔女の過去……558
魔女の過去　2……572
卒業記念パーティーに向けて……585
卒業記念パーティー襲撃……597
卒業記念パーティー襲撃　2……611
パーティー襲撃　裏……626

パーティーの後始末……640
魔女への罰と新しい関係……655
閑話……673
銀の妖精は麦茶と共にやってきた……673
襲撃事件の後で……687
妹令嬢と不安な日……701
新人メイドと先輩メイド……714
【登場人物・家名等一覧】……726
第三章：兄妹の里帰り……739
影響と変化……739
魔法教師と里帰りの相談……753
シャルロットと初めての魔法授業……766
旅行の準備……778

公爵領への出発……794
道中……807
到着……820
母の面影……834
対面……847
相談……861
公爵邸の恋愛事情……876
祖父と孫の歓談……890
公爵邸での療養……904
妹の奮闘……918
公爵邸での療養　2……931
公爵邸での療養　3……944
買い物と闖入者……958

追跡……973
敵からの要求……988
救出……1004
快復と事後報告……1019
束の間の平穏……1032
束の間の平穏2……1047
兄妹の帰宅……1062
閑話……1077
母娘の語らい？……1077
新しい服飾用品……1091
メイドと主と大浴場……1104
第四章：王都の変化と王族の干渉（仮）……1117

お土産と誕生パーティーの予定……1117
お土産と誕生パーティーの予定　2……1131
十一歳の誕生パーティーと王族の接近……1144
十一歳の誕生パーティーと王族の接近　2……1157
十一歳の誕生パーティーと王族の接近　3……1171
リディアーヌと慌ただしい日々……1186
リディアーヌと慌ただしい日々　2……1199
リディアーヌと慌ただしい日々　3……1214
リディアーヌと慌ただしい日々　4……1227
新しい護衛騎士……1240
さらなる異変……1253
さらなる異変　2……1267

闘技大会での出来事……1280
闘技大会での出来事　2……1294
闘技大会での出来事　3……1306
公爵家での結婚式……1319
リディアーヌとヴァイオレット……1332
『聖女』の出現……1346
『聖女』の出現　2……1360
閑話　1373
目覚めた聖女と初めての城……1373
第五章：隣国の接近（仮）　1385
『聖女』と『竜の系譜』……1385

血の真実……1402
聖女の今後……1415
新男爵お披露目会……1429
憩いのひととき？……1442
成長とこれからのこと……1456
準備と相談……1469
魔女と聖女の憩いの時……1482
隣国の王妃……1496
乱入者……1509
隣国からの要請……1522
隣国正妃の願い……1537
会談……1551

会談を終えて……1565
友人たちとのお茶会と嫌な贈り物……1578
陰謀？の首謀者……1591
真夜中の侵入者……1604
使者と王都での騒動……1618
使者と王都での騒動　2……1633
真夜中の乾杯……1646
リディアーヌの新人教育……1660
紅髪の次期女王……1673

序章：屋敷内の悪意

我が儘お嬢様、前世の記憶を取り戻す

※不定期更新です

『女はズルい？　あはは っ！　そうかもね。……だったらさ、あんたも生まれ変わって女になれば？』

悪夢から目覚めると、そこは広いベッドの上だった。

黒く塗られた石造りの天蓋を見上げてため息をつく。このところ体調が悪く、昨夜は一晩中熱でうなされていた。お陰で思い出したくないことまで思い出してしまった。

熱はどうやら下がったらしい。疲労と空腹でふらふらではあるものの、暑さや寒さは感じなくなっている。汗をかいたせいか寝間着が蒸れて気持ち悪い。

――結局、お父さまはお見舞いに来てくれなかった。

まあ、お仕事だから仕方ないし、代わりに花を贈ってくれたから許してあげてもいい。

けれど、あの女は駄目だ。伝染るといけないからと言って顔も出さず、贈り物もしてくれない「お養母さま」。あいつは絶対にわたしのことを嫌っている。なのに、お父様ったら何度言ってもわかってくれない。

高校の文芸部を乗っ取ったのもああいう女だった。

部長をあっさり篭絡して活動方針を変更、他の部員たちも骨抜きにした挙句、六股だか七股だかがバレて退部していった。

忌々しい。

部長もお父様も、どうしてあんな女に騙されるのか。

俺も最初は騙されかけた。そういう外面の良さがあいつらのいやらしいところなのだが――。

「……あれ？」

俺？　わたし？

違和感を覚えて身を起こすと、頭に小さな痛みが走った。高校の文芸部でのこと。病床を見舞わない継母（ままはは）のこと。混在していた記憶が分けられ、区切られて明確になる。

一つは日本で男子高校生をしていた『俺』の記憶。

一つは公爵家に生まれ、幼くして母親を亡くした『わたし』の記憶。

どちらかが偽物というわけではない。

不思議なことに両方が『自分の記憶』だと感じられる。初めての感覚に首を振り、多少なりとも気持ちを落ち着けてから、俺はゆっくりと自分を見下ろした。

ふかふかのベッドに小さな女の子が座っている。

細い手足に色白の肌。ネグリジェのような寝間着を纏った身体はまだ起伏に乏しいものの、どこか女性的なラインを描いている。寝乱れた髪は肩くらいまでの長さがあり、その色はワインのような紅だった。

どう見ても男子高校生のそれではない。

『当然じゃない。この身体はわたしのものだもの』

脳内に『わたし』の思考が流れる。

俺はああ、そうかと思った。同時に『俺』の思考が「じゃあ自分はどうなったのか」と訴えてくる。答えは記憶の中にあった。男子高校生の自分が命を落とす場面。

「生まれ変わった、ってことか」

転生した俺はこの歳――八歳まで普通に生きて、不意に前世の自分を思い出した。

今の俺は『俺』であり『わたし』でもある。どちらかというと男の記憶が表に出ているようだが、さっきのように男の思考と女の思考を分けることもできる。

ややこしいが、どうやらそういうことらしい。

首を巡らせると、俺の寝室が見渡せる。

前世における自室と比べて数倍の広さ。食器棚に寝間着や下着の入ったクローゼット、2～3人掛けのテーブルに書き物用の机まである。ダブルサイズはある天蓋付きベッドが中央に陣取っている通り、基本的には寝るための部屋だ。

日中を過ごすための私室は別途、隣に用意されていたりする。

壁側の硝子窓からはきらきらとした陽光が射しこんでおり、今が朝であることを教えてくれる。

まるきり金持ちのお嬢様だが、それもそのはず。

俺の名前はリディアーヌ・シルヴェストル。国の宰相であるシルヴェストル公爵の長女だ。実の母は五歳の時に病死し、現在は父の後妻である養母に育てられている。

公爵は五段階ある貴族位のうち最上位にあたる。公爵家だけでも複数あるとか、家ごとの力関係とかを大雑把に省けば、我が家は「王族の次に偉い」ということになる。

「完全にお嬢様じゃない、わたし」

独り言は自然とお嬢様の口調で紡がれた。

意識して「男として動こう」と思わない限りはリディアーヌとしての仕草や癖が優先されるらしい。楽で助かる一方、男としての自意識は違和感を訴える。まあ、それを表に出さないで済むだけ幸運と言うべきか。

それにしても――。

「お腹が空いたわ」

記憶をたどると、昨日は水と薄いスープくらいしか口にしていなかった。体力も落ちるわけである。何か持ってきてもらおうと、サイドチェストの上に置かれた呼

び鈴に手を伸ばす。

そこで、寝室のドアが向こうから開いた。

音を立てないようにそっと入ってきたのは、シックなお仕着せを纏った若いメイドだった。焦げ茶色の髪に深い紺色の瞳をした彼女は、俺が身を起こしているのを見て目を丸くした。

「お、おはようございます、お嬢様。ご気分はいかがですか？」

『はあ？　おはようございます、じゃないでしょう。主人の部屋にノックもなく入ってくるってどういうことなの？』

ここ数日、俺はほぼベッドの上だった。寝ていると思って起こさないようにしてくれたのだろう……ということで、脳内の罵声はスルーする。

どこか怯えた様子のメイドは一メートル以上の距離を保ったままこちらの反応を待っている。俺は努めて微笑を浮かべると彼女に答えた。

「だいぶ楽になったけれど、お腹が空いてしまったわ。ええと、あなた……名前はなんて言ったかしら？」

記憶にはメイドの名前がなかった。顔自体は覚えているので、屋敷のメイドには

違いないのだが。『はあ？　メイドの名前なんていちいち覚える必要ないじゃない！』。ああ、うん。理由がよく分かった。

「あ、アンナと申します」

「そう、アンナね。ありがとう。……今度はちゃんと覚えるわ」

食べやすい食事をお願いすると、アンナはきょとんとした表情で「かしこまりました」と頷いた。きっと「お父さまに言ってあなたをクビにしてもらうわ！」とか言われると思ったのだろう。

『いきなりクビになんてしないわ。仕事の態度が悪かったって教えてあげるだけ』

いや、そういう問題ではない。

なんというか我ながらひどい我が儘ぶりである。これじゃあ怯えられて当然だ。

一礼して退室していくアンナを見送ってから、俺は再びため息をついた。

「なんで、よりによって女の子に生まれ変わったんだよ」

前世の『俺』は女運が悪かった。

実の姉。幼馴染。中学の時の担任。付き合った彼女。高校の文芸部の後輩ｅｔｃ……。身近な女、親しくなった女はほぼ全員、我が儘だったり計算高かったり、ずる賢く人を利用するような奴だった。

自分はもちろん周りの男も随分苦しんだ。

結局、最後までろくに見返してやれなかったことが一番の心残りだ。

生まれ変わってみろと嘲われて「なれるものならなりたい」と思ったこともある。

しかし、本気でなりたかったわけじゃない。

簡単な話だ。

女になれば女に囲まれて過ごすことになる。他人を騙して見下して嘲笑って上に行く、そんな奴らの仲間入りなんてしたくない。

『わたしだって嫌よ。社交界にはお養母さまみたいなのがたくさんいるんでしょう？』

八歳のリディアーヌも貴族社会については詳しくない。

参考になるのはせいぜい、文芸部にいた頃に見聞きした『創作作品上の貴族像』くらいだ。

上品かつ華やかな印象とは裏腹に様々な陰謀が蠢く魔窟。

女の世界は特に嫉妬や格付け争いが激しいイメージ。もちろん創作の話だが、古典作品からして意地悪な継母にいじめられる話だったりするし、俺の生きていた時代には『悪役令嬢』なんて言葉まで広まっていた。

というか、リディアーヌ・シルヴェストルも十分、悪役令嬢（それ）の範疇だ。

権力を振るうのに躊躇がない我が儘娘。

アンナに対して思ったようなことを実際に言うのは当たり前。ドレスが気に入らないだのティータイムのお菓子が足りないだの嫌いな野菜は皿に盛らないで欲しいだの、どうでもいいことで使用人に当たっている光景をいくらでも思い出せる。

擁護できるとすれば狡猾さが全くないこと。素で我が儘なだけなのでまだマシと言ったところだが――まあ、この性格は大いに反省して改めようと思う。

本物の悪役令嬢になって処刑だの婚約破棄だのされるのはご免である。

戻ってきたアンナは屋敷のメイドを二人、新たに連れていた。

「お食事の前にお着替えをいたしましょう」

ベッドの端に座ったまま三人がかりで服を脱がされ、ぬるま湯で湿らせたタオルで身体を拭われる。俺は腕を上げたり腰を浮かせたりするだけ。病み上がりだからではなく、着替えはメイドにやってもらうのがリディアーヌの普通だ。

裸にされるのは意外と恥ずかしくなかった。女子と言っても所詮八歳なので動揺するほどのことでもない。どちらかといえばメイドが全員年頃の女子で、しかも距離が近いのが気になる。

『はあ？　着替えなんだから当然でしょう？』

実際、相手からしたらただの作業なのだろう。メイドの一人などは露骨に面倒臭そうな顔をしていた。使用人に興味のなかった今までなら気づかなかったかもしれない。

――辛く当たってきた過去は変えられない。

新しい下着と寝間着（当然女の子用だった）を着せられた後、俺は彼女たちにお礼を言い、名前を尋ねた。

「……ジゼルです」

「エマと申します、お嬢様」
「ありがとう。これからもよろしくね、エマ。ジゼル」
淡々と返事をしてきた二人は狐につままれたような表情で去って行った。それからアンナが料理の載ったカートを運んできて給仕をしてくれる。パンとスープ、それからミルク。
具が細切れにされたスープは複雑なうま味が感じられる丁寧な一品。胃に流し込むたびに熱がじわりと全身へ広がり、なんとも心地いい。夢中で三分の二ほどを飲んでから慌ててパンを手に取れば、パンはまだ温かかった。バゲット系だったので残りのスープに浸して柔らかくして食べる。小麦の味がしっかり感じられて正直たまらない。
皿はあっという間に空になり、最後のミルクも美味しくいただいた。
空腹はだいぶ和らいでいる。もう少し食べたいくらいだったが、急に満腹まで食べるのも良くないだろう。俺はアンナを見上げて微笑んだ。
「ごちそうさま。とても美味しかったわ」
「……」

返ってきたのは困惑したような表情。
「お嬢様。その、大丈夫ですか……？　本当はどこか悪いんじゃ？」
どうやらアンナはかなり素直な性格らしい。裏で同僚と「キモい」と言いあってもいいはず。わざわざ言ってくれるあたり、きっといい子なのだろう。
アンナは高校生くらい。ジゼルやエマとは何歳か離れているように見えた。だとすると、俺の世話も貧乏くじを引かされたのではと思ってしまう。
申し訳ないと感じながら苦笑して、
「少し心を入れ替えようと思っただけよ」
「そう、なのですか？」
俺は「ええ」と頷き、寝込んでいる間のことを思い返した。
あれは本当に辛かった。
「寒くて暑くて、死ぬかと思った。わたしが何をしたのよ、って思った。そうしたら、あなたたちにたくさんひどいことをしていたことに気づいたの」
「お嬢様」
「今更よね、ごめんなさい」

アンナは「いえ」と言ってくれた。
表情はどこかぎこちなかったものの、笑顔になって、
「ありがとうございます」
ああ、いい子だ。
当然だが、世の女全てが嫌な奴ではない。善良な女もいるし、男の中にも悪人はいる。そのことをあらためて認識させられる。
少しだけ心が軽くなった。
ベッドへ戻り、アンナに布団をかぶせてもらう。お腹が満たされたので眠気が来ている。瞼を閉じると、メイドが退室していく気配を感じながら意識を落とした。

アンナに言ったことは本当だ。
リディアーヌは根っからの悪女じゃない。彼女が――いや、俺が我が儘になったのは母を亡くしたストレスと、新しい母親と上手くいかない怒りからだ。
母が生きていた頃の俺は素直ないい子だった。今の自分が「悪い子」なのも心の

どこかではわかっていた。だから、病気で一晩中苦しみながら後悔した。

前世の記憶を取り戻したのはその結果だったのかもしれない。

『だったら、どうだっていうの？』

夢の中で『わたし』の声が響く。

『今更素直になんてなれない。誰も許してなんかくれないわ』

別にそれでいい。元のリディアーヌ・シルヴェストルだけが頑張る必要はない。

今の俺は『俺』と『わたし』の両方の影響を受けているのだから。

俺の人生を今からでも軌道修正する。

気の強い性格は素だろうし、完全には無理かもしれないが。

『だったら、それでもいいじゃない。気に入らない奴に遠慮してやる必要なんかない。せいぜい怖がらせてやればいいのよ』

何しろ自分自身だ。言いたいことはすぐにわかった。

悪役令嬢と呼ばれるならそれでもいい。

前世の俺だって別に聖人じゃない。だから全員に好かれようとは思わない。ただ、真面目に頑張っている人間を攻撃したりはしない。

狙うのは、同じ悪役令嬢だけでいい。
カウンター悪役令嬢、とでも言ったところか。
『いいわね。面白そうだわ。やりましょう！』
こうして俺は、自分自身の方向性を定めた。
これが、生まれ変わったリディアーヌ・シルヴェストルの新しい第一歩だった。

◆リディアーヌ・シルヴェストル
王国の宰相を務めるシルヴェストル公爵の長女。
幼い頃に母を亡くしたショック等々から我が儘お嬢様となりメイドや義妹をいじめていたが、高熱で苦しみ死にかけた際に前世の記憶を思い出し素行について反省した。
現在八歳。
紅の髪と瞳を持つ美少女である。

病み上がりの令嬢と公爵家の人々

寝室のドアが叩かれる音で目が覚めた。
窓から射しこむ光の色はそれほど大きく変わっていない。入室してきたアンナは、俺が目覚めているのを見て申し訳なさそうな顔をする。
「お嬢様。奥様がお見舞いにいらっしゃいました」
「……通してちょうだい」
ため息交じりに答えて身を起こす。
軽く寝間着の乱れを直したり髪を整えているうちに、一人の貴婦人が寝室へと入ってくる。その後ろには彼女の専属メイドとアンナが続いた。
新緑のような碧色の瞳が真っすぐに俺へと向けられる。
歳は二十代半ば。金髪の眩しい儚げな美女の名前はセレスティーヌ・シルヴェストル公爵夫人。清楚な白いドレスの裾をかすかに揺らしながらベッドから二、三歩の距離で立ち止まると、優しく声をかけてくる。
「だいぶ良くなったようですね、リディアーヌ」

「はい、お養母さま。熱はすっかり下がりました。ご心配をおかけして申し訳ありません」

「そう、それは良かった」

おっとり微笑むセレスティーヌは一見、少女のように純粋に見える。父との結婚はお互い再婚だったので、これでも出産経験済み、立派な子持ちだ。

『心配ね。笑っちゃうわ。心配していたのなら、今頃になってお見舞いになんか来ないでしょうに』

俺の病状はメイドから逐一報告を受けていたのだろう。

回復した後なら伝染る心配は少ないから来たのだ。それでもなお警戒しているのも距離感から伺える。

「無理はしないように。きちんと治るまでは部屋でじっとしていてくださいね」

他の家族には伝染すな、と念押すような言葉に「はい」と答える。

これまでなら既に嫌味の一つや二つは言っているところ。しかし、養母の言葉自体はいたって常識的だ。無駄に反発すれば悪者になるのはこっちの方である。

腹立ちを堪え、掛け布団の下に隠した手にぎゅっと力をこめる。

僅かな間があった後、セレスティーヌは専属メイドの名前を呼んだ。丁寧に差し出された小袋をアンナが慌てて受け取る。使用人を介して俺に手渡されたそれは、乾燥した花やハーブ入りの匂い袋（サシェ）だった。

「お大事に」

去っていく養母を黙って見送り、再びベッドへ横になる。若干癪ではあるものの、ほんのりとした優しい香りが眠りにつくのを助けてくれた。

食事の他はひたすら眠る一日を経て、次の日の朝にはだいぶ体調が戻っていた。窓の外からは今日も明るい光が射しこんでいる。俺はベッドの上で伸びをしてから床へ下り、カーテンを払って外を覗いた。

気持ちのいい青空。

芝生や噴水、花壇を備えた公爵家の庭が陽光によってきらきらと輝く。こんな日に散歩をしたらさぞかし気持ちがいいだろう。

『ええ。お母さまがいた頃はよく一緒に散歩したわ』

セレスティーヌからは一度も散歩に誘われていない。

お茶会の誘いはたまにあるが、参加しても話しかけられるのは兄と義理の妹ばかりだった。何度かそんなことを繰り返してからは誘われても断るようになり、溜まったストレスは使用人への八つ当たりという形で晴らされることになった。

前世における姪っ子を思い出す。

彼女の母親――俺の姉の態度を真似するせいで呼び捨ては当然、遊んでとしきりに呼びかけてくるわ、やんわり断ると泣き出すわ。すると姉に俺が怒られ、姪っ子はさらに増長する。親が思う以上に子供はその影響を受けているものなのである。

遠い目になったところでノックの音。振り返れば、入ってきたのはアンナだった。朝の挨拶と体調確認を済ませた後、今日の予定を告げられる。

「奥様より、本日も部屋で休むようにとのことです」

「そう。なら、本でも読んでいようかしら。それと、さすがにお風呂に入りたいわ」

「かしこまりました、手配いたします」

着替えの応援に来たのは昨日とは別の若いメイドが二人。

朝食は昨日よりも豪華になった。スープはしっかり具入りだし、二口分ほどの

チーズが付いている。デザートにはアンナがりんごを剥いてくれる。
ベッドから解放されるためにももちろん完食を――と、
『何よこれ。ニンジンが入ってるじゃない！』
スープの中にオレンジ色をした根菜を発見。
リディアーヌは好き嫌いが多い。料理に少しでも入っていただけでも取り替えさせるのが平常運転だ。勿体ないことこの上ない。
俺は悲鳴を上げる自意識を押さえてニンジンをぱくり。思った通り甘くて美味しい。偏食の大部分は忌避感が原因だ。前世の俺は普通に食べていたので抵抗は薄い。食べて美味しいのがわかるとぎゃーぎゃーうるさい女の意識も黙った。
「お嬢様がニンジンを……!?」
驚愕の表情を浮かべたアンナが「後で報告しないと」と呟くので思わず苦笑して、
「大袈裟よ。好き嫌いもなくしていこうと思っただけ」
「では、次はセロリに挑戦しませんか？」
嬉々として薦められた俺は「う」と小さく呻った。それは前世でも苦手だった食材である。

「……ごめんなさい。セロリはもう少し時間をかけさせて」

せっかく格好をつけたのに、なんとも締まらないオチだった。

食事が終わるとほっとひと息。昨日たっぷり眠ったので眠気はあまりない。椅子に座って食休みをしているうちにアンナは食器を片付け、それからまた戻ってきた。

どうやら今日も彼女が俺の担当らしい。

父も養母も、それから兄も義妹も専属の使用人を持っているが、俺に専属はいない。どうして俺だけいないのかと言えば、まあ、我が儘娘に仕えたいと思うメイドがいなかったのだろう。着替えの時のメイドも事務的で情は感じられなかった。

「ねえ、アンナ？　もしかして、わたしの世話を押し付けられたんじゃない？」

「えっ、いえ、あの、それは」

こちらをちらちらと伺いながら動いていた少女メイドは明らかな動揺を見せた。

誤魔化すように視線を逸らしたりもしているが、正直、ちっとも上手く行っていない。怒ることはなく、むしろ微笑ましいと思いながらじっと見つめていると、やがて観念したように教えてくれる。

「今日のお世話係を代わって欲しい、って、ジゼル先輩から頼まれました」

「そう、ジゼルに。……もしかしていじめかしら？」
「い、いえ、そんなことは！」
今度は意外にしっかりとした否定。
「私は去年入ったばかりで、お屋敷のメイドの中で一番若いんです。実家も男爵家なので、仕事が多く回ってくると言いますか……仕事を早く覚えられる分だけ忙しいと言いますか」
「なるほど、ね」
公爵家ともなるとメイドも貴族出身者であるのが当たり前だ。
男爵は貴族階級の中で最下位なので、アンナは下に見られているのだろう。いじめではないにしてもパワハラである。
――同僚である以上、身分差は関係ないだろうに。
とはいえ、俺が言えたことではない。契約社員の学歴カーストに社長令嬢が文句をつけるようなものだ。お前に何がわかる、と余計に反感を買ってしまう。
「余計なことを聞いてごめんなさい」
「とんでもありません」

アンナはふるふると首を振って、
「そう言っていただけるだけで十分です。それに、今のお嬢様はとてもお優しいですから」
「本当？」
「はいっ。このままでいてくださると、私はとても嬉しいです」
「……アンナは正直ね」
明るい笑顔に胸がきゅん、と、締め付けられるのを感じた。俺なんかには勿体ないくらいの良い子だ。真面目すぎて損をするタイプ。こういう子と前世で仲良くなれていたら、それだけで救いになっただろうに。
「ありがとう。できるだけ手がかからないようにするから、よろしくね」
「はい。こちらこそよろしくお願いします、お嬢様」
とりあえず、暇つぶし用の本を一冊選んでくれるようにお願いすると、アンナは笑顔でそれに応じてくれた。

アンナとの距離を縮めたのは今後の活動をやりやすくするためでもある。
悪役令嬢を潰すと決めた俺だが、女性社会の戦いは殴り合いでは決着をつけられない。必要なのはもっと複雑で曖昧な「力」だ。
知力に権力、財力、気品や話術、知識、礼儀作法、芸術的センスｅｔｃ……。
中でも最重要に近いものに「味方の多さ」がある。誰でも一度くらいあるのではないだろうか。正しいことを言っているのに周囲からの理解が得られず悔しい思いをした経験が。喧嘩になった時に勝者を決めるのは正しさではなく周囲のジャッジ。そのために味方が必要になるのだ。
現状、リディアーヌ・シルヴェストルに好印象を抱いている者は少ない。
特に女性の理解者はほぼ皆無。我が儘放題だったのだから当然だ。
屋敷を支配する養母・セレスティーヌに勝つには少しずつでも味方を増やし、態勢を整えていかなければならない。
基本的な戦い方はきっと他の悪い女たちと変わらないだろう。
善人でも賢くもない俺にできるのはそれが限界だ。

「これは……絵本ね」

アンナが持ってきてくれたのは、私室の本棚にあった中で一番簡単だという本だった。

文字が二割に絵が八割。さすがにどうかと思ったものの、絵本に使われているのは日本語とも英語とも似ていない異世界の言語だ。喋る方はなんとかなっても、文字は意識して学ばないと身に付かない。八歳の俺はまだ自由に本を読めるレベルではないのだ。

『失礼ね。この本なら余裕だわ。お母さまに何度も読んでもらったもの！』

脳内で声。ああそうか、と、記憶をたどって納得する。

「懐かしい。お母さまの本だわ」

「奥様のお話、ですか？」

「いいえ」

不思議そうに首を傾げたアンナに微笑んで答える。

「セレスティーヌ様じゃなくて、わたしの本当のお母さまのこと。この本の主人公

はね、お母さまによく似ているの」

絵本の筋書きは、大まかに言うとシンデレラに近い。王子様に見初められた伯爵家の令嬢が苦難を乗り越えて王妃となる話だ。

俺の母、アデライドもこの作品の主人公同様に伯爵家の令嬢だった。嫁いだのは王家ではなく公爵家だが、それでも家格的にはギリギリだったらしい。許されたのは類稀な美貌と聡明さ、それから善良な性格のお陰だったのだと母の専属だったメイドから聞いたことがある。

そんなわけで、リディアーヌはこの絵本を「お母様の本」と呼んでいるのだ。

アンナは「そうだったのですね」と微笑んで、

「お嬢様は、この本がお好きなのですね」

「そうね。この本を読むと、楽しかった頃のことを思い出せるもの」

だからこそ、辛い、読みたくないという気持ちあった。

荒れたままの俺ならきっとそっちの方が強かっただろう。しかしもう、悲しみに暮れてばかりもいられない。

「お母さまは優しい人だったわ。だから、お母さまがいなくなってとても悲しかっ

た。……でも、嫌な子になったわたしを見たら、お母さまはきっと悲しむわ」

立って歩かなければならない。

あらためて決意しながら、浮かんできた涙を指で拭う。直後、俺の顔が何か柔らかなもので包み込まれた。

「……辛かったのですね」

アンナの声と、女性特有の甘い匂い。

抱きしめられている。これは大丈夫なのか。いや、女同士だし子供なのだからいいんだろうが。

一瞬パニックになりかけながらも、結局、そのまま身を任せる。すると今度は幼い少女としての感情がこみ上げてきた。

リディアーヌは愛情に飢えている。

父は十分に愛を注いでくれているものの、男親と女親は違う。だから、こうしてアンナに抱きしめられるのは、ある意味最も求めていることだった。再び溢れ出す涙。アンナは俺が泣き止むまでずっと抱きしめていてくれた。

「申し訳ありませんでした、リディアーヌ様」

優しく穏やかな声が、するり、と耳に入り込んでくる。
「正直に言えば、私もあなたのことが苦手でした。理不尽に罵られて悲しくなったこともあります。……でも、私も、お嬢様の悲しみから目を背けていたのですね」
「……そんなのっ。別に、アンナは悪くないわ」
「いいえ。駄目だったんです。使用人だからと、小さなお嬢様のお気持ちに寄り添えていなかったんですから」
そっと、身体が離された時には少しだけ名残惜しい気持ちになった。
しかし、公爵令嬢としてもさっきのような醜態は晒すべきではない。間違っても「もっと」などと言ってはいけないと、強いて表情を作り直す。
それから、もう一度アンナを見て、
「……ありがとう、アンナ」
「いいえ」
すっきりとした笑顔が返ってきた。
「こちらこそありがとうございます、リディアーヌ様。あなたのことを、教えてくださって」

今後のためだと言ったばかりだが、アンナとこうなったのは偶然だ。
アデライドの本を指定したわけではないし、差し出されることも予想していなかった。涙だって本当の気持ちから生まれたもの。
しかし、お陰で彼女とより仲良くなれた。
これでいいのかもしれない。
悪女の真似はできても同じことはできない。アンナは信頼できると思ったから心を開いた。打算はなくせないが、悪意も好意もできるだけ隠さないでいたい。
「いっそのこと、このままアンナにずっとお世話してもらおうかしら」
照れ隠しのように呟くと、意外なことに、嬉しそうな表情が返ってきた。
「それは、専属にしてくださるということですか？　でしたら、是非お願いします」
専属に指名されたメイドは主人の身の周りの世話やスケジュール管理等が主な仕事となる。信頼されれば嫁ぎ先にも付いていくことができるし、給金アップや専用の部屋がもらえるなど待遇も良くなる。
善意ばかりの反応ではないだろうが、それでも、本当に検討したくなるくらいには、アンナの言葉は助けになった。

【今回の登場人物】

・リディアーヌ　：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり。
・セレスティーヌ：父の後妻でリディアーヌの養母。性格が悪い？
・アンナ　　：公爵家のメイド。素直すぎる性格。
・エマ、ジゼル：公爵家のメイド。リディアーヌを快く思っていない？

病み上がりの令嬢と公爵家の人々 2

読書を始めて一時間も経らずで「入浴の準備ができた」と連絡が来た。
伝えに来てくれたメイドはアンナに視線を送って、
「手伝いは必要ですか？」
入浴の際も着替え同様、複数人で世話されるのが普通だ。肌も露わな女性に囲まれて肌に触れられる――確実に落ち着かないと思った俺はアンナに目で懇願。すると、仲良くなったばかりの少女はくすりと笑って応じてくれた。
「私だけで大丈夫です。後片づけも大変ではありませんし」
「わかりました。何かあったら言ってください」
一礼して去っていくメイド。俺の担当になったことはない、仕事ができそうなタイプだった。
「急がせてしまったかしら」
「気にしないでください。早く手が空いただけでしょう」
「？」

準備の手順を知らない俺は首を傾げた。日本と違ってガスや水道が完備されているわけじゃない。水を運んで火を起こして……と、結構な手間を想像していたのだが、違うのだろうか。

「では、リディアーヌ様。冷めないうちにまいりましょう」

「ええ、そうね」

隣の私室までアンナと移動。屋敷には大浴場があるが、部屋に小さな浴室も用意されている。これなら部屋の外に出なくて済むので養母の言いつけにも背かない。

浴室は小さめの（それでも前世で言う標準サイズはある）浴槽が置かれた狭い部屋だ。床はつるつるしたタイル張りで、かすかな傾斜により部屋の隅から排水される造り。浴槽にはなみなみと液体が満たされており、温かそうな湯気が上がっていた。

「失礼いたします」

アンナが慣れた手つきでお仕着せを脱ぎ始める。肌の露出が増えていく様に慌てて目を逸らす。下着まで脱いだ後、薄手の浴衣を羽織ってくれたので少しほっとしたものの、それでも目に毒である。

男爵家とはいえ貴族だからか栄養状態は良いらしく、想像していたよりスタイルが良い。

次いで、俺の寝間着と下着が丁寧に脱がされていく。

間を持たせるためにも口を開き、疑問を投げる。

「ねえ、アンナ？　このお湯って沸かしたものを運んできたのかしら」

「いいえ。この浴槽は魔道具ですから、水を運んでくる必要はないんですよ」

「これって魔道具だったのね……!?」

この世界には魔法がある。

女性向けライトノベルやノベルゲームにありがちなライトファンタジーの世界に近いだろうか。俺たちの住むこの国は魔法の力を持つ王侯貴族によって統治されている。

貴族は魔法が使えるのが普通で、俺の母アデライドも火の魔法を得意としていた。危ないから近づかないように、と言いながら炎でできた蝶や鳥を舞わせ、俺や兄を楽しませてくれたのを覚えている。

魔道具とはそのまま、魔法の力を籠められた道具のこと。

「意外です。リディアーヌ様はご存じなかったのですね」
「だって、お風呂の準備をしているところなんて見たことがないもの」
「そう言われると、そうですね」
準備ができたら呼ばれて、ほぼ座っているだけで全てが終わるのがお嬢様のお風呂というもの。どうして湯が沸いているのか、なんて別に気にしなくても問題はない。
せっかくだからと詳しく聞いてみると、
「浴槽のこちら側に青い石が嵌まっているでしょう？　この魔石に魔力を流すことで水が生まれます。十分に水を張ったら、加熱の魔道具を投入してお湯を沸かすんですよ」
「へえ、良くできているのね」
浴槽に水を張るにはそれなりに魔力が要るので、水属性があって魔力が多めのメイドが担当するのだという。
魔力量は血筋の影響が大きく、男爵家出身であるアンナの魔力はあまり多くないそうだ。

「リディアーヌ様の魔力ならきっと、このくらいの魔道具は軽く使えるでしょうね」
「そうなのかしら？」
「はい。お手洗いの際も特にお疲れにはならないでしょう？」
「ああ、そういえばあれも魔道具だったっけ」
使用人用のものがどうなっているかは知らないが、俺が使う洗面所は水洗式だ。本体に埋め込まれた青い宝石に手を触れると水が流れる仕組みで、普段から何気なく使っている。
「子供でも使える自動式の魔道具はとっても高級なんですよ」
「今更だけど、わたしの家ってお金持ちなのね」
「ふふっ、そうですね。私の実家は貴族でも、もっとずっと質素でした」
入浴はほとんどされるがままだった。
たっぷりある湯と上等な石鹸、香油を用いて髪と身体を丁寧に洗われる。肌を撫でるのはスポンジではなくアンナの手だ。べとついていた全身が綺麗になっていくと生き返った心地がする。同時に、人を減らしてもらって良かったという思いも。
『そうよね？　たくさん人がいたらどっちを見ても裸だもの』

身体が綺麗になったら浴槽に浸かる。
ふぅ、と息を吐いたアンナは楽しげに声を弾ませて、
「大人しくしてくださるので、とてもお仕事がやりやすいです」
「わたしはいつも騒々しかったものね」
「そうですね。今のリディアーヌ様はとっても可愛らしいですけど」
たっぷりと温まったところでタオルを使って全身を拭かれ、清潔な下着と寝間着を着せられる。残った湯は掃除がてら「有効活用」されるという。
「わかったわ。私は部屋で本を読んでいるから、アンナはゆっくりお掃除をお願い」
「かしこまりました、リディアーヌ様」
三十分ほどで戻ってきたアンナは身体をほかほかさせながら笑顔を浮かべていた。
「奥様のご指示で診察に参りました。回復されたようで何よりでございます、リディアーヌ様」

昼食を部屋で摂った後、医師の訪問があった。
眼鏡をかけた四十半ばの男。寝込んでいる間にも俺を診に来た男だ。確か、平民ではあるものの腕利きで知られている医者だったか。
彼は恭しく挨拶をした後、探るように俺を見てきた。前回の診察時、俺は彼に罵声を浴びせている。
『淑女に裸を見せろっていうの？　この変態！』
許可が出るまで何もしたくないと思うのも無理はない。そもそも医者が裸を見るのは当然だし、男に見られたくないとなると女医を探すしかない。腕の立つ女医なんてこの世界ではレア中のレアだろう。
自分のやったことながら医師に同情しつつ微笑んで、
「きちんと治っているか、診察をお願いしますね、先生」
「……これはこれは」
医師が目を瞠った。寝間着を脱がせるのはアンナが担当。診察は丁寧に行われた。おでこを触っての体温確認。シンプルな聴診器で心音を測られ、問診も受ける。
「熱や寒気はありますか？」

「いいえ。少し身体が怠い程度です」
「ふむ。食事もきちんと？」
「はい。昨日の朝食からしっかりと食べられています」
「なるほど。……これは驚いた」
意味ありげな呟き。「先生？」と尋ねると、彼は「ああ、いえ」と言葉を濁した。
「すっかり回復されているようです。日に日に弱っていらしたので心配していたのですが」
「そうでしたか」
誤魔化された気がするが素直に頷いておく。
「では、私はこれで」
「ありがとうございました。またお目にかかるようなことがないと良いのですが」
「……ははは。そうですね。どうか健康に成長されますように」
セレスティーヌに挨拶をしてから帰るという。
保護者への報告は不思議でもなんでもないが、なんとなく引っかかる。見送りを終えてもそれは変わらなかった。しかし、考えてみても原因はわからない。

「良かったですね、リディアーヌ様。これなら明日にはお部屋から出られるんじゃないですか？」
「そうね。……まあ、お養母さまのことだから、もう一日くらい静養させられそうな気もするけれど」
ひとまず、アンナと病気が治ったことを素直に喜びあった。
以降、午後の時間はのんびりと過ぎた。俺が読書をしている間にアンナは部屋の掃除等を済ませていく。手が空いたのを見計らって読めない単語を尋ねると、彼女は快く教えてくれた。
夕食は平常メニューとほぼ変わらないものを完食。
「明日の朝、体調に問題ないようであれば、食事は食堂で摂ってよいとのことです」
「わかったわ、ありがとう」
養母からの伝言内容は意外と素直だった。
寝る時間になるまでアンナの淹れてくれた紅茶片手に読書をして過ごした。公爵家は照明の魔道具が充実しているので夜でも活動しやすい。
まだまだ読めない単語が多いのが今後の課題か。早く知識を蓄えたいのだが、そ

のためにはまず言葉を覚えなければならない。日本語訳の載った辞書が欲しいと切に思う。

「何度も聞いてごめんなさい、アンナ」

「私は楽しいですよ。もっと頼ってください、リディアーヌ様」

そうして「そろそろ寝ようか」という時間になった時、寝室の隣――私室のドアが控えめにノックされた。確認に行ったアンナはすぐに戻ってきたものの、その表情はなんとも言えないものに変わっていた。

彼女の後ろから寝室へ顔を出したのは果たして十歳程の少年で、

「お兄さま！」

「やあ、リディ。元気そうで良かった」

暗褐色の髪は夜の闇に紛れやすい。深い青色をした理知的な瞳にはまっすぐに俺の姿が映っている。母親似の俺に対して父親似の彼――アラン・シルヴェストルは優しい笑顔を浮かべて俺の傍に寄ってきた。ぎゅっ、と手を握られると、胸の奥から家族の親愛が溢れてくる。

自然と笑顔になりながら、俺は彼に尋ねた。

「お兄さま。もしかしてお忍びですか？」
「ああ。人払いをしてからこっそり出てきたんだ。会えるのが明日の朝になりそうだったからね」
「まあ、お兄さまったら」
茶目っ気を出してウインクする彼。長男の彼は将来、父の後を継ぐことを期待されている。妹の見舞いになんてとても来させてもらえなかっただろう。
それでも会いに来てくれたのが嬉しく、くすくす笑って応じると、ふっと息を吐く気配。
「本当に良かったよ。リディが持ち直してくれて」
「ご心配なく。わたし、そんなに簡単に死なないわ」
一時は死を覚悟したなどと口にはせず、つん、と胸を張って見せる。
「そうだね。リディは強い子だから」
「ええ。わたしはもっと強くなるの。お養母さまにだって負けないんだから」
はっきりと答えれば、それだけで変化は伝わったらしい。
アランは「そうか」と目を細めると、俺の前髪を軽く撫でるように払った。

「頼もしいな。でも、無理だけはしないでくれ。いいかい？」
「もちろん。お兄さまこそ、身体を壊さないようにね？」
「ああ。立派になって、リディを守れるようになりたいからね」
日本ではあまりお目にかかれないような柔らかな笑顔。この国の男は随分と「紳士的」らしい。しかし幸い（？）家族の情と前世の記憶のお陰でときめくことはない。
アランは大切な家族だ。
二歳差しかない彼もまた、幼い頃に母を亡くしたことになる。悲しかっただろうに、俺のように暴走することもなく跡継ぎ教育を受けている。不用意に泣いたり怒ったりできない彼の方がむしろ辛かっただろうと簡単に想像することができた。
『そっか。……男も意外と大変なのね』
俺がアランに報いられることは何か。
死なないこと。彼が周囲に自慢できるような妹になること。そして、少しでも彼の負担を軽くしてやること。
兄は俺の強い味方になってくれるだろう。なら、俺も兄の味方にならなければ。

「お兄さま。また明日、朝食で会いましょう」
「ああ。楽しみにしているから、必ず良くなるんだよ」
「ええ」
短い逢瀬を終え、アランは部屋に戻って行った。
一部始終を目撃することになったアンナに「このことは内密に」と頼むと、真剣な顔で「かしこまりました」と頷いてくれた。素直な子なので、上司に問い詰められでもしたら白状してしまいそうだが――まあ、おそらく大丈夫だろう。

【今回の登場人物】
・リディアーヌ　：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり。
・アンナ：公爵家のメイド。素直すぎる性格。
・アラン：リディアーヌの兄。十歳。妹を溺愛している。
・医者　：腕は良いらしいが若干怪しい。

病み上がりの令嬢と公爵家の人々 3

夜が明けると体調はすっかり良くなっていた。

本気で専属を狙っているのか意気揚々とやってきたアンナに挨拶をし――今日は着替えのため、寝室から私室へと移動する。

「さあ、リディアーヌ様。どのドレスにいたしましょう」

「……わ」

寝込んでいた関係で久しぶりに開かれることになった普段着用のクローゼット。手伝いを含む三人のメイドを傍らに思わず声を上げる。半分は感嘆、半分は戦慄。二十着以上はあろうかというドレスの大部分は子供用らしく明るい色合いをしている。

センスは良く、繊細に織られた布地は見るからに滑らかだが、全部ドレスだ。パンツルックの服はない。ひらひらとしたスカートは見るからに防御力が低そうである。

これを着るのか。

わかっていたはずなのに男のプライドが拒否反応を示す。助けを求めようにも頼りのアンナはむしろ「どれを選ぶんだろう」とばかりにキラキラした目をしている。

「それじゃあ、これにしようかしら」

逃げられないと悟った俺は、それでも僅かばかりの抵抗を試みた。

端の方に追いやられるように存在した黒地の一着。それを指さすとメイドたちから「え？」と意外そうな声が上がる。

「お嬢様、こちらのドレスでよろしいですか？」

「ええ。これも普段着用のドレスなのでしょう？　問題あるかしら」

「い、いえ」

取り出されたそれは色こそシックな黒であるものの、レースによりきちんと可愛らしさが演出されている。セレスティーヌは白系統を好むので差別化という意味でも悪くない。

それでも「マジか」という反応なのは俺が今まで地味なドレスを好まなかったからだろう。

「では、リディアーヌ様。こちらのリボンを合わせませんか？」

「いいじゃない。アンナ、つけてくれる？」
「はいっ」
空気を読んだアンナが助け舟を出してくれる。
提案された深紅のリボンを胸にあしらうと雰囲気がぐっと可愛くなった。
『やっぱり、わたしってとっても可愛いわ……！』
内心で自画自賛。
実際、リディアーヌ・シルヴェストルは美少女だ。マンガのメインヒロインを張れる器だろう。将来、男たちから求婚されるのを想像すると複雑だが……。
美しさは女にとって立派な武器だ。使えるものは使わないといけない。
子供特有の愛らしさをより引き立てるためにも、俺はにこりと微笑んでみせる。
すると、アンナ以外のメイドも「いいと思います」と頷いてくれた。
「それじゃあ、食堂へ行きましょうか」
部屋を出るのは何日ぶりだろうか。
公爵家の屋敷は広い。初見だと迷いそうな廊下を難なく歩いて目的の部屋に到着。

我が家の食堂は縦長の造りになっている。中央には十人以上は座れる長いテーブル。一番奥の上座には俺の父――シルヴェストル公爵が既に腰かけている。
「おはようございます、お父様」
食前のお茶を楽しんでいたらしい彼に歩み寄って一礼。
スカートを持ち上げて膝を折る、いわゆるカーテシーだ。リディアーヌのそれはあまり上手ではなく、少々ぎこちないものだったが、父は端正な顔立ちを一目で分かるほどに崩してくれる。
「おはよう、リディ。心配していたんだ。辛かっただろう？　身体の調子はもういいのか？」
「ええ。もうすっかり」
それから、わざわざ席を立って抱きしめられた。
公爵は現在三十歳過ぎ。髪や目の色はアランとよく似ている。
宰相なので基本的には文官であるものの、剣術も嗜んでいるので頼りない印象はない。もう少し歳を重ねたら「ダンディなおじさま」といった感じになるだろう。
「お父様がお花を贈ってくれたお陰よ。とっても元気が出たの。本当にありがとう」

伝えた言葉は誇張してはいるものの、本心だ。

母の死後、早々に後妻を迎えたことは今でも不満だし、その後妻が性悪（セレスティーヌ）だったのは本気で馬鹿だと思っているが、それはそれ。感謝はしているし愛情もある。

素直な感情を表に出せるのは女子供の特権。リディアーヌは良くも悪くもその性質が強い。すぐ悪口が出るのは直した方がいいが、好意を伝えられる素直さは残していくべきだろう。

まあ、やるのは俺なので物凄く恥ずかしいのだが。

「これからは元気ですくすくと育ってくれよ」

「わ、お父さま？」

父の唇が俺の額へと触れる。唇同士でないとはいえ親子でキス。日本ではありえない話だが、これが異世界か。少々呆然としていると目の前のイケメンが「お返しはないのか？」と寂しそうな顔をするので、慌てて同じようにキスを返した。

「お父さま、これ、とっても恥ずかしいわ」

「いいじゃないか。大きくなって結婚するまでは私にしてくれ」

いや、それ何年後の話だよ!?

まあ、早ければ十五、六とかで結婚するのがこの国の貴族社会らしいが。七年は先の話とか考えたくもない。七年は男の額にキスすることになるのも気が遠くなる。『価値観の違いね。早く慣れなさい』。ああ、こういう時に偉そうにされるとイラっと来る。

ここで父は眉を下げて「見舞いに行けなくて済まない」と言った。

「見舞いたかったのだが、セレスティーヌに『伝染ったらどうするのですか？』と止められたのだ」

「まあ。それはとてもお養母さまらしいですね」

「ああ。あれは少し心配症というか、厳しすぎるからな。少し顔を見るくらいなら問題ないだろうに――」

こほん。

さりげない咳払いの音が横手から聞こえた。二人して硬直した後、慌てて振り返れば上品な笑みを浮かべた金髪美女が一人。

穏やかな笑みを浮かべた養母から強いプレッシャーを感じるのは気のせいか。

「二人とも？　それではまるで私が悪者のようではありませんか？」

「せ、セレスティーヌ。いつからそこに？」
「つい先ほどです。リディアーヌとお話をされているようでしたので声をかけられなかったのですけれど」
「すまない。決して悪く言ったつもりはないのだ」
わたわたと弁解を始める父。セレスティーヌはにこにこしながらそれを聞いている。
現シルヴェストル公爵は子煩悩かつ女性に優しい紳士なのだが――少々、いやかなり妻の尻に敷かれている。こういう姿を見ると娘として情けなくなる。前世で獲得した語彙を用いて表現するなら、こうだ。
『もう！お父様のヘタレ！』
養母の機嫌（そもそも半分以上は演技だろうが）が直る頃には残りの家族も到着した。
「おはようございます、父上、母上。おはよう、リディアーヌ」
「おはようございます、お父様、お母様。……お姉様も。快復されたようで何よりです」

兄のアランは昨夜と変わらない笑顔。一緒にやってきた少女――義妹のシャルロットはどこか強張った表情で俺にしてくれる。

義妹は俺より一つ年下の七歳だ。父とセレスティーヌは互いに配偶者を亡くした者同士だった。シャルロットは前の夫との子供ということになるが、蜂蜜色の髪もエメラルドのような碧眼も、妖精を思わせる顔立ちも母親によく似ている。

さっきの表情からもわかる通り、俺との仲はあまり良くない。

主な原因は俺が邪険に扱ったせいだが、さらにその原因を考えるとなかなか難しいところだ。

「おはよう、シャルロット。お医者様からも治ったってお墨付きをもらったから、安心して？」

ひとまずは挨拶して笑いかける程度で済ませておく。義妹からは「は、はい」と戸惑ったような答えが返ってきた。

「では、食事にしようか」

各自の定位置は決まっている。

長辺の一番奥、父の左右にはアランとセレスティーヌ。アランの隣には俺が座り、

シャルロットは母親の隣に腰かける。セレスティーヌが「子供たちの作法をチェックしやすいように」と始めたものだ。

確かに向かいに座った方が一挙一動を観察しやすいとは思うのだが、それなら実の娘を隣に座らせているのはどういうわけか。

『そんなの、わたしとお兄さまへ厳しくする口実に決まってるじゃない！』

真の理由はともかく、観察されるのはどうも落ち着かない。

将来必要になるとはいえ、高級レストラン並みの作法を毎回要求されるわけで。貴族の生活も楽なことばかりではないのだ。

「本日の前菜はニンジンとセロリのソテーです。ソースにはすりおろしたピーマンを使用しております」

メイドによってことん、と目の前に皿が置かれる。

野菜を使った健康的な料理。ニンジンとピーマンはともかく、焼かれたセロリの姿に頬が引きつる。ちらりと見れば、シャルロットの皿だけは色の違うソースがかかっていた。

「リディ。食べられないようならば何か別の物を――」

「いいえ。このままこちらをいただくわ」
父が眉を寄せて言ってくれるが、売られた喧嘩は買わなければならない。
俺はナイフとフォークを手に取ると、セロリを切ってソースと共に口へ運んだ。
前世でも苦手だったあの風味が口の中に広がる。思わず顔をしかめそうになる、が。
「……火を通すと、野菜は甘みが増して食べやすいのね」
美味しいとは思わない。ただ、サラダよりはずっと食べやすい。ピーマンのソースも苦いだけでなく塩気もあっていいアクセントになっている。料理人の腕だろう。
「おお……！　偉いじゃないか、リディ」
「お姉様、お野菜が食べられるようになったのですか……!?」
「ありがとう。苦手を克服できるよう、少しずつ挑戦を始めたところなの」
どうだ、と養母に視線を送れば、彼女は静かに呟いた。
「ニンジンを食べられるようになった、とは聞いていましたが、セロリも克服したのですね」
少しは驚いてくれたか。

この程度では鼻を明かしたことにならないが、それでも嬉しい。俺は上機嫌で二口目に挑もうとして、

「リディアーヌ。姿勢が少し乱れています。それからナイフの持ち方も気を付けてくださいね」

「……はい、お養母さま」

ああ、うん。こいつ嫌いだ。

睨みつけたくなるのを堪え、背筋を伸ばして野菜を咀嚼。するとシャルロットも「私も……！」と野菜を口にする。おお、と父が歓声を上げたのも束の間、義妹はニンジンとセロリを一口ずつ食べたところでナイフとフォークを置いてしまった。

「ゆっくり慣れていけばいいのよ、シャルロット」

「はい。すみません、お母さま」

以降はさすがに俺の嫌いな物ばかり出てくることもなく、食事はスムーズに進んだ。

セレスティーヌが本題に入ったのはメインディッシュにさしかかった頃。

「リディアーヌ。休止していた勉強ですが、遅れを取り戻すためにも明日から再開

します」

「かしこまりました」

貴族の子は基本、家庭教師を付けて家で勉強する。

学園に通うのは十五歳――前世で言う高校生から。それまでは各自で勉強し、その成果を学園にて披露するのが通例だ。

当然、求められる能力のレベルは家の位が高いほど上がる。公爵令嬢である俺はトップに近い成績を取らなければ嘲笑にさらされることになる。

その大事な勉強を、リディアーヌはサボりまくっていた。

寝込んでいた分も合わせると結構な遅れになっている。おそらく厳しい授業になるだろう。面倒だが、自分で蒔いた種だ。

しかし、せっかくだ。

代わりというわけではないものの、一つご褒美をねだろう。

「あの、お父さま、お養母さま？　実はひとつ、お願いがあるのですが」

「なんだい、リディ？」

「わたしも専属が欲しいのです。あの子――アンナをわたしに頂けませんか？」

この発言への反応は大きく二分された。

「なんだ、そんなことか」

養母を含む家族たちは「特に不思議なことではない」という態度。専属と言っても家からの雇用に変わりはなく、ただ「一人の世話を付きっ切りで担当する」というだけのことだ。俺だけ専属がいなかったのだから新たに付けても特に問題はない。

驚いていたのは端に控えていた給仕のメイドたち。

彼女らはアンナに視線を送り「どうして」などと小さく呟いている。アンナ自身も、まさかこんなに早いとは思わなかったのか目を丸くしていた。

しかし、こういうのは早い方がいい。

「ここ数日、アンナはわたしの傍で尽くしてくれました。他のメイドの仕事を代わってまで仕事を覚えようと努力しています。彼女がいてくれると心強いのですが、どうでしょうか？」

「いいんじゃないか？　なあ、セレスティーヌ」

「ええ、そうですね。アンナはまだ経験不足ですから、専属であればもう少し経験

を積んだ者が望ましいとは思いますが……若い分、気心が知れやすいという利点もあります。リディアーヌがどうしても、と言うのであれば構いません」

何か欲しい物があるのかと思ったと言う父はあっさりと頷いてくれ、セレスティーヌも消極的ながら同意を示す。『意外ね。邪魔をされないなんて』。若い男爵家のメイドなんてむしろ好都合だったのかもしれない。別にそれならそれで構わない。俺自身が「アンナが良い」と思ったのだ。

「受けてくれるかしら、アンナ？」

にっこり笑いかけると、彼女もまた笑顔で頷いてくれた。

「はいっ。若輩者ではありますが、精一杯務めさせていただきます」

【今回の登場人物】

・リディアーヌ　：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり。

・アンナ：公爵家のメイド。素直すぎる性格。

・父　：公爵にして王国の宰相。名前はジャン。

・アラン：リディアーヌの兄。十歳。妹を溺愛している。
・セレスティーヌ：リディアーヌの養母。意地が悪い？
・シャルロット　：セレスティーヌの娘。リディアーヌ・アランの義妹。



病み上がりの令嬢と公爵家の人々 4

「お久しぶりでございます、リディアーヌ様。お加減はいかがですか？」
「ええ、お陰さまですっかり良くなりました。また本日からご指導、よろしくお願いいたします」
体調が回復しきった翌日から予告通り勉強が再開した。
スケジュールとしては朝食後に勉強。昼食を挟んで勉強。ティータイムを挟んで勉強。一時間から一時間半の授業が一日に三回行われる。日本の大学はたしか一コマが一時間半だったはずなので、驚くほどハードというわけでもない。
ただ、授業以外の部分――食事はもちろん廊下を歩く時もマナーの練習をさせられているようなものである。
この国でも一週間は七日。そのうち日曜日にあたる一日だけが休みで、後の六日間は毎日勉強に充てられる。リディアーヌが暴れる気持ちもわからなくはない。
「では、これまでのおさらいから始めていきましょう」
「はい」

「教本の十八ページから始めます。ページを開いて三行目を見てください」

勉強は大きく分けて三種類。座学と実技、そして芸術だ。

座学では教本を用いて読み書き計算を始めとした様々な知識を修得。実技は礼儀作法やダンスなどを実戦形式で。これらはそれぞれ一人の教師が担当し、残る芸術――歌や楽器、裁縫などは個別に教師がつく。

一対一なので授業は俺に合わせて進んでいく。多少は待ってもらえるということであり、理解しないと話が進まないということでもある。なので気を抜く暇がない。

ドレス姿で背筋を伸ばし、ペンとインク壺を使ってメモを取りながら、小学校から高校まで十年以上「座って授業を聞き続けて」きた経験を活かしてついていく。新しいことの連続に四苦八苦し、教師が終了を告げた時には思わずほっと息を漏らしてしまった。

「リディアーヌ様、本日は真面目に話を聞いてくださって助かりました。この調子で進めていくことができれば、勉強の遅れも早いうちに取り戻せるでしょう」

休み明け最初、座学を担当した初老の平民女性は驚きつつそう言ってくれた。

俺は彼女へ「これまではご迷惑をおかけしました」と謝る。

「亡き母に顔向けできる立派な令嬢になれるよう、精一杯努めていきたいと思っております」

「まあ、それはそれは。でしたら、シャルロット様と机を並べる必要はないかもしれませんね」

「え？」

勉強がこれ以上遅れるようなら姉妹揃って勉強しては、という話が出ていたらしい。

誰かと競い合った方が勉強は捗る。方法は間違っていないし教師としても一石二鳥だが、十中八九、セレスティーヌの嫌がらせだろう。

姉の立場からしたら妹に追いつかれるのは屈辱。不快な気持ちになって捗るはずがない。余計に不貞腐れた結果、シャルロットに追い抜かされる未来が見える。

「あの子にも迷惑はかけられませんもの。心を入れ替えたつもりで頑張ります」

午後の授業は実技。こちらは中年の貴族女性が担当だ。礼儀作法等は同じ貴族に教わるのが一番ということで、子育ての一段落した夫人が務めることが多いらしい。

確か、この教師は伯爵夫人だったか。

彼女は「ごきげんよう、リディアーヌ様」と挨拶をすると、さっそく本題へと入ってきた。

「奥様より『歩き方の乱れが気になる』と相談を受けております。まずはそちらから確認させてくださいませ」

「かしこまりました。よろしくお願いいたします」

公爵と伯爵では身分が違うが、学びの場における教師の権力は強い。公爵夫人である養母の依頼ということもあって指導は厳しかった。

部屋の端から端まで真っすぐ歩くという単純な課題でさえ何度もやり直しをさせられる。また、その度に「もっと顎を引いて」とか「歩幅は一定に」「歩調が速いせいでスカートが乱れています」と指摘が飛んでくる。

男子高校生としての経験は役にも立たない。

逆に男のプライドを削り取られ、令嬢らしい仕草を刷り込まれていく。下手に抵抗すれば逆に辛くなると悟るのに時間はかからなかった。

そうして「往復し、最後に一礼する」ところまで課題が進んだところでタイムリミット。

「よく頑張りましたね」
疲労とストレスでいっぱいいっぱいになった俺の耳に教師の言葉が飛び込んでくる。
さっきまで駄目出しの嵐だったのに何を言っているのか。
驚いて見上げれば、「心外だ」とでも言いたげな表情が返ってきた。
「この時間、必死に努力されていたのはわかりました。努力と成果はきちんと評価するのが当然のことです」
「……わたし、先生から褒められた記憶がないのですけれど」
「あら、リディアーヌ様。不真面目で出来の悪い生徒を褒めることはできませんわ」
この教師は以前からとても厳しかった。
なので、リディアーヌは彼女のことをかなり嫌っていたのだが――『何よそれ!? もうちょっと手加減しなさいよ!』。うん、方針には納得だが、スパルタにも程があるだろう。俺はため息を吐いて苦笑を浮かべた。
「家庭教師なんて、理不尽に生徒を叩く方がいてもおかしくないもの。先生はとても公正でお優しい方です」

教師はにこりと微笑んで、
「ありがとうございます。ではリディアーヌ様。せっかくですのでお茶をご一緒させてくださいませ。多少なりとも打ち解けてくださったようですので、もう少し仲良くなれればと」
「ええ。そういうことでしたら是非」
了承したら、休憩のはずのティータイムにテーブルマナー指導が始まった。

「……もう疲れた。明日からもこんなのが続くなんて信じられない」
思い切り弱音を吐きながらベッドに倒れ込む。
夜のルーティンも終わり、後は寝るだけという時間。はしたなくうつ伏せになっても、それを目にするのは専属になったアンナだけだ。
その少女は魔法の明かりが灯るランプを手にくすくすと笑って、
「お疲れ様でした、リディアーヌ様。とても頑張っていましたね」
「ありがとう、アンナ。あなたも慣れない仕事で疲れたんじゃない？」

「いいえ。昨日もぐっすり眠れましたし、むしろ元気なくらいです」
専属使用人には主人の部屋に隣接する個室が与えられる。
一般使用人用の二人部屋から昨日のうちに移ってきたアンナは、新しい部屋は広くてベッドもふかふかだと教えてくれた。
「おまけに一人部屋ですからね。最高です」
「あら。もしかして、同室の子の寝言がうるさかったとか？」
「寝言ではないんですけど……その、ジゼル先輩は自慢話が多かったんですよね」
ごろん、と、仰向けになりながら尋ねれば苦笑交じりに答えてくれる。
自慢話が多い上に仕事を押し付けてくるとは、完全に嫌な先輩である。
「あっ。今の、誰にも言わないでくださいね？」
「言わないわ。わたし、アンナに嫌われたくないもの」
笑って答えてから、部屋と言えば、と疑問を口にする。
「学園って寮制なのかしら？　だとしたら、わたしもいじめに遭うかも」
「私もいじめられてはいないんですが……。確か、学園は通いも許されていたはずですよ。お屋敷から馬車で行ける範囲ですから、リディアーヌ様は心配ないかと」

「そうなのね、良かった」
ほっと息を吐く。
まあ、俺の場合はいじめっ子の方が似合うだろうが。嫌味な公爵令嬢とか確実に悪役である。
「寮生活でも私は羨ましいです。我が家には女子を通わせられるほど金銭的余裕がありませんでしたから……」
アンナは十五歳で働き始めて現在二年目。
低い家柄の場合、学園へ通う子を選別することも多いらしい。そしてその場合は男子優先になる。家を継ぐのも政治に携わるのも基本的には男子の務めだからだ。
学園に通えた場合も、多くの女子は良縁を見つけることを目指す。女にとって一番の仕事は丈夫な子供を産むことで、知識や才能を活かすことは二の次なのだ。
前世の常識とはずいぶん違うが、特別珍しい話ではない。日本の戦国時代だってこういう価値観だった。納得できるかは別として。
「……なら、わたしが連れて行ってあげる。専属なら一緒に学園へ行く機会もあるでしょう？」

憂鬱な想いを吹き飛ばすように明るく言えば、アンナの表情もぱっと輝いた。
「はいっ。そうできたらとても嬉しいですっ」
頑張って勉強しなければいけない理由が増えてしまった。
専属メイドと約束を交わした俺は、英気を養うためにも休むことにした。アンナに「お休みなさい」を言って目を閉じる。姉のような存在になりつつあるアンナ。照明を消してドアを閉じた彼女が帰るのは、これまでと違い、呼べばすぐ駆け付けられる場所だ。
近くに人がいるというのは、まだ子供に過ぎないこの身にはとても嬉しいことだった。

勉強漬けの日々が慌ただしく過ぎて。
二週間が過ぎる頃には俺の変化は確定的なものと認められた。
「まさか、リディアーヌ様がこれほど協力的になってくださるとは」
「これだけ出来るのなら、もっと早くやる気を出して欲しかった」

教師たちは好機を逃してなるものかとばかりに力を入れて授業を進行。
俺の方もこの世界の学問に少しずつ慣れて能率を上げられるようになっていく。
『もう少し、日本の記憶が役に立てば良かったんだけどね』
生憎、前世の経験がほぼそのまま役立つのは計算くらいだった。
語学や歴史、地理などは完全に覚え直し。後は芸術科目――音楽や美術が辛うじて役に立つ程度。ダンスやテーブルマナーなんてまともに習ったことすらない。
前世も女子だったならもう少し便利な知識を覚えていたかもしれないが、女子だったらあんな人生になっていない。
まあ、それでも以前よりは断然マシ。
勉強の遅れは徐々に減っていき、むしろ余裕を作れるのではないか、と言われるように。
教師たちが遠慮なく知識を詰め込んでくるので毎日いっぱいいっぱいだが、授業のある日でも庭に散歩に出られるくらいにはなった。
勉強が捗るにつれて養母からの小言も減少。
苦手な食べ物も克服中なので、以前に比べて食事の時間もかなり快適である。

これでもっと楽な――箸でどんぶり飯を食らうようなメニューになってくれれば万々歳なのだが、まあ、さすがにそれは無理な話。

父も俺が真面目になったせいかかなりご機嫌で、

「リディは将来きっと素敵なレディになるな」

などと臆面もなく言ってきたりする。

なのでつい「もちろん。そしてお父さまより素敵な旦那様を見つけるわ」なんて返答したら急に涙目になってしまった。アランとシャルロットが「なんとかして」と目で合図を送って来るので、埋め合わせも兼ねてあざといくらいに甘えておいた。

「まだ先の話じゃない。それに、もしお嫁に行ってもお父さまの娘なのは変わらないのだから。ずっと愛しているわ、お父さま」

少しずつ順調に向かい始めている。

一気に大活躍とはいかないが、悪女との直接対決なんて頻繁に起こらない方がいいのである。今は力を蓄えるためにも勉強に精を出したいところ。

ならば予習や復習も欠かせない。

そんな風に考えていた二週目の休日にて、俺は思いもよらない、そしてなかなか

に衝撃的なイベントに遭遇することになった。

「お前がリディアーヌ・シルヴェストルか？　ジャンが家から出したがらないと言うからどんな不細工かと思えば、なんだ、まあまあ悪くない顔をしているじゃないか」

王家の紋章入りの上等な服を着た小生意気なクソガキ――もとい、高貴なお子様が突然押しかけてきた挙句、こちらに喧嘩を吹っかけてきたのだ。

【今回の登場人物】

・リディアーヌ：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり。
・小生意気なクソガキ：推定王子様。
・アンナ：公爵家のメイド。素直すぎる性格。

王子、襲来

「リディアーヌ。本日は屋敷に来客があります」
朝食の席にて。俺がラム肉のワイン煮込み（昨夜も出た品だが一晩寝かせたことで味が染みてまた美味い）を楽しんでいると、セレスティーヌが告げてきた。
「大事なお客様ですので私が対応するつもりですが、念のため、日中は庭に出ないようにしてください」
「かしこまりました、お養母さま」
意訳すると『邪魔だから顔を出すな』といったところか。
名指しでの指示に、俺は笑顔で頷いた。屋敷に客が来るのは珍しくない。逆にセレスティーヌが誰かに会いに出ることも多くある。そういう時も俺は呼ばれないし連れて行かれたりもしていない。
勉強の入っていない休日とかち合うのは珍しいと言えば珍しいが、別に構わない。
「では、部屋で本でも読んでいようと思います」
「ええ。とても良いと思います」

穏やかに頷く養母をよそに、父はなんだかそわそわしていた。
なんだろう。よくわからないので首を傾げて、
「お父さま？　もしかして、わたしと遊んでくださるのですか？」
「む？　ああ、いや。そうしたいのは山々なのだが、私も来客の相手をしなければならないのだ」
「そうなのですね。残念ですが仕方ありません」
両親揃って対応する相手か。どうやらかなりの大物らしい。下手をしたら仕事の邪魔になりかねないし、不肖の我が儘娘は大人しくしていることにしよう。
準備があるらしい両親が食堂を後にする中、俺は食後のお茶をのんびりといただく。紅茶もだいぶ飲みなれてきた。たまには緑茶が飲みたくなるが、
「たしか、同じ茶葉から作れるんじゃなかったっけ……？」
「何の話だい、リディアーヌ？」
残っていたアランとシャルロットが俺を見て不思議そうにしていた。「ああ、いえ」と微笑んで答える。
「同じ茶葉でも、摘む時期や製法を変えたら違う味が出るんじゃないかと思ったの」

「そう、なのですか？」

きょとんと首を傾げるシャルロット。そこへ「よくご存じですね、リディアーヌお嬢様」と意外なところから声がかかった。

年かさのメイド。微笑む表情を見た途端、名前が頭に浮かんでくる。

「マリー？」

「覚えていてくださいましたか。このところお話する機会がございませんでしたので」

「忘れるわけないわ。昔良くしてもらったもの」

母・アデライドが亡くなったのはたったの三年前。彼女が存命だった頃から仕えてくれているメイドも当然いる。セレスティーヌが嫁入りしてくる際に人員整理があり、その際に辞めてしまった者もいるが、マリーは当時からいるメイドの一人だ。

俺が荒れていた時期は顔を合わせることがほぼなかったはずだが――まあ、遠ざけられていたのかもしれない。

「同じ植物を使った別のお茶でしたよね？　他国から入ってきた製法で、この国でも少量生産されていたはずです。おそらく取り寄せられるかと思いますが」

「是非お願い！」

言ってみるものである。金と権力というのはこう使うものなのかもしれない。いや、まだ緑茶が手に入るとは限らないのだが。この際、烏龍茶でもいっそ麦茶でも構わない。懐かしい味を口にするだけで元気が湧いてくるはずだ。

口元に笑みが浮かんでしまう。アランはそんな俺をぽかんと見つめた後、思い出したように口を開いて、

「……リディ。僕とシャルロットは今日、お客様への挨拶に呼ばれると思うから」

「そうなの。頑張ってね、お兄さま。シャルロットも」

まあ、そんなことだろうと思った。

軽く頷いて二人を激励すれば、兄妹は揃って変な顔をした。

「お姉様。その、よろしいのですか……？」

「いいも何も、保護者の決めたことなら仕方ないわ。お父さまやお養母さまにも戦略というものがあるだろうし。読みたい本もあるもの」

兄のアランは次期領主として顔をつなぐ必要があるし、セレスティーヌとしては実子のシャルロットを良い家に嫁がせたいはず。そのためには年単位で反抗期だっ

た我が儘娘が邪魔なのだ。部屋から出るなと言われなかっただけマシというもの。

要求通りにするのは癪だが、養母の機嫌をただ損ねてもムダ。今は自分を高めることに専念した方がいいだろう。

紅茶も飲み終わったので、席を立ってアランたちに会釈。アンナを伴って退室したら、家の書庫へ寄って本を借りてから部屋へと戻った。

勉強を始めて数日が経ったある日、俺は一つのアイデアを閃いた。

辞書がないなら作ればいい。

忘れやすい単語を日本語訳と合わせて記録し、必要になったら見返す。これは別の言語を修得している者の特権だ。手間はかかるが、ある程度の量がまとまれば人に聞かなくても難しい本が読めるようになる。

座学でも言葉を覚えているので、日に日に読める単語は増えていっている。前世の『俺』の感覚からするとここは異世界。単なる動植物の紹介などでも楽しく読める。基本的に地球と名前・形状共に同じものが多いが、たまに知らないものや名前

の違うものがあったりして興味深い。
「でも、本当に残念ですね、リディアーヌ様」
「？　なんの話？」
「お客様が来られる件です。もしかしたら良縁を得られるチャンスだったかもしれません」
「ああ、そのこと。別にいいのよ。婚約なんてまだまだ早いでしょう？」
「いえ、幼少期から婚約が行われることも意外と多いんですよ」
学園での婚活が珍しいことではない一方、家同士の繋がりを重視する場合など早くから決められる婚約もまた珍しくない。極端な例だと赤ん坊の頃から決まっている場合さえあるらしい。そこまでくると何が何やら。もし、途中で死んだり大怪我でもしたら大惨事になりそうだ。
「リディアーヌ様でしたら容姿だけでも求婚が殺到しそうなのですが……」
「面倒だから、求婚されたら無理難題を言って逃げてやろうかしら」
「間違っても目上の方には止めてくださいね。特に王族には絶対駄目です」
「王族ね。向こうもわたしみたいな子は願い下げだと思うけど」

不用意に接触しないように注意しよう。王宮に招かれる時とか、学園に入ってからとか、そういうところで気を付けていれば大丈夫なはずだ。

と、俺はそう思っていた。まさかその王族が向こうからやってくるなどとは夢にも思っていなかったのだ。

始まりは、私室のドアがノックされたこと。

「お休みのところ申し訳ありません、リディアーヌお嬢様。その、少々お時間をいただけないでしょうか？」

「マリー？」

アンナと揃って首を傾げる。俺を世話するメイドには含まれていない彼女が、どうしてわざわざやってきたのだろう？　今は来客対応中で忙しいはずなのだが。

「実は、お客様がどうしてもお嬢様にお会いしたいと仰っておりまして」

「お客様が？」

「はい。いかがでしょう。ドアを開けても問題は――」

「ああもう、面倒だな。入るぞ」

マリーの声に被せるようにして知らない少年の声が響いたかと思うと、がちゃり

とドアが開かれた。

「お前がリディアーヌ・シルヴェストルか？　ジャンが家から出したがらないと言うからどんな不細工かと思えば、なんだ、まあまあ悪くない顔をしているじゃないか」

燃える太陽を思わせる赤みがかった金色の髪。

広い草原のようなグリーンの瞳が立ち上がりかけていた俺を見据え、愉しげな色をその奥に浮かべる。

歳はアランよりも若い。おそらくというか、俺の推測が正しければ俺と同じ八歳だ。いかにも高級そうな着衣と施された紋章が高貴な身の上であることを証明している。後ろにいるマリーが「止められなかった」と悔しそうな顔をしているので、第一印象は完全に「その辺の悪ガキ」だが。

ぽかんと呆けてしまったのも束の間、はっと我に返った俺は慌てて跪き、臣下の礼を取った。一応、練習だけはさせられていたが、実践するのはこれが初めてである。

「宰相ジャン・シルヴェストル公爵の長女、リディアーヌ・シルヴェストルでござ

います。……お目にかかることができ光栄です。御身はリオネル王子殿下とお見受けいたします」

一般教養として最優先で教えられていた王族知識。

正直、付け焼刃だ。間違っていたら後で父が怒られるんだろうな、と思いながら返答を待っていると、頭上から驚いたような「ほう」という声。

「なんだ、ちゃんと挨拶ができるじゃないか。ジャンの愛娘は我が儘で手がつけられないと聞いていたんだが。どんな暴言が飛び出すかと期待して損した」

なんだこいつ。

せっかく噛まずに言えたのに、あろうことか「喧嘩を売られたかった」と落胆。顔を上げろ、と言ってくれそうにないので勝手に立ち上がる。

仏頂面にならず微笑を浮かべられたのは、チクチクと指摘が多い家庭教師から礼儀作法と外面を教わってきた成果だ。

「恐れながら殿下、どうしてこちらへ？　両親が歓待の準備をしていたはずですが」

「ああ。ジャンとセレスティーヌの相手は母上に任せてきた。お前の顔が見たくて

ここまで来たのに、部屋に引きこもっているというからわざわざ会いに来てやったんだ」

「は？」

歓待を無視して単独行動するな、アホか！　って、しまった、声に若干怒気が籠もった。

幸いにも王子は悪戯が成功して上機嫌らしく、気づいた様子もなく手近な椅子に腰かけて、

「さあ、俺の相手をしろ、リディアーヌ・シルヴェストル。俺を楽しませられたら褒美をくれてやってもいい」

「……かしこまりました」

どうやら、お子様というのはどこの世界でも変わらないらしい。

アランは二年前でももっと落ち着いていたが……子供の癖に人間が出来過ぎている兄と比べるのは酷か。

部屋の隅でアンナとマリーが小声で話し始めたのを認識しながら、俺は「失礼いたします」とリオネルの向かいへ腰かける。

今日、アランとシャルロットが駆り出されたのはおそらく彼目当てだ。「会うな」と言われていた俺が相手するのは良くないが、子供といえど上位者。下手に追い払ったりはできないし、使用人に相手させられる人物ではない。

何か手を打ってくれると信じて今はリオネルを引き付けておく。

「殿下のお相手ができるのでしたら喜んで。……ですが、どういった暇つぶしがお好みでしょう？　何しろ不肖の娘です。殿下の好みは詳しくないもので。お得意な遊びなど提供できればいいのですが」

「遊びか。ならば、チェスはどうだ？　父上や母上に勝てるように特訓中なのだ。お前如きで練習相手になるかわからないが」

「精一杯お相手させていただきます」

アンナに指示を出すと、物凄く緊張した様子で盤と駒を運んできてくれる。

部屋にチェス盤があって良かった。今までほぼインテリアと化していたものの、他でもないアンナがきちんと手入れしてくれていたのでぴかぴかだ。

白を持ったリオネルがポーンを動かし、挑発的な笑みを浮かべて言う。

「ふっ。まあ、俺は日頃から練習しているからな。お前如きでは相手にならないだ

ろうが」

「さあ。それはやってみなければわかりませんよ」

場を盛り上げるように言い返した俺も黒い駒を動かした。

ルールは前世のそれと変わらない。ゲームの隙をついてマリーが部屋を出ていく。きっと報告に行ってくれたのだろう。

さて。

これで、後は王子さまを上手く歓待すればいい。接戦を演出しつつ負けられれば一番だが、あいにく俺のチェス経験は前世のスマホアプリで数回、こっちの人生で数回程度。むしろ、ボロ負けしないために頭をフル回転させないといけないレベルだ。

となれば話術で盛り上げるとか――？

『待って。これってチャンスなんじゃないかしら』

なるほど、そういう考え方もあるか。

通り一遍のやり方なんてどうせ相手も飽きている。だったら、リディアーヌ・シルヴェストルなりの方法で楽しませてやろう。上手く行けば気に入ってもらえるか

もしれない。

王族とのコネなんて欲しくてもなかなか手に入らない貴重な武器になる。

王子を招いての会から省かれるような駄目な娘だ。失敗したところで大した問題はないだろう。そうと決まれば、俺は盤面に意識を傾けて、

「チェックメイト」

「っ……!?」

全力で勝ちをもぎ取った。

がたっと立ち上がって盤を凝視するリオネル。程なくして、彼は俺の方を睨みつけ、

「お前、手加減はどうした!?」

「申し訳ありません、殿下。チェスは得意でないもので、気づかれずに手を抜くのは難しかったのです。これも殿下がお強いせいですよ」

勝てたのは前世で培った集中力のお陰だ。むしろ、思ったよりもリオネルが上手かった。本気で勝ちに行ってなおギリギリだったのだから。

まあ、そんなことを言ったところで当人は唇を噛みしめてふるふる震えているわ

けだが。

『あらあら。もしかして、同じ年頃の女に負けたのは初めてかしら』

王子様で、しかも見た目は端正な美少年。普通は接待プレイに勤しむ。というか大半の令嬢は本気でやっても勝てないかもしれない。なのでリオネルを気持ち良くさせるために「さすが殿下」とおだてたり、興味を持ってもらおうとあれこれ話しかけたりしただろう。

だが、ぶっちゃけこの年頃の男子にそんな小細工は必要ない。

女に興味を持つまでの男はむしろ動物に近い。甘い言葉で囁くよりも真っ向からぶつかって勝った負けたする方が有効だ。少なくとも前世の俺はそうだった。

「さあ、どういたしますか？」

乗ってこい、と念じながら笑みを浮かべ、駒を初期位置に戻していく。

「ここは三戦して先に二勝した方の勝ち、というのが公平かと思いますが」

「……いいだろう。負けて後悔するなよリディアーヌ・シルヴェストル」

椅子へ座り直すと再び駒を手にするリオネル。彼がかつん、と一手目を動かす中、俺たちの前に湯気の立つティーカップが置かれた。

対局の間に戻ってきたマリーが「そのまま王子を歓待するように、とのことです」と囁いてくる。頷いた俺は全力投球するため盤面に視線を集中。
勝負は一勝一敗で三戦目にもつれ込み、接戦の末に俺が制した。

【今回の登場人物】
・リディアーヌ：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり
・アラン：実兄
・父　：公爵にして王国宰相
・アンナ：専属メイド
・マリー：ベテランメイド
・セレスティーヌ：養母
・シャルロット　：義妹
・リオネル：王国の第三王子。お子様な性格

王子、襲来 2

リディアーヌ・シルヴェストルは不思議な少女だ。

リディアーヌの専属メイド、アンナは以前からの認識をより強くした。

昔は我が儘で使用人を顎で使うような少女だった。一部のメイドは明確に嫌っていたし「いなくなればいいのに」という声さえあった。お仕えする相手への態度ではないが、アンナ自身、正直に言えば苦手としていた。仕事中に別の用事を言いつけられ、プレッシャーから泣いてしまったこともある。

しかし、病を患い何日も寝込んでから彼女は変わった。

メイドたちに笑いかけ、一人一人の名前を覚え、無茶な命令もしない。お菓子の食べ過ぎで食事を減らすどころか「食べきれないから」と余った菓子を分けてくれる。最近は部屋で本を読んでいることが多く、じっとしていてくれるので部屋の掃除もしやすい。

『掃除の邪魔になる時は言ってちょうだい。いつでも移動するから』

本当に同じ人物なのかと疑いたくなるが、本質的な大胆さはあまり変わっていな

いとも思う。

快復後初めての朝食に生母・アデライドが好んだという黒の装いで臨んだのもその一つだ。現公爵夫人のセレスティーヌは白を好んでおり、黒を纏うことは彼女への隔意を表すと共に喪に服する＝「あなたを母とは認めない」というメッセージとも取れる。

突然部屋にやってきた王子（！）とのチェス勝負もそうだ。あろうことか勝ってしまった後、流れるように三番勝負を提案したかと思ったら、焦らした挙句に二勝目を挙げてしまう。思わず「殿下に華を持たせるつもりだったんじゃないんですか!?」と叫びそうになった。

不興を買ったらどうしようと怯えていると、二人はチェス盤越しに見つめ合って、

「くっ、あと一歩だったのに！　覚えていろよ、リディアーヌ・シルヴェストル。次は負けないからな！」

「ええ。機会があれば喜んでお相手いたします。大丈夫ですよ、殿下。次回はきっとわたしの負けでしょう」

「出直して来いというわけか。……いいだろう。次も手加減はなしだからな」

「楽しみにしております」

王族相手にまた会う約束を取り付けた!?　しかも向こうから言わせる形で!?

リオネル自身が再戦を希望している時点でリディアーヌは「上手くやった」ことがわかる。しかし、どうやったらこうなるのかがわからない。大先輩にあたるマリーに視線を向ければ、彼女はふっと笑って「大したお方ですね」と呟いた。

リオネル・ド・リヴィエール殿下は気難しい人物として知られている。

歯に衣着せずに言えば自由奔放すぎるお子様ということになるが、その彼を齢八歳にして手玉に取って見せるとは。男爵家出身の新人を専属に指名したことといい、リディアーヌには常人とは異なる視点があるように思えてならない。

だとすれば、以前のリディアーヌも今のリディアーヌも、その才を向ける先が変わっただけなのだろう。

（考えてみれば、昔のリディアーヌ様も横暴ではあったけど、理不尽ではなかったのよね）

少女の我が儘は「あれが欲しい」「これを持ってきて」「これは嫌い」と言った率直な願望が主体だった。使用人を叱責する時も「仕事が遅い」「欲しかったのはこ

れじゃない」といった理由であり、家柄や容姿といった個性を理由なく貶すようなことはしなかった。

アンナは、同僚から「男爵家出身だから」「学園を出ていないから」と嘲笑されたことが何度もある。

リディアーヌの暴言はああいう陰口に比べれば可愛いものだ。主人の期待に応えられない使用人は解雇されても仕方がない。その基準が緩いか厳しいかの違いはあれど、リディアーヌには「あなたをクビにしてやる！」と言う権利がある。

（良かった。リディアーヌ様が変わってくれて。私を専属にしてくれて）

専属になれた理由は半分以上が運だ。先輩から仕事押し付けられ――もとい、代わりに引き受けていたらリディアーヌに頼られるようになり、気づいたら距離が縮まっていた。

自分を売り込んだのには正直、打算もあった。専属になれば給金が上がる。解雇される可能性もぐっと下がるので、家への仕送りだってしやすくなる。仕事内容も正直、今のほうがずっと楽だ。けれど、今、この仕事を続けたいと思うのは決して打算だけが理由じゃない。

もっと、彼女を支えたい。

リディアーヌ・シルヴェストルに相応しいメイドになりたいと思う気持ちが確かにアンナの胸の内にはある。

まあ、その度にはまだまだ努力をしなければいけないと、

「しかし、毎回訪ねてくるのも面倒だな。そうだ。お前、次はそっちが王宮に来い」

「お言葉ですが、殿下。わたしは両親から『極力外出するな』と言いつけられている身の上でして」

「ふん。なら、俺が招けばいい。正式な招待ならジャンも断れまい」

訂正。リディアーヌに付いていくには可能な限りの努力が必要そうである。

公爵令嬢の専属になったと思ったら王宮に招かれるかもしれない。とんでもないプレッシャーに悲鳴を上げそうになりながら、アンナはなんとか笑顔を保ってその場に立ち続けた。

◇　◇　◇

リディアーヌ・シルヴェストルは変なやつだ。

リヴィエール王国第三王子リオネル・ド・リヴィエールは同い年の公爵令嬢についてそう評価した。

初めて会ったその少女の第一印象は「赤い」だった。母親譲りだという紅の髪と瞳は紅玉、あるいは炎を連想させ、なるほど噂通り苛烈そうな女だと楽しくなった。その上で、少女の容姿がご機嫌伺いに来る少女達と比較しても最上級に整っていたことは予想外だったが。

向こうにとって意外だったはずの対面で、ぎこちないながらも卒なく挨拶をこなしてきた時には「なんだ、こいつも他の女と同じか」と残念に思った。

礼儀正しく、こちらにお世辞を使ってくるような女には飽き飽きしている。ただでさえ女は庭を駆け回らず、花や服など食べられもしない物に執着するよくわからない生き物だというのに。リオネルは彼女たちが自分との遊びで『手加減』をしていると知ってからより一層、普通の女というものが苦手になった。

だから、普通にチェスで負かされるとは思わなかった。

手加減しろ、などと口にしてしまったのは不覚だ。もっとも本人は特に気にした

様子もなかったが。

三番勝負で決着をつけようと提案され、一も二もなく乗った。負けるのはやっぱり悔しいからだ。そうして、あらためて観察してみたところ、リディアーヌが真剣に戦っていることがよくわかった。

考えている時は盤面だけを見て顔を動かさない。これまで対戦してきた女はぺらぺらとお喋りが多く、そのくせ指し手は適当だったのだが。

リディアーヌは瞳を小刻みに揺らして複数の手を検討し、その上で指してくる。かと思ったら時折、妙に思い切った手がふっと交ざる。

「お前、この手は挑発のつもりか？」

「いえ。考えても読み切れないので勘で動こうか、と」

何を言ってるんだこいつは、と思ったのも束の間、リオネルは理解した。要するに彼女はほぼ全てを「考えて」決めているのだ。普段からチェスをやる人間はよく出る形を覚えて労力を減らしていく。それがないということは、本当にルールを知っているだけの素人なのだ。

（そんな奴に負けたのか、俺は!?）

気合いを入れて二戦目は勝った。あいにく三戦目は僅差で負け、リオネルは負け越してしまったが、

（面白い。リディアーヌ・シルヴェストルはこういう女か）

また勝負しようと誘えばさりげなく正式な招待を引き出してくる。そのくせ、自慢話を始めたり容姿を褒めてきたり、無駄に手を触れようとしてきたりしない。

まるで最初から取り入る気がないかのようだ。

体よくあしらわれた感があるのがまたいい。もっと強くなって負かしてやったらさぞかし楽しいだろう。そうしたら、彼女は「もう一戦」と強請ってくるだろうか。それとも他の遊びを提案してくるのか。チェス以外に色々やってみるのも楽しいだろう。

「お前、チェスの他は何が好きなんだ？」

「チェスは趣味というわけではないのですが……そうですね、読書を好んでおります」

「読書？　本なんか読んで何が楽しんだ。あんなもの勉強の時だけで十分だろう」

「あら。知らないことを知る、というのは楽しいでしょう？」

紅の瞳が煌めく。

リディアーヌは本当に楽しげで、思わずその表情に引き込まれる。

「例えば地図。点や線が描かれただけの平面に見えますが、これは世界を描いたものなのです。実際の場所には山が川が確かに存在していますし、道中には草花が咲いていることもあるでしょう。珍しい木の実を見つけて味わえることだってあるかもしれません」

「そんなこと、考えたこともないぞ」

王都の外に出たことはある。見たことのない光景に胸を躍らせ、馬車の窓に張り付くように外を眺めたものだが、あれが地図上のどこだったのかはわからない。あれはなんという名前なのか、と木や植物を指させば母は都度答えてくれたが、思えばその名をさらに本で調べたことはない。

リディアーヌは笑うでもなく頷いて、

「知らなければそうでしょう。ですが、道は繋がっています。知らなくても世界は確かに広がっている。それを想像するためにも知識が要ります」

「知識、か」

「はい。見たことのない場所の光景を想像する。それは、わくわくすることではありませんか？」

「ほう。面白い事を言うな、お前は」

目を瞬きながら、リオネルは少女の背後に幻想の風景を見た。遠くの山を背に、川のほとりに腰かける紅の少女。足元には緑が茂り、色とりどりの花が咲いている。向こうの木は美味しそうな果実をつけているし、木立ちの合間から顔を出した小動物は仕留めて焼けば美味いかもしれない。

見えたのは一瞬だったが、その風景はリオネルの目に焼き付いた。

別に、リディアーヌの言ったことが特別だったわけではない。母や家庭教師、他の大人から似たようなことを言われたことはあった気もする。ただ、真面目に聞いてはいなかった。今回は興味を惹かれた相手が口にしたことだから「面白そうだ」と思えた。

「よし。お前のことをもっと聞かせろ」

にっと笑みを浮かべて命じると、リディアーヌは僅かに面倒くさそうな表情を浮かべてから「かしこまりました」と答え――。

「殿下」
「うっ」
背後から、よく見知った声が聞こえた。振り返れば、そこには二十歳ほどの青年が立ってこちらを睨んでいる。口うるさい専属の家来だ。撒いて来たっきり存在を忘れていたが、追いついて来ていたのか。
「そこまでにしてください。放置する形になったアラン様やシャルロット様へせめて一言お詫びを申し上げなければ。リディアーヌ様も突然押しかけられて困ったはずです」
「いや、こいつは困っていたように見えないが……」
「殿下！」
ぴしゃりと言われ、びくっと身を竦める。本来、女子の部屋へ軽々しく入るものではない、などと始まった小言を神妙に聞くフリをしつつ、ため息をついてリディアーヌを振り返った。
「仕方ない。では、お前も一緒に来い、リディアーヌ」
「……は？」

ぽかん、とした表情も、なかなか見ていて面白い。
「申し訳ありません、リディアーヌ様。もうしばらく殿下の我が儘に付き合っていただけますか」
「かしこまりました。わたしも同行させていただきます。ですので、どうか頭をお上げください」
「心より感謝を申し上げます」
なんだか自分に対する時よりも口調が丁寧な気がする。従者と会話するリディアーヌを見て思わずむっとしつつ、リオネルは公爵家の庭へと戻った。宰相のジャンは「また貴方は……」と渋面。夫人のセレスティーヌはにこやかな笑顔で、公爵家次女のシャルロットはリオネルの帰還にあらかさまな安堵の表情を浮かべた。
シャルロットの方は姉と違うごく普通の少女だった。自己主張の強い性質ではなく、緊張と興奮でうまく話せないといった態度だったのでまだマシだが。
一緒にいて面白いのは？　あるいは、また話をしたいのは？　と尋ねられれば答えは明白だ。
――そもそも、今日の訪問にはある一つの目的があった。

リディアーヌに会うというリオネル個人の目的とは別に、である。親同士が進めているその話のために、シャルロットとの交流が必要だった。ジャンが気乗りしない様子なのはその絡みだろうが、

「母上。俺、いえ私は決めました」

予定が、いや気分が変わった。

勝手にいなくなったせいでご立腹らしい母を前にリディアーヌを振り返る。挨拶をするタイミングを計っていたらしい彼女を見て笑みを浮かべ、

「私の婚約者にはリディアーヌを希望します。相手は、姉妹のどちらでも構わないのでしょう？」

「え？」

硬直する少女を見て、どうやら悪戯は成功したらしいと、胸がすくような想いがした。

【今回の登場人物】

・リディアーヌ：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり
・アンナ：専属メイド
・リオネル：王国の第三王子。お子様な性格

王子、襲来 3

「リディアーヌ。本日はリオネル殿下のお相手、ご苦労でした」
「……はい。ありがとうございます、お養母様」
悪ガキ王子ことリオネルが意気揚々と帰って行ってほっとしたのも束の間、その日の夕食にてセレスティーヌから『お褒めの言葉』をいただいた。
本日のメインは鮭のムニエル。バターのうま味たっぷりのそれを味わってからパンを口に放り込むとたまらない。肉に比べたらヘルシーだろうし、なかなか好きなメニューなのだが、プレッシャーのせいで料理の味に集中しきれない。
こほん。
わざとらしく咳ばらいをした父も、助け舟を出してくれるのかと思えば妙に神妙な面持ちを浮かべて、
「殿下と王妃は満足して帰られた。今回の成果はアラン、シャルロットも含め、皆が励んでくれたお陰だ。だが」
暗褐色の瞳が俺を射貫く。

「今回の件で殿下はリディアーヌを気に入られた。陛下が承認なさればリオネル殿下とリディアーヌの婚約が決定するだろう」

「当家の忠誠を示すと共に、王家との縁を深めるまたとない機会です。これ以上ない縁談と言っていいでしょう」

両親に揃って褒められているはずなのに、何故か全くそんな気がしない。その証拠に、使用人たちも「おめでとうございます」と言っていいのかわからず黙ったままだ。

これは、やっぱりあの王子のせいだろうか。

あの野郎、もといリオネルは姉妹のどちらでも良かった、という趣旨の発言をした。つまり、向こうは最初から王子の婚約相手を品定めするつもりだった。そして我が家としてはあいつにシャルロットを宛がうつもりだったらしい。

王子が婚約に乗り気になり縁談がまとまりそうだというのは大成果だが、所望された相手が俺だというのは想定外、というわけである。

「わたしとしても驚きました。まさか突然、婚約の話が持ち上がるなんて」

狙ったわけじゃないとさりげなく主張しておく。嘘ではない。別に友人になるだ

けでも何ら問題はなかった。王子の婚約者なんて望んでも手に入らない最上級のステータスだが、相応のリスクもつきまとう。

「婚約とはどの程度、結婚に結び付くものなのでしょう？　解消される可能性はあるのですか？」

「やむを得ない事情で解消されることはある。しかし、王族の婚約は広く周知が行われる。軽々しく解消されることはないと思っていいだろう」

気が乗らなくなったからやっぱやーめた、などとはそうそう言えないわけだ。婚約者に不適格だった、などと噂が流れれば俺の将来に関わるし、あまり適当な理由で解消すれば「女の気持ちを考えない馬鹿王子」などとリオネルの風評が流れることもありうる。

そしてもちろん、王家が乗り気である以上、こちらからは迂闊に断れない。

「まさか、こんなに早くリディアーヌの婚約が決まってしまうとは……！」

「あの、お父さま。まだ確定したわけでは」

「決まったようなものだ！　くそ、リディはまだ八歳だというのに！」

ああ、父は単純に娘を手放したくないのか。婚約しても嫁入りは年頃になってか

らだろうに。

「リディアーヌはそれでいいのかい？」

ここでアランが口を開き、隣にいる俺を窺ってくる。

俺は微笑を浮かべた後、こてんと首を傾げて答えた。

「わたし、特別好きな男性はいないの。殿下にも懸想しているわけではないけれど、気持ちは後からついてくると言うでしょう？」

（前世で）男性（だった）経験のある俺にまともな恋愛ができるかは怪しい。

今の自分が（少なくとも肉体的には）女だということも理解している。公爵令嬢としての務めを考えれば結婚は避けられないので、政略結婚は自然な流れだ。

「それに、第三王子さまならば公務の負担も重くはないでしょうし」

「え？」

「……え？」

アランの上げた疑問の声に思わず硬直。

第三王子ということは上に二人、兄がいるということ。王位継承権は男子優先の年齢順なのでリオネルは第三位。王位は兄のどちらかが継ぐだろうし、俺に回って

くるのはお手伝いをするリオネルをさらにお手伝いする程度の仕事と思っていたのだが、

「リディアーヌ。我が国における継承権の扱いは『緊急時の優先順位』です。存命中の譲位は現王による指名制。……そして、第一王子殿下と第二王子殿下はいずれも側室の子です」

セレスティーヌの説明に「あっ!?」と思った。

正室とは王家にとって最も大事な妃。王からの篤い寵愛を受けることも多い。国王とて人の子である以上、最も愛する女の子を後継者に、と考えても不思議はない。

あのお気楽王子が次期国王有力候補……？

軽く眩暈に襲われる。いや、もちろん、まだ八歳なのだからこれからいくらでも立派になれるだろう。特に婚約者の薫陶なんかは効果絶大だろう。

俺は遠い目になった後、義妹へと視線を向ける。

「シャルロットはどう思う？　あなたが殿下のことを思っているのなら、身を引く理由になると思うの」

「……私は」

シャルロットはテーブル越しに俺を見つめ、ふるふると首を振った。
「リオネル様はとても素敵な方でした。……ですが、お茶会から突然いなくなり、お姉様を連れて戻ってきたあの方を見ていると、私ではとてもお相手ができないと思います」
「それは、男性側がもう少し気を遣うべきだと思うけれど」
「いいえ。リオネル様にはお姉様がお似合いだと思います。どうか私の事はお気になさらず」
はしごが外されてしまった。シャルロットの本当の想いはわからない。しかし、おそらくこれ以上問いただしても良い返事はもらえないだろう。
父が深いため息をついて、
「女性に気を配れないような男はたとえ王子でも信用できん。リディ、私から断りを入れてもいいのだぞ？」
「いいえ、お父さま」
さすがにこれは娘をやりたくないから言っているのではなく、好きでもない相手に嫁ぐことになる（かもしれない）俺への配慮だろう。それはとても嬉しく思いつ

つも、首を振って答える。
「王家との仲を拗らせるべきではありません。もし、リオネル殿下がわたしをご所望だというのなら喜んでお受けしましょう」
「わかりました」
父と視線を交わした上で深く頷くセレスティーヌ。
「では、当家からの意向としてはそのように伝えます。そして、婚約が成った場合、王家へ嫁ぐに相応しい淑女となれるよう、これまで以上に励んで貰います」
「かしこまりました。シルヴェストル公爵家の名に泥を塗ることのないよう、精一杯努力いたします」
単にチェスをしただけにしては破格だが、これ以上ない成果が上がった。
先行き不安だが、王子の婚約者ともなれば養母も俺を軽く扱えなくなるだろう。リオネルという名の荒波を上手く乗りこなして、戦いのための武器に変えるしかない。
これからの意気込みも込めて、俺は令嬢としての笑みをしっかりと浮かべてみせた。

「あの、お姉様。少しだけお話をよろしいでしょうか？」
シャルロットに呼び止められたのは夕食を終え、部屋へ戻ろうとした時だった。
義妹が話しかけてくるのは珍しい。しかも、どうやら改まった話のようだ。俺は「ええ」と頷いた上で彼女を自分の部屋へと誘った。
アンナにお茶を淹れてもらい、ティーカップに軽く口をつける。リラックス効果のある紅茶の香りに安心したのか、シャルロットはゆっくりと口を開いた。
「……お姉様は凄いです」
「凄い？」
「はい。リオネル様にチェスで勝ったって。私にはそんなことできません」
どんな話なのかと身構えていた俺は、少し肩の力を抜きながら苦笑を浮かべた。
「そんなことないわ。すごいのはシャルロットの方。わたしなんて、あなたと座学を一緒に受けたらどうか？　なんて言われるような有様だったのよ？」
「でも、今は違いますよね？　先生もお姉様は見違えたと仰っていました」

「元が悪かったから良く見えるんでしょうね。今は、これまでの分を取り戻すために頑張っているようなものよ」

「昔のお姉様、ですか」

思い返そうとするように視線を宙へ向けるシャルロット。

俺としてはあまり思い出して欲しくない我が儘だった自分の姿が、彼女の脳裏にははっきりと焼き付いているのだろう。

「本当にごめんなさい。シャルロットにもたくさん迷惑をかけたでしょう？」

考えてみると、シャルロットにはきちんと謝っていなかった。

俺の素行による直接の被害者は第一にアンナたちメイド、第二がシャルロットだ。接触の機会が多くないので直接的ないじめはほぼなかったが、会話の度に邪険にされるのは堪えたに違いない。もっと早く謝っておくべきだった。

姿勢を正して頭を下げれば、義妹は「やめてください」と慌てた。

「昔のお姉様はその、少し怖かったですけど、今のお姉様は怖くありませんから」

「本当？」

「はい。でも、私にはお姉様がどうして変わられたのか……」

聞きたかったことはこれだろうか。王子に俺が選ばれて、シャルロットは選ばれなかった。その事実を『差』と感じてしまい、思い詰めてしまったのかもしれない。果たして、彼女に「病気で倒れたせいだ」と言って納得してもらえるかどうか。

「あのね、シャルロット。わたしはお養母さま――セレスティーヌさまが嫌いなの」

「……っ」

義妹は目を見開いたものの、驚きの声は上げなかった。後ろに控えるシャルロットの専属メイドも大きくは表情を動かさない。昔の俺は敵意バリバリだったので、よほど鈍い人間でなければみんな知っていることだろう。

俺はその理由としてまず嫉妬を挙げる。

亡き母の代わりに父と結婚したセレスティーヌはある意味敵のような存在だった。それでも最初は仲良くしようとした。けれど、そんな俺に向けられたのはさりげなくも容赦のない冷遇。

「わたしはあの人のことを敵だと思ってる。でも、ただ睨みつけたり、暴れるのは止めたの」

「どうして、ですか？」

「意味がないから。やるなら、あの人を悔しがらせてあげなくちゃ。暴力でも、いやらしい方法でもなくて、ただ強くなったわたしを見せて『参った』と言わせたい。だからやり方を変えたの。それだけ」

「……やっぱり、お姉様は凄いです」

噛みしめるように間を取ったシャルロットは、しみじみと呟くように言った。

「凄くないってば。わたしは理由がないと努力できない駄目な子。真面目に頑張ってるシャルロットが羨ましがることなんて何もないわ」

「そう、でしょうか」

「そうよ」

浮かない顔。本人にはなかなか実感しづらいのかもしれない。しかし、そもそも歳が違う。俺ができることを今のシャルロットができる必要はない。そして、素直で純粋な義妹の性格は俺がどれだけ頑張っても手に入れることのできないものだ。

ようやく、シャルロットは少しだけ笑顔になった。

俯きがちだった顔を上げ、俺の顔を見て言う。

「私もお姉様みたいに強くなりたいです」

「止めはしないわ。けど、真似るのは勉強だけにしなさい。わたしの性格なんて真似しても何一つ良いことはないから」
「そんなことはないと思いますけど……わかりました」
専属メイドに椅子を引いてもらいながらシャルロットはゆっくりと立ち上がった。
「今日のお話は、お母様には内緒にしておきますね」
「言ってもいいわ。どうせあの人もわかっているでしょうし」
「それでも、内緒にしておきます」
くすりと笑い、シャルロットは最後に一礼した。
「おやすみなさい、お姉様」
「ええ。おやすみなさい、シャルロット」
義妹とも少しはいい関係を築けただろうか。成り行きを見守っていたアンナが「良かったですね」と言ってくれたので、まあ悪い方向には向かっていないのだろう。俺は少しいい気分でベッドに入り、一日の疲れを癒やすためにもぐっすりと眠った。

俺とリオネルを婚約する意向は、一週間も経たないうちに公爵家へと伝えられた。
正式な発表、およびその後の対応についてはまだ時間がかかるということだが、この時点でほぼ内定。この件は父と養母両名によって緘口令が敷かれたものの、数日後には屋敷の使用人全員に広まっていた。
俺は、心なしか厳しくなった授業を必死にこなしながら、空いた時間でチェスの練習をする日々。練習相手は主に近くにいるアンナだが、父もちょくちょくやりたそうな素振りを見せてくるので暇を見て対戦をお願いしている。
ああ、セレスティーヌも一度だけ気まぐれに交ざってきた。普通に上手くて、俺は当たり前のようにボコボコにされた。父は適当に手加減してくれているのに。
そして、そんなある日の朝。
「これは……!?」
「リディアーヌ様のドレスが!?」
いつものように着替えをしようとした俺は、アンナや他のメイドと共にクローゼットを開け――その中に、ずたずたに切り裂かれたドレスを発見した。

【今回の登場人物】

◇リディアーヌ・シルヴェストル：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり

◇セレスティーヌ：シルヴェストル公爵の後妻

◇シャルロット　：セレスティーヌの娘。リディアーヌの義妹

◇アラン：公爵家長男

◇アンナ：リディアーヌの専属メイド

屋敷内の悪意

「今回の件、貴女に何か心当たりはありますか？」
「いいえ、お養母さま。このところ夜は熟睡しておりますので、多少の物音では目覚めなかったかと」
ため息を吐きたいのを堪えながら、養母の問いへ正直に答えた。
セレスティーヌの私室はかつて俺の生母アデライドが使っていた部屋だ。赤と黒を基調とする落ち着いた雰囲気だったそこは今、白と金に彩られた上品な部屋へ様変わりしている。
見せつけるために呼んだのかと憤りそうになるが、今回に関してそういう意図はないだろう。
その証拠に、テーブルの向かいに座った養母は珍しく眉を寄せて困惑を表している。
「被害が少なかったのは幸いですが……明らかに悪意ある犯行ですね」
切り裂かれたドレスは全部で三着だった。

回復後に初めて着た黒いドレスを含め、最近好んで着ていたものばかり。直すのは無理と一目でわかるくらいに損なわれていた。

発見後、俺はすぐメイドの一人を報告に行かせた。

指示を待つ間無事なドレスへ着替え、クローゼットの中や私室を可能な限り調べたものの、特に不審な点は見つからず。

そうしているうちに養母から呼び出しがかかって今に至る。家族揃っての朝食は中止となり、俺たちの分の食事は現在テーブルの上に置かれている。

「最後にドレスを確認したのはいつですか？」

「昨日の朝です。その時はもちろん三着とも無事でした」

寝間着と普段着は別のクローゼットに収められている。脱いだドレスは洗濯に回されるので、夜に普段着用のクローゼットを開くことはない。

汗をかいた時は日中に着替えることもあるが、昨日はダンスの授業もなかったので服は替えていない。

「では、あなたの部屋へ特別に出入りした者は？」

「わたしの知る範囲ではいません」

掃除や整理整頓はアンナの仕事なのでメイドの出入りも多くはない。
食事等で部屋を空ける際や夜の間はドアに鍵をかける。
鍵はアンナが携帯している他、屋敷の保管庫にも予備が収められている。
「お養母さま、保管庫はどうなっていましたか？」
「他の部屋の鍵も含め、全て盗まれてはいませんでした」
鍵の有無は毎日、朝晩の二回チェックが行われている。
昨日のチェックにおいて異常はなかったらしい。とはいえ、誰がいつどれを借りたかまでは把握していない。朝から晩の間、あるいは晩から朝の間に使ってすぐに返すことはできる。
つまり、使用人なら――というか鍵の管理システムと管理場所さえ知っていれば誰にでも犯行は可能。
まあ、父やセレスティーヌ、アラン、シャルロットが犯人という可能性は低いだろうが。
ここで養母は息を吐いて、
「状況的に、最も犯行が容易なのはアンナです」

「……そうなりますね」

こくりと頷く。

アンナが使っている専属部屋は鍵のかかったドアの内側。接続としては「屋敷の廊下⇔俺の私室⇔俺の寝室、個人用の浴室、専属部屋」となっている。

俺の寝ている間ならこっそり私室に入ってクローゼットを開くことも簡単だ。もちろん、彼女がやったなどとは思えないが。

ちらりと背後を振り返る。そこには誰も立っていない。アンナには別に事情を聞くということで、俺は彼女と引き離されている。

「お養母さま。あの子はこれからどうなりますか？」

「この後、別途事情を聞きます。その後はしばらくの間、別室で謹慎してもらいましょう」

「それは、アンナを疑っているからですか？」

「可能性がある以上、そのままにはしておけないというだけです。同じことの繰り返しは防がなくてはいけませんから。代わりに他のメイドを付けますから、ひとまず我慢してください」

「……かしこまりました」

アンナが身動き取れない中で二度目が起こればシロの目が大きくなる。

最低限の対処を行った上で追って調査を行い、詳細を確定する。いつも通りセレスティーヌは論理的かつ冷静だ。よほどのことがない限り、やってもいない罪をアンナに押し付けることはしないはず。

夜間の犯行だとすれば寝ていた俺の不注意もあり得る。ここは従っておいた方が得策だろう。

「では、代わりのメイドは誰になりますか？」

「……そうですね」

しばし、セレスティーヌは思案するように目を伏せる。

目を開けた彼女はじっと俺を見据えたまま、一人の名前を口にした。

「お嬢様。どうかお気を落とさずに」

「ありがとう、ジゼル」

代理の任命は速やかに行われた。

紺色の髪と瞳を持った若いメイド――ジゼルはセレスティーヌの部屋で俺と対面すると「よろしくお願いいたします」と優雅に一礼した。子爵家の出身で、屋敷に来て三年目だという。学園の卒業生なのでアンナとは四歳差の二十歳だ。

アンナの謹慎についてセレスティーヌは「しばらくの間」と言葉を濁した。その間、ジゼルは一般の使用人部屋から通いで俺を世話することになる。専属部屋にあるアンナの荷物は当面そのままだ。

部屋に戻ると二人きりになる。

ジゼルの気づかわしげな呼びかけに俺は「お嬢様」として答えた。

いつもと違う気配がするせいか落ち着かない。ひとまず椅子に腰かけて息を吐くと、

「アンナに拘る必要はありません。メイドは他にもたくさんいるのですから。早いうちに見極めができて良かったのではありませんか」

犯人が決まったと言わんばかりの台詞。

代理にジゼルが選ばれたのは「本人たっての希望」らしい。俺の世話をしていた

一人でもあるし、話の流れとしてはおかしくない。
問題は、彼女が俺を嫌っていたはずだということと、アンナとの仲もあまり良くなかったということ。
俺は肩を竦めて、
「アンナは魔力も低いし、経験も浅かったものね」
「ええ。魔力も経験も屋敷で最低だったはずです。学園を出ておらず学もありませんから、勉強をお助けするのにも不自由したのではないかと」
いや、アンナは十分俺を助けてくれていた。
言いたいのを堪えて笑顔で流す。アンナから聞いたが、メイドの給金は仕事内容の他、能力によっても違いが出るらしい。魔力が多ければ魔道具をたくさん使えるし、学園を出ているメイドは勉強の他、インテリアやファッションにも詳しい傾向がある。
にもかかわらず、新人のアンナが一足飛びに「昇進」したのだからジゼルたちには思うところがあったのだろう。
「ジゼルはどうして、今回アンナの代わりを希望してくれたの？」

「お嬢様に頼って頂くいい機会だと思ったからです」
一瞬、頬をひくっと動かしてからジゼルは笑顔で答えた。
「専属の仕事は地味だし、覚えることも多くて大変だと思うけれど」
「承知しております。ですが、先生方からの評価も高く、リオネル殿下と婚約なさるお嬢様には、もっと優秀なメイドが必要かと」
「なるほどね。……それじゃあ、アンナが戻ってくるまでの間、頼りにしようかしら」
授業の教材を取ってくれるように指示を出す。
今日の午前中は数学だ。事件はあったものの物損だけだし、内部犯が濃厚なため内々で処理される予定になっている。当然、勉強も中止にはならない。
しかし、ジゼルは動かずさらに言葉を投げかけてくる。
「どうして、アンナを信用するんです？」
「証拠がないもの」
確証も無しに疑いを向けるのは間違いの元だ。
俺は幸いにも遭遇しなかったが、痴漢冤罪なんか特に悲惨だった。一方的に不利

な状況に追い込まれた人たちがその後どうなったか。
人は正直者ばかりではない。誰かがアンナに罪を着せようとしている可能性だって十分にある。
勉強道具を取ってくれるように再度頼むと、ジゼルはどこか思いつめるような、考え込むような表情を浮かべながら指示に従ってくれた。

ジゼルを見ていると高一の時のクラスメートを思い出す。
可愛くてお洒落だが性格が悪く、とある地味男子をいつも嘲笑っていた女子。そのくせ、相手がテストで満点を取ると「すごーい！　ね、勉強教えて？」と手のひら返し。
何度か二人きりで勉強した後、男子から告白されると「え、無理」と即答。あっさり距離を離して運動部のルーキーと付き合い始めた。
状況に応じて態度を変える女は信用できない。
一見好意的に見えても内心、相手を利用することしか考えていない。俺に利用価

値があるうちはきちんと仕事をこなすだろうが、価値がなくなればあっさり離れていくに違いない。

できればアンナに早く帰ってきて欲しい。

俺はそう願ったが、あいにくその願いは叶わなかった。

「公爵様より、お嬢様の部屋の警備を強化するようにとのご命令です」

事件が発覚した日の昼には部屋の前に兵が立つようになった。

父の雇っている平民の私兵だ。身元が明確で忠誠心の高い者が集められており、普段は屋敷の外を中心に警備している。

男ばかりなので女子の部屋を守るには不向きだが、部屋の中には入らないらしいし特に気にならない。むしろ仕事を増やして申し訳ないくらいだ。

「もう、お父様も心配性なんだから。……しばらくの間、お手数をおかけいたしますが、よろしくお願いいたしますね」

「はっ。良からぬ輩が侵入しないよう目を光らせます」

警備は交代で二十四時間体制。

彼らのお陰か数日間、何事もないままに時が過ぎた。その間、使用人全員を対象に聞き取りが行われたが決め手になる証言はなく、アンナは帰ってこないまま。

風呂でアンナ以外に洗われるのはどうにも落ち着かない。

能力で言えばジゼルは優秀だ。専属の仕事内容もすぐに覚えたし手際も良い。普段は主従の線引きもしっかり弁えている。

やりにくいのは俺が何かする度に「さすがです」「素晴らしいです」と褒めてくること。また、自分自身も褒められたいらしく、はっきりと態度に出してくる。褒めたら褒めたでそれが当然という顔をする。

『ああもう、やりにくいったらないわ！』

犯人が見つからないためアンナも返してもらえないまま。

謹慎が長引いているため、他のメイドが監視できて俺とは会わない部署――料理や洗濯を手伝うことになったらしい。その方が彼女としては気が楽だろう。

このまま待っていればそのうち「いったん様子見」として返してもらえそうだ。

ただ、それは根本的な解決にならない。

犯人を見つけられればいいのだが、それもなかなか難しい。盗難ではないので物証がないし、現行犯を抑えようにも二度目がいつ起こるかわからない。

「犯罪捜査に使える魔法はないのでしょうか？」

家庭教師に尋ねてみたりもしたが、返答は芳しくなかった。

「魔法を使って他人の記憶を読むことはできますが、主だった証拠として扱われることはあまりありません」

心を覗く行為自体が快く思われないこと。全ての記憶を覗けるわけではない＝勘違いが生じる可能性があること。術者が嘘をつく可能性があることなど複数にわたる理由のせいだ。

これを克服するため、例えば嘘発見だけに絞った魔道具の開発なども試みられ、実際完成した例もあるそうだが――これはこれで『高い』という身も蓋もないデメリットがあった。

となると、俺にできそうな方法としては犯人に二度目の犯行を諦めてもらう、心変わりしてもらうことくらいだろうか。

「戻りました。お仕事、ご苦労様です」

「お帰りなさいませ、お嬢様。異常なしです。お食事の間、この部屋へ出入りしようとした者はおりません」

「良かった。毎日、本当にありがとうございます」

何度も会っているうちに警備兵の顔も覚えてきた。

目が合ったら話しかけるようにした結果、彼らとはだいぶ仲良くなっている。俺が美少女なのも功を奏しただろう。可愛い女の子が笑顔を浮かべれば大抵の人間は態度を緩める。

これが男子相手なら表向き畏まった態度を取りつつも「なんだこの生意気なガキ」となったかもしれない。リオネルなんか城の兵相手にそうなっていそうだ。

しかし、ただ話しかけるだけだと実質仕事の邪魔なわけで。

仕事への意欲を上げてもらうためにももう少し、何か「ご褒美」が要るだろうか。

俺もコンビニバイトをした経験があるからわかる。客が来ないのに気を張って待ち続けるのはかなり辛かった。俺は少し考えてから「そうだわ」とジゼルを見上げて、

「皆さんに何か差し入れをしましょう。お菓子とか、軽食とか。……それとも、大

人の男性ならやっぱりお酒かしら？」

「っ！　本当ですか!?」

わかりやすい反応である。うん、やっぱり酒とつまみがいいか。二十歳前に死んだので俺は飲めなかったが、手っ取り早い気晴らしと言えば酒だろう。

と思ったらジゼルが眉をひそめて、

「給金は公爵家から出ているのですから、お嬢様がそこまでなさらなくとも良いのでは？」

「でも、ジゼルたちは料理やお菓子の余りをもらえたり役得があるでしょう？彼らにも少しくらい報いてあげてもいいと思うの」

費用は俺の小遣いから出すので別に問題ない。

衣装や装飾品などは別で買ってもらえるので、思いつきでちょっとした買い物をしたい時にすぐ支払えるように、という金だ。今までは有名な店の菓子が食べたいとか、珍しい花を買ってきてとかそんなことにしか使っていなかったし、使い方としてはむしろ健全なくらいだ。

それに、小遣いと言ってもそこそこの額なので、平民向けの安い酒や食べ物程度

ではちっとも痛くない。
「ジゼル、手配をお願いね」
「……かしこまりました」
ノーという返事はいらない、と言外に匂わせると嫌そうな顔のままイエスの返事。
こうして夜には警備の兵全員に酒一本とつまみ少々が配られ、大変好評を博した。これによって俺と兵たちの関係はさらに良くなり――その代わりとして、差し入れは以後も何度か繰り返されることになった。

【今回の登場人物】
◇リディアーヌ・シルヴェストル：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり
◇セレスティーヌ：シルヴェストル公爵の後妻
◇アンナ：リディアーヌの専属メイド。しばらくの謹慎を言い渡される。
◇ジゼル：公爵家のメイド。専属メイド代行に立候補する。

屋敷内の悪意 2

「おはようございます。今日も早くからご苦労さまです」
「ありがとうございます。ですが、これも仕事ですから。むしろ、屋内は異常が起こりにくいので楽なくらいです」
さらに数日が経った。
兵たちとは挨拶だけではなく軽い世間話まで交わすようになっている。
その日の朝番だった若い兵士はにやっと笑って、
「お嬢様から差し入れまで頂けるので、むしろずっと続けたいですよ」
「まあ。では、お父様に相談してみようかしら」
調子のいい言葉にくすりと笑ってしまう。今のは半分以上が本音だろう。男は思考がシンプルでいい。
勉強漬けのうえ、アンナが不在でストレスの溜まっている俺はもう少し彼との会話を続けようとして――こほん、というジゼルの咳払いに止められた。
「お嬢様。警備の者とはいえ、殿方とあまり親しくなるのはいけません」

「あら。わたしはまだ子供よ。勘繰る方がおかしいし、彼だって不本意だと思うけれど」

見上げて「ねえ？」と水を向ければ、兵士もふっと笑みを浮かべた。

「そうですね。お嬢様は美人ですが、さすがに幼すぎます。それに、俺は結婚しているので」

「そうだったのね。お相手はどんな方なのかしら？」

「お嬢様」

彼は手袋を外して結婚指輪を見せてくれた。石も本体も高い物ではない。俺の身に着けているアクセサリーの方がよっぽど高級だが、誇らしげな様子から幸せなのがわかる。

せっかくなのでもう少し話を聞きたかったが、二度目の催促があったので仕方なく廊下を歩き出した。

「まったく……もう警備は必要ないと思うのですけれど」

部屋の前から離れると、ジゼルは愚痴をこぼし始めた。

「だって、ただドレスを悪戯されただけでしょう？　それに、もう終わった話で

はありませんか。旦那様も奥様も大袈裟過ぎます」
あの兵士の態度がよほど気に食わなかったのだろう。彼女にもガス抜きは必要だろうし、別に「そうね」と流しても問題はない。
ただ、ジゼルにそれ以上の意図があるとしたらどうだろう。
俺は思い切って少し意地悪な返答をしてみる。
「事件は何も終わっていないわ」
「え？」
疑問の声を上げ、その場に立ち止る代理の専属メイド。
数歩分、彼女を追い越してから振り返る。ジゼルはなんとも不思議そうな顔をしていた。
「だって犯人はまだ見つかっていないのでしょう？　……それに、あれは単なる悪戯でもない」
「で、でも。ドレスが何着か駄目になっただけでしょう？」
「そうね。公爵家の長女のドレスが複数、だめになったわ」
「っ」

唇を噛み、顔を僅かに俯かせる。言いたいことはわかってくれたらしい。

「ドレスはまた買えばいい。幸い、我が家には十分な金銭的余裕があるしね。でも、それは被害が無かったという意味じゃない。あの事件で、我が家は不要な出費を強いられることになった」

貴族の服には相応の格が求められる。公爵令嬢のドレスともなれば、普段使いの品であろうと下級貴族のドレスが何着も買える。

前世にて、バイトしていたコンビニで万引きが発生するたびに店長がため息をついていたのを覚えている。

万引きは窃盗だし、ドレスを故意に傷つければ器物損壊。れっきとした犯罪だ。

「動機はわたしへの嫌がらせかしら？　時期的に殿下との婚約を止めさせたかったようにも思えるわ。他の家の陰謀？　個人の意思だとしたら、犯人は公爵令嬢の気分を害し、婚約に影響を及ぼすだけの覚悟があったのかしらね？」

「――――」

言うだけ言って歩き出すと、メイドはしばらく後をついてこなかった。慌てて追いついてきた彼女の表情は硬く強張っている。

なんだ、やっぱりこいつがやったのか。
証拠も何もないただの勘だが、俺はあれがジゼルの仕業だとほぼ確信した。
そもそも、セレスティーヌの態度からして意味深だったのだ。
二度目の犯行を誘うためか、それとも俺を試すためか。何らかの意図から最も怪しい人間を敢えてアンナの代わりに指名したのだろう。俺もうすうす怪しいとは思っていた。
ジゼルに言った強い言葉には『警告』の意味も含めている。あれで自分のしたことを反省し、心を入れ替えてくれるならそれが一番いいのだが――。
残念なことに、話はそう上手くはいかなかった。

翌朝、ジゼルはいつもより大幅に遅れてやってきた。
何かあったのかと尋ねれば妙にそわそわした後、言いにくそうに口を開いて、
「アンナが犯人だという証拠が出ました」
「え……!?」

詳しくはわからないという彼女と朝の身支度を済ませていると、朝食が遅れる旨の連絡が来た。お陰で家族が食堂に集まるのは普段より三十分は後になった。
「お養母さま。いったい、何があったのですか？」
「先に食事を始めましょう。全員にしっかりと説明をしなければいけませんから」
家族たちは全員――父もアランもシャルロットも事件が気になっているようだった。どこか浮足立った雰囲気で朝食が始まり、ようやくセレスティーヌが口を開く。
「既にある程度話が伝わっているようですが、事件の前夜、不審な行動をとるアンナを見た――という証言がありました」
証言したのは調理の下働きを担当している少年。
今朝になってメイド長に申告があり、養母へと伝わったらしい。
いわく、彼はその夜、調理道具をきちんと片付けたか気になって厨房に行こうとした。その途中、ナイフを手にしたアンナの姿を目撃したのだとか。
「少年は声をかけなかったのか？」
「ええ。アンナの顔がとても険しく見えたため、恐ろしくなって隠れてしまったのだそうです」

今まで黙っていたのも恐かったから、らしい。

「では、どうして今になって証言を？」

「数日前からアンナを仕事に復帰させたからです。それを見て、黙っている方が大事になると思ったと」

復帰したアンナは調理の手伝いも任されていたはずなので、確かに少年とも顔を合わせる。もしあの夜、アンナの少年の顔を見ていたら……？　と怖くなってもおかしくない

控えているジゼルを見れば、彼女は「私の言った通りでしょう？」という顔で俺を見返してきた。『ねえ、あの子って馬鹿なんじゃないかしら』。そこまでは言わないが、確かに杜撰だ。

「お養母さま。その証言はおかしいと思います。専属部屋を使えるアンナがどうして廊下を歩いていたのでしょう？　それも、抜き身のナイフを持って。まるで『疑ってください』と言っているようなものではありませんか」

普通、刃物は鞘かケースに収めて持ち運ぶ。

廊下を歩いていた理由も謎だ。これが殺人事件なら「血の付いたナイフをすぐ洗

いたかった」とか想像できるが、ドレスを切って付着するのは繊維くらいだ。そんなものは振ればだいたい落ちるし、この世界に優れた鑑識があるわけでもない。

セレスティーヌもこれに頷いて、

「リディアーヌの言う通り、あまりにも不自然です。……そこでさらなる説明を求めところ、彼が『嘘を言った』と自白しました」

ざわり、と、若手のメイドを中心に動揺が広がる。

「母上。その少年は何故嘘を？」

「何者かに『言う通りにしろ』と脅されたそうです。ただ、それがどんな人物だったのかは覚えていないと」

「ふむ。……魔法か」

「ええ。おそらくは心に干渉する魔法でしょう」

同系統の魔法で思い出させることも不可能ではないが、下手をすれば少年の心を傷つけてしまう。また、頑張って思い出させても犯人が覆面でもしていたら手がかりに繋がらない。

父は目を伏せてため息をついた。

「穏便に済ませたかったが、仕方がない。騎士団に引き渡すとしよう」

ざわめきはさらに大きくなった。

騎士団は戦争時の重要戦力であると共に平時は王都の治安維持――警察のような役割を果たしている。

これまでは内々に話を進めていたが、使用人が何者かに脅され雇用主に虚偽の申告をしたとなれば話は別だ。黒幕は家の外にいるかもしれない。他家の嫌がらせならまだいいが、最悪の場合、他国が絡んでいる可能性もゼロではない。

まあ、あくまでも可能性であって、こんなしょぼい「他国の陰謀」があるわけないが。

少年は騎士団によって取り調べを受け、必要と判断されれば魔法による精神探査を受けることになる。なお、平民の人権は貴族に比べて非常に軽いため、取り調べの過程で手や足が出る可能性は普通にある。十中八九、利用されただけなのに可哀そうな話である。

ジゼルは――俺の様子を窺っていたのか、視線を向けた途端に目が合った。慌てて目を逸らしても正直、もう遅い。

「お養母さま。これでアンナの容疑は晴れたのではないでしょうか？」
こくん、と、頷くセレスティーヌ。
「そうですね。これ以上、アンナを拘束しておく必要はないでしょう」
アンナが犯人だとすると行動の意図がわからない。最初のアリバイ工作から失敗しているし、少年の件も嘘が看破されなければ容疑が強まるだけだ。ハイリスクすぎる。
「明日の朝からアンナを専属に戻します。ジゼルは明日から通常業務に戻るように」
「ありがとうございます、お養母さま」
「……っ。かしこまりました、セレスティーヌ様」
取り調べの結果次第では犯人もわかるとあって、アランやシャルロットは明らかにほっとした顔になる。メイドたちも平穏が戻ることを安堵したり、アンナが犯人でなかったことに困惑したりする中、一人の人物だけあからさまに青い顔をしていた。

「短い間だったけれど、ありがとう」
何事もなく夜がやってきた。
俺の胸にあったのは安堵と落胆。ジゼルは（少なくとも表向きは）普通に仕事をこなしていた。後は俺が眠りにつけば、翌朝からはアンナが来てくれる。
本当ならセレスティーヌのところへ行って罪を告白して欲しかった。仕事を終えてから行くつもりなのだろうか。それともこのまま隠し通そうとするのか。メイドを退職して逃げるのかもしれない。
いっそ問い詰めて白状させたいが、シラを切られたらおしまいだ。少なくともこれでもう悪さはできないだろうから、それで良しとしようか。
「短い間でしたが、お仕えすることができて光栄でした」
内心を隠して微笑む俺に、ジゼルは深く頭を下げて答えた。
顔を上げた彼女は俺を見て、
「やっぱり、お嬢様は私よりアンナを選ぶのでしょう？」
「ええ。アンナは明るくて優しい子だから。経験も魔力も足りなくても、わたしはあの子がいいの」

経験はこれから積めばいい。魔力の不足は俺が成長して魔道具を扱えるようになれば、あり余っているらしい俺の魔力で補ってやれる。アンナにはそんなものとは比べ物にならない、彼女だけの良さがある。

俺の返答に、ジゼルはふっと憑き物が落ちたように笑った。

「お嬢様。最後にお茶を淹れさせていただけませんか？」

「……そうね。いただこうかしら」

寝る前の紅茶を飲むことは今までにも何度かあった。

コーヒー同様、飲み過ぎるとカフェインで眠れなくなるが、一杯程度ならむしろ香りのリラックス効果でよく眠れる。

儀式のようなものなのかもしれないと快く了承し、茶葉が蒸れるまでの時間をゆっくりと待った。お互いに言葉は何もない。やがて湯気の立つティーカップが目の前に置かれたら、十分に香りを楽しんでから口に含む。

芳醇な味わいの中に僅かな苦み。

「いつもの紅茶と銘柄が違うのかしら？」

「はい。就寝前に適した茶葉を選びました」

「そう」

古今東西、幾多の王侯貴族を襲った「とある手段」が頭をよぎる。

まさか。

ドレスに悪戯したかと思えば半端に三着だけ、偽の情報を流したかと思えばすぐにバレる、そんな人間がそこまでするだろうか？　ドレス事件でアンナが疑われた経緯を思えば誰が容疑者筆頭になるかは想像がつく。

ないと思いつつも紅茶を飲むペースを落とす。

ちびちびと、飲んでいるのかいないのかわからない態度をしばし続けていると、身体を眠気が襲ってくる。

これは。

「お嬢様？　お口に合いませんでしたか？」

さりげなく尋ねてくるジゼルに微笑んで、

「そうね。十分に眠くなったからもういいわ。ありがとう」

カップを置いて立ち上がる。酩酊感にも似た平衡感覚の狂いを感じる。俺はそれに逆らわず、ただ倒れ方を調整してテーブル上のカップやソーサーを巻き込んだ。

陶器の割れる大きな音。

ジゼルは目を見開いて俺に駆け寄ってくる。

「本当、馬鹿なお嬢様……！」

口に小瓶か何かが押し当てられた。押しのけたいが、子供かつ同性の俺ではメイドの腕力にさえ抗えない。自慢の髪をぐいっと掴まれ上を向かされ、強引にどろりとした何かを嚥下させられる。

無理やり流し込まれたので総量の一割程度がこぼれた。

ここで誰かの足音。ぱっと手を離したジゼルは小瓶を懐にしまうと俺を優しく抱き上げる。物音を聞きつけた兵士が「何事ですか!?」と飛び込んできて、

「なんでもありません。どうやらギリギリまで眠気を我慢されていたようで。これからベッドへお運びするところです」

「たすけ……っ」

気持ちが悪い。視界がぐらぐら揺れる。

必死に助けを求めたものの伝わったかどうか。俺にだけ聞こえる音量で舌打ちしたジゼルは若い兵士と視線を合わせる。また魔法か。大きな効力はないはずだが、

平民の彼相手なら違和感を打ち消す程度は可能かもしれない。
『ちょっと、しっかりしなさい！　なにいいようにやられてるのよ!?』。
まったくもって不覚だ。なんだかんだ言いながら覚悟が決まっていなかった。平気で他人を陥れるような奴に常識を期待したのが間違いだった。
ここで死んだらジゼルの思うつぼになってしまう。
『そうよ！　せっかく生き残ったのに、ここで死んでたまるもんですか！』
縋るような視線で兵士を見上げながら眠りの中へ落ちていく。
最後に聞こえたのはこんな会話だった。
「体調を崩されているのでは？　もうアンナを呼び戻しても問題ないでしょう。連絡してまいります」
「ええ。私の仕事はこれで終わりましたので、後はアンナに任せます」
次に気づいた時には、悲痛な顔をしたアンナに顔を覗き込まれていた。

【今回の登場人物】

◇リディアーヌ・シルヴェストル：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり
◇セレスティーヌ：シルヴェストル公爵の後妻
◇シャルロット　：セレスティーヌの娘。リディアーヌの義妹
◇アラン：公爵家長男
◇アンナ：リディアーヌの専属メイド
◇ジゼル：公爵家のメイド

屋敷内の悪意 3

最初に感じたのは猛烈な寒さだ。

病気になった時に寒気がするのは身体の抵抗力が熱を発するから。しかし今、俺が感じているのはそれとは違う。身体から熱、つまりはエネルギー自体が奪われているような虚脱感。

強いてそれを無視し、ベッドに手を突いて上体を起こす。アンナがそれを慌てて支えてくれる。

「無理をしないでください、リディアーヌ様」

「そういうわけにはいかないわ。……お帰りなさい、アンナ」

上手く微笑みを作れただろうか。

久しぶりに会った専属メイドは、瞳に涙を浮かべて「はい」と答えた。

「ご心配をおかけして申し訳ありません。ただいま戻りました、リディアーヌ様」

「こちらこそ、何もできなくてごめんなさい。公爵の娘なんて言ったって、結局ただの子供なのね」

「そんなことはありません。……奥様に何度もお願いしてくださったと先輩方から聞きました。待っていてくださったから、私はこうして戻って来られたんです」

「そう。……少しでも助けになったのなら、良かった」

心のつかえが取れたのを感じながら片手を伸ばす。ぎゅっ、と、それが両手で包まれると、アンナの体温を熱いほどに感じる。伝わってきた熱によってほんの少し身体が楽になる。

「わたしはどのくらい眠っていたの？」

「もうお昼過ぎです。私が様子を見に来た時にはもう、リディアーヌ様の身体は冷たくなり始めていました」

警備の兵が「お嬢様が倒れた」とアンナに伝えてくれたらしい。

謹慎用の部屋で監視役のメイドと眠っていたアンナは一足早いのを承知でここへ来て、色々と対処をしてくれたらしい。気づけば掛け布団が一枚増えているし、布団の中には湯たんぽ的な道具が収められている。身体を温めるための工夫だ。

ひょっとすると寝ていないのだろうか。アンナの目は少し赤くなり始めている。それともこれは涙のせいだろうか。

「リディアーヌ様。この症状はやっぱり……？」
「ええ。あの時と同じものでしょうね」
前回、誇張ではなく死にかけたあの病気。
熱によって体力が奪われるのではなく、体力そのものが奪われていくようなこの症状は、なるほど、致命的としか言いようがない。
エネルギーが足りていないのならひとまず補給しなければ。
俺はアンナに食事を用意してくれるように頼んだ。正直、食欲があるとは言えないが、食べやすい物を多めに持ってきてくれるように指示を出す。そうして用意されたリゾットやスープ、果物などを半ば無理矢理胃へ落とし込む。
椅子に座って食事をしているだけで疲れるような状態だったが、満腹になると少しは元気が湧いてきた。
アンナがほっと息を吐いて、
「栄養を摂れるのであれば大丈夫そうですね」
「そうね。あと一週間は生きながらえてみせるわ」
「冗談でもそんなことを言わないでください！」

悲鳴のような声に「残念だけど、本音なの」と静かに答える。

食べて治すのは基本だが、これはどう考えても普通の病気じゃない。本当に体力そのものが病気に食われていて、かつ、これからも食われ続けるのだとすれば、気力で持ちこたえられる時間はそう長くない。

「お医者様の手配は済ませてあります。ですから、負けないでください」

「もちろん。このまま黙って死んでたまるもんですか」

そうだ、こんな簡単に死ねるわけがない。

記憶が戻る前の俺だって一週間くらいは耐えたのだ。今の俺がもっと持ちこたえられなくてどうする。それに前回は治ったのだから今回だって望みはあるはず。

アンナが俺の傍にしゃがみこみ、またぎゅっと手を握ってくれる。俺は「ありがとう」と微笑んでから彼女に尋ねた。

「ねえ、ジゼルはまだ屋敷にいるのかしら？」

「いいえ。……ジゼル先輩は今朝から行方がわからなくなっています」

「でしょうね」

異変に気付いたのは早朝になって俺の容態を報告した後。警備兵の報告もあり、

メイド長が昨夜の俺の様子を聞こうとジゼルを呼び出して――そこでようやく彼女がいないことに気づいた。

二人部屋なので本来は同室の者が気付くはずだが、ジゼルの同室であるアンナは軟禁中で別の部屋を使っていた。

念のため屋敷内、および庭の捜索が行われたものの、ジゼルの姿は発見されず。

「代わりに、ゴミ捨て場からティーカップの破片が見つかりました。リディアーヌ様のお気に入りだったものです」

あの時俺が割ったものだろう。

また、俺の装飾品の中から小ぶりかつ高価なものがいくつか無くなっているらしい。状況から見てジゼルが持ち逃げした可能性が高く、騎士団にも通報済みだという。

俺は深いため息を吐いた。

「なにをやっているのかしら。……これ以上、罪を重ねても仕方ないのに」

「リディアーヌ様、それでは」

「ええ。昨夜は紅茶を勧められて、飲んだら急に強い眠気を感じたの。まずいと

思って音を立てたんだけど、上手く誤魔化された上に何かの薬を飲まされたみたい」

ジゼルは間違いなく、もうここには戻ってこないだろう。

彼女が殺しにくるとは思わなかった。

これまでの犯行から彼女を小物と判断し、人を殺す度胸はないと見誤った。女に苦しめられた前世でもなんだかんだ殺人に及んだ奴はいなかった。平和ボケした日本人の感覚と甘ったれたお嬢様の感覚から「更生してくれたら」なんて変な同情をしてしまった。

それにしたって「公爵令嬢の殺害」なんて罪を負うのは自ら破滅に向かうようなものだろうに。

「前回、そして今回と、リディアーヌ様が倒れられた原因は病ではなく、ある種の薬物と思われます」

お茶の時間になった頃、例の医師が診察にやってきた。

アンナを含むメイド数人、養母セレスティーヌ、さらに父である公爵までもが集

まって見守る中、彼は苦々しい表情で見解を述べた。
これにまず声を上げたのは父だ。
「使用人が毒を盛ったというのか!?　リディアーヌは我が家の大事な娘なのだぞ!?」
普段の穏やかな彼からは想像もできない激高ぶり。
掴みかからんばかりの剣幕に医師は怯える様子を見せながらも、しっかりとした答えを返す。
「リディアーヌ様の症状から見て、用いられたのはおそらく解熱剤です」
「解熱剤？」
「薬草や野菜など、自然物から取れる成分を用いて『身体を冷やす』薬です。魔法を用いて効果を高めたものもあります。通常は治療用ですが、過剰投与すれば熱を奪う毒になります」
熱が上がっているわけでもないのに冷やされた身体は急速にバランスを崩していく。
身体も平熱を保とうと熱量を上げるが、このために身体は大きく生命力――カロ

リーを消費してしまう。耐えられなければ待っているのは死だ。
　身体の大きい大人なら過剰投与になりづらく、通常は心配ないらしいが、子供に投与する場合は慎重な扱いが必要だという。
「液体を飲まされたというお話から、粉末を溶かして煮詰めていた可能性もあります。あるいは、先に紅茶を飲ませたこと自体、血行を良くするためだったのかもしれません」
「リディは治るのか!?」
「対処としては、薬の効果が無くなるまで身体を温め続けるしかありません。もちろん、食事を摂ることも有効です。身体を冷やさない程度に水分を取るのもいいでしょう。ただ、治るかどうかは薬の強さとリディアーヌ様の頑張り、そして運次第です」
　異常をきたした身体は抵抗力が落ちている。この状態で風邪など他の病気を併発するのは致命的としか言いようがない。
「……こういった言い方は良くないのでしょうが、リディアーヌ様を殺めるつもりで投与したのであれば、回復のしようがない量を用いたはずです。現在、こうして

気力を保っていらっしゃるだけでも幸運かと」

「先生。それなら、どうしてわたしは前回、助かったのでしょうか？」

医師の言う通り、今回の症状は前回よりおそらく重い。

前は徐々に弱っていき、やがて起き上がることもできなくなった。対して今回は一日目から起きているのがやっとだ。

医師はこれに投与のされ方が違った可能性――前回は少しずつ何度も投与されたのではないかという見解を示した上で、俺が助かった方法についても推測を述べた。

「件の薬――毒の対処としては風邪と同じものが有効です。つまり、熱。風邪と違い、病を吹き飛ばすのではなく薬効が薄れるまで『身体を温め続ける』ことが目的ですが。リディアーヌ様も前回、回復される前夜に高熱を経験していたはずです」

「確かに、その通りです」

俺は一晩中熱にうなされ、目覚めた時には良くなっていた。あの時は普通の病気だと思っていたのであまり気に留めなかったが……。

「リディアーヌ様は当時、衰弱しきって食事もできない状態だったはず。その状況から一気に回復するというのは自然な働きではありません。であれば、通常とは異

なる力が働いたのでしょう」
「そうか、魔法か……！」
理解の声を上げる父。
いや、そうか！　と言われても。
「あの、わたし、まだ魔法なんて習ってもいないのですが……？」
何か勘違いをされているのではと危惧したところで、
「初めての魔法を無意識に用いるのは、貴族の子供によくあることです。素質が表に出た証として、訓練を始める目安にされることも珍しくありません」
「なるほど。……では、わたしの場合もそうだったと？」
「おそらくは。火の魔法で体温を強引に引き上げ、併発した病ごと毒を吹き飛ばしたのではないかと。八歳というのはいささか早い年齢ですが……」
「きっとそうだろう。アデライドも火の魔法が得意だったからな」
目を細めた父が前妻――俺の母の名を口にする。
俺やアランを悲しませないように、そしてセレスティーヌへの配慮からか父からアデライドの名が出ることはほとんどない。しかし、彼の声には亡き妻への想いが

しっかりと滲んでいた。
　親が持つ属性が子供に受け継がれる可能性は高い。母親似である俺が火の属性を持っていても不思議はない。
　俺はぎゅっと手を握りしめて医師を見上げた。
「では、同じことをすればわたしは助かるのですね？」
　返ってきたのは深いため息。
「理論上はそうなります。……ですが、無理の利かない身体で魔法を使うのは非常に危険です。医者としては正直、お勧めできません」
「私も反対です。まだ訓練も受けていないのですよ？　調整を誤って全身に火傷を負う事だってあるのです」
　ひっ、と、アンナが小さく悲鳴を上げる。
　優しい専属メイドに俺は「大丈夫」と微笑んでから、養母を見た。
「お養母さまは、このことを前回の時点で先生から聞いていたのではありませんか？」
「セレスティーヌ？」

「……ええ、確かに私は知っていました」

僅かに表情を硬くしながら、それでも毅然と答える金髪の美女。

「ですが、確証はありませんでした。無意識の魔法行使は通常一度で収まるものですから、落ち着いてから教師を探しても間に合います」

毒の可能性を潰す方が先決。

メイドたちの荷物検査も実施し、怪しい薬物がないことを確認。使用人の外出先についても密かにチェックして薬屋や不審人物との接触がないかも確認していたという。

「確かに、理には適っていますね」

「リディ」

「お父さまだって、わたしに『お前は無意識に魔法を使ったのだ』とか『あれは病気ではなく毒だ』なんて言いづらいでしょう？　聞いたわたしが勝手に試して怪我をするかもしれませんし、メイドを全員クビにしろと騒ぐかもしれません」

「そ、それはそうだが」

父の視線がおろおろと宙を彷徨う。俺が心配で仕方ないらしい。仕事を放りだし

てここに来ている時点で親馬鹿である。

むしろ、セレスティーヌの方がよほど落ち着いている。

腹の底の見えない養母が本当は何を企んでいたのか、それはわからない。自分が手を汚さずに俺が死んでくれるならそれはそれで構わない、と思っていた可能性もある。

俺が死ねば愛娘（シャルロット）が長女になるわけだし、悲しみに浸る父を慰めた結果新しい子が産まれるかもしれない。……自分で言ってて「ふざけるなよこのクソ女」という気分になってきたが、まあ、もちろん証拠は全くない。

とりあえず、今言えることは「猶更死ねるか」だ。

「お養母さま。わたしの主観では食事や衣服、道具での対処ではおそらく足りません。ならばいっそ、危険な方法でも試してみたいと思います」

ちなみに、他人が温めるのは自分でやるよりもっと危険らしい。体温変化に合わせた微調整は本人でないと正確性を欠くし、他者へ内的変化を与える魔法自体がかなり困難な部類に位置するから、

「だが、リディ。火の魔法は本当に危ないのだ。女の子の身体に傷が残れば結婚に

も響くのだぞ」

「ご心配なく、お父さま。お母さまは火の魔法がお得意だったのでしょう？　なら、その娘であるわたしが、自分の身体くらい温められなくてどうしますか」

この言葉に全員が黙った。

父としては俺に死んで欲しくない。養母にしても別に悪くない話だろう。俺に死んで欲しいのだとすれば、死因は病気でも毒でも魔法の失敗でも構わない。

やがて、セレスティーヌはゆっくりと首肯して。

「わかりました。では、初歩的な魔法の扱い方をアンナに習いなさい。魔力の低い者から習う方が結果は小さくまとまるでしょう」

「ありがとうございます」

「……仕方あるまい。だが、セレスティーヌ。其方は情報を秘匿しすぎだ。後で詳しく話を聞かせてもらう」

「かしこまりました。申し訳ありません、旦那様」

これで、ひとまず方針は決まった。

二度目の不調に陥った時点で医師に治療法を問うつもりだった。こういう形に

なったのは予想外だが、ついでに魔法を覚えられれば幸運ともいえる。
「お願いね、アンナ」
見上げた専属メイドは緊張と不安からか蒼白な表情をしていたが、それでもきゅっと唇を結んで、決然と頷いた。
「リディアーヌ様に治っていただくため、精一杯務めます」
『わたしだって頑張るわ。生き残って、あのメイドにあっと言わせてやるんだから！』

【今回の登場人物】
◇リディアーヌ・シルヴェストル：主人公。八歳の公爵令嬢。前世の記憶あり
◇セレスティーヌ：シルヴェストル公爵の後妻
◇父　：王国宰相。娘に甘い
◇医師　：少なくとも知識は確か
◇アラン：公爵家長男

◇アンナ：リディアーヌの専属メイド
◇ジゼル：元公爵家メイド。逃げきれなければ死刑がほぼ確定

屋敷内の悪意 4

※いただいたご意見を元に「屋敷内の悪意 2」を若干修正しました

「魔法の使い方はとても単純です。必要なのはたった二つだけ」

医師を交えた話し合いの後、俺はいったん仮眠を取った。

起きた後はまた詰め込めるだけ食事を詰め込む。寒さと怠さが延々と抜けず、蓄積するストレスが気力を奪っていく。こんなもの、長く耐え続けるのは不可能だ。

目覚めていられる短い時間を使い、ベッドに寝た状態のままアンナから魔法について教えてもらう。

学園に通っていない彼女だが、魔法の使い方は親や家庭教師から習ったらしい。

「基礎くらいしかできないので恥ずかしいんですが……」と言うが、養母も言っていた通り、教える側が初歩しか知らなければ大きな事故も起きづらい。

「必要なことって？」

「はい。一つは自分の中の魔力を感じること。もう一つは想像力です」
アンナはコップを一つ用意すると、その縁に指を当てて「水よ」と唱えた。彼女の指先からビー玉ほどの大きさの水球が生まれ、ぽちゃん、とコップの中に落ちる。
「アンナは水の魔法が得意なのね？」
「属性があるだけで、魔力量は全然なんですけどね。もっと魔力があればお風呂の用意だって一人でできるのに」
手を伸ばし、アンナとは反対側からコップに触れる。
「水よ」と唱えると——当然、何も起こらない。
「言葉はあくまで想像の補助。属性も『どういった魔法が得意か』を表すものなので、他属性の魔法も使うことはできます。大事なのは魔法の結果を思い描くことと、必要な魔力を用意することです」
「わたしが水を出せなかったのは、どちらかが欠けていたから？」
「そうです」
こくん、と頷くアンナ。
内容は教本の受け売りらしいが、端的でわかりやすい。

「魔力を感じるのはとても苦労します。今までできなかったことをするわけですから。私が初めての時は何か月かかかりました」

その代わり、一度コツを掴めば驚くほど簡単になるという。自転車に乗れるようになるようなもの、と考えればいいだろうか。

要するに魔力とはゲームで言うMPだ。

魔法を使うには自分の現在MPを把握し、必要量を取り出さないといけない。調節が下手だと不要な高威力が出たり、逆に望んだ効果に届かなかったりする。

想像力――イメージの力も結果を大きく左右する。うっかり大爆発とか想像した日には大惨事だ。もちろん、相応の魔力が無ければ大事には至らないわけだが、だからこそ俺の場合は要注意。ぶっちゃけ八歳の身で一夜漬けするものではない。

『いいじゃない！　わたしは火の魔法が得意なんでしょう？　だったら、お母さまみたいに火の鳥や蝶を出してみたい！　あれはとても綺麗だったもの！』

こうなって大火傷するのが目に見えている。

それはまあ、俺だってわくわくしている。前世には魔法なんてなかったので、いかにもファンタジーしている力を自分が使えるなんて信じられない。

しかし、今必要なのは火の蝶を出すことでもファイアーボールをぶっ放すことでもなく、自分の体温を上げることだ。

そのためには魔力のコントロールが不可欠なわけで……。

「魔力を感じるにはどうしたらいいのかしら」

「人によって合っているやり方は違うみたいです。私は毎日瞑想していました」

「瞑想……!?」

「我が家には道具を用意したり、複数の教本を買うお金もなかったので……。でも、リディアーヌ様の場合は魔道具を使う方法もあると思います」

魔力を自動吸収してくれる高額な魔道具を用いれば体内の魔力移動を体感できる。我が家で言えばトイレとかだ。ただ、今の体調だとそこまで行くのも一苦労。

『でも、あの魔道具なら数えきれないくらい使ってきたじゃない』

何気なく受け止めていた感覚を強く思い出してみる。

身体から何かが吸い出される感じ。あれの大本はどこだったか。それを辿れば魔力の在り処を掴めるはず。俺はしばし目を閉じて意識を集中させて――。

「どうですか、リディアーヌ様……？」

「だめね」

息を吐いてアンナに答える。

詳細に思い出すのはやはり難しい。気怠さもあって曖昧な再現がせいいっぱい。健康体で何度も繰り返し魔道具を使えればもう楽できるのだろうが。

体温を高めるには魔力を全身に行き渡らせなければならない。俺が覚えているのは指に流れていく感覚だけだ。それをコントロールできるようにならなければ、

「……あれ？」

「どうしましたか、リディアーヌ様？」

不安そうなアンナの目を見つめて疑問を尋ねる。

「ねえアンナ。魔法って、要は『想像力によって望みを叶える技術』なのよね？」

「え？　ええ、それで間違いない……と思いますけど……」

「なら、魔力を操作する魔法だってありえるんじゃない？」

つまり、二段階のイメージをしてやればいい。

魔力を全身に行き渡らせるイメージ。身体を温める魔法のイメージ。これなら、魔力をはっきり知覚していない今でも無理矢理どうにかできるかもしれない。

俺の発言にアンナはぽかん、とした表情を浮かべた後、数秒してからはっと我に返って、

「無理です！　だって、魔力がわからないから苦労しているのに、魔力を操る魔法を使うだなんて……！」

「できるわ。きっと、わたしならできる」

確かに、普通の貴族なら絶対に思いつかない方法だろう。

一つに、高価な魔道具に触れていたこと。

一つに、目に見えない力――魔力や気を操る光景をマンガやアニメでたっぷりと目にしていること。流れを映像に置き換えられること。

両方があってこそ。魔力の操作ができないのに魔力が流れる感覚はなんとなくわかる、という逆転がなければ不必要な発想。

「アンナ。手、握ってくれる？」

「……はい」

コップが片付けられ、アンナの両手が俺の右手を包み込んでくれる。

温かい。冷えていく身体にはこの温もりがとても心地よかった。

「ありがとう」

微笑んでからゆっくりと目を閉じる。視覚がシャットアウトされたことで集中力が強引に引き上げられ、不調の時特有の浮遊感が余計な身体感覚まで忘れさせてくれる。

繋いだ右手だけに集中。記憶にある魔力の流れを光としてイメージ。指先に流れていくそれを分岐させ、左手にも流し込む。作ったイメージを壊さないように注意しながら分岐を増やし、光を全身へと行き渡らせて。

「っ、は……っ!?」

どくん、と、全身が脈打った。

「リディアーヌ様っ!?」

「だい……っ、大丈夫よ、アンナ。今のはただ『繋がった』だけ」

額に汗が浮いている。こんな寒い中でありがたいことだと思いながら、目を開いて笑みを浮かべる。

「二段階の魔法にする必要はなかったわね。魔力を動かしたことで感覚がわかったから」

「じゃ、じゃあ……!?」

「ええ。魔力がわかるようになったから、これで大丈夫」

付け焼刃なので時間が経てば感覚が戻ってしまうかもしれないが、今、この場で魔法を使う分には問題ない。

わかる。

自分の中にほんのりと温かい万能の力がたっぷりと蓄えられているのが。ずっとそこにあったはずなのに、今まで感じられなかったのが不思議なくらい自然に。はっきりと。ああ、今ここにいる自分は前世の自分とは別の生き物なのだとあらためて実感する。

そして――。

◆　◆　◆

思えば全てリディアーヌ・シルヴェストルのせいだ。

後ろ手に枷を嵌められ、足に重りを付けられ、捕らえられた時に着ていた町娘の

変装のまま、元シルヴェストル公爵家付きメイド――ジゼルは自らの境遇をあらためて振り返った。

子爵家の次女に生まれたジゼルはなかなか優秀な子だった。

家庭教師からは褒められることが多かったし、もっと褒められたくて努力もした。

『可哀そうに。長女に生まれていれば学園に行けたでしょうに』

だから、何気なく耳にした「自分に関する話」が初めは信じられなかった。

父に問いただせば返ってきたのは肯定。この家から通えるのは長男と長女、良くて次男までだと。次女である自分の席はないのでそこまで一生懸命に学ばなくても良いと。

せっかく優秀な子ならどこかの家に養子に出してもいい、もしくは普通に適当な家の行儀見習いにするか、伯爵当たりの愛妾にしてもらうのもいい、と。

告げられた言葉に絶望し、その絶望をバネに奮起した。

長男の席を奪い取るのはさすがに不可能。

なら、長女か次男から席を奪ってやると必死に勉強し、父から四人目として学園に通う事を許された。

泣いて喜んだその翌日、ジゼルは姉から囁かれた。

『もっとできの悪い妹だったら良かったのに』

昔は優しかった姉。彼女はジゼルにささやかないじめを繰り返すようになった。自分より優秀な妹と比べられるのが嫌だったのだと後になって理解したが、当時は意味がわからなかった。

父に告げ口をすれば我慢しろと言われ、諦めきれないでいると「もう少し利口な子だと思っていたが」と呆れられた。

それから、ジゼルは親を信用しなくなった。

姉のいじめに耐えながら「優秀で従順な子供」を演じ、学園に入学。しかし、学園での生活も家の中と大差なかった。

侮蔑。嫉妬。略奪。報復。打算。裏切り。

子爵家のジゼルが生きていくには上位貴族の派閥に入り、その上で目立たない有象無象を演じるしかなかった。家の中では優秀で姉に妬まれていたジゼルも学園では、貴族社会では取るに足らない小娘でしかなかった。

出しゃばれば嫌味を言われ、すれ違いざまに足を引っかけられたりドレスに水や

インクをかけられたり。次第に努力する意味がわからなくなり、そして気づいた。

――自分が上がるんじゃなくて、他人を落とせばいいんだ。

嫌がらせをされる側ではなくする側になればいい。

自分より弱い者を攻撃し、嘲笑し、派閥の威を借って成果を得る。試してみるとそれはとても楽しかった。これが貴族だと理解した。

積極的に媚びるようになってからは上役から守ってもらえるようになり、そこそこの成績で学園を卒業。しかも、王国の宰相を務めるシルヴェストル公爵の屋敷で働けるという栄誉を手に入れることができた。

『もしかしたら公爵の第二夫人に……？　それとも、ご子息のお相手になれるかも……！』

しかし、ジゼルを待っていたのは理想とはほど遠い現実だった。

『ねえ、あなた。お腹が空いたから何か食べる物を持ってきてちょうだい』

リディアーヌ・シルヴェストル。

公爵令嬢だというだけで偉そうにする愚かな子供。彼女は他の仕事中であろうと関係なく用を言いつけてきて、その上、仕事ぶりが少しでも気に入らなければ文句

を言う。ベテランのメイドに言いつけても「可哀そうな方なの」と流される。

期待した公爵や長男・アランの世話役は回ってこない。それならせめて次女のシャルロットを世話したかったが、それも公爵夫人からの許しが出なかった。

仕事を覚えるのに四苦八苦しながらリディアーヌの我が儘に振り回される日々。うんざりしたジゼルは強硬手段に出る。露見しにくい「毒にもなる薬」を苦労して調達し、令嬢の食事やお茶に少しずつ混ぜた。

少し苦しめばいい、くらいのつもりだったが思いのほか効いたので、いっそこのまま死んでくれればと思った。なのにリディアーヌは死なず、回復したと思ったら人が変わったようになった。

『あなたたちの名前、聞いてもいいかしら？』

名前を覚えられていなかったことよりも、今更名前を聞かれた事に腹が立った。苛立ったジゼルは後輩――家柄も年齢も経験も魔力も自分より下のアンナに仕事を押し付けた。これ以上関わりたくなかったからだ。

しかし、それからのリディアーヌは嘘のように優秀さを見せるようになった。使えると思った。

幸い投薬の件もバレていないようだったし、彼女に取り入って重用して貰えばいい。そうすれば公爵令嬢の庇護が受けられる。

そう思った矢先、あろうことかアンナが、リディアーヌの専属に指名された。

ありえない。

あいつには常識が通じない。あいつのせいで全てが狂った。あいつさえいなければこうはならなかった。上手く行っていたのに。せっかく苦労して生き方を学んだのに。

あの方でさえ自分とリディアーヌを比較してリディアーヌを選んだ。

学園では上手く行っていたのに。

「そうだ」

面会室の扉が開き、若い騎士に導かれるように一人の令嬢が入ってくる。深紅の髪と瞳を持った美しい少女。その傍には忌々しい後輩が控えていた。

「リディアーヌ・シルヴェストル。全部お前のせいだ。お前が全部悪いんだ」

ジゼルは、もしかしたら主になるかもしれなかった相手――今となっては憎悪しか感じないその少女を、きっ、と強く睨みつけた。

屋敷内の悪意 5

前世の記憶を取り戻してから初めての「お出かけ」先は騎士団の詰め所になった。

『もう！　このところ全然羽根を伸ばせていないわ！』

死にかけて、勉強して、また死にかけて……考えてみるとろくな目に遭ってない。

アンナの手を借りて馬車を降りた俺は、陽光を一度見上げてから騎士団の詰め所へ入った。同行してくれた両親には面会室の前で待っていてもらう。ジゼルと直接話したい、と無理を言って了承してもらった。

纏うのは漆黒ベースの外出用ドレス。

敢えてだめになったドレスに近いものを選んだ。喪服を連想させることで「殺せなくて残念だったな」と伝える意図もある。

「拘束は行っておりますが、念のため捕虜に近づきすぎないようご注意を」

「わかりました。ありがとうございます」

護衛兼ジゼルの監視として騎士が二人、それから会話の記録係が立ち会う。

外にいる両親にも話の内容自体は聞こえるだろう。

「久しぶりね。元気にしていた？　……わたしは見ての通りだけれど」
捕まってから今日で三日目だったか。
小さなテーブル越しに対面したジゼルは少し疲れた様子だった。風呂にも入っていないからか髪は艶が消えてしまっている。それでいて目だけはギラギラしており、会うなり俺を睨みつけてくる。
「なんで死んでないのよ!?　十分な量を盛ってやったのに」
「さあ、どうしてかしら。運が良かったからじゃない？」
「ふざけるな！　……くそっ、こんな事なら直接殺せば良かった！」
殺さなかったのではなく殺せなかっただけだろうに。
毒殺を選んだのは騒がれたら厄介だから。部屋の前に警備兵が立っていたから暴力沙汰は躊躇する。本格的な毒を選ばなかったのはバレるのを恐れたから。
あまりにも酷い物言いに冷ややかな感情を抱いていると、アンナが進み出て声を上げた。
「ふざけているのは先輩の方です！　人の命をなんだと思っているんですか!?」
「……はっ」

ジゼルは一瞬目を丸くしたものの、すぐに冷笑を浮かべた。
「私達をさんざんこき使ったと思ったら急に人が変わったみたいになって、じゃあ取り入ってやろうかと思ったらその前にあんたみたいなのを専属にして！　そのあんたを遠ざけたのに全然私を気に入ってくれない！　それどころか私を疑ってくるような奴、死んで当然でしょ!?」
「なるほど。それが理由だったのね」
俺が聞きたかったのはまさに犯行動機だ。
推測はできた。しかし、本当の理由は聞かなければわからない。一縷の望みなんて言うほどではないが、どうしても確かめておきたかった。
確かに可哀想な部分もある。巡り合わせも良くなかった。後輩が重用された焦りもあっただろう。
だけど。
俺はジゼルを真っすぐに見つめる。八歳の小娘なんて普通なら怖くないはずだが、殺し損ねた相手だからか、ジゼルはびくっと身を震えさせた。
「ジゼル。あなたがこうなったのは、全部あなた自身のせいよ」

「……っ!?」

紺色の瞳に強い光が宿る。

手枷を嵌められた両腕が暴れ、蹴り上げようと持ち上げた足が重りによって引き戻される。メイド程度の筋力では何もできない。

次いでジゼルが選択したのは身体を介さない攻撃だった。交わされた視線を通じ、どろどろとした魔力が流れ込んできて俺の心に触れる。これが心に影響する魔法なのだろう。しかし、それは僅かな悪寒だけを俺に残して何の影響も出すことなく消失する。

魔力を有する人間は魔法への抵抗力を持つらしい。また、心の魔法は本人の意に沿わない内容ほどかかりにくい。ジゼルが平民相手に半端な命令を実行させたのはそれが理由だ。

ここで騎士が動き、ジゼルの身体を床に伏せさせる。顔だけを上げてなおも睨みつけてくる彼女を俺は見返して、

「わたしが死にかけたのもわたし自身のせい。確かにわたしは嫌な子供だった。だから変わろうと思った。二度目の毒殺だって不注意が原因だしね。いい勉強をさせ

てもらったわ」

　でもね、と、僅かな間を置いて、

「そんなわたしにアンナは優しくしてくれた。人に仕事を押し付けたりしないで、むしろ熱意を持って仕事に取り組んでいた。アンナを選んであなたを選ばなかったのはそれが理由よ」

「違う！　お前さえいなければ、お前があそこで死んでいれば！」

　確かに。一回目で死んでいれば、俺はきっと病死として処理された。

　毒殺の可能性があったとしても確証は得られない。セレスティーヌなら真相を突き止めた上で捨て置いたかもしれない。

　俺は頷いて、笑った。

「残念。運が悪かったわね？」

「殺してやる！　殺してやるっ!!　リディアーヌ・シルヴェストル!!」

　ジゼルの眼前に水でできた針が複数本生成され、それが見る間に氷へ変わる。射出された鋭利な針は騎士の腕に阻まれ、金属の籠手を貫けずに砕け散った。再度、今度は倍の数の針が生み出されるも、それが放たれる前に、だん！　と、室内に

強い衝撃音が響いた。

俺を守ったのとは別の騎士がジゼルの顔を石の床へ叩きつけたのだ。

「……余計なことをすればその分だけ罪が重くなるぞ」

「っ、あはは！　どうせ死刑なんだから同じことでしょうに！」

「シルヴェストル公爵令嬢、あまり罪人を刺激されませんよう」

静かな忠告に俺は「申し訳ありません」と頭を下げてから、俺は騎士へ尋ねた。

「ジゼルは死刑になるのですか？」

「刑はまだ確定しておりません。先の攻撃も含め、罪状を列挙した上で判断されることでしょう。……もっとも、公爵令嬢の毒殺を企てた時点で死刑が妥当でしょうが」

「そう、ですか」

唇から漏れたのは平坦な相槌。死刑と聞かされて俺が思ったのは「ああ、そうなんだ」だった。殺されかけた怒りはある。知り合いが死ぬという喪失感、可哀そうだという想いもある。その一方でただ冷静に「ジゼルはそれだけのことをしたのだ」と認識している自分がいる。

立場と状況が違うとこうも変わるものか。

前世でもジゼルみたいな人間はたくさん見た。彼女たちも人を騙し、利用し、時には理不尽な恨みをぶつけていたが、はっきりと悪と断じられた者はほとんどいなかった。

悪い女が悪いと認められ、報いを受けることもあるのだと、当たり前の実感をようやく抱くことができた。

『本当に当たり前ね。まあ、わたしだって人のことは言えないわけだけど……』

めぐり合わせが違えば、ジゼルの立場に俺がいたかもしれない。

悪いことはしてはいないのだとあらためて思う。その上で、ジゼルはこれでいいのだろうか？　と疑問に思った。

別に俺は善人ではない。俺を殺そうとした奴なんて死んでも別に構わない。ただ、なんとなく座りが悪い。自分のせいで人が死ぬのが嫌だというだけかもしれないが。

「公爵家には相応の賠償金が支払われるでしょう。その請求は彼女の実家へ送られます。支払いきれなければ借金を課すか、家自体が取り潰しになります」

「いい気味だわ。お父様やお兄様達が私のために苦労するなんて。ああ、お姉様の嫁ぎ先にまで影響が出たら最高。賠償金はできるだけ多めでお願いできないかしら」

元メイド、現犯罪者の女はけらけらと壊れたように笑っていた。

見るに堪えない。魔法なんかよりもよっぽど精神が汚染されそうだ。立ち合い人に過ぎない騎士たちでさえもあからさまに顔をしかめる。

「……ご令嬢。刑罰の多寡は公爵家の意向にも考慮されます。どうか公爵様へお伝えくださいますよう」

「あら？　お優しいお嬢様がご両親にお願いして、私の命を助けてくれたりするのかしら？　……ああ、どうかお助けくださいリディアーヌお嬢様。ほんの出来心だったんです。これからは心を入れ替えて働きますので許してください、なーんて」

「リディアーヌ様、もう行きましょう」

アンナはいつの間にか完全に涙ぐんでいた。

怒りや悲しみが押し寄せてきてどうしようもなくなったのだろう。必死に涙を

拭いながら服の袖を引く彼女をそっと支えながら、最後に少しだけメイドに――いや、元メイドに意地悪をする。

すっと向けた指の先から火の粉が舞い、一羽の蝶となる。

火の粉の鱗粉を散らしながら羽ばたき始める蝶を見て、ジゼルが目を見開く。

「な、何よそれ!?　どうしてあんたがもう魔法を!?」

「言ったでしょう？　運が悪かったわね、って」

一直線に飛んでいく蝶。

悲鳴を上げて暴れる罪人を、騎士は困惑げな表情を浮かべながらそれでも押さえつけていた。上位者から下位者へ、被害者から加害者への私刑はある程度見逃されるらしい。もっとも、小さな蝶が一羽留まった程度ではその部分が軽く火傷する程度だろうが。

それが目の前まで飛んで来るのはかなりの恐怖だったかもしれない。

蝶は、ジゼルに触れることなく空気に溶け、消えた。

「本当にやると思った？　残念。お母さまの魔法を穢したくないし、それに、一羽だけ舞わせてもつまらないものね」

言うだけ言って面会室を後にする。

外に出るとすぐ、俺は冷気と熱気を同時に感じた。表情を保ったままプレッシャーを放つセレスティーヌと、今にも壁を殴りつけそうな父。特に父の方は怒りが収まらないようで、帰りの馬車が走り出した途端に吐き捨てるように文句を言い始めた。

「愚か者が！　いっそ私が斬り捨ててやりたかった！」

「お、お父さま。お気持ちはわかりますが、それはさすがに問題になります」

「リディアーヌの言う通りです、旦那様。被った心労の分、賠償金に色をつけていただけば済む話ではありませんか」

いや、セレスティーヌの言っていることも相当ひどい。

損害賠償を迷惑料込みでたっぷり払ってもらうからな、とかどこの悪者だって感じである。

もちろん、切り裂かれたドレスの代金、新しいメイドを雇って教育するための手間賃、俺の治療にかかった諸経費、割れたカップの代金、盗まれた品を買い戻す（あるいは新しい物を買う）費用等を請求するのは当たり前。

賠償額はそのまま罪の重さをも表すが、本人が死刑では支払うのは実家だ。

なんとなく、すっきりしない。

一族に連帯責任を科す意味はわかる。子供の罪が家族の罪になるならば教育・躾けはより徹底される。苦境に立つ家を目の当たりにした他家もまた自分たちの身の振り方を改めるだろう。

でも、どうせなら、

「お父さま、お養母さま。賠償金を本人に負わせることはできないでしょうか？」

「本人に？　あの者は死刑が当然だ。個人の資産もたかが知れているだろうし、とても払いきることはできないぞ」

内定段階とはいえ俺は王子の婚約者だ。王家への叛意ありとみなされ家族が連座となってもおかしくないくらいだという。

「でしたらなおさら死刑ではなく、一生かけて償わせてはいかがでしょうか」

「あの女の平民降格は確実だ。性根の腐ったあやつを生かしておけば当家が逆恨みを受けかねん。それに、女が身一つで稼げる額ではなかろう」

「だからこそです。賠償金は一度実家に払っていただき、ジゼルにはそれを借金として背負わせます。こうすれば、実家は銅貨一枚でも払わせようと躍起になるで

しょう？」

当然、ジゼルが何かしでかせば今度こそお家取り潰しの危機だ。必要のある時以外は監禁レベルの扱いでも何らおかしくはない。

ここでセレスティーヌが「なるほど」と頷いた。

「家族さえも敵に回しながら一生をかけて償うことは死よりも重い罰、ということですね。助命する以上、賠償金の増額など何らかの調整は必要になるでしょうけれど」

「無論、自害すれば支払いからは逃れられるが、その場合は『死をもって罪を償った貴族』ではなく『罰から逃れ死を選んだ罪人』となるわけか。……考えようによってはなかなかに酷だな」

「それでも命は助かります。死にたくないと思えば縋りつくでしょう。死んだ方がマシだと自ら命を絶つのであれば、その時はもう、わたしの知ったことではありません」

しばし、全員が黙り込んだ。

馬の足音、車輪の立てるがたごとという音だけが響き、

「慈悲深い公爵家の長女は己の命を狙った使用人に対しても寛大な処置を望んだ。元使用人は命を救われる代わりに重い借金を背負い、子爵は彼女の監督を徹底しなければならない。……単純な減刑ではなく賠償金の追加と合わせて嘆願することで、減刑という印象を回避しながらリディアーヌの存在を主張できるかもしれませんね」

「……そうだな。悪くない。八歳にして元使用人の死を望んだ無慈悲な令嬢、などという風評をリディに背負わせたくはない」

両親は俺の意見を考慮すると言ってくれた。

もちろん、要望はあくまで要望であって必ず通るとは限らない。それでも父は宰相という立場であり国王にすら顔が利く。無茶な願いでない以上は十中八九通ることが予想された。

これにはアンナもほっとしたようで、

「リディアーヌ様は、ジゼル先輩を助けようとしてくれたんですよね？」

「……そうね。擁護の余地があるのなら、その方がいいと思っていたわ」

俺は言葉を濁しつつそう答えるのが精いっぱいだった。

慈悲深いなんて嘘だ。俺はただ甘かっただけ。同じことが次に起これば、きっと俺は容赦なく相手に罪を突きつける。改心の余地など考えずにそれを償わせようとするだろう。

「リディアーヌ」

「お姉様」

屋敷に戻ると、アランとシャルロットが玄関まで迎えに来てくれた。二人とも心配してくれていたようなので、無事に話が終わったことを伝える。安心したような表情。これで、俺が倒れたことに端を発する一連の事件はひとまず解決と言っていいだろう。

と、そこでセレスティーヌが俺を呼び留めた。

「リディアーヌ」

「？　なんでしょう、お養母さま」

振り返った俺は、その場にしゃがみ込んだセレスティーヌにふわり、と抱きしめ

られた。

「……え？」

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

百合の花か何かの香り。ぎゅっと抱き寄せられ、俺の小さな身体が養母の身体へ服越しに触れる。なんだこれ。貴族は親子であってもあまり身体的接触を行わない。まして、俺がこの養母に抱きしめられるなんて、下手をしたら初めてのことだ。

混乱したまま俺が硬直していると、耳元で優しげな声がする。

「よく頑張りましたね。あなたが生きていてくれてよかった」

『な、なによそれ！　騙されないで！　絶対何か裏があるんだから！』

内心では反抗的な想いもあったが、一方で無意識の部分からは切ない想いがこみ上げてくる。

実母アデライドとは匂いも感触も違う。それでも、母親に相当する存在から抱きしめられたのは数年ぶりのこと。八歳に過ぎないリディアーヌにとっては永遠とも呼べる長さであり――瞳からは涙がこぼれ落ちた。

アンナから抱きしめられた時も嬉しかったが、彼女との関係はせいぜい姉妹だ。

大人の女性に、母に抱きしめられるのはまた別の感慨がある。
とはいえ恥ずかしいし、素直に嬉しいと認めたくもない。
「お養母さま。わたしは、あなたが嫌いです」
俺はセレスティーヌの胸に顔を埋めると、涙と上ずった声を隠した。
「ええ、そうでしょうね」
二人目の母は「知っています」とばかりに答え、その手のひらで俺の紅の髪を優しく撫でて、
「それでも構いません。それでも、貴女と私は母娘なのですから」
血の繋がらない母娘の抱擁はしばらくの間続けられた。
当然、その姿は兄妹にも見られていた。顔を上げた時にはさっと目を逸らされてしまったので俺は気づくことができなかったが――俺の養母の抱擁を、義妹は目を丸く見開いたまま複雑な表情で見つめていた。

閑話

公爵令嬢の休日

『やり方を変えただけよ！　あの女は変わらず性悪だわ』

あの後。

抱きしめて褒められたくらいで「お養母さま大好き！」となるかといえば、もちろんそうはならなかった。

今まで遠ざけられていたことに違いはない。

優しくなったのは俺が有用だと判断したからだろう。セレスティーヌがどこまで知っていて何を狙っていたのかはわからない。ただ、兄妹の前で娘だと宣言したのは、これからはアランたちと同等に扱うという意思表示と見ていいはずだ。

そして実際、その日から俺たちの距離は近づいた。

うららかな日差しが降り注ぐ午後、公爵家の庭にある東屋に紅茶の香りが漂っていた。

円形のテーブルにはお菓子や軽食の載ったスタンドと、人数分のティーカップ。四方に配置された椅子にはそれぞれ家族が腰かけている。

当主である父は多忙を理由に不参加。当人は妻や子供と交流を持ちたがっているものの、甘い物があまり得意でないためお茶会にはあまり寄り付かない。

そういう俺も諸事情からしばらく参加していなかったのだが――。

「リディアーヌが参加してくれるのはいつ以来でしょうか」

「そうですね。こうしてお茶を楽しむのも随分久しぶりな気がします」

「お姉様が参加してくださって嬉しいです。最近はお母さまと二人のこともありましたから」

今回はセレスティーヌのたっての希望ということで参加を表明した。

席順は時計回りに養母、シャルロット、俺、アラン。一番顔を合わせやすい位置に指定され、のっけから声をかけられるという時点でこれまでのお茶会とは違って

いる。

　穏便に話を合わせれば、シャルロットも明るく声を弾ませた。ここだけ見ると華やかな女子会である。実際は義妹以外、腹に思惑を抱えているわけだが。

「母上。僕は不参加でも良かったのでは」

　姉妹に養母。給仕として控える複数人のメイドに囲まれた黒一点のアランはどうにも居心地が悪そうだ。

　十歳ともなれば性差にも意識が向き始める頃。

　後継者教育も既に始まっているため、女子に交じって遊ぶのは恥ずかしいのだろう。男には男の流儀があるのだ。

　しかし、そんなアランをセレスティーヌはやんわりと窘める。

「あら。お茶会に慣れることも勉強のうちですよ。年頃になれば女性からお茶に誘われることもあるでしょう？」

「確かに、それは慣れないと大変そうですね」

　苦笑しつつも頷く兄。父に似た深い色の瞳が「大丈夫かい？」とばかりにこちらへ向けられてくる。

俺はくすりと笑って「お兄さまこそ」と仕草だけで答えた。
「公爵家に相応しい結婚相手が見つかるといいですね、お兄さま」
「自分は決まっているからって肩の力を抜くつもりかい、リディ？」
「リディアーヌはその分、相応しいと思われる努力をしなければなりませんよ」
「責任重大ですね」
「お姉様でしたらきっと、そつなくこなしてしまうと思います」
今日はジゼルとの面会を終えてから最初の休日。
病床から復帰したと思ったらまた寝込むことになった俺には貴重な休息である。勉強が滞っているのに全く羽根を伸ばせていない。やけ酒というわけにはいかないので、せめてお菓子くらいは楽しませてもらわないとやってられない。
前世でも甘い物は好きな方だったが、今は女子の習性かはたまた単に好みの問題か、余計に甘味を美味しく感じている。
かといって我が儘放題だった頃は食事に支障をきたすほどだったので明らかにやりすぎて――『なによ！　そのくらいいいじゃない！』。
大きな白いテーブルの上にはアフタヌーンティー用のスタンドが用意され、そこ

にスコーンやチョコレート、サンドイッチなどがたっぷりと載せられている。基本的に下から取るといったルールはあるものの、好きなだけ食べ放題である。

ちなみに食べたい物は自分で取るのではなく使用人に取ってもらうのはマナー。アンナが「どれにしましょう？」と楽しそうに皿へ取ってくれた。いっそのこと一緒に食べたいくらいだが、さすがにそういうわけにはいかない。

「リディアーヌ。チェスの練習は続けているのですか？」

「ええ。殿下からもお見舞いの品とお手紙をいただいてしまいましたし、怠けるわけにはまいりません」

リオネルから贈られてきたのは「これでも食べて元気を出せ」といった感じの、まるまる太った鶏だった。幸い、生きたまま運ばれてきたので、回復して食欲が戻った後に美味しくいただいた。

この国（この世界？）の食文化は十分に発達していて、サンドイッチもフライドチキンもシチューもグラタンも、ハンバーグだって存在している。実に都合のいい話で、お陰でそこまで食に不自由はしていない。欲を言えば日本食や中華やカレーがないことだが、さすがにそれは望み過ぎだ。どうしても食べたくなったらシェフ

に相談して自力開発を試みようと思う。
　話が逸れたが、リオネルのところへも近日中に訪問する予定だ。公爵令嬢と王子なので、会いに行くにも互いに予定を合わせたりで結構大変だったりする。
「お兄さまもチェスの勉強をされているのでしょう？」
「ああ。男子はお茶会の代わりにチェスや狩りをするものだからね」
　付き合いのためにもある程度の腕前が必要、というわけである。チェスは令嬢にとっても教養の一つだが、女子の場合は「最低限ゲームが成立していればOK」程度なのに対し、男子だと「チェスが下手な奴は頭の出来も大したことない」くらいの厳しさになる。
「リディも練習しているなら、今度対局しようか」
「いいですね、是非」
「そ、それなら私もお二人と一緒にチェスがしたいです！」
　シャルロットが可愛らしく参加を表明したため、三人で練習をすることになった。普段は食事の時くらいしか顔を合わせないが、どうせならこういう交流も必要だろう。時間を捻出するためにもより一層、勉強を頑張らないといけない。

「ところで、お姉様達は普段どのような勉強をされているのですか？」
「わたしはシャルロットとあまり変わらないんじゃないかしら」
教師の大部分が同じ人だし、歳が違うだけでカリキュラムに大差はない。
強いて言えば王族との婚約が決定した関係で宮廷関係の知識を先取りして詰め込まれていることくらいか。
一方、男であるアランの授業内容はかなり違った。ダンスや礼儀作法は当然男性用だし、アランは既に魔法の練習も始めている。それから宰相の仕事に関する予習に加え、男子の嗜みとして剣の稽古なども盛り込まれているらしい。
宰相である父も身体を鍛えているように、剣術は貴族男性にとって必修科目。
騎士になったりしない限り戦う機会はそうそうないが、いざという時に自衛できるようにするためにも公の場において成人男性は帯剣するのが基本だ。
「剣術ですか。……格好良さそうで憧れますね」
「リディ。それはひょっとして、自分でも習いたいという意味かい？」
「そうなのですか、お姉様？」
「リディアーヌ。貴女の場合は他に学ぶべきことがたくさんあるでしょう？」

はっきりと何か言う前に総出で「何言ってるんだお前」と言われてしまった。
「で、ですが、自衛のためなら女性も覚えた方がいいではありませんか」
「ドレス姿のまま帯剣するのは難しいですし、剣を握って指が太くなっては男性に嫌われるかもしれません。学ぶにしても身体が出来上がった後、嗜み程度にするべきでしょう」
騎士団には少数ながら女性がいて要人護衛に役立っているが、それはあくまでも例外。
公の場において婦人は男性に守られるのが当たり前だという。まあ、身体能力からして劣っているのだから妥当ではある。
剣術にはそこはかとないロマンを感じたのだが、少なくとも成長するまではお預けされてしまった。これは成長したらしたで「はしたない」とか止められそうな気がする。
「ところで、お養母さま。魔法の勉強はまだ始められそうにはありませんか？」
魔法で体温調節する、という荒業を用いてジゼルの毒を乗り切った俺。
晴れて魔法を使えるようになったのだが、練習については「危険だから」と禁じ

られているのが現状だ。アンナを教師としたのはあくまで非常手段。本格的に学ぶのであればきちんとした教師に依頼しなければならない、というのがセレスティーヌの言い分である。

既にアランが師事しているのでは、と思ったが、属性――得意な魔法に応じて教え方も変わってくるので、俺とアランでは別の教師が必要らしい。

しかし、どうせなら早く練習したい。

昼間、照明の魔道具を意味もなく点灯させてみたりして感覚の維持には努めているが、魔道具の扱いは自由に魔法を使うのとは少し気分が違う。

「ええ。伝手をあたっている最中です。すみませんが、もう少し待ってください」

「そうですか……わかりました」

あっさりとした返答に俺は仕方なく引き下がる。

セレスティーヌがどんな教師を見つけてくるかで彼女の狙いも少しは読めるかもしれない。

お茶のお代わりを何度か挟み、用意されたお菓子がだいぶ少なくなったところでお茶会はお開きとなった。家族たちはそれぞれに使用人を伴って立ち上がり、俺もまたアンナと共に東屋を離れる。せっかくなので少し散歩していこうと思い、遠回りする道を選んだ。

ついでに世間話としてさっきの話を続けてみる。

「魔法の勉強ってそんなに属性が大事なのかしら？」

「えっと……そうですね。魔法の使い方というよりは性格の問題かもしれません」

「どういうこと？」

「なんでも、得意な属性が同じだと性格が似通ることが多いらしいです」

尋ねられたアンナは少し考えるようにしながら俺に教えてくれた。

「例えば、アラン様は公爵様と同じで土の属性ですよね？　土属性を持つ方は穏やかで堅実な性格であることが多いそうです」

「なるほどね。お父さまとお兄さまにぴったりだわ。……じゃあ、アンナの水属性は？」

「え？　ええと、その、清らかで柔軟な性質を持つことが多いとか……」

「ぴったりじゃない」

笑顔で見上げると、アンナは「恥ずかしいです」と目を背けてしまった。

くすくす笑いながら、俺は火属性について尋ねるのを止めた。聞かなくてもだいたいわかる。まあ、そうすると優しかった俺の母が火属性なのが「？」なのだが、要は血液型とか星座みたいなもので、必ず当てはまるわけではないのだろう。

「ですから、同じ属性の方が魔法を教えやすいんだそうです」

「そう言われると納得するしかないかもね」

ちなみにセレスティーヌは光の属性らしい。似合わない気もするが、この「光」は神聖という意味ではなく文字通りの光だ。光のない状態、すなわち闇も司っているので――うん、案外似合っている。

うんうんと勝手に頷いていると、注意散漫になっていたせいで、とん、と、向こうから来た誰かにぶつかってしまった。

「ごめんなさい、前を見ていなかったから……」

「いや、こっちこそ申し訳――ああ、なんだお嬢様か。散歩かい？」

「ヤンさん、ごきげんよう。ええ、お茶を飲んだ帰りに少しね」

相手が俺だと分かった途端、丁寧な口調を崩した人物は、屋敷で庭師をしているヤンだ。初老と言っていい年齢だが足腰はしっかりしており、職人らしく頑固なところと、気に入ったものに入れ込む性質がある。

普段は厳めしい顔に笑顔を浮かべ、彼はしゃがんで頭をわしわしと撫でてきた。

「そうかそうか。いや、しかし、日に日にアデライド様に似て来るなあ。このまま美人に育つんだぞ」

「もう、ヤンさん。いつもそればかり言っているわ」

「はっはっは！　悪い悪い。お嬢様はアデライド様によく似ているが、性格の方はじゃじゃ馬だからなあ」

「あ、あの、ヤンさん。リディアーヌ様に手荒な真似はあまり……」

俺たちの傍でアンナがおろおろとしている。ヤンは平民。普通なら公爵家の長女にこんな真似はしないのだが、

「いいのよ、アンナ。この方がわたしも話しやすいもの」

「いい性格になったなあ、お嬢様。生意気なのは相変わらずみたいだが」

「ありがとう。ヤンさんこそ、レディの扱いを勉強した方がいいんじゃないかしら

？」

当の俺が許していること、俺の母が存命だった頃からの古株であることなどからこうした振る舞いを許されている。

俺としては母を知っている人間との会話は貴重だし、男と気兼ねなく会話するのも楽しい。自分はお嬢様らしくしないといけないのは不満だが、セレスティーヌとの会話のように言葉の裏を読まなくていいだけでかなり気楽なのだ。

ヤンとは母が亡くなってから疎遠になっていたものの、前世の記憶を取り戻し、庭を散歩するようになってからまた仲良くなった。母、アデライドのことを大変気に入っていたらしく、その娘であり母親似の俺のことも可愛がってくれている。

「ヤンさんは植え込みの剪定をしていたのかしら」

「ああ。見ていくかい？　なかなかの自信作だ」

「ええ、是非見せてちょうだい」

せっかくの休日。俺たちはしばし、ヤンの話に付き合いながら彼の作品をのんびり眺めた。

第一章：カウンター悪役令嬢への道

公爵家のお仕事と公爵令嬢

「おはようございます、リディアーヌ様！」
「おはよう、アンナ。今日は一段と気合いが入っているのね」
「もちろんです。だって、採寸ですから！」
お茶会から三日が経った週の中日。
通常なら行われるはずの授業は全て休みとなり、代わりに大きな予定が入っている。アンナなどは前の日から楽しみにしており、当日の朝に起こしにきた時にはもう満面の笑顔だった。
反対に俺は少々憂鬱な気分。
可能なら逃げ出したいと思いながら身支度を済ませ、ドレスに着替える。今日に限っては好みや気分動きよりも脱ぎ着のしやすさが重要であり、前もって纏う衣装

を決めてあった。
　着替えが終わったら普段よりもやや早い時間に食堂へと向かう。
「おはようございます、お父さま」
「おはよう、リディ。なんだかんだ言いながらやる気じゃないか。やっぱり女の子は装うのが好きなんだな」
　父に挨拶をしたら不本意なことを言われた。そんな風に見えるだろうか、と、アランに視線を送ると苦笑を返されてしまう。
「お父さまもお兄さまもひどいです。わたしの都合で迷惑をかけられない、と、気を張った結果だというのに」
「いやいや、やる気があるのは悪いことじゃないぞ？　我が家の娘としてお洒落は大事だ」
　今日は季節に一度行われる採寸。業者――贔屓にしている商会と、商会が抱える職人たちが屋敷にやってきて新しい服や装飾品のための相談を行う日だ。
　季節一つ分をいっぺんに注文するので人も時間もたくさん必要になる。それでも業者を何度も呼びつけるよりはマシ。足りない分は後から買い足すこともできる

が、基本的にはここが大きな勝負となる。
採寸に参加するセレスティーヌとシャルロットも普段より地味めの衣装を纏い、早めに食堂へと到着している。傍に控えるメイドたちもどこか熱気を放っているような気がした。
「お兄さまたちは気楽でいいですね。わたしもそっちに交ざりたいです」
「男の服は選びやすいからね。リディアーヌは気兼ねなく楽しんでくるといいよ」
父と兄はこの採寸には参加しない。別日に少人数でささっとサイズを計測し、御用達の職人にさらっと要望を伝えて終わりらしい。男の服なんてそんなものである。無難な色と無難なデザインでも特に問題ない。ある程度歳が行くと好みもあまり変化しなくなるし。
早めに食事を済ませようとする女性陣に対し、出勤時間まで余裕のある父は穏やかに笑って、
「公爵家にとって服飾は重要だ。遠慮せず欲しい服を注文するように」
「かしこまりました、お父さま」
父が言ったことは公爵家の領地とその産業に関係がある。

我が家の本家筋は王都に屋敷を構えて生活しているが、その一方で、王都から馬車で三日はかかる距離に広い領地を持っている。

主産業は綿花の栽培、および羊の飼育。

国内で作られる服の多くが公爵領で生産した綿と羊毛、皮を材料としている。そのため、服飾系の商家や工房とは繋がりが深く、服の売れ行きが家の名声・財政にも関わってくる。公爵家の女がどんな衣装を纏うかによって流行が動くことさえ珍しくないらしい。

ちなみに公爵領の運営は分家筋が行っており、セレスティーヌはもともと父の従兄弟――つまり俺の親戚に嫁いだ女性だったらしい。

「でも、お父さま？　実は心の中で『女の買い物は長いからな』って、うんざりしていたりはしない？」

「な。……いや、ははは。そんなことはないぞ？」

「旦那様？」

「な、ないと言っているだろう、セレスティーヌ」

俺も公爵家の女としてお洒落には手を抜けないらしい。

楽で羨ましいので少しばかり父に意地悪をしてしまった。まあ、ファッションセンスに関しては俺の女性部分に任せた方がいいだろう。金に糸目を付けず、女の子らしい奔放さで服を買いこんでいたという意味では、以前のリディアーヌ・シルヴェストルは優秀だった。

まあ、別に二重人格というわけではないので、女の本能を解放した分だけ男の理性が揺さぶられるのも事実なのだが。

「この度はご用命、誠にありがとうございます。再びお目にかかれましたことを大変嬉しく存じます」

「貴女方の腕は信頼しています。前回のドレスも見事でした。今回も私達の目を楽しませてくれることと期待しておりますね」

朝食を終えて一休みしたところで、俺たちは大広間にて御用達の商人・職人様ご一行様を出迎えた。

我が家からはセレスティーヌ、俺、シャルロットにそれぞれの専属、応援に駆り

出された一般のメイドたち。相手方は値段交渉やアクセサリーの抱き合わせ販売――もとい提案をしてくれる商人に服のデザイン画を描くための絵師、採寸および技術的な相談をするための職人たち。

商人には男が多いものの、それ以外はほぼ全員が女性。広間にはなんとも華やかで、ある種不思議なムードが広がっている。

「今回は秋用のご注文ということでよろしいでしょうか？」

「ええ。新しい技術やデザインなどがあればそれも教えていただきたいです」

現在は春が後半へと差し掛かった頃。屋敷には夏用のドレスが着々と届いてクローゼットに収められていたりする。冬用だろうと夏用だろうとドレスには違いないのだが、生地の厚みや季節らしいデザインもあるし、流行は変わりゆくものなので同じ品をずっとは使えない。

特に俺やシャルロットは育ちざかりなので成長に合わせたドレスが必要だ。去年の品で使える物は手直しするにせよ、結構な量が必要になる。

「では、さっそく採寸から始めさせていただきます」

合図と共に広間から男たちが出ていく。

商人にとっての本番は注文の大筋がまとまってからだ。待つ間、彼らの応対はメイド数名と執事が行うことになる。

男子禁制になったところで廊下に繋がる扉が閉じられ、残ったメイドたちは採寸の手伝いをしたり休憩用の軽食を用意したりといった役割に回る。

セレスティーヌ、シャルロットから少し離れて十名近い人に取り囲まれた俺はまず、アンナを中心としたメイドにドレスを脱がされた。人前で下着姿になるのは今に始まったことではない、が――。

「……綺麗」

「セレスティーヌ様の美貌はお代わりないようで。いえ、より一層美しくなられましたでしょうか」

「リディアーヌ様の紅の髪も惚れ惚れいたします」

「シャルロット様の髪は細い糸のようで、どこか儚げな美しさがありますね」

これだけ大勢の人間に見られた上、感想まで述べられるとさすがに恥ずかしくなる。

『しゃんとしなさい。平民ごときに見られたからなんだっていうの。それに、当然

のことを言われているだけじゃない』

さすがの図太さである。

脳内の声に苦笑したいのを堪えつつ、姿勢を伸ばしたままで微笑む。職人たちに舐められることは貴族としての沽券にもかかわる。

「ありがとう。わたしも、お母さま譲りのこの髪がとても気に入っているの」

ここで、その場にいた多くの者が「おや？」という顔をした。何か珍しいものでも見るような視線が向けられてくる。そのうちの何割かは恐る恐るといった雰囲気がある。

彼女たちは前の俺しか知らないからだ。

お世辞を言っても「当然じゃない」とか言って胸を張らないし、「ぐずぐずしてないでさっさと採寸を始めなさい」とも言わないし、シャルロットを褒めても「わたしを蔑ろにした」と不機嫌にならない。

何か雰囲気が違うようだと不思議がる彼女たちを、もうだいぶ慣れてきた屋敷のメイドたちが微笑ましげに見守る。

「では、お身体に触れさせていただきます」

「お手伝いいたします」
アンナに支えられながら腕を上げたり下ろしたり、身体に回されるメジャーのくすぐったさに耐えたりする。合間に告げられる数字は記憶にあるものより大きくなっている。
「成長してるのね、わたし」
「順調に大きくなられていますよ」
「だいぶお痩せになられましたね。もう少しお肉をつけてもよろしいかと」
前はお菓子の食べ過ぎで十分カロリーが足りていたが、食生活の改善に二度のダウンが重なって今はむしろ細すぎるくらいだ。風呂の時、アンナにもたまに指摘される。
「太るよりは痩せてる方がいいんじゃないかしら？」
中三のクラスメートに栄養状態の良すぎる女子がいた。菓子やジュースが大好きな上、給食でも良く食べるので男女両方から低評価。
高校時代、同窓会で会った彼女は別人になっていた。すらりとした美少女。どうしたのかと尋ねられると一言「頑張って痩せた」。

つまり、いくら美少女でも太っていては可愛く見えない。

「リディアーヌ様は、美に対する関心が高いのですね」

「そうなのかしら？　せっかくだから可愛くありたいとは思うけれど」

「でしたら、ドレスも見合ったものを身に付けましょう」

美少女に美少女であって欲しいだけで着飾るのが好きなわけではないのだが、周囲の人間たちは俄然やる気を見せ始めた。まあ、売る側にとってはカモ、もとい上客である。ガンガン売り込みに来るのは当然だ。

シャルロットはと見れば、彼女は楽しそうに服の好みについて語っていた。この家に来た時が五歳だった彼女にとってお洒落は当然なのだろう。控えめな性格なので買い過ぎたりはしないが、かといって変な遠慮をすることもなくこの場を楽しんでいる。

セレスティーヌは採寸が少し長引いているようだった。素の状態だけでなくコルセット使用時の体型も測っているせいだ。紐で締め上げることでギリギリまでウエストを細く見せる下着の一種。メリハリのある体型の方が綺麗に見えるのは確かだし、養母は笑顔を崩していないが、あれは絶対に苦しい。

『あれは正直、わたしも着けたくないわね……』

成長に支障が出るということで子供である俺やシャルロットはコルセットの着用を禁じられている。

逆に言うと成長したら着けないといけないわけだ。

「大きくなるまでにコルセットが廃れてくれないかしら」

「確かに苦しいですけど、何度も使っていれば慣れますよ、リディアーヌ様」

「……アンナには悪いけど、慣れたくないわ」

「コルセットですか。そうですね……新しいデザインの流行が起こって、不使用のドレスも増えるかもしれません」

職人が苦笑いを浮かべながら答えてくれる。現状だと子供服や妊娠している女性用というイメージで、普通にお洒落として用いるのは流行ではないらしい。運よく天才デザイナーが画期的な発明でもしてくれない限り、待っていてもほぼ無理ということだ。

そもそも、女の衣装なんてだいたいウエストを締め付けている気がする。

例えば着物だって帯を締める。俺の乏しい知識ではそもそも知っている種類自体

が多くはない。お洒落は我慢、なんて文句も聞いたことがある。楽でありながらお洒落なんて服はそうそう――待てよ、チャイナドレスはウエストを絞らないんじゃなかったか。

「ねえ。こんな風に生地を縦に下ろすドレスは作れないかしら？」

締め付けが少ない代わりに肌に沿うデザイン。これなら女性的なボディラインを見せることで綺麗に見えるのではないか。絵師から筆記用具（木炭を挟んで固定した簡易的な鉛筆のようなものだった）を借り、女性的な自分のセンスを借りて簡単なイメージを描いて見せると、

「これは、寝間着でしょうか？」

「その、少々煽情的すぎるのでは？　夫婦や恋人同士の夜であれば良いかもしれませんが……」

だめか。

前世における全く別の国の衣装だし、文化が様式が違うのだから「なんだこれ？」となって当然。特に足の露出が多いことに違和感を持つ者が多かった。

そんなに上手くはいかないか、と頷いたところで職人の中から声が上がった。

「でしたら、下半身をふわりと広げてみてはいかがでしょう？」
「あなたは？」
「ナタリー・ロジェと申します。リディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢様」
歳は二十歳くらいだろうか。淡い緑色の髪をアップに纏め、髪色より青みの強い瞳をまっすぐこちらへ向けている。目が合うと整った仕草でカーテシーの真似事。作業用のシンプルな服なのでスカートを持ち上げることはなかったが、ロジェという姓と合わせて彼女の出自がはっきりとわかった。
平民の中に身を投じて職人を志した貴族の女性。
「腰回りを締め付けたくないのですよね？　でしたら、スカートを大きく広げることで華やかな印象を強調すれば、コルセットのない違和感を軽減できるかと。スカートを重ね、スリットは一枚目だけに入れるといった方法もあります」
「なるほどね。……じゃあ、上半身も目立たせた方がいいかしら？　いっそのこと飾りを盛ってみる？」
「良いと思います。上半身を肌に沿わせたデザインですので、シンプルにすれば女性的な起伏を引き立たせることも可能ですが、リディアーヌ様のお歳でしたらいっ

そのこと、これでもかと飾り立ててみても可愛らしいかと。とっておきの会で着ていただければ人目を惹くでしょう」

「ああ。わたしの身体はまだ起伏に乏しいものね」

服飾が本当に好きなのだろう。

貴族としての経験と固定観念に囚われない柔軟な発想から打てば響くような答えが返ってくる。ナタリーの意見を元に絵師が書き直したドレスは一見しただけでもとても豪華になった。

ノースリーブのままなら涼しげだし、ドレス風の袖を加えれば秋用や冬用のデザインにもなる。これには、わあ、と、周囲から歓声が上がった。チャイナドレスっぽさはほぼ消えたが確かに可愛い。

「出したばかりの要望をこんなに鮮やかに修正できるものなのね」

感心して呟くと、ナタリーは「恐縮です」と微笑んだ上で首を振った。

「ですが、実を言うと今のはこの場で考えたデザインではないのです。自分の中で温めていたものを流用しただけで」

荷物から取り出して見せてくれたデザイン画には良く似た絵が描かれていた。あ

の早さに納得がいった一方で、それはそれで凄いとも思う。
　近くにいた職人が笑って、
「ナタリーは変わったデザインばかり書いては没を食らっているものね」
「今、役に立ったもの。無駄じゃないわ」
「職人仲間と仲が良いのね」
「ええ。生まれ育った環境の違う私を快く受け入れて対等に扱ってくれる、いい仲間です」
　晴れやかな笑顔。
「私はワンピースを元にデザインを考えていました。そのせいか少女らしさを消しきれなかったのですが、ノースリーブかつ肌に沿うデザインなら大人向けにも流用できるでしょう」
　なんとなくこちらまで笑顔を返したくなっていると、ナタリーはここでこちらを窺うような表情になって、
「生地をふんだんに使い、立体的な縫製を加えることになるのでおそらくお値段が張ってしまうのですが……ご検討いただけますか？」

「ああ。ちゃっかりそういうデザインにもなっているのね。……わかったわ。購入を前提に検討するから、まずはデザイン案を描いてもらえるかしら。お洒落のための出費ならお養母さまも文句は言わないでしょう」

「ありがとうございます、リディアーヌ様」

せっかくなので「他にもデザインがあれば見せて欲しい」と頼み、色々と話し合った。

お陰で終わった後、メイドから「彼女のパトロンになるのですか？」と聞かれた。そこまで考えていたわけではないのだが、このまま仕事を頼んでいくことになった場合、似たようなものになってしまうかもしれない。

章イメージ



公爵家のお仕事と公爵令嬢 2

「新しいドレスのデザイン、か」

王国宰相ジャン・シルヴェストルは手にしていた紙を机に置くと、少しぬるくなった茶を一気に飲み干した。

向かいに座ったセレスティーヌがお代わりを注いでくれる。保存の魔法がかかったティーポットへ移しておいたものだ。二人で話をするため、使用人はお茶の用意の後で退室させてある。

今日は仕事が長引き夕食に間に合わなかった。

子供達は部屋へ引っ込んだ後。一目会いに行こうかと思えば、セレスティーヌに「私と二人ではご不満ですか？」と言われてしまう。

夜の誘い――ではない。

妻は髪を結ったままで、ジャンの隣にも座らなかった。夜着も肌を隠した清楚な品。差し出された紙の内容もいたって真面目なものだった。

「これは凄いものなのか、セレスティーヌ？」

ジャンが見ていたのは職人の一人が描いたという簡素なデザイン画だ。リディアーヌが希望し、その場でたたき台とするために描かれたものだ。後日清書したものを見せに来る、デザインは頭に入っているからこれは必要ない、と置いていったらしい。

家長として関心は持っているつもりだが、男の身。女のお洒落にはどうしても疎い部分がある。このデザインは可愛らしいとは思うが、既存のドレスとは大きく違わないように見える。

すると妻は頷いて、

「一見して目新しく見えるデザインではありません。ですが、評価に値する案件かと。わかりやすいのはむしろ、二枚目の方です」

「……こっちか？」

ちらりと見たきり無視していた下の紙を引きぬいて眺める。一枚目の絵よりも稚拙なタッチで下着、あるいは夜着のような衣装が描かれている。

「それは、リディアーヌが描いた原案です」

「これをリディが!?　いや、それよりも原案だと？」

「ええ。一枚目の絵はそれを元に描かれたものです」
「原型を留めていないではないか」
言われてみると幾つか似通った意匠はある。ひょっとして原案もドレスのつもりだったのだろうか。だとするとあまりにも常識から外れすぎているが、
「重要なのはその原案が非常にシンプルかつ自由な発想で描かれているということです」
「む。翻案――アレンジが容易だということか？」
「ええ。実際、ナタリー・ロジェの手によって見違えるように生まれ変わりました」
普通、技術やデザインとは段階を経て研ぎ澄まされていくものだ。
しかし、リディアーヌは最も単純な形を初めから出してきた。子供故の突飛な思考から飛び出したものと考えれば不思議なことではないが、貴族でありながら職人を志した変わ
がそこから新しいものを作り上げたように、ここには発展の余地がある。
「一枚目の上半身部分は身体に沿うデザインになるそうです。原案ですと妖艶な雰囲気が過ぎますが、スカートがふわりと広がれば適度な色気になりますでしょう？」

「うむ。……もっとシンプルなデザインのものをセレスティーヌが纏えば、社交の場で注目を集める可能性は高い、か」

ここまで来ればジャンにも理解できた。

リディアーヌは自分用のドレスを作るためだけにデザインを提案したのではない。流行の可能性を創造したのだ。

セレスティーヌが微笑を浮かべる。彼女が笑むのは珍しいことではないが、今回のそれは穏やかな、ともすれば生娘のようにも見えてしまう常の清楚なそれではなく、どこか無邪気で楽しげで、なおかつ大人の色気を含んだ複雑な笑みであった。

「流行や新しいデザインとはこれまでと全く異なるものが突然生まれるものではありません。異物をそのまま提案したところで却下され、なかったことにされるだけ。既にあるものと少しだけ違うものを相応しい人間が広めることで定着し、流行となるのです」

「公爵令嬢が発案したドレスはその条件を満たしている、か」

ナタリーは渾身のデザイン画を描いてくるだろう。リディアーヌは「採用を前提に」それを描かせたらしい。まず間違いなく一着以上は実際に製作される。盛装と

言っていいこのドレスは間違いなく晴れの場で着るためのもの。秋となれば『お披露目』には間に合わないだろうが、第三王子の婚約者となった娘が纏えばさぞかし注目を集めるだろう。

そして、親世代が自分の子に「あれと似たドレスを」と求めれば――。

公爵令嬢の務めとしては十分すぎる。

「あの子は、急に大人になってしまったな」

成長するにつれて母・アデライドの面影を濃くしていく愛娘。大人しかった母とは対照的な活発さ、過激さも彼女の魅力だったのだが、彼女はジゼルの一件以来、真面目で理性的な性格に変わった。

ジゼルへの腹いせから「助命」を嘆願するなど根っこの部分は変わっていないように思えるものの、ジャンは娘が我慢をしているのではないかと不安になってしまう。

セレスティーヌはこれに「そうですね」と頷き。

「身近な人間の死を経験し、自らも死に直面したのですから無理もないでしょう。……ですが、リディアーヌは帰ってきました。生を諦めなかった証拠です」

「意外だな。あの子が苦手だったのではないのか？」

倒れる前のリディアーヌは何度も「あんな女、大嫌いよ！」と言っていた。ジゼルの件が終わった後も「嫌いだ」と面と向かって口にしていたし、二人の仲は良くないはずだ。相性の良し悪しはあるので仕方のないことだと思っていたのだが、

「リディアーヌは頭の良い子になりました。以前よりはずっと公爵家に相応しいかと」

「そうか。……そうだな」

アデライドの死に関してはジャンも相当なショックを受けた。ジャンでさえそうだったのだからリディアーヌは猶更だ。そう思って彼女の好きにさせていた。そのことがかえって少女を荒れさせる原因にもなっていた。

負担をかけすぎているのは心苦しい。親として申し訳なくなるが、同時に「立派になってくれた」とも思う。

今回の提案は採寸中にふと口にした独り言がきっかけだったという。

当人としては「ただ思いついただけ」らしいが、床に臥せる中で魔法の行使に成功した件と言い、発想力において突出したものを持っているのかもしれない。

彼女の発想が服飾関係にも生かせるものだとすれば、これ以上ない幸運だ。
「魔法の教師も早く見つけてやらねばな」
軽く水を向けると、セレスティーヌはすぐには返事をしなかった。
どうしたのかと視線を向ければ、妻は「旦那様」とあらたまった前置きをした上で、ある一人の女の名を口にした。
「リディアーヌの魔法について、オーレリア・グラニエ様にお任せするのはいかがでしょうか」
「なっ……!?」
それは、魔法に関する事柄と結びつけるにはあまりにも恐ろしく忌まわしい名前。
「本気で言っているのか、セレスティーヌ!?」
冗談ならまだいい。いや、冗談でも聞きたくない。そんなジャンの想いが伝わらなかったのか、セレスティーヌは表情を真摯なものに変えた。
「本気です。おそらく、リディアーヌにとって彼女以上の教師はいないでしょう」
「セレスティーヌ！」
ジャンは妻を怒鳴りつけた。

それは、二人が結婚してから初めてのことで、ジャンの怒りは声を聞きつけた使用人たちが止めに入ってもなお収まらなかった。

二人は、翌朝には屋敷中で話題になるほどの「夫婦喧嘩」をした。

◆　◆　◆

「昨晩、旦那様と奥様が喧嘩をされたそうです」

「……え？」

採寸と服の発注は本当に疲れた。

ナタリーがここぞとばかりに売り込みに来たのも原因の何割かを占めている。デザインが良くても流行から外れているとなかなか採用してもらえず、たまに変人――もとい気に入ってくれた顧客がいても次に繋がらなかったが、いいところに酔狂なカモ――もとい思考の柔軟な高位貴族が現れたので、自分のアイデアを次々実現させるチャンスだと思ったらしい。

お陰であれやこれやと見せられて、疲れた上に頭が混乱してしまった。この世界

の常識、流行にも詳しくないところに新しいアイデアを流し込まれても処理しきれない。仕方なく、最終的には「また会って話そう」ということで逃げた。

もちろん、ナタリーのデザインで注文する予定の一着以外にもドレスは多数必要なわけで、そっちの注文にも頭を使わなければならなかった。個人的にはシックなドレスを増やしたいが、子供らしい可愛らしさも世渡りのためには必要。色のバランスやデザインのバリエーションまで考えるともう選択肢が広すぎて、しまいには泣きそうになりながら最終決定を下した。

お陰で全てが終えるには本当にほぼ一日まるまる必要で、夕食と入浴を終えた後はいつもより早くベッドに入ってぐっすり眠ってしまった。

これで一仕事終えた。次は三か月くらい後だからしばらく安心だろう……と、思っていたのだが、

「どうして？」

「そこまではわかりませんが……ただ、リディアーヌ様のお名前が飛び出していたと」

「わたしなのね……」

困った顔でアンナが教えてくれる。

俺が絡んでいるとすると、昨日描いたアレがお気に召さなかったのだろうか。セレスティーヌが「旦那様に見せる」とか言って持って行った時点で嫌な予感はしていたのだ。いや、でも、そうだとしたら俺が怒られれば済むような気もする。

あの女が密かに立てていた長女暗殺計画が露呈、とかだったら喧嘩じゃ済まないだろうし。

「とりあえず、様子を見るしかなさそうね」

「そうですね……。では、リディアーヌ様。お着替えをいたしましょう」

「ええ」

今日はなんとなく白いドレスを選んだ。喧嘩が長引いていた場合、あまり可愛い系の服だと刺激してしまうかもしれない。

「おはよう（ございます）、リディアーヌ」

食堂へ入ると、家族全員からの視線が一度に飛んできた。ほっとしたような表情を浮かべたのはアランとシャルロット。

そして、案の定ピリピリした雰囲気の二人はといえば、俺へと同時に声をかけて

きた。
「お、おはようございます。お父さま、お養母さま」
「……ふっ。いい子だ、リディ。さあ、座りなさい」
すると、急に笑みを浮かべて機嫌が良くなる父。なんだ、どっちが先に呼ばれるかが大事だったのか？　子供か？　まあ、落ち着いたのなら良かったと思いつつ自分の席へ腰かける。
「リディアーヌ。魔法の件なのですが」
「セレスティーヌ」
と、思ったらまた雰囲気が悪くなった。
魔法？　昨日のアレは関係ないのか？　というか、見た感じセレスティーヌの様子はいつもと変わらない。父が一方的に火花を飛ばしている様子だ。
養母が父を怒らせて、なおかつ謝る気がないとか？　普通は男女逆じゃないだろうか。まあ、ポーカーフェイスの上手さの問題かもしれないのでよくわからない。
父に睨まれた母が口を閉ざしたので、魔法云々については良くわからなくなってしまった。

「あの、お母さま？　あの紙はどうなりましたか？」
「ああ、あれなら見せてもらった。良くできていたよ。ナタリー・ロジェのデザインで発注する事に異議はない」
「本当？　ありがとう、お父さま！」
　養母に聞いたら父に返答されたが、役に立ったのなら良かった。にっこりと笑いかけると、父は照れたような、嬉しそうな笑みを浮かべる。相変わらず娘に甘い。これで機嫌を直してくれるなら安いものだ。
「本日の一品目はとうもろこしのポタージュでございます」
「わあ、美味しそうです」
　シャルロットがいいタイミングで明るい声を上げてくれる。アランも「本当だ」と合わせ、なんとか和やかな朝食が始まった。
　シェフ特製のポタージュスープはいい味をしている。少なくとも前世のファミレスやインスタントのカップスープなんかとは段違いに美味しい。せっかくなのでゆっくりと味わっていると、
「ところで、リディ。魔法を覚えたらしたいことはあるのかな？」

「したいこと、ですか？」

思考が逸れたところに父からの質問。これにセレスティーヌがかすかに反応。ただ、意図はよくわからない。俺としては「訓練するのが義務なのでしょう？」といったところなのだが、

「いえ。今の段階ではまだ何も言えません」

「おや。そうなのか？」

「ええ。だって、魔法でどの程度のことができて、わたしにどのくらいの才能があるのか見当もつかないもの。絶対に不可能なことを口にするのも、望みが小さくなりすぎるのもつまらないでしょう？」

魔道具を作ってみたいとか、領地でやっているという綿花の栽培を助けられないかとか漠然と考えることはできるが、勉強して具体的にビジョンが見えないとなんとも言えない。

これに父は驚いたような顔をして息を吐いた。

「……リディアーヌはよく考えているのだな」

「考えていないからこその答えなのですけれど……」

「いや、いいんだ。それでいい」
父は迷いが晴れたように笑顔になった。あまり進んでいなかった食事の手が早くなり、養母の方へと得意げな視線が向けられる。
「そういうことだ。それでいいだろう、セレスティーヌ？」
ああ、昨夜の喧嘩は俺の教育方針についてだったのか。
ここまで来ればさすがに理解できた。父は大らかに育てたい派だろうから、そうするとセレスティーヌがまた何か変なことを企み始めたことになるが……。
問われた彼女は、綺麗な碧眼で俺をじっと見据えて、
「重要な質問をします。リディアーヌ。魔法の使い手として大成するために最も大切なことはなんだと思いますか？」
意図の掴めない問いが、その美しい色の唇から放たれた。

カウンター悪役令嬢への道

「初めまして、リディアーヌ・シルヴェストル」

その少女は午前中の授業が始まる前、まだ朝と言っていい時間帯に突然やってきた。

肩までより長く伸ばした漆黒の髪に同色の瞳。

前世における日本人を一瞬連想するも、その肌は白人種のすっきりとした白。裸身を晒せばモノトーンの美貌がさぞかし映えるだろうと思わせる妙齢の美少女は、その身にシックな紺色のワンピースとボレロ――学園の制服を纏っていた。

年頃の貴族令嬢。学園の在学生。およそ縁のなかったその存在が急に部屋を訪ねてきた不思議に俺は一瞬どころか数秒硬直してから「あなたは？」と尋ねた。

すると、少女はふっと笑って、手に持っていた一通の手紙を俺に示してくる。

「セレスティーヌ・シルヴェストル様からの手紙を受け取って来たの。魔法の使い手として大成するために最も大切なこと。答えた記憶はないかしら」

「あ……！」

珍しく夫婦喧嘩をしたらしい両親から魔法について質問をされ、自分なりに答えたのは二日前のことだ。養母は俺の返答を聞いて「わかりました」とだけ答え、父もまた何かを覚悟したような表情で黙りこんでしまった。

あの時、セレスティーヌの専属が俺の返答をメモしていたのには気づいていたが、まさか学生に手紙を送っていたとは。

俺の反応に機嫌よく頷いた少女は、どれほどの深さがあるか測れない漆黒の双眸で俺を見据えて、

「じゃあ、口頭でもう一度答えてみなさい。魔法の使い手として大成するために最も大切なことは何かしら？」

俺は深呼吸をひとつしてから彼女に答えた。

「経験です」

「へえ。それはどうして？」

「この世界の魔法は想像力によって形作られるもの。つまり、魔法によって大きな成果を出すには魔力量以上に『結果を正確に思い描けるかどうか』が大切になります。そして、想像の助けとして最も手っ取り早いのは――」

「望む現象を実際に経験すること」

こくん、と、頷いて肯定する。

例えば、亡き母アデライドが見せてくれた火の鳥や蝶。俺はそれが舞い飛ぶ光景を鮮明に思い出せる。見たことがあるから可能だと信じられるし、きっと再現するのも格段に楽だ。

何事も偉大なのは先駆者。未知を実現させるのと知っていることを再現するのでは難易度が全く違う。

この答えに少女は「そうだ」とも「違う」とも言わず、さらに質問を続けてきた。

「そうなると、魔法を他人に教えることは才ある人間にとって多大な損失ね？」

「……そうですね」

偉大な魔法があったとする。それは限られた者にしか使えないからこそ価値がある。他者に伝わり広まって、使える者が増えていけばそれは「ただの技術」と化す。偉大な魔法の発明者は最初にそれを使っただけの人間に貶められてしまう。

技術の進歩とはそういうものだ。

まあ、だから前世では高い金を払って研究者を雇ったり、特許とかの法律があっ

たんだろうが。この世界でその辺の整備がどの程度進んでいるのかはわからない。

少女が目の前に立つ。

細くしなやかな指が俺の紅の髪を一筋すくい上げてくるくると弄ぶ。朝の身支度でそれに櫛を入れ整えたアンナが小さく悲鳴を上げるも、相手は推定・セレスティーヌの呼んだ人間なので下手に口を挟めない。

「じゃあ、最後の質問よ。それでもなお、教え子や弟子を取るメリットがあるとすれば、それは何かしら？」

これについてはぱっと答えが思い浮かばない。一般的には授業料だろうが、いかにも物好きっぽいこの少女がそんなつまらない答えを望んでいるとも思えない。

「そうですね……自分の研究を手伝わせるとか、教え子の発想を盗んで自分が成長するためとかでしょうか」

「そう。つまり、貴女には私の研究を手伝う覚悟も、魔法を盗まれる覚悟もあると」

「え？」

ぽかん、として彼女を見上げてしまう。

悠然とした表情。自分こそが最強だと確信していそうだ。セレスティーヌとは違

う意味で勝てる気がしない。女番長、あるいは女王様といったところだろうか。
どうして俺が彼女の助手になるのかと言えば、ひょっとして、そういう話なのだろうか？
「ええ。このオーレリア・グラニエが貴女に魔法を教えてあげる」
「オーレリア・グラニエ様……!?」
魔法に関する質問。その答えをセレスティーヌが手紙で送り、受け取った彼女が来た。そう考えれば自然な流れではある。
名前を聞いたアンナが驚いているところを見ると、おそらく何らかの有名人なのだろうが、
「オーレリア様は学園に在学中なのですよね？　お忙しいのではありませんか？」
「リディアーヌ様！　このお方は――」
「おかしなことを言うのね？　私の時間が足りなければ、貴女が捻出してくれるのでしょう？」
「ひうっ」
しなやかな指が俺の唇をゆっくりと撫でる。艶めいた唇がかすかに動いて、舌な

めずりでも始めそうな勢いだ。この色気はなんなのか。あと十年足らずでこれに追いつける気がまるでしない。

ええと、何をどう答えればいいのか。

「あの、お養母さまが出した依頼を見て来てくださった、ということですよね？」

「そうよ。もしかして、私のことを聞いていないの？」

「はい。残念ながら、なに一つ」

「ふ、ふふふっ。そう、何一つ。……予習なしであの答えを、八歳の子供がね」

今度は両手で頬を包み込まれた。床にしゃがんだオーレリアが至近距離から瞳を合わせてくる。落ち着く色合いなのに、何故かひどく落ち着かない気分になる。

「前言撤回。貴女、面白いから私の教え子になりなさい。ついでに弟子として使ってあげる」

「え。確定なのですか!?」

「ええ、確定よ。異論は認めない。将来王妃になるかもしれない女を私が教えるなんて楽しそうだしね」

知っているのか。

まあ、我が家の使用人がみんな知っている時点で他家にも噂は広がっているだろうが。それにしても意味ありげな言い方だったような。

「あの、オーレリア様はなにか王家と関係が？」

「リディアーヌ様。この方――オーレリア・グラニエ様は王位継承権こそ保持しておられないものの、国王陛下の側室がお産みになった子。すなわち、王女殿下です」

「……な」

驚きすぎて開いた口が塞がらない。ついでに礼を取るタイミングも完全に逸してしまった。オーレリアの側にそんなことを気にする気がなさそうなのが救いと言えば救いだが。

「……わたしが習った王族のリストには載っていなかったわ」

「オーレリア様はその、少々特別な方なのです」

疑問の声にはアンナが言葉を濁しつつ答えてくれた。

「特別って？」

「簡単に言えば、王族扱いされていないの。城には住んでいないし、滅多に顔も出さない。後見人は宮廷魔法士長だしね」

「事情がおありになることは十分に理解いたしました」
「話が早くて助かるわ」
おそらく会うことはないと判断してリストからは外されたのだろう。王位継承権が無いという時点で、子供には説明しづらいくらいの込み入った事情が窺える。
後見人が宮廷魔法士長ということは魔法の才能があるのだろう。
「滅多にお目にかかれない方とお会いでき、なおかつご指導までいただけるとなれば願ってもありません」
「決まりね。それじゃあ、来週あたりから学園へ通ってもらおうかしら」
「通いですか……」
「私は学業で忙しいもの。貴女が心配してくれたように、ね？」
「……承知いたしました」
オーレリアは現在、学園の寮で生活しているらしい。いちいち通うのは手間だが、まあ王都の中なので通えないことはない。アンナと顔を見合わせ、さらにスケジュールがきつくなることを覚悟する。
「ところで、オーレリア様の属性はなんなのでしょう？　わたしに教えてくださ

るということは火属性なのですか？」
　話がだいたい纏まったところで尋ねると、オーレリアはふっと笑って「いいえ」と答えた。
「私に得意な属性はないわ」
「え？」
　脳裏に疑問符を浮かべた俺はその直後、最大級のドヤ顔を見た。
「あるいは、全ての属性が得意だと言ってもいい。つまり、私の属性は」
「全属性……！」
　とんでもないにも程がある。
　主人公か何かか、と言いたくなるような設定の盛り具合に、俺は驚嘆の声を上げながらこれからの生活が少し不安になった。

「だから言ったのだ。オーレリア・グラニエに常識は通用しない。リディがどんな目に遭わされるかわかったものじゃない」

夕食の席にて、父はかなりご機嫌斜めだった。
夫婦喧嘩はいったん沈静化してセレスティーヌとも仲直りをしたようだったのだが、オーレリア襲来の一件を聞いてまたぶり返してしまったらしい。カトラリーが皿へぶつかる音がいつもより大きい。
「確かに『いかにも天才』といった感じの方だったけど」
「そんな生易しいものじゃない。天変地異にでも例えた方が適切なくらいだ」
「お姉様はそんなに危険な方に魔法を教わるのですか？」
シャルロットが不安そうに声を上げた。
天変地異。地震・雷・火事・オーレリアといったところか。急に発生した上に派手な結果を残していった辺りは確かにそんな感じではある。
アランも少々浮かない表情を浮かべて、
「魔法に関しては不世出の天才だと聞いています。また、学生の身でありながら多くの家から指導依頼を受け、悉くを断っていると」
「彼女は相手を見極める手段として質問をするのだ。そして、満足のいく答えを返せなかった者には協調も指導もしない」

「あの時、お養母さまがわたしにした質問ですね？」
「ええ」
短く答えたセレスティーヌは食事の手を止め、父の説明を補足する。
「質問は誰に対しても同じです。正解が何かは広まっていません。誰しも特権を手放すことには慎重になりますから」
「リディが合格しなければ問題はなかった。だから、私は手紙を送る許可を出したのだ」
なのに俺は合格してしまった。変な女が変な女に気に入られてしまったということだ。『って、それはどういう意味よ!?』。
セレスティーヌは表情を変えず穏やかに答える。
「リディアーヌには才能があります。その才能を活かすのに最も適した教師はオーレリア様でしょう」
「だが、リディはリオネル殿下との婚約を控えた身だ。下手をすれば王族からの心証も悪くなりかねん」
「陛下からの許可は出たのでしょう？」

「だとしてもだ。リディに一生残るような傷でもついたらどうなる」
魔法の練習には怪我がつきものだ。だからこそちゃんとした教師をつけて安全に配慮するのだろうが、その教師が破天荒では本末転倒。
「でも、お父さま？　だからこそ教える相手を選んでいるのでは？　オーレリアさまも貴族の子を故意に使い捨てようとはなさらないでしょう？」
「どうだかな」
吐き捨てるような言葉に、さすがに怖くなってくる。
オーレリアにまつわる「いわく」はそこまで凄いものなのか。
「教えて、お父さま。少なくともわたしにはその権利があるはずよ」
「……後悔するかもしれないぞ」
これ以上は大人数に広める話ではないと、話は食事の後、セレスティーヌの部屋へと移って行われた。アランとシャルロットは不在だ。義妹にはまだ早い話だということで、アランが敢えて残って彼女の話し相手を買って出てくれた。
しっかり用意されるお茶と茶菓子にじれったい気持ちになりつつ「それで、お父さま？」と促す。こういう時は貴族のやり方が面倒くさい。移動するだけしたら

立ち話でもいいと思うのだが。

父は自身の気持ちを落ち着けるように紅茶へ口を付けてから答えた。

「オーレリア・グラニエの異名は《漆黒の魔女》だ」

「魔女、ね。仮にも王族に対して失礼だと思うけれど」

「言われるだけの理由があるからだ。……これは、みだりに口にすることではない。王城では公然の秘密として扱われている話なのだが」

俺はごくりと息を呑む。そして告げられたのは、予想以上に重い過去だった。

「《漆黒の魔女》は生まれて初めて使った魔法で実の母親を殺した。王女とはいえ、継承権を剥奪されるのは当然の罪だ」

つまり、オーレリアは初めて使った魔法によってその才能を証明すると共に、自分の運命を決定づけてしまったのだ。

【新しい登場人物】

◇オーレリア・グラニエ：通称《漆黒の魔女》。皇位継承権を持たないいわくつ

きの王女だが、魔法の腕は別格。



カウンター悪役令嬢への道 2

公爵家の保有するドレスは普段着でも相当な高級品だが、余所行き用となるとグレードはさらに上昇する。

初の王城行きを迎えた俺は、手持ちの中でも上位にあたる一着のドレスを複数人のメイドの手によって丹念に着付けられた。

ベースは白。王子の相手に相応しい清らかな身であることを示しつつ、要所には俺のパーソナルカラーである赤をあしらっている。パーティに出るわけではないのでスカートの広がりは控えめに。上品に、それでいてたっぷりと施されたフリルが少女らしさを演出する。

紅の髪にもドレス合わせで白いレースの髪飾りをあしらい、日よけのために白いつば広の帽子も用いる。軽くだが化粧も施され、花の香りの香水がほんのりと散らされた。

例によって俺自身はほぼ座っているだけなのだが、いつにも増して丁寧に作業されるせいで待っているだけでも結構大変である。

「……陛下への謁見だものね。さすがに緊張するわ」

今日の予定はリオネルとのチェス、および国王から正式に婚約の承認を受けること。謁見自体はさくっと終わるはずだが、気分的にはむしろ前者がオマケだ。

「リディアーヌ様はまだいいです。私なんて粗相をしたら物理的に首が飛びかねないんですよ？」

アンナなんて朝、起こしにきた段階からがくがく震えている。国王は人格者だと聞いているし、さすがに即処刑とかはないはずだが。

前世の俺――高校生の感覚で例えると、コンビニバイトしていたら店長がなんかすごい賞をもらってしまい、一緒に総理大臣に会うことになった、とかだろうか。うん、滅茶苦茶緊張するだろう。

「頑張りましょう、アンナ。上手くいけばお給金が上がるんじゃないかしら」

「お給金はもう十分ですから平穏無事に過ごしたいです……」

「謙虚すぎるのも嫌味になりますよ、アンナ」

しっかりと手を動かしながらアンナをやんわり窘めたのは、経験を買われて着付けに参加したベテラン、マリーだった。

「貴女はリディアーヌ様の専属です。であれば、どのような状況でも最善を尽くし、リディアーヌ様をお助けするのが役目。不服なら代わって欲しい、と思う者はたくさんいることを忘れてはいけませんよ」

「っ。……申し訳ありません。仰る通りです」

目を瞠ったアンナはぎゅっと拳を握りしめると表情を引き締めた。あまり気負って欲しくはないが、マリーの言うことも正しい。公爵令嬢の専属というだけでも羨望の的なのに、主人が王族入りする可能性まで出てきたのだ。アンナは若くしてこの屋敷の出世頭になってしまっている。

ジゼルのやったことは間違っているが、アンナを羨む気持ちは当然のもの。他のメイドも同意見だというように小さく頷いている。

「マリーも、私の専属になれるならなりたい？」

少し空気を変えようと尋ねれば、マリーは微笑んで首を振った。

「リディアーヌお嬢様をお世話したい気持ちはあります。ですが、私では年齢的に不相応でしょう。専属としてはもっと若い者を指名し、育てた方が良いかと」

「お嬢様。専属は一人でなくても良いのですから」

「二人目を指名してくださっても構わないのですよ」
ここぞとばかりに売り込みをしてくるメイドたちはなかなか逞しい。しかし、そんな風に軽口を叩いてくれるようになっただけ進歩かもしれない。少なくともその程度の度量はあると認められているということだ。

玄関へ移動すると、セレスティーヌもまた自らの専属を従え、普段以上に気合いの入った装いで俺たちを待っていた。
採点するような、あら探しをするような視線に表情を動かさないよう気をつけつつ耐えていると、
「馬車は既に待たせてあります。参りましょうか」
「はい、お養母さま」
どうやら合格点は出たらしい。内心ほっとしつつ馬車の待つ外へと移動した。
「今日はまずリオネル殿下にご挨拶をした後、一緒に陛下へ謁見する流れなのですよね？」

「ええ。婚約の承認ですから、殿下と共にお目通りを願わなくてはなりません」

動き出した馬車内は揺れる。公爵家が用いている上質な馬車でもカーブの多い在来線レベルだ。蹄や車輪の音もあるのでとても落ち着くというほどではないものの、歩くよりはずっと楽だし話をするのにも支障はない。

屋敷の窓から何度も目にはしていた白く大きな王城が次第に近づくのを感じながら王都の街並みを眺める。馬車四台分以上の広さのある大通りの左右には高級住宅街が広がっている。馬車を使える人間用のエリアなので道行く人の姿は多くないものの、買い出しに出たメイドやどこかへ訪問する途中らしき執事の姿がちらほらと見えた。

城は王都の中央に位置し、その周囲には高級住宅街や貴族向けの高級商店などが広がっている。外周に近づけば近づくほど住居や店のグレードは下がっていく仕組みだったはずだ。

「学園は左手の方向です。黒い屋根がここからでも見えるでしょう？」

「ああ、あれが学園なのですね」

さすがに王城ほどではないが、学園もなかなかに広く大きい。特定の年頃だけと

はいえ貴族の子が一斉に集まるのだからそれも当然だろう。
「あまり遠くないようなので安心しました」
馬車を使えば十分もかからない。オーレリアの授業は週二回、土曜日と日曜日（にあたる日）の午後に行われることになった。なんで連日かといえば学園は週休二日だからだ。不思議なことに俺よりも休日が多い。詐欺じゃないだろうか。
「勉強の進度には余裕がありますが、気を抜かないように」
「油断せずに進めてまいります」
深く広い堀にかかった橋の上の前で馬車が停まり、騎士による確認の上でまた走り出す。高い塀の向こうに広がっていたのは我が家の数倍の規模からなる広い庭園。そして重厚さと華やかさを両立した白壁の城が陽光を受けながらそびえ立っている。
正面玄関前に停まった馬車からセレスティーヌに続いて降りれば、複数名の騎士とメイドが出迎えてくれる。
「ようこそお越しくださいました、セレスティーヌ・シルヴェストル夫人。並びにリディアーヌ様」

周囲をぞろぞろと固められながら広いロビーへと入り、ゆっくりと、しかしスムーズに奥へ。

自宅でメイドに囲まれるのはいい加減慣れてきたが、こういう待遇を受けるとあらためて自分の立場を思い知らされる。

『それにしても、うちのお屋敷以上に迷いそうな造りね』。戦時には最終防衛拠点になるわけだから、敢えてそう造っている部分もあるだろう。何度も利用していればそのうち慣れるのだろうが。

「リオネル殿下。リディアーヌ様とセレスティーヌ様がお見えになられました」

「通せ」

リオネルの部屋は俺の私室よりもさらに広かった。モノトーンの落ち着いた配色の中、要所に金色が散りばめられている。

約二週間ぶりに会った少年の様子は前に会った時と変わりない。俺が母と共に挨拶を済ませると、開口一番、

「元気そうで安心したぞ、リディアーヌ。まあ、お前のような図太い女が死ぬわけがないが」

こいつ、こっちの気も知らないで、と思いながら「恐縮です」と答え、見舞い品の礼についてもあらためて述べる。
「お手紙でも申し上げましたが、素敵な鶏をありがとうございました。家族で美味しくいただきました」
「それは良かった。公爵家なら羊肉の方がいいかとも思ったのだが、普段から食べ慣れているかもしれないからな」
「ええ。羊はよく食卓に上ります」
俺たちが会話を交わしているうちにお茶の準備が整えられ、暗黙のうちに歓談を勧められる。謁見の準備が整うまで待てということだろう。
リオネルが紅茶を口にしたのを見てティーカップを手に取ると、その様子をじっと注視される。
「？　どうなさいました？」
「いや。お前は砂糖もミルクも使わないのだな」
「ええ。菓子や食事と一緒にいただくことが多いので、お茶には味を付けない方が好みです」

「ああ、わかる。特に菓子は甘いからな」
なお、セレスティーヌのカップには給仕のメイドにより一匙の砂糖を入れられた。屋敷で飲む時と同じ分量である。
城のメイドは来客の好みまで把握し、わざわざ尋ねるまでもなく仕事を完遂させるらしい。アンナが俺の傍に控えながら感心したようにその一挙一動を観察している。
「ところでお前、前に会った時よりも服が派手だな」
「お恥ずかしながら、前回はお客様をお迎えする予定がなかったものですから。普段着でお迎えした無礼をお許しください」
「ああ、そう言えばそうだったな。まあ、俺には服の良し悪しなんてわからないからどうでもいいが」
なんとも色気のない返答である。
「殿下。最低限、お洒落を褒められるようにならなければ女性に嫌われますよ」
「ん？　お前と婚約するのだから他の女なんてどうでもいいだろう？」
まあ、浮気の心配がないのは良いことだが。お前、この時の発言を将来後悔して

も知らないからな。
「お言葉ですが、それでもお世辞程度に褒めるのが殿方の礼儀作法というものかと」
ここで養母に視線を向ければ、優雅な首肯が返ってくる。
「夫のジャンは女性に対してとても紳士的です」
「ああ、ジャンは細かいからな……。あいつにはよく小言を言われるのだ」
「宰相という役職はそうでなければ務まらないのかもしれませんね」
「ふん。娘のお前が口うるさいのもジャンの影響か？」
「申し訳ありません。差し出がましいことを申し上げました」
八歳の男子にはまだ難しいよな、と思って謝ると、前にも会ったリオネルのお付きの青年が口を開いて、
「いえ、リディアーヌ様。どうか遠慮なさらず殿下を諭してください」
「お前はどっちの味方だ！　もういい、リディアーヌ。チェスをするぞ」
「今からですか？　おそらく最後まで終わらないと思いますが」
「父上に呼ばれたら中断して向かえばいいだろう」
雑談しているだけでは退屈だと思ったのか、リオネルの希望でチェスを始めるこ

とになった。俺を倒すために特訓したという王子に微笑み返しつつ、俺も適度に気合いを入れる。手を抜かれたなどと言われてしまったら目も当てられない。

そして、勝負が終盤にさしかった頃、

「リオネル様、リディアーヌ様。謁見の準備が整いました」

「なんだと。今、物凄くいいところなのだが」

「殿下。陛下をお待たせしてはなりません」

謁見そっちのけでチェスをしていました、なんてことになったら俺が困る。渋るリオネルをよそにさっさと立ち上がって対局を中断させた。

「アンナはここで待機していてちょうだい」

「リディアーヌ様、頑張ってください」

案内役の騎士と共にリオネル、俺、セレスティーヌで移動。

謁見の間に到着すると、そこは既に厳かな雰囲気で包まれていた。左右に控える衛兵、騎士。要職にあると思われる文官、ドレス姿の貴婦人まで数名いる。奥の高い位置には立派な玉座があり、そこに髭を蓄えた凛々しい男が座っている。

左隣には屋敷の庭で顔を合わせた王妃。赤みの強い金髪に深い青色の瞳。歳はセ

レスティーヌとそう変わらないだろう。

王の右隣には仕事用の畏まった服装をした俺の父――宰相ジャン・シルヴェストルが立っている。仕事中なので生真面目な表情を崩さないものの、頑張りなさいとでも言うように一瞬だけ視線を向けてくれた。

国王は父よりも十歳近く年上だったか。王妃とは案外歳が離れている。

目線を合わせないよう前を向いたまま半ば七割ほどの道のりを歩き、揃って跪く。息子であるリオネルは浅く、俺とセレスティーヌは深く。

「面を上げよ」

公爵令嬢という立場にある俺にとって目上の存在というのは少ない。リオネル、およびオーレリアとの対面は色々例外だったのでこれが実質初めての「上位者と会う場」になる。

「よくぞ参った。リディアーヌ・シルヴェストル。およびその母セレスティーヌよ」

「お初にお目にかかります。宰相ジャン・シルヴェストルが長女、リディアーヌでございます」

リオネルと会った日以降、礼儀作法については猛特訓が行われた。お陰で（男と

してのプライドをすり減らしながら）俺のカーテシーは以前よりもぐっとマシになっている。それでもまだまだ心許ないが、

「あれが宰相殿のご令嬢か」

「毒殺未遂の後遺症はないようですね」

八歳の子供として及第点には達しているのか、ひそひそと聞こえてくる声には明確にネガティブといえるものはなかった。

そんな中、俺を真っすぐに見つめた国王は小さく呟く。

「なるほど。……アデライドに良く似ている」

母の名。

似ているとはよく言われるし、俺自身もそれは誇りにしている。それだけに母がこの場にいないことは悲しいが、母は亡くなってもなお、その人柄と人脈によって俺を守ってくれているのかもしれない。

リオネルと俺の婚約はいともあっさりと認められ、その場にいる全員へ知らしめるように宣言された。

「其方――リディアーヌ・シルヴェストルと我が息子、第三王子リオネルとの婚約

をここに認める。今、この時を持って二人は将来を誓い合う間柄となった」

一斉に巻き起こる拍手の中、おそらくは当事者であり子供でもある俺とリオネルがこの場で最も、婚約の重みをはっきりと理解していなかった。

カウンター悪役令嬢への道 3

「これで晴れて婚約者同士か。よろしく頼むぞ、リディアーヌ」
謁見の間を後にし、リオネルの部屋に戻ってきて。
中断した時のままのチェス盤を挟みながら、俺は王子の浮かべている笑顔に虚を突かれた気持ちになった。
「？　どうした。俺の顔に何かついているか？」
「いえ、殿下はあまり婚約に興味がないと思っていたものですから」
嬉しそうにされると「意外に脈ありなのか？」と思ってしまう。
すると身を乗り出すようにして端正な顔を近づけられて、
「婚約してしまえば他の令嬢との面会を減らせるだろう？」
うん、そんなことだろうと思った。
「では、どうしてもと強請られた時は『リディアーヌが嫉妬するから』とでもお伝えください」
「それはいいな。よし、そうしよう」

「リディアーヌ様、よろしいのですか？」
「ええ、大丈夫です。恋多き婚約者を持つよりはずっと良いかと」
貴族の中には第二夫人や愛人を持つ者も多い。王子であるリオネルも、その気になれば妻の一人や二人増やせる身分だ。寵愛を求めての足の引っ張り合いとか可能な限り遠慮したい。
お子様王子はここでふっと息を吐いて、
「しかし、セレスティーヌがいないと気楽でいいな。お前と二人だと気を遣わなくていい」
養母は王妃からお茶に誘われ、俺たちとは別行動中だ。
気を抜けるという意味では同意だが、使用人やお付きが何人も控えている場で二人だけと言えるあたりはさすが王族である。
「わたし相手にも気を遣ってくださってもいいのですよ？」
「面倒だから嫌だ。どうせお前は気にしないだろう？」
「殿下が恋愛の機微に疎いことは重々承知しております」
嫌味を籠めたのがわかったのか、リオネルは顔をしかめて「続きをするぞ」と

言った。
「父上と話をしている間もこの後の指し手を考えていたからな」
「殿下、それは卑怯ではないでしょうか」
こっちはそんな余裕なかったというのに。
釈然としないものを感じつつも応じた結果、王宮というアウェーな状況が影響したのか、今回は三戦して一勝二敗と負け越しで終わった。
「ふふん。まあ、こんなものだな。お前もきちんと練習してきたようだが、俺を倒すにはまだまだ足りん」
「いえ、殿下。これで戦績は五分。勝ち誇るにはまだ早いかと」
駒を初期位置に並べ直しながら微笑んで答える。前回も今回もチェスばかりだが、別の遊びも提案した方がいいだろうか……と。
「リオネル」
「？」
「名前で呼んでいいぞ。母上や姉上達からもそう呼ばれているしな」
「では、お言葉に甘えてリオネル様とお呼びしますね」

「ああ。いちいち殿下などと呼ばれては堅苦しくて仕方ない」
対外的に俺たちの仲を示すことにもなる。
まあ、この国は前世ほどその辺堅苦しくないというか、初対面で名前呼びしてもそんなにおかしくなかったりはするのだが、それでも異性を下の名前で呼ぶというのは少し特別な感じがする。
「殿下とリディアーヌ様はお似合いのお二人なのかもしれませんね」
お付きの青年がそんな感想を漏らしたところで、メイドが一人、部屋のドアを叩いて中へと入ってきた。
「リディアーヌ様。陛下がお呼びでございます」
「え……？」
何かと思えば名指しでの呼び出しだった。『なによ？　わたし、今回は何もしてないと思うんだけど!?』。

「ああ、良く来てくれた。こちらへ座りなさい」

まだ遊び足りない様子のリオネルを残し、案内された先は国王の執務室だった。アンナを入り口前で待たせて一人で入室すれば、最初に感じたのは紙とインクの匂い。大きく丈夫そうな執務机といくつも並んだ本棚はさすがに上等な品だが、一方で大量の書類や本の存在からここが権威的な場所ではなくあくまで仕事部屋であることを窺わせる。

席に着いた国王の傍らにはしかめっ面をした父の姿。俺が示されたのは父の反対側、王の座る椅子の隣に置かれた子供用の椅子だ。物凄い特別扱いである。とはいえ相手は国の最高権力者。逆らうわけにもいかず、恐る恐るちょこんと腰かける。

王のペンを握っていない方の手がぽんと頭に置かれ、髪をわしわしと撫でてくる。屋内なので帽子は被っていない。

「陛下。もう少し娘を丁重に扱っていただきたい」

「よいではないか。この娘は健康体なのだろう？　それより、もう下がってよいぞ」

「……は」

不満そうにしつつも一礼する父。

国王と親しげに話せるあたりやっぱり偉いんだなと思いつつ俺は彼を見上げて、
「またね、お父さま」
「ああ」
答える時だけ険しい顔に笑顔が宿った。父が退室していくと、部屋には本当に俺たち二人だけになる。もちろん、部屋のすぐ外には人が待機しているわけだが。
「わたしが暗殺者なら、陛下を狙う絶好のチャンスなのでは」
「私をここで殺しても、リオネルは王になれないぞ？」
楽しげに応じられて思わず絶句する。
「こんな小さなご令嬢が反逆を企てているとは思わなかったが」
「いえ、そんな。ただ危険ではないかと申し上げたかっただけで」
「わかっている。ジャンからも聡明な子だと聞いているからな」
「……聡明であれば、両親の手を悪戯に煩わせたりはしておりません」
この状況は子供相手ゆえの特別扱いだ。機密情報がいっぱいのこの部屋に普通はそうそう入れない。もちろん、俺の座高では机の上の様子は覗けないし、背伸びをしようとも思わないが。

王が無警戒かといえばそんなこともない。俺の身辺調査は済んでいるのだろうし、彼の身には魔石の嵌った複数の装飾品がある。あれらが全て魔力充填済みの防御用魔道具なら生半可な攻撃は通用しない。

「オーレリア作の超一級品だ。其方もあれからよく学ぶといい」

「……わたしごときの考えは全てお見通しなのですね」

「いや、其方は十分に利口だよ。リオネルにも見習わせたいくらいだ」

「殿下の物おじしない性格は稀有な才能かと」

「そうだな。それは上に立つ者の素質だ。後は、もう少し思慮深さを身に着けてくれれば……」

「慎重さは周りの者が補うこともできます」

「ほう。其方が補ってくれるのか？　それとも、其方の兄が？」

「わたしも精一杯務めますが、実務上の手助けは女には難しいですので……」

王はふっと笑って「抜け目のない娘だ」と言った。

「まだ用件を言っていなかったな。少し其方と話がしてみたかったのだ。ジャンの愛娘と。息子の婚約者と。……そして、アデライドの忘れ形見と」

「母をご存じなのですね？」
「知っているとも。何度も話をしたし、あれを娶ったジャンに嫉妬したこともある。あれは美しい女だったからな。画家がこぞって題材にしたがったほどだ」
屋敷には母の絵は一枚も飾られていない。絵姿が何枚も描かれたのなら家に残っていないはずがない。父が俺やアランの心を刺激しないよう見えないところに保管しているのだろう。
今なら素直に受け入れられそうな気もするが……セレスティーヌの手前、前の妻の絵を飾ったりはできないか。
「わたしも母のように綺麗になれるでしょうか？」
「案ずるな。其方は十分に美しい。私がもっと若ければリオネルを羨んだかもしれぬ」
「勿体ないお言葉でございます」
なんだか、こうして話をする分にはただの気の良いおっちゃんだ。ただ、このおっちゃんには妻が複数人いて、それぞれとの子供もいるわけで。
『《漆黒の魔女》は生まれて初めて使った魔法で実の母親を殺した』

実の子に、側室とはいえ妻を殺されるのはどういう気分なのだろうか。

背筋に走った悪寒に思考を慌てて引き戻す。まさか当人に聞けるわけがない。代わりの話題を探して、

「あの、陛下はどうしてわたしを殿下のお相手に選んだのですか？」

「選んだのは私ではなくリオネルだ。シルヴェストル公爵家の娘を、と指定したのはそう不思議でもなかろう？」

「父とは仲がよろしいのですね」

「ジャンをからかって遊ぶのは楽しいのだよ。向こうも私に難題を押し付けてくるがね」

歳が少々離れているが、友人、あるいは兄弟のような間柄なのかもしれない。

国王と宰相、あまり仲が悪くては国政にも差し支えてしまうだろう。アランが父の後を継ぐとして、リオネルとの間に同じような友好を築けるか。

だからこそ、間を取り持つための俺、か？

「リディアーヌよ。其方はなかなか面白いな」

「陛下まで、殿下と同じようにわたしをからかうおつもりですか？」

「む。さすがに息子よりは分別があるつもりだぞ。ただ、執務だけをしていても退屈でな。暇つぶしに其方のことをもっと聞かせて欲しいだけだ」
「そんなことでよろしければ、なんなりと」
「そうかそうか。ジャンに『娘に会わせろ』と言ってもなかなか頷かなかったからな。この機会にたっぷりと聞かせてもらおう」
本当に退屈だっただけなのか。それとも、ある種の面接だったのか。
俺はそれからしばらく国王陛下に頭を撫でられながら自分のことを話すという、よくわからない役割を一生懸命に果たした。

貴族の子女が通う学園もまた王城同様、敷地の周囲を塀で囲まれている。
さすがに堀はないものの、侵入者への警戒は十分に厳しい。外周に複数配置された門では身元と用件の確認が行われ、それをパスしなければ中には入れない。
とはいえ、門の前まで公爵家の馬車で乗り付けた俺とアンナは身分証の提示も求められず、用件を聞かれただけだった。馬車に装飾された紋章と俺の纏った上等な

ドレス、そして紅の髪が何よりの証明だからだ。
「オーレリア・グラニエさまに魔法を教わりに参りました」
「お、オーレリア・グラニエ様!?」
「《漆黒の魔女》に……!?」
用件の方は大層驚かれたものの、家族・友人等々の面会は特に禁止されていない。俺たちは特に文句をつけられることもなく通された。
「お通りください」
「どうかお気をつけて！」
むしろ身の安全を心配された。門をくぐるとその先は並木道になっている。学校というか庭園のような造りで緑が多い。高校というか、郊外に敷地を持つ総合大学に近い印象だ。
「さすがに広いわね」
「あらかじめ地図をいただいていなければ確実に迷っていましたね」
あれからオーレリアは俺宛ての手紙を一通送ってきた。そこには寮の位置を記した簡単な地図と「来る時は食事を持ってくるように」という指示。

学園内には美味しい学食――といってもレストラン的なところらしい――もあったはずだが、何故わざわざ食事を持って来させるのか。一緒にのんびり食事しながら歓談、というタイプにも思えないので、おそらく自分で用意するのが面倒なだけなのだろうが。

アンナは軽食の入ったバスケットを抱えているので、日傘は俺が自分で持つ。白いパラソルを支えるのと逆の手に地図を持ち、寮へ向かって歩いていく。途中、年頃の男女と何人もすれ違う。

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

挨拶されれば返すのが礼儀だし、目が合った場合はこちらからも挨拶する。

俺たちは心なしか周囲から注目を浴びていた。まあ、こんなところに来る子供はあまりいないのだろう。それを言ったら学生に教えを乞うのも異例なのだが。

「ここね」

学園の女子寮。初老の管理人（貴族だ）に挨拶をし、オーレリアの部屋の位置を教えてもらう。最も奥まった一角にある広い部屋を使っているらしい。礼を言って

中へ。

「これが学園の寮なんですね……！」

アンナが小さく歓声を上げた。テンションが上がるのもわかる。寮と言われて想像する、古かったり狭かったりごちゃごちゃしていたりといった雰囲気は微塵もない。廊下は広く、部屋ごとの間隔も大きい。中を歩く人物も一定以上の礼儀作法を収めた令嬢やメイドばかりなので華やかかつ穏やかな雰囲気が漂っている。

寮には中庭や談話室なども用意されているらしく、移動する途中、そうした場所でお茶を片手に歓談を楽しむ生徒の姿を見ることができた。

「社交的な生徒が多いのかしら」

「そうですね。学園は同世代の貴族が集まる貴重な場ですから、休日は人脈作りのためにもお茶会や食事会、勉強会などが積極的に催されるそうです」

「ただのお休みというわけじゃないのね。……でも、それならオーレリアさまが『暇だから』とばかりに休日を指定したのはなんなのかしら」

「あの方は規格外ですので、常識が通用しないのかもしれません」

アンナの言うことはだいたい当たっていた。

奥に行き過ぎて空室が目立つ突き当たりの部屋。ドアをノックすれば「どうぞ」との返答。

顔を見合わせた後、アンナがゆっくりとドアを開けば――。

「これはまた、典型的ね……」

あちこちに山積みされた本やがらくた。クローゼットは雑に閉じたせいか服がはみ出している。さすがに食べ物や食器が散乱している様子はないしベッドの上だけは物がない状態に保たれているものの、全体の印象はひどく退廃的。

例えるなら片付けられないオタク女子か、あるいはマッドサイエンティストの部屋。

そんな部屋の奥から、オーレリア・グラニエは下着のように肌も露わなナイトドレスだけを纏い、椅子へ横向きに座って俺たちを出迎えた。

「ようこそ、我が生徒。ここが魔女の棲み処よ」

カウンター悪役令嬢への道 4

「私の噂くらいはさすがに聞いて来たでしょう？」
オーレリアはアンナの持ってきたバスケットを受け取ると、その中身をさっさと食べ始めた。
軽食は二人前近い量があるものの、一口も分けてくれそうにない。俺たちは昼食を済ませているからいいのだが……。
年頃の令嬢とは思えない所作に苦笑いをしつつ俺は「ええ」と答えた。
「《漆黒の魔女》。なんでも、初めての魔法で実の母親を殺めたとか」
「あら、随分率直に口にするのね」
「回りくどいやり方は性に合わないもので。噂は本当なのでしょうか？」
「ええ、本当よ。倒れた母の姿まではっきりと憶えてる」
淡々とした口調。そこには何の感情も籠もっていない。食事の手が止まったのは一瞬だけで、それは喋っているせいで口が使えないから、という単純な理由からに見えた。

「私は自分の母親を殺した。それが原因で王位継承権を剥奪され、表向きは王族としても扱われていない」
「メイドを使わず生活しているのもそれが理由ですか」
「いえ、それは単純に煩わしいからよ」
違うのかよ。
一口齧ったサンドイッチを手にしたまま、オーレリアは「それで、どう？」と嫣然と笑った。
「本人の口から聞いた感想は？　軽蔑した？」
「いえ、特にそういったことはありません」
「あら」
少女の顔に意外そうな表情が浮かぶ。アンナも「本気ですか!?」と言いたげな視線をこちらに向けてくる。
俺は軽く肩を竦めて、
「わたしは別に善人ではありません。極力正直でありたいとは思っていますが、万人に等しく愛を振りまくなんてとても。ですから、オーレリア様が魔法を行使した

結果、お母さまが亡くなった。その結果だけを見て悪と断じることはできません」
「どういう意味かしら？」
「深い意味はありません。ただ、初めての魔法は半ば無意識に行使されることも多いのでしょう？」
　他でもない俺自身もそうだった。だからわかる。ちょっとしたうっかりがあっただけ意図せず魔法が人を向いた可能性は十分にある。
「もちろん、今の話ではオーレリア様がお母さまを殺めたことを否定することはできませんが。わたしとしてはきちんと魔法を教えてくだされればそれでいいということです」
「私が貴女を殺すかもしれない、とは思わないの？」
「今でも気軽に人殺しをしているのなら、学園の寮ではなくお城の牢獄に収監されているはずです」
「そう」
　信じたわけではない。個人的な都合のために評価を保留にしただけ。今後、自分や周りの人間が脅かされた時にはならいつでも手のひらを返す。

俺の返答を聞いた少女は堪えきれないというようにくすくすと笑いだした。また、それでいて食事も止めない。日頃、テーブルマナーを徹底されている身として若干イラっとする。

「オーレリア様。この部屋、アンナに掃除させてもよろしいですか？」

「駄目よ。私が使いやすいように配置しているのだから、整理整頓されたら逆に利便性が下がるの」

片付け下手な人間の常套句である。

駄目だこいつ、と説得を諦める。

「初日ですが、何から始めますか？」

「ああ。とりあえず、机の上にある杖を握ってみなさい。そうそれ。そこからだと遠いから今取ってあげる」

「自分で取りますから、食べ物を持った手で触らないでください……！」

ポテチ食べながらゲームしても平気なタイプか、と、オーレリアへの心証を下方修正しつつ、少女が『杖』と呼んだものを手に取る。椅子に座ったオーレリアに近づいた時にふわり、と、爽やかないい匂いがした。

杖は水晶か何か、透明な石で造られた細長い棒だった。片側の先端に20～30面体くらいの多面体状の石がはめ込まれており、手に取ると意外にずっしり重い。

「それに魔力を流し込みなさい。魔法で病を克服した貴女ならできるでしょう？」

「ええ。魔力を流すだけなら」

ジゼルの一件はさすがに知っているか。頭の片隅でそんなことを思いながら杖に魔力を流す。念のため量は控えめにしたが、少量が吸い取られた途端、先端がぼんやりと発光して総量の数パーセントが一気に持っていかれる。そして、握っている下端を基点に杖の全長の半分ほどが輝きに包まれた。

先端の宝石は赤と白の二色にその色を変化させている。

オーレリアはそれを見て「へえ」と感嘆の声を上げた。

「成人王族の平均に相当する魔力量。八歳でこれは将来有望ね。天才と言っても過言ではないわ」

「養母がわたしには才能がある、と言っていたのですが、それは魔力量のことだったのでしょうか」

「おそらく、そうでしょうね。一般的に魔法の才能と言えば魔力の量だもの」

大事なのは経験と答えた俺へのあてつけか、少女はわざわざそんなことを言ってくる。

話しているうちに食事の残りは着実に減っており、完食が近い。

「属性は火と光。二重属性とは、貴女、少し天に愛され過ぎなんじゃない？」

これは魔力を測定する魔道具だったらしい。属性までわかるとは便利だ。

「わたし、光の属性もあるのですか？　……正直、要らないんですが」

「熱の精密操作ができた時点で予想はついたと思うけど？　セレスティーヌ様と被るのが気に食わなくても、使えるものは使いなさい」

「こほん。……全属性のオーレリア様はどのくらいの魔力をお持ちなのですか？」

「私？　私は貴女の魔力の六割増しくらいね」

天才云々が完全に嫌味だった。オーレリアと比べたら俺なんて凡人……とまでは言わないものの、せいぜいが並の天才である。目の前でサンドイッチに夢中になっている真の天才とは大きな差がある。

すごいと言われたはずなのに何故か負けた気分になりつつ、小さくため息を吐く。

「魔力量は成長するものなのですか？」

「ええ。身体が出来上がる頃までは自然に成長し続ける、と言われているわ。それから繰り返し魔力を操作し身体を慣らすことでもある程度は成長させられるそうよ」

だから俺は「八歳でこれはすごい」と言われたわけだ。学園に入学する年齢には王族の平均値を上回っている可能性が高い。

ひょっとすると、俺がリオネルの婚約者に指名されたのはこれも理由の一つだったのか。

「両親はわたしの魔力量を知っていたんでしょうか」

「大まかには把握していたでしょうね。貴族家に生まれた子は普通、赤子のうちに魔道具で魔力量を調べられるものだから」

「なるほど」

知ってはいたが、それを俺には知らせていなかったというわけだ。若干癪だが、つい最近まで我が儘娘だったことを思うと知らせるタイミングはなかった気がする。下手に教えて生母アデライドの魔法を再現でもされたら目も当てられない。

めぐり合わせが悪ければセレスティーヌを焼き殺していたかもしれない。それは

それで若干すっとするかもしれない……なんて冗談を言えるのは実際にそうなっていないからだろう。

バスケットの中身を平らげたオーレリアは、最後にガラス容器に入った紅茶を味わいつつ笑って、

「それだけ魔力があれば私の研究に十分貢献できそうね」

「いえ、あの、先に魔法を教えていただきたいのですが」

授業の対価として協力するのはやぶさかではないが、助手になりにここへ来たわけではない。

すると小さく舌が鳴らされて、

「もう基本はわかっているんでしょう？　なら、教えることなんて殆どないの」

「まさか。それなら教師なんて必要ないではありませんか」

「そのまさかだと言ったら？」

空になったガラス容器がすっと突き出される。受け取った俺に、オーレリアは「これを水で満たしなさい」と言った。

「できる？」

「まあ、それくらいなら……」

指先を瓶の口に当てて「水よ」と唱える。アンナと練習した時は上手くいかなかったが、今回はいとも簡単に水が生まれた。瓶の口が狭いのでイメージと消費魔力を調整して少しずつ注ぎ込むようにする。『さすがわたしね。完璧だわ』と思っていたら「遅い」と指導が入った。

「もっと一気に満たせない？」

「そんな無茶な……」

いっぺんに満たそうと思ったら口から注ぐのでは足りない。なら、どうしたら？瓶の中にぽん、と水を生み出せればできそうだ。そんなことは普通できないが、これは魔法なのだから不可能も可能にできるかもしれない。

イメージを変更。瓶を包み込むように両手で持ち、魔力を瓶の内側に浸透させながら水を生み出すイメージ。

すると――ちゃぷん、と水音。

ずっしりと重くなった瓶を持ち上げて、

「できたじゃない」

「……できましたね」
「いえ、普通はできません。騙されないでください、リディアーヌ様」
「そ、そうね。この魔法はたまたま前に見たことがあったし」
これにオーレリアは「ふうん」と首を傾げて、さらにいくつかの命令を出してくる。
「この部屋の中に風を吹かせられる？」
「そのくらいでしたら」
「そこの壁に小さな穴を空けてみなさい」
「それは……できました」
「じゃあその穴を埋めて」
「全く同じ石でなくても良いのなら」
ここまで終わった時点でアンナが泣きそうになっていた。
「オーレリア様が推薦された理由がよくわかりました。私だったらできるようになるのに一年以上はかかってます」
「アンナだったかしら。この子の頭がおかしいだけだから安心しなさい。まあ、私

もこのくらいは普通にできたけど」
　なら、あんたが頭のおかしい筆頭じゃないか。
　漆黒の瞳がすっと細くなって俺を捕捉し、
「貴女が言ったことでしょう？　重要なのは経験。思い浮かべられる事柄なら貴女は既に大抵のことを実行できる。だから、私にできるのは経験の蓄積を増やしてやることくらい」
「なるほど。……よくわかりました」
　俺への指導能力に限って言えば、オーレリアはずば抜けている。他の指導者についていたら「常識的な対応」で、同じことをするのに数か月を費やしていたかもしれない。
　深く頷く俺を見て黒髪の少女――魔女は満足そうに笑って、
「だから、魔法の訓練において最も重要な事柄について初めに教えておきましょう」
　自分の左腕を心臓より高く持ち上げると、右手の人差し指を左手首に当て、見えない刃によって浅い切り傷を作り出した。
「なっ……!?」

「何をなさっているのですか!?」
「落ち着きなさい」
当のオーレリアはいたって平静。痛みに顔をしかめながらも淡々と「よく見ていなさい」と言って――今度は自分の身体をゆっくりと癒し始める。
傷つけられた血管が修復され、肌が元通りになっていく。傷つけた時の逆回しをするような光景に、俺はごくりと息を呑んだ。
と、思ったら同じ個所がすぱっと切り裂かれて、
「はい。治しなさい」
「は!?」
こいつ、天才を通り越して馬鹿なんじゃないだろうか。
どこの世界に自分の身体を治療魔法の実験台にする教師がいるのか。しかも一度実演しただけで生徒にやらせようとするとか。
「早く。失った血液までは戻せないんだから」
「ああ、もう！　どうなっても知りませんからね……!?」
憤りに任せて少女に近づくと、俺はその細い手首に両手で触れる。そして、マン

ガやゲームで見た回復魔法を思い出しながら、淡い光が傷の修復箇所を埋めていくイメージをする。

「あ……！」

アンナの歓声。イメージ通りに生まれた光の中、オーレリアの切り傷が塞がっていく。

魔女は確かめるようにそこに触れて「ふむ」と言い、

「小賢しいイメージ作りのために光を出す暇があったら、医学書を読んで人体の造りについて勉強しておきなさい。足りなければ自分の身体を刻んで観察すればいいわ」

「そんなことを言っているから《漆黒の魔女》なんて呼ばれるのでは？」

「必要なのだから仕方ないでしょう。失敗した時の保証がなければ魔法の訓練なんてまともにできないもの」

「最も重要と言ったのはそういう意味ですか」

魔法の訓練で一番怖いのが失敗や暴走による怪我だ。それを防止するには術者当人が治癒の魔法を覚えればいい。もちろん、本人は難しい場合も多いだろうから、

それもあって教師がつくのだろうが、

「魔法は使えば使うほど頭だけでなく身体が慣れる。魔力量を増やすためにも毎日反復して練習しなさい。そこでの怪我は自分で治すこと。わかったかしら？」

「かしこまりました。ですが、オーレリアさま。わたし、ここへ来る時点で無理して時間を捻出しておりまして……」

毎日練習時間を設けろとか正気かと暗に問えば、彼女はきょとんと首を傾げて、

「時間くらい、魔法でなんとかしなさい。できないの？」

そろそろ一発くらいぶん殴っても許されるのではないか、と、本気で思った。

カウンター悪役令嬢への道 5

「オーレリアさま？　わたしは今まで魔法の勉強を禁じられていて、今日初めて本格的に教わり始めたのですが……」
「あら。駄目だと言われて素直に受け入れていたの？　それに、教わっていないからできない、と？」
「む」
勉強効率の向上を魔法でなんとかしろ。
明らかに無茶を言われているのだが、こうもあからさまに挑発されるとイラっとくる。
何か良い方法があるだろうか。
考えるだけ考えさせておいて「残念。そんな事は不可能よ」なんて時間のもったいないことをする人にも思えないので、何か彼女なりの回答はあるはず。
「時間の流れを遅くして勉強時間を増やす……のは、さすがに無理ですよね？」
「魔法に不可能はない、と言いたいところだけれど、まず無理ね。事象として規定

するのが難しすぎる上に必要な魔力量が膨大になりすぎる」
「なら、短い睡眠で疲れが取れるようにする――いえ、休息は魔力回復のためにも必要でしょうから、魔力を使って実現しては本末転倒ですね」
「無理だとか言いながら案外思いつくじゃない。でも、もっと単純な方法があるでしょう？」
「単純……記憶力を上げて一度で憶えられるようにするとか」
勉強時間の大半は覚えるための反復練習。だから一度で頭に叩き込めればそれだけ効率は上がる。進度が良くなれば自由時間の捻出も夢ではないだろう。
しかし、この方法にも難がある。大量に頭へ詰め込んでも必要な時に思い出せなければ意味がない。それに、知識を頭に叩き込むイメージというのも作りにくい。
それなら、
「憶える助けではなく、思い出す助けとして魔法を使う？」
「正解」
「私、そのようなお話は聞いたことがないのですが……」
アンナが困惑した様子で呟く。

「それはそうでしょうね。とっておきの魔法は誰しも秘匿するもの。使っても人目に触れない魔法なら猶更。私も自分以外に使い手がいるかどうかは知らない」
「では、どうしてわたしに教えてくださったのですか？」
「貴女なら自力で到達するだろうから。そうなる前に、私にも貴女のやり方を教えて欲しいから」
「なるほど」
こくんと頷いて了承を示した。もともとそれが交換条件の一つだ。
俺は「思い出すための魔法」について少し考えて、
「属性としては心の魔法、ということになるでしょうか」
「そうね。自分の心に働きかける魔法。自分への魔法には防御が働かないから特に有効であると同時に、危険な魔法でもある」
「そ、そんな危険な魔法をリディアーヌ様に使わせるのですか!?」
「この子は既に一度、いえ、二度も『自分への魔法』に成功しているでしょう？だから、貴女が真似するのは止めておきなさい。廃人になりたいなら別だけどね」
アンナがぶるっと震えて口を噤む。おっかない話だが、自分の心を弄るのだから

当然だ。とはいえ、
「記憶を引き出すだけの魔法ならそう大きな危険はないかと」
「そう？　なら、貴女にはもう具体的な想像が出来上がっているのかしら」
「そうですね。わたしなら、一つ一つの記憶を箱に例えます」
「箱？」
「部屋でも構いません。そして、関連のある部屋同士は通路で繋がっている。例えば『りんご』の部屋からは『赤』の部屋に行くことができます。赤の部屋は『薔薇』『ワイン』などの部屋にも繋がっているでしょう」
「ふむ」
俺の説明にオーレリアはしばし、目を細めて内容を吟味。
その後で「なるほどね」と頷いて、
「思い出すという行為は通路の繋がりを辿って目的の部屋へと到達すること、というわけね」
「はい。たくさんの通路と繋がっている部屋――記憶ほど思い出しやすいことになります。思い出したい記憶に関する事柄、地名や人名、日時などと合わせて想像を

膨らませれば、普通に記憶を引き出すよりもずっと簡単になるかと」
「いいわね。これからはその方法も試してみましょう」
「そう言うオーレリアさまはどういった想像を？」
「私は本棚ね。記憶ごとに別々の本として棚に詰まっているの。それを背表紙頼りで手に取って、ページをめくる感じ」
そのイメージもなかなか良い感じだ。特にラベリングをするという発想がすごい。
俺たちのイメージの良いとこ取りをするなら、PCにおけるファイルとフォルダの関係、ディレクトリ構造だろうか。これならファイル名でラベリングもできるし、なんなら検索機能を利用して欲しいファイルをさっと探し出すこともできる。
行けそうだ。面白い思いつきに一人頷いていると、黒髪の美少女は探るような視線を俺に向けてきて、
「さらに何か思いついたのかしら？」
「いえ、さすがにそこまでは。ただ、これなら勉強が少しは楽になるな、と」
俺が思いついた新しい方法についてはオーレリアにも内緒にすることにした。電

子的な概念を説明する自信がないし、イメージの曖昧な魔法に危険が伴うのなら師を危険に晒すことになりかねない。

この天才少女ならそれくらいすんなり乗り越えてしまいそうな気もするが。

当のオーレリアは椅子から身を乗り出して俺の頭に手を置いて、

「優秀な弟子というのはなかなか可愛いものね」

「ありがとうございます」

「じゃあ、教師としての務めは果たしたし、私の助手をしてもらおうかしら。まずは――」

「絶対、そのために無茶な時間短縮をしましたよね？」

弟子扱い&子供扱いで褒めてくれたかと思えばさっさと身を翻し、うきうきと山積みのがらくたを漁り始めるオーレリア。

彼女が《漆黒の魔女》の名に相応しい悪女なのかどうかはまだわからないが、生活力のない駄目人間であることは間違いなさそうだ。

俺はジト目で彼女を眺めて、

「その前にまともな服を着ていただけないでしょうか。その格好で居られると気が

散ります」
「何よ。ドレスなんて着ていても動きにくいだけだし、いっそ裸になりたいくらいなのだけれど」
「いいから身嗜みを整えなさい、この痴女！」
こんな美女の裸を見慣れてしまったら、男だった頃のプライドがいよいよピンチである。

「……なんだか、どっと疲れたわ」
「半日足らずの時間が永遠のように感じられましたね……」
家に帰り付いた俺とアンナは学園寮で体験した出来事を思い返して深い息を吐いた。
あれから日が暮れかけるまで研究の手伝いをさせられた。終わってみれば授業をしてくれた時間はほんの僅か。果たして俺は勉強しに行ったのか手伝いに行ったのか。そのくせ成果はこれでもかと山積みされているので怒るに怒れない。

「リディアーヌ様。くれぐれも危ないことはなさらないでくださいね。身体に異常を感じたら魔法はすぐ中止してください。それから、部屋を壊したり汚したりしないように」

「わかっているわ。わたしはオーレリアさまと違って常識はあるつもりだもの」

「もちろん、私も信じています。でも、あそこにいるとリディアーヌ様がどんどん影響されてしまいそうで……」

確かに影響がないとは言えない。

なにしろ、オーレリアは格好いい。いや、だらしない格好とか散らかった部屋はともかく。他者に阿ることなく自分を貫く姿勢には強く憧れる。『そうね。オーレリアさまだったら、お養母さまにもはっきり宣戦布告しそうだもの』。

もちろん、今の俺に同じことができるとは思えない。それでも参考にすることはできる。あの人のような強さを手に入れるにはもっと強くならなければ。

「無理のない範囲で頑張ることにしましょう。身体を壊したらまた何日も寝込むことになるものね」

「はい、是非そうしてください。私もできる限りお手伝いしますので！」

「ありがとう。でも、アンナも無理はしないでね」
それから部屋で身支度を整えたらすぐに夕食だ。
「リディ。オーレリア・グラニエに変なことをされなかったか!?　あの女が妙な動きをするようなら後見人に監督不行き届きを申し入れるから、必ず言うのだぞ」
「ありがとう、お父さま。でも、心配し過ぎよ。身体には傷一つないわ」
顔を見せるとすぐに父から確認を受ける。笑って答えれば彼はほっと安堵の表情を浮かべて、
「そうか。指一本触れられなかったのだな？」
「え？　触られるくらいは普通にあったけど？」
「……おのれ。やはり野放しにしておくのが間違いだったのだ。次回からは護衛をつけるべきか。いや、しかし、下手な者を付ければ逆に利用される恐れが……」
「旦那様。そもそも殿方、しかも平民となれば女子寮への出入りにも制限がかかるかと」
怪我よりも篭絡の心配をしているように見える父。暴走しかける彼にセレスティーヌがさらりと待ったをかけた。

警備の兵とはドレス切り裂きの一件から変わらず仲がいい。部屋前の警備は終了したが、庭へ散歩に出た時などに顔を合わせて少し話をしたりする。だから頼めばついてきてくれるだろうが、兵たちの中に女はいない。執事とかならともかく戦闘要員の出入りは難しい。

「心配ないわ、お父さま。オーレリアさまはわたしに研究を手伝わせたいみたいだから。むしろ丁重に扱ってくれるはずよ。腕が良いのは間違いないし」

「む、そうか。リディアーヌがそう言うのならいいのだが」

「まあ、服装がだらしないのはいただけないけれど。今日なんて男性には見せられない格好をしていたわ」

「え、あの、お姉様？　オーレリア様は王族なのですよね？」

「ええ。王族には個性的な方が多いのかもね」

しかし、あの服装はなんとかしたい。今日はとりあえず着てもらったが、次回からも素直に応じてくれるかどうか。

「いっそのことオーレリアさまにドレスをプレゼントしましょうか」

「リディアーヌ。僕には何もくれないのかい？」

「え？　お兄さまもドレスが欲しいのですか？　……髪を整えればきっとお似合いになるとは思いますが」

「そうじゃなくて。プレゼントされるオーレリア様が羨ましいと思っただけだよ」

女装がよっぽど嫌だったのか、アランは慌てて弁解してきた。うん、まあ嫌だろうな。前世の俺だったら「死んだ方がマシだ」と思うところだ。

アランの場合は似合うからまだマシだと思うが、変な扉を開かれても困る。

「では、お兄さまにも何かプレゼントいたします。せっかくだからシャルロットにも何か贈りましょうか」

「いいのですか？　ありがとうございます、お姉様」

「リディ？　私には何もくれないのか？」

「もちろんお父さまにもあげるわ。お養母さまには……サシェでもお贈りしますね」

見舞いを包い袋一つで済まされた件をちらりと匂わせると、セレスティーヌは「それは楽しみです」とにこりと微笑んだ。ちっとも動揺しない辺りが憎い。

さて。

養母には本当に包い袋でいいとして、他の三人に贈る品は悩みどころだ。採寸で

出会った貴族出の職人・ナタリーに面白いものがないか相談してみようか。ドレスのデザイン画もそろそろ上がってくるだろうからちょうどいい。

そうしたら、ナタリーと会う時間を捻出するためにも勉強を進めなければ。

「少し試してみましょうか」

夕食の帰りに書庫へ寄って、読んだことのない本を一冊借りてくる。

本を最初から開き、ひとまず読み返したり深く考えたりすることなくさくさく読み終えたら、アンナに本を渡して問題を出してもらった。

答える際は魔力を頭へ流しながら、ついさっきの記憶を検索するイメージ。

「古い歴史を持つ王家の紋章にはある共通した特徴がありますが、それはなんでしょう？」

「それぞれ異なる架空の動物が使われていること。我が国は天馬（ペガサス）。隣国は竜（ドラゴン）。他にも一角馬（ユニコーン）や巨大な鯨を象徴とする国があるみたい」

「正解です。では……現在も多くの国において魔力を持つ貴族が国を支配する体制が築かれていますが、この理由として最も強いのは？」

「魔力持ちは魔法への耐性を持っているから。要職にある者が魔法で洗脳されて国

が滅んだ、なんて笑えないものね」
「これも正解です。では、もう一問。魔道具に用いられる魔石は石から作られますが、魔石に加工可能な石の種類は？」
「なんでもいい。石によって向き不向きはあるようだけど、その辺の石ころでも魔石に加工することはできる。だから、無理に宝石を使う必要はないわけね」
「正解です。リディアーヌ様、本当に流し読みしただけで覚えてしまったんですね……!?」
「覚えたというか、ずるをして思い出してるって感じかしら」
通常、勉強の際は反復によって頭に刻み込む――部屋の通路を整備するが、一度見聞きした時点で部屋と通路自体は形作られている。だから、狭くてがたがたの道であっても道順さえ調べることができれば部屋まで到達できる。
「これ、思ったよりも使えるかも」
翌日もオーレリアの部屋へ通い、明けた平日。俺はさっそく記憶探査魔法（仮）を試した。
すると座学では効果覿面。一応メモは取るものの、その気になれば思い出せるの

で「書き終わるまで待っていてください」と言う必要がない。さっとメモした程度でも教師の質問に答えられるので授業がさくさく進む。

実技に関しては身体に覚え込ませないと意味がないのでそこまで効果はなかったものの、教師による実演を正確に思い出せるので十分に役に立つ。あるいは、会心の出来だった時の感覚を反復することもできるので、やり直しをさせられる回数がぐっと減った。

結果。

俺は家庭教師から褒められ、授業の速度が向上。こうなったら行けるところまで行こう、みたいなノリになった教師たちが授業予定とか関係なくがんがん先の内容まで教えてくるようになった。

こんなはずじゃなかったと思いつつも、進度的に余裕があるのは事実なのでお願いすれば授業を早めに終わらせたり、あるいは午前中だけお休み、とか対応してもらえるようになった。

空いた時間は魔法の練習やナタリーとの話し合い、リオネルとの遊び（一応デートか？）などに充てる。

こうして、日々はあっという間に過ぎていった。

自宅以外の場所で着替えるのは初めてだ。

控え室として王宮内の一室を与えられた俺は、若干落ち着かない気分を味わいながら総勢五名ものメイドによる着付けと化粧、ヘアメイクを受けた。

身に纏うのは自身の髪色にも似た紅のドレス。丁寧に櫛を入れたストレートの髪には贅沢にあしらったバレッタを留める。まつ毛を整えられ、唇に桜色の紅を載せられ、頬にさっと色を入れられたことで白人系のはっきりとした顔立ちがさらに強調される。

既に婚約自体は承認を受け事実となっているため、今回は殊更清楚さを強調しなくてもいい。むしろ白い肌とのコントラストを魅せることや前に着たドレスとの差別化も考え、むしろパーソナルカラーの赤と黒をしっかりと主張していく。

この国の人間は白を尊ぶ傾向があるらしい。また、王家に迎えられる女性は伝統的に金髪を持っていることが多いという

それを考えるとセレスティーヌやシャルロットのような人間が歓迎されるはずで、俺はそこから外れているのだが――俺に赤と黒を纏わせたい、というセレスティーヌの提案を歓迎してくれたのは他でもない、この国の現国王だった。

『伝統に縛られる必要はない。其方には赤や黒が良く似合う』

国家元首の承認はこれ以上ない後押しだ。

ナタリーに注文した新型ドレスは予想通り間に合わなかったものの、代わりとして選ばれたこのドレスも負けず劣らず豪華で煌びやかなデザインである。ふわりと広がったスカート、子供だからいいだろうとばかりにこれでもかと取りつけられたフリルとレースは俺の容姿と相まって強烈に人目を惹きつけるだろう。

その威力はアンナやマリーに交じって着替えを手伝ってくれた王城のメイドたちのうっとりするような表情を見ればよくわかった。

「本当にお美しいです、リディアーヌ様」

「これならリオネル殿下もきっと惚れ直してくださいますよ」

「ありがとう。……でも、リオネル様はきっと『また派手なドレスだな』と仰るだけではないかしら」

ちょっと着飾ったくらいではあのお子様はノーダメージだろう。くすりと笑って「仕方のない殿下」といった雰囲気を出すと、メイドたちもくすくす笑ってくれる。室内に和やかな空気が流れたところで、部屋のドアがノックされる音。

「今日のドレスもまた派手だな、リディアーヌ」

ほら見ろ。

入ってきたリオネルは「女の着替えは本当に面倒だな」とでも言いたげに褒めてるのか貶しているのかわからない感想を述べてきた。本人も白いスーツに身を包み装飾品で飾り立てられ、美少年ぶりをさらに高めているのだが……まあ、所詮お子様なので馬子にも衣裳といったところか。

俺は苦笑しながら「とてもよくお似合いです」と賛辞を返して、

「お前も似合っているぞ。この前の白っぽいのよりもずっとこっちの方がいい。せっかく顔がいいのだから似合うドレスを着ろ」

『な……っ!?　ちょっと不意打ちはやめなさいよ、馬鹿王子！』

これにはメイドたちが小さな歓声を上げた。なんだかんだこの二人はラブラブなのだ、みたいな誤解は勘弁して欲しい。俺はあくまでリオネルから「おもしれー女」

枠で重宝されているだけであって、別に惚れられてはいないのだ。
まあ、それはそれとして笑顔で「ありがとうございます」とお礼は言ったが。
「さて。心の準備は良いか、リディアーヌ」
「はい。一生に一度の晴れ舞台です。楽しんで参りましょう」
さすがにエスコート云々はしっかり練習させられているということか、さっと差し出されたリオネルの手を取り、俺は歩き出す。
今日はリオネルの九歳の誕生パーティー。
多くの貴族が集められたこの場では同時に王子の婚約者が広くお披露目されることになっている。ここから親世代と合流した俺は国王らと並んで壇上に立ち、衆目に晒されながら挨拶をする。
華々しい社交界デビュー。
これまで狭い世界で生きてきた分だけプレッシャーはかかるが、同時に胸が躍るような気持ちもある。一生懸命高めてきた俺の実力がどの程度通用するのか、今日この日である程度確認できる。
『やってやろうじゃない。わたしはわたしらしく、国中に存在を知らしめてやるわ

！』

ああ、その通りだ。

心の中の自分の声に小さく頷いた俺は、魔法を使って自分の体温を僅かに高めてやる。意図的に生み出された高揚が緊張に勝って一種の集中状態を作り出す。

そうして俺――リディアーヌ・シルヴェストルの、カウンター悪役令嬢としての真の第一歩が始まった。

これでいったん一区切りでしょうか。

次回からは何話か他者視点の閑話をお送りします。リディアーヌのお披露目（悪役令嬢デビュー？）の様子も誰かの視点で描く予定です。

紅髪の公爵令嬢：リオネル誕生パーティ（前編）

「今度、城でパーティーが開かれる。私と一緒に出席しなさい」

九歳になったある日、少女は父から突然そう告げられた。

伯爵家の長女として生まれ、使用人に世話される生活を送ってきた。自分が恵まれているのだと漠然と感じる一方で、屋敷の庭から見える大きなお城に強い憧れを抱いていた。

お城には王様や王子様が住んでいて、自分たちよりもずっと華やかな暮らしをしている。

大きくなったら夜会や舞踏会に招待され、綺麗なドレスを着てお城に行く機会もある。そうしたら王子様にも会えるかもしれない、そんな風に聞いて育ってきた。

だから、お城に行けるのはもっと先のことだと思っていたのだが。

「リオネル殿下がリディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢とご婚約なさったらしい」

「まあ。ではお披露目があるのですか？」

「ああ。一か月後にある殿下の誕生パーティーに二人揃って出席なさるそうだ。広

く周知を行うつもりなのだろう。同世代の子供がいる家全てに招待状が送られているそうだ」

リオネル殿下は三番目の王子様だ。少女は一足先に九歳になったが、学園に入学したら同学年になる。

子供が主役だからか、パーティーは「保護者一人、子供一人」と参加者が指定されているらしい。少女には上の兄姉がいない。跡継ぎになる予定の弟はまだ幼いため、参加するには少女を連れていかなければならない。

「公爵家が要望したようだな。まあ、面白い趣向ではある」

「リディアーヌ様が公式の場に出るのは初めてですもの。広く周知したいのでしょう」

少女にとって遠い存在だった王子様。その婚約者になったリディアーヌという子のお陰で少女はパーティーに出られるらしい。

どんな子なのだろうか。

紅の髪と瞳を持った美しい容姿だという彼女と早く会ってみたくなった。

「もし、リディアーヌ様とお近づきになる機会があれば逃さないように」

リディアーヌと友達になれ、ということらしい。

友達。それはとても素敵なことだと思った。空想するしかなかった世界がぱっと目の前に広がったようで、わくわくが止まらなくなった。

パーティーまでの一か月はあっという間。大急ぎでドレスを調達し、王族の前に出ても大丈夫なようにと礼儀作法の授業が厳しくなった。辛いと思う気持ちもあったが、期待と興奮の方がずっと大きかった。

そして当日。

少女は手持ちのドレスの中で一番高いという綺麗で可愛いドレスを着て、父と一緒に馬車へ乗り込んだ。今までは眺めるだけだったお城がどんどん近づいてきて、馬車を降りると想像以上の光景があった。

広く豪華なホール。

凛々しく紳士的な男性たちと、美しい女性たち。

父と共に挨拶をして回ると、何人もの女の子から「仲良くしてください」と言われた。笑顔で頷いて友達になった。

そして、

「皆、今日はよく集まってくれた」

一目見ただけで偉い人だとわかる男性がホール全体を見渡せる高い場所に立って挨拶を始めた。父に寄れば彼が王様――国王陛下だと言う。

「今日のパーティーは我が第三王子リオネルの九歳の誕生日を祝うためものだ。そしてもう一つ、リオネルの婚約者を紹介するための場でもある」

陛下に促されて進み出たのは金色の髪をした美しい少年と、そして一人の少女。

リディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢。

一瞬で心を奪われた。胸元に薔薇の刺繍が施された真っ赤なドレスを纏う、神秘的かつ儚げな少女。深い紅色の髪に宝石のような瞳を持ち、ノースリーブのドレスから白く滑らかな肌を覗かせている。ぴんと姿勢を正した状態も、そこからカーテシーに移る動作も今年九歳になる少女とは思えない。

「こんなにも大勢に誕生日を祝ってもらえて嬉しく思う。どうか、私の婚約者も同じように歓迎して欲しい」

「リディアーヌ・シルヴェストルと申します。光栄にもリオネル殿下と婚約させていただくこととなり、心より嬉しく思っております。わたしを選んでくださった恩

に報いるためにも精一杯、励んでいく所存です」

凄い。

リオネルとリディアーヌはまさにお似合いの二人だった。昔は分不相応にも「王子様と結婚する！」などと思っていたこともあったが、自分にはとてもあの場に立つ度胸はない。

リディアーヌこそが婚約者に相応しいのだと心から思った。

陛下やリオネルたちの挨拶が終わったところで子供だけが小ホールに移された後、少女は無邪気に『お友達』へ自分の感想を話した。

――世界はこんなにも素晴らしかったのだと。

そして、すぐにそれが思い違いだと思い知らされる。

主賓であるリディアーヌはリオネルと共に大人たちにも個別に挨拶をしなくてはならない。そのため、あの少女が不在の中での出来事だった。

◆

◆

◆

「あら。貴女、どなただったかしら？」
「え……っ？」
さっき挨拶したばかりの令嬢から、思いがけない言葉。
彼女は確かリディアーヌと同じく公爵令嬢だったはず。上位の人間には特に失礼のないように、と父から念を押されていた少女は慌ててもう一度名乗った。
すると、公爵令嬢の取り巻きが一斉にくすくすと笑いだす。
「わからないの？　貴女、身の程を弁えろと言われているのよ」
「ど、どういうことですか？」
ため息。明らかな失望を浮かべた取り巻きは「あのね」と前置きしてから少女を睨みつけて、
「殿下との婚約を狙っていたのはリディアーヌ様だけじゃない。失恋された方の前で恋敵を称賛していたのよ、貴女は」
「あ……っ!?　も、申し訳ありません、そんなつもりでは……！」
「どんなつもりだったかは関係ないの。気分を害した方がいて、その原因が貴女。それだけで十分でしょう？」

浮かれていた気分が一気に吹き飛んだ。

冷水をかけられたような気分で必死に謝る。他の取り巻きも冷たい表情で「ひどい子」「信じられない」と口々に言ってくる。自分はとんでもない失敗をしてしまったのだと、涙がひとりでに湧き上がってきた。

渦中にある公爵令嬢を窺うと――驚く。

中心人物の令嬢だけは笑顔だったのだ。彼女がさっと手を持ち上げると取り巻きが一斉に黙る。そして、

「間違いは誰にでもあるわ。だから、水に流してあげる。わたくしともう一度、お友達になってくれるかしら？」

「は、はいっ！　お願いしますっ！　私と友達になってください……！」

縋るような想いで口にすると、にっこりと笑顔が返ってくる。

救われた気分。公爵令嬢の顔がそっと近づけられて、他の人間には聞こえないように囁かれる。

「なら、今からお前はわたくしの派閥の一員よ。いいわね？」

「は、派閥？」

「わたくしの事を一番に考えてくれる『お友達』の事よ。そう、この子達のように」
「っ」
震える。取り巻きの少女達は同じ表情でじっとこちらを見つめている。一見、物腰は穏やかだが、腹の中には魔物が住んでいる。
「わ、私は、何をすればいいんですか？」
公爵令嬢はさっと髪をかき上げると「そうね」と目を伏せて、
「リディアーヌ・シルヴェストルがこのパーティー中に思わぬ事故へ見舞われたら可哀そうだと思わない？　……そう、例えば飲み物を被ってせっかくのドレスが台無しになってしまうとか」
「そ、そんなことできるわけがありません……！」
「あら？　何を言っているのかしら？　わたくしは『そうなったら可哀そうだ』と言っただけよ？　……まあ、失恋のショックもあるし、もし本当にそうなったらむしろすっきりするかもしれないけれど。もちろん、本当にやっては駄目よ。可哀そうだものね？」
ああ。

これが本当の貴族社会なのだと、少女は初めて思い知った。地位の低い人間は自分より格上の人間の『派閥』に入って庇護を願い、その代わりに服従を誓う。

服従とは、主のためならなんでもする、ということだ。

「貴女とは、いいお友達になりたいわ」

令嬢たちが去っていく。

しかし、楽になった気はまるでしなかった。鎖を巻き付けられたかのように四肢が重い。緩慢な動作で辺りを見渡せば、誰も少女のことなど気にしていない。否。目が合っても「何事もなかったように」目を逸らされ、見過ごされる。

この場から逃げ出したい衝動にかられ、目的も定めないまま歩き出す。数歩進んだところで、すれ違った令嬢に足を踏まれた。床に倒れた少女は「あら、はしたない」というくすくす笑いを聞きながら、近くにいたメイドに助け起こされた。

◆　◆　◆

「リオネル様だ」

「リディアーヌ様よ」

主賓が小ホールへやってきた時には、あんなにきらきらしていた世界は嘘のように汚れてしまっていた。どろりとした感情に心の奥底までを浸されながら、リディアーヌたちが多くの子息・令嬢に囲まれるのを見る。

美しいあの少女もきっと派閥の拡大を狙っているのだろう。

王子という後ろ盾を持ったリディアーヌは他の公爵令嬢よりも強い立場にある。彼女の力を削ぐのに最も手っとり早いのは衆目の前で貶めることだ。他の貴族から笑われ、取るに足らないと思われれば思われるほど重い足枷が彼女を縛る。

だから、彼女たちは『お友達』を募って派閥を作る。どうなっても構わない下っ端に明言することなく指示を出して攻撃させる。

世界は、決して綺麗なんかじゃない。

こんなことならお城になんか来るんじゃなかった。自分はただ憧れの人に近づきたかっただけなのに。どうして、そのリディアーヌを攻撃しなければいけないのか。

けれど、攻撃しなければ潰される。

視線を感じる。同時に無言の圧力も。やれ、という無言の命令だ。足ががくがく

と震え、笑顔が作れているかどうかさえわからない。
「お飲み物はいかがですか？」
使用人の運ぶトレイから果汁の入ったグラスを受け取る。
気持ち悪い。夢見ていた世界が一歩ごとにどす黒い色に塗り潰されていく。逃げ場はない。後戻りもできない。派閥に入らなければこの先やっていけない。だったら簡単だ。このまま歩き、偶然を装って飲み物をかければいい。そうすれば少なくともあの派閥からは潰されない。
ちゃんと『お友達』になれたら守ってもらえるはずだ。
「あはは」
少女は壊れたように笑って――手に持っていたグラスを落とした。
ガラスの割れる高い音。しん、と辺りが一瞬静まり返る。片付けのためにメイドが駆け寄ってくる中、少女は「あれ……？」と首を傾げた。
飲み物をリディアーヌにかけるはずだったのに、どうしたんだろう。
どうしてできないんだろう。
せっかくの生き残るチャンスまで不意にした自分。何もかも嫌になって泣きなが

ら蹲る。その時、舌打ちが聞こえた。はっと顔を上げると、こちらに視線を向けているリディアーヌと、そのリディアーヌに指の先を向ける一人の令嬢が見えた。

令嬢の指先から水の塊が生まれて勢いよく飛んでいく。

魔法だ。

魔法を使った令嬢は十二〜三歳。十二歳くらいからは親の判断で大ホールに残っても良い決まりなので、小ホールにいる中では年上の部類だ。だからそんな悪戯を思いついて実行できた。しかし、八歳のリディアーヌには対抗できない。

「あぶな……っ！」

間に合わない。思わず目を瞑り、恐る恐る結果を確認すれば――リディアーヌ・シルヴェストルは一滴の水も被っていなかった。

足元には小さな水たまり。少女の靴にはギリギリのところで触れていない。

こつん。

歩き出したリディアーヌは水たまりには目もくれず、しゃがみこんだままの少女に歩み寄ってきた。

「大丈夫？」

目元をそっと拭われる。優しく、温かい声。はっとして「お手が汚れます」と言えば、微笑と共に首を振られた。

「あなたの顔も涙も汚れてなんていないわ。それに、パーティーを楽しめていない子を放っておいたらわたしまで楽しくなくなるもの。ね？」

「……はい」

呆然としながらもこくん、と頷く。なんだろう。なにか違う。どうしてリディアーヌは自分なんかを助けてくれるのだろう。

「おい、リディアーヌ。婚約者を置いて勝手に行くんじゃない」

「申し訳ありません、リオネル様。ですが、むしろ率先して婦女子を助けるのが紳士的な殿方の在り方ではないでしょうか？」

「ふん。俺が手を差しのべたらお前が嫉妬するだろう？」

「想定外の使い方をしないでくださいませ。さ、立てるかしら？」

差しのべられた手を取って立ち上がると、リディアーヌは「大丈夫そうね」と満足そうに頷いた。

そして、少女の瞳をそっと覗き込んでくると、こう言ったのだ。

「ねえ、名前を教えてくれる？　わたし、最近まで友達がいなかったから、同世代の子と仲良くなりたいの」

「え、あの……あっ！」

また水の魔法。今度はさっきよりも大きい。人だかりの合間を縫って放たれたので誰も対応できていない。

今度こそ当たる。そう思った次の瞬間。リディアーヌがちらりと視線を向けると、水は見る間に勢いを失って空中へ制止した。さっと手が振られると、今度はぱっと拡散して霧のようになる。これなら床も濡れないし触れても大した問題はない。

ぽかん、とした。

「あの、今のは、どうして？」

「ああ、あれ？」

リディアーヌは少し恥ずかしそうに笑って、答えた。

「魔法の訓練を怠るなというのが私の師――オーレリアさまの教えなの。だから、つい、ね」

「オーレリア・グラニエ!?」
「リディアーヌ様が《漆黒の魔女》に師事しているという噂は本当だったのね……！」
「ええ」
さっ、と、紅の髪がかき上げられる。
「魔法の腕比べなら喜んで受けて立つから声をかけてちょうだい。ただし、挑戦したいからって周りの人やわたしの友達に迷惑をかけないでね。そんな奴は泣かしてやるから」
「……ああ」
止まったはずの涙がまたこみ上げてきた。
今度のはうれし涙だ。きっと、自分はこの時のことを一生忘れない。
リディアーヌはあの公爵令嬢とは全然違った。強くて格好良くて、誇り高かった。
たとえこの後、一生彼女から気にかけられなくても、リディアーヌ・シルヴェストルのことは嫌いになれないだろう。あの時の彼女のようになりたいと、きっとそう思い続けるだろう。

けれど。

「もう。あなた、泣き虫なのかしら？」

ほんの少しだけ自分より年下のすごい女の子はもう一度少女の瞳を拭うと、あらためて尋ねてきたのだった。

「それで、あなたの名前は？　お友達になってくれるのかしら？」

当然、答えなんて一つしかなかった。

紅髪の公爵令嬢：リオネル誕生パーティ（後編）

公爵令嬢ベアトリス・デュナンにとって、リディアーヌ・シルヴェストルは「突然現れた理不尽な障害」だった。

「宰相の長女リディアーヌ様がリオネル殿下と婚約なさるそうだ」

「そんな……!?」

ある日突然、ベアトリスは父から第三王子リオネルの婚約を告げられた。

本当に急な話だったのだ。何しろ、王子の婚約相手は今まで争いに参加してさえいなかった人物なのだから。

それまで婚約者候補として最有力なのはベアトリスだった。

ベアトリスは王子より二歳年上の十歳。

公爵家の長女で、九歳の時に魔法の力に目覚めた才女。王子とは八歳の時から何度も顔を合わせていた仲である。我が儘なあの少年は年上の女に躾けられるべきだし、二歳も差があればリオネルが思春期にさしかかる頃にちょうど『身体の準備』が終わっているはず。

長く伸ばしたダークブロンドの髪も金髪の女を尊ぶ王家の伝統に合致している。シルヴェストル公爵夫人のセレスティーヌほど見事な色合いでないのは残念ではあるものの、実際に王子をさらっていったリディアーヌはそもそも紅の髪である。

これが、セレスティーヌの容姿を色濃く引き継ぐ次女のシャルロット相手ならまだ納得できたのだが。

「どうしてですの、お父様!?　わたくしに何か不備がありまして？」

「いや……。どうやらリオネル殿下の強いご希望らしい。シルヴェストル公爵邸で初めて会ったリディアーヌ様をその日のうちに気に入り、婚約を望まれたとか」

「あの殿下が自分から婚約を望まれるなど信じられません」

リオネルは少々素直すぎる性格だ。

母である王妃が十分に愛情を注いでいることもあって母性に飢えておらず、女に興味を示さない。外を走り回ったり剣を振り回したり、チェスの勝ち負けを気にしたり、男性らしい娯楽を好んでいる。

令嬢が気に入られること自体が難しく、多くの好敵手（ライバル）達が挫折を覚える中、ベアトリスは「またお前か」とうんざりした顔をされるのにも負けず逢瀬を積み重ねて

きた。王子が恋愛を意識するようになった時、彼との繋がりにおいて他を突き放すために。

だというのに、あのお子様が令嬢に興味を持ったとは。

「リディアーヌ様と言えばあの引きこもりの出来損ないでしょう？　それがどうして急に……」

リディアーヌ・シルヴェストルに関する情報は少ない。両親が揃って「他人様にお見せできる状態ではない」と詳細を伏せていたからだ。

幼くして母親を亡くして以来、人が変わったように荒れるようになったという話であり、つい最近まで屋敷に軟禁状態だったはずだ。

挙句、使用人から毒殺されかけるなどという事件まで起こしたのだから、少なくとも性格に難があるのは確かだと思っていたのだが。

「お披露目は殿下の誕生パーティーにて行うらしい。お歳がお歳だ。子供の参加も認められるだろう。どうする、ベアトリス？」

「もちろん参加するわ。リディアーヌ様が殿下に相応しい方なのかどうか見極めなくてはならないもの」

母もベアトリスの決意に賛成してくれた。

「ええ、そうね。殿下のお相手に相応しくないようなら、リディアーヌ様には早いうちに舞台から降りていただかなくては」

王家の行く末を案じるような言葉だが、実際は「潰せるものなら潰してしまえ」という意味だ。ベアトリスもそれを分かった上で「はい」と笑う。

多少揺さぶりをかけられたくらいで潰れるようなら潰れる方に問題がある。困難の多い貴族社会においてはそれが真理であるとベアトリスは心得ている。果たして、今まで引きこもってきたリディアーヌはきちんと理解しているだろうか。

誕生パーティーは約一か月後。

当然その間、単に出席の準備だけを整えていたわけではない。ベアトリスは手紙を書いたり、あるいはお互いの家に出向いたりして友人・知人と連絡を取り合い、意思統一を図った。

ベアトリスは子供世代における最大派閥のリーダーでもある。こういう時、公爵令嬢の立場は強力に作用する。対抗馬になりうるのはそれこそリディアーヌくらいだが、彼女には同世代との繋がりがない。

「わたくし、長年懇意にしてきたリオネル殿下を奪われた気分なのです」
「まあ。それはそれは。心中お察し致します」
「ベアトリス様にはリディアーヌ様へ文句をぶつける権利があると思いますわ」
何人もの令嬢があっさりとベアトリスの味方につき、形勢はもはや戦いを始める前から明らかだった。その間、リディアーヌが何をしていたかと言えば、味方を増やそうとするわけでもなく、学園に出入りしては誰かを訪ねていた様子。
気になって調べてみれば、会っているのはあのオーレリア・グラニエだとわかった。
（なるほど。常識から外れているのではなく、常識がないのね）
よりにもよってこのタイミングで魔女と交流を持つなど、自分から悪評を広めに行っているようなもの。手ごたえがなさ過ぎて拍子抜けだが、手を抜いてやるつもりはない。
（リオネル様と結婚して王族入りを果たすのはこの私よ）
王子は他にもいるが、ベアトリスとは少々年齢が離れている。また、第一王子と第二王子は側室の子であるため格が落ちる。

地位とはそれを維持し、さらに上を狙ってこそ意味がある。
次期王になるかもしれない男の妻には自分こそが相応しい。

◆　◆　◆

そして、パーティ当日。
父と共に会場入りしたベアトリスは挨拶回りの傍ら最後の根回しを行った。ついでにリディアーヌに関する情報も集めたが、やはり大した成果は得られなかった。
「とてもお美しい方だという話もありますが……」
「それならば引き籠もっている必要もないと思うのだけれど」
それとも、母親が早死にしているくらいだし身体が弱いのだろうか。だとしたら引きずり下ろす手間がさらに省けるのだが。
途中、鈍臭そうな伯爵令嬢に声をかけ、いざという時に「使う」準備をしたりしつつその時を迎えて、
「……な」

高台に上がったその少女を見て、思わず絶句した。
炎を思わせる苛烈さと紅玉のような華やかさ、さらに少女としての愛らしさが同居する美貌の少女。やや気の強そうな雰囲気がかえって人目を惹きつける。プライドにかけて「自分より美しい」とは言わないが、
「おお、あれが宰相殿の愛娘」
「屋敷に閉じ込めて人前に出さない癖に娘を貶されると不機嫌になるのが不思議だったが、もしや、単なる過保護だったのか」
容姿だけでなく挨拶も堂に入っていて十分に見事な出来栄えだった。
大人達が口々に褒めるのを見て、ベアトリスはひそかに唇を引き結んだ。それから「準備をしておいてよかった」と笑みを浮かべる。
子供達が別会場へと移された後は派閥の令嬢達と感想を言いあいつつ、さりげなくリディアーヌへの敵意を伝える。直接的に「やれ」と命令するのは品の無い行いだ。誰かに聞き咎められた時のためにも明言は避け、誰かが自主的にやってくれるよう仕向ける。
そんな時、さっき声をかけた伯爵令嬢が輪に入ってきて、呑気にリディアーヌを

褒め始めた。

たちまち責められて絶望の表情を浮かべる彼女。使えるかもしれない。ベアトリスは令嬢を炊きつけてリディアーヌへの嫌がらせを命じた。さっきと同じく、あくまでも匂わせる形で、だ。

（馬鹿な子）

特定の上位貴族と仲良くするということはその者の派閥に入るということだ。覚悟も駆け引きを行う知恵も足りていない彼女は食いつぶされるしかない。大した繋がりのない伯爵令嬢一人で大きな結果が出るならこちらとしては大歓迎だ。

ベアトリスが罪に問われることはまず考えられない。

バレなければ何をやっても罪にはならない。そして、バレたところでベアトリス自身は何もしていない。明言しなければ命令にはならない。曲解して悪戯をしかけた者が愚かだっただけのこと。もしあの伯爵令嬢が糾弾してきても派閥のメンバーがベアトリスを擁護してくれる。

他の参加者など所詮は群衆。致命傷にならない小競り合いごときでベアトリスとリディアーヌ、いずれかに肩入れするほど暇ではないはず。選択されるのが傍観で

あれば、有利は数の利を持つこちら側だ。
勝てると思った。
しかし、企みは上手く行かなかった。
「魔法の腕比べなら喜んで受けて立つから声をかけてちょうだい。ただし、挑戦したいからって周りの人やわたしの友達に迷惑をかけないでね。そんな奴は泣かしてやるから」
愚かだと断じた伯爵令嬢は愚かすぎて思うように動かず、代わりに手を下した派閥メンバーの魔法もリディアーヌの魔法防御に阻まれてしまう。一度目は何かの間違いかとも思ったが、二度目の攻撃が失敗に終わったことで偶然でないことがわかった。
リディアーヌは八歳にして魔法の扱いに慣れている。
オーレリア・グラニエの元に通い詰めているという事実が途端に別の意味を帯び始めた。気に入った者にしか靡かないという魔女から教えを受けているのだとすれば。
「待て。泣かせるとか物騒にも程があるぞ。お前、姉上から変な影響を受けている

んじゃないのか」

ベアトリスが寒気を覚える中、リオネルは呑気だった。

淑女に対するものとは思えないほどざっくばらんに声をかけ、リディアーヌもまたそれに自然体と思える様子で答える。

「事後の宣言では物言いがつきそうですので、今のうちに宣言しただけです。わたしはオーレリアさまと違って最低限の分別はつきますのでご安心を」

「どうだかな。……とにかく、せっかくのパーティーを台無しにするな。決闘なら庭にでも出てからやれ。俺、いや私に声をかけるのも忘れるなよ」

「あら。リオネル様は決闘をご覧になりたいのですか？」

「お前の言う『泣かす』がどういうものか興味があるからな」

何を言っているのかわからない。

泣かすだの決闘だの、とても令嬢の発想とは思えない。むしろ精神的には男子に近いのではないだろうか。信じられない思いに捕らわれつつ、無関係を装って挨拶をすれば、一転してごく普通の挨拶が返ってくる。

「リディアーヌ・シルヴェストルと申します。どうぞお見知りおきくださいませ、

ベアトリスさま」

周囲から感嘆の吐息。奇妙な言動で注目を集めた上で己の能力を見せつける。嫌味なやり口に苛立ちは更に高まり――。

「ベアトリスか。どうだ、私の婚約者は？　こいつはなかなか面白いのだぞ。チェスもお前より上手いのだ」

他でもないリオネルからの自慢話が最後の決め手だった。

ベアトリスは派閥の人間にさりげなく攻撃の指示を出した。傍から見ればちょっとした仕草。しかし、それを皮切りに容赦のない悪意が注がれ始める。

そして、それも軽くいなされた。

足を躓かせようとすれば、リディアーヌはよろけた先でリオネルにそっとしがみつく。「何をやっているんだ、お前は」と婚約者を支える王子の姿がむしろ二人の仲を強調してしまう。

塩を混ぜた飲み物を掴ませれば、最初の一口目こそ顔をしかめたものの以降は何の反応も示さずグラスを空にしてみせる。残されたグラスを確かめれば塩気は全く感じられなかった。おそらく、魔法で不純物を取り除いたのだろう。

毒殺を企てたメイドが処刑を免れた件を話題に上げれば、
「ああ、あれはわたしが嘆願したのです。死刑ではあまりに可哀そうですもの」
「リディアーヌ様は罪人に対してお優しいのですね」
「いえ。ただ、死刑とは罪を贖わせるためのものではなく、次なる罪を減らすための刑だと思うのです。それは理解できますが、次のための生け贄にされるだけで終わっては賠償金を負担させられるジゼルの実家が可哀想でしょう？」
まるで「生きて償わせることが最も重い罰」と言わんばかりの態度。堂々と紡がれたあまりの意見に気圧される者まで現れてしまう。
常識が違いすぎる。
しまいには派閥の末端にある少女の一人が逆に「飲み物に塩を混ぜられた」と騒ぎ始める始末。しかし、リディアーヌはそのグラスに触れるどころか彼女に近づいてすらいなかった。物質生成の魔法を遠隔操作したのだとすれば、それはもはや高等技術の域である。
（これ以上の深入りは危険すぎる）
ベアトリスはリディアーヌから距離を取り――結果、誕生パーティー中にまとも

な被害を出すことは叶わなかった。

「なんなのよ、あの女は!?」

自室に戻ったベアトリスは「一人になりたい」と使用人を下がらせると大声で吐き捨てた。

リディアーヌ・シルヴェストルはまともじゃない。

美しい容姿を持っているかと思えばしっかりとした立ち居振る舞いを披露し、年齢に不釣り合いな魔法の力まで持っている。他人の悪意を認識した上でそれらを全て受け流し、更にはただの善良さではなくある種の思慮深さまで覗かせる。

ただの引きこもりにできることじゃない。

考えられるとすれば、シルヴェストル公爵家が敢えて隠していた可能性。冴えない噂によって油断させたところで鮮烈にお披露目し、その存在を認めさせる策だとしたら。

「認めない。認めてたまるものですか」

その日から、ベアトリス・デュナンの一番の目標はリディアーヌ・シルヴェストルを痛い目に遭わせることになった。リオネルの妻になるのはその次。

結果的にこの決断がベアトリスに長きにわたる苦闘を強いることになるのだが、この時の彼女は当然、まだそのことに気づいていなかった。

閑話

貴族女性とお洒落な商談

ナタリー・ロジェは緊張していた。

黒を基調とした重厚感のある家具の数々。重すぎて男性的な印象になりがちなところを女性的な品の良さで上手く纏め上げており、色遣いやデザインを日々研究している身としては全て描き写したいくらいだが、とてもそんなことを申し出られる状況ではない。

向かいに座っている三人はナタリーが「職人として」ではなく「貴族女性として」訪問していたとしてもなお、失礼のないよう心を配って接するべき相手。

中央には絵に描いたような美しい金髪と少女のような容姿を持つ公爵夫人、セレスティーヌ・シルヴェストル。

その左隣には母譲りの金髪と愛らしい顔立ちを持った公爵家次女、シャルロッ

ト・シルヴェストル。
そして、黒い内装にその紅の髪をひときわ映えさせる公爵家長女、リディアーヌ・シルヴェストル。
周囲には複数人のメイドも控えており、女性ばかりの華やかな場でありながら圧迫感もある。
睡眠時間を削って何枚もの仮案を仕上げ、同僚にうんざりされながら意見を求め、さらに改良を加えること数回――ようやく完成させたデザイン画をリディアーヌに見せに来たところ、どういうわけかセレスティーヌとシャルロットまでもが同席することになっていた。
「デザイン画は持ち帰ってしまうのでしょう？　ならば、貴重なそれを目にする機会はこの時しかありませんもの」
と、いうのがセレスティーヌの主張。
良いデザインがあればリディアーヌ以外からも注文が取れるかもしれない、ある意味チャンスではあるものの、工房側の責任者としてついてきた副工房長はナタリーの隣で小さく震えている。

公爵家を訪れるのも初めてではないわけだが、採寸の場はある種お祭りのような高揚感がある。出来上がったドレスを持って挨拶する際も（出来栄えが良ければ）相手は勝手に上機嫌になってくれる。それに対し、デザイン画を見てもらうために訪問した今日は向こうも落ち着いているわけで、冷静に品定めをされている感覚が緊張感を増してくる。

副工房長は平民なので猶更だろう。まして、今日の結果次第では工房の売り上げが大きく上がるかもしれないのだから。

ともあれ。

品定めをされている最中、ナタリー達にできることはほぼない。聞かれてもいないのにぺらぺらと喋り倒す職人もいるらしいが、ナタリーはデザイン画に全てを籠める主義だ。聞かれれば快く解説するが、そうでなければ客が十分に吟味するまでただ待つ。

「お母様、お姉様。これはどういう……」

「ああ、それは……」

複数枚用意したデザイン画を回し合って眺めながら、何やら囁き合う母娘。平静

を装って紅茶を飲むことしばし。
「では、リディアーヌ」
「はい、お養母さま」
話が纏まったのか、三人の持つ空気が変わった。ナタリー達はあらためて居住まいを正し、公爵家の女達へと向かい合う。
代表して口を開いたのは元々の注文者であるリディアーヌだった。
「忙しいところデザインを上げていただきありがとうございました。予想以上の仕上がりに驚いています」
「恐縮でございます」
目を伏せて頭を下げる。すると、ナタリーの前に一枚のデザイン画が示された。
「私にはこちらのドレスを一着、お願いします。可能であれば秋にある私の誕生日までに」
「かしこまりました。ご注文、誠にありがとうございます」
用意した中で最も華やかかつ値の張るドレス。その分、製作期間としては厳しいものになるが――隣の副工房長と目配せをしあい「行ける」と判断。

（さすがはシルヴェストル公爵家だわ。新しいデザインとなれば無難なところで様子を見たくなるだろうに、思い切った決断をしてくるとは）

感心したのも束の間、さらに二枚のデザイン画が示されて、

「それから、こちらのデザインを元に養母（はは）セレスティーヌに、こちらを義妹（いもうと）のシャルロット用に仕立てていただけますか？　オーレリアさま用にこちらの寸法で、こちらも新デザインのものを。シャルロットの分とオーレリアさまの分はプレゼントなのでわたしの私費から支払います」

「合計三着ですか……!?」

「全て誕生日に間に合わなくとも構いません。優先度はわたし、養母、義妹の順でお願いします。……もちろん、わたしの誕生日に三人で着られるのが理想ですが」

「も、もちろん、全力で取り組ませていただきます」

慌てて再び頭を下げる。貴族らしい無茶振りとも言えるが、見方を変えると大チャンスだ。

リオネルとの婚約を決めたリディアーヌだけでなく、その母と妹までもがナタリーのデザインしたドレスで着飾る。もし実現すれば社交界への影響は絶大なもの

になる。誕生日パーティ以降、工房への注文が殺到したとしてもおかしくない。

そんなナタリーの想像を肯定するかのようにセレスティーヌが微笑んで、

「同系統のドレスを冬用にも注文したいと思っております。そちらのデザイン案を次回の採寸までにお願いできますか？」

「喜んで承ります」

「それから……リディアーヌとのお話が終わった後、私の部屋にも寄ってくださらないかしら？　少々、子供には聞かせづらい話がありますので」

「承知いたしました」

ここまで来るともう大収入どころの話ではない。新しい流れができるかもしれないではなく、公爵家の女達は結託して流れを作り出そうとしている。冬のドレスのことを今から考えているのは、ナタリーの新デザインが流行ってから考えるのでは遅いからだ。

「お姉様、こんな素敵なドレス、お小遣いから買っていただいて大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ、シャルロット。この間、臨時で纏まった額のお小遣いをいただいたも

の。これくらいなんてことないわ」

それは、ひょっとしてリディアーヌ毒殺未遂事件の賠償金が関わっているのか。

ナタリーの実家もあの件は注目していた。漏れ聞こえて来る社交界の声の中には公爵家の管理不行き届きを指摘するものもあるが、それ以上に罪を犯したメイドの悪辣さと実家への批判が大きい。

毒を盛られたリディアーヌは回復して後遺症も残っていないし、この件は使用人の雇用基準・管理方法を見直すいい機会にもなった。何より下手に手を出せば痛い目を見ると内外への釘刺しとしても機能している。賠償金を十分に得ていることも考えれば、損をしていないどころか公爵家は得をしているのかもしれない。

可愛らしい外見と裏腹に抜け目がないと噂のセレスティーヌなら、リディアーヌにも相応のご褒美を渡していてもおかしくない。

「では、お養母さま。シャルロット。わたしはもう少しナタリー様と相談がありますので」

「ええ。私達はいったん失礼しますね」

「失礼します、お姉様。お二人もごゆっくり」

デザインの微調整について相談した後、セレスティーヌとシャルロット、彼女らの専属が退室していくと残されたのはナタリー達とリディアーヌ、それからその専属メイドだけになった。

思わずほっと息を吐くナタリーにリディアーヌが「お騒がせして申し訳ありません」と苦笑を浮かべる。

「我が家の中でもお養母さまは特に新しい物好きなもので」

「とんでもございません。大きなご注文をいただいて当方としても嬉しい悲鳴でございます」

だいぶ砕けた返答に副工房長が「ひっ」と小さく悲鳴を上げるが、リディアーヌはこの程度で気分を害したりはしなかった。

「ところで、ナタリー様はご実家から工房に通われているのですか？」

「いいえ。普段は平民街に借りた家から通っております。週に一度は実家に帰るようにしておりますが、まさか馬車で工房に乗りつけるわけにも参りませんから」

職人になることを認めてもらうのには相当苦労した。

趣味や基礎教養として手芸を行う女性は多いし、刺繍が得意なことで有名な女性

貴族なども存在しているものの、さすがにドレスを一から作ろうとする者、それも平民の工房に入って行おうと考える者は皆無と言っていい。

それでもなんとか認めてもらうことができたのは「それだけの実力がある」と作品で証明したからなのだが、

「私のデザインを買って頂けたこと、個人としても感謝いたします。このご注文は胸を張って家族に伝えられますから」

実際に職人となってからナタリーの得た成果は芳しいものではなかった。しかし、今回の注文はおそらく一つの転換点となるだろう。

「リディアーヌ様。ドレス以外のご相談というのは？」

「ええ。実は養母と義妹だけでなく、父と兄にもプレゼントを贈りたいと思っているのです。とはいえ、殿方に服を送っても『着替えが増えた』という程度でしょう？　なので、なにかいい案はないかと思いまして」

「そういうことでしたか。しかし、服飾関係で盛装と見合う価値の品となるとなかなか難しいのですが……」

「値段としては見合わなくても構いません。例えばハンカチや剣帯などでも」

「よろしいのですか？」

家族間のプレゼントで相手によって露骨な差があるのは不平不満を招きそうな気がするのだが……と疑問に思うナタリーに対し、リディアーヌはくすりと悪戯っぽい笑顔を浮かべて、

「特別感は愛情で補うこともできるでしょう？」

「愛情、ですか？」

「ええ。お養母さまとシャルロットの分はわたしの発案と言っても、ナタリー様のデザインした品物。わたしはお金を払っただけで、デザインは二人が選んだに過ぎません。その点、お父さまたちへのプレゼントはわたしが一から相手のためを思って選んだとしたら……？」

「愛情を向けられているのはむしろ自分の方、と考えてもおかしくありませんね」

ナタリー自身、父親との間に似たような思い出はある。性別上、母にあれこれ相談する機会が多かったのだが、そうすると父が拗ねて面倒――もとい、家族関係に軋轢が生じる懸念があった。そんな時は手作りの小物を渡して機嫌を直してもらった。

「でしたら、既製品にリディアーヌ様が手を加えられてはいかがでしょう？　例えばハンカチにお相手の名前を刺繍するですとか」
「なるほどね。それなら確実に愛情を感じてもらえそう」
「リディアーヌ様は男心をくすぐるのがお上手なのですね。リオネル殿下ともそうやって仲良くなられたのですか？」
「まさか。殿下はその手の小細工がお嫌いですもの」
リディアーヌは思案した末、ハンカチとベルトをセットで父と兄へ贈ることに決めた。
「ベルトには何か特別な加工をいたしますか？　バックルにお名前を刻印することもできますが」
「いいえ、そのままで。刻印はこちらで行います」
自分で……？　ナタリーは工具をかんかん打ち付けるリディアーヌの姿を想像し、そのあまりの似合わなさに眉をひそめてから、慌てて思考を打ち切った。別の工房へ頼むのかもしれないし、依頼人が不要と言っている以上は深堀しても仕方ない。

「では、こちらは出来上がり次第お送りいたします」
「お願いします」
相談は和やかなうちに終了した。下の者にも丁寧に接してくれる上に金払いが良く、見慣れない物でも先入観なく判断してくれる。あらためて、リディアーヌ・シルヴェストルはとても良い依頼人だと感じた。
これからも良い関係が続くといいと思う。
ナタリーは笑顔で席を立ち、リディアーヌと別れの挨拶を交わして――。
「お養母さまのお話には気をつけてくださいね。何が飛び出すかわかりませんから」
歳の割にはかなり大人びた少女から小さな脅かしを受けた。
確かに、大人びてはいても素直なリディアーヌと違い、セレスティーヌは大人だ。さらりと駄目出しや無茶振りが飛んでくるかもしれない。
副工房長だけでなく自分まで恐ろしくなりつつセレスティーヌの私室を訪問して話を聞くと、
「例のドレスについて、リディアーヌが描いた原案があったでしょう？　あれを元に夜着を仕立てて欲しいのですけれど」

確かに、子供には聞かせられない話だった。

一方で「いっそのことリディアーヌ様と相談された方がいいのでは」とも思いつつ、ナタリーは表情に出さないよう笑顔でデザインの相談を続けたのだった。

投稿時間が17時になっていたので慌てて投稿しました(ÀÀ)

屋敷の変化と長女の我が儘

エマ・カレールはシルヴェストル公爵家付きのメイドである。

子爵家の三女。家のための結婚は姉二人で十分と判断されたため、別の形での貢献を求められた。すなわち、メイドとしての他家への奉公だ。

姉達に比べ見た目の華やかさで劣っていたエマだが、物覚えはよく、何でも卒なくこなす器用さはあった。その甲斐あってか、格としてこれ以上ないと言っていい職場に採用されることができた。

「ねえ、エマって昔、王城にお仕えしていたって本当？」

午後。屋敷内の掃除をしていたエマは、同僚からの問いかけに手を止めずに答えた。

「ええ」

公爵家は十分な数のメイドを雇用している。

掃除、洗濯、調理など仕事をいくつかの項目に分けた上、各メイドに得意分野を持たせる半専業制。体調不良者を出さないための余裕ある勤務体制によってゆとり

ある職場環境が保たれている。よって、小休止を兼ねてお喋りをする程度で仕事は滞らない。

仮にこの現場がメイド長に見つかってもせいぜい「程々に」と注意されるだけだろう。だからエマは余計な事を言わないし、お喋りを拒否したりもしない。

エマ自身が手を止めないのは単なる性分だ。急ぐのも手を止めるのも性に合わない。淡々と同じペースで進めるのが自分には合っている。

「三年ほど下級メイドをさせていただいていましたが、二年前からこちらに」

「そうだったのね。でも、どうして？」

「特別な事は何も。セレスティーヌ様から誘いを頂いたので」

隠している話ではない。

同僚の多くが知っているはずだが、彼女達とは最近まで仕事場が被らなかった。そのせいか瞳を輝かせ興味深そうに頷いてくれる。

「王城で働けるなんて夢のような話なのに、お給金が良かったのかしら」

「条件は大差ありません。ただ、王城のメイドは入れ替わりが激しいでしょう？」

王家は当然、奉公先としては最上級。それだけに応募者も沢山いる。粗相を頻発

する者や邪な行いの見られた者、習熟の遅い者等は容赦なく入れ替えられる。
　エマは特別問題を起こしたわけではなかったが、三年目に入っても中級への昇格話が来ていなかった。
「私は愛想がありませんから。華やかな王城のメイドには向いていなかったと」
「じゃあ、セレスティーヌ様の慧眼ね」
「ええ。エマがあちこちで頼られているのをよく見かけるもの」
「大した事をしているわけではないのですが」
　表情を変えずに答える。磨いていた彫像に映った自分の顔はいつも通りの静かな表情だ。貴族の中にあって浮く程でもないが人目を惹く事もない。笑うのが苦手なせいで令嬢時代は「つまらない女だ」と言われることが多かった。
　エマには得意な仕事もない。
　代わりにどの仕事も平均以上にこなせるので、急に仕事が増えたり欠員が出たりするとよく応援に呼ばれる。特に最近はそれが多い。
「人員整理の最中ですからね」
　静かな呟きに「ああ」と感慨の籠もったため息が返ってくる。

「本当に酷い事件だったものね」

ジゼルの名前は皆、暗黙のうちに避けている。仕える家の令嬢に悪意を持ち、あまつさえ毒殺しようとするなど絶対にあってはならない事である。心情的にも打算的にもジゼルに共感できない者が圧倒的多数だろう。当然、エマにも理解できない。

ともあれ。

例の一件から公爵家は全使用人に対して身元・思想の洗い直しと個別の面談を進めている。

長女のリディアーヌが第三王子リオネルと婚約を結んだ事もあって公爵家はその立場をより明確にした。思想的、派閥的に合わない者は（可能な限り他の勤め先を斡旋した上で）暇を出され、同時に補充人員の確保についても進行中だ。

元々余裕のある体制だったために大きな問題は出ていないものの、万全の状態に比べると仕事量は多くなっている。屋敷の全鍵の順次入れ替え等、ジゼルの一件に端を発する仕事もあるため今は一つの正念場と言える。

（ベテランのメイド曰く『セレスティーヌ様の嫁入り以来の改革』とのことだ）

と、ここで同僚の一人が声を潜めて、

「ところで、どうなの？　その、リディアーヌ様って」
「どう、とは？」
首を傾げたエマだったが「ほら、性格とか」と補足されて「ああ」と頷く。
「一度目の不調から回復されて以来、用を申し付けられる回数が目に見えて減りました。アンナが専属の仕事に慣れるにつれて通常業務の多くは彼女一人で済むようになっています」
菓子の消費量は減り、作り直しを要求されることもほぼゼロに。その上「美味しかった」「特にこれが気に入った」等、具体的な褒め言葉が頻繁に出るため、調理・製菓の担当者は仕事に余裕とやりがいを持てるようになった。
無駄にドレスを着替えたりしないので洗濯も楽になった。所作に慎重さが加わったことでお菓子や料理をこぼす事も少なくなり掃除の機会も減っている。
「強いて言えば毎日、お部屋のお風呂に入られるようになったので余分に魔力が必要ですが……それも解決してしまいました」
リディアーヌ自身が魔力を操れるようになったからだ。
本来なら使用人の仕事ではあるのだが、リディアーヌは「魔法の練習も兼ねてい

るし、わたしの我が儘で用意するんだもの」と言って平然と魔道具を操っている。
着替えなど単純に人手が足りない業務を除けばアンナ一人で本当に回ってしまっているような状況だ。
エマを含むリディアーヌ付きとして指名されていたメイド達は仕事が減ったため、他の部署に組み込まれたり応援要員して使われている。
「じゃあ、アンナも随分と頑張っているのね」
ここで同僚が口にしたのは専属という地位に着いた若手メイドへの好意的な言葉だった。リディアーヌの変化を機に屋敷内の空気にも変化があった。ジゼルという淀みの元凶が消えた事、反抗的なメイドが人員整理で屋敷を離れた事もあって、リディアーヌとアンナの主従を悪く言う者はかなり減っている。
その上でエマは冷静にアンナの様子を振り返って答える。
「高貴な方の専属としてはまだまだ不足ですね」
王城の上級メイドや王族の専属メイド達の仕事ぶりは本当に別格だった。持ち場の関係上、目にする機会は決して多くなかったものの、その一挙手一投足を一目見ただけでも相当な研鑽が必要になることが窺えた。

今のアンナでは王族どころか公爵令嬢の第一専属としても能力不足だ。
冷静すぎる評価に呆れたのか同僚が苦笑いを浮かべて、
「エマもリディアーヌ様の専属を狙っているの？」
「まさか」
意識せず、エマは即答していた。
やや冷たい声音になってしまったのはリディアーヌへの隔意からではない。エマ個人にあの令嬢への負の感情はない。仕事は仕事。我が儘な主だろうと優しい主だろうと必要な作業をこなすだけだ。
「私は今の待遇に満足していますから」
十五でメイドを始めて五年。結婚には特別興味もないし、行き遅れたらそれはそれでいいと思っている。給金は十分に貰っているし物欲も低い方だ。このまま一メイドとして働き続け、身体が言う事を聞かなくなったら引退。それで十分だ。
そこまで思ってから少し考えて、
「そうですね。マリー様のようなメイドが理想でしょうか」
先輩メイドの名前を口にしたところで、

「ああ、エマ。ちょうどいいところに」
「マリー様？」
「貴女に頼みたい仕事があるから、私と一緒に待機していて欲しいの。今やっている仕事は急がないでしょうから後回しでいいわ。キリのいいところまで終わらせるか誰かに引き継いだら中庭まで来てくれる？」
「かしこまりました」
当のマリーが現れてエマを呼び留めた。マリーは公爵の前妻アデライドが健在だった頃からの古株だ。屋敷の仕事にも精通している上、アデライドとは性格の異なるセレスティーヌの方針にも臨機応変に対応している。誰からも専属指名されていないのが不思議なくらいで、メイド長を任されていてもおかしくない人物である。
彼女から仕事を言いつけられるのは珍しいが、特に躊躇いもなく頷く。
それから手にした掃除道具に視線を下ろして、
「いいよ、後はやっておくから」
「マリー様の仕事を優先して」
「ありがとうございます」

残りの掃除は同僚達が代わってくれた。一見、お喋りをしてサボっていたように見える彼女達もいったん仕事に戻れば丁寧な仕事ぶりを発揮する。公爵家のメイドに新人はいてもお荷物はいない。公爵夫人のセレスティーヌは使えない人材を放っておくほど甘い人間ではない。

「マリー様。仕事というのは？」

手が空いたのでそのままマリーについて歩き出す。

メイドとはいえ、公爵家の人間に慌ただしい動きは許されない。急いでいる時でも優雅に見えるよう心を配るが、実際今は急いでいないようで話をする余裕は十二分にあった。

マリーは苦笑めいた表情で「ええ」と答えて、

「リディアーヌお嬢様が屋外で魔法の練習をされるそうなので、人手が欲しかったのです」

「屋外で、魔法を？」

エマもアンナ同様、学園には行かずにメイドになった口だ。基礎こそ修得しているものの、大規模な魔法はあまり使った事がない。その上で想像する「屋外の魔法

練習」は間違っても床が濡れたり焦げたりしないように、程度のささやかなものなのだが、

「アンナ一人では何かあった際、確実に手が足りなくなります。ですから私と貴女を加えた三人でお嬢様を見守り、万一に備えます」

「万一とは？」

「わかりません。大穴が空くか、庭木が炎上しかけるか。局所的に雨が降るか。何が起こってもいいように心づもりをしてください」

これは、さすがに即「かしこまりました」とは言えなかった。

リディアーヌが魔法を使えるようになったのは知っている。オーレリア・グラニエに師事したらしい事も。しかし、であれば監督役はオーレリアの仕事ではないのか。そんな疑問が浮かんだが、これにはなんとも恐ろしい答えが返ってきた。

「オーレリア様はお嬢様に自習を言い渡したそうです」

「……自習を」

正気ではない。これは魔法を修得している貴族なら誰もが思う事だろう。魔法を覚えたばかりの八歳を放任するなど、やはり彼女は《魔女》だったのかと益体も無

い事を考えてしまう。
しかし、らしくない思考もそこまで。
「仕事であれば、ただ出来る事をするだけです」
「その意気です」
二人は中庭へと到着した。前庭と比べると華やかな印象の少ないそこは菜園として実用的なハーブやちょっとした果物の栽培に使われている他、公爵や長男のアランが剣の稽古に使っている訓練場――草もまばらにむき出しの地面が広がる無骨なスペースがある。
メイドがあまり訪れることのないそこでしばし待っていると、リディアーヌがアンナを連れてやってきた。
「準備してくれてありがとう、マリー。エマもよろしくね？」
「はい。……リディアーヌ様、十分にご注意くださいますよう」
「わかっているわ。無茶をするつもりはないもの」
リディアーヌは朝から着ている普段着のままだった。
着替えた方が良かったのではとアンナに尋ねれば「損ねた時に安く済む方が良い

とリディアーヌ様が仰るので……」と困ったような顔をされた。考えてみると女性貴族は基本、外での運動着のようなものを持たない。乗馬用の衣装であれば一応用意があるものの、一度も着ていない上に替えがないので普段着の方がむしろ無難なのは確かだった。

あまりにも常識が通用しなさ過ぎるので、堅実派のエマとしては怖くなってくるのだが。

「それじゃあ、小手調べから始めようかしら」

魔法を使えるようになって間もない八歳の令嬢は紅の髪を悠然とかき上げ、子供とは思えない風格を漂わせながら宣言して見せた。

すっ、と、持ち上がる右腕。

真っすぐに正面へと突き出された手のひらを見て、エマを含む三人のメイドは散開した。何が起こっても対処できるようにと身構えつつ待つと、

「炎よ」

声に応じ、リディアーヌの手のひらにリンゴ大の火球が生まれ、一瞬の間を置いた後に放たれた。

歩いて十歩程度の距離を飛んで地面に着弾した火球は爆発。火の粉を撒き散らしながら周囲に風を送り込んでくるが――使用者である少女はまるで見えない壁に守られているかのように一切の影響を受けていなかった。

散開していたエマ達も風に煽られた程度で無傷。

専属としてリディアーヌの真後ろにいたアンナは障壁の恩恵に預かりながら目を見開いて、

「リディアーヌ様！　なんの被害もなかったのでいいですけど、もっと落ち着いた魔法から始めてください！」

今のを見た直後で主人に意見できるのだから、アンナは思ったよりもリディアーヌの専属に向いているのかもしれない。

公爵家長女とその専属の評価を脳内で引き上げながら、エマは「自分に専属の話が来ても断ろう」と心に決めるのだった。

優秀な姉と平凡な妹

公爵令嬢シャルロット・シルヴェストルには優秀な姉がいる。

「おはようございます、お姉様」

「おはようシャルロット。今日もいい天気ね」

リディアーヌ・シルヴェストル。

葡萄の果汁のような深い紅色の髪は生まれた時から丁寧に整え、伸ばし続けているという。紅玉（ルビー）のような瞳の奥には強い意志の光が覗き、声には理性的な穏やかさと活動的な明るさが同居している。

二度も倒れかけたせいか、それとも体質的な問題か、肌はシャルロットのそれよりもさらに白い。赤と白の絶妙なコントラストは陽光下だけでなく、月明かりの下でも目に映える。

ここしばらく、姉が朝食に遅れて来たことは（不可抗力の体調不良を除いて）一度もない。

勉強で忙しいのもあってシャルロットは睡眠が足りず眠い目を擦りながら朝食に

出ることもあるのだが、リディアーヌはいつもしゃんと背筋を伸ばし、ぱっちりと目を開いている。

自宅用のドレスの選び方も落ち着きと気品を感じさせるもので、可愛いドレスを選んでしまいがちな自分と比べてついつい落ち込んでしまったりする。

「本日の前菜はセロリを使ったサラダでございます」

「へえ、今日も美味しそうね」

軽く茹でたセロリを食べやすい大きさに切り揃え、ドレッシング、細かく刻んだベーコンを散らした一品が供されると、リディアーヌは口元に笑みを浮かべた。

（お姉様もセロリがお嫌いだったはずですのに）

急に苦手克服に挑戦しだしたかと思ったら、いつの間にか普通に食べられるようになっている。シャルロットはどうしても苦手で、彼女の皿だけはセロリの量が家族の半分以下、代わりに茹でたじゃがいもが加えられて格段に食べやすくなっているというのに。

それだけではない。所作だってずっと洗練されている。シャルロットの位置からは正面なので姉の動きが良く見える。どうやったらあんなに綺麗にできるのか、

たった一歳差とはとても思えない。自分よりもむしろ母・セレスティーヌと比べた方がいいのではないかとさえ思ってしまう。

「あの、お姉様。食事の作法が良くなるコツなどはあるのでしょうか？」

思い切って尋ねてみると、姉は美しい赤色の瞳を何度か瞬きさせた後、小さく首を傾げた。

困らせてしまっただろうか、と思ったのも束の間。

「そうね……。目が身体の外にある、と思ってみるのはどうかしら？」

「え？　え？　どういうことでしょう……？」

「目が顔についている以上、自分の所作を全て見るのは無理でしょう？　だから、外に目があるつもりで全体を意識するの。鏡を見ているつもりと考えてもいいし、お養母さまから自分がどう見えているかを考えてもいいと思うわ」

「……そんなこと、考えたこともありませんでした」

なかなか難しいことを言われたが、言わんとすることはなんとなくわかった。上手くいかないのは部分部分に集中してしまうせい。だから、考え方をがらっと変えて全部をいっぺんに意識すればいい。

頭で理解するのと実践するのでは大違いなので、わかったから実行できるかと言えば難しいのだが。

「シャルロット。リディアーヌと同じ事をする必要はないのですよ。貴女はリディアーヌではないのですから」

「はい、お母様」

母は優しい。シャルロットが悩んでいるとすぐに察して声をかけてくれる。勉強の成果を急かされたこともないし、寂しいと感じているとそれとなくお茶に誘ってくれたりして一緒の時間を作ってくれる。

シャルロットは母に似ているとよく言われる。

父であるジャン・シルヴェストル（本当の父ではないが、実父が亡くなった時はまだ幼かったのでジャンを父と呼ぶことにはあまり抵抗がない）も「シャルロットはセレスティーヌにそっくりだな」とよく口にする。シャルロットにとっても母譲りの金髪は自慢の宝物だし、ゆくゆくは母のような立派な女性になりたいと思っている。

（お姉様は……）

リディアーヌの容姿はセレスティーヌとは全く似ていない。血が繋がっていないのだから当然ではあるのだが、柔らかいセレスティーヌの美貌に対してリディアーヌは少し気の強そうな印象があるし、紅という象徴的な髪の色はシャルロット達と正反対と言ってもいい。

なのに、シャルロットは最近「リディアーヌお嬢様はセレスティーヌ様に似てきた」という声を時々耳にする。

リディアーヌが今のようになったのはあまり昔の話ではない。

（昔のお姉様は……）

半年も経っていないというのに遠い昔の事のように思えるあの頃は、姉のことがあまり好きではなかった。出会った当初は仲良くしようとしていたのだが、姉の方がシャルロットを好かなかったようで無視されたり「あなたなんか妹じゃないわ！」などとひどいことを言われた。

顔を合わせる度に邪険にされるので食事の時間は憂鬱だった。リディアーヌが病

気になって部屋から出られなくなった、と聞いた時は良くないとわかっていながらほっとしてしまったくらいだ。

けれど、リディアーヌは変わった。

病床から復帰して以来、嘘のように優しく真面目で努力家になり、そして元の姉に戻ってしまう気配はない。

『本当にごめんなさい。シャルロットにもたくさん迷惑をかけたでしょう？』

真摯な表情で謝罪を受けた時は本当に驚いたし、以前「このまま寝込んでいてくれればいいのに」とさえ思ってしまったことを恥じた。

もちろん以前にされたことを忘れられるわけではなかったが――気づけばリディアーヌは、シャルロットにとって「意地悪な姉」から「目標にするべき身近な家族」になっていた。

「シャルロット様は本当に良い生徒でいらっしゃいますね」

追いかけるべきリディアーヌの優秀さは生活態度や食事のマナーだけではない。

食事の後、いつものように家庭教師による授業を受けたシャルロットは座学の授業が終了したところで教師にこう尋ねた。
「あの、先生？　お姉様と比べて私の勉強は進んでいますか？」
「ええ。シャルロット様の方がずっと進んでいらっしゃいますよ」
リディアーヌの教師も担当している彼女は少し戸惑いながらも正直に答えてくれる。
「一年前のこの時期、リディアーヌ様はまだまだ怠け癖のまっただ中でしたから。少し勉強するとすぐに集中力が切れてしまって大変でした」
「では、今のお姉様はどのくらい頑張っていらっしゃいますか？」
「……それは」
続いての問いには、教師は目を細めて答えるのを躊躇う様子を見せた。
じっと見つめて答えを待つと、仕方ないというように口を開いて、
「リディアーヌ様は現在、本来は九歳でお教えする内容を学んでいらっしゃいます」
やっぱり、と、シャルロットは頷いた。
姉はまだ八歳。近日中に誕生日を迎える予定だが、たった数か月で遅れていた勉

強を取り返してむしろ余裕を作るなど並大抵の努力ではない。
　というか、真面目に取り組んでいなかった時でさえ致命的な遅れが出ていなかったのなら、それは姉に十分な能力が備わっている証ではないのか。
　考えるうちについつい黙り込んでしまうと、教師は慌てた様子で言ってきた。
「あの方と同じ事をする必要はないのですよ。シャルロット様にはシャルロット様の長所があるのですから」

「シャルロットの長所、かい？」
「はい、お兄様。お兄様は私の長所とは何だと思いますか？」
　自分で考えてもわからないので、家族に尋ねることにした。兄のアランは父の後を継ぐために勉強で忙しいが、シャルロットがお願いすれば快く時間を作ってくれる。向かい合わせに座ってお茶を飲みながら、彼は「そうだな」と思考を巡らせた。
　アランは三つ年上の十歳。シャルロットから見ると随分大人に見える。両親や姉を交えた話合いの際、時折見せる理性的な意見には感心するばかりだ。だから、ア

ランの返答も素直に聞くことができる。

「一番は優しいところかな。それに、シャルロットは素直で真面目だ」

短い時間で幾つも褒め言葉を導き出してくれたことに、シャルロットはなんとも言えない喜びを感じた。手をぎゅっと握って飛び上がりたい衝動をなんとか抑えて、胸の片隅で感じた疑問を口にする。

「でも、お姉様もお優しいですし、真面目な方ですよね？」

「どうかな」

リディアーヌは優しい。シャルロットがリオネルを好いているのではないか、と婚約者の座を譲ってくれようとしたり、自分を殺そうとしたメイドのジゼルに罪を償う機会をあげたり。変わってからは邪険にされたこともない。

真面目の方は言わずもがな。一生懸命やらなければ勉強であんな成果が出たりはしない……と、そう思ったのだが、アランはふっと笑って別の意見を口にする。

「リディが優しくないとも真面目でないとも言わない。ただ、あの子の優しさや一生懸命さは少し違うんだよ」

「違う？」

「ああ。リディが優しくするのは一部の『仲良くしたい相手』だけだ。真面目に勉強をするのも、その先にある結果を知っているからに過ぎない。だから、素直に優しく一生懸命になれるシャルロットは十分に凄いんだよ」

「……あ」

そういえば、リディアーヌからも似たようなことを言われた気がする。あの時は意味がわからなかったが、もしかしたら姉も同じようなことを言おうとしていたのかもしれない。

「でも、お兄様。私、このままではお姉様に追いつける気がしません」

「追いつかなくていいんだよ」

「え？」

お互いの専属を少し気にしながら、アランは苦笑を浮かべた。

「リディの優秀さは特別だ。簡単に敵うようなものじゃない」

「あの、お兄様でさえそう思うのですか？」

「ああ。……もしもリディが男だったら、宰相を継ぐのはあの子だっただろう。別に宰相の地位は我が家の世襲制じゃない。長男が継ぐ必要なんてないんだから」

実際にはリディアーヌは女子で、既に王子リオネルとの婚約が決まっている。女子では要職に就けないなどという決まりはないが、妊娠や出産等で自由に動けない期間が多いことから忌避されるのが普通だ。王子の相手役としての役割も求められる以上、現実的ではない。

「リディは僕が継ぐと信じているみたいだけど、もちろん、他の人間が指名される可能性だってある。今だって気は抜けないんだよ」

「お兄様はとても優秀ですから、私も信じていますけれど……」

そのアランが「同性だったら勝てない」と断言するのだ。シャルロットは姉の凄さにあらためて身震いする。

誰もが注目する美貌に堂々とした性格。王子の婚約者という地位に、国内最高クラスの魔法使いに師事する魔法の天才。

いったい何をどうすればこれだけの肩書きをほんの短い間で獲得できるというのか。

「だから、シャルロットはシャルロットのやり方で頑張ればいい。やり方は一つじゃないし、シャルロットはリオネル王子の婚約者じゃないんだから」

リディアーヌとシャルロットでは求められる役割が違う。
同じことができる必要はないのだと言われて少しほっとした。その上で、姉のようになれないのだと思うと悔しい気持ちになってしまうが。
「お兄様。私では王族の婚約者にはなれませんか？」
「そんな事はないさ。婚約者としての務めの果たし方だって別に一つじゃないんだから」
別の方法。
漠然としていてわからない部分も多いが、アランの言葉はシャルロットにとって光明となるものだった。笑顔でお礼を言って、あまり長居しないうちに兄と別れる。
（私は、私の長所を伸ばせばいい。頑張ればきっと、私でも王族の婚約者になれる）
リディアーヌとは違う方法で頑張って、リディアーヌに負けない自分になる。
シャルロットは新たな目標を抱いた。輝くような姉への憧れを胸に、これから頑張っていこうと決意する。
それはシャルロット・シルヴェストルという少女のこれからを作る根幹となり、そして同時に、彼女を縛る鎖となった。

第二章：魔女と魔女の弟子

《紅蓮の魔女》と呼ばれる少女

「リディアーヌ・シルヴェストル様ですね。お越しになられたらお渡しするようにとお手紙をお預かりしております」

「そう。ありがとう」

学園の門番から手渡されたのは一通の白い封筒。

進み出たアンナが手袋を嵌めた手で受け取り、表裏をしっかりと確かめる。差出人の記載はなし。封蝋も特徴のないありふれたもの。

確認後、両手で差し出されたそれに対し、俺はぱちんと指を鳴らす。

すると、封筒だけが真ん中から裂けて無事な中身を晒した。

アンナが中の便箋を抜き取り、封筒の中を覗き込んでから門番に手渡す。

「不要ですので処分をお願いします。刃物が入っているのでお気をつけください」

「は？　……え？」
「剃刀の刃？」
「はい。これで十通目ですね」
「大台ね」
便箋にはご丁寧に罵詈雑言が書かれていた。見るに堪えないそれの筆跡を念のために記憶してから、アンナに保管してもらう。
「ところで、これを持ってきたのはどんな人だったのかしら？」
「はっ。お仕着せを身に着けたメイドでした。ただ、特徴的な容姿でもありませんでしたので顔までは――」
彼はそこまで言って口ごもった。どうして憶えていないのか、という顔。
「そう。わかったわ。ありがとう」
また心の魔法だろう。疑問に思わず俺に渡せ、という程度なら心を大きく捻じ曲げることもない。
追及を諦めて学園内へ歩き出したところで「き、騎士団に通報しなくてよろしいのですか!?」と背中から声がかかった。

「この手の嫌がらせは今に始まったことじゃないの。報告はするけれど、せいぜい週に一度、纏めて伝える程度ね。むしろ、不審者の可能性を考えたら学園側こそ対応が必要じゃない？」

「騎士団から確認が来た際は証言をお願いします」

学園の中は相変わらず美しく穏やかだ。

第三王子リオネルとの婚約から約一年半。俺――リディアーヌ・シルヴェストルは秋にある誕生日を二度経て十歳になった。

身長は順調に伸び、身体つきも以前よりは女らしくなった。九歳の誕生日あたりから社交の場にも積極的に出るようにしているのでスケジュールの詰まり具合も以前より割り増しだ。

お陰で知名度はかなり上がっていて、最近は学生からよく呼び止められる。

「ごきげんよう、リディアーヌ様」

「リディアーヌ嬢。今日もオーレリア様の部屋かい？」

できるだけ応えるようにはしているが、あまりにも話しかけられるのでなかなか前に進めないくらいだ。

しかも、ただ話をするだけでは終わらない用件もある。
「今度、寮の中庭でお茶をご一緒しませんか？」
「オーレリア様の魔道具製作について詳しく教えて欲しいのだが」
「リディアーヌ様！　防御の魔法を試したいので是非私に攻撃を！」
お茶の誘いは「日程を合わせられるか確認するので書面でください」とお願いし、オーレリア関連については「守秘義務がありますので」とかわし、最後の奇特な男は風の魔法でぶっ飛ばしてやった。
勢いよく飛んでいった後、地面にべちゃっと落ちたものの、すぐに笑顔で立ち上がったので防御魔法は役に立ったのだろう。俺としても攻撃魔法の試し撃ちができて助かる。
風の魔法は適度に痛めつけるのに向いているが、強い指向性を付けるのにコツがいる。周りを巻き込まず使うにはまだまだ練習が要りそうだ。
「師匠。入りますよ」
オーレリアの部屋に通うのもすっかり当たり前になった。適当にドアをノックしてからさっさと開き、入室。

「また散らかしたのですか。一週間でここまで元に戻すのはもはや才能ですよ」

部屋の床に本やがらくたが散らばっているのを見てため息をつく。

ある日、部屋の散らかり具合に我慢できなくなって強制的に片づけを実行、家具を追加で取り寄せてまで床が見えるように整えたのだが、我が師匠は「綺麗な部屋は落ち着かない」とばかりにほいほい部屋を荒していく。

「アンナ」

「心得ております」

食事用に用意したテーブルの上をさっと片付けたアンナは、持ってきたバスケットをそこへ置くと遠慮なく床の物を片付け始める。

この一年、俺の専属としてあれこれ異常事態に直面してきた結果、彼女はちょっとやそっとでは動じなくなってきている。危険物対応についても慣れたものだし、仮にも王族であるオーレリアの私物でもゴミだと思えば平気で「捨てましょうか」とか言う。

で、当のオーレリアはというと、

「ああ、来たのね。じゃあ今日はこれに魔力を籠めてくれる？」

「だから、投げないでください」
奥の席に腰かけたまま振り返って、テニスボール大の石を放り投げてくる。なんとかキャッチした俺は文句を言いつつも言われた通りに石へ魔力を流していく。
「さて、今日の差し入れは何かしら」
オーレリア・グラニエは良い意味で変わっていない。
烏の濡れ羽のような髪も、黒曜石のような瞳も。対照的に白い肌も。インドア生活が多いせいかむしろたおやかな印象は強くなったようにも思える。女としての色気も増して、美少女と言うよりも美女と言った方が似合うようになってきている。
ただし、服装に関してはやや改善された。今日もノースリーブの黒いドレスに身を包んでおり、来客の応対をしてもギリギリ問題ないくらいの見た目ではある。
「そのドレス、ナタリーの工房製ですか？」
「ええ。普通のドレスよりは動きやすいから自分でも頼んだの」
コルセットでウエストを締め付けないデザインのものだ。前に一着このタイプのドレスをプレゼントしたところ、着心地がいいと気に入ってくれたらしい。
俺自身も去年の誕生日で身に着けて参加者から好評をもらった。そのパーティー

ではセレスティーヌとシャルロットも同じタイプのドレスを用意していたため「大人のデザインにも流用できるのか」「バリエーションはどれくらいあるのか」と問い合わせが殺到。やっぱりみんな苦しいのは嫌だったらしく、若い世代を中心にかなり広まっている。

　デザイン担当のナタリー、および彼女の工房はお陰で嬉しい悲鳴を上げているらしく、注文を必死にこなしながらさらに洗練されたデザインを作り上げるべく試行錯誤を繰り返しているという。

「でも、一人だと着替えがしづらいのは変わらないのよね」

「普通の貴族女性は一人で着替える必要がありませんからね」

　食事をしながらぼやくオーレリアに肩を竦めて答える。

　一人で着替えができる、なんて自慢しようものなら「使用人を増やす余裕もないのかしら」と馬鹿にされることうけあいである。

　人件費の削減は前世でしきりに叫ばれていたことだが、貴族にとっては優雅であること＝権力や財力の象徴である。効率を重視した家々が使用人を解雇したりすれば「貴族が余る」なんて社会現象さえ起こりかねない。

その上で、俺は少し考えて、
「比較的脱ぎ着のしやすい服、ということであれば作れなくもないと思いますけれど」
「できるなら早く作りなさい。何をもたもたしているの」
「もの凄く自分本位な要求を真顔でしますね、師匠」
じゃあ、まずは両親にでも相談してみるか。その上でナタリーに依頼するべきか、別の工房に相談するべきか、お蔵入りにすべきかを判断してもらおう。
そこで俺は手の中の石に視線を落として、
「相変わらず魔道具製作ですか？」
「ええ。研究費はあるに越したことはないもの」
俺がやらされているのは「石に魔力を籠めて魔石にする作業」だ。
石に魔力を繰り返し流して浸透させていくと、徐々に魔力や魔法に適応した材質へと変わる。こうして加工された石がいわゆる魔石だ。
魔石は魔道具の中核を担うもの。どちらも魔力が高く魔法の扱いに長けた者でないと作るのが難しいため、魔石や魔道具は高く売れる。

魔石および魔道具製作を担っているのは主に宮廷魔法士と呼ばれる者達。オーレリアは後見人である宮廷魔法士長のコネでこの製作を手伝い、金銭を受け取っている。

要するに彼女、学生の身でありながら宮廷魔法士の仕事をしているわけだが、それがなんのためかというと、

「趣味で魔道具を作るために仕事で魔道具を作るって……」

「実益を兼ねたいい方法でしょう？」

「まあ、練習にもなりますしね」

そこでふと疑問に思う。

オーレリアが普段作っているのは照明や加熱、水作成などのありふれた魔道具ばかりだ。

「師匠が作りたい魔道具とはどういうものなのでしょう？　並の品なら研究するまでもなく作れますよね？」

「並どころか、私の作った魔道具は一級品と評判よ。私が作っているのはもっと上、いいえ、もっと先にある品」

「またろくでもないものを作っていることだけはわかりました」
「よく分かっているじゃない？」
艶めいた流し目が送られてくる。いい加減この人の美貌にも慣れてきた俺でさえぞくっとする。この人、やっぱりそっちの気があるんだろうか。この一年、それっぽくからかわれることはあっても本気で来られることはなかったのだが。
「よく分かっている貴女になら教えてあげてもいいかしら。……そうね。近いうちに見せてあげる」
「それは楽しみなような、恐ろしいような……」
「せいぜい楽しみにしておきなさい、《紅蓮の魔女》さん」
「その異名は止めてください」
《漆黒の魔女》の弟子だということと特徴的な髪色から付けられたあだ名である。
この一年余り、俺は公の場に出ては嫌がらせを受け、そのことごとくを潰してきた。首謀者が特定できる嫌がらせは当人にお返しもした。反撃しかしていないのでせいぜい「やりすぎです」と注意される程度でお咎めも受けていないのだが……そんなことばっかりしてるせいで一部方面からそれはもう容赦なく嫌われている。

おそらく、《魔女》とかいう淑女相手に失礼すぎる名前の発案者も俺を嫌っている奴らだろう。

つまり元をただせば、

「師匠から施された英才教育のせいですね」

「明らかに貴女自身の性格でしょう」

『ふん。こそこそ嫌がらせするくらいなら恐れられる方がマシよ』

俺が狙われる一番の理由は「リオネルの婚約者だから」だ。

本気でリオネルのことが好きだった者。王子の婚約者という地位を狙っている者。リオネルのことが嫌いだけど本人を狙うのはリスキーと考えた者。付随する理由は様々だが、彼らの目的は俺を婚約者の座から引きずり下ろすことだ。

俺が死ぬ必要はない。嫌がらせに耐えかねて自分から降りてもよし。後に残るような傷を負って降ろされてもよし。大袈裟に騒いで悪評を高めるだけでも「不適格」と判断される要因になりうる。

だから、公の場でドレスを汚そうとしたり、転ばせて恥をかかせようとしたり、飲み物に毒や香辛料を仕込んでみたり、危険物を送りつけたり匿名の脅迫を行って

きたり、あの手この手で攻撃を仕掛けてくる。
「まったく。もしわたしの立場に成り代わったとして、今度は自分が狙われるとわかっているんでしょうか」
「そうね。貴女が報復するとしたら何をする？」
「屋敷ごと燃やすとか良さそうですね」
「あら楽しそう。貴女の異名にぴったりじゃない」
半分くらい本気の冗談を言い合っていると、掃除中のアンナが呆れたように呟いた。
「お二人とも本当に似た者同士ですよね」
オーレリアと似た者同士とは、なかなかにひどい話だと思う。

屋敷に戻り、外警備の兵士に挨拶をしてから自室へ。
「あら。サラから手紙だわ」
部屋の机の上には何通かの手紙が置かれている。これらは全て使用人によって検

閥済みである。そして、その中の一つは友人であるサラ・モレからの招待状だった。

サラは去年、リオネルの誕生パーティーで出会った伯爵令嬢だ。俺のせいでとばっちりを食らったらしい彼女を助け、それが縁で仲良くなった。貴族令嬢にしては悪意に染まっていない純粋な子なので話していて心が落ち着く。また家に遊びに来て欲しい、という手紙に、そういえば最近は遊びに行っていなかったと思い出した。

「サラのところにも顔を出しましょうか」

「リディアーヌ様。サラ様ばかり優遇されると他の皆様が不満を持ちますよ」

「わかっているわ。なるべく不公平にならないように、でしょ？」

俺のところにはお茶会やパーティーの誘いが毎日のように届く。男子からチェスの誘いや、成人貴族から魔法談義の誘いや「珍しい本があるから読みに来ないか」という話、普段利用していない商人や職人からの売り込みが来ることもある。

全てに参加していては身が持たないどころか時間がいくらあっても足りないので、取捨選択して上手いことやるのも貴族としての処世術だ。

同世代のパワーバランス、誰がどこの派閥に所属しているかに加えて親――父や

セレスティーヌがどういう交友関係を築いているかもここで考慮しないといけない。横文字の名前と階級を覚えるだけでも大変だっていうのに、こんなの脳内だけで整理しようとしたら絶対パンクする。

「本当、記憶を探る魔法さまさまね」

今日は夕食までに少し時間があるので、幾つか手紙をチェックしてしまおう。

とりあえず上にあったものから内容を確認していくと――その中に少し毛色の違う、気になる手紙があった。

『オーレリア・グラニエは自分の母親を殺した罪人だ』

なんとも物騒な文面。

まあ、これだけなら「とっくに知っているのだけれど？」で終わる話なのだが、残念なことに手紙はこれで終わりではなかった。

《紅蓮の魔女》と呼ばれる少女 2

夕食を終えた後、俺とアンナはあらためて例の手紙を覗き込んだ。

ありふれた便箋にオーレリアを糾弾する一文が書かれている。便箋は二つ折りで洋封筒にちょうどいいサイズだ。

「秘密の手紙、なのかしら」

「どういうことですか、リディアーヌ様？」

「一言書くためにこの紙は勿体ないと思わない？　それに、この文は真ん中じゃなくて一番上に書かれてる。まるでその下に文章が続くみたいに」

「でも、何も書かれてませんよ？」

「普通のインクで書いたら他の人に読まれるかもしれないじゃない。そういう時は暗号を使うか、何かの方法で文字を隠すのが定番でしょ」

例えばあぶり出し。果物の汁なんかを使って書き、乾かすと文字が消える。復活させるには火であぶって熱を加えればいいのだが……魔法で作った火にかざしてみても特に変化はみられなかった。

「上の紙に書いて筆圧だけを残した、っていうわけでもなさそうね」
「ペンの跡らしきものは見えませんね」
じゃあ水で濡らしてみるか、と、水差しから一滴ずつ垂らしてみたものの、これも失敗。
「やっぱり何も書いてないんじゃないですか？」
「うーん……でも、なんとなく引っかかるのよね」
業を煮やした俺は乱暴な手段に出ることにした。机の上に置いた便箋へ指を這わせながら、紙全体に魔力を流していく。イメージするのは、何らかの手段で隠された見えない文字が浮かび上がる光景。これなら隠した方法がなんであれ文を復元できる。『そんなことできるなら最初からやればいいのに』。いや、成功する保証はないし、あまりスマートな手段とも言えないから……と。
「あっ……!?」
アンナが驚きの声を上げる。魔法を受けた紙が隠されたメッセージを黒く浮かび上がらせ始めたからだ。
俺はほう、と息を吐いて、

「……本当にあったのね」
「リディアーヌ様も半信半疑だったんじゃないですか」
それはともかく。表れた文字をあらためて読み上げると、そこには俺の知らない話が詳細に記されていた。
『オーレリアが魔女と呼ばれ、王位継承権を剥奪された理由は母親を殺してしまった事ではない。問題なのは彼女が「魔法を用いて人を殺す」事に強い関心を抱いていた事だ。
つまり、オーレリア・グラニエの母殺しは偶発的な事故などではなく、歪んだ天才の引き起こした必然だ』
俺も、アンナも息を呑む。
「リディアーヌ様、これは」
「ええ。ずいぶんと踏み込んだ内容ね」
オーレリアの母殺しに関しては誰もが――当の本人ですら詳細を語ろうとしない。学園で噂話を集めてみたりもしたが、学生達が語るのは尾ひれのついた嘘か本当かわからないような話ばかりだった。

そもそも、本当の真相なんて関係者以外にはわからない。監視カメラがあったわけでもなし、王家がむやみな口外を禁じてしまえば全ては闇の中だ。大部分の人間は自分の知っている事実からそれらしい推測を立てているに過ぎない。

だから、この手紙の内容も正しいとは限らないわけだが。

『母を殺した事はオーレリア自身にとっても失策だっただろう。何故ならあの一件によって彼女の歪んだ欲望が他者に知られてしまったからだ。

一度目は皇位継承権の剥奪と王族からの事実上の追放で済んだ。なら、二度目は？

あの一件が無ければ《漆黒の魔女》はもっと自由に振る舞えた。侍女の一人や二人、事故に見せかけて殺す事もできたかもしれない。だが、彼女の動向は常に注目されている。故にオーレリアは『魔法を使って人を殺す実験』ができない。

魔女は血に飢えている。

いつか二度目の惨劇が起こる。それはもうすぐ傍まで迫っているかもしれない。後が無い魔女はおそらく多くの人間を殺そうとするだろう。そうなる前に手を打たなければならない。

気をつけろ。

最も近くにいる人間が最も危ない。同時に《漆黒の魔女》を止められるのは極めて近い位置にいる《紅蓮の魔女》だけかもしれない』

あからさまで、かつ、真に迫った警告だった。

手紙の差出人は俺に注意を促すと共に、オーレリアの凶行を止めて欲しいとも思っている。その理由はここに書かれている通り、俺が彼女に一番近い位置にいるからだ。

これは父に報告するべきか。

父のことだ。手紙の内容が正しくても正しくなくても「でたらめだ」と言うだろう。あるいは俺が父に見せることが敵の目的という可能性もなくはない。

「リディアーヌ様」

しばし思案していると、魔法の効果が消えて文字が見えなくなる。

そこでなんとなく嫌な予感を覚え、もう一度同じ魔法を使うと――案の定、もう文字が浮かび上がってくることはなかった。

「……まったく、手の込んだ悪戯ね」

残った一文だけなら本当にただの悪戯なのだが、手紙を一応レターボックスの中に保管しておく。記憶探査を使うまでもなく覚えられる程度の内容だし、もう読み返すことはないだろうが。

俺は肩を竦めて微笑を浮かべる。

「一応、注意はしておくわ。でも、気にしすぎないようにしましょう？　どうせ根拠は何もないんだもの」

アンナは「わかりました」と頷いてくれたものの、それからしばらく浮かない顔だった。無理もない。近いうちに俺の師が大量殺人を犯すかもしれない、などと言われたのだ。信じるか信じないかは別として落ち着かない気持ちにはなる。

何気なく窓の方に目を向けながら、呟く。

「さて、どうしたものかしらね」

「良く来たなリディアーヌ。ほら、さっさとこっちへ座れ」

「ごきげんよう、リオネル様。では、失礼いたします」

王宮へと通うのもこれで何度目か。

リオネルとは最低でも月に一回以上は会って一緒に遊んでいる。お陰で王宮に仕えるメイドや騎士にも顔見知りが増えてきた。婚約してからの期間が長くなり、共に過ごした既成事実が積み重なるに従って嫌がらせの頻度も増しているが。

さすがに王族へ嫌がらせする馬鹿はいないのか、婚約者様の方は余計な事に思い悩む様子はない。顔を合わせれば二言目には「今日は何をする？」だ。

「そうですね……。では、最近対戦していない盤上演習にいたしますか？」

「うむ、いいぞ。また新しい戦術を思いついたからな。お前が負けて悔しがる姿が楽しみだ」

「もう。わたしはなかなか練習できないのですから、少し手加減して欲しいのですが」

「ふん。女に生まれたお前が悪い」

まさか、転生して女になった先の世界で「男に生まれれば良かったのに」と言われるとは。

賽子（ダイス）や多数の駒を使って行う盤上演習はその名の通り軍略の学習用という意味合

いが強く、チェスよりもなお明確に男性向けの娯楽である。女子の場合、部屋に道具が用意されていることさえ稀だろう。俺は自習のために買ったが。

使用人たちが道具を用意してくれるのを待ちながらリオネルはにやりと笑って、

「お前と遊ぶためと言うとセルジュ達も割と甘くなるからな。正直、とても助かっている」

「それを本人の前で言うあたりがリオネルさまですよね」

「む。お前、それは私を馬鹿にしているだろう？」

「いいえ。どうかリオネルさまはそのまま真っすぐでいてくださいませ」

セルジュというのは以前から顔を合わせているリオネルの従者である。主には忠誠を誓っているが、その一方で主の我が儘には割と厳しい。

そのセルジュは苦笑を浮かべながら俺を見て、

「リディアーヌ様のお陰で殿下の勉強も進んでおりますからね。少しくらいは目こぼしさせていただきます」

「お役に立てているのであれば光栄です」

何か俺から感銘を受けたらしく、リオネルは婚約したあたりから成績が伸び始め

たらしい。俺が「今はこの辺りを勉強しています」と言う度に悔しがってくれたりもしている。

「いっそお前が剣術の稽古も付き合ってくれればな」

「残念ですが、剣は両親から『手が無骨になるから』と止められておりまして」

「魔法でどうにかできないのか。治癒の魔法と似たようなものだろう」

「そんな無茶なこと……あれ？　できるかもしれませんね」

「リディアーヌ様！」

「殿下！」

アンナとセルジュからダブルで「駄目です！」と怒られてしまった。

「リディアーヌ様が結託なさると心労が倍化するので、あまり殿下に感化されませんよう」

「分を弁えておらず申し訳ありません」

「おい、お前達。揃いも揃って失礼だぞ」

この辺りが「お似合い」と言われる所以に違いない。俺としてもリオネルは気楽に付き合える相手なので助かっている。このまま行けばいい夫婦になれるかもしれ

ない。
まあ、あくまでもこのまま行けばの話なのだが。

「さて、相談というのを聞かせてもらおうか、リディ」
滅多に入ることのない父の私室にて、俺は酒の入ったグラスを揺らす父と、その隣に腰かけたセレスティーヌに向かい合っていた。
夜。もう後は寝るだけという時間だ。この場に他の兄妹がいないのはひとまず俺個人としての相談？　商談？　だというのが大きい。
「ええ。わたしが相談したいのは、服飾用の新しい留め具についてよ」
企画書とまではいかないが絵付きの説明書きも用意した。
複数枚にわたる両親が手に取り、注視し始める。
「ふむ。『スナップボタン』に『ホック』、それから『ファスナー』か」
「これはまた、細かいですね」
オーレリアから「脱ぎ着しやすい服」を強請られて思いついた話だ。この世界の

服はボタンで留めるか紐で縛るかするタイプばかりで、前世にはあった他の留め具がない。なのでそれらを作って広めればデザインの幅が広がるはず。

スナップボタンは柔軟な金属を使い、押し付けるとぷちっと留まるタイプのボタン。

ホックは鉤状の金具とそれを受けるための金具をセットで留める方式。

ファスナーは左右の細かな金具を中央の金具でまとめてがっちり固定する……って、知っている人間からすれば当然すぎる話なのだが。

見たことのない両親は説明書きをじっと見つめたまましばらく考え込んでいた。

「どうかしら？　わたしには作れる職人がいるかどうかもわからないから、意見を聞きたいの」

「……そうだな」

数分してようやく顔を上げた父は真剣な表情で俺を見て、

「まず、これを私達に相談したのはどうしてだ？」

「さっきも言った通り、技術的に可能かどうかがわからなかったのが一つ。それから、これを作るのは被服の職人じゃないでしょう？　試しに作るなら我が家から

直接依頼した方がいいかと思って」
「ああ、その通りだ」
父はふっと息を吐いて笑みを浮かべた。
「ナタリー・ロジェを通して金属加工職人に回していたら我が家にとって大きな損失になっていたかもしれん」
「！　それじゃあ、お父さま？」
「ああ。製作自体は可能だろう。その上で費用が見合うかどうか、どのような用途があるか試作して確かめなければならないが」
「懇意の職人に依頼し、我が家の発案と主張しておくべきでしょう。手柄を横取りされては困ります」
セレスティーヌもまた顔を上げて笑顔を浮かべる。
「この留め具を実用化できれば、新しい流行を作り出すことができます。リディアーヌの発案と広まるのは当家にとっても王家にとっても利となることでしょう」
「うむ。ボタンで留めたり紐で縛る場合とは異なる利便性が期待できる。この『スナップボタン』は男が着る外套などに有用なのではないか」

普通のボタン留めだと緊急事態にさっと脱ぐのが難しい。力任せに脱ごうとすればボタンが千切れて後で直す必要がある。その点、スナップボタンなら外側に力をかければ勝手に外れてくれる。

「ファスナーも男の人には嬉しいんじゃないかしら。スカートと違って用を済ませるのが難しいこともあると聞いたのだけれど」

「む。そう言われると……前部分にこれを採用すれば開くだけで良いのか？　それは画期的だな」

「殿方向けのデザインが広がるのはとても素晴らしいです。……ですが、リディアーヌ？　そのような知識をどこで得たのでしょう？」

「い、いえ、詳しく聞いたわけではなく、あくまで耳にした程度です。実際に目にした事もありません」

さすがにリオネルも人前で脱いだりはしないし、平気で下の話をするほどアレな躾はされていない。

前世で男だったのでちらっと聞いたどころか詳細まで知っているが、自分自身の体験なので誰かに見せつけられたわけでもない。

「例のドレスが広まってきたところです。ちょうど良い次の手となるでしょう」
「ああ。リディには服飾の才能があるかもしれないな。……まあ、もちろん、ナタリー・ロジェのように職人になりたい、などと言い出さないで欲しいが」
「もちろん。心配しないで、お父さま。わたしも自分の役割はわかっているわ」
両親は細工物を作る職人への試作依頼を快諾してくれた。とりあえず、この件に関しては試作品の完成を待つばかりである。

モレ伯爵家での問答

サラの実家――モレ伯爵家の屋敷は高級住宅街の端近くにある。
広さとしては我が家の1／4程度。前世の感覚で考えると十分豪華な庭に到着すると、俺はアンナの手を借りて馬車を降りた。同行しているもう一人のメイド、エマがすかさず日傘をさして陽の光から守ってくれる。
「ありがとう、エマ」
「いえ」
微笑みかけるとクールな返答。
彼女は我が儘娘時代から俺の担当だった。アンナ（最年少）にジゼル（問題児）と偏っていた人選の中でエマが選ばれた理由は、ジゼルと同い年であり若手であることが一つ。もう一つはおそらく、いまいち愛想が足りないせいだ。
仕事自体は早くて丁寧なので笑えばもっと重宝されると思うのだが、
『今の待遇に不満はありませんので』
と本人は全く意に介していない。ならばせめて、と、他家への訪問など人手が足

りない時の応援をお願いしている。
　応援についてはエマも拒否していない。イベントに駆り出されるのは一般メイドの職務に含まれている、という考えらしい。
「ようこそいらっしゃいました。リディアーヌ・シルヴェストル様」
　到着した俺は中年に差し掛かったメイド長をはじめ複数の使用人によって出迎えられた。
　身分の差とは恐ろしいもので、家の中で冷遇されていた俺に対して「可能な限りの人を集めました」といった感じの歓待ぶりである。
「ごきげんよう。お招きいただいたお礼を持って参りましたので、受け取っていただけますか？」
「有難く頂戴いたします」
　貴族社会においては子供が友達の家に遊びに行くだけでも手土産が必要になる。もちろん品物の量や品質は家柄に合ったものが必要だ。
　複数の手土産は使用人を介して渡される。アンナの主導で受け渡しが行われる中、俺は先んじてエマと共に屋敷内へと招かれた。案内された先は通い慣れたサラ

の部屋、ではなく伯爵家の応接間だった。
どうしてここなのかと思えば、
『――――！』
『――――。――――』
入り口まで近づいたところで複数人が言い争う声。
サラの声も聞こえるが内容まではわからない。メイド長へ視線を送れば、彼女は困ったような顔で部屋のドアをノックした。
「リディアーヌ様がいらっしゃいました」
「お通ししなさい」
返ってきた声を聞いて、そういうことかと納得する。
魔道具の照明が取り付けられ、装飾付きの宝剣が飾られた応接間には（使用人を除いて）三人がいた。一人は薄紫色の髪と瞳を持った大人しそうな令嬢――友人のサラ・モレ。後の二人は略式の正装を纏った男性と、来客用のドレスを纏い化粧をした女性。
「ごきげんよう、モレ伯爵。伯爵夫人。こんにちは、サラ」

「リディアーヌ様……！」

スカートを摘まんで会釈をすれば、浮かない顔をしていたサラがぱっと笑顔になる。同時に彼女は他の二人を気にするように視線を送って、

「これはこれは、リディアーヌ様。ようこそお越しくださいました」

「歓迎いたしますわ、さあ、こちらへ」

娘の様子に気づいているのかいないのか、サラの両親は立ち上がって俺をテーブルへと招いた。

「それでは、失礼いたします」

笑顔で応じ、エマの引いてくれた椅子へと腰かけながら思う。

友達の家に遊びに来たと思ったら、当たり前のように両親が同席してきた。しかも入室直前のあの声。

『どう考えても楽しい話じゃないわね。いったいどういうつもりなのかしら？』

伯爵夫妻は挨拶だけして席を外す……などという様子もなく、笑顔で天気の話題

などを振ってきた。それに営業スマイルで応じている間にお茶の準備が整えられ、茶菓子と併せて供される。

「頂いた品で恐縮ですけれど、せっかくの上等なお菓子ですのでお出ししてもよろしいでしょうか？」

「ええ、もちろん構いません」

手土産の中にはバターや砂糖をたっぷり使ったケーキもあった。八分の一サイズに切り分けられたそれが皿に載せられてそれぞれの前に置かれる。前世の俺なら「客に食べさせたら自分の取り分が減る」と心の狭いことを思うところだが、あまり日持ちしない物なので早く食べた方がいいというのもわかる。

「そうだ。せっかくですのでお渡ししたお茶の方も試していただけませんか？」

「お茶、ですか……？　こちらは普通のお茶では？」

「いいえ。茶葉は同じですが製法が異なりまして、青茶と呼ばれているそうです」

後から到着したアンナが淹れ方を実演してみせる。俺が飲みたがるので専属であるアンナはもう慣れっこである。

名前の通り青っぽい色味の茶葉から抽出されたお茶は見た目上は紅茶とあまり変

わらない。ティーカップに注がれたそれに俺は率先して口をつけた。

出先での飲食は同行した使用人が毒見をするのが普通だが、今回はお持たせなので省略。ティーカップも湯で温めるついでに軽く洗われているので危険は少ない。念のために解毒の魔法も使った。魔法による毒対策は俺に限らず貴族では一般的らしく、大人になるまでに身に着けるべき魔法として知られている。

「中でもこの銘柄はわたしのお気に入りなのです」

「ほう。では……」

伯爵家の面々も遅れて、恐る恐るという様子で茶を口へ。すると、サラがまず「とてもすっきりしていますね」と素直な感想を述べた。彼女の言う通りとても飲みやすいお茶に仕上がっている。烏龍茶に近い口当たりだ。

「青茶。そういえば、以前にも飲んだ覚えがあります。あの時飲んだものは独特の香りがもっと強かったと記憶していますが」

「そうですね。確か、他国の一部地方で薬として用いられていたお茶ではなかったかしら？」

伯爵夫妻はあまり好みではなかったのか、早々に一杯を空けると普通の紅茶を注

がせ始めた。残念だ。いくつも取り寄せた中から俺の好みに合ったものをリピートしているのだが。

　我が家の父も「これはいつもの茶とは別物だな」と言っていたので、紅茶が当たり前の人々からするとあまり飲みつけないのだろう。

「私は美味しいと思いますけど……」

「良かった。それじゃあ、迷惑でなければサラは飲んでね。冷やしても美味しいし、脂の多い料理と合わせると後味がすっきりするのよ」

「そうなのですね。是非試してみたいです」

　サラが目をきらきらさせながら頷く。彼女は素直かつ好奇心旺盛で読書好き、特に物語を読むのが好きという文学少女タイプだ。食が細い方で、脂っこい料理が続くと辛い、と以前に言っていたので多少なりとも助けになってくれるといい。

　そんなやりとりがあった後、ケーキを味わいながら俺とサラの近況を他愛なく語り合う。

　最近はこんな勉強をした、という俺の話に伯爵夫妻は笑顔で聞き入り、時には相槌を入れたり賞賛の声を上げたりした。彼らが本題に入ったのは話が一段落した頃

だ。
「リディアーヌ様。娘を派閥に入れてくださったこと、本当にありがとうございます」
「？」
突然何を言い出すのか、という意味を込めてにっこりと微笑めば、伯爵はどう解釈したのか上機嫌で話を続けてきた。
「宰相様の長女にして第三王子リオネル殿下の婚約者。類稀な魔法の才をお持ちとの評判も高いリディアーヌ様から庇護を頂ければ我が家は安泰でしょう」
「あの、伯爵さま」
「謙遜なさる必要はありませんわ。派閥入りを希望する方は日に日に増えていると聞き及んでおります。デュナン家のベアトリス様の派閥を追い落とす日も遠くはないことでしょう。どうか当家とも末永い関係を――」
「お待ちください。何のお話でしょう？　そもそもわたしは派閥など作った覚えがないのですが」
伯爵夫人まで一緒になって褒めちぎってくるので、俺ははしたないと思いつつも

話をきっぱりぶった切った。
　途端、二人は目を丸くして、
「何を仰るのです。派閥が無いなどとご冗談を」
「冗談ではありません。少なくともわたしは『自分の派閥に入って欲しい』などと勧誘したことは一度もありません。サラとはお友達ですし、そうした交友関係を派閥と呼ぶのであれば納得はできますが、わたしたちの関係に庇護などという言葉を持ち出すのはあまり好ましくありません」
「な……!?」
　口をあんぐり開ける伯爵夫妻。サラは小さくため息をつくと首を振って、
「だから申し上げたのです。お父様、お母様。リディアーヌ様はベアトリス様とは違います」
「な、何を言うのサラ。い、いえ、お待ちくださいリディアーヌ様。派閥を肯定なさった上で庇護を頂けないというのはあまりにも酷い仕打ちではありませんか？」
　娘の落ち着いた様子とは対照的に母親は動揺を隠そうともしていなかった。
　十歳の小娘相手に下手に出すぎな気もするが、伯爵夫妻のこうした態度にも理由

はある。

『モレ家は土地持ちの貴族ではないので、お金に余裕がないのです』

サラから前に聞いた話だ。サラ自身は「もっとたくさん本が読みたい」とかそのレベルの愚痴を言ったつもりでしかないようだったが……。

優雅で贅沢なのが貴族だが、先立つものが無ければ人も雇えないし物も買えない。貴族が収入を得る手段は幾つかあるが、その中でも大きいものとして「領地からの税収」がある。このため自前の領地のある土地持ち貴族とそうでない非土地持ち貴族との間には資産的な格差が発生しやすい。

サラの伯爵家で言えば、土地持ちの男爵家や子爵家の方がむしろお金に余裕があるかもしれない。

つまり、サラの家はお金に困っている。

手土産を茶菓子に使ったのも賞味期限だけが理由ではなく、公爵令嬢に出すような高級な菓子をそうそう用意できないからだ。もてなす側に気を遣わせるのも悪いので、俺も意図して手土産を選んだ。

お金が無いなら使用人を減らすとか、そこの宝剣を売るとか方法があるのでは？

という話だが、貴族とは優雅なもの。優雅でなければ貴族ではない、というのがモレ伯爵家の考え方らしい。

そこで彼らはこう考えたのだろう。「お金を持っている人間にたかればいい」。となれば、娘と懇意にしている十歳の公爵令嬢なんてうってつけの相手である。適当に褒めちぎって良い気分にさせ、現金なり高価なプレゼントなりを引き出そうと思っていたに違いない。

金を寄越せと言いたいならそう言えばいいのに、と思いながら俺は微笑んで、

「つまり、公爵から無償の資金提供を受けたいということでしょうか？」

「な」

伯爵夫妻が揃ってぽかんと口を開けた。

しかし、彼らもさすがに場数を踏んでいるらしい。気を取り直したように笑顔を取り繕って、

「分かって頂けるのでしたら話が早い。どうかサラを助けると思って助けて頂けないでしょうか」

「このご恩は必ずお返しいたします。ですのでどうか……！」

「お父様もお母様も止めてください！　そのようなことはリディアーヌ様に申し訳なさすぎます！」

夫人に至っては涙まで浮かべ始めた。さすがに泣かれると「可哀そうだ」と思ってしまうのが人情。傍らで必死に表情を取り繕っている伯爵家のメイドたちや極めて理性的な対応をしてくれているサラへの同情も込みでなんとかしてやりたくなる。

俺は小さく首を捻ると、背後に控えるアンナとエマを振り返った。

「ねえアンナ、エマ。お金の足りない貴族家はこういう時、一般的にどういう手段を取るのかしら？」

すると二人は一瞬顔を見合わせてから答えてくる。

「そうですね……一時しのぎで良いのであれば家財を売ったり、縁のある家から借り入れたりではないでしょうか。私のように子供が働きに出れば仕送りもできるようになりますから、財政的には安定するはずです」

「支出と収入を改善したいのであれば、子供を行儀見習いや騎士見習いとして出すことも可能です」

女の子であれば行儀見習い、男の子であれば騎士見習いになるのが一般的だ。
前者はどこかの貴族家、後者は騎士団という違いはあるものの、ある程度若い年齢層から受け入れてもらえる上、最低限の教育と給金が与えられる。基本的に住み込みになるので口減らし＋収入アップが見込める貧乏貴族の常套手段。
そう考えると、娘に十五歳まで教育を受けさせた上で公爵家の正規メイドとして口を繋いだアンナの実家は貧乏ながらもしっかりとした愛情と根性の持ち主なのだろう。
「行儀見習いね。……サラさえ良ければ、お養母さまに頼んでみましょうか？友達としては話ができなくなるからあまり気は進まないけれど」
「わ、私が公爵家で、ですか!?　そんな良いお話があって良いのでしょうか!?」
「ええ。もちろん教育は厳しいでしょうし、いいことばかりではないけれど。ああ、でも、同じ屋敷に住んでいればわたしの本を貸してあげやすくなるわね」
「！　お母様……！」
サラが熱意を持って振り返れば、伯爵夫人は「信じられない」という表情で首を振る。

「そんなみっともない真似をさせられるものですか。……リディアーヌ様、意地悪を仰らないでください。何も高額をせびろうというわけでもないのです」

お前にとっては大した額じゃないんだから黙って寄越せ、と言っているに等しいのを彼女は理解しているのだろうか。

【新しい登場人物】

◇モレ伯爵　：サラの父。貧乏だが見栄っ張り。
◇モレ伯爵夫人：サラの母。貧乏だが見栄っ張り。
◇サラ・モレ　：夢見がちで本好きな伯爵令嬢。リオネルの誕生パーティーでいじめられていた子

モレ伯爵家での問答 2

弱さを盾にして他人を動かそうとする奴、というのも性質が悪い。

高校時代、中学の時の友人から彼女を紹介されたことがある。その子は小柄で家が貧乏らしく、お小遣いのためにアルバイトをしているのだという。

頑張っているんだなと感心しつつ、有名ファーストフード店のポテトを齧っていると「わたしも食べたーい」と数本まとめて強奪された。さらに彼女は自分の分の支払いを友人（彼女にとっては彼氏）にせびり、さらにはあれが欲しいこれが欲しいと服やコスメの話をし始める。

話によるとバイト先でもこの調子らしく「男の先輩に重い物を持ってもらった」「荷物運びを女の子にやらせるなんて信じられない」と語る。仕事への態度について苦言を呈し、友人にも付き合い方を改めたらどうかと話したものの、二人とも聞き入れてはくれなかった。

「ひどーい。わたし、貧乏だから頑張ってるのに。バイト辞めろっていうの？」

「お前がそんな奴だとは思わなかったよ。この子を泣かしたら許さないからな」

数か月後、友人から「バイト代全部と貯金まではたいて貢いだのにあっさり捨てられた」と連絡が入った。彼は別れ際、ひどい振られ方をされて手が出そうになったものの、新しい彼氏から逆にしこたま殴られたそうだ。予想通りすぎて俺は「だから言ったのに」と言うこともできなかった。

家庭環境の違いや得意不得意等、どうしようもなく人と違う部分はどうしたってある。だが、だからといって「自分は弱いから」と強者を脅したり利用したりすればそれはもう、力を振りかざす不心得者と変わりがない。

「わかりました。では、わたしに可能な範囲で融通いたしましょう」

「おお！」

「さすがはリディアーヌ様！」

途端に歓声を上げる夫妻にこくり、と頷いて、

「後日まとまった額をお持ちいたしますので、その際に借用書の記入をお願いします。合わせて立会人となる方をお呼びしたいと思いますが、父――公爵の知人を頼

る形でよろしいでしょうか？」
「な……!?　待っていただきたい、借用書とは……？」
「あら。お金をお貸しするのですから当然でしょう？　ご安心ください。十日で一割、などと暴利をふっかけるつもりはありません。一年につき一割の半分、といったところでいかがですか？」
　沈黙。
　一分近い間を置いて口を開いた伯爵は震える声で、
「困窮する我々から利子を取ろうと仰るのか……？」
「申し訳ありません、伯爵さま。わたしはこの通りまだ子供なものですから、こうした場合、どのようにするのが良いか詳しく存じ上げないのです」
　子供から金をせびろうとしている時点でおかしいと思わないのか。
　暗に彼らの魂胆を責めつつ、表面上は穏やかに笑みを浮かべて、
「……これ以上、わたしだけでお話を進めると失礼を重ねるだけのようですね。この件は一度、両親に相談させてください」
「や、止めてくれ！　いや、止めてください！」

父、あるいはセレスティーヌに知られるのはまずいと思ったらしい。セレスティーヌなんかは「利用価値なし」と判断したら即座に切り捨てにかかりそうだし無理もない。

「申し訳ありません、リディアーヌ様。どうかこのお話はなかったことにしていただけますよう」

結局、伯爵家からの金の無心は相手側からの希望で取り下げられた。

「本当に申し訳ありませんでした、リディアーヌ様。お父様とお母様が失礼なことを……」

「サラが気にすることないわ。わたしは何も損をしていないわけだし」

金の話が終わった後、大人たちは取り繕うような世間話に終始した。うんざりした俺は適当なところで話を切り上げると「貸している本がある」と言い訳をしてサラと部屋を抜け出した。

使用人はついて来ているので、忠誠の在り方によっては夫妻にも報告が行くだろうが……別に内緒話と言うほどのことでもないので気にしない。

「でも、サラとしてはどうなのかしら？　やっぱり貧乏は辛い？」

「……そう、ですね。辛くないわけではありません。私は跡継ぎではありませんから、どうしても目をかけられるのは二の次にされてしまいますし」

サラには二歳年下の弟がいる。また、夫人は去年もう一人女の子を出産したらしい。となると親の優先順位は跡継ぎとなる男子が一番、手のかかる赤ん坊が二番目となる。

大人しくて優しい子であるサラはろくに我が儘も言わず、この状況に耐えてきたのだろう。悲しそうな顔をしつつも、逆に「それが当たり前だから」とでも言うように吹っ切れた雰囲気がある。

貧乏という意味では共感するところのあるアンナが呼吸や足音からかすかに心の動きを見せる。

そんな時、

「姉上！」

「コーム」

どこかサラに似た顔立ちの男の子が廊下の向こうから駆けてくる。それを追いかけるのはメイドというか「婆や」と呼ぶ方がしっくり来るような使用人の女性だ。

男の子の世話係は「間違い」が起こらないように歳のいった女性か、あるいは男性が務めることが多い。

弟に呼びかけられたサラは自然な笑顔を浮かべて少年を迎え入れた。軽く抱擁して至近距離から見つめ合う二人はまさに微笑ましい姉弟である。本当に、シャルロットもそうだが親がアレなのによく素直ないい子で育ってくれるものだと思う。

あるいは、ここから親の影響を強く受け始めるのか。

「可愛い子ね。話に聞いていたサラの弟かしら？」

くすりと笑って尋ねれば、少年――コームのつぶらな瞳が俺に向けられる。

「姉上。この人、もしかして『リディアーヌ様』？」

「ええ、そうよ。コーム、ご挨拶して」

どこか恥ずかしそうにしながら言うサラ。コームは素直に頷き、「コーム・モレと申します。お目に書かれて光栄です、リディアーヌ様」とたどたどしい口調で挨拶してくれる。

二歳差ということは出会った頃のリオネルと大して変わらないことになるはずだが、とても良い子である。

「初めまして、リディアーヌ・シルヴェストルよ。あなたのお姉様とはお友達なの」
「知ってます。姉上がよく話をしてくれるので」
「あら。サラはどんな話をしているのかしら？」
「コーム！　リディアーヌ様！」
サラが抵抗するので詳しい話は聞けなかった。婆やに連れられてコームが去っていく（散歩の帰りか何かだったらしい）のを見送ってひと息。
「あの子にも不自由して欲しくはないわね」
「……はい。コームのためにも、行儀見習いとして雇っていただくのはいいお話だと思うんですが……」
「サラ様。差し出口ではありますが、使用人として働く場合、学園入学が大きく遠のく事もご承知おき下さい。働きながら入学金・諸経費を用意するのは並大抵の苦労ではないでしょう」
エマが淡々と、珍しく饒舌に忠告を口にする。実際、金がないから働くのに学園に通わせてもらえるかというとかなり怪しい。まして現状だと両親から反対されている状況。バイトして学費の一部を稼ぐ、みたいなノリでいたら足をすくわれそう

だ。

これにサラは「そうですね……」としゅんとしてしまう。

難しい問題。しかし、俺には安易に「お金をあげる」などと言うことはできなかった。

「他家の資産問題へ口を出すのは得策とは言えません。正規の手続きを踏み、書類を用意して一定額を『貸し出す』という判断は間違っていないでしょう」

伯爵夫妻から「なかったことに」と言われたものの、本当に黙っているかと言えばそんなわけもなく。俺は夕食の席にて両親への『相談』という体を取ってモレ家での出来事について報告した。

話を聞いたセレスティーヌが口にしたのは案の定、ごくごく実務的な見解。

父もこれには同意。

「リディが自分の裁量で金を出すのであれば強く止めるのもおかしいが……最初から『たかる』つもりの輩に施しを与えるくらいなら、装飾品の一つも買ってくれた

方が嬉しいな」

「私は、お友達を助けたいというお姉様のお気持ちも良くわかりますけれど……」

義妹のシャルロットも九歳になった。真面目で一生懸命な性格も手伝ってか日々成長し、話しぶりもだいぶしっかりして来ている。

もともとセレスティーヌに連れられて他家に紹介されたりしていたシャルロットは着実に友人を増やし、派閥とはいかないまでも仲良しグループのようなものを形成している。俺もたまにお茶会へ交ぜてもらうが、華やかで女子らしい令嬢が多いことを除けばいい子たちだ。

「貴族家の中にはそんな不心得者もいるのですね。……表面的な知識だけでは内情までは把握しきれないということですか」

兄のアランは十二歳になってぐっと男らしさが増してきた。と言っても無骨な感じではなく、頼りなさが抜けて存在感が強くなったという感じだ。声も低くなってきており、これまでの声も十分に美声だったので少し残念な気持ちもある。

着々と次期宰相への道を歩んでいる彼は教訓を噛みしめるように呟き、それに父が頷く。

「同じような家族構成でも仲が良い家、悪い家がある。資産状況にしても赤字続きで打つ手もなく危機にあるのと、新事業の準備で我慢してきたのとは全く違うだろう。情報は多いに越した事はないし、書面だけでなく生きた人間の話も重要になる」

「噂話や社交界での評判、出入りする商人の様子なども参考になります。物事を多角的に判断する癖をつけるべきですね。……もっとも、情報を集めるには女の協力も必要になりますが」

養母がちらりと俺を見てから僅かに間を置き、シャルロットへと視線を移して、

「シャルロットもさりげない会話から必要な情報を聞き出す術を磨きましょう」

「はい、お母様」

「待ってくださいませ、お養母さま。なんなのですか、その、わたしには期待していないと言わんばかりの態度は」

「リディアーヌは回りくどい会話を面倒くさがって投げてしまいますし、好みではない相手とは簡単に距離を離してしまうでしょう？」

情報収集には向いていないと暗に言われ、ぐうの音も出なかった。

「ですが、全員に向き合っていては時間も労力も足りません」

「取捨選択が極端すぎると言っているのです。そもそも、敵を作りやすい貴女の性格が静かな情報収集に向いていないのでしょうけれど」
「リディアーヌのやり方はむしろ男の社交に近いからね。男性貴族からもチェスや討論の誘いが来るだろう？」
「ええ、度々いただいておりますが……お兄さままでそんなことを仰るのですね」
ついつい遠い目になってしまう。
男の社交の方がわかりやすくて好都合だし、カウンター悪役令嬢を目指す身として派手な行動はどうしても付きまとってくる。仕方のないことではあるのだが。
「元気を出してください、お姉様。お姉様の苦手な事は私が頑張りますから」
「ありがとう、シャルロット。でも、無理はしないでね？」
微笑みかけると、義妹は笑顔で頷いて、
「ですが、むしろ私は嬉しいのです。お姉様とは違う方法で私も家の役に立てるのですから」
「そう。やっぱりシャルロットはすごいと思うわ」
負けてはいられない、と、あらためて思う俺だった。

それから俺は自分なりに少しでもサラを助ける方法を考え、実行に移した。

「ねえ、アンナ？　わたしの昔のドレスってどうしているのかしら？」

「少なくとも一年前の物までは全て保管しております。手直しすれば着られる物もありますし、場合によってはシャルロット様へお譲りすることも可能ですから」

「なら、要らなくなって処分するドレスもあるのでしょう？　それをサラに譲ることはできないかしら」

返ってきた答えは「できなくはない」だった。我が家における着られる・着られないの基準はサイズだけでなく流行だったり、古いドレスばかり着ているとケチだと思われるといった外聞の問題もある。

体型的には着られるけど処分するドレスもあるため場合によっては喜ばれるかも……ということで、実際にサラを使用人付きで呼んで見て貰ったところ、思った以上に喜ばれた。

「こんな素敵なドレス、いただいていいんですか!?」

「ええ。捨ててしまうよりはその方がドレスも喜ぶでしょう？」

サラは何度も「ありがとうございます」と口にしながら何着かのドレスを選び、家に持ち帰っていった。それらのドレスは後に目にする機会もあったが、中には大胆なリメイクが施されたものもあった。「あれはたぶん公爵家では不可能ですね……」とはアンナの談である。

貧乏で知られているモレ家の場合、多少流行遅れのデザインでも問題はない。お下がりに関しては下手すると親世代・祖母世代のドレスを受け継ぐ場合もなくはないのでそちらもOK。むしろ俺とサラの仲の良さをアピールする効果もあったようで、羨ましがった他の令嬢から「私にも」と強請られることにもなった。

魔女の秘密部屋

「派閥っていったいなんなのでしょうね」
「同じ思想または目的のもとに集まった集団、あるいは特定個人を中心に利害を共にする集団、といったところかしら」
「いえ、師匠。愚痴のつもりだったので、言葉の定義を教えていただかなくても構いません」
「そう。なら、面倒だからよそでやってくれる？」
雑談代わりに話を振ってみたところ、オーレリア・グラニエはオーレリア・グラニエだった。
アンナが運んできた軽食をいつものように口にしながら、全く思いやりのない言葉を吐く彼女。俺はわかりやすく大きなため息をついて、
「師匠も派閥云々については煩わしいと思っている口では？」
「まあ、そうね。煩わしいというか、もはやどうでもいいと言った方が正しいけれど」

「貴族としてどうなのですか、それは」
「『リディアーヌ派』を作り上げ、『第三王子派』の勢力拡大を狙うご令嬢はさすが思想が御立派ね」
「完全に嫌味で言っていますね？」
俺が派閥と相性が悪いことくらい当然把握しているはず。
と、思ったら、オーレリアはこともなげに笑って、
「あら。ちゃんと貴女にも味方はいるのでしょう？　それとも、子分とでも呼んだ方がいいかしら」
「外聞が悪いので『子分』は止めていただけないでしょうか」
モレ家の夫妻に答えたように、俺自身に派閥を作っているという意識はない。
パーティー等で出会った中から悪意がなさそうな人間を選んで仲良くしているだけ。必要に迫られない限り友人全員を一度に招いたりもしないので、俺の友人同士だけど話をしたことはない、なんていうメンバーもいるかもしれない。
友人を顎で使ったりする気はないし、前に宣言したように友人をいじめる奴は泣かせてやりたいと思う。しかし、助けを乞われたからといって無条件で応じるわけ

ではない。嫌だと言うなら仲良くしてくれなくて構わない。
俺が欲しいのは善意で協力し合える関係であって、庇護と忠誠によって生じる打算的な疑似主従の関係ではないのだ。
家族から「女の社交が苦手」と言われるのはこういうところなのだろう。
「オーレリア様には子分、いないんですか？」
「情報交換や私物の取引ができる程度の知人ならいるけれど、私を支持する派閥なんて明らかに危険視されるでしょう？　派閥と言えるほどのものはないわ」
「表向きにはない、と」
俺のカマかけにオーレリアは肯定も否定もしなかった。
ただ、その漆黒の双眸を猫のように細めて、最後のサンドイッチを口へ放り込む。
続いて飲み物の容器を空にしたら、すぐさま立ち上がった。
「さて、それじゃあ行きましょうか」
「え、あの、どちらへ？」
「秘密の研究室」
嘘か真か、そんなことをのたまうと、アンナに向けて他言無用を告げるオーレリ

ア。

だから人のメイドに勝手なことを言うなという話だが、安全面から言っても今回の件は正しい。俺からもお願いすると、アンナはこくこくと頷いた。

この部屋にアンナ一人しか連れてこないのはこの辺りが理由だ。事情を知っている人間は少ない方がいい。うちの師匠は基本的に人嫌いなのであまり多くの人間が来ることを好まない。

部屋の扉に鍵がかけられ、閂で厳重に戒められる。「手伝いなさい」と命令されたので、部屋の窓に木の板を嵌め、金具で壁と接続。木板を外から外せないよう固定した。

そうして作り出された密室。オーレリアは部屋のやや奥、彼女の机に近いあたりの床にしゃがみ込むと、石畳のひとつに触れる。魔力の流れが感じられた直後、石畳がズレてその下に階段が現れる。

「……一年以上通っていて初めて知ったのですが」

「教えなかったもの。さて、それじゃあ、ここからはリディアーヌ一人でついてきなさい」

「そんな!?　リディアーヌ様お一人では危険です！」

悲鳴を上げるアンナ。今更俺を傷つける意味がないとか、アンナ一人じゃ護衛として不足だとか色々あるが、それでも敢えて言ったのは例の手紙のせいだろう。全てを信じなかったとしても、オーレリアに対して「一応警戒しておこう」程度の猜疑心を抱くのは当然。

俺は少し考えてからアンナに命じた。

「あなたの判断で『さすがに遅すぎる』と思ったらここを出てお養母さまに報告しなさい。くれぐれも一人で助けに来ようなんて思わないこと。オーレリア・グラニエがリディアーヌ・シルヴェストルを連れだして戻って来ない、と確実に伝えるの」

外からの侵入には備えたが、内側から出る分には簡単なこと。アンナが神妙に頷けば、オーレリアも「当然の警戒ね」と笑った。

「それで？　一番危険な位置にある貴女はどうするのかしら？」

「わたしだって、師匠にあっさり殺されるほど弱くはないつもりです。常識的に考えれば、こんなあからさまなやり方は取らないはずですが、もちろん警戒だけは怠りません」

常識が通じない相手の存在を俺はよく知っている。そして、今の俺にはあの頃よりも手札が多い。不意打ちでなければ防御魔法が使えるし、即死さえしなければ毒でも刃物でも炎でもだいたい治せる。

俺たちの反応を理解していないわけでもないだろうに、師は「そう」とだけ言ってさっさと階段に足を置いた。

「それじゃあ、行きましょうか」

俺が後に続くと床（というか天井というか）はひとりでに元通りになった。これでアンナは追ってこられない。閉ざされたことで辺りが暗闇に包まれるも、俺とオーレリアはそれぞれ魔法の明かりを用意して事なきを得た。

階段は螺旋を描きながら下へと続いていく。

「この階段、自分で作ったんですか？」

「ええ。魔法を使えばそう大変なことでもないでしょう？」

まあ、穴掘って石を敷き詰めるだけだしな……と納得する俺だったが、こういうのは大抵、一般的な貴族からすると十分大変だったりする。

「わざわざこんな風に隠しているのはどうしてですか？」

「決まっているでしょう。不特定多数に見られたくない物が置いてあるからよ」
ここに来たばかりの頃、部屋が異様に散らかっていたのは床の仕掛けを隠す意味もあったのかもしれない。今は俺やアンナがうるさいせいでだいぶ片付いてしまっているが。
やがて、俺たちは階段を抜けて部屋へと到着する。
広さは上の部屋と同じくらいだろう。部屋の様相はだいぶ異なり、本棚が小さい代わりに魔石や魔道具が多く存在している。魔道具の多くは不格好であまり見たことのないタイプのものだ。
中央辺りで立ち止まった魔女はこちらを振り返って妖艶な笑みを浮かべた。
「ようこそ、我が弟子。私の秘密研究室へ」
なんとなく近くに寄るのを躊躇った俺は、代わりに室内を観察して、
「……思ったよりは普通の部屋ですね」
「どんな部屋を想像していたのかしら。やっている事は魔道具の開発だもの。見た目自体は上と大差ないわ」
「では、中身が違うと」

「ええ」

棚にあった魔石が一つこちらへと投げられる。

キャッチした俺は外観に特徴がないことを確認した後、ある重要な事実に気づいた。

魔石とは魔力を通すことに適した石だ。ここに任意の魔法を組み込んで魔道具の核とするわけだが、魔道具――魔石に注いだ魔力は長もちしない。少しずつ拡散していってしまうため、照明の魔道具なんかは魔力量によって持続時間の調節が可能なのだが――。

この魔石には十分な魔力が蓄積されたままになっている。

「魔力を保存可能な魔石……!?」

「話が早くて本当に助かるわ。そういうこと。どうかしら、画期的でしょう？」

得意げになったオーレリアは奥の方から背もたれのない椅子を二脚出してきて片方に自ら腰かける。向かい合って座り聞かされたのはこの魔石の製法。魔石として使えるようになった石へ「魔力を保存する魔法」を繰り返しかけてさらに性質を変えていくという話。

もはやこれはただの魔石ではなく新型魔石とでも呼ぶべきものだ。
現状では魔道具を機能させるための魔石を別に用意しなければならず製作費用が異様にかさむという話もされが……ぶっちゃけ、その辺に関しては後回しでもいい。
俺は睨みつける勢いで師を見つめると問いを投げつける。
「師匠。この魔石を何に使うつもりですか」
「あら。何か問題でも？」
「とぼけないでください。この魔石は魔道具の概念を……いいえ、これからの歴史さえも一変させかねない劇物です」
「例えば？」
探るような視線に真っ向から答える。
「要するに、これを使えば平民でも魔道具を扱えるのでしょう？　火の球を発射する魔道具でも量産して配ればあっという間に即席の魔法部隊の出来上がりです」
「真っ先に物騒な使い道を思いつくのね。例えば平民の料理人でも凝った調理が可能になる。生活をより便利にしてくれる発明でもあると思うのだけれど」

「そうですね。それは確かにその通りです」
魔力とは使えば消耗していくものだ。新型魔石は言わば電池のようなものであって交換は必須。そうである以上、魔力を持つ貴族の価値もそう簡単には下がらない。余った魔力を保存できると考えれば貴族にとってもメリットはある。
それでも、
「新型魔石を組み込んだ『兵器』が十分に用意されれば、戦争の概念は一気に覆るでしょう。魔道具と兵の数が勝敗に直結する時代が来ます。きっと、今まで以上に多くの人が死にます」
「今までなら考えられなかったような大規模な魔法だって使えるようになるんじゃない？」
「そうですね。都市一つを吹き飛ばすような魔法だって使えるかもしれません」
禍々しいきのこ雲をイメージしながら俺は応えた。
あんなものは実現してはいけない。いつか誰かが似たようなことをするのだとしても、そのいつかを早める必要はない。
椅子から立ち上がって問いかける。

「答えてください。あなたはこれをどうするつもりですか？」
「どうすると思う？」
オーレリア・グラニエはこの期に及んでもなおいつも通りだった。
いつも通り飄々と、超然と、どこまでも見透かしたような態度を取ってくる。彼女ならどんなことでもやりかねない、と、対峙する者に思わせる何かを持っている。
例の手紙を思い出す。
新型魔石を使った魔法兵器は差出人が予言した大量殺戮にぴったりだろう。
「言い方を変えます。こんなものは世に広めてはいけません。必ず争いの火種になります」
「多方面に喧嘩を売っている貴女に言われても説得力がないんじゃないかしら」
「わたしは他に向く悪意を集めたいだけです。それで被害を免れる人が一人でも増えるなら喧嘩もします。ですが、喧嘩と戦争は違うでしょう」
「国に献上すれば国土を広げる足掛かりになるかもしれないけれど？」
「一度は勝てても、技術は必ず流出します。後は新兵器の開発合戦。戦いと被害の規模だけが拡大して悲劇を撒き散らします」

本気でこんなものを広めるつもりなら、絶対に阻止しなければならない。
最悪の場合には戦う覚悟で睨みつければ、オーレリアは苦笑と共に肩を竦めた。
「この調子だと他の発明品を見せたら発狂しそうね、貴女」
「まだ、他にもあるというのですか？」
「私も卒業が近いもの。成果は多い方がいいのよ」
次にオーレリアが示したのは首輪型の魔道具。
「一度装着したら解錠の魔法を用いるか物理的な手段を取らない限り外れない首輪よ。そして、これは着用者の魔力を吸い取って『魔法の行使を禁じる魔法』を発動する」
「そんな魔法……」
ありえないと断言はできなかった。イメージによって定義される、なんていうなんでもありの力に常識的は通用しない。もちろん、効果の限界はあるだろうが。
さらに、腕輪型の魔道具が示されて、
「これは魔法防御の魔道具。装着者が魔法の対象になった際に自動で発動して、その威力を軽減する」

ここまで来れば傾向が見える。
俺は重い衝撃を感じながらその答えを口にした。
「魔法の使えない人間と使える人間の差を埋めるための魔道具」
「正解」
くすりと笑ってオーレリアが近づいてくる。反射的に身構えれば、彼女はさっと両手を広げて敵意がないことをアピールした。
「褒めてあげたかっただけ。私の意図をこんなに早く理解できるのは貴女だけでしょうから」
「そうでしょうか」
国王でもセレスティーヌでも、似たような推測には行きつくと思うのだが。
「師匠。もう一度聞きます。あなたはこれをどうするつもりですか？」
「そうね。貴女なら、誰が一番高く買ってくれると思う？」
謎めいた問いかけ。つまり、彼女にはそれ以上の答えを返す気がないということで、実際に問い詰めてみても回答は得られなかった。
「次回から『授業』に来るかどうかは任せるわ。貴女の好きにしなさい」

「師匠。どうしてわたしにこのことを教えたんですか？」

「さあ、どうしてかしら」

結局、俺は彼女のことをまだ何もわかっていないのだと、この時、あらためて理解した。

魔女の秘密部屋 2

「リディアーヌ様。大丈夫だったんですよね？　何もされていませんよね？」
「大丈夫よ、アンナ。この通りぴんぴんしてるし、わたしに心の魔法はほぼ効かないもの」
地下室を出てアンナと合流した俺はすぐに学園を後にした。
二人っきりの部屋で何があったのかを話せるようになったのは屋敷の自室にたどり着いてから。それでも話せるのはごく限られた内容だけだった。
「オーレリアさまとは話をしただけ。まあ、その内容が重すぎたんだけど……重すぎて、アンナにも迂闊に話せないの」
「そ、そんなに重要な話だったんですか……!?」
「ええ。下手に知ってしまったら命を狙われかねないくらいに」
「リディアーヌ様。旦那様に相談しましょう……！」
「……それしかないかしらね」
オーレリア・グラニエは秘密を教えるだけ教えて口封じもしてこなかった。何を

企んでいるのか全くわからない。場合によっては俺が誰かに相談することそのものが目的とも考えられるが、だとしても、誰にも言わずにのほほんと暮らしていられるほど軽い情報ではない。

誰に言うのが一番得策か。

本音を言えば誰が相手でも怖い。あれを知っている人間が増えれば増えるほど、あれを悪用しようとする人間が生まれかねないからだ。

『わたしにとっては国家転覆に使われるのも、他国との戦争に使われるのも同じだわ。だったら国王陛下だって信用できないじゃない』

だとしても、リオネルの婚約者という立場上、知っていて何もしないわけにはいかない。王族入りを予約しているような身の上なわけで、下手な情報秘匿は反逆と見做されかねない。

なら、一番適切な相談相手は父だろう。

国王に直談判なんてそうそうできないし、セレスティーヌは何を考えているのかわからないので話を振りたくない。リオネルに伝えてどうなるとも思えないし、他の王族に接触するのもリスクが高すぎる。

「アンナ。お父さまに面会依頼を取ってちょうだい」
「かしこまりました」
幸い、親馬鹿な父はその日のうちに二人きりの時間を作ってくれた。

「お父さま。とても大事な話なの。人払いをしてもらえないかしら」
「……本気のようだな。仕方あるまい。お前達、部屋の外へ出ていろ」
「なりません！　万が一があったらどうします！」
毎度のことだが、貴族の言う二人きりとは通常「使用人や護衛を除けば」という意味である。家長である父には執事やメイドが付いているのが普通だし、宰相という身分上、騎士の護衛が付いていることも多い。今日もそういう日だった。
彼らにしても俺が父親殺しを企むとは思っていないだろうが、親子喧嘩からついかっとなってとか、タイミング悪く賊が侵入して、という可能性はある。
俺は頷き、代案として一つの魔法を行使する。
「じゃあ、これならどうかしら」

テーブル越しに向かい合った俺と父の周りに不可視の空気の壁が形成。その壁は空気の循環を繰り返しており、内外を音的な意味でシャットアウトする。なお、イメージしたのはエアコンや扇風機の使用イメージ図である。

これなら使用人が部屋の中にいても内緒話ができる。思ったより魔力を食うのであまり多用はしたくないが……。

「ほう、リディはこんな事までできるようになったのか。オーレリア・グラニエには感謝した方がいいのかもしれぬ」

「残念だけど、お父さま。そのオーレリアさまに関するお話なの」

「……聞こう」

俺は地下室で見た物について語った。

話が進むにつれて父の表情は険しくなり、ついには顎に手を当て渋面を作るまでになった。使用人たちは主人の様子が気になる様子を見せながらも大人しく様子を見守っている。

語り終えたところで俺は息を吐いて、

「……以上。もちろん、あの方があれを王家に供するというのであれば、わたしに

は何も言えないのだけれど」
「その割には浮かない顔だな、リディ」
「それは、まあ。わたしの命が狙われる分にはわたしが強くなればいいでしょう？　でも、戦争はわたしにはどうしようもない」
女である俺にとって戦争とは「過去の歴史」に過ぎない。
自分が参加するどころか、指揮や作戦立案という形で関わることさえないというのが前提だ。しかし、それでもある程度の話は聞いている。
今まで行われてきた戦争は参戦する貴族の数と質が戦況を大きく左右してきた。魔法の力を持つ貴族は一騎当千とまではいかないにせよ、一般兵の十や二十は軽く蹴散らせるからだ。これでも十分凄い話だが、これはまだ個人がその能力によって活躍する戦いである。
しかし、兵器が普及すればこの前提が崩れる。
俺がそれを示唆すると父は優しい顔になって俺の頭を撫でた。
「やはり、リディは優しい子だな」
「そんなこと。わたしはきっと、それしかないと思ったら躊躇なく人を殺すわ」

結局のところ人の死が怖いだけ。自分の手で、意思を持って殺すならまだしも、自分の判断で大勢が死ぬなんていうのは想像するだけで恐ろしい。

俺の返答に父は曖昧な笑みを浮かべてから、表情を引き締めた。

「まず確認しよう。オーレリア・グラニエがそのような発明をしているという証拠はあるのか？」

「いいえ。発明品を持ち出すとなれば、さすがに咎められただろうから……」

並の相手ならともかくオーレリアと戦うのは分が悪すぎる。魔力量でも経験でも地の利でも上回られている状況で喧嘩を売るのは自殺行為だ。

ただ、そのせいで証拠と言えるのは俺の証言だけになってしまった。

「忍び込むなりして証拠を持ってきた方がいいかしら？」

「いや。部屋の主に招かれるのと無断で侵入するのとでは意味が全く異なる。今回のようにすんなり侵入できるとは思わない方がいい」

「……そうね。何しろ魔法と魔道具に精通した天才が相手だもの」

魔法や魔道具によるセキュリティは持続時間という弱点があるが、オーレリアの開発した新型魔石はまさにその弱点を補うものだ。許可のない侵入者を問答無用で

焼き殺す仕掛けなどがあっても不思議はない。
「じゃあ、このまま放置しておくの？」
「それも駄目だ。……新型魔石や魔法封じの魔道具について、少なくとも私は初めて耳にした。最低でも陛下には確認を取らねばならない」
「お父さまが知らないのなら王家の依頼ではない、ということかしら」
「さあな。国の中枢部とて完全な一枚岩ではない。国として依頼していないとしても、何らかの思惑が絡んでいる可能性はある」
オーレリアの後見人は宮廷魔法士長。まずは試作品を作らせ、それをこれから売り込む算段ということも考えられる。もちろん依頼人は別かもしれないし、目的は国王に取り入ることではなく現政権を壊すことかもしれない。
「オーレリアさまは卒業を気にしていたわ。進路と関係があるのかしら」
「あれは宮廷魔法士に加わることが決定している。となれば……いや。決めつけるのは早計だな」
それから父は俺に、しばらくの間オーレリアのところへ行かないように命じてきた。

「わかったわ。オーレリアさまからも『来なくていい』と言われているし、どうせ行っても魔石や魔道具作りを手伝わされていただけだもの」
「明らかに子供の勉強ですることではないが……ならば魔法はどうやって習ったのだ」
「お手本を幾つか見せられたら後は自主練だったけれど？」
「意味が分からん」
和んだというかなんというか、とりあえず空気が多少弛緩した。後は任せろと父は請け負ってくれる。歯がゆいが、さすがに彼が悪人だとは思えないし、国王の耳へ入れずに解決するのも無理だろう。
オーレリアがこれからどうなるかは未知数だという。
地下室を見せろと言って素直に応じるかわからないし、かといって騎士団を動員することになれば要らない騒動を引き起こすかもしれない。依頼人が誰かもわからない以上、下手な人物に対応を任せれば逆効果にもなりかねない。慎重な対応が必要になる。
「あまり気に病むなよ、リディアーヌ。向こうから手の内を明かしてきたのだ。今

から手をこまねいても手遅れなのかもしれぬ」
「……そうね。どうしても考えてしまいそうではあるけれど」
最後に、俺はひとつの質問を父へ投げかけた。
「ねえ、お父さま。国家転覆が目的だと仮定して、一番やりそうな勢力はどこかしら？」
「リディがそこまで知る必要はない。お前にはもっとのびのびと育って欲しいのだ」
俺の髪を撫でる父の手にも、声にも、底知れない慈愛が確かに籠もっていた。

「じゃあ、オーレリアさまについてはひとまず安心なんですね」
「だといいのだけれど、ね」
部屋に戻ってきた俺は、不安そうなアンナに父へ相談したこと、父がその後の対応を請け負ってくれたことだけを伝えた。
ぱっと表情を輝かせるアンナだったが、人任せにするだけという状況が俺としてはどうにも落ち着かない。

俺では行動範囲も、いざと言う時に振るえる権力も限られるのだから仕方ないのだが、せめてもう少し何かできることはないものか。

「そもそも、状況が不透明すぎるのよ」

発端はあの手紙。

同時期に急に手の内を明かしてきたオーレリア。それぞれが何をどう動かそうとしているのか、考えれば考えるほど可能性が増えてきて頭が混乱する。いっそのことあの手紙もオーレリアの仕業で、全部俺をからかうためのドッキリでした、とかだったら楽なのだが。

『何言っているの？　そんなこと言われたらいくら師匠でも丸焼きの刑よ！』

いや、何事もなく済むんならその方がいいだろう。丸焼きにはしたいけど。

「あー、もう。だからわたし、こういうのは苦手なのよ！」

「苦手な方はそんなにあれこれ考えたりしないと思いますけど」

「仕方ないじゃない。貴族社会って複雑すぎるんだもの」

付き合っているのが主に子供世代だけ、しかもできる限り付き合う相手を限定してもなおこの有様である。セレスティーヌなんかは一体どうやって立ち回っている

のか理解不能だ。あの女と俺はそもそも根本から別の生き物なのではないかとさえ思ってしまう。

「……あの手紙、か」

椅子の背もたれにぐっと体重を預け、天井を見上げながらふと呟く。

「リディアーヌ様。そういえば、手紙の件は？」

「お父さまには言ってないわ。文字が消えてしまったから、それこそ証拠がないしね」

実を言うと、手紙の方にはまだ手がかりがある。

手紙に使われていた封蝋に特徴があったからだ。とある家の紋章。差出人の記載こそなかったが、普通に考えればその家の誰かが送ってきたということになる。

「ねえ、アンナ。たしかバルト家から招待状が届いていたわよね？」

「バルト家ですか？　はい、次期当主フレデリク様の奥様であるミレーヌ様より、珍しいお茶を持ち寄る会のお誘いが――まさか、リディアーヌ様、参加されるおつもりですか!?」

アンナが慌てたのには理由がある。

ミレーヌ・バルト。彼女と俺には少々因縁がある。ジゼルが取り調べ中に自白した例の薬の調達元が他でもないミレーヌだったのだ。

バルト家の領地は植物の栽培に力を入れているらしく、薬関係の伝手が多い。そのため「薬を分けて欲しい」と頼まれることも多いようで、ジゼルへの対応もその一環だったという話。

『確かに解熱剤を手配いたしましたし、濃縮の方法についても請われて教えました。ですが、彼女から頼まれたのは毒ではなく薬ですし、何に使うつもりなのか詳しく尋ねませんでした。風邪で仕事を休まないために使う、といった平和的な利用法も十分に考えられますでしょう？』

騎士団の取り調べに対してミレーヌはそんな風に答えたそうだ。実際、解熱剤自体は「医者に頼めば処方してもらえる」程度の代物なので言い訳としては不自然ではない。あの夜、やってきたジゼルを追い返したという話もあるが、これも「馬鹿な真似をするなと諫めたつもり」だと言われてしまえば罪になるほどのものでもない。

しかし、ジゼルを間接的に唆していた可能性は十分にある。

なにしろ、ミレーヌは学園時代にジゼルの所属していた派閥の長をしていた人物なのだから。

「ええ、そのまさかよ。もちろん、お父さまへ相談してからにするけれど、このタイミングで送られてきた招待状よ。なにか意味がありそうでしょう？」

俺が青茶を定期購入しているのは別に秘密でもないので簡単にわかる。招待する口実としては妥当だろう。

「大丈夫。もしお茶に毒が盛られていてもわたしが治してあげるから」

「いえ、あの、できれば盛られる前になんとかして欲しいんですが……」

毒耐性を得る魔法を練習しているが魔力量もあってまだまだ十分とは言えないアンナ。彼女用の特訓メニューを増やすことを俺は真剣に検討し始めた。

公爵令嬢の専属騎士

「リディアーヌに騎士が付く事になった」

朝食の席にて父がそう宣言したのは、地下室の件があってから三日後のことだった。

俺が相談した件もあってか父はこのところ毎日帰りが遅い。いろいろやることがあるのだろうと思っていたものの、思った以上に色々対応してくれていたらしい。

この宣言にシャルロットがコンソメスープを飲む手を止め、エメラルドのような瞳を煌めかせた。

「お姉様の専属騎士ということですか？」

「ああ、そうだ。と、言っても見習い騎士だが、いるのといないのとでは大違いだろう」

「凄いです。見習いの方でも、騎士様に守って頂けるなんて」

羨ましい、という視線を送ってくる義妹に、俺は苦笑交じりの笑みを返した。

この国における騎士とは国に忠誠を誓い、騎士団に所属する戦闘技能者のこと

だ。軍人と警察を足して二で割ったような役割を持っていて、戦時は軍の中核を担い、平時には街の治安維持や要人護衛などを担っている。

騎士は君主――つまり国王の剣であるため、彼らが特定個人に仕えるには王の許可が必要になる。専属の騎士を持つことが許されるのはほぼ例外なく国の要人。高位貴族だからと言って簡単につけてもらえるものではない。

「リオネル殿下との婚約から一年以上が経った。国王陛下、妃殿下、ならびにリオネル殿下からの覚えもめでたい。将来の王族入りを見越して今から護衛を付けておこうという判断だ」

「父上。それにしてもこの早さは異例に思えますが……」

次いで疑問を投げかけたのはアラン。隣に座った俺へと投げかけられる視線には不安の色がある。心配ない、という意味をこめてにこりと微笑めば「本当かい？」とでも言うようにむしろ圧が強くなる。

父はアランに向けて深く頷き、

「リディの行動範囲を考慮して決定した。入学年齢の遥か以前から学園へ出入りしているため、貴族の目に触れる機会が多い。悪意の手を排するためにも必要な措置

だろう。私としてはむしろ前々から打診していたくらいだ」
「見習い一人程度では戦力として不安ですけれど」
どこを見るでもなく、ゆっくりと食事を続けながらセレスティーヌ。
「うむ。欲を言えば正規騎士を付けたかったが……女性騎士は絶対数が少ないからな。リディの年齢を考えれば長く仕えられる若手の採用が適当ということになった」
「あ……。お姉様には女性の騎士が付くのですね？」
「着替えや花摘みの際、傍に控えられないようでは護衛として不足ですからね」
アンナの魔力がもっと多ければ護衛としても頼りにできたかもしれない。その場合は男性騎士という選択肢もありえただろうが、まあ、護衛対象と同性の騎士を使う方がいろいろと無難である。
俺はくすりと笑って、
「逞しい騎士さまに守っていただく。物語の登場人物になったようで楽しそうではあるけれど、特定の殿方と近しい関係になってはリオネルさまに嫉妬されてしまいそうだわ」

「うう……お姉様は意地悪です」
「あの殿下は嫉妬するほどリディに興味はないだろう」
イケメン騎士を想像していたらしいシャルロットをからかっていたら兄が不機嫌になってしまった。
アランは将来の宰相就任を見越して定期的に王族と交流を持っている。その中には当然リオネルも含まれているのだが、単純お気楽王子様と思慮深いアランではあまり馬が合わないらしい。俺がリオネルを褒めたりするとだいたいこんな感じである。
俺は強いて明るい声を出し話題を逸らす。
「それで、お父さま？　どのような方が付いてくださるのかしら」
「ああ。ノエル・クラヴィル。十四歳の伯爵令嬢だ。赤紫の髪とラベンダーのような瞳を持った美しい娘らしい。属性は火だからリディとも仲良くやれるだろう」
「火属性、ですか」
「む？　何か問題があるのか？」
「いえ。火属性の持ち主は苛烈な性格の方が多いのでしょう？　他者と仲良くす

るのは苦手なのではないか、と」

特に間違ったことは言っていないはずなのに、セレスティーヌとアンナから「お前が言うな」という目で見られた。

「お初にお目にかかります。ノエル・クラヴィルと申します。今後、お傍に控えさせていただくことをどうかお許しいただけますよう」

朝食の席で父に了解の意を示したところ、翌日の朝食後にはもう騎士が派遣されてきた。

聞いていた通り、ノエルは騎士というより令嬢と言う方がしっくりくる可憐な少女だった。高めの身長と短く切り揃えた髪のお陰で凛々しい印象もある。ドレスや騎士装はもちろん、スリムな体型なので男装をしても似合いそうだ。

クラヴィル家は確か、代々騎士を輩出していることで有名な家だ。騎士団の現副団長はノエルの父親、クラヴィル家の当主が務めている。

彼女が騎士の道を選んだのもお家柄なのだろうか。手袋に包まれた指をそっと眺

めると、女性にしてはしっかりと太いのがわかった。指の腹も硬くなっているだろう。身体だって無骨ではないものの引き締まっていて、男性からの評価は分かれそうだ。

なるほど、剣を振るっているとこうなるのか。

「初めまして、リディアーヌ・シルヴェストルよ。騎士さまに守ってもらえるなんて身に余る光栄だわ。急な話で申し訳ないけれど、よろしくお願いね」

「はっ。誠心誠意、お守りさせていただきます」

父によると、ノエルに敬語は不要らしい。

騎士もまた貴族なので一概に「守られる側が偉い」というわけではない。家柄の差も適用されるし騎士の階級も考慮する必要があるが、子供が大人へ、女が男へ対する時などはなるべく敬意を払った方が良いとされる。

ただ、俺とノエルに関しては王族入りの内定した公爵令嬢と伯爵家出身の見習い騎士なので、俺の方が立場的に上となる。

挨拶の後は誓約の儀式。

剣を受け取って肩をとん、とん、と叩くアレ――叙勲の儀と同じ形式だが、これ

はノエルの忠誠が国王から俺に移す儀式ではない。国への貢献という第一の目的に反しない限りにおいて俺に忠誠を誓うという意味合いのものだ。

まだ成長期は終わっていないものの、ノエルの身長は成人女性並。彼女の剣を受け取るとずっしり重く、一瞬ふらつきそうになった。しっかりと足に力を入れ、無事に達成。

「今後の予定について、あなたはなにか指示を受けているのかしら？」

「リディアーヌ様からの要請があった際は護衛につき、それ以外の日については騎士団にて通常の活動に参加するように、とのことです」

午前中の授業開始を待つ間に確認事項を済ませてしまおう。そう思ってさらに話しかける。

椅子に腰かけた俺に対し、ノエルは立ったまま答える。

「私は護衛です。緊急時にすぐ対応するためにも座るわけにはいきません」

アンナたちメイドもそうだが、立っている人がいるのに自分だけ座っているとなんだか申し訳ないような気持ちになる。『だから、そういうものだって言ってるでしょ。いい加減慣れなさい！』。

それはともかく。

相談の結果、ノエルには外出する時や大事な来客のある時を中心に週二、三回程度務めてもらうことになった。見習いの彼女には実務経験だけでなく訓練の時間も大事になるので「週五フルタイムでお願いね」などとはさすがに言えない。

「では、リディアーヌ様の普段のご予定について説明します」

「ええ、お願い」

俺のスケジュールは八歳時点に比べるとかなり流動的になっている。

リオネルとの交流や他貴族との社交がたびたび入るからだ。相手方の予定もあるので全部休日に入れられるわけもなく、家庭教師の日程の方を臨機応変にズラして対応している。

特に予定のない平日については午前一コマ、午後二コマの授業を受ける形で変わらない。空いた時間は本を読んだり、魔法やチェスの練習をしたりして過ごす。十分な睡眠をとるため夜は早めに寝るよう心掛けているものの、夜中の自由時間も欠かせない自習タイムだ。

普通の日に外へ出るのは庭を散歩する程度。屋内で使いづらい魔法についてはつ

いでにこの時練習することが多い。
「屋敷内は後ほど案内いたします。ここまでで何か質問はございますか？」
「質問。……そうですね。訓練の時間はないのですか？」
「身体を鍛える時間、ということよね？　残念ながら、筋肉が付くと見栄えが悪くなるからって養母から禁じられているの」
「なるほど」
だからか、と言いたげな視線が俺の身体に突き刺さった。
病み上がりの頃よりはマシになったものの、十歳の平均よりは細い身体つきをしている。母アデライドからの遺伝もあるかもしれないが、
「リディアーヌ様は果汁よりもお茶を好まれますし、砂糖の取りすぎにも気を付けていらっしゃるのでなかなか太らないんですよね」
「だって、体型を維持するのは大変なのよ？　日頃から気を付けていないと太る時は一瞬なんだから」
前世ではカロリーなんて碌に気にしていなかったのでほとんど聞きかじりだが、せっかくの美貌を壊さないために可能な限りの努力はしている。

特に「お飲み物です」と言って普通に出てくる果実の搾り汁（ジュース）は危険だ。新鮮な上に果汁たっぷりでついつい飲みたくなってしまう。太らない飲み物という意味でストレートの紅茶や青茶は俺の強い味方だ。

と、身内の話になりかけたのを苦笑で中断して、

「騎士を目指しているノエルとは全然違う生活でしょう？」

「そうですね。リディアーヌ様は私とは全く違う生活をしていらっしゃいます」

おっと。

思ったよりも素直な返答がきた。ノエルにとっても急な話だっただろうし、あまりいい感情を持ってくれていないのか。単に歯に衣着せない性格なのか。それとも。

しばらくは要観察だと胸に刻みつつ、俺は午前中の授業時間を迎えた。

「少し時間が余ったわね」

授業は予定時間よりも早く終わることが多くなった。

教える側にも準備がある。俺が教わったところをさっさと覚えてしまうので教材が足りなくなったり、あるいは教師が喋り疲れてしまったりするせいだ。

しかし、お陰で「さくっと進めてさくっと終わる」という授業体制が構築されつつあり、受ける側としては快適である。何しろ空いた時間で他のことができる。

「お疲れ様でした、リディアーヌ様」

「ありがとう。アンナもノエルの案内、お疲れさま」

「とんでもありません」

アンナには授業時間を利用してノエルの案内をしてもらった（その間の傍仕えはエマに頼んだ）。広い上に部屋数も多いので一度で覚えきるのは難しいだろうが、基本的には俺やアンナが一緒だし、これから長い付き合いになるのであればそのうち覚える。

……いくら騎士とはいえ、屋敷の全体像を見せるのだからノエルの身元確認はしっかりされているはずだが。

「ねえ、ノエル。あなたのことをもう少し聞かせてくれないかしら？」

アンナにお茶を淹れてもらい、俺は少女騎士にそう問いかけた。

「はい。お答えできることでしたら」
畏まった口調で応じたノエルは、言葉通りたいていの質問には素直に答えてくれた。
四人兄妹の末っ子で上は全員男子。兄たちもみんな騎士を目指していたので彼女も自然と騎士の道を志したらしい。
女子で見習いから騎士になる者は極めて珍しい。男子でさえ見習いの大半は例の口減らしによる入団なので、ノエルは相当気合いが入っている。
「騎士団は男性中心でしょう？　そこに見習いとして入るのは抵抗がなかった？」
「我が家はもともと男系でしたから、あまり気になりませんでした。むしろドレスを着て結婚のために自分を磨く方が苦痛だったかもしれません」
「あら。結婚は嫌？」
「いずれはすることになると思いますが、私は剣を振っている方が好きなので。結婚するためだけに生きたいとは思いません」
「わかるわ」
「リディアーヌ様？」

思わず口に出してしまったら、アンナからジト目で睨まれた。うん、王子の婚約者が「結婚に魅力を感じていません」とか失言だった。

「でも、アンナ？　女の価値が結婚相手で決まるとしても、人としての価値はそれだけで決まらないでしょう？」

「はい。確かにそれはそうですけど……」

「わたしだってリオネルさまと結婚して子供を産むだけで済ませる気はないわ。妻として夫を支えるのでもいいし、公爵家の発展に貢献するのでもいいけれど、わたしでなければできなかったことをなにかしないとつまらない」

国内の悪役令嬢を一人でも多く倒すのもやりたいことの一つだ。

だから、ノエルが他人に昏い感情を向けてくるようなタイプなら最悪、叩き潰すことになる。

「……リディアーヌ様は『素敵な結婚』を目指していらっしゃるのではないのですか？」

どうなるかと思いながら返答を待っていると、ノエルはぽかんとした表情で呟いた。

「細くて、儚げで、可愛らしいお嬢様なのに。お家のために働く覚悟を？」
「わたしって儚げに見えるのかしら？　……いえ、それはいいのだけれど。そうよ。なにも家のためにできることは結婚だけじゃないでしょう？　もっとも、男に囲まれて騎士を頑張っているあなたには敵わないけれど」
答えはなかなか返ってこなかった。
なにかを考えるに立ち尽くすノエルに、俺は笑って言った。
「そうだ。ねえ、ノエル？　わたしに剣術を教えてくれないかしら？」

【新しい登場人物】
◇ノエル・クラヴィル：十四歳の見習い少女騎士。リディアーヌの護衛に選ばれた。

「突然何を言い出すんですか、リディアーヌ様！　剣術は駄目だとあれほど言われているのに……！」

提案するとすぐにアンナが悲鳴を上げた。

付き合いが長くなるにつれてどんどん遠慮のなくなっている彼女は、俺の左手をぎゅっと両手で包み込むと至近距離から懇願してくる。

「怪我を治せるのはわかっていますが、指が太くなるのはどうしようもないでしょう？」

「大丈夫よ。それも魔法を使えば防げると思うから。要は身体への負荷を軽くすればいいわけだし」

指や腕が太くなるのは基本的に筋肉が原因のはず。であれば筋肉がつくのを防いでやれば見た目の変化は起こらない。これは力を使う作業の際、身体に魔法をかけることで実現できる。

そう説明しても納得がいかないのか、なおもこっちを見つめて来るアンナから

いったん目を逸らし、俺はノエルの方を見る。
少女騎士は言われた意味を吟味するように何度も目を瞬いてから口を開いた。
「それでは、訓練する意味もないのでは？」
「まあ、そうね。感覚は養われるだろうから無意味とは言わないけれど、身体を鍛える効果はほとんどないでしょうね。でも、楽しそうじゃない」
「楽しい、ですか」
「ええ。ノエルは剣を振るうの、楽しいと思わないのかしら？」
わざわざ騎士を志すくらいだから好きなはずだ。そう思って問いかけたのだが、ノエルは瞳にかすかな怒りを浮かべて返答してきた。
「訓練はそんな浮付いた気持ちでやるものではありません」
俺は剣に関して門外漢だ。だから、正しいのは彼女の方だろう。
それでも俺は敢えて煽るように笑ってみせる。
「訓練を楽しむことは『浮付いた気持ち』になるのかしら？」
「……剣技とは、人を殺すための力です。覚悟もなく剣を握れば、身体か心を滅ぼすことになります」

「覚悟ならある、と言ったら？」
ぴくり。
静かな状態に保たれていた少女の顔に明らかな苛立ちが浮かぶ。睨み合いになった。アンナが「止めましょう」と言うように袖を引いてくるが、俺は引かない。
「ご令嬢が多少訓練したところで上手くはなりませんよ」
「じゃあ、わたしに素質がないか確認してみる？」
ここまで来れば挑発していることが完全に伝わったのだろう。ノエルはもう表情を隠そうともせずに答えてきた。
「後悔しても知りませんよ」

「もう！　どうしてわざわざ喧嘩になるような事を言うんですか！」
「ごめんなさい、アンナ。でも、こうでもしないとノエルと仲良くなれない気がしたの」
剣の稽古をする、と決まれば早速、俺は着替えに取り掛かった。

手伝いは口の硬そうなエマと、魔法の訓練にも付き合ってもらっているマリー。着ないのに定期的に新しい物を仕立ててきた乗馬服がようやく日の目を見る時である。これは女性服にしては珍しくパンツ（ズボン）状になっているので、スカートよりはずっと剣術に向いている。

真剣を使うつもりはないので駄目になりはしないだろうが、近いうちに予備を発注しておこうと思う。

「リディアーヌ様？　ノエル様に隔意を感じられたということですか」

「ええ、そうよマリー。仕事だからと一線を引かれたままだとなんだかつまらないでしょう？」

「……仕事なのですから、それで構わないのでは？」

静かに正論を述べてくれたのはエマ。彼女は気性的にも能力的にも仕事に感情を持ち込まないのが似合っているタイプだ。

しかし、ノエルはどうだろうか。

荒事に身を置く人間は気性も荒くなりがちだ。だとすれば感情なく護衛に徹する事はできないかもしれない。現に少し挑発しただけで簡単に乗ってきた。

単に素直なだけ少女ならそれはそれでいい。

問題はノエルが腹に一物を抱えていた時だ。もしそうであれば早めに見極めなければならない。相手の得意分野に持ち込めば何かしら見えてくるはず。

「ノエルは『何を』仕事と捉えているか、っていう話よ。たぶんね」

自由時間は決して長くない。

午後二つ目の授業を多少遅らせてもらうにせよ、着替え直す事も考えれば大した時間は取れない。手早く着替えて中庭に向かえば、ノエルは訓練用の木剣を二本用意して待っていた。

少女の服装は変わっていない。

見習い騎士の制服は運動の負荷にも耐えられるように作られている。俺ごときに土を付けられることはない、という考えもあるかもしれない。

「お待たせ、ノエル」

「本当にやるつもりなのですね、リディアーヌ様」

「ええ、もちろん。わたしとしては待ちに待った瞬間だわ」

手を擦りむかないようにと薄い布手袋を嵌めた手で木剣を握る。屋敷に出入りす

る兵達が訓練で使っているものだろう。成人男性用のそれは長く、ノエルの持っている真剣程ではないにせよ重い。

下手すると「食器より重い物を持ったことがない」俺はその重量感に内心で「おお」と驚きながらもにこりと笑みを浮かべた。

余裕の表情が癪に障ったのか、ノエルは外した剣をマリーに預けると、少し荒い足取りで訓練場に立った。

一足一刀の間合い、といったところか。

「どうぞ。お好きなように打ちかかって来てください」

「どこから行っても防いでくれるってことね？」

「見習いとはいえ騎士ですから」

木剣を右手に下げただけの姿勢。構えてすらいないのに、なんとなくプレッシャーを感じる。当然だ。前世でさえ喧嘩なんてほぼ未経験。それに対し、相手は人同士で命のやり取りをする前提で訓練を繰り返してきている。当然、格は全然違う。

しかし。

『だからなんだっていうのよ！　気持ちで負けていて勝負になるわけないじゃな

い！』

まさに火属性。苛烈な性格を持つ俺の女性部分が冷静で臆病な状況分析を吹き飛ばす。

その通りだ。俺は両手で木剣を支えると身体保護のための魔法を構築、全身に張り巡らせたうえでノエルに正面から挑みかかった。

「や……っ！」

「――――」

軽い衝撃。迅速に持ち上げられた剣が、振り下ろしかけた俺の剣をさっと払い、持ち主である俺自身にも尻もちを付かせる。

痛みはない。服が多少汚れた程度だ。俺に苛立っていても十分な手加減をしてくれている。つまりそれは、俺を子供扱いしているということだ。

「もう終わりにしますか？」

「あら。そんなわけないでしょう？」

すぐに立ち上がって剣を構え直す。集中が解けたことで解除されてしまった魔法を再構築、若干のアレンジを加えて張り直して、

「はっ……！」
「ふっ」
また転ばされる。それでも立ち上がり、魔法を操作して再挑戦。
そんなことを十回は続けただろうか。一度挑みかかるごとに木剣を払われる衝撃は少しずつ強くなり、最後には身体が軽く跳ね飛ばされるまでに至った。
攻撃は全く成功していない。それでも少しは驚かせられたようで、ノエルは戸惑うような表情で俺を見つめてくる。
「身体強化を使っているのですか？」
「ええ。どうせ魔法を使うのだから同じことでしょう？」
耐久性と柔軟性を強化するついでに運動能力も上げているだけなので、同時に二つの魔法を使っているわけでもない。幸い、身の丈に合わない武器を軽々振り回す少女は何人も知っている。イメージするのは容易かった。
「どう？　少しは驚かせられたかしらっ!?」
「ええ、驚きました。ですから――」
言いながら突っ込んだ俺は、少しずつ調整が上手くなってきた身体強化をふんだ

んに発揮し、今日一番の攻撃を繰り出そうとした。
刹那。
一歩踏み出したノエルと彼女の振るった木剣によって、俺の持つ木剣は高く天へと跳ね上げられた。
「終わりにしましょう」
首に突きつけられた木製の切っ先を見て、俺は降参を宣言した。

「それで？　ノエル・クラヴィルの人となりは掴めたのですか？」
「はい、お養母さま。結論から言えば、ノエルは悪い子ではないと思います」
その日の夕食後、俺はセレスティーヌから自室へと呼び出された。
言いつけを破り剣を握った件についてお叱りを受けるためだ。一通りの小言と注意を聞かされ、両手の指をじっくりと確認された俺は「今後も十分注意するように」でお許しを受けた。
同席していたマリーやアンナは「もっと叱ってください」と顔で訴えたものの、

養母は無駄を嫌う性格。話を理解している相手にくどくど言ったりはしない。その代わりにさっさと実務的な話題を振ってきた。

「おそらく『一般的な貴族令嬢』が好きではないのでしょう。剣を交えた後はわたしの印象が変わったのか、少しばかり態度が軟化しました」

稽古（試合？）を終えた後、ノエルは俺に「思ったよりは楽しめました」と言った。

また剣の練習に付き合ってくれるかと尋ねるとふっと笑って、

『まだ懲りていないのでしたら、仕方ないので相手をして差し上げます』

礼儀はなっていないが、軽口を叩けるようになったのは打ち解けた証とも言える。これからも定期的に交流機会を設ければもっと仲良くなれるだろう。

俺の見解を聞いたセレスティーヌは少し考えてから頷いて、

「リディアーヌへ取り入る算段にしては行動が雑ですね。断定はできませんが、凝った策を弄してくる可能性は低そうです」

「稽古に応じたのもわたしの力量を測るため……という可能性はあると思いますが、それでわたしを鍛えてしまっては本末転倒でしょう」

稽古はごく短い時間だったが、俺はようやく剣を握る感覚と、武器を持った人間に対する感覚を知る事ができた。

経験が物を言うのは魔法だけではない。今後、毒ではなく暴力によって命を狙われた際、今回の経験がきっと生きてくる。

ノエル、あるいはノエルを遣わした誰かが俺を警戒しながら「少し剣を握ったくらいで何が変わる」と思っているのならそれは油断というものだ。

「ある程度打ち解けたところで本命の行動に出てくる事もありえます。念のため、注意は続けておくようにしてください」

「かしこまりました。……ああ。魔法で嘘発見ができればもう少し楽ができるのですけれど」

魔法関連において非常識扱いされがちな俺だが、上手く使えない魔法はたくさんある。

嘘発見もその一つだ。

相手の心理を読むには相手に魔法をかけなくてはいけない。貴族相手だと魔法防御に引っかかってしまうし、心の魔法をかけるのはマナーとしては最悪の部類。状

況によっては罪に問われることさえ考えられる。
　さらに「嘘を見分ける」というのが漠然としすぎている。真偽を受けるのは事実かどうかなのか、それとも相手の主観なのか。具体的なイメージが難しく消費魔力もかさんでしまう。
　と、セレスティーヌはティーカップをゆったりと傾けながらしばし俺へと視線を向けて、何気ない世間話をするように言った。
「読唇術や読心術。魔法を用いる事なく、相手の心理や反応を探る技術も存在しますよ」
「……そうか。そうですね」
　前世にもそういう人間はいた。俺の認識としては「占い師とかと同レベルに胡散臭い」だったが、心理学を学んで観察眼を磨けば超常能力もなしに相手の心を把握できるという。
　であれば、相手に魔法をかけるのではなく視覚や聴覚を強化することで観察能力を高め、ただの会話から通常以上の情報を引き出すことも可能かもしれない。『……って、そんなの簡単にできるわけないじゃない！　それこそ修行が必要よ！』。

俺は苦笑を浮かべて養母を見つめ、かまをかけるように彼女へ尋ねた。
「お養母さまはそういった技術を収めていらっしゃるのですか？」
にこり。
セレスティーヌの浮かべた微笑はまるで天使や女神といった上位者が人間を愛玩するそれのように、優しさの裏にある種のプレッシャーを備えていた。
「さあ、どうでしょう？　……少なくとも、己の手札をみだりに明かすのは愚か者のする事ですよ、リディアーヌ」
「肝に銘じておきます」
いや、本当にこの女、滅茶苦茶怖いんだが。
紅茶を飲んで温まったはずなのに寒気を感じながら部屋に戻ると、アンナが俺に囁いてきた。
「奥様は本当に優しくて穏やかで素敵な方ですよね」
「もう、どこが素敵なのよ。わたしはあの人、やっぱり嫌いだわ」
「リディアーヌ様。奥様の事をまだ嫌っていらっしゃるのですか？」
まだも何も、好きになる理由がない。セレスティーヌの強い部分は見習わないと

いけないと思うが、どうやらあの底知れなさは簡単に真似できるものではなさそうだ。

バルト家への訪問

バルト家の敷地内へ足を踏み入れると、つんとする独特の香りが鼻をくすぐった。
「リディアーヌ様、何か？」
「いいえ。なんでもないわ、ノエル。ただ薬草の匂いがしただけ」
今日のエスコート役は護衛として同行してくれているノエルだ。見習い用の騎士装姿の彼女は俺の答えを聞いて若干嫌そうな表情を浮かべる。
「あまりいい香りではありませんね。勘が鈍りそうです」
「ノエルは花でも似たようなことを言いそうね」
「似たようなものでしょう」
若干ムッとしたような返答が可愛い。女に囲まれて過ごすのはストレスだが、女の子の飾らない姿を間近で見られるのは役得である。
同行するメイドはアンナとエマ。なんだかんだ言いつつ俺の周りにも人が増えてきた。公爵令嬢の癖に今まで少数精鋭すぎた、と言う方が正しい気がしないでもないが。

俺は傍らに控えたエマをそっと見上げる。彼女はポーカーフェイスを維持したまま「わかっている」と言うようにかすかに首肯してくれた。今回、こまごまとした仕事は専属であるアンナの仕事であり、エマには周囲に気を配るという役割が与えられている。

『バルト家は我が家と深い交流を持っていない。軽挙妄動に走るほど考えなしではないと思うが、十分に注意するように』

父からも前もって口酸っぱく注意を受けた。友好関係にない派閥の家というのは極端な話、敵地も同然であって、一挙一動に細心の注意を払うのが当然であるらしい。

何かあった場合の対応は周囲の人間――アンナたちやノエルの役割ではあるものの、俺自身、注意しておくに越したことはない。自宅のメイドに殺されかけた身としてはむしろ、最悪の想定をしておくべきである。

「ようこそいらっしゃいました、リディアーヌ・シルヴェストル様」

バルト伯爵家のメイドは十分な教育の感じられるしっかりとした対応を取ってくれる。出迎えの人数で言えばモレ家の方が多かったが、今回は俺一人が招かれてい

るわけではない。
　屋敷の規模や家の財産で言えばバルト家の方がずっと上であることはメイドの身なりや庭に植えられた植物を見ても明らかだった。
「バルト家のお庭は薬草園になっているのね。お屋敷に薬師も常駐しているのかしら」
「はい。他家の方から病の相談を受ける事もございますので、迅速に処方が行えるよう薬師を雇用しております」
　じっくりと眺める時間はなかったものの、俺は目に入った薬草の特徴を可能な限り頭に叩き込んでおく。名前まで判別できたのは半分弱といったところか。図鑑に写真が載っていないのはこの世界の面倒な点だ。絵や解説文だけを頼りに種類を言い当てるのはなかなか難しい。
　ただ、そんな中でもわかったのは、
『あの解熱剤は作れそうね？』
　別に不思議なことではない。もともと特殊な薬ではないのだ。ただ、警戒する材料の一つとして心に留めておくことにする。

迎えのメイドたちは屋敷の正門前から中央の道を歩いた後、正面の屋敷が目前に見えたところで歩みを脇へと逸らした。
「あら。あちらに行くのではないのね？」
「フレデリク様とミレーヌ様は現在別館をお住まいとしておりますので」
俺を招待したミレーヌ・バルトは次期伯爵夫人。フレデリクの父である現伯爵が退かない限りは現伯爵夫人ではない。引退時期に関しては家の事情や個人の意思もあるだろうし一概には言えない部分だ。
なお、俺の父が若くして当主の地位を継いでいる件――というか、俺の祖父母がどうしているのかと言えば、彼らは公爵領に引っ込んでおり、ぬくぬくとした生活を送っているらしい。
本来であれば孫の顔を見たいところだろう。ただ、子育てで気を抜けない時期を脱したと思ったら妹の方（俺）が手のつけられない癇癪を起こした、では会いに行くのも来るのもなかなか難しい。俺の気性がマシになったらなったで婚約とか何かと忙しいし。
『……意外と落ち着いた雰囲気ね？　あの女の親玉だし、もっとギラギラした屋

敷を想像していたわ』

伯爵家の別館は、一言で評するなら「教科書通りの貴族家」といった印象だった。品の良さこそ感じられるものの、なんというか「無難」。本館ではなく別館だからなのか、それとも、思ったほど悪い人物ではないのか。

売り物が植物、薬であるのなら美を誇る必要はなく、むしろ堅実を強調した方がいいのかもしれないし、なんとも言えないところだ。

「失礼いたします。リディアーヌ・シルヴェストル様をお連れいたしました」

「どうぞ。お通しして頂戴」

通されたのは広い応接間だった。奥はバルコニーに繋がっており、その先にはどうやら屋敷の中庭があるらしい。そちらにも多数の植物が生い茂っているのが遠目にも感じられる。中央あたりに置かれた広いテーブルには既に三名ほどの貴族女性が腰かけていた。

「申し訳ございません。遅くなってしまいましたでしょうか？」

「いいえ。ようこそいらしくてくださいました、リディアーヌ様」

カーテシーの後でそう尋ねれば、上座に座った貴婦人が微笑と共にそう答えた。

深緑色の髪と瞳。エマより多少年上――ジゼルの先輩だったと考えれば間違っていないだろう――とみられる彼女がミレーヌ・バルトだろう。

「お初にお目にかかります、ミレーヌさま。お会いできて光栄です」

「こちらこそ。リディアーヌ様のような若い方がお茶の種類に興味をくださるのはとても喜ばしいことですわ」

わざわざ立ち上がって視線を交わしてくれる彼女。第一印象としては悪いものは感じない。ただ、笑んでいながらも瞳の奥が笑っていないように思える。値踏みされている感じがどうにも落ち着かない。

『ふん。こいつもあの女と同じタイプかしら？』

少なくとも、抜け目なく観察してくるという意味でセレスティーヌと近しいものはある。養母のお陰で気付けた、と言っていいのだろうか。

なんとも釈然としないのを感じつつも、俺は指定された席へと腰かける。上座（ミレーヌ）に近い席は埋まっているので下座側。公爵令嬢という身分を考えると冷遇とも思えるが、年齢とゲストという立場を考えればおかしいという程ではない。

むしろ下手に挟まれるよりは気が楽だ。何しろ他のメンバーは学園を卒業済みの

大人らしい。外見の特徴からおおよその名前と家柄は推測が立つ。その推測は互いに自己紹介を交わすことで正しかったと証明された。

「あの、今日の参加者はこれで全員でしょうか？」

「いいえ。後もう一人――ルフォール侯爵家のご令嬢が参加なさる予定になっております」

「あら、珍しい」

「ご令嬢ということはヴァイオレット様ですの？」

「ええ。個人の招待にはなかなか応じてくださらないですけれど。……今回は楽しい催しになりそうですわね？」

最後の一人は程なく――他の面々が名乗り、俺がノエルを紹介している間に応接間へと到着した。

「ごきげんよう、皆様。ヴァイオレット・ルフォールでございます。本日はお招きいただきありがとうございます。このせっかくの機会、とっておきのお茶をご用意いたしましたのでご期待くださいませ」

それは、俺の義妹、シャルロットを「金色の妖精」とするならば「銀色の妖精」

と評するべき美しさと愛らしさを備えた美少女だった。
知識によれば、歳は冬生まれの現在九歳。学年で言うと俺と同い年だ。サファイアのような青い瞳が細く神秘的な美貌を強調しており、その姿を見た俺は思わず息を呑んで見惚れてしまった。
こんな子、今までのパーティで見たか？
記憶を検索した結果、見たことはあるが挨拶をしたことはない、というのが答えだった。見たというのも視界の端に映ったというレベルであって、その場でしっかりと認識していたわけではない。思い出さない限りわからなかったのも当然だ。
と、そのヴァイオレットがこっちを見て、微笑む。
「リディアーヌ・シルヴェストル様ですね。お噂はかねがね。本日はどうぞよろしくお願いいたします」
「こちらこそ、よろしくお願いいたします。ヴァイオレットさま」
貴族令嬢らしく応じながら、俺は次々に油断ならない傑物がやってくる貴族社会というものにあらためて戦慄を覚えた。
「では、会を始めましょうか」

今回の催しは各々が好む「珍しい茶」を持ち寄り飲み比べる、というものだ。持ってきた茶は伯爵家のメイドに預けられ、一つずつ供される。それぞれ茶菓子も持参しており……要は最初から最後までお茶会である。冷静に考えるとあまり俺には向いていない。

なお、俺が持ってきたのは当然青茶である。

「まずはわたくしのお勧めからお出しいたしますね」

他の参加者もまた定番の紅茶とは違うお茶を用意してきた。紅茶と言っても銘柄は色々あるわけだが、珍しい茶と言うからにはそんなレベルの話ではない。俺の青茶でさえ「原材料は同じなわけだし、まあ普通」と言われてしまうくらいだった。

例えば、ミレーヌが出してきたのは薬草茶。飲むとその、なんというか独特の風味が強く、いかにも健康に良さそうな味である（精一杯譲歩した表現）。前世で言うと朝鮮人参とかそう言う系のアレだろうか。飲み食いする前に胃に入れておくのには良いのかもしれない。

なお、毒見はエマに担当してもらった。魔力量の関係もあってアンナよりは毒耐性を得やすいと思ったからだ。その上で俺自身も備えていたが、さすがにこんな場

で毒殺を試みて来るような者はなし。

俺の向かいに座ったヴァイオレットも清楚な印象を受ける控えめな所作でゆっくりとお茶を楽しんでいた。

ミレーヌの知り合いたちが持ち寄ったのは豆茶やらハーブティーやら。なかなか雰囲気は変わるし、一概に不味いとも言えないが、やはり「飲みなれているお茶の方が美味しい」という当たり前の感想になってしまう。

物の豊かな前世の日本でさえ一般的なのはシンプルなお茶で、他は健康食品的な扱いだったのだから推して知るべしだ。

そんな中、俺の持ち込んだ青茶は口直しにちょうど良かった。癖はあまりないので他のメンバーも比較的普通に飲んでいる。

「こちらのお茶はどちらの特産なのかしら？」

「ええ。こちらはなんでも――」

話題の中心は産地や製法、合う食べ物について。意外なほど真面目な会である。

俺としても本からでは得られない知識を収集できるので普通に助かる。

いや、家のために情報収集でやっているのだとすれそれはそうなのだが。

「最後は私の持ってきたお茶ですね」
ヴァイオレット提供のお茶は薄めのめんつゆのような色をしていた。目立った香りはない。俺はそれを確認して「もしかして」と思った。湯気の立っていない、どころかひんやりとした茶を恐る恐る口に含むと、期待した味にかなり近い。
夏に冷やして飲みたい味だ。
「あの、ヴァイオレット様。こちらは……？」
「はい。こちらは煎じた大麦から水出ししたお茶です」
麦茶。これは貴重である。俺は胸が躍るのを感じながら少し勢い込んでヴァイオレットを見つめる。
「こちらが大変気に入ったのですが、購入元を紹介していただけないでしょうか？　あるいは製法をご存じでしたらお教えいただけると……」
「お気に召していただけて嬉しく存じます。作るのが難しいものではございませんし、喜んでお教えいたしましょう」
「ありがとうございます」
幸いにも快く了承してもらうことができ、後日、屋敷に使用人を連れてレクチャー

に来てもらえることになった。

麦茶は抽出に時間がかかるものの、一度にたくさん作ることができるはず。我が家には魔道具の冷蔵庫があり保存には困らないため、冷たい麦茶を常備しておくことが可能だ。

ついつい笑顔になりながらお礼を言うと、ヴァイオレットからもにこやかな笑顔が返ってくる。優しく細められた青い瞳。その奥を覗いた俺は、揺らめく炎のようなものを幻視してぞくりとする。なんだ。別に悪い相手には見えないのだが、一瞬だけ捕食される小動物にでもなったような感覚があった。

美少女だからいい子とは限らない。ただ、この子が悪人だとは思いたくない……と考えているうちに、ヴァイオレットは他の女性たちからの「私にも教えて欲しい」という依頼を「個別に対応いたしますね」と上手くかわしていた。

一人の女が「上手く行かなかったか」という顔をする。

複数人からの要請。手間を省きたいなら公爵家に集まってもらうという手もあった。むしろそれが狙いだった可能性もある。だとしたら顔に出してしまったのは失敗だが、

「皆様。少しお茶を飲み過ぎてしまいましたし、中庭を散歩いたしませんこと？」

ミレーヌが良いタイミングで話の流れを転換してくる。

ある意味、渡りに船とも言える提案。麦茶に気を取られていた俺はここに来た目的――あの手紙についてなんとか探りを入れることをあらためて脳裏に思い浮かべた。

※ヴァイオレット　イメージ画像（ｎｏｂｅｌＡＩ製）



バルト家への訪問 2

伯爵家の中庭にも数多くの薬草、あるいはその花が生い茂っていた。

見せてしまっていいものなのか。微笑むミレーヌの姿からその真意を読み取ることはできない。ただ、少なくとも俺にわかる範囲でご禁制の植物は見当たらない。さすがにそこまでわかりやすい真似はしないか。

あるいは、一つ一つは問題なくともその組み合わせによって危険な薬となり得るのか。庭を見せることはバルト家にとってカタログを見せるようなもの、しかも、カタログの内容が見る人間の知識レベルによって変化するのだとしたらなかなか厄介である。

「当家の中庭は迷路のように複雑ですが、案内のメイドが付き添いますのでご自由にご覧くださって構いませんわ」

ミレーヌの言葉によってお茶会の参加者たちは好きなように散らばっていく。

ある者は花の咲いている箇所にだけ興味を示しながら、ある者は品定めをするように一つ一つ注視しながら。互いに談笑しあったかと思えば自然に離れ、近くで顔

を合わせればまた世間話をする。
　ヴァイオレットも俺の方へちらりと視線を向けた後はゆっくりと庭園を散策している。
　これはまた、誂えたように良いシチュエーションだ。いつ仕掛けてくるのか。あるいはこちらから仕掛けるべきか。中庭の植物を脳裏に刻み込みながら機を窺っていると、メイドに日傘を持たせたミレーヌがゆっくり近寄ってきた。
　俺の方もアンナのさす日傘に守られているため、俺たちの周囲にはちょっとした壁ができた感じになる。
「リディアーヌ様はどんな植物がお好きですか？」
「薔薇ですね。母の好きだった花なのです」
「良いですね。香油や香水としても用いられるとても素晴らしい花です」
　この女にとっての基準は「利用価値があるかどうか」なのか……？
　薔薇は好きだが、香油や香水は少し匂いが強すぎて苦手だったりする俺は曖昧な笑みを浮かべて話題を変える。
「この度は素敵なお手紙をいただきありがとうございました」

「リディアーヌ様とは一度お話してみたいと思っておりましたので、応じていただけたことを嬉しく思っております」

この程度ではカマかけにもならないか。お互い笑顔のまま一呼吸ほどの間、互いの出方を窺って、

「香油のお話もそうですが、植物には色々な利用方法があるのでしょう？　手紙の文字を隠して暗号を隠したり、ですとか」

「ええ、ございます。一口に植物と言っても性質は様々ですから、それを利用すれば様々な事が可能です。……もちろん、人の死に繋がる事もございますので取り扱いには注意が必要ですが」

「薬であっても過ぎれば毒になるもの。慎重に扱うのは当然のことですね」

わかりやすく話を切り出した途端、ミレーヌの瞳へほのかに真剣な色が浮かんだ。どうやら知っているらしい。ついでにジゼルの件について文句を言ってやれば笑顔でスルーされた。

さりげなく、ミレーヌが人気のない方向へと足を向ける。俺は黙ってそれに合わせた。他の人間に聞かれたくはない話だし、襲われたら危険なのはどこでも大して

変わらない。
「オーレリア・グラニエ様はお元気ですか？」
「ええ。元気に魔法研究へ没頭されております。……もっとも、わたしが初めてお会いしたのは一年と少し前なので、『相変わらず』と言ってよいかはわからないのですが」
「相変わらず、で問題ないかと。あの方は昔からそうだったと聞き及んでおります」
「昔から、やりたいことがあると周りが見えなくなる方だったと」
「ええ」
問題は、その「やりたいこと」が何なのか、だが。
「ミレーヌさまはオーレリアさまと交流がおありなのですか？」
「交流、と言うほどのものでは。ただ、夫があの方とお会いする際に連れられて行った事がございます」
「人嫌いのあの方も人をお話をされることがあるのですね」
「しがらみというものはどうしてもありますもの。……それに、同じ目的を持つ者や自分の助けになる者にはむしろ近づいていく方でもあります」

新しい魔法のヒントを持っている（かもしれない）俺を弟子にし、研究を手伝わせているみたいにか。

「はた迷惑な方ですから、周りの方も制御に苦労しているのでしょうね」

「あの方の性質を把握していなければ竜の尾を踏むことになるでしょうね」

遠回しな会話を続けるのがだんだん面倒になってきた。大筋、ミレーヌの態度は手紙と同じく警告の類に思えるが、最後の台詞は「自分はオーレリアの御し方を知っている」という自負とも取れる。

いっそのことストレートに尋ねてしまおうか。しかし、向こうが狙っているのがそれだったら？　オーレリアはあれでも王女。下手な発言は不敬罪になりかねない。

息を吐き、少し方向性を変えてみる。

「王族の家族仲はいかがなのでしょうね。オーレリアさまが孤立なさっているのではないかと少し心配なのです」

「尊き方々の胸の内までは下々の者にはとても。……むしろ、リディアーヌ様であれば直接お窺いする機会もあるのでは？」

これ以上は直接王族に聞け、ということか？

ここまでの話だけでも収穫はあった。あまり踏み込み過ぎても逆効果かもしれない。ミレーヌたちも両親も、オーレリアだって十歳の小娘を矢面に立たせるつもりはないだろう。関わりたいのなら、真実に近づきたいのなら慎重にやるしかない。

そうして俺が深追いを諦めかけた時、ミレーヌが意味ありげに微笑んで呟くように言った。

「ただ、王族の方々とて人の子。深いところではそれぞれのお考えがあることでしょう。そして、それは臣下や臣民とて同じ事」

「もどかしいお話ですね。平民の家などは親子が顔を突き合わせて率直に意見を交換するものだと聞きますけれど」

適当に応じながら、最後の最後でやってきた大きなヒントに俺は感謝した。

「リディアーヌ様。リオネル殿下との仲が睦まじく末永く続きます事を心よりお祈り申し上げます」

「ありがとうございます。リオネルさまと共に国を、陛下を支えていくことができればなによりの喜びだと考えております。どうか温かく見守ってくだされば幸いで

す」

俺は「旦那様にもよろしくお伝えください」とミレーヌに伝え、他の参加者とも和やかなムードを崩さないままにバルト伯爵家を後にした。

帰りの馬車が伯爵家の敷地を出たところで安堵の息を吐く。

すると、斜め向かいに座っているノエルが似たような仕草をしているのに気づいた。思わず見つめると、見習い騎士の少女はラベンダー色の瞳を瞬かせ、かすかに頬を染めた。

「申し訳ありません。……少し気が抜けていました」

「緊張していた、ということかしら？」

「はい。あの家の中はなんというか、寒気がしました」

できればもう行きたくないとでも言うように屋敷の方を見るノエル。護衛をしている最中はわかりやすい素振りを見せなかったので安心していたのだが、

「それは、薬草の匂いのせい？　それとも別のこと？」

「別です。リディアーヌ様に分からなかったのも無理はありません。奴らはこちらに敵意を持たず、ただそこにいただけですから」
「居た、って」
「使用人です。その中に毛色の違う者が交じっていました。騎士ではありません。おそらくは暗殺者かそれに似た類かと」
「な……っ!?」
使用人の中に戦闘技能者が紛れていた？　それも、暗殺者だと？
この世界でも使用人が護衛を兼ねることは珍しくない。アンナやエマだっていざとなったら主の盾となり、魔法を行使して敵を排除する役割がある。しかし、マンガやラノベによく出てくるような戦闘メイドみたいなものではない。
考えてもみろ。メイドとしての日常業務と戦闘技能者としての訓練が全くかみ合わない。技能とは使わなければ鈍るもの。現実的に考えたら「いったいどうやって能力を維持しているのか」という話になる。
「ノエル。それは確かなの？」
「確証はありません。確かめて襲われるわけにもいきませんから。ただ、注意して

観察すると動きが明らかに違います」

　プロのメイドとプロの暗殺者。洗練された動きという意味では似通ったところがあるが、戦いの機微を知っているノエルが見れば違いが見えてくるという。無駄がなさすぎるのも考えものといったところか。

「平民を雇って訓練しているのではないかと。平民の中には魔法の力の代わりとしてひたすら武技を磨く者がいる、と話に聞いたことがあります」

「なるほどね。……それって、騎士団に報告するものなのかしら」

「報告書は書きますが、上官へ個別に伝えるのは難しいです。貴族が私費で護衛を用意するのは珍しい事ではありませんから」

　確かにそうだ。兵ならうちだって雇っている。うちの兵は暗殺者ではないし男ばかりだが、仕事内容に訓練が含まれているので腕は確かだ。正面から戦えば伯爵家の暗殺者たちにだって引けはとらないはず。

　その上で、俺はノエルに尋ねてみる。

「ねえ、ノエル？　うちの警備兵とその暗殺者？　たちだったら、どっちが怖い？」

すると少女騎士の表情が浮かないものになった。
「護衛という立場からすれば暗殺者です。いつ襲ってくるかわからなければ警戒のしようがありませんから」
「確かに、その通りね」
秘密の訓練場なら地下にあるかもしれない。暗殺者だって誰かを殺さない限り罪に問われる謂れはない。本当に暗殺者だという確信はないし、伯爵家が育てているのではなくどこかから斡旋されているのかもしれない。可能性を言ったらキリがない。
俺は息を――今度はため息を吐いて言った。
「とりあえず、日の昇っているうちに帰れたことだし――屋敷の書庫でも調べてみましょうか」

最初に取り掛かった調べものは、バルト家とオーレリアの繋がりについてだ。
次期当主であるフレデリクとの関係が示唆されていたことから当たってみたのだ

が、調べてみると意外にあっさり発見に成功。

幼少期に継承権を失くしたせいか、オーレリア自身に関する記述はほぼ残っていなかったものの、十二年前に事故死した王妃がバルト家の出身であることがわかったのだ。オーレリアの母はフレデリクの姉。つまり、ミレーヌから見たオーレリアは「血の繋がらない姪」ということになる。

『なるほど。それは鬱陶しいでしょうね？　よくわからないことばかりしでかす年下の小娘。しかも家柄だけは自分よりも良いなんて』

どこかで聞いたような話である。

セレスティーヌと俺は母娘だし、オーレリアは王族扱いなのだから細かい事情は違うが。

記録とあの噂どちらも本当だとすれば、オーレリアが魔法を発現したのは六歳か七歳。幼くして母親を亡くしたこと、稀有な魔法の才があったことなど俺と重なる部分が多い。

たぶん、俺は無意識のうちに彼女に同情しているのだろう。そして擁護できる部分を探している。悪い傾向だとは思うが、それが調査の原動力になっているのも事

実。

ジゼルの時と違って、ふてぶてしくも美しい俺の師匠はまだ、悪いことをしたと決まっていない。

「だとすると、あの手紙はミレーヌの独断なのかしら？　夫のフレデリクやバルト家には別の思惑があるとか？」

フレデリクから見てもオーレリアは姪だ。あの手紙が糾弾というより「あの子を止めてくれ」という意味合いのものだとすれば夫婦の目的は同じとも考えられる。どちらとも言えるし、というのは変わらない。

ここまで結論付けたところで結構時間が経っていたので調査は中断。入浴や夕食を経た後、両親に呼び出されて今日の報告を求められた。

あまり広めるような情報でもないし仕方ないのだが、アランやシャルロット（特に義妹）抜きで両親と会う機会が最近多すぎる。ずるいと思われませんように、とついつい祈ってしまう。

それはともかく。

ミレーヌの「どこもかしこも一枚岩ではない」とでもいうような台詞やノエルが

教えてくれた違和感を伝えれば、父は顎に手を当てて呻った。
「……むう。嫌な展開としか言いようがないな」
「お父さま？　それはどういう意味かしら？」
「む」
尋ねれば、曖昧な表情のまま硬直する父。
「旦那様はリディアーヌを巻き込みたくないのです。情報を制限すれば渦中には置かれないと考えておいでなのですよ」
「セレスティーヌ。其方は反対だというのか？」
「ええ。この子は未来の王族候補。巻き込まれないという方が無理なのです。ならばいっそ、伝えてしまった方がいいのではありませんか？」
そんな問答を経て、両親は俺に教えてくれた。
「陛下は十分な善政を敷かれている。国内も安定しており、しばらく戦らしい戦も起こっていない。……それでも、不満というのは存在するものなのだ」
「『純血派』。魔力持ちを敵視し、平民こそが国を治めるべきだとする一派がこの国にも存在しているのです」

それは確かに、子供が関わるにはあまりにも大きすぎる問題だった。

魔女の秘密部屋再び

誰かＳＮＳとネット掲示板を寄越せ。

どこでも誰でも気軽に情報を発信できる、というのがいかに凄いことなのかをあらためて実感する。もちろん本だって情報源としては貴重だ。ただ、現在進行形の問題について的確な情報を得るには足りない。

（動向を把握しやすいという意味で）信用できるのが両親くらいしかいないのが心許ないものの、件の『純血派』について確認すると、

「魔力を持っていない状態こそが本来あるべき人の姿と考え、貴族政治を打破すべしとする一派の事だ」

魔力持ちも非魔力持ちも人であることに変わりはない。つまり、魔力がなくとも人は人として成立する。よって、魔力を持たない者たちこそが純粋な血の持ち主である、という理屈。

魔法のない世界の記憶を持つ俺としては割と納得できてしまう話だ。

「思想集団なのよね？　理想を実現させようとする過激派がいる、という理解で

いい？」

「ああ。全員が過激派ではないだろう。しかし、一部に現体制の破壊を目論む危険な輩がいる。……いると目されている、と言った方が正しいか」

純血派の中心は当然ながら平民だ。そして、平民の生活拠点は基本的に貴族社会と切り離されている。平民が普段何をしているか貴族が全て把握するのは難しく、なかなか尻尾を掴むことができていないらしい。

これはある意味仕方のないことだ。

騎士の人数には限りがあるし、騎士≒貴族なので平民相手の調査には向いていない。騎士団には衛兵隊という下位組織が存在するが、平民である衛兵たちに「平民の過激派集団」なんて調査させたら向こうに取り込まれてしまいかねない。

定期的に拠点を変えられたり農村を主要拠点とされたりしてしまえば簡単には内偵を進められず、存在を認識しているのにまともに取り締まることができていないらしい。

『……ま、そうよね。一部の過激な奴らのために平民ぜんぶを疑ったりしたらそれこそ暴動が起きるわ。一人一人を心の魔法で調べるするとかとてもできないで

しょ』

心の声は「面倒くさい」が本音っぽかったが、まあそういうことである。

「純血派を支援する貴族もいるのかしら」

「バルト家がそうだとは確定できないが、おそらくいるだろう。愚かしい事だ」

魔力を持つ貴族がどうして協力するのか。それは本人たちに聞いてみないとわからない。ただ、利害が一致していれば理由にはなる。例えば現王家に不満を持つ貴族（仮に反王族派とでも呼んでおく）が戦力を増やすために純血派を利用している、とか。

王家を打倒した後は反王族派と純血派は敵同士になるだろうが、お互いがお互いを「正面対決ならこっちが勝つ」と侮っていれば十分に成立する。

「……平民の過激派集団。そんな奴らに、限定的とはいえ魔法の効果を持った道具が供給されたら？」

「彼らが勢いづくのは間違いないでしょう。一度目の武力蜂起はおそらく成功します。そして、成功した、という事実が広がれば勢力拡大に繋がりかねません」

いつ、どうやって起こるかわからないのがテロの怖いところだ。加えて貴族側に

は「魔法を使える平民」との戦闘経験がない。正確な対処は難しいだろう。

「道具の存在が明かされているのがせめてもの救いかしら」

「どうだかな。……オーレリア・グラニエが純血派と組んでいるのだとしたら、どうしてリディにそれを明かした？　何か別の意図があるのかもしれん」

純血派の動きに気を取られている間に反王族派が武力蜂起、国王以下王族を皆殺しとか？　……いや、待ってほしい。ないとは言い切れない上に、それだとリオネルの婚約者である俺も殺されかねない。

現王族の一人であるオーレリアがそんなことに協力するか？　という話もあるが、王位継承権をはく奪された彼女が王族を恨んでいたとしても不思議はない。純血派、あるいは反王族派として動いているのがバルト家だとすれば、新体制の旗印に《漆黒の魔女》を選ぶ理由もわかる。

父は深く息を吐くと重々しい声で言う。

「慎重を期している場合では無くなったか。早急にオーレリア・グラニエの地下室を調べなければならぬ」

「……まあ、なんだか無駄足に終わるような気がしてきたけれど」

躍らされている感覚に半眼になって頷く。
そして悪いことに、俺の嫌な予想は当たってしまった。

護衛役のノエルと共に足を踏み入れたオーレリアの地下室。
そこには新型魔石も、それを用いた魔道具も一つとして存在しなかった。先んじて調査を行い室内を固めている騎士団の面々も困惑したような表情を俺へと向けてきている。
「リディアーヌ様。貴女様が入られた際と室内に違いはありますか？」
「……一見すると大きな違いはありません。ですが、わたしが見た品々が別の物にすり替えられています。見た目は似ていますから『気のせいだったのではないか』と言われてしまえばそれまでですが」
「自信はない、と？」
「いいえ。証明する手段がない、という話です」
俺は息を吐いて苦笑した。騎士団の調査結果を受けて緊急召喚されたわけだが、

まんまと利用されてしまった感じである。
　振り返れば、部屋の主――俺にとって魔法の師であるオーレリアは悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「冗談で弟子を脅かしただけだったのだけれど、まさか国王陛下にまで陳情するとはね」
「わたしにそうするよう仕向けた上で問題ある品を全て運び出したのでは？」
「あら。証明する手段がないんじゃなかったかしら」
　その通りだ。騎士団も監視は行っていただろうが、魔法に長けたオーレリアなら抜け道くらい用意できる。迷彩でも使ったのか地下から通路を伸ばしたのか……方法までは特定できないが。
「それで？　私は有罪になるのかしら？」
「いいえ。宮廷魔法士長殿の監督の下、魔道具研究を行われているオーレリア殿です。単なる研究物であれば咎める事はできません。……念のため、調査用に室内の品を一時預からせていただいても？」
「煩わしいけれど仕方ないわ。どうぞご自由に」

騎士団の副団長だという男性騎士は釈然としない表情を浮かべながらも「感謝します」と礼を取った。傍らに立つノエルが「……父上」と呟く。王国騎士団の現副団長はクラヴィル家の当主、つまりノエルの実父である。

俺としても釈然としないが、今回の調査は「公爵令嬢リディアーヌ・シルヴェストルの陳情を受けての事実確認」という体である。形式としても任意。まあ、任意という名の半強制ではあるが、問題は騎士団側も何かがあると確信して踏み込んだわけではないということ。

仮にも王女を相手に「疑わしいから調べさせろ」なんてやった挙句に「空振りでした」は結構きつい。

幸いなのはオーレリア自身が冗談を言ったと認めたこと。

「リディアーヌを責めないであげてくれるかしら。私の冗談が効きすぎてしまっただけでしょうし、国を想う気持ちは同じのはずよ」

「承知しております。オーレリア様も誤解を招くような言動はどうか慎まれますよう」

「ええ、善処するわ。ごめんなさい」

物品の運び出しを終えて騎士団が撤収して行くと、後には俺とノエル、それからオーレリアだけが残された。アンナとエマは念のために上の部屋で待機している。

師の立ち姿に動揺は見られない。

魔女は常の状態のまま悠然とそこに存在している。謎めいた笑みに見惚れそうになるのを堪えつつ、俺は彼女に語りかけた。

「師匠。……あなたはいったいなにを考えているのですか？」

「さあ？　貴女は、何だと思う？」

こつ、こつ、と、ゆっくりとした靴音。

近寄ってくるオーレリアを見てノエルが剣を抜き、俺たちの間に割って入る。魔女は両手を広げて降参とばかりに足を止めた。

「意外と心を寄せられているのね、リディアーヌ？」

「……別に、仕事だからやっているだけです」

「ありがとう、ノエル。でも、さすがの彼女もここで事を起こすほど馬鹿じゃないわ」

礼を言って下がるよう命じるとノエルは渋々剣を収めた。

「師匠も、わたしたちを殺してから隠し通路で逃げる、なんていうのは止めてくださいね？」
「ふふっ。そんな事を思いつくあたり、やっぱり私の弟子ね」
嬉しそうに言われてもこっちは全く嬉しくないのだが。
俺はやれやれと首を振って、
「魔石と魔道具を渡した先は純血派ですか？　それとも反体制派の貴族？」
「随分と調べたようね。……でも、そこは子供が踏み込んでいいほど甘い世界かしら？」
「誰のせいだと思っていますか。決行はいつです？　誰を狙って何をするつもりなのですか？」
「内緒話ならその子を排してからにしたいのだけれど」
「ノエルは私の護衛騎士です。責任感のある子ですから秘密を口外したりはしないでしょう」
この状況で護衛を外すとかさすがにありえない。譲る気はないという思いを込めて見返せば、仕方ないとばかりに苦笑された。

「どうして貴女は、私が何かをすると思うのかしら？」
「わたしはオーレリアさまがなにかをするとまでは思っていません」
「あら？」
俺は情報源を伏せた上で、これまでに聞いていた噂や情報を師に語った。
オーレリアが殺戮を望んでいる可能性。純血派の存在。貴族内も一枚岩ではないこと。擬態した平民の暗殺者。かの王妃が事故死として扱われていること、等々。関わっている人物と抜けている情報が多すぎて正確な推測は困難だが、一つ言えることは、オーレリアが敵と積極的に繋がっているかどうかは不明だということだ。
「あなたはただ魔石や魔道具を売っただけかもしれない。差出人も書かず暗号を使って書かれた手紙を鵜呑みにする気はありません。嘘だと決めつける気もありませんが、あなたが敵と完全な協調関係にあるのなら、どうしてわたしに情報を渡したのかがわかりません」
「王家や騎士団に隙を作るためだったとしたら？」
「注目を受けてまで作る必要があるでしょうか？　……それとも、受け渡しは成功してしまったわけですし、オーレリアさまがここで姿を消せば目的達成なのでしょ

うか」

「もし、そうだと言ったら？」

心臓の音がうるさい。師を無実だと信じたい自分と怪しいと叫ぶ自分、クロだったとしても同情の余地はあると訴える自分が心の中に同居している。

深呼吸を一つしてから、俺は答えた。

「思い直してください。今ならまだ引き返せます。迷っているのならやるべきではありません。世界を変えていったいなにになりますか？」

「知ったような口を利くのね？」

冷たい声。プレッシャーを含んだ刺すような視線が俺へと向けられる。

「私が何かを企んでいるとして、その是非を貴女に決められる筋合いはないわ。貴女は何も知らないのだから」

「そうですね。わたしが知っていることなんてほとんどありません」

オーレリアの母親が死んだのは十二年前。俺の父であるジャン・シルヴェストルでさえ22、23の若輩者で、父親から宰相職を継いでいなかった頃だ。当時生まれてすらいなかった俺に事件の真相が事細かにわかるわけがない。

部外者が偉そうに語るな、というのもその通りだろう。
それでも、
「あのね、師匠？　わたしは品行方正な優等生ではないの。だから、正しいとか正しくないとかそんなことはどうでもいいのよ」
そう。
俺が大事にしているのは正しいかどうかじゃない。
「悪いことは止めなさい、オーレリア・グラニエ。多くの人の死の上に成り立つ理想なんてなんの意味もないわ」
「ふうん。嫌だと言ったら？」
「決まっているでしょう。力づくでも止めて、あなたの身体を踏みにじって、高笑いでもしながら勝ち誇ってあげる。わたしは悪役を潰すために悪役をやっているのだから、この状況はむしろ願ってもないわ」
「り、リディアーヌ様？」
ノエルがドン引きしたように声を上げる。俺がヤバい女だということに気づいたらしい。しかし、もう遅い。これだけ色々知ってしまったからには彼女はもう逃げ

られないし、何より剣の稽古に付き合ってもらわなければ俺が困る。
「ノエルが守ってくれることですし、また魔法を教えてください、師匠。といいますか、今までろくに教えてくれていないのですから、わたしの魔道具製作に付き合ってくれても罰は当たりませんよね？」
「――――」
　すると、オーレリアはしばし沈黙した後で口元に笑みを浮かべ、愉しげに目を細めた。
「いいわ。どうせ魔道具もあらかた持っていかれてしまったことだし、少しくらい弟子の遊びに付き合ってあげる」
　俺の説得ともいえない説得が功を奏したのか、それとも単に想定の範囲内なのか、次回の授業日以降もオーレリアは姿が見えなくなることなく、いつものように俺を出迎えてくれた。

悪役令嬢とカウンター悪役令嬢

「騎士団に無駄足を踏ませたらしいな」
屋敷へ遊びに来た婚約者様は部屋に到着するなり俺をからかってきた。
何度も来ているせいか慣れた様子で椅子に腰かけ寛ぎ始めながら、である。側近のセルジュ青年が目だけで謝意を示してくるのに苦笑で答える。
「騎士の皆さまには申し訳ないことをいたしました。少し焦りすぎてしまったのかもしれませんね」
「姉上は一筋縄ではいかないところがある。あの人の冗談には十分気を付けた方がいいぞ」
おおよその話は承知しているらしい。アンナの淹れた紅茶へ無造作に口を付けながらリオネルは笑う。その表情からは家族的な情が窺えた。
「リオネルさまはオーレリアさまと今でも交流をお持ちなのですか？」
「年一回も会わないがな。姉上の事は嫌いじゃないぞ。ああ見えて、誕生日には毎年プレゼントをくれるのだ」

得意げなセリフに合わせてセルジュが動き、小ぶりの箱を開いて見せてくれる。そこには淡い金色をした半透明のチェス駒が全部で十個収められている。光を受けてきらきらと輝いており、目にも美しい。

一年以上もオーレリアの研究を手伝わされてきた俺には、それらが全て魔石製であることが一目でわかった。

贅沢な品にも程がある。こんなものを普通に買おうと思ったらいくらするかわからない。どうしてこれを？　と尋ねると「話題が出るだろうと持ってきた」とのこと。

『どうだか。自慢したかっただけじゃないの？』

「毎年、ということは一年に一つずつ増えていくのですか？」

「ああ、そうだ。そして、学園に入学したら王（キング）の駒をプレゼントしてくれる約束になっている」

チェス駒は十六個でワンセット。学園には十五歳で入学なので、それと同時に駒が揃うことになる。なかなかに粋なプレゼントだ。

あのオーレリアにそんな甲斐性があったとは、と感心していると、リオネルはど

うだとばかりに俺を見て、
「お前のプレゼントよりもよほど気が利いているだろう？」
「去年お贈りした子羊はとても喜んでくださったではありませんか」
「ああ、さすが公爵領の羊だけあって格別の美味だった。だが、今年のプレゼントはなんだ。刺繍入りのハンカチ？　手を抜いたのではないか？」
「リオネルさま？　わたし、まだ十歳のか弱い乙女なのですよ？　一生懸命に婚約者の名前を手縫いするなんて可愛らしいと思いませんか？」
「八歳の時点で『泣かせてやる』などと周囲を脅しておきながら何を言っているんだ、お前は」
しばし睨み合ってからほぼ同時に視線を逸らす俺たち。どうやら王子様としてはハンカチなんて欲しくなかったらしい。あの子羊は鶏の礼も兼ねて選んだだけであって、婚約者としては消えものより装飾品等を贈る方が一般的なのだが。
ハンカチなんていくらでも持っている物をただ贈っても駄目か。次に名前を入れる時は刺繍ではなく魔力で染めるとかしてみよう。
「ところでリオネルさま？　その駒、魔石でできているからには効果があるので

しょう？　何ができるのです？」
「ん？　ああ、姉上いわく『手で触れなくとも動かせる』らしい。最初にもらった時、早くこれを動かせるようになれと言われた」
「面白そうですね。試してみてもよろしいでしょうか」
「駄目に決まっているだろう。初めにこれを動かすのは俺だ」
残念。しかしまあ、当然か。操作を誤って床にでも落としたら傷がつくかもしれないし。
『それにしてもこれ、よくできているわね。魔石の形を加工するって結構大変じゃない』
しかもわざわざ金色にしている。魔石の色は籠めた魔法の属性に依存するが、駒を移動させる魔法は風か土あたりのはず。そのままだと金色にはならないので何か細工をしているはずだ。外装と中身で魔石が二重になっているとか？
考えれば考えるほどこの駒、高そうである。
「わかりました。仕方ないので自分で作ることにします」
「お前も作れるのか？　それは楽しみだな。どうせなら金ではなく銀とか別の色

で作って欲しいな」
「？　リオネルさま？　わたしは自分用に作るのであって、プレゼントはいたしませんよ」
「なんだと」
「チェスの駒が二組あっても仕方ないでしょう。それとも、わたしの作った駒をわたし以外の方に使わせるおつもりですか？」
別に嫉妬はしないが、オーレリアに負けたような気分になる。だったら俺が自分用に持っておく方が対戦する時に特別感があっていいと思う。
これにはさすがのリオネルも「ぐっ」と詰まった。こんなすごいアイテムを予備扱いしたり人にほいほい使わせるのは勿体ないと思ったのだろう。
「仕方あるまい。だが、其方も他の人間には使わせるなよ？」
「もちろんです。手を使わずに動かせるなんて便利な駒、そうそう他の方には渡せません」
「いや、そんなつまらない事に魔力を使うのはお前と姉上くらいだぞ」
しかし、オーレリアが駒を贈ったのも「これで魔法を訓練しろ」という意図のは

ずだ。であればリオネルも魔法で対戦するべきである。
それはそれとしてチェス駒を魔法で動かすなんて発想をするあの女はあらためて頭がおかしい。

「あら、ごきげんよう。《紅蓮の魔女》様もいらしていたのですね」
『出たわねお邪魔虫』
俺は、横手からかけられた朗らかな少女の声に失礼な感想を抱いた。
学園の中庭（寮の、ではなく学園の庭なのでかなり広い）に設けられたパーティー会場。そこへ到着して間もなく俺に声をかけてきたのは、暗い金髪を携え、傍らに何人かの令嬢を従えた一人の少女だった。
ベアトリス・デュナン。
歳は俺やリオネルより二つ年上。数少ない俺と同格の存在――公爵令嬢の一人であり、同世代では最大の派閥を率いている。ついでに言うとリオネルの婚約者候補だった一人らしく、初めて会ったリオネルの誕生パーティー以来、何かにつけて俺

へ因縁をつけてくる相手だ。
「ごきげんよう。……こちらこそ、ベアトリスさまが参加なさっているとは思いませんでした」
いちいち話しかけて来なくていいのに、と思いつつ笑顔で答えると、向こうもまた社交的な表情を崩さないままに答えてくる。
「わたくしは婚約者探しに忙しい身ですもの。お相手のいらっしゃる方のように、殿方の多い場所に顔を出すだけで醜聞が流れるような身の上ではありませんの」
（訳：貴女に婚約者を奪われてから大変なの。こんなところで会えたことだし、あらぬ噂を流してあげるから覚悟しておきなさいね）
「ご冗談を。ベアトリスさまであれば引く手あまたでしょう？　今日も多くの方から声をかけられて大変なのでは？」
（訳：まだリオネルさまを諦めていないのですか？　むしろベアトリスさまこそ「男をとっかえひっかえ」なんて噂が立ったら大変でしょうに）
嫌味に嫌味で返したらベアトリスの取り巻きたちが一斉に睨んできた。先に喧嘩を売ってきたのはそっちの方なのだが、俺が悪いことにされるのは少々不服である。

「皆さまもごきげんよう。ベアトリスさまと本当に仲がよろしいのですね。ですが、常にご一緒では殿方も声をかけにくいのではありませんか？」
「何よ、失礼ね!?」
「貴女に心配してもらう必要なんて全くないわ！」
「これは失礼いたしました。……本日はせっかくのパーティーです。不幸な事故など起こらないことを願っております」
「お互い、平和にパーティーを楽しみたいものですね、リディアーヌ様。……貴女達、ここは構わないから少し外しなさい」
俺の挑発にあっさり乗ってくる子分たちにベアトリスが苦々しい顔で指示を出す。
不満そうにしながらも取り巻きが散開していくと、派閥の長にして俺のライバル（？）である令嬢は「少しお話をいたしませんか？」と誘ってきた。
また何か嫌味を言われるんだろうな、と思いつつ社交辞令として了承すると、彼女は会場をゆっくりと歩きながら話し始めた。
今回のパーティーは学生主催の立食パーティー。参加費は無料とあって多くの生

徒が顔を出している。俺やベアトリスのように生徒でない者でも知人からの紹介があれば参加が可能だ。

若い上に身分の高い俺とベアトリスには学生たちからの視線が集まってくるが、ただならない気配を察したのか声をかけてくる者はいない。俺としてはそういう気づかいはいいので乱入して欲しかったが。

「先日は不確実な情報で騎士団にご迷惑をかけたそうではありませんか」

わざとらしい大きな声。

「王族の婚約者になられたとはいえ、リディアーヌ様はまだ子供なのですから、大胆な行動は控えた方がよろしいのではありませんか？　そうでないと今回のように恥をかくこともあるではないかと」

「ええ。他人事ではなかったために動転してしまいましたが、今後はより一層、身の振り方に気をつけなくてはなりませんね」

ここぞとばかりに声をかけてきたのは俺がわかりやすい失態を犯したからだったらしい。

しかし、ここは俺もしおらしい態度を取っておく。下手に「あれはオーレリアさ

まが」とか言ったら師の立場が悪くなりかねない。
　すると、
「オーレリア・グラニエ様にも困ったものですね。誤解を招くような発言をして子供を脅かすなんて。リディアーヌ様もいい迷惑だったでしょう？」
「確かに。師匠の冗談があまりに真に迫っていたのも原因でしたから、あの方にも改めて欲しいものです」
　さっさとオーレリアへ矛先を向けるベアトリス。こうなると俺は逆に「冗談だった」という体で文句を言うことで話を流しにかかるしかない。
　これにベアトリスは首を傾げて、
「あら？　結局冗談だったのですか？　リディアーヌ様が『自分は確かに見た』と主張された、という話も伺っておりますが」
「証拠がない以上、何を言っても無意味でしょう？　これ以上、確証もなくご迷惑をおかけしないよう、騎士団にお任せしようと思っております」
「そうですか。……リディアーヌ様は大人ですわね」
　少女は不意に目を伏せると、何を思ったのか俺を称賛してきた。続いたのはやは

りオーレリアへの罵倒で。
「それに引き換え貴女のお師匠様はひどい方ですわ。母君が魔力を暴走させて亡くなった原因を担っているというのに、未だに継承の件で王家を恨んでいるだなんて」
イラっとしていた俺は「力づくで黙らせてやろうか」などと益体もないことを考えてから、言われた内容の重要さに気づいた。
魔力の暴走？　オーレリアが、ではなく母親の方が？
「……どういう意味でしょう？」
立ち止まって視線を送れば、得意げな笑み。
「ご存じなかったのですか？　オーレリア・グラニエ様の母君の死因は魔力の暴走。それも、身体に埋め込んだ魔石に過剰な魔力を注がれたことが原因なのです」
「身体に、魔石？」
「どうやら本当にご存じなかったようですね。でしたら、魔力を注いだのが他でもないオーレリア様だった、ということもご存じないのでしょうね？」
ああ、知らない。全て初めて聞く話だ。
どうしてそんなことをこいつが知っているのか。おそらくは独自の伝手があるの

だろう。まがりなりにも公爵令嬢なのだから、うちの両親と同等の情報網があると考えた方がいい。

そして、うちの両親は俺に開示する情報を明らかに制限している。

俺はベアトリスの目を真っすぐに覗き込んで、彼女に言った。

「ベアトリスさま。今のお話は本当なのでしょうか？　いくら公爵家の令嬢といえど、王族に関する誹謗中傷は罪になりかねません」

「あら、ご心配なく。直接両親から聞いた確かな情報ですわ。でも、だからといってあまり悲観する必要はありませんわ。リディアーヌ様は知らなかったのですから、あの方とはこれから距離を取れば良いのです。わたくしの心配な気持ちをわかって――」

「貴重な情報をありがとうございます、ベアトリスさま」

「……え？」

ぽかん、と口を開けた公爵令嬢に、俺は心からの笑顔を向ける。

「わざわざ教えてくださるだなんて、とてもお優しいのですね。わたし、感動いたしました」

嫌味な奴だが、彼女の素直な点だけは評価できる。上機嫌で会場内を歩き出しながら、俺はベアトリス・デュナンに対する心証を若干上方修正した。

悪役令嬢とカウンター悪役令嬢 2

ベアトリスは高慢で嫌味な女だが引き際というものを弁えている。自分が矢面に立つような嫌がらせはしないし、必要以上に深追いはしてこない。

有益な情報を教えてもらって別れた後はアンナ、ノエルと共に普通にパーティーを楽しむ。

各所に置かれたテーブル、その上に並ぶ料理の数々は見た目にも楽しく、味もなかなかのもの。学生の一人から聞いたところによると食堂のスタッフが作ったものらしい。これだけ腕のいいシェフがいれば学園でのランチタイムも楽しそうだ。

騎士であるノエルは令嬢としてはかなり食いしん坊のようで、周囲に目を光らせつつもサンドイッチやフライドチキンなどをせっせと口に運んでいる。あどけなさの残る顔立ちもあって餌付けしたくなるような可愛らしさがある。

「失礼、リディアーヌ嬢。是非貴女とチェスの話がしたいのですが、お時間をいただけますか？」

「ええ、もちろんです」

「シルヴェストル公爵令嬢！　男性服について常々感じている不満があるのですが、相談に乗っていただけませんか？」

「お話を聞かせてくださいませ。解決に結びつくかはわかりませんが、新しいデザインのヒントになるかもしれません」

一人（＋メイドと騎士）で歩いていると、ここぞとばかりに男性から声をかけられる。

俺が普段参加するのは女性主催のお茶会が中心。パーティーに出る時はリオネルが一緒にいることも多いため、男子が話しかけられるチャンスはあまりない。その点、屋外かつ昼間の立食パーティーなら人目もあるし健全なムードがあるので、普通に俺と話したい面々にとってはチャンスとなる。

まあ、中には「あわよくば俺に惚れさせてやる」みたいな奴がいるかもだが、俺にその気が全くないので特に問題ない。

ゲームの話やら商売の話など色気のない話題が続くのもあって周りから色眼鏡で見られることもない。

「あら、《紅蓮の魔女》様ったら年上の男をあんなに侍らせて」

「リオネル様の目がないとすぐ男漁り。恥ずかしくないのかしら」
最初から色眼鏡をかけている輩は除いて、だが。
「あの方々にはこれが男漁りに見えるのでしょうか……？」
「ははは。王子殿下の婚約者様でなければ家にお呼びしてじっくり指したいところではありますが」
「わたしとしても正直、相手に困っております。同性との対局では対リオネルさま用の練習には不向きですので」
「男女混合、複数人でチェスに興じる会などがあれば良いかもしれませんね」
「ああ、それはとても良いと思います」
要は女子が俺だけ、という状況がまずいわけで。女性貴族が複数人いる場であれば変に勘繰られにくい。
「問題はチェスの得意な女性があまりいらっしゃらないことですね」
「いえ、そうでもありませんよ」
「え？」
盤上遊戯が好きでたまらないらしいその青年は爽やかな笑顔を浮かべたままで、

「ベアトリス・デュナン様を始め、派閥の女性方が『打倒リディアーヌ様』を掲げてひそかに特訓をしていると耳にしました」
「ベアトリスさま、わざわざわたしと戦うために練習してくださっているのですか」
性格が悪いのは確かだが、努力を怠らないのは好印象である。むしろ、努力できるのにどうしてわざわざ人を貶める方向に行こうとするのか。
「それならば、女性貴族の間でもチェスが流行るかもしれませんね」
男性陣との話を終えた後は仲の良い女性貴族のところへ行って雑談に興じた。
「リディアーヌ様。先日は災難でしたね」
「ありがとうございます。もちろん反省しておりますが、正直言って道化に化かされた気分でした」
「心中お察しいたします」
俺と仲のいい女子は性格的に小細工を好まず、思ったことを素直に口に出し、嫌いな相手より好きな相手に構う傾向にある。俺自身がそういうタイプなので似た者同士が集まったのだろう。貴族女性としては少数派だが、おかげで話をしていて心地が良い。

お互いが同類だというのもなんとなく察しているので、彼女たちが慰めてくれた時は本当に心配してくれているし、行動を諫められた時はもう一度考え直した方がいいとわかる。

「オーレリア様は立場も性格も特殊なお方ですからね。良からぬ噂を口にする者も多いようです。私達も噂を耳にした程度ですが……」

「わたしとしても不用意に私見を語るわけにはいきません。その上で、そうですね。本当に安心してよいのか、という気持ちはあります」

「同感ですわ」

俺たちは穏やかに会話を交わしながらお互いの持っている情報をそれとなく提供しあった。

友人たちのもう一つの特徴としては「小細工は嫌いだが、できないわけではない」ということだ。サラのように素直すぎる子もいるものの、多くの者は周囲から浮かない程度に外面を取り繕うことができる。当然、情報収集や、出していい情報と悪い情報の選り分けもできる。

おかげでいくつか新しい情報を得ることができた。

例えば、平民街における武器の商取引が微増傾向にあるとか。学園に出入りする下働きの平民や衛兵隊の人員が不祥事を起こして退職したり、事故で亡くなった件数が去年に比べて多いとか。耳慣れない言葉で話す何者かを見た、という証言があるとか。

俺は友人たちに礼を言いつつため息を吐いて、

「わたしたち貴族は恵まれた立場にあります。……けれど、決して無敵の存在でありません。育てていただいた恩を返すためにも、善政を敷く陛下をお助けするためにも、気を引き締めていかなければなりませんね」

「お互いに頑張りましょう」

貴族、あるいは王族が狙われる可能性がある。そして、主犯は平民かもしれない。そうした意図は伝わっただろう。俺たちはそれ以上細かいことは口にしないまま、本当の雑談へと移行した。

そして。

「あの、リディアーヌ様？　少々お話をさせていただけないでしょうか……？」

「あら、なにかしら？」

俺が一人になったのを見計らって一人の少女が声をかけてきた。
見覚えはある。というかベアトリスの取り巻きをしていた一人だ。名前も簡単なプロフィールも頭に入っているが、ここでは令嬢Ａとしておく。
Ａの周囲に仲間の姿はない。珍しく一人らしい。こういった場合、実行犯を監視役が見守っているのがセオリーなのだが。
『あら？　あれってヴァイオレットじゃない？』
疑問を抱いたところで別の知り合いを見つけた。銀色の妖精ヴァイオレット・ルフォール。向こうも俺の方を見ていたのかばっちり目が合う。すると少女はほんのり頬を染めながら慌てて視線を逸らした。
いや、なんだか勘違いしそうになるリアクションなんだが。
目立つ容姿のはずなのにヴァイオレットが少し移動しただけで俺はあっさり見失ってしまいそうになる。気配でも消しているのだろうか。そういえばこの間会った時も向こうは俺のことを良く知っている風だった。少人数の会にはあまり顔を出さない、みたいなことを言っていたし、案外人込みに紛れるタイプなのかもしれない。

「リディアーヌ様？」
「え？　……ああ、ごめんなさい。話よね。構わないけれど、なにかしら？」
俺は笑顔で少女を見つめる。歳は俺よりも三つ上。三歳違うと背丈もだいぶ違う。派閥を考えるとあまりいい話とも思えないが、攻撃を受ける前から邪険にする気はない。俺が目指しているのは「カウンター悪役令嬢」であって、無意味に人を虐げるガチの悪役令嬢ではない。
すると彼女は言いにくそうに口ごもると、周りをちらちら見る。
「その、人の多いところですと少々……。静かな場所で、二人だけで話せませんか？」
『……いや、あのね？　あなたそれ、信じてもらえると思ってるなら大馬鹿よ？』
一気に脱力した。いやまあ、別に構わないが。俺は首を動かし、「さっさと断ってください」という顔をしているノエルと目を合わせる。
「ノエル。アンナと一緒にここにいてくれる？　誰かにわたしの居場所を尋ねられたら彼女と一緒だって伝えてくれればいいわ」
「リディアーヌ様」

「お願いね」
視線を戻すと、Aはわかりやすく喜色を浮かべて「ありがとうございます」と言ってくる。
俺はアンナを「大丈夫だから」と宥めた後、少女と一緒に会場の中心から遠ざかった。喧噪が遠のき、木立ちを備えた芝生が近づいてくる。
「どのくらい離れればいいかしら」
「もう少し……私達の姿が見えなくなるくらいまで。ベアトリス様には見られたくないんです。お願いですからついて来て下さい」
ある程度離れたところで少女が先導するように前に出た。ようやく彼女が立ち止まったのは、会場からでは視界の通らなくなった芝生の上。
中途半端な位置で立ち止まられたため、俺は少女を追い越して数歩の距離を移動し――右のつま先に妙な不安定さを感じた。ため息を堪えて振り返り、少女に告げる。
「止めておきなさい」
「え……!?」

意外そうに目を見開かれた。

しかし、俺の真後ろに落とし穴があることくらいさすがに気づく。貴族令嬢が土仕事をしたわけもないだろうから、魔法で掘ってカムフラージュしたのだろうか。貴族の学校である以上、芝生に足を踏み入れる人間は希少なので、関係ない者がかかる可能性は低い。

問題は、

「穴の深さによっては怪我をするかもしれないわ。もちろん、わたしは自分から落ちてあげたりしない。もし、無理やり落とそうとしたのなら、あなたはれっきとした加害者になってしまう」

「だ、だって」

少女はがたがたと震え出した。震えながら首からペンダント――薄緑色の魔石が嵌まったアクセサリーを取り出す。

「貴女が、ベアトリス様をいじめるから！」

「心外だわ。……どちらかというと、いじめられているのはこっちでしょう？」

「う、うるさい！」

魔力が注がれ、風属性の魔石が効果を発揮する。巻き起こったのは突風。少女の前方、俺へ向かって吹きつけたそれは、十歳の子供の身体をあっさりと動かした。

身体が浮く。

落とし穴の真上で解放された俺は少女へ視線を向けた。怯えたような表情。本当にどうしようもない。

苛立ちを覚えながら弱い風の魔法を起動。姿勢を制御した後、風を下向きに巻き起こしてカムフラージュを吹き飛ばす。見えた穴の深さは二メートル半といったところか。

心の準備さえできていればこれくらいどうということはない。こっちは前世で男子をやっていた身だ。小学校時代は休み時間に校庭を走り回ったりしていた。スペック的にはこの身体もかなりのものだし、魔法の助けだって借りられる。

軽い身体強化によって無事着地した俺は、Ａが恐る恐る穴を覗きこんでくるのを見ながら声を張り上げた。

「誰か！　助けてください！」

メガホンをイメージした拡声の魔法。ピーガガー、という独特の効果音と共に辺

り一帯へ響き渡る声に、Aは急に慌てだした。
「リディアーヌ様!?」
ノエルに抱き上げられたアンナ（！）が現場へ到着するまでには三十秒もかからなかった。その三十秒で逃げなかったのが運の尽き。令嬢Aはノエルに拘束されたまま、他のパーティー参加者が集まってくるのを待つことになった。
「リディアーヌ様、ご無事ですか？」
「ええ、問題ありません」
魔法を使って跳躍し、無事に穴の外へと着地。多少ドレスの裾が汚れたが、傷も怪我もない。
「ご令嬢、これは一体？」
「彼女が魔法を使ってわたしを穴に落としました。首のペンダントが魔石になっています」
「……なんと」
俺がAと一緒に離れていったことはアンナとノエルが知っている。他の参加者――ヴァイオレットを含む――からも証言が得られたこと、俺が実際に穴へ落ちて

いること、少女が風の魔石を所持していたことなどから状況は決定的に。
学園の警備兵を経て騎士団へと拘束された少女は、こう証言したらしい。
『ベアトリス様にリオネル様の婚約者になって欲しかった』
この落とし穴事件に関しては殺意までは認められないこと、被害者である俺が傷一つなく助かっていること、俺が「重い罪は与えないで欲しい」と要望したことから厳重注意と罰金、三か月の自宅謹慎という措置に落ち着いた。
派閥における上司であるベアトリスは「指示は一切出していない」と主張。少女自身もそれを肯定したことによって罪に問われることはなかった。令嬢Aはこの件によってベアトリス派閥を追われることになり――謹慎が明けて以降、パーティー会場の隅で所在なさげに佇む姿をよく見かけるようになった。
その後、俺はあまりにも心細そうにしている彼女を見かねて声をかけ、何故か懐かれてしまうことになるのだが、それはまた別の話。
『だから、悪いことなんて止めなさいって言うのに』
どうしてみんな、他人を陥れて利益を得ようなんてくだらないことを考えるのか。

魔女の過去

「昨日は災難だったようね、リディアーヌ？」
「本当に災難でした。それもこれも師匠のせいです」
学園寮内。
《漆黒の魔女》オーレリア・グラニエの部屋はいつになく片付いている。魔道具等がごっそり持っていかれて物が減ったこと、地下室の存在がバレたので床を隠さなくてよくなったことなどがその原因だ。なお、直接の原因は俺がアンナに命じて整理整頓したことである。
黒髪黒目の美貌の魔女様は、ラフな食事態度さえも演技だったとでもいうのか、あるいは研究を急ぐ必要がなくなったからか、きちんとドレスを着て席につき、ゆっくりと食事を進めるという、貴族であればできて当たり前の偉業を披露しつつ笑みを浮かべる。
「昨日の騒動は貴女を恨んだ令嬢の仕業でしょう？　私とは関係ないと思うのだけれど」

「当日、わたしは彼女のご主人様から因縁をつけられていまして。その原因はオーレリアさまの迷惑な冗談のせいだったのです」

「だからそれは謝ったし、こうして貴女の研究に付き合っているじゃない」

付き合っていると言いつつ本人は食事をしているだけである。部屋の片隅に護衛として立つノエルが「何ですかこの会話」とでも言いたげな表情をしている。彼女にも申し訳ないことをした。

昨日は午前中にパーティーへ参加、午後はオーレリアのところへ行く予定だったのだが、あんなことがあったせいで騎士団に時間を取られてしまった。おまけに、本人の指示とはいえ護衛対象を危険に晒したのだ。叱責はしないで欲しいと騎士団には伝えたものの、少々気にしている様子である。

『リディアーヌ様に何かあれば私の責任になるということを本当にわかっていますか？』

今日会うなりジト目で睨まれてしまったので、ノエル自身にもあらためて丁重に謝った。

「それで？　私がリオネルにあげたチェスの駒を自分でも作りたい、と」

「話が早くて助かります」
　師と向かい合うようにして席へ着いた俺は話をしながら石へ魔力を籠めている。
魔石を作るために欠かせない工程である。
　見た目としては大きめの石を握りこんで真剣な顔をしているだけなので非常に地味だが、魔女は面白そうに漆黒の双眸を向けてくる。
「必要な工程はわかっているのかしら？」
「魔石の作成。整形。魔法の刻み込み。それから色の調整ですね。順番は前後するかもしれませんし、色の調整にどういう方法が用いられたのかは特定できていませんが」
「方法を突き止める前にとりあえず試してみる、と？」
　確かに、あまり良くない行為ではある。
　失敗すれば費やした時間や魔力は無駄になってしまう。なら先に時間をかけてプランを整えた方が結果的に得をするというものだが、
「構いません。色に関しては師匠と同じ方法は使いませんから」
「へえ？」

さっさと先を話せとばかりに視線が突き刺さってくる。本当に現金な人だと思いながら俺は自らの構想を説明した。

「魔石に刻み込むのは、わたしの注いだ魔力を増幅する魔法とします」

「魔力の増幅？　そんなことが簡単にできるのならそれこそ歴史が変わってしまうけれど」

「それほど大層な話ではありません。要は師匠の作った新型魔石の応用です。危険度としてはずっと低いかと」

オーレリアは魔力を蓄積する魔法を刻むことによって新型魔石を作った。俺はこれを参考に「リディアーヌ・シルヴェストル以外の魔力には反応しない」魔石を作ることにした。

魔石の純粋化・専用化。

通常の魔石は魔力であれば誰の魔力にでも反応するようになっている。これは便利な反面、魔力効率としてはロスが大きい。そこで俺専用と定義した魔道具を作ることによってこのロスを抑えようと思った。

つまり、正確に言えばブーストではなくコストカットである。

「当然、この魔石は自身に注がれる魔力にしか反応しません。ですので機能としてはかなり限定されます。チェス駒の形状ではせいぜい自由自在に動かす程度が関の山でしょう」
「なるほど。限りなく少ない魔力でチェスができるだけの魔道具。しかも貴女以外には使えないと」
「そういうことです」
魔石の作り方は単純。俺の魔力によってきっちり染め上げてやればいい。俺の属性は火と光なので、魔石の色は赤系統になる。
「たぶん、色は橙に近い赤ですね」
「あら。紅じゃないのね？」
「わたしの感覚ではそれが一番強い火と光の力なので」
太陽のイメージ。
この世界の人間がアレを何色で描くのかはわからない。この辺りは感覚的な問題だ。
オーレリアはくすりと笑うと椅子に背を預けて言った。

「魔石の専用化、ね。戦闘用の魔道具に用いれば戦力強化に使えるかしら？」
「無意味に近いでしょう。専用化には使用者当人が魔石を作る必要があります。戦いに長けた貴族は魔道具の扱いに疎く、魔道具開発を得意とする貴族は荒事に弱いでしょう？　それを補って余りある利点など、ごく限られた者にしかありません」
「そうね。貴女や私くらいかしら」
例えば、金属製の筒に専用化した魔石を埋め込んでおく。そうすれば筒の中に何かを生み出して発射できる。通常の魔道具と違って何を発射するか――風か炎か、あるいは石礫かはその時々で変更可能だ。使う魔力は限りなく節約される。
ただ、言ってしまえばその程度だ。
とっさに使うには当人が携帯していないといけないし、魔石を通して魔法を使うという操作になるため「魔力さえ流せばイメージが不要」という魔道具の利点が存在しない。そこまでして齎される結果が魔力の節約程度ではあまりにも割に合わない。
俺はいくつか使い道を思いついているし、オーレリアだってやろうと思えば何かに利用できるだろうが――天才というカテゴリに含まれる俺たちだからこそ、日頃

から魔法の訓練して、魔道具なしでなんでもできるようになった方が早い。
「わたしは誕生日まで待つ必要がありませんから、リオネルさまより早く揃えて自慢してやろうと思います」
「あの子なら悔しがるでしょうね。魔法を覚えたら真っ先に駒を作ろうとしてセルジュ達が困りそうだわ」
「セルジュ様を困らせるのは本意ではありませんね。仕方ないので、ご機嫌取り用のプレゼントも何か用意しておきましょう」
駒と同じ要領でダイス(さいころ)でも作るか。これなら単に綺麗な雑貨として使える。
俺のプランを聞いた師は魔法大好きな変人の顔からただの姉の顔へと変わって、
「仲が良いようで何よりね」
「わたしとしても都合のいいお相手ですので、どうかこのまま関係を続けたいところですね」
「貴女達の間に子供が産まれたらお祝いを贈ってあげる」
その前に俺にも誕生日プレゼントを寄越せ、と言いたいのは山々だがここは堪えて、

「わたしが出産する年齢までここへ居てくださるのですか？」
探るように視線を向ける。
オーレリアは真っ向から見返すのを避けて曖昧に答えた。
「私は三年生よ。卒業したらここを出て、宮廷魔法士の寮へ入ることになるわ」
「素直に入る気があったのですね」
「もちろん。後見人の家に居候するよりはよっぽど気楽――」
「お母上の死因について耳にしました」
明るく、どこか呑気な声が途切れ、強烈な冷気の如きプレッシャーが押し寄せてくる。
オーレリア・グラニエは《漆黒の魔女》の異名に相応しい排他的な表情を浮かべる。「それで？」。回答を少しでも間違えたら殺されるのではないか、という恐怖。
ノエルが剣の柄に手を置いて身構える。しかし、オーレリアほどの術者相手では「動きがあってから、大事になる前に止める」ことなど不可能だ。起こる前に斬り捨てるか、起こってから斬り捨てるかの差でしかない。そして、ここで動けていない時点で結果は決まっている。

オーレリアが指を振り、棚から四枚セットの板を引っ張ってくる。板は四方の壁に飛ばされぴたっと張り付くと緑色の魔石を輝かせる。俺が父との相談に使った空気の壁と似たようなものが作り出された。

内緒話の用意。

俺は何が起こっておいいように心構えをしながら、敢えてそれを見せないように微笑んだ。

「お母上――亡くなられた王妃さまはお身体が弱かったそうですね。昔から何種類もの薬を飲まれていたとか」

俺の実母・アデライドとますます被る。俺たちの母親が揃って早死にしているのは偶然だろうか。

「魔力量の多い貴族は健康を害しやすいのでしょうか。だとすれば純血派とやらの主張も理解できなくはありませんが」

「傾向としてはあるわ。多くの場合、高い魔力量と引き換えに病弱で生まれてくるのは女。だから余計に目立つ」

女に多いのにも理由がある。仮に同じ両親からたくさんの子供が産まれた場合、

男子の方が子供ごとの魔力量にばらつきが出にくいのだ。

逆に女子は良くも悪くも魔力量がばらつきやすい。このせいで身体的限界を上回る才能が現れてしまうのか、一部の高魔力女子は生まれつき身体が弱く早死にする。

「貴女や私が天才ともてはやされるのにはそんな理由もあるでしょうね」

珍しく自嘲気味な表情で笑うオーレリア。

いくら才能があっても生かせないのでは意味がない。その点、健康体で生まれてきた俺やオーレリアは病死のリスクが低い。子を産んで血を受け継がせることもできるだろうし、魔法に関する研究成果を残すことだってできるだろう。

魔法の才能は子にも遺伝しやすい。上振れを選んですくい上げていけば、確かな血の強さとなっていく。

「母は病弱な身で無理をしたから早死にした、と」

「貴女が五歳までは生きたのでしょう？　出産の疲労は無関係よ」

本当にそうだろうか？　直接の死因になっていなくても寿命を縮めた可能性は十分にある。家の後継者としてはアランがいたのだから、別に俺は必要なかったはずだ。

俺がいなければ母はもっと生きられたかもしれない。ありえない仮定をしてしまう原動力は『お母さまともっと一緒にいたかった』ことなのだから、本末転倒もいいところだ。オーレリアが珍しく優しくフォローしてくれたのもあって感傷的な気分になってしまう。

瞳から涙がこぼれそうになる。なんとか堪えて言葉を続けた。

「オーレリアさまのお母上はどうして身体に魔石なんかを埋め込んだのでしょうか」

「……古臭い、迷信めいた妊娠方法よ。祖母の世代ですらほぼ完全に廃れていたような代物」

新型魔石ほど効率は良くないものの、従来の魔石にも「魔力を蓄える」性質はある。身体に埋め込んだ魔石へ魔力を注ぎ、自身の魔力を回復させれば、体内にある魔力量を一時的にブーストできる。

子供の魔力は親の影響を強く受ける。特に母親の影響は強い。であれば、妊娠している母体の魔力を強引に引き上げれば？

デザイナーズ・ベイビー。そんな言葉が頭をよぎった。『なによそれ!?　そんなの……！』。

「自殺行為です。身体に異物を入れる時点で負担が大きいのに、魔力量をそんな方法で増やすなんて」
「そうね。薬物で身体を弄り回されて身体に魔石を埋め込んで、それでも三十近くまで生きたのだから母はもしかすると身体が強かったのかもしれない」
「改造を行ったのは王家ですか？　それとも――」
「お父様は常識的な人間よ。年下の娘にそんな非道ができる人じゃない」
確かに。初対面の俺にも優しくしてくれたくらいだ。たかが魔力の強い子を産ませるためにそんなことはしないだろう。
ならば、やはりバルト家か。
俺が納得したところでオーレリアは視線を宙へ送って、
「魔石の方は母の独断。彼女はどうしても優秀な子供が欲しかった。だから古臭い方法まで持ち出した」
「どうして？」
「あの人にはそれ以外、目的がなかったから」
生まれてから死ぬまで母体としての価値しか評価されなかった女性。家族から非

道な改造を受け、身体も心もボロボロにされた人。
国王に見初められながらも「優秀な子を産まなければ」というプレッシャーに苛まれ、彼女はついに禁断の方法にまで手を出した。
結果、生まれてきた子供は全属性。類稀な魔力量を備えながら健康体という奇跡のような存在だった。
「……お母上にとって、オーレリアさまは救いであり宝だったでしょうね」
これ以上ない優秀な子を産むことができた。それは、他に価値基準を持たない彼女にとってどれほどの幸福だっただろうか。きっとオーレリアは母からの愛情を一身に受けて育ったはずだ。間違っても後に残るような怪我をしたり、重い病気にかからないよう心を配られながら。
「そう。あの人は、その宝である娘に魔法を使って殺されたの」
「――――」
俺は息を呑み、そして覚悟を決める。
これから口にするのは推測だ。正しいかどうかはわからない。それでも俺は、この推測をぶつけずにはいられない。

「オーレリアさま。あなたが初めて使った魔法は回復魔法だったのではありませんか？」

魔女の過去 2

オーレリアの母は肉体改造と出産の後遺症から体調を崩しがちになっていた。
娘にはなるべく暗い顔を見せないようにしていたが、子供にだってそれを察するくらいの能力はある。幼少期のオーレリアは母を心配したはずだ。
母に良くなってもらうにはどうしたらいいか。
彼女は考え、一つの答えにたどり着いた。
魔法で母を治してあげればいい。
日頃から「あなたには魔法の才能がある」なんて言われていたかもしれない。なら、その力で愛する母親を助けようとするのはなにも不思議なことではない。
オーレリアは母の身体に手をかざし、魔法の真似事をした。年齢を考えても成功する可能性はゼロに近い。しかしそれは成功し、彼女の才能をここでも示した。
そして。
強すぎる魔力に体内の魔石が過剰反応。ギリギリのところで保たれていたバランスが崩れ、悲劇の王妃は短い生涯を終えることになった。

「……」

俺の推測を聞いても、オーレリアはしばらく何も言わなかった。

ようやく口を開いたのはその場にいる全員が何も言わないまま一分以上が経ってからのこと。

「……お母様は最後に何て言ったと思う？」

確かな答えなど浮かぶはずがない。俺は見たことのないオーレリアの母親の顔を自身の母・アデライドのそれに置き換えた上でゆっくりと答えた。

「『よくできました。これからもたくさん勉強して、立派な魔法使いになってね』」

「さすがね。殆ど正解よ」

なら、オーレリアの母も俺の母と同じくらい娘のことを愛していたということだ。そして、娘の愛情もまた母親に届いていたということ。

だから、彼女は死に際に恨み言一つ言わなかった。

斜め後ろでアンナの小さな嗚咽とすすり泣くような声が聞こえた。優しい彼女のことだから感情移入してしまったのだろう。見れば、ノエルでさえかすかに涙ぐんでいる。母と娘の愛情。それは魔女の過去としてはあまりにも優しくて切ないもの

で、
「だから、私は魔法に関して手を抜かない」
「……っ!?」
俺は、オーレリアとの認識の違いに絶句した。
「私は母によって作られた天才。《漆黒の魔女》は魔法の才を世界に知らしめなければならない。そうでなければ、私は生まれてきた意味がない」
「そんなことをして、お母上が喜ぶと思いますか？」
陳腐な台詞だ。実際に口にしてみてあらためて実感する。それでもそれは嘘偽りのない俺の本心だった。
しかし、オーレリア・グラニエは冷笑する。
「喜んでくれるでしょうね。母は私に自分の呪いを引き継がせたのだから」
「違います。娘に手を汚して欲しい親なんていません。きっとお母上は――」
「冗談を言うのは止めなさい。自分の利益のために娘を利用する親なんて、この世界には腐るほどいるわ」
「それは」

彼女の言う通りだった。

俺自身、サラの屋敷で実例を見ているし、セレスティーヌもその手の女だ。あの悪女は堅実というか現実的というか、俺を活かして利用する方を選んではいるが、ジゼルの悪意に苦しめられた時に俺が立ち直らなかったらどうなっていたかわからない。

細くしなやかな指がこっちに向かって伸ばされる。距離の問題で触れることは叶わないが、その手は真っすぐに俺の瞳を目指していた。

「アデライド様は優しい方だったのでしょうね。そして天然の天才でもあった。なら、それが漆黒（わたし）と紅蓮（あなた）の違い」

作られた天才と、在るべくして在る天才。

「だから、あなたは危険な魔道具を作るのですか？　そうすれば確実に歴史に名を残せるから」

オーレリアは薄く微笑んで答えなかった。ここまで来てなお核心には触れてくれない。魔道具の性能とそれを渡した相手の情報。それがなければ今までの話なんてただの身の上話に過ぎない。

まだ、彼女はこれから起こる何らかの悲劇を諦めていない。

おそらく、ことを起こすのは純血派だ。

魔力持ちの最高峰と呼ぶべき魔女の作り出した道具。それを用いた平民が貴族の絶対性を崩す。血と魔力を巡るしがらみの行きつく先としてはとても皮肉が利いている。

「一度の事件で終わりにしますか？　まだ人生は長いのですからのんびり生きて、たくさんの成果を残す方がいいのでは？」

「もし、貴女の言うような事件が起こるとして、それは本当に一度で収まるかしらね？」

収まらないかもしれない。

事件がもし成功してしまえば二度目三度目を狙う輩は必ず出てくる。そして、ここで言う「成功」のハードルは低い。

平民の振るった暴力によって貴族が二、三名殺される。その程度の被害しか出なかったとしても、平民が勝った事例としては十分だ。

オーレリアから提供された魔道具の量もわからない。そもそも運び出しが一回き

りだったという保証はない。彼女が寮に入ってから二年以上、定期的に行われていた可能性だってある。全ての魔道具が一度に投入されるかどうか、それさえわからない。

オーレリアが素直に捕まる保証だってない。

魔道具なしでも国内最高峰の魔法使いだ。逃げる方法なんていくらでもあるし、匿ってくれる場所もあるだろう。ジゼルが捕まったのとはわけが違う。事件の後、国を揺るがす大犯罪者として永く君臨するつもりかもしれない。

「せっかくだから思考実験でもしましょうか」

さすがにもうオーレリアは食事を終えているし、俺も魔石づくりは中断している。空になったバスケットがテーブルの中央に置かれる。

「リディアーヌ。貴女なら失敗できない一度目の計画。どこでどのように起こす？」

「……ひとつ、前々から考えてしっくりきた答えはあります」

魔法を使い、紙でできた花をいくつも作ってバスケットへ放り込む。蓋を閉じるとどうだろう。花籠にも見えるし、花を人に見立てれば他の見方もできる。

「多くの若い貴族が集まる華やかな催し。一つの節目という意味でも幕開けに相応しい舞台。数か月後に行われる学園の卒業記念パーティー」

学園の卒業シーズンは三月。

卒業生の中には騎士団や王城で働き始める者もいる。彼らが新しい環境に慣れるにあたり、冬の終わりかつ春の初めという時期が良いとされているからだ。実家に帰る者にしても帰った途端に夏バテor冬ごもりとか気が滅入るだろう。

首謀者がオーレリアであればその近くで事件が起こるのは自然。

時期が遠いので警戒の中だるみも狙える。パーティー中なら参加者も気が緩みがちになるし、給仕などの使用人が多いので紛れ込みやすい。若い貴族は実力こそあれ経験不足なので咄嗟の判断は遅れる。

俺の答えを聞いたオーレリアはくすりと笑った。それからバスケットを自分の方へ引き寄せ、中に入っていた花を取り出しては一つ一つ燃やしていく。

そうして花が全てなくなったところで、

「何も起こらないといいわね、リディアーヌ？」

それだけ言うと、師は真面目な話に一切取り合ってくれなくなった。

「……卒業記念パーティー、か」
「ええ。確証はないし、わたしに予想されたことで変えてくるかもしれないけど。一応、お父さまの耳に入れておこうと思って」
屋敷に帰り、夜になってから報告すれば父は溜め息と共に天井を仰いだ。
「よりにもよって、か。オーレリア・グラニエめ。仰々しい事件と共に王族として、いや貴族としても『卒業』するつもりか」
「そうなって欲しくはないけれど……。お父さま、念のために警備の強化を進言してくれる？　もちろん説明の仕方は任せるわ」
前回のようなヘマは避けたい。強硬な主張はできないし、パーティーに決め打ちしておいて「もっと早く事件が起こりました！」となっても最悪だ。なので、できれば俺の名前を出さず不自然でない程度に騎士団への働きかけを行って欲しい。
父もこれに賛成し、警備強化の打診を約束してくれた。
「とはいえ、他の警備を緩めるわけにもいかん。騎士団はしばらく忙しくなるだろ

うな」

「精神的に疲れさせるのが目的、とわかっていても手は抜けないものね。せめて差し入れでも手配しておこうかしら。果実とか」

果物は毒を仕込むこと自体が難しいし、仕込んだ毒を見破られないようにするのはもっと難しい。傷や変色があれば誰だって気にするからだ。疲れた時は糖分が欲しくなるものだしちょうどいいだろう。

これに父は頬を綻ばせた。

「気遣いができるのは良いことだ。リディは良い妻になれるだろうな」

「ありがとう、お父さま。問題はリオネルさまがあまり気づいてくれそうにないことね」

「殿下にはもっと広い視野を持っていただかなくては困る。愚か者に嫁がせられるほどリディは軽い女ではないのだからな」

おっと、せっかく場が和んでくれたのにリオネルの名前を出したら表情が硬くなってしまった。やはりリオネルのことはあまり好んでいないらしい。まあ、俺の婚約相手だから嫌っているだけかもしれないが。

「ねえ、お父さま。オーレリアさまのところへ通うのは止めた方がいいかしら？」
「む。それは……非常に心苦しいが、警戒を考えればむしろ通い続けて欲しい。オーレリア・グラニエの行動を週二日、半日ずつとはいえ拘束できるのは大きい」
「あの様子だともうわたしにはなにも教えてくれそうにないけれど」
「それでも、同じ部屋で会話していれば見えるものがあるだろう。ただし護衛騎士は必ず連れて行くように」
「ええ、もちろん」
「防御の備えもしておきなさい。我が家の所蔵品から持って行って構わない。それからメイドも増やしておくか？　エマを付ければ四対一だ。いかに魔女といえど下手に手を出せまい。なんならエマを専属に指名しても――」
「お、お父さま！　お気持ちは嬉しいけどほどほどで十分だから！」
防御の魔道具は今までも外出時には身に着けていた。装飾品の形をしているとはいえゴテゴテしすぎるのもあれだからし、エマは「専属にはならない」ときっぱり宣言している。ついて来てくれと頼めばOKしてくれるのでそれで十分である。
「ちなみに『卒業記念パーティーに行きたい』と言っても許可しないからな」

「あら、なんでわかったのかしら？」
「それくらいはわかる。頼むからわざわざ危険に乗り込むのは止めてくれ、リディ」

父が心配するのは当然だ。それに、もともと部外者が気軽に行ける催しではない。騎士団だって頑張っているのだし、情報提供等での協力も大事だ。なんなら思いつく限りで最高に悪辣なテロ計画案とかを（警備の参考として）送りつけてもいい。直接乗り込んで叩き潰したいところ、渋々裏方に回ろうと決心してからしばらくが経った頃、俺の元に一通の手紙が届いた。

差出人は学園の長。内容は俺に卒業式への参加を要請するもの。

学園の卒業式では毎年、成績上位者に花束を贈呈している。この時に花を渡す役目は家族や親戚など近しい人間に頼むのが通例。そこで、首席への花束贈呈を俺に頼みたいとのこと。

「話はわかった。しかし、何故リディアーヌに依頼が来るのだ」
「旦那様。それは今年の首席がオーレリア様だからです」

オーレリアの成績は授業期間の残るこの時点で首席が決まるほど圧倒的。
しかし、彼女は近親者が非常に少ない。生母は亡くなっているし、父親は国王なので呼べるわけがない。同母の兄妹さえ一人もいない。
後見人の宮廷魔法士長は割と適任だが、彼も忙しい身の上なので調整が難しい。また、卒業後に上司と部下になるのを考えればあまり贔屓させるのも良くない。
「ならば異母兄妹に頼めばよかろう」
「お父さま。あの方の異母兄弟は王族です」
オーレリアと関係良好かつ比較的暇な王族となるとリオネルあたりになる。
花を渡すためだけにあいつを呼ぶくらいなら婚約者（俺）を呼ぶ方がまだ常識的である。唯一の弟子なのでばっちり関係者だし、自分で言うのもなんだが幼い美少女はこういう役割にぴったりのはず。
「わたしとしては是非お受けしたいわ。式の後はぜひ卒業パーティーにも出て欲しいとあるもの」
「学園に在学している生徒は社交が制限されますから、リディを卒業生と交流させられるのは当家としても益になるのでは？」

「お姉様、学園のパーティーに出られるなんて羨ましいです」
ここで詳しい事情を知らないアランとシャルロットが援護射撃。父は危機への警戒と単なる親馬鹿でなんとも言えない表情になったが、最終的には折れた。
「……仕方あるまい。リディが参加するなら警備強化の口実にもなるだろう」
こうして、俺は卒業記念パーティーへの参加権を手に入れた。

卒業記念パーティーに向けて

気づくと季節は秋が終わり、冬にさしかかっていた。
王都に大雪が降ることはあまりない。ただ、石畳が凍って馬車が滑りやすくなるし寒くて動きが鈍るので貴族たちは外出を減らす。
お茶会やパーティーの誘いも減るので、俺はこれを幸いと今後の準備を進めていく。
具体的には魔法の訓練や魔道具の開発、剣の稽古などだ。警備兵たちが雪かきをしてくれるので中庭は使えるし、ノエルもできるだけ移動を減らしたいとたまに泊まっていくのでいろいろと捗る。
「リディアーヌ様！　怪我には十分に気を付けて、防寒にも気を配ってください。体調を崩されたら元も子もないのですから」
「体型に変化が出るようなら剣の稽古は禁止しますので、そのつもりで」
「リディ。女の子なんだから無理に剣を覚えなくてもいいんじゃないか？」
「僕もそう思うよ。リディと訓練できるのは嬉しいけどね」

「お姉様。頑張りすぎて倒れないようにしてくださいね。あの時のような事はもう嫌なのです」

みんなからは口酸っぱく注意、苦言、お願い等々を投げかけられる中、意外というかなんというか、訓練に付き合わされる当人だけは俺に味方してくれた。

「寒いからこそ、動いて身体を温めるのは良い事です」

騎士らしい脳筋思考だが間違ってはいない。自分が剣を振りたいだけなのではないか、というのもこの際置いておく。

「身体を温めるのは得意よ。それに命を救われたこともあるんだから」

乗馬服にコート、手袋などで防寒しても動きやすさとのトレード上、どうしても限界がある。そこを例の身体を温める魔法で補う。体温を上げることで動きも活発化するので身体強化と組み合わせるのもそれほど難しくなかった。

何度剣を交わしてもノエルに勝てる気はしないが、動きは少しずつ良くなっていく。学園で穴に落とされた時に落ち着いていられたのもこういう訓練の成果だろうし、やっておいて損はない。

もちろん並行して本を読んだり、家庭教師について勉強をしたり、オーレリアの

ところへ通ったりすることも忘れない。

師のところではもっぱら自分用のチェス駒やリオネルへのプレゼントなどを作成し、自宅では荒事になった時用の魔道具を開発する。これはちょっとしたカムフラージュだ。どうせオーレリアは勘づいているだろうが、何を作ったか隠せるだけもだいぶ違うはず。

「それにしても、魔道具は意外と簡単に作れるんですね」

私室でいそいそと魔石を作っていると、護衛が手持ち無沙汰になったらしいノエルに声をかけられた。

「私でも作れるでしょうか。戦闘用の魔道具があれば戦いも楽になると思うのですが」

「簡単に見えるけどこれ、意外に大変なのよ？　魔力を大量に持っていかれるし、慣れないと効率が上がらないし」

何しろ魔力を注ぎ込み続けて無理矢理馴染ませるのだ、大変さは推して知るべし。俺やオーレリアのように魔力があり余っているのでもない限り練習するのもなかなか難しい。魔力伝導性の高い素材を使えば効率は上がるものの、そうすると費

用が嵩む。

少しでも節約したいとかオーダーメイドの魔道具が欲しいとかでない限りは金を払って外注した方がマシである。

「騎士団の訓練では身体強化や攻撃魔法も使うんでしょう？　魔道具を作るよりもそっちに魔力を回せばいいんじゃないかしら」

「さすがにそう上手くはいきませんか」

自作は無理だと悟った少女騎士は心なしかしょんぼりしてしまった。魔道具を使って華麗に戦うとか絶対格好いいし気持ちはわかる。

ノエルには卒業式に同行してもらうわけだし、護身用の魔道具を作って渡してやることにした。

訓練といえば、リオネルにも剣術に付き合わされた。

屋敷でたまに剣を振っているという噂が耳に入ったらしい。誰が広めたのかと思ったら「ジャンがぼやいていたのを聞いた者がいた」とのこと。まさかの父が情報源である。

戦ってみると王子様は案外手ごわい。十四歳のノエルの方が技術的にも体格的に

も勝っているのだが、何しろお子様なので加減というものを知らなかった。
「お前はほぼ素人だろうからちゃんと手を抜いてやる。安心しろ」
とか言いながら同性の友人と遊ぶかのように無造作に打ちかかってくる。
ノエルがいかに気を遣ってくれているか理解すると共にどうやって負けたらいいか悩んだ。同い年の素人相手だし身体強化次第で勝つこともできたが、チェスならともかく剣で勝つわけにはいかない。
結局、木剣を保持できる程度の身体強化をかけつつ怪我しないのを最優先し、しばらく打ち合ったところで降参を宣言した。
「なんだ、だらしがないな。筋は良さそうだからもっと積極的に攻めてみたらどうだ」
「無茶を言わないでくださいませ。男子と女子では基礎体力に差があるのです」
「そうですよ、殿下。リディアーヌ様がお受けくださったからいいようなものの、そもそも女性を剣術に誘うのはマナー違反です」
終わった後でリオネルはセルジュに怒られていた。苦労人であるこの青年にはいつも世話になっている。彼が抑えてくれていれば安心、

「そうは言うが、こいつもこいつだぞ。普通の令嬢なら着替えも木剣も用意しない」
「……確かに、リディアーヌ様は特殊な方ですが」
と思ったらこっちに被害が飛び火してきた。完全に自業自得なので文句のつけようもない。結局、お互いに怪我には十分に注意するということで両成敗（？）に終わった。
「またそのうちに相手をしてもらうからな」
「かしこまりました」
「というかお前、乗馬用の服なんて持っていたのか。なかなか似合っているぞ。……そうだ、せっかくだし乗馬も覚えたらどうだ？　俺もセルジュや父上と一緒に乗せてもらっただけだが、馬はいいぞ。馬車とは違った感動がある」
「殿下。乗馬も婦女子に勧めるものではありません」
またセルジュが口を挟んだものの、乗馬は俺自身興味があったので「機会があればぜひ」と

幸か不幸か、卒業パーティーまで大きな事件は起こらなかった。

平民街での小さな事件――誰と誰が喧嘩して衛兵隊のお世話になったとか、あくどい賭場に出入りがあったとかは日常的に起こるものの、純血派と断定できる逮捕者・摘発者はなし。秘密結社や明確な組織ではなく思想集団となると判別も難しくなかなか尻尾が掴めない。

友人たちへの警告や騎士団が警戒する様子などから貴族たちの間にも「何かが起こるかもしれない」という噂が広がっている。そのお陰で学園側も気兼ねすることなく騎士団に対し警備強化を要請することができた。

そして。

「リディ。本当に何かあるかはわからないが、警戒は怠るのではないぞ」

「わかっているわ。十分な準備はしてきたし、大丈夫よお父さま」

「アランとシャルロットも、冬は人や物の動きが滞りやすくなる。有事の際はセレスティーヌと共に冷静に対処せよ」

「はい、父上」

「お父様もどうかお気をつけて」

「行ってらっしゃいませ、旦那様」

当時の朝、父は王城にて執務を行うために屋敷を出発した。

いつも以上に心配性なのは何か起きることを予感しているからかもしれない。宰相である彼が城に詰めるのは有事の情報伝達をスムーズにしたり、要人警護を容易にする意味もある。

純血派を貴族が支援しているとすれば王城が同時攻撃されてもおかしくない。騎士団はこちらにもある程度の人員を割くことになる。

父はセレスティーヌやアラン、シャルロットを城に招こうとも考えたらしい。

しかし、留守中に屋敷を賊に狙われないとも限らない。公爵家には高価な魔道具や美術品、資料として価値のある本なども多く存在しているのだ。いざという時、使用人や兵たちを指揮して家を守る人間も必要だ。

「リディアーヌも十分に気を付けて。いざとなればアンナやエマを囮にしてでも逃げ延びるのですよ」

「縁起でもないことを言わないでください、お養母さま。もちろん、アンナやエマと一緒に帰ってまいります」

「パーティーを楽しんでおいで、リディ。君が学生として参加するのはまだ先の話だからね」
「お姉様、パーティーのお話、後で聞かせてくださいね」
「ええ。しっかりと楽しんでくるわ」
俺も父を見送った後で準備を整え、午前中のうちに屋敷を出発した。
今日のドレスは黒。全ての色を内包する黒は魔法的に尊い色とされている。学園の制服も黒が基調なので周囲との調和も取りやすい。めでたい式ではあるが、あまり俺が着飾っても卒業生を食ってしまいかねないので華やかさは抑えめ。
主張を抑えた分は装飾品でバランスを取る。目立つアクセサリーはパーティーまで温存するが、卒業式のうちから外から見えない位置に腕輪やアンクレット型の魔道具を装着して防備を整えておく。一緒に参加するノエルとアンナ、エマにも小さな魔石を複数あしらったチョーカーを渡した。
「念のために着けておいて。アンナたちに何かあったら大変だもの」
買ったら高いだろうが、魔石から俺が自作したので材料費くらいしかかかっていない。さすがに盗まれたりすると悔しいのでその辺りさえ気をつけてくれればいい

い。

「リディアーヌ様。私も頂いていいんですか？」

「ああ、ノエルには貸すだけよ。壊したら弁償してね」

「……わかりました。ありがたくお借りします」

別にノエルを信用していないわけではないが、この辺りはけじめだ。使用人と護衛騎士では心理的・立場的な距離に違いがある。そのことがかえって安心材料になったのか、ノエルもしっかりと頷いてチョーカーを身に着けてくれた。

「ありがとう。それから、ノエルにはもう一つ持っておいて欲しいものがあるのだけれど……」

学園に到着した後はまず、危険物を持ち込んでいないか軽くチェックされた。

「ノエル様。何故剣を二本差していらっしゃるので？」

「予備です」

「そ、そうですか」

若干の確認はあったものの問題なくパスし、学園長ら関係者に挨拶をする。数か月前には内定していた通り、オーレリアは無事に主席となったので俺は予定通り彼

女への花束贈呈を任されることになる。
「グラニエ様は我が校の歴史に名を残す才女です。その卒業を祝福する役は弟子であるリディアーヌ様こそが相応しいでしょう」
「身に余る大役ではございますが、精一杯務めさせていただきます」
挨拶が終わった後は式まで待機……の予定だったのだが、警備責任者として詰めていた騎士団の副団長、つまりノエルの父親が声をかけてきた。
「リディアーヌ様。本日の警備について相談させていただきたいのですが」
「もちろんです。ですが、子供の意見など参考にしてよろしいのですか？」
「本物かと見紛うような犯行計画書を送りつけておいてそれを仰られても説得力がありませんよ」
下手すると悪人が参考にしそうなレベルだったので騎士団上層部はドン引きだったらしい。念のためセレスティーヌにも読んでもらって監修してもらった自信作だったのだが。
「問題ないのであれば是非お話を聞かせてください」
「ありがとうございます。では、こちらへ」

それから式の時間ぎりぎりまで話し合い、料理に毒が混入される可能性や毒ガスの可能性、爆発物が用いられる可能性等々について確認した。

副騎士団長は俺の意見を聞きながら適宜指示を出す。そのせいで部下たちが出たり入ったり忙しく、部屋の中に十歳の小娘（俺）がメイド付きで存在するのが物凄い違和感だった。それでも一応許されたのはえげつない計画書の提出者だからとか宰相の娘だからとかそんな理由である。

「あの、副団長さま。本日、なにかが起こると思いますか？」

すると、彼は真剣な表情で答えた。

「おそらく、起こります。最終的にはただの勘としか言いようがありませんが。だからこそ油断はできません」

「はい。もし本当に起こった時、少しでも被害を減らせるようにしましょう」

卒業記念パーティー襲撃

こんなに早く卒業式を体験できるとは思わなかった。

黒い制服姿の生徒たちが整然と並ぶ様は前世における中学の卒業式を思い出させる。高校を卒業する前に死んでしまったので、俺にとってはそれが最後の式だ。

日本と違うのは髪や瞳の色が多種多様なこと、座り心地の良さそうなしっかりとした椅子が用意されていること、人と人の間隔が十分に取られていること、傍にメイドや執事が控えている生徒が多いこと、校歌斉唱がない代わりに卒業生全員による誓約が行われること等がある。

「国王陛下への忠誠と、国の礎を担う貴族の一員として誠心誠意尽くしていく事をここに誓います」

卒業証書の代わりとして与えられるのは魔石をあしらったペンダントだ。石の表面には国の象徴である天馬の刻印。受け取り後にブローチや指輪、髪飾りにすることも認められており、そういった加工がしやすい細工にもなっている。

ペンダントに封じられている魔法は攻撃から着用者を守るものだ。便利な自動防

御である代わりに効果としては低め。定期的に魔力を補充する必要もあるため気休め、お守り程度の代物ではあるが、タダでもらえる物としては間違いなく破格である。

なお、今年のペンダント製作はオーレリアが担当しており、例年に比べて効果が高いという触れ込みである。なお、ペンダントに嵌めこむ魔石の製作には俺も関わっている……というか、おそらく三分の一くらいは俺の担当分である。

『あの女が作った魔道具が卒業生全員に配られるっていうのもちょっとぞっとする話よね』

そこは当然チェック済み。実際に卒業生に配られる品からいくつか無作為に調査したが、防御魔法以外は付与されていなかった。オーレリアの命令一つで全てのペンダントが爆発、とかそういう心配はない。

「続いて、成績優秀者の発表と表彰を行う」

壇上に数名の男女が上がってくる。その先頭に立つのは黒髪黒目の美女――オーレリア・グラニエ。

俺は、祝福のための大きな花束を抱きかかえて彼女に近づいた。

「最優秀、そしてご卒業おめでとうございます、オーレリアさま」
「ありがとう。貴女に祝ってもらえるなんて、これ以上ない喜びだわ」
微笑んだオーレリアは一歩前に進み出て花束を受け取ると、そこから更に身を寄せてきた。受け渡しのために背伸びしていた俺の前に跪くようにして身を屈め、顔を近づけてくる。
傍目からはキスしているような構図に講堂内がざわめく。
しかし、実際には唇は触れていない。ただ俺にだけ聞こえるように囁かれただけだ。
「わざわざここまで来るなんて、本気で警戒しているのね」
「ええ。……言って止まらないのなら力づくで叩き潰す。それがわたしの流儀ですから」
囁き返したせいで「実は二人はできているのでは」なんて噂が流れたらどうしようか。いやまあ、その程度の騒ぎだけで今日を終えられたのなら万々歳か。
自分の席へと戻った俺は何事もなく式が進み、そして終わるのを静かに眺めた。

さて、式が終わった後は三時間程度の準備を経て卒業記念パーティーに移行する。建前上は自由参加の行事だが、今後のためのコネクションづくりや友人たちとの最後の語らいの場、本格的な大人への仲間入りに祝杯を挙げる席である。よほどどうしようもない用事があったり相当な変わり者でもない限りは全員が参加する。

パーティーが始まるまでの時間は自由時間なので、卒業生は在校生と交流したり、パーティー用の礼服やドレスに着替えたりと思い思いに過ごす。

なお、相当な変わり者である我が師オーレリアは主席卒業生という重要な立場なので否応なく参加が義務付けられている。

「では、副団長さま。最終確認の続きをいたしましょう」

「よろしいのですか、リディアーヌ様？」

「ええ。パーティーにはアクセサリーで対応するつもりですし、学生たちの時間を部外者が邪魔するのも無粋でしょう？」

「ははは、そうですな。では、お言葉に甘えましょう」

パーティー用に使用される食器やカトラリーは全て銀製に統一されている。一部

の毒に反応して変色する性質があるからだ。他の毒が用いられるにしても参加者に毒物への警戒を意識づける効果はある。

調理段階での毒物混入は複数人での毒見を義務付けて対応する。それも、専用の毒見役を設けずなるべく持ち回りで。犯人一味は解毒剤を服用しているかもしれないが、一般の使用人はそうではない。何か異常があればその時点でパーティーは中止である。

給仕等で使用人が多くなるのはどうしようもない。そこは警備兵や騎士の数を増やすことで警戒する。

会場は屋内の大ホール。気温が下がり始める時間帯、冬の名残が残る時期とあって窓は基本締め切りになるため、気体状の毒にも要警戒。異常が発生した場合は躊躇なく窓を割るように警備人員に通達済み。

会場内に不審な魔道具がないかも複数回にわたってチェックさせている。この世界にはまだ火薬が存在しないため、爆発物は魔道具および魔法に注意しておけばいい。

生徒たちも「貴族を狙った事件が起こるかもしれない」くらいの噂は知っている。

いつどのように起こるとは明言できないものの、学園からも注意を呼びかけているため、最低限の対策は取っているはずだ。
「ホールの天井、および地下は大丈夫ですか？」
「現在、異常がないことを確認しております。見周りも定期的に行い、異常があれば直ちに対処するよう指示を出しました」
何かあった時のために医者や、希少な治癒魔法の達人にも来てもらった。
「使用人を対象とした身体検査は？」
「実施しましたが、どこまで効果があるか……。裏方はどうしても慌ただしくなります。パーティーのための臨時人員もいますし、検査に代役を立てられれば確認は困難です」
「顔写真付きの身分証なんてありませんからね」
「？　写真とは？」
「あ、いえ、こちらの話です」
身体検査を徹底できるかも怪しい。全員を裸にして調べるなんて時間がいくらあっても足りないし、使用人の何割かはメイドである。貴族を相手にしているせい

かセクハラ意識が高いので下手なことはできない。そして悪いことにメイド服や執事服は結構物を隠しやすい造りになっている。

学園は敷地も建物も広い。身体検査の間だけ荷物を隠しておくのは難しくないし、全てを捜索するのは非現実的。

肉を切り分ける用のナイフなど最低限の武器なら現地調達も可能だ。

「警戒を察して計画を取りやめてくれれば良いのですが」

「同意しますが、可能な限り対策を整えた場で本番を迎えるのと果たしてどちらが良いものか」

本当、こういう時に受けて立つ側というのはままならない。

どれだけ対策しても対策しきれた気がしない中、パーティーの開始時間が迫ってきて。

「リディアーヌ様、そろそろ会場に参りましょう」

「ええ、そうね。……では、副団長さま。ご武運をお祈りいたします」

「はっ。どうか有事の際には御身を優先されますよう。……ノエル。リディアーヌ様に始終付き添えるのはお前だけだ。何があってもお守りしなさい」

「了解しました、父上。……いえ、副団長閣下」
そして、パーティーが始まった。

真っ白なテーブルクロスに魔道具の燭台。天井には自ら煌めくシャンデリアの数々。見た目にも趣向を凝らされた料理の数々。コツコツと響く靴音も人々の話し声も高い天井に吸い込まれ、賑やかではあっても騒々しくは感じない。
「みなさま、ご卒業おめでとうございます」
「ありがとうございます、リディアーヌ様」
「殿下の婚約者でもある公爵令嬢様からお祝いの言葉をいただけるとは誠に光栄です」
正装に身を包んだ男たちは何割り増しかで凛々しく見え、華やかなドレスで着飾った女たちは目にも美しい。俺も両手に指輪、首にはネックレス、さらには髪飾りにイヤリングと自分を飾っているものの、黒いドレスのお陰でいい感じに脇役になれていると思う。

自分から声をかけにいくのは控えめにしようと思っていても相手から話しかけられた場合はどうしようもなく、結局、俺はほとんど絶え間なく卒業生からの挨拶を受けることになった。

「スパークリングワインはいかがですか、お嬢様」

「いえ、止めておくわ。お酒はもう少し成長してからの楽しみにしておきたいの」

この国に「お酒は二十歳になってから」という決まりはない。下町の平民なんかだと子供も平気で飲んだりするらしいし、貴族の子も「幼いうちから慣れさせるため」と親から酒を勧められたりする。

しかし、我がシルヴェストル公爵家に関しては両親ともに若いうちの飲酒に否定的である。理由は父が「健康を害する恐れがあるから」、養母が「思考が鈍るから」と別々だが、親の方針もあって俺もアランもシャルロットも酒の味をまだ知らない。

前世でも飲んだことがない（正月にお屠蘇を舐めた程度）のでとても興味は惹かれるものの、今飲んだらそれこそ後の行動に差し支える。給仕のメイドからの問いかけは丁重に断った。

そんな風にして一時間以上が経過。

空がだんだんと暗くなりはじめ、卒業生たちも酒が回ってきている。会話が活発になっていいことだし、耳から入ってくる情報だけでも後で精査したらなかなかの価値がありそうだが、今はそれよりも、

「そろそろ、頃合いかしら」

「あら？　何か余興でもしてくれるのかしら？」

「師匠」

オーレリア・グラニエは漆黒のドレスに身を包んでいた。下半身こそふわりと広がって華やかではあるものの、上半身は身体のラインがしっかりと出たシンプルなデザイン。しかも完全ノースリーブと完全に夜会向けの一品である。

これもナタリーの所属する工房製だろう。関係者としてはお買い上げありがとうございます、と言わざるを得ない。

彼女の動向はパーティー開始時点からチェックしていた。そろそろ声をかけたかったので向こうから来てくれたのはありがたい。

「できるだけ動きやすそうなドレスを選んだ、というようないでたちですね？」

「そうね。肌寒さは魔法でなんとかなるもの」

その手があったか、と思う俺だったが、子供がやったら「色っぽい」の前に「寒そう」が来るので周囲が「何か羽織るなりしろ」と言ってくるだろう。

師のグラスの中身、薄い色をした果汁を見つめながら使用人から水のグラスをもらう。コーラが飲みたい。仕方ないのでせめて炭酸を、と水を無糖のサイダーに変えたら師が食いついてきた。

「何をしたの？　少し飲ませなさい」

「構いませんけど……って、全部飲まないでください！」

仕返しに果汁にも炭酸を加えてやったら「ありがとう」と言ってぐいっとあおられた。

「なるほど、炭酸水ね」

「ご存じなのですね？」

「そういうものがある、ということくらいはね。人工的に作るという発想はなかったけれど」

天然の炭酸水が湧く地域があるので知っていたらしい。何やら指を動かしながら「すぐには再現できないかしら」とか呟くオーレリア。今はそんなことどうでもい

いだろうに。
「遊んでいてよろしいのですか？　決行が近いのでは？」
「そう言われても、私は最終的な決行日時を知らないもの」
「は？」
マジか？　じゃああの意味深な発言はなんだったのか。あるいは今の台詞こそが欺瞞なのかと疑惑の目を向ければ、
「しつこく監視されている状況で連絡を取り合うなんて簡単ではないでしょう？　知っているのは仮決定の作戦内容だけ」
「あなたならどうとでもなりそうですが」
遠話の魔法もある。最も容易とされる方法でさえ制約が多く扱いづらいものの、オーレリアなら指令を伝えることくらいできそうなものだが。
彼女が作戦を主導しているわけではない？　あるいは、計画立案に関わっていたが騎士団に睨まれたせいで身動きが取れなくなったか。
だとしたら俺としては嬉しい話だ。できれば師には何もして欲しくない。俺は微笑んでオーレリアを見上げた。

「師匠。卒業祝いにもう一つプレゼントがあるのですが、受け取ってくださいますか？」
「何かしら？」
「アンナ」
「はい」
銀製のブレスレットをアンナから受け取る。表面には複数の魔石。それを見た《漆黒の魔女》は「仕方ないわね」と苦笑し、ゆっくりと腕を差し出してきた。
「着けてくれるかしら？」
「仕方ありませんね」
細く白い腕へとブレスレットを通す。
すると、金属製の輪はひとりでに縮んで腕にぴったりと嵌まった。これなら簡単には外せない。この形状変化はオーレリア自身から吸い取った魔力によって発動している。つまり、地下室で見た魔法封じの魔道具を俺なりに再現したものだ。
『自動型魔道具の魔力を吸い取る性質を逆に利用するとか、やっぱりこの人は天才よね』

貴族には魔法防御がある。これは自身への悪影響を軽減する効果を持つため『魔法を封じる魔法』も普通ならその影響を受ける。師はその問題を「触れれば魔力が流れるようになっている」自動型魔道具の特性を利用してすり抜けたのだ。

まあ、この方法でも封じられる魔力量には限度があるのだが……。

俺は師が目を瞬いているうちにアンナから「二つ目」を受け取るともう片方の腕にも装着してしまう。魔石の複数搭載で性能不足を補った上で同じものをもう一つ。これだけやればおそらく、オーレリアの魔力を半分以下に抑えられるはず。

問題は、何故素直に受け入れてくれたのかだが。

「師匠。やっぱり、あなたは」

俺が続きを口にしようとした時、会場のあちこちから天井に向けて炎の球が放たれ、周囲をひときわ明るく照らし出した。

卒業記念パーティー襲撃 2

「正しい血統を理解しない愚かな貴族に報いを！」
「本当に来てしまったみたい、ね……っ！」
顔を上げた俺は右手を高く突き上げると、消防車からの放水をイメージ。勢いよく上昇した水の束が最も近い火球を消滅させる。『着弾時以外は爆発しない設定かしら。おかげで被害が減ったわ』。
直後、複数の爆発音。
前もって止められたのは一つだけ。残った火球は天井やシャンデリアに着弾、大きな音と共に爆風を生み出した。砕けた硝子の破片が飛び散り、いくつかのシャンデリアが落下を始める。
折り重なる悲鳴。咄嗟に状況を理解できているのはほんの一握り。
「非常事態よ！　身の安全を最優先にしなさい！」
声を上げながらたて続けに手を振って指向性のある突風を生み出す。風は落下するシャンデリアに斜め下から衝突、壁や天井へと叩きつけて細かい破片へと変え

る。飛び散る破片まではどうしようもない。火球をおかわりするよりマシ、とこれを選んだが、他の魔法が良かったかもしれない。

後悔している暇はない。

あらためて会場を見渡す。守ったシャンデリアと各テーブルの燭台、窓から射しこむ月明かりのお陰で視界には不自由しない。

呆然としたまま立ち直れていない者。降ってくる破片を魔法で防ごうとしている者。悲鳴を上げて逃げ出す者。事態の収拾に務めようとする使用人と、素早く服の中から武器を取り出して周囲の者へ襲い掛かる使用人。

『ちょっと！　思ったより数が多いんじゃない!?』

ざっと見ただけだと数えきれそうにない。

敵の動きはなかなかに軽快で、訓練を受けているのが一目でわかる。騎士団や警備兵が対応に動いているものの、全員を押さえるのは難しそうだ。

混乱の収拾に避難誘導。防衛側はやるべきことが多い。会場の複数箇所で香か何かが焚かれているのを見た俺は氷の礫を飛ばして複数の窓を叩き割った。空気の入れ替えによって香が流れていく。気づいた騎士がさらに換気を行ってくれる。

と。

「危ない！」

ノエルの声と金属同士の衝突音。

俺の傍で、剣を抜いた少女騎士がメイドの振るった大振りのナイフを防いでいた。

舌打ちしたメイドは軽く後ろへ飛びのくと空いている腕を持ち上げ、そこに嵌められた腕輪を擦る。魔石の輝き。放たれた火球はノエルでも俺でもなく、傍にいる専属メイドに襲い掛かった。

「アンナ！」

「駄目です、リディアーヌ様！」

反射的に飛び出そうとしたところをノエルに制止される。代わりに動こうとした少女騎士は再び飛びかかってきたメイドと交戦。アンナがぎゅっと目を瞑り――彼女の身を覆うように生み出された障壁が火球を防いだ。

チョーカーに組み込まれた自動防御だ。

物理攻撃一回、魔法攻撃一回、毒物一回。対象と回数の制限つきだが、そのぶん防御力は高い。火球が大した威力じゃなかったのもあって十分防げた。

難を逃れたことで我が家のメイドたちも理解が追いついてきたらしい。エマが俺の背後を庇うように移動。アンナも身構えながらチョーカーへの魔力供給を開始する。魔力を補充すれば消費した防御回数が復活するからだ。

オーレリアは。

特に身動きも取らずその場に立っている。あまりにも悠然とした態度は全て予測済みであるようにも、出来事に全くの無関心であるようにも見えた。

彼女の腕に嵌まった腕輪は。嵌めこまれた魔石が通常動作以上の輝きを見せている。魔力の過剰供給。許容量以上を流し込まれた魔石がひび割れ、効果を失った腕輪がするっと外れる。

「リディアーヌ」

黒く美しい瞳と視線が絡まる。

俺とオーレリアの距離はほとんど離れていない。美女の口元が歪むのを見ながら俺はすぐさま動いていた。『勝負は一瞬、どっちが早いかよ！』。

俺――リディアーヌ・シルヴェストルの魔力量は師であるオーレリアには遠く及ばない。一年前の時点で王族並の魔力は十分破格だが、それだけでは師には勝てな

い。魔法に対する造詣の深さでも経験値の量でも劣っている俺が勝っている点は何か。

それは、前世知識に由来する発想の飛躍と『むかつく奴を直でぶん殴る覚悟よ！』。

「舌を噛まないでよね……っ！」

瞬時に利用できる最大魔力を発揮。全身に流れた魔力はごくごく短期的な超身体強化――超加速（クロックアップ）とでも呼ぶべき爆発的な運動力を発揮。それを用いて飛び出した俺は師へと急接近しながら、ただ右の拳を突き出した。

ごっ！　と、体感としては物凄い衝撃。

張りかけの障壁を突き破ったことで多少の減速を行いながら師の腹部へ突き刺さった拳は、運動なんてしたこともない令嬢の身体をあっさり吹っ飛ば――『やばっ！』吹っ飛ばしかけたところで慌てて片方の腕を掴んで勢いを殺す。

「――――」

師は、演技なんてする余裕もなく白目を剥いて気絶していた。いや、あの、大丈夫だろうか。さすがに内臓が破裂したりはしていないはず。吐血している様子もな

いし無事だとは思うのだが、医者に診てもらわないと若干不安な気がする。
まあ、これなら事が終わるまで気絶していてくれるだろう。
振り返ると、暗殺メイド（仮）の投げた小瓶のようなものをノエルが剣で斬り捨てたところだった。
「っ!?」
半ばで断ち切られた小瓶から液体が飛び出し、少女騎士に降りかかる。チョーカーが輝いて液体を浄化。どうやら毒の一種だったらしい。
「また、魔道具」
「当然でしょう……っ!?」
毒に怯まずノエルが突進。渾身の一太刀がナイフの防りを弾き飛ばし、メイド服をざっくりと切り裂く。しかし、浅い。相手がすかさず後退を始めていたのと、服の下に着こまれていた薄手の鎖帷子（チェインメイル）のせいだ。
暗殺メイドは距離を取りつつ裂けた服の下に手を突っ込み、背中に隠されていた鞘から新たなナイフを取り出してみせる。
こいつ、かなり強い。

どうやら敵の練度にはかなりばらつきがあるらしい。周りの騎士は大人の男だというのを差し引いてもこんなに苦戦していない。中には無駄に声を上げながら突っかかった挙句、卒業生の魔法でノックアウトされている奴さえいる。

運悪くエース級の相手と鉢合わせたか。

見ればメイドの顔には覚えがある。バルト家の使用人。特徴のない顔の上に化粧もしているのでぱっと見別人だが、あいにく俺は記憶力に自信がある。

どういうことかと声を上げようとして、

「リディアーヌ様、新手です」

「っ！」

ボーイ姿の男がこちらへ駆け寄ってくる。

男の投げたナイフをエマの防御障壁が阻み、新たなナイフと共に斬りかかってきた男には俺が応じる。心の準備ができていたお陰で頭が冴えている。ノエルよりずっと平凡な剣筋をじっと見ながら実体のない剣閃をイメージ。

きん、と。

不可視の刃に弾かれたナイフが宙へと逸れた。

「な、に!?」

「リディアーヌ様、これを！」

暗殺メイドと交戦を続けながら、ノエルが俺に武器を投げてくれる。

予備と言い張って持ち込んでもらった二本目。大人用としてはかなり短く、俺にとってはちょうどいいそれをすぐさま抜き放つ。

金属の鈍い輝き。

刃の入っていない平坦な刀身は儀礼用あるいは装飾用の一品であることを示している。しかし、鍔の中央には大きな赤い魔石。ある程度の知識を持つ者ならこの剣を「強力な火の魔道具」と認識するだろう。

暗殺ボーイはこれに大きく舌打ち。

「話が違うぞ！　十歳のメスガキがなんでこんなもん持ってるんだよ！」

「あら？　無差別に狙ってきたんじゃなくて、わたし目当てだったってこと？　狙いは一体なんなのかしら」

残念ながら答えは返ってこなかった。

口数が少なくプロフェッショナル感のあるメイドの方と比べるとこっちはそこら

のチンピラ感がある。腕もおそらく数段下だろうが、さすがにそこまでお喋りではないか。

彼は構えを解かないまま倒れたオーレリアに目をやって、

「頼みの《魔女》もやられちまってるし、計画はことごとく読まれてるしおかしいだろ。誰だよ、お前らに指示したのは」

「さあね？　案外、わたしの独断だったりするかもしれないわよ？」

いや、結構喋るなこいつ。

薬でもやっているのか目つきもおかしい。捕まったら死刑確定だろう状況で暴れていられるのは貴族への恨みと薬による二重ドーピングのせいか。

男は袖からさらにナイフを抜き放つと身を屈めて、

「こうなりゃとにかく『竜の系譜』だけでも片付けて――っ!?」

横合いから飛来したナイフが男の首に突き刺さった。

鮮血。ボーイ姿の男は目を見開いたまま膝をつき、倒れる。ナイフを投げたのはこちら側の人間ではない。あの暗殺メイドがノエルと交戦しながらやったのだ。

口封じ。

計画を喋りすぎる仲間を邪魔に思ったのだろう。確かにあの意味ありげなワードは引っかかるが、今はそれどころじゃない。

男に駆け寄って抱き起こす。

首からは血が溢れ、白目まで剥き始めている。ナイフに毒でも塗ってあったか。俺はため息をつき、近くにあったテーブルに彼をもたれさせた。それから刺さったままのナイフの刃に（触れないように）指を近づけ、刀身に沿うようにして魔力を流し込む。

他人の身体を治療するのは非常に難しい。毒の分解は諦め、体内に入った魔力を生理食塩水に変えるイメージ。とりあえず水で薄めておけば毒の効果は弱まるだろう。傷口を心臓より高くすることで出血も抑えられるはず。

「リディアーヌ様」

「助けるわけじゃないわ。ただ、生きていてくれたら好都合だというだけ」

傷の治療までする気はない。事が終わった時点で息があったら治療してやってもいいが、尋問に使える奴が一人増えたらいいな、程度の狙いだ。命を狙ってきた相手に情けをかけるほど俺は善人じゃない。

俺の隙をつこうとする暗殺メイドはノエルが阻んでくれた。
二人の身体能力は（身体強化込みで）ほぼ互角。技術および引き出しの数では相手が上だが、チョーカーの防御が相手の決定打を許さない。魔力も有限ではあるものの、それは向こうの武器や毒薬も同じこと。
毒薬の瓶を再度投げつけられてもノエルは慌てず籠手で叩いて払いのけ、ナイフの投擲も叩き落とす。型に捕らわれない格闘技も繰り出されたものの、徒手格闘自体は少女も素人ではない。それに素手での打撃では多少食らったところで決定打にはならない。
「リディアーヌ様、今のうちに離れてください」
「わかったわ。……アンナ、エマ、もうしばらく付き合ってくれる？」
「逃がすか」
暴れ続ける暗殺メイドに笑って答える。
「逃げないわ。まだ暴れ足りないし、あなたたちの計画も潰しきれてないもの」
「リディアーヌ様、危険です」
「だから二人が守ってちょうだい。わたしも二人を守るから。そうでないと、ここ

に来た意味がないの」

まだ混乱が収まらない。騎士団は善戦しているし、新型魔道具の威力が思ったより低いのもあって大きな被害になっていないが、怪我をした参加者もさすがにゼロとはいかないようだ。それでも見た限り死亡者、重傷者は出ていない。

天井を見上げ、火が燃え移りかけているのを確認した俺は剣の切っ先をそちらに向けて水を放つ。何か所かに水をかけてやれば火はほぼ収まり、延焼の恐れはなくなった。

「……ご無理はなさらないでくださいね。絶対ですよ？」

「ええ、もちろん。自分もあなたたちも死なせたりしないから安心して」

俺とアンナ、エマはひと塊になってパーティー会場を移動していく。

程なく、手の空いていた敵の男が一人、こちらへと斬りかかってきた。エマの障壁が初撃を防ぎ、アンナの生み出した氷の針が敵を襲う。狙い違わず飛んだアンナの魔法だったが、敵の身体に到達する寸前に障壁へ阻まれて消滅してしまう。

貴族？　いや、腕輪が光っている。自動発動型の防御魔道具だ。

「アンナ、防御に集中して。攻撃はわたしがやるわ」

「リディアーヌ・シルヴェストル、覚悟！」

向かってくる相手に対して、俺は真正面から突っ込んでいく。足のアンクレットへ魔力を流して脚力を強化。十歳の小娘には普通出せない速度で接近すると、腕輪によって筋力を強化しながら装飾剣を突き出す。

相手は慌てず足を止めてやりすごそうとするも――その時点でもう、俺の思惑に嵌まっている。足が止まったのとほぼ同時に剣の魔石へ魔力が流れ込み、専用化の施された魔石は俺のイメージに従って魔法効果を発揮する。

イメージしたのは刀身の伸長。

魔法によって形成された追加の刃は敵の腹へとモロにめり込んだ。目と口を開いて悶絶するそいつにボクサーの顔面パンチをイメージした不可視の衝撃波を叩き込む。倒れたところで股間を思いっきり蹴り上げてやったが、完全に気絶しているらしく反応はなかった。

「これで二人。ノルマとしてはもう何人か倒しておきたいところだけど」

「……リディアーヌ様はお一人の方が強いのではないでしょうか」

「アンナ。護衛である私達がそんな事を言ってはいけません」

「そうよ。それに、わたしには目が二つしかないもの。周囲の警戒、しっかりお願いね」

どうやら俺が狙われているのは間違いないようで、それからも立て続けに刺客が襲ってくる。身体能力と経験の不足している俺一人では経験豊富な刺客相手に足をすくわれかねないが、相手の攻撃はメイド二人の魔法、そして俺の身に着けている防御の魔道具が防いでくれる。

アンナたちへの攻撃は俺の渡したチョーカーで防げるし、相手がこっちの攻撃を防ぐ手段は受け止めるか避けるかしかない。

ナイフの一撃を魔法による不可視の剣閃で防御し、装飾剣で思いっきりぶん殴る。不可視の衝撃波で怯ませつつ切りかかり、相手が防御したところで電撃を流す。ロングソード並に伸ばした剣の一撃をかわされたところで、長さを槍レベルに二段強化してごすっと刺す。

一応、流血は避けたものの、それ以外は容赦なくぼったたばったとなぎ倒した。

完全に魔法のお陰である。魔法と魔道具の有無はやはり戦力の差に直結する。当初の混乱が収まった今、騎士ではない学園の卒業生たちですら襲撃者に対して優位

に立ちまわりつつある。
もちろん、俺たちの命を脅かしかねない武芸の技は称賛に値するし、無警戒の中で計画が行われていたらどうなっていたか恐ろしいが。
「残念だけど、あなたたちの計画は失敗よ」
最後の悪あがきとばかりに建物自体へ火が放たれるも、俺を含めた貴族たちの魔法によって火事は未然に食い止められた。
捕縛者数十名。
あらかじめ医者を手配し解毒剤を用意していたこと、早急な鎮圧に成功したお陰で迅速な処置が可能だったことなどから学園の卒業生に死者はなし。
後に歴史の分岐点と称されることになるこの事件は、俺たちの勝利で終わった。
ちなみに、俺は翌日から超加速の後遺症により筋肉痛で寝込んだ。

パーティー襲撃 裏

他者視点による「一方その頃」の話です。

「いよいよですね、旦那様」
「ああ、いよいよだ」
窓の外が少しずつ暗くなり始めた頃。
バルト伯爵は執務机の前に腰かけたまま、夫人の声に応じた。室内は人払いを行い夫妻だけになっている。防音の魔道具も起動しているので盗み聞きされる心配はない。
齢五十を過ぎた長身の男である。若い頃に比べれば無理が利かなくなったものの、今なお鍛錬を続けているお陰か身体はまだまだ動く。頭の方はなおの事。胸には「まだ自分は現役を続ける」という強い意志がある。
ようやくここまで来た。

長かった。万感の思いを込めて息を吐く。煙草を吸うか祝杯を挙げたいところだが、それは「成功」の報が入ってからにしたい。

今、学園では卒業記念パーティーが行われているはずだ。

多くの若い貴族達が酒や料理を味わい、盛大に浮かれている。そこで予想外の出来事が起これば大きな混乱が生まれるだろう。

「多くの犠牲者が出る。それは騎士団の失態となり、王族への信頼低下に繋がる」

「あの子に無理をさせた王族に煮え湯を飲ませられるのですね」

「ああ」

若くして亡くなった娘の顔を思い出すだけで苦い気持ちが広がる。しかし今日に限ってはどこか晴れやかな気分もあった。

「騎士団も勘づいて動いているようだが、問題なかろう。王城への同時襲撃を諦めてまで戦力を集中させたのだからな」

「平和ボケした無能どもにこの計画を止めることなどできないでしょうね」

純血派を扇動して貴族社会に打撃を与え、現王家の地位を失墜させる。バルト伯爵が描いた計画は、簡単に言ってしまえばそういったものだ。

主導はあくまで純血派。資金や物資、人員提供は行っているものの、こちらの名前は一切出していない。相手も使えるものは使う方針らしく必要以上に詮索してくる事はなかった。

作戦には伯爵の私兵が数名、紛れ込んでいる。いずれも特殊訓練を受けた暗殺者であり、純血派の精鋭をも上回る戦闘力を持っている。平民なので魔法は使えないが、それ故に「あの愚か者共」の中にあっても違和感なく馴染むだろう。

私兵達は普段メイドや執事として扱っていた。これは屋敷へ出入りしていても怪しまれないためだ。作戦が無事に終われば何食わぬ顔で屋敷に戻らせればいい。

万が一、作戦が失敗したとしても自分達に追及が及ばないよう指示は全て口頭で出し、命令書の類は存在せず、私兵達を使用人としての雇用した記録も作成していない。一般の使用人が何を証言したところで証拠は出ないし、責が及ぶのは使用人頭になるだろう。

まあ、失敗することはないだろうが。

作戦にあたって様々な準備をした。

最たる物が薬物だ。

純血派のメンバーにも行き渡るようにある種の麻薬を提供。これは服用者に高揚感を与えて恐怖を和らげると共に潜在能力を引き出す効果がある。薬物の常習者であれば証言の正当性が低下するため、捕縛者が出た場合にも有利に働く。

武器に塗ったり、戦闘中に敵へ振りかけるための毒も用意した。いずれも即効性のある違法な品だが、植物関係に強いバルト家であれば密造は容易い。毒は平民と貴族の力の差を埋める大きな助けになるだろう。

食事に混ぜる毒も忘れてはいけない。少量の摂取で死ぬような毒は扱いが難しいため、いわゆる下剤の類を選んだ。武力を用いず一網打尽にできないのは残念だが、腹痛によって精神集中が乱れれば魔法の行使が難しくなる。続いて行われる襲撃を助けてくれるはずだ。

他にも香として拡散させる毒なども用意。純血派側にはあらかじめ解毒剤を飲ませておけば被害は相手側にだけ出るという寸法だ。

「オーレリアの新型魔道具もある」

長期間魔力を留めておける魔石とそれを用いた火球の魔道具。あれがあれば平民でも魔法を使うことができる。貴族には固有の魔法防御が備わっているため、直接

魔法をぶつけたところで大きな被害は期待できないが、敵が魔法を使ったという精神的な衝撃は大きいはず。

防御ではなくかわされるなどして魔法が会場自体にぶつかれば火事も誘発できる。いざとなれば放火も視野に入れるように入れ知恵もした。

（魔法封じの魔道具がもっと大量にあれば良かったのだが）

首輪型のそれはオーレリアの才能をもってしても製造が難しいらしく、十に満たない数しか用意できなかった。

荒事の場で敵に装着させるのも現実的ではないし、もしできたとしても効果に欠点がある。魔石に魔力を吸わせるという機能上、吸収速度と吸収上限が魔石の性能に依存するのだ。

複数個を埋め込むことである程度の対応は行われているが、現状では伯爵級以上の貴族をすぐに無力化する事は不可能。戦闘中に装着してもしばらくはある程度の魔法を使えてしまう。であれば普通は真っ先に「魔道具を壊す」という行動に出るだろう。

まあ、あれに関しては無くとも構わない。何しろかのオーレリア・グラニエ自身

があの会場にいるのだから。

「本当に、オーレリアは親孝行な子ですね」

「ああ」

しみじみと告げる夫人に、伯爵は笑顔で答えた。

伯爵夫妻の目的は利権ではなく「現王家に打撃を与える事」そのものにある。

彼らの娘――手塩にかけて育て、王の側室に選ばれた自慢の娘を若くして殺された恨み。それを王家への反逆によって少しでも晴らせればそれでいいのである。

夫妻にとっては孫にあたるオーレリアは計画に快く賛同してくれた。当然だ。彼女にとっては産みの母に関する話であるし、その母が死んだ原因はオーレリアにもあるのだから。

「あれは身体の弱い子だったのだ」

「王家、あるいは高位貴族に召し上げられるよう、少々無理をさせましたからね」

娘には幼少期から様々な投薬を行っていた。見目を整えるためや重い病気にかからないようにするため、そして何と言っても魔力を高めるために、だ。

娘も一時期は嫌がっていたが「立派な母親になるため」と言い聞かせたら従順に

なった。そうして親子揃って励んだ成果が側室入りだった。親子揃って心から喜んだ。これで努力が報われたのだ、と。

　にもかかわらず、王家はあの子に無理をさせた。

　王族が目をつけるだけの容姿と魔力は確保できていたはず。それなのに母体としての更なる価値を求めて古臭い方法にまで手を出した。身体の弱いあの子にそんな事をさせれば寿命が縮まる事などわかり切っていたはずなのに、だ。

（許せるわけがない）

　結果的に娘はオーレリアという天才を産み、身をもってその才能を開花させた。だからと言って王族の横暴が許されるわけがない。堪えきれず直談判に出向いた事もあったが、そこで告げられたのはあの子の死について他言無用とする、という命令だった。

　加えて、オーレリアの王位継承権はく奪。

　娘が唯一残した成果。子供世代の中でも頭一つ分以上飛びぬけて優秀なはずの子を後継者から外すという選択。それは夫妻にとって愚行としか言いようがなかった。

だから、

「王家は滅びなければならない」

「ええ。現陛下には無念と後悔のうちに死んでもらわなくてはなりません」

代わって玉座につくのはオーレリアがいいだろう。

過ちによって滅んだ王族を、その過ちの犠牲者が継ぐ。その夢のような光景が見られたのならもう思い残す事はない。女王の血縁となって思う存分権力を振るうなどとくだらない事はしない。息子世代がそうしたいと言うのなら勝手にそうすればいい。

（息子は少々、頭が固いからな）

次期伯爵であるフレデリクは幼少期から姉に対して人一倍の想いを抱いていた。恋愛感情ではなかっただろうが、夫妻による愛ゆえの投薬に「可哀そうだ」とたびたび意見していた。

娘が死んでからも夫妻を責めるような言動を繰り返していたので、今回の作戦についてはほぼ何も伝えていない。幸い、家の中を含めたある程度の差配は妻のミレーヌが握っており、彼女は現当主である伯爵に従順であったため、資金協力や私

兵の黙認などの手伝いをさせた。
　宰相の娘にして第三王子の婚約者、リディアーヌ・シルヴェストルの勧誘もオーレリアとミレーヌが主導していたが、そちらは残念ながら失敗に終わってしまった。感情的で派手好きな小娘かと思えば意外と正義感が強かったらしく、パーティーに紛れ込んでまで何かを企んでいるらしい。
　だが、好都合だ。
　何の苦労もなく類稀な美貌と高い魔力を持ち、現国王でさえその美しさに見惚れた女――伯爵家にとっては目の上のたんこぶとしか言いようのなかったアデライドの娘。王家に味方する宰相の子でもあり、更には忌まわしい災禍の種まで抱えるあの娘も一緒に死んでしまえばいい。
　どうせ使用人に殺されかけた死にぞこないだ。ここで死んだところで何の問題もなかろう。
　と。
「旦那様。失礼いたします」
　執事が入室してきて緊急の用件を告げる。

「学園に対し何者かによる襲撃があったようです。詳細の確認が取れるまであまり動かれませんよう」

「ああ、わかった。引き続き情報収集と警戒にあたれ」

伯爵はついでに今日の執務を終了する事を告げ、執事を退室させた。夫人が微笑み、酒とグラスを用意してくれる。

「少し気が早いですが、よろしいでしょう？」

「そうだな」

今日のために用意しておいた上等な葡萄酒を開け、二人で乾杯する。

そうして、ゆっくりと味わうように飲んだ一杯目が空になる頃、その報が届いた。

「学園への襲撃者は騎士団の尽力により無事鎮圧。生徒およびパーティーの参加者に負傷者は多数。しかし、死者は今のところ確認できていないとの事です」

「何だと!?」

思わず立ち上がって真偽を確認すると、執事は目を白黒させながら首を縦に振った。彼からしたら何が気に食わなかったのかわからないだろうが、伯爵にとっては到底看過できない話だった。

数十名の戦闘技能者を送り込み、毒をはじめとした仕込みを行い、《漆黒の魔女》が暴れてなお一人の死者も出せない？　そんな事があるというのか？

「……馬鹿な」

よろよろと椅子に座り込めば、夫人が心配するように寄り添ってくれる。

まさか、失敗するとは。失敗した時のための備えはしてあったとはいえ、心の中ではそうならないと信じていた。こんな事なら私兵には国王の暗殺を命じれば良かったか、いや。

首を振り、ため息を吐く。そこで伯爵は執務室に向かってくる複数の足音を聞いた。それに交じってがちゃがちゃという音。武装している者の接近に反射的に立ち上がり、傍に置いていた剣を取る。

「父上、このような日に酒ですか？」

「フレデリク」

屋敷の警備を任せている「表の」私兵達。彼らに守られるようにして現れたのは不肖の息子だった。まるで罪人を糾弾するかのような視線を向けてくる彼を見て悟った。

「裏切るつもりか、フレデリク」
「そもそも協力した覚えがありません。せめて大人しく観念してください、父上、母上」
「何を観念しろと言うのか。伯爵を糾弾する以上、証拠はあるのだろうな」
「当然です。メイド達の証言を元に作成した使用人の勤務記録二か月分。使途不明金の存在を証明する書類。屋敷内および領地内の薬草管理状況とその不備の抜粋。不審な行動を取る使用人の追跡記録。ミレーヌが集めてくれました」
「馬鹿な、ミレーヌだと!?」
協力的だったはずのミレーヌまで裏切っていたとは。いや、そもそも味方のフリをしていただけなのか？　決定的な証拠ではないものの積み重ねれば十分な効力を持つ。それでも、これから集め始めるのであればいくらでも誤魔化しようがあったが二か月も前からではどうしようもない。
「おのれ、夫婦揃って裏切りおって！」
「フレデリク、この親不孝者！」
半狂乱になった夫人が嵐の魔法を発動させれば、フレデリクは慌てる事なく防御

魔法を用いて自分と兵士達を守った。こうなると伯爵も自分達を守らざるを得ない。嵐が去った後には荒れた部屋と無事な人間達が残る。

伯爵は剣を抜き、割れた窓へと身を躍らせる。

「あなた！」

「時間を稼げ！　こうなれば私自ら国王を！」

執務室は二階だったが、風の魔法を用いて無事に着地。このまま身体強化と風による補助で王城まで向かおうと考えた時、まるで伯爵の行動を読んでいたかのように兵士の別動隊が一人の貴婦人を伴って伯爵を囲んだ。

「ミレーヌ。フレデリクの嫁として選んでやった恩を忘れたか」

「あら、お義父様。恩を感じているからこそ、素直に身を差し出す機会を与えて差し上げているのですけれど」

頭上に槍を翳され、逃げ道を断たれる。伯爵は歯噛みしながら最後の足掻きを試みるが、背後に魔法使い（ミレーヌ）が控えている以上、複数人の平民の兵は十分な力を発揮して伯爵を取り押さえた。

両手両足を拘束、目隠しと猿轡をされて地面に押し倒される。土の味と匂いを感

じながら、伯爵は号泣した。

夫妻は監視付きの状態で身動きさえ取れないまま、窓の無い部屋で夜を明かした、翌日にはフレデリク・ミレーヌの要請でやってきた騎士団により正式に拘束。

取り調べは連日にわたって続いた。

当然、黙秘を続けたものの、騎士団の捜査は思った以上に優秀で、最終的には純血派への協力までも白日の下に晒されることとなった。

――求刑は夫婦揃っての死刑。

刑が告げられた直後、伯爵の上げた怨嗟の声は牢内に響き渡った。

「これで終わると思うなよ！　貴様らの横暴には必ずや天罰が下る！　必ずだ！」

彼らの娘が自ら望んで忌まわしい肉体改造を行ったのだという事を、孫がその事を重荷にして生きてきた事を、夫妻は結局、最期まで知らなかった。

パーティーの後始末

「牢屋に入れられた感想はいかがですか、師匠？」

王城には複数の地下牢が存在している。

囚人同士の情報共有・大脱走を防止する他、あまり公にしたくない罪人を隠したり、身分によって待遇に差をつける目的からだ。

オーレリア・グラニエが収監されたのは最上級、貴人を幽閉するための牢だった。牢と言いつつも部屋は広く、中にはふかふかのベッドに高級な椅子、暇つぶし用の本棚、魔道具の清潔な水洗トイレに水の湧くポット、熱を生み出して部屋を暖める暖房器具などが用意されている。壁の一面が二重の鉄格子になっていることを除けば割と安らかに暮らせそうな空間である。

話によると食事も三度、シェフの手による美味しい料理が出されているらしい。

移動経路がわからないよう目隠しの上でここまで連れてこられた俺は、父や副団長と共に、捕らわれの身となった師と対面した。

「思ったより悪くないわ。これで魔道具の製作ができれば何も文句はないのだけれ

ど」

漆黒の髪にも艶が残っているし、瞳にも昏い感情は見られない。むしろ、どこか憑き物が落ちたような晴れやかな表情で彼女は椅子に腰かけていた。

腕には俺の渡した魔法封じの腕輪が嵌まったまま。

簡素ながら仕立てのいいドレスもあまり汚れている様子はない。ジゼルの時とは色んな意味で大違いである。

とはいえ、それも当然。

オーレリアがここに捕らえられたのは色々な思惑が重なった結果であり、ジゼルのように「はいアウトー」というわかりやすい判定によるものではないのだ。

「仮にも罪人なのだからもう少ししおらしくしたらどうだ、オーレリア・グラニエ」

父は苦虫を噛み潰したような顔。宰相としても俺の親としても一人の人間としても言いたいことはたくさんある、だろう。

これに《漆黒の魔女》は肩を竦めて、

「今更、自分を良く見せようとは思わないわ。……それで？　宰相様に副団長様、それに我が弟子まで連れだって何の用かしら」

「まだ弟子と呼んでくださるんですね」
「貴女が先に師匠と呼んだのでしょう？」
真っすぐに見つめ返されて俺は思わず苦笑する。
「そうですね。……まあ、これからも教えを請えるかはわかりませんが」
「私としては金輪際縁を切って欲しいところだな。貴様はあまりにも危険すぎる」
「まあ、そうでしょうね。今の私は罪人なわけだし」
そう。
オーレリアが捕らえられたのは学園襲撃の件で罪に問われたからだ。
あれから三日。
俺が筋肉痛で寝込んでいる間も大人たちは色々大変だったらしい。
捕縛者への取り調べは未だ継続中。敵の多くは一種の麻薬――幻覚剤のようなものを服用しており、支離滅裂な証言を繰り返している。正気とみられる一部の者たちに至っては隙あらば自害しようとする有様で、尋問は難航中だ。
全員が平民であったことから国は暫定的に彼らを純血派と判断。
敵の持っていた魔道具が新型魔石を内蔵しており、かつて俺が証言した内容と一

致したことからオーレリアは「危険思想集団への魔道具の提供」の容疑をかけられた。

テロリストに武器を横流しした、と言えばわかりやすいだろう。

ある程度敵の計画や目的を知っていた可能性もあるのだから捕縛は当然である。

「一方で、オーレリア様の行動が敵の一派とは一線を画していたのも事実です」

と、これは副団長。

事件の際、オーレリアが何もしていなかったことは俺も証言した。強いて言えば俺の魔道具が二つほど壊れたが、魔法封じの魔道具なんて付けられたら壊したくなるのは当然。

何かする前に気絶したのだから何もできるはずがないわけだが、たとえそうでも襲撃時に何もしていないのは事実だ。

また、敵に提供された魔道具の性能も引っかかる。

敵の放った火球は会場のシャンデリアを落とし混乱を助長したものの、威力としては正直大したことがなかった。あのくらいなら一年前の俺でもほいほい撃てただろうし、落ち着いてさえいればアンナ自身の防御魔法でも防ぎきれる。

防御用の魔道具も男爵家出身かつ荒事が苦手なアンナが相手でなければ完全防御とはいかない出来。貴族が常時発揮している魔法防御程度の効果でしかない。

『要するに、わざと質の低い魔道具を渡して事件を起こさせたようにも見えるのよね』

もちろん、新型故にあれが限界だった可能性もある。魔道具がなければ被害はもっと少なかっただろうし、事件が起きるよう誘導したのであればテロを手引きしたも同然だ。

襲撃を受けた学園卒業生やその関係者の中にはオーレリアの死刑を求める声もある。

同時に、準備を整えて待ち構えていたからこそ数十名もの捕縛者を出せたのだ、というのも疑いようのない事実。結局あの日、王城やうちの屋敷も含め、パーティー会場以外に襲われた場所はなかった。俺たちが戦ったのが主力と考えれば純血派の実行部隊は数を大きく減らしたはずだ。

最初の襲撃が失敗に終わったというのも大きい。

平民の集団が卒業パーティーを襲った話は既に公表済み。

国は王都の平民街、および周辺の街を含めた大規模な捜索も検討している。今後、摘発者はさらに増えるだろう。

「師匠、知っていることを話してください。彼らを裏切ってまで被害を抑えてくださったのでしょう？」

懇願するように問いかけると、オーレリアは目を細めてふっと笑った。

「そんなに大層な話じゃないわ。……ただ、面倒な弟子に振り回されただけ」

俺は事件の対処における大きな功労者として扱われている。

逃げずに敵をぶっ飛ばしまくったことや筋肉痛で倒れたことは怒られたが、それはそれとして複数人を無力化したこと、アンナたちを含む大勢を守ったことはしっかり評価されたのだ。

残念ながら全員を捕らえられたわけではない――例えば、ノエルが戦っていたあのメイドは激戦の末に逃走してしまったらしいが、バルト家の使用人があの場にいたことも伝えた。また、戦いの後も負傷者を癒したり怯える貴族を宥めたりと協力した。

後日、国からの褒賞も貰えるらしい。

そんな中、俺がここへ来たのはオーレリアを説得するため。

素直に捕まってくれたはいいものの、師は何を聞かれてもろくに答えず「リディアーヌを連れてきなさい」の一点張りだったらしい。それならまあ、俺の言葉なら素直に聞くかも、ということで呼ばれたのだ。

まあ、どう説得するかのプランなんて全くなかったのだが……どうやら役に立てたようだ。

「私が平民に流した魔道具には全て場所を追跡するための仕掛けが施されているわ」

「え。なんですかそれ、どうやって……？」

「頭を使いなさい。極小の魔石を内部に埋め込んだだけよ。私の魔力に反応して応答する魔法を組み込んだ上でね」

魔道具側が反応するように細工しておけば、魔力を広範囲に巡らせてやるだけで範囲内の魔道具を感知できる。『簡単に言うけど超高等技術よね、それ。並外れた魔力量と操作技術がないと成立しないでしょうし』。まさにオーレリア・グラニエにしかできない細工だ。

しかし、この話は朗報。

「じゃあ、師匠？」
「ええ。望むなら捜査に協力してもいいわ。……ただし、私をここから解放する必要があるけれど、ね」
これによってオーレリア・グラニエの処遇は大きく変わることになった。

◆　◆　◆

「オーレリア。立派な魔法使いになって、みんなをあっと驚かせるような魔法をたくさん発明してね」
オーレリアは幼い頃から母の期待と愛情を受けて育った。
立派な魔法使いになる。
その未来を嫌だと思ったことはなかった。母からことあるごとに「貴女には魔法の才能がある」と言われていたし、母のことは大好きだったからだ。
何より、時折母が使って見せてくれる魔法がとても綺麗で、自分もこんな風に魔法を使ってみたいと心から憧れていた。

「私の魔法なんて大したことないのだけれど」
「じゃあ、私が立派な魔法使いになって、お母様にもっと凄い魔法を見せてあげる！」
「あら、それは楽しみね」
そんな時間がずっと続くと思っていた。
幸せな時間が唐突に崩れたのは、母の命がもう長くないのだと偶然耳にしてしまった時だ。
もともと母は身体が丈夫な方ではなかった。頻繁に体調を崩しては寝込んでおり、一緒に遊べる時間は多くなかった。それでもベッドの傍で話をしたり頭を撫でてもらったりしていたので寂しくはなかった。
なのに。
「お母様は重いご病気なのですか？」
「……ええ。ごめんなさい、貴女が学園を卒業するまではとてももちそうにないの」
本人に直接問いただし、肯定された時は目の前が真っ暗になりそうだった。母に魔法を見せる。それを夢見て生きてきたのに、その夢は一生叶わないと言われてし

まったのだ。これから何を目指せばいいのかわからなくなりそうだった。

だから、オーレリアは夢を前倒しすることにした。

「なら、私が魔法でお母様を治します」

宣言した時、母は目を丸くした。それからどこか切なそうな笑顔を浮かべて「ありがとう」と言った。

母の悲しい顔は見たくない。だから、オーレリアはその日から母に合う度に魔法の真似事をするようになった。

魔法の基礎理論は勉強済みだった。母の元気になった姿をイメージすることにかけては誰にも負けない。だから、魔力の感知なんて全くできていなかったが、そんなことは気にせず何度も念じた。

悠長に成長を待っていたら間に合わなかったから、万に一つの奇跡に賭けた。

――そしてある日、奇跡は起こった。

手のひらから光が溢れ、母へと吸い込まれていく。それはとても幻想的な光景で、自分の中から何かの力が送り込まれていく感覚に「これならきっと治せる」と胸が躍った。

だからオーレリアは初めての感覚に全く逆らうことなく、むしろ力を大きく注ぎ込んだ。並の王族を遥かに上回る大量の魔力を、余すことなく。

「……あ」

気づいた時には手遅れだった。

魔法の開花に驚いていた母は丸く見開いていた瞳をさらに大きく見開くと激しく咳き込んだ。口からはべっとりと大量の血が噴き出し、様子を見守っていたメイドが悲鳴と共に人を呼ぶ。驚愕と共に集中が途切れ、魔法が止む。

治すためにやっていたのに。

必死に縋りつき母を呼ぶ。すると、母の手がオーレリアの黒い髪を優しく撫でた。

「ありがとう、オーレリア。よくできたわね」

掠れた声。息も荒い。直感的に「もう駄目なのだ」と悟った。涙が溢れ、後悔が胸を揺さぶる。

しかし、母は最期まで笑顔を作って、

「あなたの素敵な魔法が見られて良かった。これからもきっと、勉強を続けてね」

それから半日と経たないうちにオーレリアの母はこの世を去った。

奇しくも公務により外出中だった国王は側室の死に目に立ち会うことはなかった。しかし、妻の亡骸の前に跪き、冷たくなった手を取り涙を流す父の、君主の姿は目に焼き付いた。

ああ、母は愛されていたのだ。

最後の救いのような感情が胸に生まれる。しかしそれはその後、オーレリアが置かれた境遇のせいで暗い感情へと変わってしまった。

母殺しの王女という汚名。故意に殺したのではないかという陰口、母に関する多種多様な悪口、この国において特異な黒髪黒目に対する「気味が悪い」という心ない声。

国王はこの件についてオーレリアの王位継承権はく奪という処分を決定。それまで名乗っていた姓を奪われ、代わりに与えられたのは宮廷魔法長の持つグラニエ姓。どうせ姓が変わるのなら母の旧姓であるバルトを名乗りたいと申し出たが承認されることはなかった。

《漆黒の魔女》。

魔法によって母を殺した形ばかりの王女は華やかな将来も、輝かしい栄光も奪わ

れた。彼女に残っているのは魔法の才能と、母からの遺言だけだった。

だから、オーレリアは魔法以外のあらゆるものを捨てた。

食事も、勉強も、睡眠でさえも魔法を極めるためのものと位置づけ、一時も上達を諦めなかった。他の人間の何倍もの――否、桁違いの努力をし、あっという間に国内最高峰の魔法の使い手へと上り詰めた。宮廷魔法士への内定を受け、その才能を称賛する者も増えてきたが、それでもなお足りない。

過去に類を見ない実績を打ち立てなければ母の願いには、母を殺してしまった罪には届かない。

ありとあらゆる方法で上を目指した。人との関わりは最小限に抑え、自分にとって有益なものだけに。成長するごとに顕著となった美貌を求めて声をかけてくる男もいたが、魔法の役に立たないので相手にはしなかった。

弟子を取るなど論外。

何人もの志願者に問いを投げかけ適性を見たが、面白いと思える者は一人もいなかった。ならば弟子を取る意味などない。教育によって無駄になる時間以上の利が得られなければただの無駄だ。

きっと、この世には自分の理解者などいないだろう。

純粋な願いはいつしか呪いとなり、真っすぐな意志は先鋭化した。そうして学園に入学し、周りのレベルの低さにうんざりしながら一年半ほどの時を過ごした時、その少女の名が唐突に浮かび上がってきた。

リディアーヌ・シルヴェストル。

黒く暗いオーレリアの容姿とは対照的な、そこにいるだけで周囲を照らすような紅の美貌。たった八歳にしてオーレリアを「面白い」と思わせたその少女は、気づけば弟子としてオーレリアの世話を焼き、軽口を叩き合うようになっていた。

リディアーヌは自重しない。何も捨てない。弟の婚約者（リオネル）としての地位を守りながら不遜なまでの態度を貫き、多方面に喧嘩を売りながら好みの人物を拾い上げる。オーレリアとは何もかもが違う、なのに魔法に関しては妙に意見が合う。こんな相手は初めだった。

だからなのだろう。

人付き合いに関して大雑把で、喧嘩となれば暴力を辞さないくせに優しすぎるこの少女が、自分のやっている本当の事を知ったらどうなるのか興味を持ってしまっ

た。

それさえなければきっと、あのまま自分の道を進めていたはずなのに。

オーレリアは「このままこの子と一緒に遊んでいたい」と分不相応な願いを抱いてしまったのだ。

魔女への罰と新しい関係

「オーレリアに対する此度の罰を言い渡す」

王城、謁見の間。

王妃、宰相、リオネルを含む王族たち、その他貴族が見守る中、オーレリアは黒のドレスを纏い、恭しく跪き頭を垂れたままで自らの父――国王の決定を受け入れた。

俺は余所行きのドレスを纏い、師のやや後方に跪きながらそれを見ていた。

「まず、グラニエ宮廷魔法士長による後見の終了。宮廷魔法士への内定の取り消し。大金貨千枚の罰金。加えて向こう三年間、騎士団の捜査への無償協力および王家からの魔道具製作依頼に可能な限り尽力する事。以上である」

「寛大なるご処置、心より感謝致します。全ての項目について異論はございません。ご迷惑をおかけした皆様に対して心よりお詫び申し上げると共に、誠心誠意、治安維持のために尽くさせていただく所存です」

読み上げられた罪状については一部からざわめきが上がったものの、王の決定に

異を唱える者はいなかった。

この決定によってオーレリアはより一層の苦境に立たされる。

宮廷魔法士長という強い後ろ盾の喪失。大金貨千枚という高額の罰金（大金貨一枚はざっくり言って十万円の価値。つまり日本円換算で一億）。さらに三年もこき使われる上、今後の収入元になるはずだった宮廷魔法士の職には就くことができない。

並の貴族なら――というか、公爵令嬢である俺でも両親の助けが借りられなかったらほぼ詰む。そして当然、王家はこの罰金を肩代わりしない。

加えて、オーレリアにとって母方の実家であるバルト家は純血派に協力したとして処分が決定している。

俺たちが戦ったあのメイド以外にもバルト家の使用人が交ざっていたこと、敵の使用していた薬物の多くを伯爵家が提供したことが判明したせいだ。

現伯爵と伯爵夫人（オーレリアの祖父母）はこれに関して事実無根だと主張したものの、息子フレデリクと妻ミレーヌの提出した証拠により死刑が確定。新たに当主となる息子夫妻にも罰金が科せられている。とても経済的に頼れる状態ではな

い。

もはや死刑宣告にも等しいが、それでも「反逆者を裏で助けていた人間」の罪としては軽い。

俺一人を殺しかけただけのジゼルでさえ死刑確定だったのだ。本来なら殺されていて当然。

減刑が行われた理由は罪状発表の前に行われたやりとりにある。

国王は先の卒業記念パーティー襲撃の経緯と概要を説明する中でこう宣言したのだ。

「オーレリアにはかねてより極秘の命令を下していた。それは囮としてかの犯罪集団へと接触し、その作戦を失敗へと誘導する事である」

オーレリアはスパイとして動いていたということにしたのである。

魔道具の提供は敵に取り入るため。

敵の作戦予定をほぼ確定できたのも内部からの情報操作のお陰。

国の味方だったからこそ敵に渡った魔道具は威力が抑えられていたのだ、ということになれば話は色々と変わってくる。

貴族の死者が出なかったからこそできる後付けだ。

「事件の犯人は純血派を名乗る過激な思想集団である。なかなか尻尾を掴むことができなかった奴らに一矢報いた上、一網打尽にするための楔まで打ち込めたのはひとえにオーレリアの尽力あってこそのもの。……とはいえ、魔道具の提供および敵の扇動において失策があったのも事実。此度の騒動は王家にも責任の一端がある故、可能な限り寛大な処置とする」

新型魔道具によって被害は増えたし、演技が過剰すぎて騎士団まで混乱させてしまった。もう少し上手く立ち回れたはずだという点。元はと言えば王家が命じた仕事だという点も踏まえ、罪と功績を差し引きした結果が先の罰なのである。

命は助かったとはいえ十分にきつい罰。

オーレリア許すまじ、と燃えていた貴族たちもこうなるとあまり強く出られない。

「オーレリアはこれまでグラニエ姓を名乗っていたものの、籍は王族のままであった。しかし、今回の失態を鑑み、王家から正式に追放とする。新しい身元引受人としては幸いにもルフォール侯爵家が名乗り出てくれた」

俺の隣で跪いていた銀髪の女性が頭を下げる。ルフォール侯爵夫人――ヴァイオ

レットの母親は娘に似てどこか儚げな印象のある美女だった。
「ルフォール侯爵家」
「中立のルフォール――ここぞとばかりに王家に貢献するつもりか」
「果たして本当に中立を維持するつもりなのでしょうか。次女のヴァイオレット様はシルヴェストル公爵家との結びつきを強めている噂ですし……」
「シルヴェストル公爵家。第三王子派か」
貴族たちのひそひそ声。普通なら聞こえない声量なのだろうが、魔法で聴覚強化中の俺にははっきりと聞き取れた。
話されている内容は割と初耳である。ヴァイオレットとは例のお茶会で会ったし、その後麦茶の作り方を教えに来てもらい仲良くなったが、家というより俺個人との交流に過ぎない。
婚約者である俺が第三王子派に属するのは仕方ないとして、うちの両親やアラン、シャルロットは別にリオネル推しというわけではない。セレスティーヌあたりに聞いたら「王家にお仕えしているのであって王族の勢力争いに強く関わるつもりはない」とか答えるだろう。

「正式な書面については追って締結する事になるが、今この時より公的な扱いはオーレリア・グラニエではなくオーレリア・ルフォールとする」
「陛下の御心のままに」
今まではまがりなりにも王族であったオーレリアは貴族に格下げ、ルフォール侯爵家の養女として生きることになる。
継承権はなかったんだし大差ないのでは？　という話もあるが、何かの拍子に継承権が返還されることはなくなるし、オーレリアの子も王族としては扱われなくなる。継承争いに関する発言権も低下するのでパワーバランスへの影響は意外と大きいかもしれない。
「さて。それでは他の功労者にも褒賞を与えるとしよう」
副団長を複数人が一人ずつ名前を呼ばれ、望みの褒美を答えていく。その中には俺も含まれていた。
『オーレリアさまへの減刑、っていうのも考えなくはなかったんだけど』
もしかすると読まれていたのか、嘆願するまでもなく命は助かったのでボツに。
ここで「《紅蓮の魔女》のあだ名を禁止してください」とか頼んだら受理しても

らえるんだろうか、とアホなことを考えつつ、俺は無難な望みを口にした。
「儀礼用の装飾剣を一振り用立てていただけないでしょうか。わたしが成長した時のために成人用の寸法で、刃は入っていなくて構いませんが、刀身には十分な耐久性を与え頂きたく存じます」
「ほう。宝石でも現金でもなく剣を強請るか。さすが、殺し屋を相手に切り結ぼうとするお転婆娘よ。よかろう。とっておきの剣を贈る事を約束する」
「有難き幸せ」
高額過ぎたりはしないし儀礼用なら殺傷能力もないし、現金を要求するより茶目っ気があると思ったのだが、令嬢の希望する物ではないせいか思った以上の反響だった。
後でリオネルからも「父上から剣を貰うなんてずるいぞ」と言われる始末で、仕方なく来年の誕生日プレゼントは剣にすると約束する羽目に。
「というわけで、リディアーヌ様。オーレリア様――いえ、我が娘オーレリアを公

爵家で雇用していただけないでしょうか」

謁見の終了から一、二時間後。

謁見の間を後にしてからリオネルの部屋に寄ったり、父から「剣術はできるだけ控えるように」と小言をもらったりして時間を潰した後、両親と共に移動した応接間にはルフォール侯爵夫人とオーレリア――オーレリア・ルフォールの姿があった。

俺たちが時間を潰している間に養子縁組の契約は無事交わされたそうで、これでオーレリアは名実ともに侯爵令嬢となった。

「これからはわたしの方が立場が上ですね、師匠？」

場を和ませようと悪戯っぽく微笑みかけると、師は特に動揺した様子もなく笑顔で応じて、

「ええ。目下の者として失礼の無いよう努めさせていただきます。どうか今後ともよろしくお願い致しますね、リディアーヌ様？」

「……申し訳ありません。オーレリアさまに敬語を使われても違和感が大きいので、今まで通りに話していただけないでしょうか」

「あら、残念」

やっぱり挑発の類でこの人に勝つのは無理な気がする。ともあれ、師がこれまでと変わらないノリであることにほっと安堵したところで、オーレリアの保護者となったルフォール侯爵夫人が切り出してきたのがさっきの台詞である。

意外な申し出に俺は一瞬硬直して、

「師匠。我が家に借金返済を手伝わせるおつもりですか？」

ジト目で睨めば、黒髪黒目の変人美女はふんと笑った。

「失礼な事を言わないでくれるかしら？　大金貨一千枚ならもう払ったわ」

「どうして個人でそんなお金をぽんと動かせるんですか」

「今まで魔道具製作の依頼を飽きるほど受けていたからに決まっているでしょう」

あらためて魔道具の高さを実感させられる話だった。まあ、さすがに彼女の財布も空に近いはずだが、タダ働きなのは「騎士団への捜査協力」だけである。王家からの魔道具発注についてはちゃんと代金が支払われるはずなので、案外生活には困らないかもしれない。

と、ここで父が咳払い。

話を引き戻した宰相閣下は侯爵夫人を見据えて尋ねた。

「雇用、とは具体的にどのような形式をご希望ですか？」
「雇用形態はそちらの都合に沿っていただいて構いません。給金についても常識の範囲内であれば贅沢は申しません。……強いて一つ希望を申し上げるとすれば、住み込みで雇用していただきたい、という程度です」
「ルフォール侯爵家はオーレリア様の監督責任を放棄なさると？」
と、これはセレスティーヌ。侯爵夫人はおっとりと微笑んでこれを否定する。
「いいえ。オーレリアが今後問題を起こした場合、当家が責任を負うのは当然です。我々がお願いしたいのは彼女の監督ではなく、精神的な支えとなっていただくこと」
「支え」
「ええ」
困ったものだ、というように頬へ手を置く侯爵夫人。
「実は、事前に話し合った際、オーレリアから心境を告白されまして」
「なにを言ったのですか、師匠？」
「別に大したことじゃないわ。私はリディアーヌ・シルヴェストル以外の人間を信

用しない、と言っただけよ」
ああ、なるほど。そういうことか。
人嫌いのオーレリアらしい話だ。唯一信用された俺は物凄く大変だが……って!?
「わたしですか……!?」
「他に誰がいるのかしら」
どうやらこれは冗談ではないらしい。くすりと笑って見せたオーレリアだが、その瞳の奥にこちらをからかう様子は見られない。
綺麗な漆黒の瞳に目を奪われる。
「はっきり言うわ。私がこうなったのはリディアーヌ、貴女がいたからよ。そうでなければ私はパーティー会場を火の海に変えていたでしょう」
「実際、あなたなら可能でしょうが……はっきり言い過ぎではないでしょうか。わたしはそこまで大層なことをしていませんよ」
「客観的に見てどうかなんて関係ないでしょう？　事実、貴女の言葉が私の心を動かした。それだけの話」
「それは……嬉しいお話ですね」

頬が熱い。愛の告白でもされたみたいに鼓動が早くなっている。正直、俺は自分の言葉でオーレリアを動かせたとは思っていなかった。けれど、俺の言ったことはきちんと伝わっていたらしい。

伝わったからこそ、こうしてまた話ができる。

《紅蓮の魔女》は師の役に立てた。俺は胸が熱くなるのを感じながら深く息を吐いて、

「新型魔道具の件も極力、被害を減らしてくださったのでしょう？」

「まあ、ね。機能こそ画期的であれ、性能が伴っていないのでは積極的に利用しようとする者は少なくなる。ましてお披露目に失敗したとなれば悪い印象は拭えないでしょう」

新型魔道具は欠陥品、という評価がしばらくは残る。

当然、中には有用性を見出して研究する者もいるだろうが、現物の何割かは既に王家が回収しているし、もしサンプルを手に入れられたとしてもリバースエンジニアリングできるのは効果の低い未完成品だけ。

結局、実用に足る形で魔道具を完成させられるのは一部の秀才・天才ということ

になる。

新型は製作期間・製作費共に従来のものを上回るため、量産はさらに難しい。王家が対策を打つだけの時間は十分に取ることができるだろう。

そして、王家は新型魔道具の開発者へ恩を着せると共に、三年間の優先的依頼権を獲得している。

新型魔道具の開発競争において我が国は圧倒的な有利にあるということだ。この状況を作り出すためにも国はオーレリアを死刑にするわけにはいかなかった。

表向きは死刑にした上で一生飼い殺し、とかにしなかったのは反乱防止とせめてもの親心だろう。

「貴女としては不服でしょうけど」

「……まあ、仕方ありません。いずれ誰かが開発したでしょうし、最悪の結果でないだけ良しとします」

新型魔道具が広まるというのなら仕方ない。

今後、魔道具による戦争が起こるであろう世界。戦火の拡大が約束される中で、俺は敢えて「個の力」を磨き続けよう。

道具がなければ魔法も使えないような雑兵も、魔力を大量に用意してようやく起動できる魔道兵器も怖くなどない。真に恐ろしいのは突出した才能を持つ人間そのものだと身をもって広めてやる。無駄な争いに興じれば《紅蓮の魔女》に目をつけられる。そんな噂が流れるようになれば争いが起こるのは抑えられるだろう。

ここで、オーレリアはふっと笑って、歳相応の柔らかな表情になる。

「私と話が合うのは貴女くらいなのよ、リディアーヌ。だから、貴女の傍にいる事を許してくれないかしら？　貴女が望むなら子守歌でも夜伽でも何でもするわ」

「師匠」

例とした挙げた内容がふざけている感ありありだが、俺の傍にいたいという気持ち自体に嘘はなさそうだ。

俺に近づくだけなら他にいくらでも方法があったはずだし、見た目穏やかそうな貴族女性は狡猾、というセレスティーヌから学んだ法則に基づくとルフォール侯爵夫人はなかなかの食わせ物と思われる。

「夜伽も子守歌もいりませんが、わかりました」

俺が苦笑しながら言うと、両親がそれぞれに反応する。

「……リディアーヌが望むのなら仕方あるまい。だが、雇用契約を結ぶ以上は楽をさせるつもりはないぞ」

「そうですね。向こう三年は騎士団への協力もあるようですし、忙しく働いていただく事になるでしょう。職務としてはリディアーヌへの魔法教師、および専属メイド見習い、といったところでしょうか」

元王族がメイドとは豪快な話もあったものである。自分の着替えですら面倒臭がる人間が本当にそれでいいのかと思ってしまうが、当の本人は嬉しそうに頷いてみせる。

「いいわ。メイドの役目、しっかりと務めてあげる」

こうして、俺にとって二人目の専属メイドとしてオーレリア・ルフォールが我が家へとやってくることになった。

どうしてこうなったのかはわからないが、悪くない結果だ。

「これからはもう少し、教師の方も熱心にお願いしますね」

「主人の命令とあらば仕方ないわね。善処してあげる」

師との馬鹿な会話を繰り広げながら、俺は願う。彼女が今後、悪いことに手を染

めないことを。この世界から悪役令嬢なんていう存在が一人でも減ることを。
そのためには、まだまだカウンター悪役令嬢を続ける必要がありそうだ。

第二部完。
例によって閑話がいくつか続きます。
その後は、書き溜めがさすがに減ってきたので数日置いてから第三部に移りたいと思います。
第三部は兄と妹の出番を増やしつつ、もう少しのんびりした話になる予定。
そろそろ登場人物一覧も用意した方が良い気がしてきました。

【余談】
オーレリア・グラニエは「もしこの世界が乙女ゲー原作だった場合、原作ゲーム時空において黒幕として暗躍しているキャラ」という想定で設定しました。
原作ゲーム時空ではリディアーヌが記憶を思い出していないのでテロは成功し、

オーレリアは密かに暗躍するラスボス扱い。

リディアーヌはゲーム主人公をいじめる悪役令嬢として登場。アランですら妹の愚行を半ば諦めており、リオネルとはシャルロットが婚約しているというイメージです。

閑話

銀の妖精は麦茶と共にやってきた

「お招きありがとうございます、リディアーヌ様」

冬の初めへと差し掛かったある日、ヴァイオレット・ルフォールはメイドの他に家の料理人を一人連れて我が家へとやってきた。

白を基調とした長袖長スカートのドレスが清楚かつ神秘的な銀髪と見事に調和している。カーテシーも様になっており、侯爵令嬢というのは伊達ではないと教えてくれる。これで数か月とはいえ年下なのだから、俺もまだまだ頑張らなくてはならない。

「お忙しい中、わざわざお越しいただいて申し訳ありません。……ですが、正直なところ今日この日を待ちわびておりました」

何と言っても麦茶である。ウーロン茶相当の青茶も美味しいが、お茶の種類はい

くらあっても困らない。しかも麦茶なら自宅で作れるのだ。是非我が家の使用人にも作り方を覚えてもらい、麦茶を常備できるようにしたいところである。

歓喜の色を隠しきれない、というか隠しきる気がないままに言えば、ヴァイオレットはその瞳をかすかに揺らめかせながら控えめに微笑んだ。

「私もリディアーヌ様にまたお会いしたいと思っておりました」

ひょっとすると欲望丸出しすぎて呆れられたのだろうか。頭の回る貴族令嬢なら「よっぽど麦茶が飲みたかったのですね」とか言わない。本当に言いたいことを堪えて当たり障りのない言葉に切り替えられるとか、ヴァイオレットは俺より一枚も二枚も上手なのかもしれない。

『っていうか浮かれすぎじゃないの、わたし？』

そう言われても楽しいのだから仕方ない。ヴァイオレットはどうやらオーレリアおよび新型魔道具、純血派関係の話に関わっていない。気を張って情報収集しなくても問題ないし、何より麦茶である。

『いや、この子の見た目にもやられてるでしょ、絶対』

それに関してはないとは言えない。何しろヴァイオレットは絶世の美少女だ。

俺だって客観的な美貌では負けていないつもりだが、自慢である髪と瞳はいかにも気が強そうに見えるので見る人を選ぶ。その上、実際に気が強いと来ているのだから「可愛いけど女の子としてはちょっと……」となる。

義妹のシャルロットもいかにも貴族令嬢といった可憐な容姿に大人しそうな物腰とポイントが高いが、ヴァイオレットはそこに儚げで神秘的な雰囲気まで加わる。

前世で女にさんざんな目に遭わされてきた俺だが、だからといって同性愛に走るところまではいかなかった。可愛い女の子は大好きだし、対立することなくその姿を眺めている分には可愛い女の子というのは最強の生き物だ。

可愛いからこそ裏切られた時に辛いのだが。

「……それから、先日は『お願い』を聞いていただきありがとうございました」

距離を詰めて囁くように言えば、少女もまた声をひそめて応じてくれる。

「大した事ではありません。祖父へ一通手紙を書いただけですから」

実は、ヴァイオレットの祖父は学園の長を務めている。その祖父が可愛い孫娘から「卒業式に友人を呼んで欲しい」と頼まれたらどうなるか。さほど無理のない人選であれば応じてくれるだろう。つまりそういうことである。

俺たちは不思議そうにする使用人たちをよそに距離を戻して、
「では、リディアーヌ様。麦茶の作り方は使用人を通じてお伝えいたします」
「ありがとうございます。エマ、お客様を案内してくれるかしら？」
「かしこまりました。……では、こちらへどうぞ」
メイドが二人と料理人が一人、エマに案内されて厨房の方へと移動していく。
残ったのはヴァイオレットと、その専属であろう一人のメイドだ。
「終わるまで、わたしたちはのんびり待つといたしましょうか。ヴァイオレットさま？　わたしの部屋へご案内してもよろしいでしょうか？」
「ええ、もちろんです。よろしくお願いいたします」
ヴァイオレットを屋敷内へ招き入れると、玄関でセレスティーヌが待っていた。
「お久しぶりですね、ヴァイオレット様。この度はリディアーヌの我が儘に付き合わせてしまい、申し訳ありません」
「ご無沙汰しております、セレスティーヌ様。とんでもございません。私の方からお願いしたようなものですので、どうかお気遣いなく」
短い挨拶の後、養母はすぐに俺たちを見送ってくれた。

さすが、モレ伯爵夫妻のようにみっともないことはしない。本人が同席せずとも要件を満たせるようになっているのか。

今日も俺の傍にはアンナとエマがいる。専属であり一年以上の付き合いになるアンナならある程度は庇ってくれるだろうが、あくまで家に仕えているだけのエマは尋ねられれば一部始終を答えるだろう。

それはそれで構わない。

やましいことをする気はないし、エマならば報告に嘘や誇張を混ぜはしない。

「私の母とセレスティーヌ様は旧知の間柄で、時々一緒にお茶をしていらっしゃるのですよ」

「そうだったのですね。では、ヴァイオレットさまも養母と面識が？」

「はい。何度かお話をさせていただいた事がございます」

相変わらず広く入り組んでいる公爵家の廊下を歩きながら雑談に興じる。

ヴァイオレットは内装や調度に時折目をやりつつも姿勢を崩していない。これも、気にしていないわけではなく「さりげなく観察」されているはずだ。俺は人の家に行った時、割ときょろきょろ見てしまう。もちろん、仕草としては上品になる

よう心掛けているが。

「お話ですか。わたしの悪口を言っていたのではありませんか？」

「？　いいえ。セレスティーヌ様は『公爵家の名に恥じない立派な娘に育った』とリディアーヌ様を褒めていらっしゃいました」

『は？　なにそれ？　別の人の話じゃなくて？』

予想外すぎるフレーズに声まで出そうになった。

しかし、考えてみるとおかしくはない。身内なのだから対外的には褒める。敢えて貶めるのは褒め過ぎにならないようバランスを取ったり、実態とはズレた印象を与えたい時など限られた状況だけでいいのだ。

俺だって改心してからは結構頑張ってきた。それなのに「あの子はだめだ」とか外へ言いふらされたら『あっそう。じゃあ今度は能動的に反抗期へ突入しようかしら？』となる。

「厳しい養母が褒めてくださっているとは少々意外ですが、そうとわかればより一層精進しなくてはいけませんね」

俺の私室へ到着すると向かい合って席につく。

すぐにお茶の用意が行われ、湯気の立つ紅茶が供される。本日のお茶請けはチーズケーキ、皿へこんもり盛られた干しぶどう、一口サイズのポテトコロッケの三種類である。コロッケはまだ温かく、手を使わず食べられるようにピックが付属している。

いくら公爵家が裕福と言っても今回のおやつはかなり豪華だ。ケーキなんてホールで用意されていて「好きなだけ切り分けます」という態勢だった。こんなの絶対太るだろうと思いつつ八分の一くらいだけ皿へ載せてもらうと、ヴァイオレットも同じようにした。

「わたしはあまり太りたくないだけですので、お好きなだけ召し上がっていいのですよ？」

「ありがとうございます。私はあまり食が太くないもので、ケーキを食べすぎては他のお茶請けが食べられなくなってしまうのです」

「色々な物を少しずついただくのも楽しいですものね」

前世でもバイキングとかかなりテンションが上がった。幸いというか、あの手の食事形式はパーティーでよく採用されるため今世では出会う機会が多い。あまり食

べ過ぎるとドレスがきつくなったりするので注意が必要だが、今はまだコルセットでないだけマシ。

つくづくあの悪魔のアイテムだけは流行から排除したい。

メイドによる毒見を挟みつつ飲み物と食べ物へ口をつけて、ひと息。

「リディアーヌ様のお部屋は落ち着いた雰囲気なのですね」

室内を見渡したヴァイオレットが思わず、といった様子で言葉をこぼした。

「わたしの生母――アデライドが設えてくだったものなのです。セレスティーヌさまの好みからは外れていますので不思議に思えるかもしれません」

「アデライド様は赤と黒を好んでいらしたと伺ったことがあります」

「ええ」

微笑んで頷きながら、不思議な人だったとあらためて思う。

存命だった頃は俺も小さかったのであまり気にしていなかったが、小さい子供、しかも女の子の部屋を整えるのに敢えて黒を選んだのはなかなか気合いが入っている。王家が尊ぶ色という意味でも白ベースに金装飾とした方が無難だろうに。

学園の制服が黒であるように、俺の魔法の才を考慮した願掛け的な意味だったの

か。それとも単に好きな色を貫き通した頑固者だったのか。火属性らしい性格はそういうところに現れていたのかもしれない。

「わたしもこの部屋は好んでおります。女らしくない、などと言われてしまうのはそのせいかもしれませんが」

「いいえ、私は、リディアーヌ様はとても女性らしい方だと思います」

ヴァイオレットの美しい瞳にまた吸い込まれそうになる。光の加減なのか、彼女の瞳は時折色合いが変わって見える。それがまた不思議で、ついいつまでも見えていたくなる。

無言でじっと見つめてしまってから、俺は少女がほんのり頬を染めていることに気づいた。

「あの、申し訳ありません。わたしのことばかりお話ししてしまいまして」

すると、ヴァイオレットはくすりと控えめに笑みをこぼして、

「構いません。むしろ、もっと聞かせてください。リディアーヌ様のお話が聞きたいです」

「そうですか？　それでは……」

俺は自分のことを話すのが得意ではない。何を話していいかわからない、というか、調子に乗るとどうでもいいことをぺらぺらと喋り続けてしまうからだ。

せめて自慢話にはならないように気を付けながら話し始めると、思ったよりもスムーズに話が運んだ。もちろん、俺の話術が急に上がったわけではなく、ヴァイオレットが聞き上手だったからだ。

少女は適度に相槌を打ち、問いを投げかけながら俺の話に瞳を輝かせ、感嘆の息を漏らした。くすくすと笑ったり不思議そうに首を傾げたり、控えめな仕草は一環しているのにころころと表情が変わって面白い。

「……どうして、ヴァイオレットさまのことを一年も知らなかったのでしょう」

データとして知らなかったわけではない。ただ、これだけ印象的な少女のことをまともに認識していなかったのはかなり不思議だ。

すると、少女はじっと俺を見つめて、

「それは、私がリディアーヌ様の注意を惹かないようにしていたからです」

「注意を？」

目立たない様にしていた、ということだろうか。

俺の思考を読み取ったかのようにこくん、と首肯が返ってきて、
「私はずっと、リディアーヌ様の事を見ていました。その上で、リディアーヌ様に見つからないように振る舞っていました」
「どうして？」
「見ているだけで十分だと思ったからです。直接お話をしてしまうと、私の行動でリディアーヌ様の表情が変わってしまいますから」
わかるようなわからないような話。
野鳥や野良猫を見守るような感じ、あるいは精巧な細工物を鑑賞するな感じだろうか。触れたら均衡が崩れたり、あるいは傷つけてしまうかもしれないから、ただ自分が影響を与えない範囲から見守り続ける。
しかし、そんなヴァイオレットは今、俺に接触している。
「あのお茶会でお会いしたからですか？」
「はい」
小さく頷く仕草も可愛らしい。
「一度、直接お会いしてしまったら、またお会いしたくなってしまいました。自分

の気持ちさえままならない弱い自分が悔しいです」
「……その、少し照れてしまいますね」
妖精のような容姿と声で言われるとすんなり心に響いてどうしようもなくなる。思えば口説き文句（のような台詞）を俺に言ってくれるのは女子ばかりのような気がする。なお、リオネルのあれは口説き文句とは認めないものとする。
今度は自分の頬が赤くなるのを感じながら俺は話題を方向転換した。
「ヴァイオレット様。麦茶の製法を教えていただいたお礼をしたいのですが、なにかご希望はございますか？　なにしろ製法ですから、ドレスでも装飾品でも、大抵の品はご用意させていただくつもりなのですが」
すると、ヴァイオレットは一瞬目を瞬かせて、
「……リディアーヌ様のドレス」
「え？」
「いえ。その、モレ家のサラ様がリディアーヌ様のお下がりをいただいた、という話を耳にしまして。私も彼女のように親しいお付き合いをさせていただきたいと」
どうやら俺と友達になりたい、ということらしい。

それはもちろん大歓迎だが、

「わたし、派閥の運営には疎いもので、お友だち同士のお付き合い……ということになってしまうかと思いますが、それでもよろしいでしょうか？」

これには意外なことに嬉しそうな微笑が返ってきた。

「ええ、もちろんです。リディアーヌ様がそういう方だということはよく存じておりますので」

「ありがとうございます」

友達が一人増えてしまった。彼女とは仲良くしたいところだったので、俺としてもとても嬉しい。しかし、これではなんのお礼にもならないのでなにか別に贈り物をしたいところだ。どうせなら親しい友人みんなになにかお揃いの小物でも贈ろうか。

「リディアーヌ」

考えていたところに、するりとごく普通の、しかし特別な言葉が滑り込んできて。

「駄目？」

恥ずかしそうな上目遣いで見つめられた俺は、すぐさま首を横に振っていた。

「駄目なわけないわ。これからよろしくね、ヴァイオレット」

襲撃事件の後で

ノエル・クラヴィルは騎士の家系であるクラヴィル家における「出来の悪い末妹」である。

父は騎士団の副団長。四人の兄はみな立派な騎士であり、息子の誰かがいずれ団長を継ぐのでは、という声もある。

母は騎士ではないものの、覚悟を持って嫁いできた気丈な女性だ。五人もの子供を産み、育てながら、夫や息子が疎かにしがちな家の仕事を一手に引き受けている。

「女の子が生まれた時はおしとやかな子に育つかも、とも思いましたが、ノエルもやっぱりクラヴィル家の子でしたね」

頭を撫でられ語り掛けられる度、ノエルはどこか申し訳ない気持ちになる。

男所帯で育ったせいか、剣の稽古や走り込みをする兄達にくっついていくのが当たり前だった。末っ子の上に女の子とあって父も兄も喜んで相手をしてくれるので余計にのめりこみ、気づいた時には剣の道にどっぷりとはまり込んでいた。

身体を鍛え、剣を振る生活をしているとドレスを着たり礼儀作法を練習するのは

面倒で仕方ない。

騎士にも作法は必要だ、と諭されなかったら本気で放り投げていたかもしれない。一応、やる気を出してみた後も兄達と別の作法を練習させられるのがずっと不満だったくらいだ。

「私も兄上達と同じように騎士になります。そして国のために尽くすのです」

一度決めてから他の道に目移りした事は一度もない。

しかし、ノエルは騎士としての才能には恵まれなかった。

背は騎士としては大きいと言えず、筋肉の量もなかなか増えない。頼みの魔力も平凡。火の魔法は「戦闘向き」というよりも「戦争向き」であり、平和なこの時代にはそぐわない。

家族は優しい。自分よりもずっと劣る娘・妹相手でも良いところを探しては褒め、激励してくれる。自慢の家族だし、彼らから受けた恩に報いたいと思う。

一方で、外部からの評価は冷徹だった。

「クラヴィル家の末妹は平凡な子だな」

「仕方ない。女子であればこんなものだろう」

「女性騎士は絶対数が少ないですし、見目も悪くありませんから引く手あまたでしょうな」

唯一、褒められたのが女としての容姿。

ノエルがなりたいのは立派な騎士であって、女としてはそこそこ優秀な騎士などではない。まして服や装飾品に金を使い、茶を飲みながらぺらぺらお喋りしているような「普通の貴族女性」を護衛するために騎士を目指したりはしていない。

騎士団に入り、真摯に鍛錬を続けながらもノエルは徐々に腐っていった。性別に捕らわれない意味での立派な騎士を諦め、女としてのそこそこで妥協しようと思うようになっていた。

リディアーヌ・シルヴェストルに仕える事を命じられたのはそんな時だった。

八歳にして第三王子リオネルに見初められ、婚約者となった公爵令嬢。父は王国の宰相であり、生母は死後数年経ってなおその美貌が語り継がれる女性。

何不自由のない生活を送り、自尊心を好き放題に育て上げた我が儘な娘。それが出会う前に抱いていたリディアーヌへの印象だった。

出会った後は出会う前よりも心証が悪化した。

（なんなの、この女は!?）

典型的な貴族令嬢。両手で剣を支えることも覚束ない箱入りのお嬢様。

心の中で侮っていたところ家庭教師との勉強の様子に驚愕させられた。高速で進んでいく授業。形だけ授業をして理解は放り投げているのかと思えば、教師からの質問へ的確な回答がすらすらと出てくる。

内容自体、四歳年上であるノエルから見てもなかなか難しいと思えるもの。というか、勉強なんて必要最低限しかしなかったので全て答えられる自信は全くない。聞けば、リディアーヌは現在十二歳程度の内容を学んでいるという。優秀であることを求められる公爵家の基準で言う十二歳の内容を、だ。

よくよく見れば立ち居振る舞いもおかしい。十歳の小娘のくせに姿勢が妙に綺麗だし、所作の一つ一つが洗練されている。にもかかわらず気づきにくいのは時と場合に応じて適度に崩しているからだ。顔を合わせたばかりのノエルはどこか親しげなリディアーヌの態度に「礼儀もなっていないのか」と憤慨してしまったが、あれは彼女なりに場を和ませようとしたからだったのか。

（理解はできない。でも、少なくとも私には絶対真似できない）

公爵令嬢の奇行はこれだけでは終わらない。なんと護衛初日に「剣を教えて欲しい」と言ってきた。

腕に覚えがあるのかと思えば剣を振った事さえないと言う。馬鹿にしているのかと憤慨しつつ、挑発された仕返しも兼ねて丁寧に負かしてやろうと思えば、八歳の身で身体強化を駆使し力量差を詰めようとしてくる。

身体能力や経験の差がありすぎて散々な結果には終わったが、ノエルの胸には「思ったよりもずっと楽しかった」という感想が残った。

リディアーヌは決して「ごく普通の公爵令嬢」などではない。

子供のくせに驚くほど広い行動範囲、突飛な言動とその裏に垣間見える思慮深さ、専属メイドのアンナに甘える時の妙な子供っぽさ。いい意味でも悪い意味でも目が離せない。護衛に関する報告書もついつい長文になってしまい、上官に笑われてしまった。

「なんだ。随分仲良くやれているようだな」

「別に、仲良くなどしていません」

仕事は仕事としてきちんとこなしている。その上でリディアーヌを観察しては驚

いているだけだ。まあ、思ったよりも悪くない仕事だと思っているのは事実だったが。

（私も、もっと強くなれるのかもしれない）

小さな身体と乏しい経験で果敢に向かってくるリディアーヌを相手にしていると、忘れかけていた気持ちが湧き上がってきた。

独特の感性と魔法の才を用いて工夫し、どんどん成長するこの令嬢を参考にすれば今までとは違うやり方も見えてきそうだ。

気づけば、ノエルは自分の主がリディアーヌで良かったと思うようになっていた。護衛を下ろされたくない。もちろん、この面白い少女を失いたくもない。そんな想いから、学園の卒業記念パーティー、そしてその中で起こった事件に望んだ。

「……不覚です」

戦いの音が止んだホールの一角で、ノエルは左腕を押さえながら息を吐いた。

見習いの騎士装はボロボロ。左腕には刃物による裂傷ができている。全て、あの

メイド姿の暗殺者にやられたものだ。

リディアーヌから貸与されたチョーカーが無ければ死んでいたかもしれない。

敵の腕前は明らかに少女を上回っていた。一つの得物にこだわらない変幻自在の戦法は騎士団の制式剣術とはかけ離れたものであり、終始翻弄されっぱなしだった。その一方で、相手の技が基本的に「攪乱して致命打を与える」短期決戦に向いた仕様であったこと（必殺のはずの攻撃を魔道具が防いでくれたこと）によってなんとか殺されずに済んだ。

あのメイドにはギリギリのところで逃げられた。

ようやく相手の手札を吐かせきったところだった。もう少し事件の終息が遅ければ――戦いの糸が切れなければ倒せていたかもしれない。しかし、現実には奴は戦いの終わりを察した途端、一目散に逃げを打ってどこかへと消えていった。

できれば捕らえたかった。

「勢い込んで参加しておきながら一人も倒せなかったなんて」

自責の念から呟けば、思いがけないところから反応があった。

「《魔女》を倒したのはお前じゃないのか？」

三番目の兄がこちらへ歩いてきていた。彼も警備に参加していたらしい。装備には多少の傷や汚れがあるものの、大きな怪我はない。向こうもノエルが無事なのを見て騎士らしい荒っぽさのある笑顔を浮かべる。

安心感のある兄の長身を見て思わず安堵した後で怒ったような声で答えた。

「やったのはリディアーヌ様です」

「ああ、あの方か。戦闘中もわざわざ敵を探して大立ち回りを繰り広げていたな。面白い。いい主に巡り合ったじゃないか」

「……私ではリディアーヌの騎士としては不足です」

何しろ一人も捕まえられなかったのだ。あらためてそう口に出してみて、自分が手柄に飢えていた事を実感する。リディアーヌの護衛騎士でいるためにはもっと手柄がいる。少なくとも捕縛人数で主に負けているようでは護衛失格だろう。

肩を落としていると、兄は気絶しているオーレリアを縄で拘束しながら周辺の様子に目をやった。そうして彼が言ったのは、

「必死に戦っていたんだろ。頑張ったじゃないか」

「ですが、逃げられてしまいました」

「お前が全力で戦っても倒せなかったんだろ。それは相手が悪かっただけだ。少なくとも、お前がいなけりゃそいつがリディアーヌ様に向かっていた」

あのメイドに襲われるリディアーヌを想像する。いくら天才とは言ってもあのレベルの相手には苦しめられるだろう。しかもメイド二人を守りながらでは……。

「お兄様なら倒せていたかもしれません」

「俺じゃあの方の専属になれないし、俺が女だったらこの筋肉は維持できてないっての」

立ち上がった兄にぽんぽん、と頭を叩かれる。子供扱いしないで欲しいと思ったが、かけられた言葉とあいまって少し涙ぐんでしまった。

はあ、と息を吐いてオーレリアを見下ろす。

この女の事は良くわからない。リディアーヌと似た者師弟とする声もあるが、とてもそうは思えない。本音をぽんぽん口にするリディアーヌと徹底的に本音を隠すオーレリアはむしろ真逆の性格だ。

しかも、気持ちを隠す癖に「構って欲しい」という思いが隠しきれていない。リディアーヌも放っておけずに積極的に構っていくせいで余計な苦労を背負い込んで

いる。こんな女のせいで、と、かなり主人に寄った感想を抱いたところで、目の端に紅の色。

　ドレスには汚れや傷があるものの、身体には傷一つないリディアーヌがこちらへと駆け寄ってくる。二人のメイドはかなり疲れた様子だが、こちらも無事だ。

「ノエル、お疲れさま。怪我をしているのね？　治してあげるから見せなさい」

「いえ、この程度でしたら問題ありません。他の負傷者を優先――」

「駄目よ。女の子なんだから、痕が残ったら大変じゃない」

　騎士にとって怪我は勲章のようなもの。どっちみち戦う女を娶ってくれるのは相当な変わり者か同じ騎士だろうが……半ば強引に引き寄せられて温かな光を押し当てられるのは、意外と悪い気分ではなかった。

「あの、リディアーヌ様。何人倒されたのですか？」

「え？　えっと……四人かしら。この三倍くらいは倒したかったのだけれど、うまくいかないものね」

　どこの世界に襲撃者を十人以上片付ける令嬢がいるのか。しかも刃がついていないとはいえ剣まで振るって。

再び自信喪失しながら「敵を取り逃した」事実を告げると、リディアーヌは全く怒ることなく「そう」と頷いた。
「頑張ってくれてありがとう。ノエルが彼女を引き付けてくれたから、わたしが自由に動けたの」
「私が？」
「そうよ。成果を挙げたのだから胸を張りなさい」
兄と同じ事を当人から言われてしまった。
誤魔化しなどではなく本心からそう思っているらしい少女に「ありがとうございます」と頭を下げる。柄にもなく涙が出そうになったので、軽く首を振って誤魔化した。
応急処置はあっという間に完了。軽い消毒と出血がなくなる程度まで傷を塞いだだけらしいが、後は布でも巻いておけばとりあえず問題ない。
「包帯の代わりは……幸い、ここに白い布がたくさんあるわね」
放置されたテーブルからテーブルクロスを抜き取ってさっさと引き裂いていくリディアーヌ。なんとも豪快だが、本人曰く「いざとなったら弁償すればいいじゃな

い」とのこと。アンナは頭を抱えているが、合理的な判断であるのも確か。ノエルは主の代わりに包帯づくりを担当してもらえるようアンナに頼んだ。

「騎士に状況を確認してきます」

情報共有によって王城やその他の場所は襲われていないことがわかった。安堵しながら戻って報告した後、ノエルは応急処置や荷物運びの手伝いを買って出た。

幸いにも――本当に幸いと言うしかないが、死者は無し。

女性を中心にパニックになっている人間はいたものの、危機が去ったとわかると徐々に沈静化した。そうして最低限の状況確認と治療が済んだところで、

「とんだパーティーになってしまったわね。せめて少しでも余興の代わりになるといいのだけれど」

進み出たリディアーヌは、パーティーの参加者や騎士、学園関係者が見守る中で魔法を行使した。

外がすっかり暗くなり、やや薄暗くなったホールに光が生まれる。少女を取り巻くようにして現れたのは炎でできた蝶の群れだ。

火の粉の鱗粉を散らしながら蝶達は舞う。

ひらひらと、ゆらゆらと。触れれば火傷しかねないとわかっていても手を伸ばしたくなるような幻想的な光景。人々の間を踊りながら舞い上がった蝶達はやがて空気へと溶けるようにしてその儚い生涯を終える。

「驚いた。まさかあれをまた目にすることができるとはな」

「父上？」

いつの間にか隣に立っていた父がふっと笑って教えてくれる。

「リディアーヌ様の母君――アデライド様が得意とされていた魔法だ。私も見たのは一度きりだが、これほど美しい魔法があるのかと感動したものだ」

「ええ、とても美しいです」

心から頷いた上で、ノエルは一つだけ反論した。

「でも、これはアデライド様の魔法ではありません。リディアーヌ様の魔法です」

「そうか。ああ、その通りだな」

間違いなく国の歴史に残るであろう大事件。

歴史書の記述にリディアーヌの名が残るかどうかはわからない。しかし、当事者の一人としてノエルはしっかりと心に刻んだ。

事件の解決した裏にはリディアーヌ・シルヴェストルの尽力があったことを。そして、ノエル・クラヴィルは護衛として精一杯戦ったという事を。

妹令嬢と不安な日

「お母様、本当に何かが起こるのでしょうか？」
シャルロット・シルヴェストルは食堂の定位置へ腰かけたまま、隣に座る母――セレスティーヌへ尋ねた。
時刻はおやつの時間を過ぎたところ。今日はできるだけ家族一緒に過ごそう、ということでシャルロットとセレスティーヌ、それから兄のアランが集まっている。
書き物をしていた母が手を止めて振り返る。いつも通りの優しげな微笑み。
「心配ありません。万が一、何かが起こったとしても貴女達の事は必ず守ります」
「っ」
一瞬、息が詰まりそうになった。母の返答はつまり、普段よりも「何かが起こる可能性」を高く見積もっているということだ。
（でも、起こるとしたら一体どこで……？）
ちらりと窓の外、冬の静かな空へと目をやり、ここにいない父と姉の事を想う。
ジャンは城で執務中、リディアーヌは学園の卒業式および卒業記念パーティーに

出席している。それだけ聞くと危険とは無縁に思えるものの、実際は片や有事に備えて待機、片や危険かもしれない場所に飛び込んでいった状態だ。

はあ、と、息を吐く。

屋敷内の主要な場所は暖炉や暖房の魔道具によって快適に保たれている。そのため、吐いた息も白くなったりはしない。しかし、リディアーヌ達はどこかで寒い思いをしているかもしれない。

魔法を覚えて以来、風邪で臥せった事もないリディアーヌなら寒さも軽く吹き飛ばしてしまうかもしれないが。

「お姉様は本当に凄いです」

この一年、何度も繰り返してきた言葉。

リディアーヌは天才だ。類稀な魔法の才を持ち、公爵令嬢としての勉強も疎かにせず、さらに服飾業にも貢献し、剣術まで習い始めている。

《紅蓮の魔女》。

対立派閥の令嬢から広まったとされる異名。師である《漆黒の魔女》を連想させた上で良くない印象を与えてくる。本人もあまり好きではないと言っていたが、彼

女は知っているだろうか。畏怖と尊敬を籠めて魔女の名を用いる者が増えているのを。

あれはしばらく前の事。

親しい友人達とのお茶会の際、リディアーヌに対する嫌がらせが話題になった。姉が一部から嫌われているのはシャルロットも知っている。何かされる度にやり返している事も。ただ、具体的に何をされて何をしたのかはあまりよく知らない。

『面白い話ではないし、食事の席で言うこともないでしょう？』

と、父や母に個別で報告をしているからだ。

まあ、姉がドレスを駄目にしたとか泣いて帰ってきたとかそういう事はなかったので、大した事はないのだろうと思っていたのだが。

『屋外でのお茶会の際、リディアーヌ様のお傍に蛇が出たとか』

『会食形式のパーティーで食事に虫が入れられていた事もあったそうです』

次々と出てきた話題に「ひっ」と声が出そうになった。想像しただけで恐ろしい。

現実にそんな事が起こったら泣いてしまうかもしれない。そこまで行かなくともパニックになって冷静な対処なんてできないだろう。

しかし、リディアーヌは動じなかった。

何かの魔法で蛇を眠らせると使用人につまみ出すよう指示を出し、虫入りの料理へ手を付けることなく「好みではないから」とやんわり下げさせたらしい。

その際、「運が悪い」「好き嫌いは直すべきでは」と殊更嘲笑った令嬢は植物の蔓に足を取られて「蛇だ」と大騒ぎをし、粒の大きなコショウを虫と見間違えて使用人をひどく叱責したとか。

『まさか、お姉様が魔法で……？』

『証拠はありません。元を正せばリディアーヌ様の被害も作為的なものでしょうから、深堀りされる事はまずないでしょう』

『受けた被害と対処の差を見ても、どちらの器が大きいかは一目瞭然です』

本物を前に動じなかった令嬢と、見間違いで大騒ぎした令嬢。局所的な正しさなど簡単に覆ってしまうのが貴族社会ではあるが、だからこそ、どちらに付いた方が得策かという打算も加わる。

リディアーヌが殊更に正しさを振りかざす人間ならもっと反感があったかもしれない。

受けた仕打ちに対して「目には目を」でよりスマートな嫌がらせを返す彼女のやり方は常に正しく在れるとは限らない貴族達にとってむしろ受け入れやすかった。

シャルロットは自分の知らない姉の活躍（？）に感嘆すると共に、絵に描いたような嫌がらせに僅かな寒気を覚えてしまう。

『私も気を付けなくてはいけませんね』

姉のようにはいかなくともせめて動じないように……と。

『ご心配なさらなくとも、シャルロット様に悪意を向ける方はまずいませんわ』

『え？　……あの、それは何故でしょう？』

『もちろん、セレスティーヌ様とリディアーヌ様がいらっしゃるからですわ』

シャルロットの交友関係は母セレスティーヌの知人・友人から娘や従兄妹へと繋がったものだ。つまり親の派閥がそのまま適用されていると考えていい。下手に手を出せば公爵夫人の派閥が黙っていない、という暗黙のプレッシャーがある。

そして「友人をいじめたら泣かせる」と公言して止まないリディアーヌの存在。

養母の派閥を引き継ぐ事なく独自の派閥を広げ続ける彼女は自身よりも身内への攻撃に反応する。よりによって妹であるシャルロットを狙う馬鹿はいないと言う。

『私がいじめられたら、お姉様が助けてくださるのですか？』

『ええ。もちろん私達もお助けいたしますが……』

『リディアーヌ様が動かれるのであれば過剰になってしまうかもしれませんね』

その後、シャルロットは姉に尋ねてみた。

『お姉様は、私がいじめられているのを見たらどうなさいますか？』

自分でも馬鹿な事を聞いたと思う。試すような真似自体が恥ずかしいし、もし思ったような答えが返って来なかったらと思うと恐ろしくなる。

だというのに、リディアーヌはなんでもなさそうにこう答えた。

『もちろん、倍返しよ』

「リディアーヌは悪い見本ですから、参考にしてはなりませんよ」

母の声でシャルロットは我に返った。

気づくとアランも気づかわしげな表情でこちらを見ていた。大丈夫だ、わかっている。微笑みながらこくん、と頷く。

姉と同じ事をしようとするのはもう止めた。この一年、自分なりに自分の出来る事を探してきたつもりだ。その結果、今のところは「母のようになる」というごく普通の目標しか見えていないが、リディアーヌのように積極的な開拓に向いていないシャルロットはせめて与えられた事をしっかり吸収しようと務めている。

その上で敢えて言うのなら、

「お母様。女性は危機に陥った際、どうやって身を守れば良いのでしょう?」

「一番は自ら対処しなければならない状況に陥らない事です」

自分の身に危険が迫るかもしれない。そんな実感からあらためて浮かんだ疑問に、セレスティーヌは端的な回答を返してきた。

「あらかじめ護衛を用意しておく。危険と思われる場所には近づかない。危険が迫った際には迅速に退避する。まずは基本を徹底する事です」

「女性を守るのも男の仕事だからね。護衛やメイドだけじゃなくて周りにいる男だってシャルロットを守ってくれるはずだよ」

日に日に男らしく格好良くなっていくアランが斜め向かいの席から微笑んでくれる。彼は「念のために」と腰へ剣を下げている。訓練でも滅多に使う事のない真剣だ。自らが言った通り、何かがあれば父の代わりにシャルロットやセレスティーヌを守ってくれるつもりなのだろう。

残念ながら、一番守られるべき王子の婚約者（リディアーヌ）がいないが、姉の場合、自分の身を自分で守った上に王子の護衛まで務めてしまいそうなのは気のせいだろうか。

「お姉様が女性でも剣術を、と仰ったのが今は少しわかる気がします」

呟くとセレスティーヌが眉をひそめ、アランが苦笑を浮かべた。

「シャル。本当に止めた方がいいよ。リディは言っても聞かないから仕方ないけど」

「どうしても護身が必要なのであれば魔法を訓練しなさい」

「魔法、ですか」

それもリディアーヌの領分だが、母の言い分が正しいのもわかる。魔力は女性貴族の方が男性貴族よりも高くなりやすい。それに、魔法は剣と違ってドレスを着ていても道具の用意がなくとも使用できる。女性が身を守るのにはもってこいだ。

ただ、シャルロットにはまだ魔法が使えない。

「……早く魔法が使えるようになりたいです」
「魔法の目覚めには個人差があります。焦ってはいけませんよ」
「そうだよ、シャル。僕だって十歳になってからだったし、遅い子の方が優秀になりやすいっていう話もあるんだ」
「はい。わかってはいるのですけど」
姉のリディアーヌが魔法に目覚めたのは今のシャルロットより年下である八歳の時だ。わかっていてもついつい焦れてしまう。
魔法が使えるようになれば。
今の無力感からも少しは解放されるのだろうか。何しろ、今のままのシャルロットでは何かあった際に守ってもらうことしかできない。
屋敷には警備の兵や魔法の使えるメイドがたくさんいるので心配ないとは思うものの――もし、この食堂に何者かが飛び込んできたら？　アランが剣で立ち向かい、セレスティーヌは魔法で応戦するだろう。
（……私も）
膝の上でぎゅっと手を握る。すると、母の手がその上に重ねられる。驚いて顔を

上げれば、セレスティーヌはにっこりと微笑んでくれる。
「大丈夫ですよ、シャルロット。貴女にも必ず目覚めの時は来ます」
「シャルは母上の娘なんだ。きっと立派な魔法が使えるようになるよ」
「はい。ありがとうございます、お母様、お兄様」
波立っていた気持ちが落ち着いていく。シャルロットは笑顔を浮かべると深呼吸をした。それからあらためて母の手の温もりを意識して、
（あれ？）
どことなく違和感を覚える。母の体温、息遣い、肌の感触。どこがどうとは言えないものの、なんとなくいつもと違う気がしたのだ。
見れば、顔色も少し良くないような。
「あの、お母様。もしかして体調が悪いのではありませんか？」
「え？」
驚いたようなセレスティーヌの顔。誤魔化されたくはない。そのままじっと見つめていると、やがて観念したようなため息。
「母上。指揮の仕方は私も父上から聞いています。辛いようでしたらお部屋に戻っ

ていただいても――」
「いいえ、アラン。大丈夫です。休む程の事ではありません」
「本当ですか、お母様？」
「ええ」
頷いたセレスティーヌはゆっくりと、そして内緒話のような声音で口にする。
「食欲が少し落ちているのと、不定期に不快感がある程度です。風邪ならば薬を飲めば治りますが、これは病ではないでしょうから」
「それって……」
もしかして。
シャルロットの脳裏にある一つの事柄が浮かんだ。それは確かに病気ではないし、休んだところで根本的に良くなる事はないだろう。
おめでとうございます、と声を上げたくなるのを堪えて母の顔を見上げる。気持ちが溢れて笑顔が強まってしまっているのはまあ、仕方ないだろう。
「お母様、お医者様には？」
「近いうちに診察をお願いする予定です。あまり早いと判断もつきかねるそうです

からね」

「判断……そうか。母上……！」

「まだ何とも言えませんから、他言無用でお願いしますね」

遅れて理解するアラン。すかさず口止めをするセレスティーヌ。その指示は控えていたメイド達にもしっかりと伝わり、一人残らず「はい」と返事があった。

兄もまた神妙な顔をして「お大事に」と言った。めでたいことなのだからもっと喜べばいいのに。それとも、笑顔を堪えようとしてあんな顔になったのだろうか。

（お姉様は、どんな顔をなさるでしょう？）

想像しようとしたら、何故か露骨に顔をしかめるリディアーヌの姿が浮かんだ。母と姉は未だに仲直りをしていないらしい。時々、シャルロットやアランがぽかんとしてしまうほどぴったりと呼吸を合わせたりするのだから、もう変なわだかまりは解いてしまえばいいのに。

（お姉様、か）

これからはもっと頑張らなくてはならない。

一家の末っ子として甘えるだけではなく、自分の家族の力になれるように。

胸に力が湧いてくる。ぽかぽかとどこか温かい光。それは空が暗くなって父や姉が帰ってくるまでの間、シャルロットを勇気づけてくれた。

その夜。

就寝中のシャルロットが身体から光を放っているのを専属メイドが発見し、ちょっとした騒ぎになった。

新人メイドと先輩メイド

公爵令嬢リディアーヌの専属メイド、アンナはあまりの事態に頭を抱えたくて仕方がなかった。

「近日、新人メイドの追加があります。皆も名前は知っているでしょう。ルフォール侯爵家の依頼で行儀見習いとして引き受ける事になったご令嬢、オーレリア・ルフォール様です」

夜の終業時間。仕事を終えたばかりの者も含め全ての使用人を集めての連絡に、案の定、シルヴェストル公爵家の使用人達は騒然となる。

声を上げる者、有名すぎる新人の名を復唱する者、反射的にアンナの方を振り返る者など、反応には個人差があったものの、おおむね全員に共通しているのは「どうしてそうなったのか」という驚きだった。

無理もない。

事前に知らされていなければアンナだって例外ではなかった。というか、立場が立場である以上、悲鳴くらいは上げていたに違いない。

「知っての通り、オーレリア様は学園襲撃に加担した罪で王族から追放となりました。一方、不心得者の大量捕縛を助けた功績も認められたため処刑ではなく罰金や労働等によって罪を贖う事となっています。養子縁組を行い新たな保護者となったのはルフォール侯爵家。先方はオーレリア様の行動について自分達が全責任を負うとしたうえで、当家にその身柄を預けたいとの意向を示しています」

ともあれ、使用人達の前に立ったメイド長は淡々と事実だけを口にする。

「旦那様と奥様はこの申し出を了承なさいました。オーレリア様はリディアーヌ様付きの専属メイドおよび魔法の教師として無給で働く事が決定しています」

ここでざわめきは更に強くなった。おそらくメイド長が続けて言った「侯爵令嬢様とはいえ同僚として特別扱いは必要ありません」といった注意事項はあまり聞こえていなかっただろう。

結局、ざわめきは解散になるまで収まることはなく、そして解散となった途端に騒がしさを倍化させた。

「ねえ、アンナはこの話、知っていたのでしょう？」

「は、はい。リディアーヌ様のお傍に付いて話し合いに同席しましたから」

この場における一番の当事者であるアンナが先輩方に捕まったのは当然の成り行き。新人の段階で専属雇用されてしまったアンナは屋敷の同僚とあまり親しくない。普段はリディアーヌ様の傍から離れられない上に部屋も別なので接点がほぼないのだ。

加えて、一般メイド時代の同室が性格の良い人物とは言えなかったので、屋敷内での人間関係には正直トラウマがある。

できるだけ軽く流して部屋に帰ろうと思ったのだが、残念な事に声をかけてきた先輩方はそんなに甘い相手ではなく、また、ジゼルのように後輩いびりを行ってくるような人でもなかった。

「大丈夫なのかしら。……もちろん、ご夫妻が許可なさったのだから問題ないのでしょうけれど、リディアーヌ様は王族入りの内定している大事なお身体でしょう？」

彼女達の表情に「罪人となった王女」および「魔女の弟子であるこの屋敷の令嬢」を嘲るような色はなく、それにほっとしたアンナはついつい話に応じてしまう。

「問題ないと思います。オーレリア様はリディアーヌ様を特別気に入っていらっ

しゃいますから、守ってくださる事はあっても傷をつけたりはなさらないかと」
「特別気に入って……？」
「もしかしてそれって、禁断の愛だったりするのかしら？」
「そ、それはない、と思いたいのですが」
　オーレリアの言動について良く知っているアンナは「ない」と言い切れなかった。研究者気質の人嫌いで、学園を卒業するまで浮いた話が一切なかった。そのくせリディアーヌの事は妙に気に入っていて、冗談なのか本気なのか、髪を梳いたり頬を撫でたり容姿を褒めるような言葉さえ口にしていた。
　おまけに無給で働かせて欲しいという申し出である。まあ、オーレリアなら魔道具の製作でいくらでも稼げるわけで、それを考えればメイドの給金などあってもなくても変わらないのだが。だったら無理にメイドなんてしなくても、という話である。
「アンナも気を付けなさいよ。見境のない方だったら貴女まで毒牙にかかってしまうかも……」
「それはないと思います」

これにはアンナもきっぱりと答えた。

「オーレリア・ルフォールと申します。メイドの仕事に関しては非才の身ではありますが、快く雇用してくださった公爵ご夫妻、およびリディアーヌ様のご厚意に報いられるよう精一杯務めさせていただく所存です。至らない点がございましたらどうか遠慮なくご指摘くださいますようお願い申し上げます」

そして、オーレリアはやってきた。

使用人達の前での挨拶は堂に入ったもの。さすが元王族、カーテシーは見惚れる程の完成度で、既に屋敷のお仕着せを纏っているにも関わらず育ちの違いを感じさせられてしまう。

こんな作法の持ち主が身近にいるというのは案外、リディアーヌにとってもアンナ達にとっても勉強の機会として大きいかもしれない。

「では、オーレリアの案内と指導については先輩であるアンナに一任します」

「よろしくお願いいたします」

「か、かしこまりました」

先輩。先輩である。

男爵家出身、学園に通った経験すらない年下のアンナが元王族、現侯爵令嬢のオーレリアの上役。本当にどうしてこうなったのかと言いたい。

しかし、この話が持ち上がってから何十回、何百回と繰り返した自問自答だ。さすがに覚悟を決める事にして初めての「専属としての後輩」に向き直る。

（どうせならオーレリアを迎える前にエマも専属になってくれないかと具申したりもしたのだが、他でもないエマに「今まで通りの業務内容で」とあっさり断られてしまった）

「では、オーレリア様。お部屋に案内いたします」

「かしこまりました、アンナ先輩」

丁寧な返事が来た途端、背筋が寒くなるのを感じた。

なるほど、リディアーヌが「今まで通りで」と言った気持ちがよくわかる。アンナは慌てて「せめて同僚として接してください」と頼み込んだ。

オーレリアはこれに少し残念そうな顔をしたものの、特に文句を言う事もなく言

葉遣いを直してくれる。
「なら、上でも下でもない同僚として話させてもらうわ。だから、アンナもただの同僚相手として話して頂戴」
「わ、わかりました。オーレリア様」
「オーレリア」
「……オ、オーレリア。こちらに付いてきてください」
彼女の荷物は既に運び込んである。専属なのでアンナと同様、リディアーヌの私室に直結した個室が与えられる。専属部屋は一応三部屋用意されているので二人が同室になる事はない。
丁寧に磨かれた廊下に二人分の足音だけが響く。
「屋敷の間取りもおいおい覚えなくてはね」
「そうですね。ですが、ひとまずはよく通る道順だけ覚えれば大丈夫です。一度に覚えるのは大変でしょう」
「そうね。一度見れば覚えられるけれど、思い出すのにも魔力が要るもの」
そういえば、彼女もリディアーヌと同様、驚異的な記憶力があるのだった。

右腕を持ち上げて微笑を浮かべる黒髪の美女をちらりと振り返り、あらためて「モノが違う」と実感する。ただ、天才の中の天才であるオーレリアも何でもかんでも魔法で自由自在とはいかない。魔力量とかそういう話ではなく、彼女の腕にはまたしても魔法封じの腕輪が嵌まっているからだ。

オーレリアを迎えるためにリディアーヌが追加で作った品である。

王族級の魔力を持つリディアーヌが丹精込めて作った品はなかなかの効力があり、装着中のオーレリアはだいたい全力の七割程度の魔力しか行使できなくなり、精神集中にも多少の乱れが生じるらしい。

リディアーヌは「腕輪を嵌めているあの方となら魔法合戦でそこそこいい勝負ができるんじゃないかしら」と言っていた。

「その腕輪、外せるんですよね？」

「まあ、外そうと思えばね。でも、せっかくのプレゼントだし勿体ないでしょう？」

腕輪は言わば保険だ。リディアーヌであればオーレリアを制御できる、という分かりやすい証明。

実際はオーレリアの厚意で成り立っている上に腕輪があっても「そこそこいい勝

負」にしかならないわけだが、むしろそんなオーレリアが自発的に腕輪をつけたままにしているという事実こそがこれ以上ない適材適所の証だと言える。

　このままの状態でしっかり務めを果たしていけば信用も勝ち取れる。腕輪を外しても彼女を危険視する者がいなくなるまでには長い道のりかもしれないが。

「ねえ、アンナ。貴女は私の事、恨んでいないの？」

　思いがけない問いかけにアンナは思わず立ち止った。

「そんな事を気にしていたんですか？」

「それは気にするでしょう。私を何だと思っているのかしら？」

「興味のある事以外はどうでもいい天才、ですね」

「正解」

　すると彼女はくすりと笑って、

「でもね。どうでもいい、というのは無視しているだけなの。何も感じていないわけじゃない」

「……だったら、もっと利口な生き方があるのでは？」

「それができたら私は私になっていないわ」

きっと、その通りなのだろう。

アンナはリディアーヌと共にオーレリアの過去について聞いている。あそこで語られた彼女の気持ちはきっと本心だったはずだ。

不器用で我が儘な女。しかし、一度「こちら側」を選んだからには彼女は簡単に向こう側へは行かないだろう。

アンナはため息をついて、

「今の話はリディアーヌ様にして差し上げるべきでは？」

「嫌よ。恥ずかしいもの」

アンナ相手なら恥ずかしくないという事か。若干釈然としないものを感じていると、追い越したオーレリアが笑って、

「お互い、あの子が男だったら相手に悩まなくて良かったのにね？」

「なっ!?」

頬がかっと熱くなる。確かに、アンナは専属として忙しく働いており、男性と出会う機会なんてほぼない。できればこのまま長くリディアーヌに仕えたいとも思っているので結婚なんて当分できないだろう。

しかし、だからと言って、
「リディアーヌ様が男性なら、そもそもお傍に仕える事ができません」
「じゃあいっそ、リオネル――リオネル様の愛人を狙ってみたら？」
「それこそ無理です。私なんて殿下は相手になさいません」
それはまあ、メイドが主人と同じ相手から寵愛を受ける事は意外とある。主人との仲が良好であれば愛人として幸せに暮らせる事だってあるが、リオネルの浮気を前提とするのも良くないし、それを姉であるオーレリアが言うのはもっと良くない。
というか、リディアーヌのメイドという意味ではオーレリアも該当するのだが。姉弟での婚姻は出来る限り避けられるもののタブーとまでは行かない。異母姉弟となれば猶更許容されやすいが、それはさすがに。
「リディアーヌ様にも殿下にも手は出さないでくださいね」
「わかっているわ。こちらからリオネル様を誘惑するなんてぞっとするし、リディアーヌとじゃ子供ができないものね」
「子供の問題ではないんですが」
というか、屋敷の廊下でする話でもない。別に機密でもなんでもないとはいえ醜

聞ではあるし、何より恥ずかしい。それとも、オーレリアが平気な顔をしているあたり何か対策はされているのだろうか。

なんだか緊張していたのがだんだん馬鹿らしくなってきた。

「とにかく、リディアーヌ様にお仕えする以上、仕事はきちんとしてください」

「わかっているわ。手は抜かないからしっかり指導して頂戴」

きっと、この屋敷に来たばかりのアンナであればこんな状況、プレッシャーから泣き出すか逃げ出していただろう。

しかし、リディアーヌと過ごしてきた経験のお陰か、あるいは少しは研鑽が役立っているのか、今のアンナはこの新しい環境をなんとか乗り越えようと胸に力を湧き上がらせた。

ひとまず閑話は以上となります。

書き溜めがいい感じになるまで数日お休みさせていただきます。

次章は兄妹三人初めての里帰り編になる予定です。

【登場人物・家名等一覧】

超簡単なやつですが、とりあえず。

【階級・家名】

□公爵家：シルヴェストル、デュナン
□侯爵家：ルフォール
□伯爵家：モレ、バルト、クラヴィル
□子爵家：（ジゼルの実家）
□男爵家：（アンナの実家）
※上に行くほど階級が高い。権力の指標になるが階級＝財力ではない。
また、コネクションや王家からの信用等によっても実際の権力は変わってくる。
□不明　：グラニエ

【魔法属性の種類】
火、水、土、風、心、光、聖
※一週間の曜日は各属性にちなんでつけられている。聖の日が安息日
※全属性は火から光までの六属性持ちを指す
※一般的には六大属性とされ聖属性は別枠扱い
※聖属性は超レアで所有者は必ず全属性を兼ねる（聖属性関連は今後使うかもしれない設定）
※光は光操作の属性なので暗闇を作り出す能力も兼ねる
レーザー的な用法によって火属性に近い現象も起こせる
※治癒魔法は本来聖属性の領分であり、属性数が少ない者ほど苦手とする傾向がある

【シルヴェストル公爵家】※登場人物の年齢は全てリディアーヌ８歳時点のもの
（名前　　：年齢　性別　髪色／目の色　属性　立場）
□リディアーヌ：８歳　女　紅／紅　火と光　公爵令嬢（長女）

□アデライド　：（30歳）　女　紅／紅　火　伯爵令嬢→公爵夫人　※故人

□ジャン　：33歳　男　暗褐色／深い青　土　公爵／王国宰相

□セレスティーヌ：28歳　女　金／翠　光　公爵夫人

□アラン　：10歳　男　暗褐色／深い青　土　公爵家長男

□シャルロット　：7歳　女　金／翠　光　公爵令嬢（次女）

■アンナ：リディアーヌ専属メイド、水属性

■ジゼル：一般メイド、水属性

■エマ　：一般メイド（元王宮メイド）

■マリー：古株の一般メイド

【デュナン公爵家】

□ベアトリス：10歳　女　暗い金／淡い黄　心　公爵令嬢（長女）





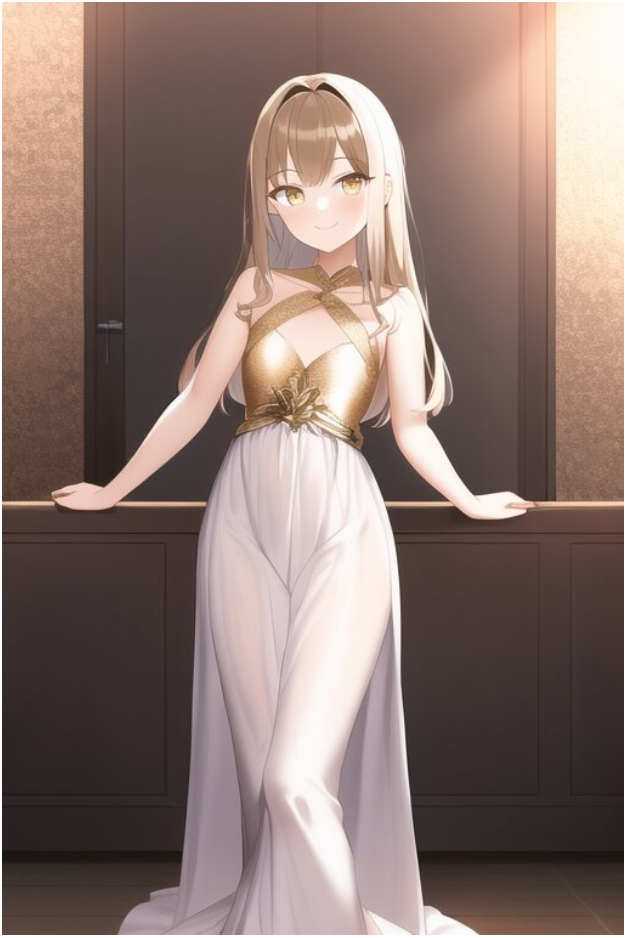


【ルフォール侯爵家】
□ヴァイオレット：8歳　女　銀／青　？？？　侯爵令嬢（兄妹不明）

【モレ伯爵家】
□サラ　：8歳　女　薄紫／薄紫　水　伯爵令嬢（長女）
□コーム：6歳　男　濃紫／濃紫　？　伯爵家長男

【バルト伯爵家】
□伯爵　：※二章終了時点で故人
□伯爵夫人　：※二章終了時点で故人
□オーレリアの母：※故人。王家に嫁いだため正確には王族
□フレデリク：伯爵家長男→伯爵
□ミレーヌ　：フレデリクの妻。学生時代は小派閥の主でジゼルの親分だった

【クラヴィル伯爵家】





□伯爵：男、騎士団副団長
□ノエル：12歳　女　赤紫／紫　火　伯爵令嬢／見習い騎士

※兄が四人。全員騎士

【王族】
□国王：42歳　男　金／翠　　???
※国王には側室が複数人存在
□王妃：29歳　女　赤金／深青　???　正室
□リオネル　：8歳　赤金／翠　風　第三王子（正室の長男）
□オーレリア：16歳　黒／黒　全属性　第？王女→ルフォール家養女





第三章：兄妹の里帰り

影響と変化

学園の卒業記念パーティー襲撃事件から約一か月が経った。

純血派と称される平民集団を支援したバルト伯爵とその妻は捕縛され、取り調べの後に処刑が決定した。新しい伯爵家当主には前当主の息子であるフレデリクが就任。事件の賠償金によって大きく傾いた家を妻のミレーヌと共に切り盛りしていくこととなった。

国内における薬物の取り扱いは規制強化の方向で話が進んでおり、そういう意味でも伯爵家にとっては向かい風だ（規制してもまた新しい薬が開発され悪用されるだろうが、だからといって何もしないわけにはいかない）。

フレデリクは前伯爵夫妻とは仲が悪かったらしい。オーレリアのことも純粋に姪として可愛がっていたようで、襲撃防衛の件とオーレリアをメイドとして雇った件

についてわざわざお礼と挨拶に来てくれた。

妻のミレーヌの方は正直何を考えているのかよくわからない。

ジゼルの親分だったという情報のせいで俺の中では未だに『悪い奴に決まっているわ！』という印象なのだが、おそらく長いものには巻かれるタイプ。パーティーの件は体制側に分があると判断したので俺への手紙等々、被害を抑える方向で動いたのだろう。

（少なくとも前任者よりは）善良な若者と計算高い妻の組み合わせならそうそう極端な方向へは進んでいかないに違いない。

オーレリアの後見人を務めていた宮廷魔法士長にも「指導不足」としてそこそこの額の罰金が科せられた。

純血派との繋がりについては「王家の密命」ということになったため、地位を追われるまではいかなかったものの、これを機に宮廷魔法士という組織も新陳代謝が行われることになるかもしれない。

事件の被害者には王家から謝罪も兼ねた見舞金が出された。立場（卒業生、在校生、来賓）や怪我の大きさに応じて金額は何段階かに分けられたものの、当時学園

に所属していただけの（パーティーにはたまたま参加していなかった）生徒も含めて全員がその対象となっている。

この見舞金の出所は主にオーレリアやバルト伯爵家、宮廷魔法士長らが支払った賠償金や罰金だ。

王家は損壊したホールの修繕資金も負担しているためトータルとしてはマイナスのはずである。大変な話だ。少々可哀そうな気がしたので、俺の分の見舞金は「別に褒賞をいただいたので」と辞退させてもらった。

なお、我が公爵家としても学園への心ばかりの（実際は結構な額の）寄付を行っている。貴族というのはこういう時にぽんと金を出すのが大事なのである。余裕を持った生活をしていないサラの家なんかは駄目な例。ベアトリスのデュナン家もこぞばかりに寄付をしていた。

事件の裏にいた貴族がバルト伯爵家だけとは限らない。

襲撃事件で純血派がどの程度戦力を減らしたのかも不明だし、ノエルが交戦したあのメイドもあれ以来行方が掴めていないらしい。

大規模な治安維持活動および平民街の調査のため、騎士団と衛兵隊はとにかく大

忙しである。

さて。

そんな中、シルヴェストル公爵家の屋敷内にも幾つも大きな変化があった。

「リディアーヌ様。紅茶のお代わりはいかがですか？」

「ありがとう、オーレリア。いただくわ」

まずはオーレリア・グラニエ改めオーレリア・ルフォールの専属メイド就任。

あのオーレリアにメイドが務まるのかと不安で仕方なかった俺だったものの、さすがは超ハイスペック美女、一度説明された仕事は決して忘れない超人ぶりと元王族らしい一流の礼儀作法によって周囲に格の違いを見せつけた。

屋敷の通路構造でさえ「一度見れば覚える」と豪語して実際に覚えてみせたし、家族全員分＋親しい貴族のお茶とお菓子の好みでさえ教えられたら絶対に間違えない。

「オーレリア。紅茶の蒸らし時間が二秒短いです」

「む。……なかなか難しいわね。魔道具もなしに正確な時間を測れだなんて」

まあ、記憶力が良くて礼儀作法ができているからメイドとして完璧かというとそ

んなことはなく。

　アンナのたっての願いで教育係となったエマによって厳しい指導を受けている。ちなみに指導係を依頼したアンナ自身もその餌食である。

「アンナはオーレリアの所作を見習ってください。姿勢が乱れていることが多々あります」

「は、はい」

「そうよ。見習いなさい」

「オーレリアは姿勢を維持しきれていません。もっと体力をつけてください」

「あの、エマは本当に厳しいのだけれど」

　一人でもできる作業は一人でできるように、と一年以上にわたって努力してきたアンナは仕事の精度と基礎体力がすごい。魔力が少なく、身体強化でのズルもほぼできない中で一日中ほぼ立ちっぱなしの生活を続けているのは驚異的だと思う。

　対するオーレリアは魔法の補助なしだと体力がもたない。ほうっておくといつまでも研究している変態だとはいえ、研究中はほぼ座りっぱなしだったわけで。身体能力が足りなければ魔法で補えば良かったのもあって「ただ立っている」とか「正

確に秒数を数える」とかを苦手としている。
「助けてくださいませ、リディアーヌ様」
「残念だけど、アンナの代わりを完璧にこなせるようになってくれないとわたしも困るの。アンナに休みをあげられないじゃない」
普通に話してくれ、とオーレリアに頼んだ俺だったが、私室で寛いでいる時など他に人がいない場所以外では主従として振る舞わなければならない。
幸い、黒髪黒目にシックなメイド服が物凄く似合うので、思ったよりも師を使用人として扱うことに抵抗はなかった。
要はそういうロールプレイだと思えば順応できる。まあ、なんかそのうち「よくも私を下に見てくれたわね」とか言って変な悪戯とかされそうなので適度にガス抜きもさせているが。
エマがあまり変わらない表情へかすかに「困った」風にして、
「オーレリアには他の仕事もありますから、アンナの代わりにするには時間がかかりそうですね」
「アンナはとても頑張っているもの。だから仕方ないけれど、お休みをあげられな

いのは困ったものね……」

　オーレリアが向こう三年にわたって騎士団の捜査を手伝う義務、および王家からの魔道具製作依頼を可能な限り請ける義務を負っている。

　そのため屋敷でメイドの仕事に従事できるのはせいぜい週に三、四日。その日も魔道具の依頼がある時は部屋に籠もって製作しないといけないため、あまり働く時間が取れない。一度見聞きすれば覚えられるチート魔法がなければ先が思いやられたところだ。

　しかし、アンナの休暇問題もなかなかに深刻である。

　ジゼルの件から屋敷の人員整理が終わるまでの間は他のメイドに世話を任せるのが怖い状況だったし、それ以降もアンナ自身が頑張り屋なのもあってついつい頼ってしまっていた。そのせいで週二日は取れるはずの休日を週一日さえ安定してあげられていない。

「やっぱり、アンナがいない時はエマにお願いするしかないかしら」

「……ご命令とあらばもちろんお受けいたしますが」

「ありがとう。なら、いっそ専属契約をしてくれないかしら」

仕事ができて物おじしなくて自己主張が強くないというメイドの鑑のような彼女に直球のお願いを投げれば、もう何度も聞いた返答が打ち返されてきた。
「お断りします」
残念ながら高嶺の花を射止めるにはまだ好感度が足りないようである。

「医師からの最終的な診断が出ました。男の子を懐妊しているそうです」
「そうか、男の子か！　よくやったぞ、セレスティーヌ！」
養母セレスティーヌの懐妊。
俺としてはなかなかに衝撃的な出来事である。彼女が屋敷に来てから既に何年も経っている。これはもう、両親の夫婦生活は冷え切っているのでは？　と思っていた中での報告だった。
前世の経験から、男にとっての愛と性欲がイコールでないことは知っている。理性で欲を抑えることはできても、魅力的な異性から関係を迫られたら興奮してしまうのが男だ。だから『お母さまのことはもう忘れてしまったのね!?』とか騒ぎ立

てるのは我慢したが、両親が裏でそういうことをしていた、というのは正直あまり知りたくない情報だった。

　そういえば前にナタリーから俺がラフデザインを描いたチャイナドレスについて詳細を聞かれた。我が儘な長女＝俺の手がかからなくなったところでセレスティーヌが煽情的な衣装を武器に徹底攻勢をかけたのだとすると、あれ？　もしかしてこれって俺のせいなのでは？　という気さえしてきて若干凹む。

「おめでとうございます、お母様。では、私に弟ができるのですね？」

「ええ、そうよ。仲良くしてあげてくれるかしら？」

「もちろんです。ああ、どんな子なんでしょう……！」

　俺がテンションを落としている中、実の娘であるシャルロットは素直に母の妊娠を喜んでいた。

　家族の中で一番下だったシャルロットにとって、弟ができるのはとても目新しい出来事である。前世で姉から「末っ子はいいわよね。可愛がってもらえて」などとねちねち言われた経験のある俺からすると『この子、実際に弟ができたらさみしがるんじゃない？』という思いもあるが、別にシャルロットの気持ちが間違いとい

うわけでもない。

「では、お養母さまのお腹の中に新しい命がいるわけですね」

形式的に「おめでとうございます」を言った上で、俺は呟くように告げた。

食事の席なのでセレスティーヌとはテーブルを隔てている。前に一度だけお腹を触らせてもらった時は赤子の気配も何もなかったが、人の体内に別の命が宿っているという状況についてはあらためて不思議な感覚を覚えた。

何しろ、他人事ではない。

前世では「ふーん、そういうものなのか」で済んだが、今世の俺にとって妊娠はいずれ自分も通る道。今まで観念的に理解して理屈の上で納得していた「男と結婚してその子を産む」というプロセスを再度、感覚的に認識せざるを得なくなった。

良く言う「お腹を痛める」という表現は比喩ではないはずだし、十か月もお腹の中に子供を宿したままになるということ、それを良しとしなければならないことに今更ながら戦慄させられる。

そんな俺の想いをどこまで読み取ったかは定かではないものの、セレスティーヌは俺に笑顔で頷いて、

「旦那様との間に産まれた初めての子供です。……祝福してくれますか、リディアーヌ？」

やっぱり、つくづくずるい女だ。

さっき「おめでとう」は言っただろうに、あらためてそれを尋ねてくる。同じ女であり、母アデライドに強い執着を残す俺に明確な対応を迫ってくる。

父とセレスティーヌの子。

二人の間に子が生まれたことは政治的にも大きな意味がある。後妻であるセレスティーヌが宰相と愛し合った何よりの証明となるからだ。公爵家に齎された四人目の子供は産まれるどころか母のお腹を大きくするより前から公爵家と、そしてセレスティーヌの立場を盤石なものとした。

俺は、それを分かった上で養母に微笑みを返す。

「ええ。元気な男の子が生まれてくることを心よりお祈りいたします、お養母さま」

セレスティーヌに対して思うところがあるからと言って子供に当たるのは間違っている。それに、女である俺にとって男子の誕生は自らの領分を脅かすことにならない。公爵である父の血は俺も引いているわけだし、弟は普通に可愛がって問題な

い。

むしろ、心配なのは――。

「私からも『おめでとう』と言わせてください。どうか出産まで安静になさってください、母上」

「ああ、アランも、ありがとうございます」

貴族らしい紳士的な笑みを浮かべながらも、どこか表情に翳りの見える兄・アラン。

彼にとって男の子の誕生は大きな意味を持つ。父であるジャンが未だ三十代。次男が成人するまで職に就き続けることも不可能ではない。つまり、アランにとってこの新しい兄弟は次期宰相を争う上でのライバルなのである。

もちろん、能力の面では年上であるアランに大きく軍配が上がるだろうが、こと後継者争いに関しては年齢も大きな意味を持つ。若い人間が後継者に就けば次に職を引き継ぐまで猶予を長く取れる。ならばむしろ若い方がいい。なんなら兄を「中継ぎ」として弟が一人前になったら職を譲らせる、などという手もある。

アランの立場からすれば素直に祝福できるわけがない。

まったく、家族が増えるという祝い事で何故ここまで色々考えなければいけないのか。

貴族の厄介さをあらためて実感しつつ、俺は父とシャルロットを中心とするお祝いムードが一段落するのを待って話題を変えた。

「ところで、お養母さま。シャルロットの魔法教師をどうなさるか、目途は立ったのでしょうか？」

章イメージ



魔法教師と里帰りの相談

「実のところ、シャルロットの教師探しは難航しています」

シャルロットは約一か月前――卒業記念パーティー襲撃の夜に魔法へ目覚めた。妹の才能開花を喜ぶと共に、寝ている時に身体が光るという平和的な発現方法に心底ほっとしたものである。

さて。

魔法が使えるようになったからには教師が必要になる。当然、セレスティーヌも伝手をあたっているものの、結果は芳しくないらしい。

「魔法の教師は常に不足しているものなのです」

子供の魔法は暴走しやすいため、これを抑えられるのが最低条件になる。子供と同じ属性だとか、最低限の治癒魔法が使えるとかはサポートの助けになる。

ただ、条件の良い教師は引く手あまただ。

頼もうと思っていた相手が他の生徒で手いっぱいということも多いし、派閥の関係で頼みづらい相手というのもいる。

我が家には第三王子の関係者筆頭がいるので第一王子派や第二王子派は呼びづらいだろう。『って、またわたしのせいなわけ!?』。

「一年間等の期限付きであれば比較的融通が利くのですけれど、シャルロットには長期指導の可能な教師を付けたいですからね」

言って、娘へ愛おしげな視線を注ぐセレスティーヌ。

相変わらずシャルロットにだけは妙に甘い。俺やアランが叩かれて伸びるタイプだから、というだけではない。やっぱり実の娘というのは可愛いのだろう。

金髪に緑の瞳、母とよく似た容姿の義妹は微笑によって母に応え、それから意を決したように口を開いた。

「あの、お母様。オーレリア様にはお願いできないでしょうか？」

「それは……」

養母の視線が俺に向く。

任せるということらしい。こくりと頷いてシャルロットを見る。なお、当のオーレリアは魔道具製作のために部屋に籠もっている。ある程度こちらの裁量で返答が可能だ。

「今のオーレリアなら命じられれば断れないとは思うけど、やめておいた方がいいわ。王家からの依頼で忙しくしている身だもの」

メイド修行の時間を充てれば不可能ではない。

ただ、下手をすれば「魔法教師のせいで魔道具の注文を滞らせている」などと噂になるかもしれない。そうなると教えを受けているシャルロットにまで悪評が及びかねない。

ちなみに俺の指導に関しては以前からの継続案件なので例外である。

これにはアランも深く頷いた。

「魔法に関してはかなり気難しい人物なのだろう？　シャルロットにも必要以上にきつくあたるかもしれない」

「ああ、私もアランに賛成だ。そもそもリディの教師につけるのも反対だったのだからな」

「お父さま、まだその話をなさるのですか」

「仕方ないだろう。奴は腕はともかく人格に問題がある」

うん、それは俺もそう思う。

「いっそのことお養母さまが教える――と、いうのも難しいのでしょうね」
「はい、お姉様。今のお母様に無理はして欲しくありません」
こくりと頷くシャルロット。妊娠がなかったとしてもセレスティーヌはかなり忙しい。お茶会やパーティー、夜会に出向いたり各所へ手紙を出したり、人を使って情報収集にあたったりと見た目以上にせわしなく動いている。その上、魔法の教師まで行うのはオーバーワークだ。
セレスティーヌもこれに眉を寄せて、
「属性も同じですから教える事自体は可能ですが、教育については素人です。初歩だけならまだしも継続的に教えるには向かないでしょう。それに、シャルロットとは似ているからこそ私の魔法観を押し付けることになりかねません」
「魔法には自由な発想も必要だものね」
「リディが言うと説得力があるね」
できないと決めてかからずとりあえずやってみろ、そうすれば何か方法が見つかる……というのはオーレリアから教わったポイントだ。
安全のためには基礎と常識が重要だが、魔法の使い手として大成させたければ幼

少期の発想力は潰さないほうがいい。
　ここで父が話をまとめて、
「今後数年にわたって対応可能で、住み込みが可能であること。派閥の問題がないこと。シャルロットと属性が被っており、治癒や防御の魔法を使えること。シャルロットにきつく当たらず、なおかつ同性であること。条件としてはこんなところか」
「父上。同性は絶対条件ではないと思いますが……」
「お兄さま。お父さまとしてはシャルロットが心配なのよ」
「当然だ。お前達はみんな私の大事な娘だからな」
　特に照れるでもなく頷く父。彼のこういうところは本当に格好いいと思う。妻に頭の上がらないヘタレだし、少々過保護すぎるのが玉に瑕だが。
「でも、確かにこれは簡単には見つからなさそうだわ」
「……条件に該当する、という意味であれば私は今、一人思い当たりました」
「え？　お母様、どなたですか？」
　きょとん、とするシャルロット。彼女は母の視線を追うようにしてこちらへ向き、俺と目を合わせた。

「お姉様、ですか？」
「お養母さま？　確かに条件としては合いますが、住み込みが可能なのも派閥の心配がないのも当たり前ではありませんか」
家族なのだから同じ家に住んでいるのは当たり前だし、懸念されていた派閥問題も俺自身なら大丈夫に決まっている。
「あれ？　お姉様は火属性なのでは……？」
「わたしは火と光の二重属性なの。全属性のオーレリアに比べたら大したことはないし、属性なんてそもそも大きな問題じゃないと思うけど」
自分の力を自慢するのが普通に恥ずかしい俺は笑って誤魔化しながら肩を竦めて、
「というか、一歳しか違わないわたしに教えられるなんてシャルロットが嫌でしょう？」
「それは……どうですか、シャルロット？」
俺とセレスティーヌから見つめられたシャルロットはしばらく考え込んだ後、言いづらそうにしながらこう答えた。

「わ、私はお姉様に教えて欲しいです。そうすればお姉様の魔法に少しでも近づけるかもしれません」
「リディアーヌのやり方は真似しないで欲しいのですけれど」
「お養母さまはわたしを教師に据えたいのか据えたくないのかどちらですか。……でもまあ、そうですね」
俺は自分のスケジュールを振り返ってみる。
最近、座学に関しては前もって教本を暗記し、授業時間は教師への質問等に充てている。その方が時短になると気付いたからだ。お陰で前以上にどんどん進む。
数学なんて既に教わることがないレベル。日常生活では四則演算ができれば十分だし、連立方程式とかになると「学者でも目指すおつもりですか？」という世界。
礼儀作法やダンスに関しては相変わらずみっちり練習させられているものの、以前よりも体力がついてきたせいか練習が捗るようになった。
ノエルに剣を教えてもらうようになってから日常的に身体強化というか「身体の成長を調整する魔法」をかけているのも原因かもしれない。具体的には細く女性らしい見た目のまま力と体力があって、日焼けや病気に強く丈夫で、傷が治りやすく

て（以下略）といったイメージ。
常用する関係で消費魔力は控えめにしているが、ないよりはマシのはず。
人と会う予定も依然として減る気配はないものの、学園へ通う必要はなくなった。移動時間が削れるうえに師との会話を夜の自由時間にズラせるので、週に二、三度、一コマ分程度の時間は作れる。
「あまり長くは無理だけど、少しなら時間が空けられると思うわ。……シャルロットさえよければ、他の先生が見つかるまでわたしが魔法を教えましょうか？」
「いいんですか？　ありがとうございます、お姉様！」
ぱっと表情を輝かせたシャルロットが飛び上がらんばかりに喜ぶ。食事中でなかったら抱きつかれていたかもしれない。
それを見たアランが「少し羨ましいな」と呟く。
「では、アランお兄さまは今度、わたしの剣の稽古に付き合ってくださいませ」
「剣か。リディと剣を交えるのは怪我をさせそうで怖いんだけど……いいよ、やろうか」
「嬉しい。約束ですよ、お兄さま？」

こうして、シャルロットの魔法教師はまさかの俺――リディアーヌ・シルヴェストルが務めることになった。

この件をオーレリアに告げたら「その歳で教師なんて快挙じゃない」とからかわれた。

学生で弟子を取った人間に言われたくはないと思ったが、アンナには「どっちもどっちです」と言われた。

そしてそんな折、我が家をさらなる事件が襲った。

「父上が限界を迎えているらしい。以前から定期的に届いていた『孫に会わせろ』という要求がいよいよ危険な域にまで到達している」

ある日の夕食にて父が俺たちへ告げた言葉。それが俺を前代未聞の体験へと誘う最初のきっかけだった。

「お父さまのお父さま……ということは、わたしたちから見たらお祖父さま、ということよね？」

「ああ、そうだ。アランとリディの実の祖父――シャルロットにとっても親戚筋にあたる。そして、前王国宰相でもある」

シャルロットの父、つまりセレスティーヌの前夫は父の従兄弟にあたる人物。よってシャルロットから見ると俺やアランの祖父は「祖父の兄弟」ということになる。

それを考えると俺とシャルロットは全く血が繋がっていないわけではなく、親同士がいとこ、すなわちはとこの関係だったりする。二人揃って母親似なので公爵家の特徴をあまり受け継いでいなかったりはするのだが、

「シルヴェストル公爵家の人間は頑固で一筋縄ではいかない人間が多いのだが、父はその典型例だ。一度本気になったら簡単には引かない。無視すれば毎週のように文が届く事だろう」

心の底から面倒臭そうに告げる父を見ながら、俺とアラン、シャルロットは顔を見合わせた。

「お父さまも間違いなく公爵家の血を引いているわね」

「そうだね。お祖父様も女の子に甘いのかな」

「お父様をより強力にしたような方、ということでしょうか」

ここで父が泣きそうな顔になったので俺とシャルロットで協力して「お父さま大好き」攻撃を仕掛け、なんとか機嫌を治してもらった。『もう、お父さまったら。そんなだから気難しいって言われるのよ!?』。

「父上、限界というのはお祖父様の我慢が、ということでしょうか」

「うむ。父は引退後、シルヴェストル公爵領で隠居している。せわしない宰相職から解放されてのびのび暮らしているはずだが、お前達には小さい時に会ったきりだからな。会いたいという欲が抑えきれなくなったのだろう」

会ったと言われてもまるきり憶えていない俺だったが、それもそのはず。生まれたばかりの頃に一度、祖父が屋敷へ来ただけらしい。それではアランも二歳とかだから憶えていなくて当然だ。

ちなみに、幼少期の記憶にはなるべく記憶探査魔法を使わないようにしている。情動が幼稚すぎて気持ちまで引っ張られそうになるからだ。赤ん坊の頃となると視覚そのものが未発達だから猶更遡る気にならない。

「お祖父様がお屋敷へ来られるのですか？」

「いや。向こうとしてもそれは最終手段だろう。現段階では孫達――特にリディを

公爵領へ連れてこい、というのが父上の主張だ」

メイドを含めた一同の視線が俺へ集まる。

何故そこで名指しなのか。いや、わからなくはない。同性の子より異性の子の方が可愛いのは当然である。

念のために言っておくが性的な意味ではない。単に同性なら会わなくとも気性が知れるという話。俺だって、前世における姪っ子が甥っ子だったらたぶんさっさと蹴飛ばして黙らせていた。まあ、甘やかした結果が女性不信の加速に繋がったのだが。

「一度会いに行った方がいいかしら。……でも、今は時期が悪いのよね」

「ああ。公爵領までは馬車を使ってもそれなりに距離がある。私は休暇を取るのが難しいし、セレスティーヌを同行させるのも気が引ける」

向こうで出産まで済ませるのならむしろアリだが、そうすると今度は戻るタイミングが難しい。赤ん坊を連れての移動は危険度が跳ね上がる。父としてもセレスティーヌ&赤ん坊の顔を何か月も見られないのは大変なストレスになるだろう

しかし、祖父にここまで来てもらうのも心配だ。主に腰とか。

「……そうすると、わたしたち三人で里帰り？」

分家出身であるシャルロットは小さい頃は向こうにいたはずだが、俺とアランにとっては初の公爵領行きである。里帰りというより旅行という感覚が強い。

ちょっと楽しそうではあるが、電車で数時間とかならともかく宿泊込みでの大移動だ。純血派のせいで国内が荒れている今、少々不安が残る。

全員が沈黙すると、父はこほん、と咳ばらいして言った。

「まだ決まったわけではない。手紙で父を宥めてみるつもりだし、もう少しいい方法があるかもしれない。ひとまず気にせず生活を続けなさい」

しかし、こういう時の楽観視に限って裏目に出たりするものである。

シャルロットと初めての魔法授業

「師匠。人へ魔法を教える際に大事なことはなんでしょう？」

一日が終わり寝る前の時間は師と語らえる貴重な時間だ。

オーレリアは他に人がいるところでは魔法の話をしたがらない。最近はアンナとエマ、ノエルまでなら許してくれるのでこれでも丸くなった方である。

お互いに寝間着姿でテーブル越しに向かい合った状態。

暖かさと可愛さ優先の俺に対して、オーレリアの寝間着は布地が少なく妙に煽情的なデザインである。男の気を引くのに効果が高そうな勝負下着風。しかし、チョイスの理由はひとえに「布が少ない方が楽だから」。なんというか、そんなことだから魔女と呼ばれるのである。

前世の記憶を取り戻してから一年半。なんだかんだで自分以外の柔肌も見慣れた。

女の身体を前に平然としているようになったらやばいと危機感を持っていたものの、毎日のようにアンナと風呂へ入り、週に二度は服装のだらしない美女（オーレリア）を世話し

ていたのだ。さすがに慣れも出てくるというものである。
今までは頑なに大浴場を避けて部屋風呂で通していたが、エマからは「他のメイドがリディアーヌ様のお世話を覚えられません」と苦言を呈されている。そろそろ大浴場に移動するか、風呂の世話役を増やした方がよさそうだ。アンナの裸は見慣れても他のメイドに囲まれたらまた緊張するかもしれないし。
と、それはともかく。
仕事中はアップで纏めている髪を無造作に下ろした師は「そうね」と宙へ視線を泳がせて、
「とっておきの魔法を教え子に盗まれない事かしら」
「確かに大事ですが、わたしは教える際のコツが聞きたいのです」
「我が儘な子ね」
などと言いつつも今度はもう少しまともなアドバイスをくれた。
「私は結局、貴女以外へまともに教えた事がないわけだけど」
「はい。まともな教師の経験がないわけですね。それで？」
「最近私の扱いが雑じゃないかしら。まあいいけれど……私なら、教え子を可能な

限り短期間で『魔力制御できるように』育てるわ」

「制御、ですか」

自分の時はどうだったかと思い返してみると、俺は荒療治で訓練課程をすっ飛ばしたので、オーレリアと会った時にはもう魔力制御ができていた。『わたし自身の経験はまったく参考にならないわね、相変わらず』。

ぴっ、と、オーレリアの指が一本こちらへ突きつけられて、

「ある意味、貴女の学習法は最良よ。魔力というのは中途半端に制御できる時が二番目に危ないのだから」

「一番は目覚めた瞬間ですか？」

「そういう事」

なるほど。目覚めた時は全く制御がきかない。俺やオーレリア、それからシャルロットの例からして何らかの感情が強く動いた時に発現しやすいようなので、心の赴くまま魔法を使ってしまい非常に危ない。

魔力制御を覚え始めて中途半端に操られるようになった頃はこれに次ぐ危険度というわけだ。制御が未熟なのでこれまた暴走しやすい。落ち着いてやれば問題ない

だろうが、これまた感情が昂った時が危ない。
「私は何年もかけて訓練しましたが……」
こまごました仕事をしてくれているアンナが呟くように言うと、オーレリアがふっと笑って、
「アンナの魔力じゃ暴走しても大した被害にならないでしょう」
「その通りですけど、もう少し言い方がありませんか……!?」
うん、アンナもだいぶオーレリアに慣れてきた。同僚になったうえ向こうはもう王族ではないので、多少失礼な口を利こうと叱責されないし。
「上位の貴族になるほど、魔力が高ければ高いほど危険だって事。だから通常、魔法に目覚めたばかりの子供は『教師のいない所で魔法を使うな』と徹底的に叩き込まれる」
「授業の時以外は使わない、と徹底する事で心理的な枷を作るわけですね」
しかし、これも絶対ではない。だからこそ魔力制御をなるべく早く終わらせるというわけだ。
「制御ができるようにならないと魔法の訓練は面白くならないしね。早く終わらせ

る理由としてはそれもあるわ」
「わたしは師匠の言う『一番面白いところ』も大して教わっていませんが」
「だって貴女の場合、こうやって話したり、時々成果を見てやるだけで十分だもの」
自分と傾向が似ているので皆まで教えなくても結果がわかる。たまに結果がブレたりあさっての方向へ行くとそれはそれで楽しいのでOKという思考だ。この人はつくづく教師というものに向いていない。ごく一部の人間にはこのアバウトさがぴったりと合うというだけだ。
「少しは参考になったかしら？」
「ええ、ありがとうございます。ビジョンが少し明確になりました」
「妹の魔法教師ね。まあ、いいんじゃない。私よりは貴女の方が向いているでしょう」
「自分で言わないでください」
ジト目で見ればさっと目を逸らされた。
俺はため息を吐いて、
「それから、もうご存じかもしれませんが、しばらく公爵領の方へ旅行することに

なりそうな気がします」
「ああ、前シルヴェストル公爵のご機嫌取りね。……実際、こちらから出向いた方がまだマシでしょう？」
「方々への影響を考えると、そうですね」
引退して久しいとはいえ、祖父は元公爵にして元宰相。知り合いはたくさんいるし、その能力を買っている者も少なくないだろう。
純血派の件でごたごたしている王都に祖父がやってきた場合、同世代の人間たちがにわかに活気づく恐れがある。これ以上変な派閥が増えるのはごめんだし、祖父が現役時代を思い出してしばらく滞在するとか言い出したら正直面倒くさい。
「わたしたちが成長したら余計に時間を取れなくなりますし、おそらく今のうちにのんびり顔を見せておくことになるでしょうね」
「わかったわ。留守番……と言うほど屋敷にはいられないでしょうけど、しばらく会えないのは承知してあげる」
「ありがとうございます」
オーレリアは一応俺が首輪をつけているという体なので、俺が王都を離れる際は

代わりにルフォール侯爵家で監視されることになるだろう。
　騎士団の手伝いと魔道具製作もあるので連れて行くのも無理。それがなくても注目されている身なので、王都から離れたら「国外逃亡か？」とか言われかねない。
　護衛要員としても魅力的な人材だが、変な恨みを持った奴らに付け狙われないとも限らないし、プラスとマイナスで相殺だろう。
「ノエルはたぶんついて来てくれますし、我が家の兵はこういう時のために多めにいますから移動の心配はあまりないでしょう」
「そうね。方々への連絡だけはちゃんとしておきなさいよ。リオネルとか絶対騒ぎだすでしょうし」
「う。ええ、はい。考えただけで憂鬱ですが、きちんと対応したいと思います」
　それから二週間もしないうちに父がげっそりした顔で「すまないが、子供達で公爵領へ行ってきてくれ」と言ってきて、俺たちの公爵領行きが決定した。

「それじゃあシャルロット。魔法の勉強を始めましょうか」

「はい。よろしくお願いします、お姉様……！」

セレスティーヌの部屋と同じく、白と金を基調に整えられたシャルロットの部屋。

ソファの一角にぬいぐるみが並んでいたりして女の子らしい可愛らしさもたっぷり感じられる。チェス盤や盤上演習の道具が並んでいたり、本棚に本がぎっしりだったり、パーティーの時から愛用している装飾剣が保管されていたりする俺の部屋とは大違いだ。

魔法の勉強初日となる今日は俺もシャルロットも普段着のまま。

俺が教師になると決まってからしばらく待たされた義妹はどうやら待ちくたびれていたようで、やる気満々といった表情で俺を見つめ返してきた。

「やる気があるのはいいことね。魔法が使えるようになったら、シャルロットはなにを目指すのかしら？」

やっぱりセレスティーヌの魔法の再現だろうか。子供にとって親の魔法というのは憧れだろう。

と、俺が考えていると、シャルロットは「はい」としっかり頷いて、

「私は自分で自分の身を守れるように最低限の力を身に着けたいのです」

「……そう。シャルロットは立派ね」

思ったよりもずっとしっかりした答え。パーティー襲撃の件で思うところがあったのかもしれない。俺は目を細めて心からの賞賛を口にした。頭を撫でてやりたくなったが、テーブルの向かいにいるので手が届かない。

「それなら、無事に強くなるためにも最初にいくつか約束して欲しいの」

「は、はい」

ここで「授業の時以外は魔法の練習をしないこと」「気持ちを一定以上に昂らせないように気を付けること」などいくつかの約束事を提示。守ってもらうようにお願いして、シャルロットがしっかり頷いてくれるのを待った。

「ありがとう。……それじゃあ、始めるわ。ちょっとスパルタでやるつもりだけど、オーレリアさまみたいな馬鹿な真似はしないから安心して」

これはどちらかというと傍で見守っているメイドたちへの宣言。

シャルロットもそれがわかったのかくすりと笑って「はい、お願いします」と頷いた。

ここで俺は義妹に小さなペンダントを手渡す。チャームがロケットになっていて

中に物が入れられるタイプの品だ。
「中を見てみて」
「はい。……あっ、薄い黄色の石。これって魔石ですよね？」
「ええ。光の魔法が籠められた魔石。触ってみて？」
「わかりました。……んっ、あっ！」
義妹の小さく細い指が魔石に触れると、それだけで石がひとりでに輝きだした。
このペンダントは俺が自作した魔道具。
家のトイレなどと同様、触れただけで魔力が流れて発動するタイプだ。初めて作った上に魔石も小さいので大した性能はないものの、この場合はその方が好都合。
「身体から指へ向かって魔力が流れる感覚、わかるかしら？」
「なんとなくはわかります。でも、はっきりとは……」
尋ねると、シャルロットは曖昧な表情を浮かべて首を振った。俺はそれに微笑んで頷く。
「初めはそれでいいの。何度も試して慣れるためにの魔道具だもの」
「何度も？」

「小さな魔石だし、魔力効率を悪くしてあるからあまり効果がもたないの。指を離してしばらく放っておくとひとりでに消えるはずよ」

実際、義妹が指を離したら二、三分で光は消えた。

「あっ、だから何回も練習できるんですね？」

「そういうこと。光の魔法だから馴染みやすいだろうし、ロケットを閉じておけば肌に触れることもないから勝手に発動したりもしない。持ち運びにも便利だから、あんまり短時間で根を詰めず、時間が空いた時に少しずつ練習してみて」

「わかりました。ありがとうございます、お姉様……！」

魔法を使う第一歩は魔力の流れを知覚すること。俺のような荒療治はもちろんできないので、シャルロットにはもう少し穏便な方法を取ってもらう。とはいえアンナのように一年間瞑想なんてやってられないので魔道具を使って時間短縮である。

持ち運びできる魔道具があれば気軽に練習できる。身体から魔力が流れる感覚を何度も覚えれば普通の魔道具を使うくらいは問題なくできるようになるはずだ。

「あなたたちも、シャルロットが無理しすぎないように注意してくれるかしら？そんなに魔力は使わないはずだけど、消える端から繰り返していたらそのうち倒れ

かねないし」

「かしこまりました。……リディアーヌお嬢様、過分なご配慮、誠にありがとうございます」

「そんな。大事な妹のためだもの、これくらい当然よ」

シャルロットの専属はセレスティーヌが前の家から連れてきた人間だ。もっと幼い頃からシャルロットを知っている彼女にとって、俺は快い存在ではなかったはずだ。下手したらジゼル以上に俺への憎しみを抱いていてもおかしくない。

俺とシャルロットは既に和解した形だが、メイドたちの心中まではわからない。ただ、この時のお辞儀と感謝の言葉には心からの気持ちが籠もっているように思えた。少しでも歩み寄ることができたのなら嬉しく思う。もちろん、シャルロットへの贖罪はまだまだこんなものでは足りないし、家族としても義妹にはもっと成長して欲しい。

俺はペンダントをぴかぴか光らせては難しい顔をしたりにこにこしたりするシャルロットをしばし、使用人たちと一緒に眺めたのだった。

旅行の準備

「お前だけ公爵領へ旅行なんてずるいぞ、リディアーヌ」
顔を合わせるなり理不尽な文句を言われた。
挨拶を一部省略、カーテシーで最低限の体裁を整えた俺はリオネルの向かいへ腰を下ろしてからゆっくりと口を開く。
「お土産はなにがよろしいですか？」
「む？　そうだな……公爵領の羊肉はとても美味かった。また食べたい気もするが、公爵家経由でなくとも手に入るからな。何か変わった物が欲しいぞ」
「かしこまりました。難しいご注文ですが、なにか面白そうなものを探してみようと思います」
微笑んで頷く。
帰りの荷物と一緒に生きた羊を輸送するのはあまりよろしくない。専用の馬車を使わないと羊にストレスが溜まって味が落ちるだろう。
何か良いアイデアはないかと頭の片隅で考えつつ、

「と、申しますか、リオネルさまは王都から出たことがおありなのでは？」
「まあな。遠乗りに同乗したり、狩りに連れて行ってもらったり、視察に行く父上に同行したり。だが、長くても二、三日だぞ。お前のように長いこと滞在したりはしていないし、遊ぶ時間も多くはなかった」
「陛下も妃殿下もお忙しい身の上ですからね……。リオネルさまだけを残して帰られるわけにもいきませんし」
　正室の長男である。何かあっては大変なわけで、むしろよく暇を見つけて色々連れ出してもらっている、と言うべきだ。王族だから大切にされているという以上に親から溺愛されているのが彼の素直な性格からも伝わってくる。
「わたしはこれが初めての遠出なのです。ひと月やふた月の静養は許してくださいませ」
　俺とシャルロット、アランがまとめて移動するとなると護衛やら何やらでかなりの人や物が必要になる。着いて二、三日で帰って来る方がむしろ大変だ。
　これまで孫に会えなかった祖父が「顔を見たからもう帰っていいぞ」などと言うとも思えない。

と、リオネルは端正な顔をぶすっとした感じに歪めて、
「それはそうだが……お前の顔が見られないと寂しいではないか」
素直か。『っていうか、実は天然の女たらしなんじゃないのこいつ』。
「わたしもしばらくお会いできないのは残念です。……チェスや演習の対戦を挑めませんから」
後半は照れ隠しだったが、向こうも一緒に遊ぶのが目当てだったようでにやりという笑みに変わった。
「むしろ練習のチャンスなのではないか？　アランにも指導してもらって腕を磨いて来い。だんだんお前の勝率が落ちているぞ」
「練習相手が少ないのが困りどころなのですよね。ところで、お兄さまとの戦績はいかがなのですか？　時々対局されてらっしゃるのでしょう？」
「う。ああ、まあ、結構勝っているぞ？　アランも意外と大したことはないな」
「セルジュさま。リオネルさまの勝率は三割といったところですか？」
「そうですね。二割八分……およそ三割です」
「お前達！　せっかく誤魔化したのに容赦なく暴くんじゃない！」

厳しいけど優しい側近の青年と情報を共有しあっていると、顔を赤くしたリオネルが声を荒げた。

「……そもそも、アランは手加減がなさすぎるのだ。父上も『チェスを指す時のジャンは普段以上に容赦がない』と言っていたが、おそらくあのような感じなのだろうな」

「アランお兄さまはとてもお優しい方ですのに」

「男相手に容赦がなく女相手に甘いのがシルヴェストルの男の特徴なのではないか？」

男はだいたいそうだと思うが。しかし、我が家の男は確かにその傾向が強い。女にだらしがないのではなく紳士的で強く出られないという意味で。

ここでセルジュが笑いを堪えながら、

「リディアーヌ様。どうかお気を悪くなさいませんよう。リオネル様は貴女様と過ごす時間をとても気に入っていらっしゃるのです。肩の力が抜けたいい表情をしていらっしゃいます」

「おい、セルジュ」

「これは失礼いたしました」
うん、余計な気を遣わなくていい関係は俺としても安心できる。
「なにか連絡を取る手段があればいいのですが、難しいのですよね」
「ほう、お前でも作れないのか？」
「魔力は遠くまで届かないのです。これればかりはなかなか解決のしようが……」
俺たちはいつもと同じように、時間の許す限り雑談や遊びに興じた。

「リディアーヌ様。本日はお招きいただきありがとうございます……！」
「ようこそ、サラ。でも、そんなに畏まらなくても大丈夫よ」
友人の一人であるサラ・モレ伯爵令嬢はよそ行き用のドレスを纏い、ガチガチに緊張しながら俺へ挨拶をしてくれた。
少々真面目すぎるのは相変わらずのようだが、薄紫色の髪やほとんど日に焼けていない白い肌は前よりも艶があるように見える。
髪と同色の瞳も緊張の色だけでなくきらきらとした輝きを宿している。

「最近はよく眠れているのかしら？」
「はい。リディアーヌ様から素敵なドレスをいただいたお陰です。着ていくドレスがあると思うと、他の方のお宅へお呼ばれするのが少し楽しみになりました」
「それは良かったわ」
サラへと譲った何着かのドレス。売り払って金に換えられやしないかと少し心配していた。さすがにあの両親もそこまで考えなしではなかったか。
まあ、王都の服飾業者は多くがシルヴェストル公爵家と繋がりを持っている。上等なドレスを無造作に売り払おうものならたちまち誰かの目に留まってセレスティーヌの耳に入る。そうなればモレ伯爵家は「温情をかける余地なし」と判断されて針の筵となるだろう。
「もう少し何かしてあげられるといいのだけれど」
「いいえ、そんな。今の私にはリディアーヌ様にお返しできる物が何もありません。一方的に施しを受けるだけの立場ではお友達なんて恥ずかしく名乗れません」
「本当に、サラは良い子ね」
「そ、そんなこと……」

恥ずかしそうに目を伏せる少女へ「それじゃあ、行きましょうか」と声をかけ、庭を歩いていく。

「皆様はもうお集りなのですか？」

「ええ、ほとんどがもう到着しているわ。だから、一人だと心細いかと思って迎えに来たの」

「ありがとうございます。私、こんな会は経験がありませんから……」

今日の会場は俺の部屋ではなく庭の東屋だ。人数が多いのと、春になって暖かくなってきたことが主な理由。庭は少々入り組んでいるので案内がないとなかなかたどり着けない。

「そんな緊張しなくてもいいのに。男爵家や子爵家のご令嬢だっているんだから」

東屋へ近づくと女の朗らかな話し声が聞こえてくる。一瞬びくっとしたサラだったが、さすがに逃げ出したりはせず、意を決したように歩を進めてくれる。

白塗りの大きなテーブルに六、七名ほどの少女たち。

俺たちの接近に目ざとく気づいて視線がこっちへ注がれる。なかなかのプレッシャーがかかる中、サラは緊張しつつも丁寧に皆へ挨拶をした。

「ごきげんよう、サラ様」
「お会いできて嬉しいですわ」
返ってくるのは穏やかな声。優しそうな態度＝本当に歓迎されているとは限らないのが貴族社会の恐ろしいところだが、俺の友人たちは概ね言いたいことははっきり言うタイプ。サラもほっとしたように表情を和らげ、身体の緊張を少しほどいた。
俺とサラはそれぞれ席につく。ホストであり地位的にも最上位にあたる俺は上座、サラはどちらかというと下座よりなので一緒には座れないが、こればかりは仕方ない。
なお、俺の左隣の席はいまだ空席。
「これでいらしていないのはルフォール家のご令嬢と――」
誰かが口にしたところで、馬車の音がかすかに俺たちの耳へ届いた。噂をすれば。美しい銀髪を携えた儚げな少女が白いドレスをまとって会場へと現れる。
彼女は清楚かつ上品なカーテシーをもって一同へ挨拶すると、その後で俺を見て微笑む。
「こんにちは、リディアーヌ」

「ええ。元気そうで何よりだわ、ヴァイオレット」
途端、和やかだったお茶会の席がざわっとした。
「リディアーヌ様？　ルフォール様とは親しいご関係だったのですか？」
「え？　ええ、そうですね。顔を合わせて話をするのはまだ何度めかといったところですが、お茶の話で意気投合いたしました。その縁でお互い気兼ねなく呼び合うように……」
「なんということでしょう……！」
「リディアーヌ様からの呼び捨ては構いません。サラ様なども同じですし、親愛の証でしょう。ですが、リディアーヌ様を呼び捨てにするとは」
「ヴァイオレット・ルフォール様。これは重大な抜け駆けですよ」
複数人から放たれる強烈なプレッシャー。みんな笑顔を浮かべてはいるものの目が笑っていない。
どうやら俺とヴァイオレットの関係が羨ましいらしい。『そんなに怒るようなことかしらね？　友達同士なんだから呼び捨てにしあったって別にいいじゃない』。
当のヴァイオレットはわかっているのかいないのか、俺の左隣へ優雅に腰かけて

いるが――うん、不和の種は早めに潰しておくに限る。
「なら、みんなもわたしのことを呼び捨てにしたら？」
「それはいけません、リディアーヌ様」
「ルフォール様は侯爵令嬢ですし、王家からの信頼も厚い家柄ですからリディアーヌ様と対等にお話する権利がおありだと思いますが……」
じゃあ怒らなくてもいいじゃないか。
と、簡単にいかないのが人の心の難しいところ。友人に突然、親友のように振る舞う新しい友人が現れたら若干イラっとするのは免れない。だからといってヴァイオレットが悪いとも言えない。『じゃあどうすればいいのよ！　ああもう面倒くさい！』。
しばらくあれこれやり取りを繰り返した後、出た結論は、
「じゃあ今後、わたしはみんなを呼び捨てにするわ。みんなからわたしへの接し方は家格その他を考慮してちょうだい」
ものすごく当たり前の話だった。
仲のいいグループに新しいメンバーが加わる際、既存メンバーから横やりが入る

現象。これ、派閥と変わらないのでは？　と思ったものの、普通の派閥であればここまで自由な意見交換はできなかっただろう。これはうちのいいところである。
「それで、リディアーヌ様？　今日はどうしてこんなに大勢で？」
「これだけの人数で集まるのは初めてではないでしょうか」
「ああ、それは簡単よ。前もって手紙でも伝えたけど、しばらく屋敷を離れることになったの。だからみんなの顔を見て、話をしておきたかっただけ」
「さすが、リディアーヌ様は律儀ですね」
何か重大な話があるのでは、と警戒していたのか、何人かはあからさまにほっとした様子だった。
しばらく王都からいなくなるのも十分重要な話だと思うのだが。
「みんな、わたしがいない間に嫌がらせをされたらきちんと記録しておいてね。日付とおおまかな時間帯、場所と状況、その場には他に誰がいたか。首謀者を懲らしめてやるのに必要だから」
これをしっかり伝えておくのも目的のひとつ。俺がいなくなるのを幸いに勢いづく不届き者もいるかもしれない。ベアトリスは俺を倒すことに執心しているので他

の人間にあまり変なことをしないと思うが、その取り巻きや他の令嬢については保証がない。

　不在中の王都の様子を知るためにもお願いすると、友人の中でも位の高い者たちが微笑んで答えた。

「心配しないで、リディアーヌ」

「リディアーヌ様がいらっしゃらなくとも私達がいます。風通しのいい環境を守るためにも悪い輩は許しません」

　なんとも頼もしい返答に思わず笑ってしまった。

「ありがとう。でも、やりすぎちゃ駄目よ」

「もちろん、承知しておりますわ。戦うのはあくまで不正を許さないため。権力をかさに着て好きに振る舞うつもりはございません」

「良かった。じゃあ、お礼も兼ねてお土産をたっぷり用意するわね」

　後は和やかなお茶会。食べきれないほどのお茶請けと美味しいお茶を楽しみながら、俺たちは雑談に花を咲かせ、しばしの別れを惜しんだ

「身体の調子は問題ないようですね」
セレスティーヌの言葉に俺は「はい」と短く答えた。
「ですから手を離してくださいませ、お養母さま」
「ええ。もう確認は終わりましたから」
細く柔らかな手がすっと俺の身体から離れる。俺はほっと息を吐いた。ドレス越しとはいえメイドでもない相手にあちこち触られていたのだからさすがに緊張する。
何をされていたかと言えば体型の確認である。
初めてノエルと稽古した時にも手を触られたが、今回はより念入りに確認された形。あれから余計な筋肉で体型が崩れていないか、崩れる予兆がないかを調べられたのだ。
とりあえず確認は終わったのでお互いに座り直して、
「なにか問題はありましたか？」
「いいえ。特に問題はないでしょう。魔法によって成長の仕方を規定する……なん

とも大胆な発想ですね」

「……もしかして褒められているのでしょうか？」

事あるごとに呼び出されるのでだいぶ通い慣れたセレスティーヌの部屋。お互いの専属しかいないリラックスした状況故か、養母は呆れたような視線を遠慮なく俺へ向けてくる。

「発想と、それを実現する才覚については褒めています。ですが、大胆かつ奔放な性格についてはとても手放しでは褒められません」

「お養母さまのような細かいやり方はわたしには無理です。全く向いていません」

「ええ。だから貴女は場を支配しようとする。他者を敵と味方と中立の三つに分け、自身に矛先を向けた相手だけを容赦なく叩く」

これでもかと乱暴なやり方である。我ながらもう少し他にないのかと思わなくもないが、今更簡単には変えられない。

ふう、と、養母が小さなため息。

「アデライド様が健在であれば、そうした社交をなさったのかもしれませんね」

「お母さまはお優しい方ですから、わたしとは違うと思いますが」

セレスティーヌは俺を見てふっと笑った。馬鹿にされた感じではなく、どこか優しい雰囲気。

「他のやり方ができない以上、続けるしかないのでしょうね」

「そうですね。誰かに恨まれようと、憎まれようと、自分にできる方法で進むしかありません」

全く底が知れないこの養母はどうなのだろうか。どこまでが計算で、どこまでが不慮の事態だったのだろうか。

そして、どのくらい俺やアランに対して「親としての愛情」を感じているのだろうか。

「お養母さま。どうして急にそんな話を？」

「急ではありません。貴女達が公爵領へ向かう前でなければいけなかったのです」

それは身体の確認についてか、それとも。

「リディアーヌ。公爵領を見て来なさい。人も、物も。新しい経験は貴女にとっても悪いものではないはずです」

「はい。せっかくですから思う存分、楽しんできたいと思います」

深くは尋ねないまま、俺は養母に笑顔を返した。

公爵領への出発

若干早めに前倒された春の分の採寸（このデータは次の秋用のドレスに用いられる）を終えた後、シルヴェストル公爵家の兄妹はほとんど日を置かずに公爵領へと出発することになった。

出発前に屋敷前および庭へと停められた馬車の数は軽く十台以上。同行者の人数はメイドだけでも片手では数えられず、護衛の兵は三十近い人数。さらにいざとなれば御者も戦闘要員となる上、見習いとはいえ騎士であるノエルも同行する。

「おはようございます、リディアーヌ様」

「おはよう、ノエル。今日はいつもと違う格好なのね？」

「移動用です」

旅用の略式装束もなかなか似合っている。「凛々しくて格好いい」とノエルを褒めてから、彼女の傍らに佇む雄馬に目をやった。黒の交じる茶色の毛並み。瞳の輝きはどことなくやんちゃ坊主感がある。

騎士であるノエルは馬車に同乗すると何かあった時に対応しづらいということで

馬で移動する。乗馬は子供の頃から練習していたし、騎士団の訓練内容にも含まれているらしい。

「この子はノエルの馬なのかしら？」

「はい、ギーと言います。触らない方がいいですよ。私以外には懐かないので」

「あら？　そうなの？　なんだか歓迎されているようだけれど」

こっちに来い、とばかりに鳴かれたので近寄っていくとすりすりと頭を擦りつけられる。撫でてやれば嬉しそうに鳴かれた。

それを見たノエルは目を丸くして、

「兄達や他の騎士団員には反抗的な態度だったのに」

「この子、単に女好きなんじゃないかしら」

少し離れたところにいるアランには目もくれないが、その隣にいるシャルロットには「こっちに来ないかな」と流し目を贈っている。しかし、義妹は馬が怖いのか近づいてこようとはしない。

「お、お姉様。そんなに不用意に近づいては」

「大丈夫よ、シャルロット。動物は人間の男よりよっぽど紳士的だわ」

「……まあ、それはリディに同意するけれど」
アランが遠い目になりつつ苦笑する。なんだろう、男に幻滅する瞬間でもあったのだろうか。彼の名誉のためにも深く掘り下げるのは止めておこうと思う。
ノエルは不満そうに頬を膨らませて、
「ギー？　貴方、ちょっと調子が良すぎない？　お母様には大して懐かなかったのに」
「若い子が好きなんじゃない？」
「……できれば知りたくありませんでした」
その気持ちには同意できなくもないが、目を見て「ノエルをお願いね」と話しかけると「任せておけ」とばかりに鳴いてくれた。ちょっと可愛いと思ってしまう。人間、自分に懐いてくれる動物にはどうしても甘くなるものである。
「ほら、シャルロットも撫でてみたら？」
「わ、私は遠慮しておきます」
「馬車だって馬が引いてくれているのに」
貴族令嬢にとっての馬車は箱型の車内でのんびりするためのものなのであまり馬

には目が行かないのだろう。

いっそ自動車ならぬ魔動車でも作ってやろうか、などと考えつつ、俺はアランやシャルロットと共に一台の馬車へと乗り込んだ。

車内は詰めれば六人くらい座れるものの、生き物の引く馬車にとって積載重量の違いは重要だ。同乗するメイドは一人のみということになり、それにはエマが選ばれた。

「よろしくね、エマ」

「はい。任命された以上は全力で務めさせていただきますが……どうして私なのでしょうか」

「誰の専属でもないから公平だし、有事の際にも冷静に対応できそうでしょう？」

「……」

ここで「実質リディアーヌ様の専属では」などと言ったら墓穴を掘るからか、エマは何も言わずにこの状況を受け入れた。

「皆様、公爵領までは長旅になります。はしゃぎすぎて体調を崩されませんよう」

「は、はい、気をつけます」

「ふふっ。シャルロット？　エマは表情が変わらないだけで優しいからあまり緊張しなくていいのよ」
「申し訳ございません、シャルロット様。私は笑顔が苦手でして」
「そ、そうなのですね。……お姉様は常識に捉われない考え方ができて、やっぱりすごいです」
「シャルロット？　そうやってすぐわたしを褒めようとするのは悪い癖よ？　あなただって十分すぎるくらいにすごいんだから」
馬車は一応、俺とアラン、シャルロットそれぞれに専用というか、個人が専属と一緒に寛ぐ用の車が用意されている。休憩中に利用したり、場合によっては車中泊ができるようにという配慮だが、出発時に三人一緒にされたのも不安を和らげるための配慮だろう。
おかげで俺たちは雑談をしながら馬車が動き出すのを待てばよかった。ようやく前の馬車が動き出したら、既にさんざん別れを惜しんだ両親に手を振ってさらに挨拶をしながら、公爵家の屋敷を後にした。
しばらくは王都の街並みを走って、それから街道を走ることになる。

旅人や商人が移動しやすいようにと国費を投じて整備された道だが、石畳になっているのは王都近辺の主要な道だけ。それ以外は馬車がすれ違える幅＋αから草や大きな石を取り除いて平らにならした程度。

公爵家の馬車が快適に設えられた最新型とはいえ、道の方がその状況ではおそらくかなり揺れるだろう。

車を引いているのが生き物である以上、休ませるための小休止は必須だし、街灯も何もないため夜を徹して走るのも危険。

「……確かに、これは長旅になりそうね」

若干憂鬱になりつつ俺は呟いて、

「あら、平民街はこんな風になっているのね……！」

格好をつけた態度は残念ながら長くもたなかった。

王都の中でさえ、行ったことのない場所がたくさんある。馬車の中から街の様子を眺めるだけでも十分に目新しい。

ゴミ一つ落ちているだけで目立つくらい綺麗な貴族街と違い、平民街はかなり雑然としている。

人の通行が多いし、人々の纏っている服は簡素なものが多い。大通りには酒場や商店なども多いようで、呼び込みをする商人の声も窓越しに聞こえてくる。
「リディアーヌ様。決して窓は開けないようにお願いします」
「わかっているわ、エマ。だから、このまま外を覗く分には構わないでしょう？」
「あまり目立っていただきたくはありませんが……仕方ありませんね」
いかにも高そうな馬車。十台以上からなる大所帯。周りを固める兵の数。既にこれでもかと目立っているので俺が顔を出したくらいでは誤差だろう。
「お姉様、あまりはしゃぎすぎない方が」
「でも、シャルロット。こんな風景めったに見られないのよ？　ほら？」
「あ……っ。本当に、お屋敷の周りとは全然違います」
俺に促されたシャルロットも控えめながら窓の外を覗いて歓声を上げる。それを見たアランは苦笑いだ。
「リディのお転婆は知っていたつもりだけど、こういうのは新鮮だな」
「お兄さまも格好つけてないで見聞を広めたらどうです？」
「ここからでも見えるさ。それに、あまり刺激しない方がいいかもしれない」

「……ああ、そうですね」

道行く平民の多くはこっちへ視線を向けている。その中のいくつかは明らかな恐れを含んでいる。

捕縛された純血派のうち何人かは公開処刑となった。これ以上情報を持っていないと判断された人間を用いた見せしめ。俺は見ていないがかなり凄惨な光景だったらしい。見た者はもちろん、話を聞いただけの者も「貴族に牙を剥いたらどうなるか」あらためて思い知ったはずだ。

ただ、処刑によって「貴族は恐ろしいもの」という認識が広まってしまった。目が合っただけで殺されるかもしれない、とか思っている者がいてもおかしくない。

幸いなのはあからさまに怒りを向けてくる者がぱっと見ほとんどいないことだが——騎士団による強制捜査が実行中なのを考えるとまだ悪化するかもしれない。

普通にしている分には貴族だって何もしない、ということをわかってもらうのはなかなか大変かもしれない。

「シャルロット。平民の服装もよく見ておきましょう？　彼らの着ている服だって綿や革から出来ているんだもの。平民向けの服を発案することでも事業に貢献で

きるかもしれないわ」
「そうですね、お姉様。……あれ？　そういえば、平民の服はどうやって作っているのでしょう？　こんなに多くの方々がそれぞれ職人を招いていては大変ですよね？」
「平民は職人を招いたりしないんだよ。自分から出向いて発注するか、店で既製品を買うか、そうでなければ自分で作るかじゃないかな」
「職人でもない方が服を自分で作るのですか……!?」
「だからデザインが簡単になるのよ。難しい形でなければ作りやすいでしょう？」
平民街には古着屋も多い（らしい）し、ちょっと破れたりほつれた程度なら繕って直してしまう。その際にあて布をすることも多いので、平民の服はつぎはぎっぽくなっていたりするのだ……なんていう話をしているうちに門へさしかかり、王都の外へ出た。
「さあ、ここからが本番ね」
初めて会った時、リオネルへ偉そうなことを言ったものの、俺もこれが初めての遠出。窓から外を覗いて周りの景色がどうなっているか、どんな草や花が咲いて

いるかなどを目に焼き付けていく。シャルロットも「人がいないから怖くない」と思ったのか積極的に風景を観察し始めた。

アランは俺たちの様子を微笑ましそうに見ながら本を開き始める。

「お兄さま、読書なんてもったいないわ」

「道が悪くなったら本なんて読んでいられないだろう？　それに、王都の周りは植物も動物も少ないからね」

「確かにそうですけど」

シャルロットと顔を見合わせて「この感動がわからないのか」と首を傾げる。アランだって初めてだろうに……と思ったら、彼は乗馬の訓練で外に出たことがあるらしい。

「お兄さまの裏切りもの」

「ひどいです、アランお兄様」

「二人して何を言いだすんだ……！」

慌てるアランをよそに、俺たちはせっかくの景色を目に焼き付けようと一生懸命に外を見た。

十分もしたら飽きた。
「……まあ、景色なんてそうそう大きく変わらないわよね」
「だから言ったのに」
「リディアーヌ様、シャルロット様。あまりはしゃぎすぎませんよう」
ここぞとばかりに釘を刺してくるクール勢。抗議したいのを堪えて座席に腰を下ろし、少し落ち着くことにした。座席はクッション性に優れた造りになっている。おまけに俺とシャルロットはクッションまで敷いて尻が痛くならないように対策は万全だ。
「なにか車内でできる遊びをしましょうか。なにがいいかしら。……目隠しチェスとか？」
「リディ。殿下のお相手は大事だけど、あまりあの人の趣味に引っ張られ過ぎなくていいんだよ」
「お姉様。チェスと言っても、ここには盤がないのでは？」
「盤を思い浮かべながら口頭で宣言しあうのよ。間違った宣言をした場合もその人の負け」

目隠しチェスは俺の得意分野である。魔法で記憶再現できるので、最新のイメージをアップデートしていくだけでいい。普通に脳内でチェスができるような超格上の指し手相手でない限りはかなり勝てる。

「どうかしら、お兄さま？」

若干挑戦的な表情で兄に尋ねると、普段は物静かな彼が僅かに強気な表情を浮かべる。

「知略の遊戯ならさすがに負ける気はしないな。負けても泣かないね、リディ？」

「もちろん。お兄さまこそ後悔しないことね？」

シャルロットには審判をお願いする。盤の状況を正しく確認し、誤りを指摘できる立場なのでこれも意外と面白いはず。

「でも、私、全部の駒の動きなんて覚えられません」

「シャルロット様、こちらに簡易盤のご用意があります。こちらをお使いください。リディアーヌ様とアラン様には隣り合って座っていただき、私とこちらで確認いたしましょう」

「あ、こんな盤があるのですね……!?」

穴の開いた板に平べったい駒を嵌めこんで使う携帯用だ。馬車内などで個人練習するために以前作った。文庫本みたいに立てた状態で覗き込むのが前提の造りなので、この盤で普通に対局をするのは少々難しい。

「わかりました。そういうことなら私が審判を務めます……！」

この目隠しチェスはなんだかんだ言って結構盛り上がった。俺vsアランが終わった後も盤を見ている状態のシャルロットvs目隠しの俺（orアラン）などの組み合わせであらためて始めたりして盛り上がった。

道中

「しばらく馬を休ませます。馬車を出ても構いませんが、あまり遠くへは行かないようにお願いします」

馬車が停車したのはとある草原の一角だった。傍らには小さな林がある。

もう少し見晴らしの悪いところで停まるかと思ったが、考えてみればこの大所帯だと通行の邪魔になる。開けた場所の路肩に停めるしかないのだろう。

がたごと揺れ続ける車内に疲労を感じていた俺は、止まった揺れにほっとしながら軽く伸びをした。

「さあ、シャルロット。外へ出ましょう」

「いえ、お姉様。私はここで休んでいますので……」

そう答えたシャルロットはだいぶ顔色が悪い。最初は楽しそうだったのだが、どうやら馬車に酔ったらしい。こんなに長く揺られるのは初めてだろうし無理もない。

俺もそれほど余裕はないものの、義妹に比べるとまだだいぶマシ。剣の稽古など

で三半規管が鍛えられているからだろうか。
　動きたくない、という主張に頷きながら、俺は少女の耳に唇を寄せて、
「今のうちに花を摘んでおかないと後が大変よ」
　これにはさすがの義妹もはっと顔を上げた。
「ですが、こんなところでどうやって……？」
「それは、木立ちの影でするしかないんじゃないかしら」
　公衆トイレなんてあるわけないし、と思いながら答えると、聞こえたらしいアランとエマが揃って渋い顔をした。
「恐ろしい発想をしないでくれないか、リディ」
「専用の馬車を用意しておりますのでそちらをお使いください」
　至れり尽くせりだった。あからさまにほっとするシャルロットの姿につい笑みをこぼしながら馬車を降りると、一頭の馬がこちらへ歩み寄ってくる。その隣には少女騎士の姿。
「ギー、お疲れ様。ノエルも疲れていないかしら？」
「問題ありません。この子もまだ元気です」

「そう、良かった」
撫でで労ってやるとギーは嬉しそうに鳴く。「お、お姉様」。振り返るとシャルロットが「降りようにも降りられない」という顔をしている。
怖いのはわかるが、これから羊の群れに会いに行くのにこれでは心配だ。少し強引に手招きしてギーと対面させてやる。
「いいかしら、ギー？　その子においたをしたらひどいんだから」
「リディアーヌ様、まさか魔法で会話を？」
「違うわ。ただお願いしただけ」
精神感応の要領でできなくもないだろうが、ちょっと危ない気もするので止めておく。
それでもお願いが通じたのか、少女好きの雄馬は大人しくシャルロットへ挨拶をし、彼女の手を受け入れてくれた。これで少しは動物に慣れてくれるかもしれない。
「リディアーヌ様」
「ああ、アンナ。あなたもお疲れ様」
手洗いを済ませた後、他の馬車に乗っていたアンナと合流した。

使用人の集まった馬車内ではここぞとばかりに意見交換が行われていたらしく、若手である彼女は知らないテクニックや覚えておいた方がいい情報を覚えるのに必死だったらしい。律儀にしっかり覚えようとする真面目な姿勢に微笑ましさを覚え、くすりと笑ってしまった。

見れば、馬車を引いていた馬や護衛の兵たちも思い思いに休憩している。もちろん完全には警戒を解いていないし、俺たち兄妹はそれとなく囲まれているが。

馬が桶のようなものから水を飲んでいるのを見て、俺は首を傾げる。

「あの水、どうやって調達したのかしら。水を作る魔道具？」

「ああ、ええと……もちろん水を作る魔道具も持ってきていますが、あれはたぶん、浄化の魔道具を使って作ったお水ですね」

「……ああ」

さっき自分が利用した馬車（トイレ）を視線で示されてなんとも言えない感覚に陥る。魔法で綺麗にしているのだから害はないし資源の有効利用でもある、何より衛生的なのだが、飲まされる馬が少し可哀そうな気もしないでもない。

遠い目になりつつ馬から視線を外した。

代わりに兵たちを見る。だいたい顔見知りだし、何度も差し入れをしているので割と仲が良い。目が合うと会釈してくれるのでこちらも笑顔を返す。契約に含まれているとはいえ出張は大変だろう。

「あら？」

兵の中に妙に若い男を発見した。男、というか少年だ。アランと変わらないか少し上くらいの年頃だろうか。革製の帽子（兜？）から覗く髪の色は赤。じっと見ていると気付かれたのでやっぱり微笑んで挨拶する。

ぶすっとした顔で目を逸らされた。

父親なのだろうか。兵の一人が何かを言った後、二人でこちらへ歩いてくる。少年の方はいかにも嫌々といった感じだ。

「息子が失礼な態度を取ってしまい、申し訳ありません」

「気にしなくていいわ。それより、彼も護衛なの？」

「はい。将来、お屋敷で正式に雇っていただけるよう、見習いとして鍛えている最中です」

将来の警備兵候補か。屋敷で働いている者の子なら外部から雇うよりも信用度が

高い。こうして若いうちから鍛えられるという点からもお互い好都合だろう。
　平民の十二、三歳なんてつい最近まで近所の子と一緒に駆け回ったり棒切れで剣の真似事をしていてもおかしくない。
　礼儀作法がなっていないのは当然だし、その分、身体づくりはできているはず。旅先へ連れてきたのもただ訓練させるよりはいい刺激になるだろう。
　せっかくなので名前を尋ねたりしていると、少年はこちらを睨んで、
「俺は領主様や次期領主様を守るんだ。こんな奴どうでもいい」
　仕える家の令嬢相手にこの態度とは、なかなかにやんちゃだ。
「王子殿下の婚約者になんという口を利くのだ！」
「え、じゃあこいつがリディアーヌ様？　向こうの可愛い子かと思った」
　まあ、シャルロットが美人なのには同意するが……次々に失言する奴である。
「護衛対象の顔と名前くらいは覚えた方がいいんじゃないかしら」
「仰る通りです。愚息にはよく言って聞かせますのでどうかご容赦を――」
「安心しろよ。お前もついでに守ってやるから」
　真摯に謝る父親とわかっていない息子。

息子の言動には多少目を瞑る。本人のやる気があれば十分改善できるはずだからだ。

問題はそのやる気があるかどうか。

「ついでに、ね。できるかしら」

「あ？　馬鹿にしてんじゃねえぞ」

きっと相性が悪いのだろう。

少年に魔力があったら属性は火かもしれない。ノエルの時も最初はあまりいい反応ではなかった。気性の荒い人間には実力行使でないとわかってもらえないことがある。

俺は手の中に火球を生み出して彼の目の前に突き出した。

「は？」

「お嬢様、お止めください！」

突っ立ったまま呑気な声を上げた少年を父親が突き飛ばし、庇うように腕を広げて立つ。

燃える炎を前に飛び出してくるのには一体どれだけの勇気が必要だっただろう。

俺は「大丈夫」と告げて火球を消し、腕を下げた。
「もちろん撃つ気なんてないわ。ただ脅かしただけ」
遅れて状況を理解した少年は顔をひきつらせながら驚愕に目を見開いた。
魔法は貴族の特権。中でも火の魔法は「力」としてわかりやすい。褒められるような方法ではないがインパクトはあったらしい。
怒られるかと思って見上げると、アンナは意外にも冷静な顔で少年を見ていた。
「リディアーヌ様。忠誠の薄い者へのお怒りはごもっともですが、炎はやり過ぎです」
相手が「広い意味で同僚にあたる」「平民の」「見習い」だからだろう。
男爵家の出で平民と距離が近かったアンナだ。
個人としてならもっと甘やかすところかもしれないが、公爵家に雇われている立場としては子供でも見逃せない。
「もし、この子が軽はずみにわたしを傷つけたら、彼のお父さままで解雇になりかねないものね」
「はい。公爵家に害となる護衛は必要ありません。連れてきた人間も含めて処分が

必要でしょう」

「な、なんだよそれ。意味わかんねえ」

「忠誠心は重要よ。心を操る魔法はしたくないことはなかなかさせられない代わりに、したいと思っていることはかなり簡単に実行させられるの。例えば、気に入らない年下の女を殴ってやりたいとかね」

「っ！」

使い方や力量次第では衝動を増幅することもできる。

素手ではなく壺で殴ることになったら？　ナイフで刺すことになったら？　そうなる危険を減らすためにも忠誠心が重要になる。

俺は少年に微笑んで、

「不満があるならきちんと吐き出して、納得した上で仕えなさい。私で良ければ文句を聞いてあげるから」

言うだけ言って背を向ける。

馬車に戻っていく俺とアンナを少年は仏頂面のまま、父兵士は深く頭を下げて見送ってくれた。

アンナには後から「干渉しすぎです。平民の子供なんて無視してください！」と怒られた。

休憩後は兄妹それぞれ別の馬車に乗ることになった。

話やゲームで盛り上がっていても乗り物酔いが抑えられなかったので、だったらシャルロットにはゆっくり休んでもらった方がいい、ということになったのだ。

一応薬も飲んだらしいが、残念なことにこの世界における乗り物酔いの薬というのはせいぜい気休めに過ぎない。安静にしているのが一番なのだとか。

「リディアーヌ様は大丈夫そうですね？」

三人で集まっていたのは一応俺用の馬車だった。アランやシャルロット、エマが乗っていたそこには代わりにアンナが乗った。

「わたしも酔わないわけじゃないわ。いざとなったら魔法を使うつもりだし」

酔いの原因をピンポイントで解消するのは無理だが、酔っていない状態に戻すことはできる。身体を調整する魔法も定期的にかけているので、辛くなったらついで

に酔いも消してしまえばいい。
「シャルロットは寝られるのかしら。この揺れじゃ難しいんじゃない？」
「いざとなればメイドがクッションになるかと。それなら少しは楽でしょう？」
「あら、じゃあアンナもクッションになってくれる？」
期待しつつ見つめれば、俺の専属メイドは少し恥ずかしそうにしながら頷いてくれた。
「リディアーヌ様がお望みであれば」
可愛い反応についつい甘えてしまいたくなる。しかし、寝てしまうのも勿体ないので、外の景色を眺めながらアンナとのんびり話をした。
「本で読んだ植物を実際に見られるのは助かるわ。文字や絵だけの情報と一致させられるもの。効能と一緒に覚えておけばなにかの役に立つかも」
「リディアーヌ様、よく馬車の中からはっきり見えますね？」
「ああ、無意識に視力を強化しているのかも」
「全部魔法じゃないですか……！　私、時々男爵家は貴族じゃないんじゃないかって思ってしまいます」

涙目になって言うアンナ。心配しなくても男爵家もちゃんと貴族である。家によっては平民と婚姻したせいで子供の魔力量が下がり、結果魔法の使えない子が生まれて来ることもあるらしいが。

「逆に平民から魔力持ちが生まれることもあるのよね」

「ええ。十分な魔力があれば後援を受けて学園に通い、騎士や宮廷魔法士として働くことができます。特に魔力量が多い場合には国から奨学金が出ることもあるとか」

こうした魔力持ちは貴族の落とし子か、あるいはその子孫だ。どこかの貴族（多くの場合は心当たりのある人間）の養子となって正式に貴族入りすることも多い。そうでなければ学園卒業と同時に一代限りの貴族位を与えられ、貴族への嫁入り、婿入りを推奨される。

「国が支援するほどの魔力持ちでしかも平民とか、出てきたらぜひ会ってみたいものね」

「滅多に現れるものではないですからね……。いたとしても風当たりは強そうです」

平民から貴族の仲間入りをする人間だ。純血派なんかにしたら裏切り者もいいと

ころだろう。もちろん貴族側も良い顔をするとは限らない。

「本当、ままならないのね、色々と」

その日はとある大きめの街に宿を取った。俺とシャルロットが同室で、アランは別の部屋。

「お姉様と同じ部屋で寝るなんて初めてです」

「こんなの、宿に泊まっている時だけかもね。なんだか楽しいわ」

街一番の宿だけあって設備は申し分なく、十分に身体を休められそうだった。乗り物酔いのひどかったシャルロットも少しは馬車に慣れてきたらしく、夕食は宿に併設されているレストラン兼酒場でしっかりと栄養を取ることができた。

貴族相手の食事会ではなく、かつセレスティーヌの目もない絶好の機会。

せっかくのだらけた食事をするチャンスだったものの、身体に染みついた礼儀作法は簡単には忘れられず、俺は結局、貴族令嬢らしい上品な所作で料理をいただいた。

到着

「街を見て回れなかったのが少し残念ね」
「無理を言っては駄目だよ、リディ。予定が狂えば宿泊日数も増えるんだ」
「帰りは余裕ができるはずですので、観光もできるかと」
大きなトラブルが起きることなく往路は終わりに近づいていた。
正直少し危惧していた純血派残党による襲撃もなく、一団は公爵領へ。
シルヴェストル公爵領と他領との境には大きな土壁があった。厚さ数十センチ、高さは三メートルはあろうかというこの壁により、越境はいくつか設けられた検問所を通してのみ可能となっている。
ちなみに俺たちはほぼ顔パスで通過だった。
公爵家の紋章が入った馬車だからというのもあるが、入退出についてはさほど厳しく制限していないらしい。ならどうして壁があるのかというと、人よりも羊の移動を制限するため。牧場にも柵はあるが、乗り越えて旅にでようとするやんちゃな羊もたまにいるのだとか。

「じゃあ、戦時の備えではないのね」
「もちろんそれもあるよ。公爵領と隣接する辺境伯領は隣国を睨む位置にあるからね。入り口を制限することによって王都までの侵略速度を落とすことができる」
「我が国としては防衛戦力を集中させやすくなる。辺境伯領を攻略されないに越したことはないけれど、備えておいて損はないわね」
「わかるのか。……そういえば、リディは殿下と盤上演習もしているんだったか」
「ええ。守りの大切さはある程度わかっているつもりよ」
チェスも戦略的視点を養う役には立つが、本格的に軍略の練習として作られた遊戯はさすがに別格だ。要所に砦を設営したり、その砦を壊すために策を巡らせたり、できること・考えることが桁違いに多くなる。だからこそ軍事に携わることも多い男性貴族はこれを嗜むわけだ。
俺とアランが分かりあっているとシャルロットが軽く頬を膨らませて、
「もう、私も今度道具を買います……！」
「いや、シャルロットは勉強しなくてもいいよ」
兄が困った顔になった。義妹に変なことを教えると父や養母から怒られそうであ

る。

「シャルロット。女は少し愚かなくらいの方が殿方から好かれるのよ？」

「では、お姉様はどうしてそんなに勉強なさるのですか？」

「もちろん、殿方の気を惹こうとは思っていないからよ」

「リオネル様の気はきちんと惹いて欲しいんだけどね」

王子様の気が変わったら変わったで仕方ない。婚約解消に伴う保証さえしてもらえるなら応じるようと思う。……ではなく、もちろんリオネルの気を惹く努力はしているつもりだ。向こうの遊びにある程度合わせられるのでかなり好評である。

年頃を迎えた少年は思考ががらりと変わったりするのでここから先はなんとも言えないが、そちらに関しても一応手は打ってある。

話が逸れたが、俺の言葉にシャルロットはある程度納得したらしい。その上で小さく首を傾げて、

「お母様はとても頭の良い方ですが、お父様に愛されていますよね？」

「うーん……我が家の場合はまた特殊なのよね」

「そうだね。服飾業を振興する関係上、うちは女の領分が広いから」

「宰相の妻があんまり馬鹿だと舐められるだろうし」

これがよくなかったのか、シャルロットは結局「じゃあ私も勉強します」と言い出してしまった。

やりたいと言うのなら教えるし対戦相手にもなるし、なんなら道具をプレゼントしたいとも思うが、俺とアラン、さらには父や養母の真似までするのは明らかにやりすぎだ。王妃を飛び越えて女王にでもなるのか、という完璧超人が出来上がりそうである。

仕方ないので少し釘を刺しておくことにする。

「シャルロット？　どうしてもと言うなら止めはしないけど、普段は馬鹿なフリができるようになりなさい。賢さで正面から殿方と競わなくていいんだから」

これには同乗していたエマも頷いて、

「そうですね。リディアーヌ様を見習うことなく、一歩引いた態度をお心がけください」

「ああ。リディは演技が苦手だからね」

「お姉様の真似をしすぎると敵を作る、ということですよね？　わかりました」

何故か逆に釘を刺された。

「本当、これは壮観ね」

公爵領の大部分は畑や草原が占めている。

羊は主に草を食べるし、もう一つの主産業である綿花はもちろん、羊や綿花を育てる人間用に麦や野菜の畑も必要になる。

麦や綿花が羊に食べられてしまわないよう生産物によって大まかな区画分けが行われており、結果的に公爵領には農村が多い。街は生産物を集約・必要に応じて加工し他の馬車へ届けるための拠点として要所にいくつか点在している程度。

なので領内には緑が多い。そのうえ辺りが広く見渡せるので、王都とはまるで別世界だ。

「羊はまだ見えませんね、お姉様」

「そうね。もう少し進まないとだめかしら」

「お屋敷の周辺まで行けば羊も見られるかと」

エマの言葉が証明されたのは夕暮れが近づいた頃だった。
「あれが公爵領の中心部か」
「丘の上にお屋敷があるのですね……！」
小高い丘の上にいかにも立派な屋敷。丘のふもとには大きめの街があり、街の左右――少し離れたところには片や大きな牧場、片や大きな畑が広がっている。
街に入ると馬車の一団に人々が集まってくる。公爵家の紋章を見た人々の顔は明るい。手を振ってくれたり、恭しく頭を垂れる人もいる。
「エマ、手を振り返してもいいかしら」
「問題ありません。彼らは公爵家の領民、皆様にとっても守るべき民です」
お目付け役からも許可が出たのでシャルロットと二人で手を振り返してやる。残念ながらアランは恥ずかしがって乗って来なかったが、歓声はさらに大きくなった。
歓迎ムードは気持ちがいい。
馬車はそのまま大通りを抜けて丘を上がっていく。近づくと丘の上の屋敷が相当大きいことがわかる。王都にある屋敷以上だ。
「むしろ、わたしたちの暮らしている屋敷が別邸なのかしら」

「そうですね。こちらにあるのは領主一族が暮らすための公爵邸。王都の屋敷は宰相邸と呼ぶのが相応しいかと」

普通、領主は領地に住む。領主が宰相職を兼ねている我が家はかなり特殊だ。父の代わりに領地を治めて領民を守っているのは分家筋の領主一族。

その権威がどれほどのものかと言えば、

「お帰りなさいませ、アラン様。リディアーヌ様。シャルロット様」

「わあ……！」

出迎えに出てきた使用人の数を見てシャルロットが声を上げるほど。出てきた人数だけでも確実に王都で雇っている全使用人より多い。

屋敷の敷地内――丘の始まりからなのか上がったところだけなのかという問題もあるが――の様子は慣れ親しんだ王都の屋敷よりもシンプル。庭園もあるものの、馬を繋いでおくための厩舎や訓練場らしきもの、馬車を格納する倉庫などがさほど人目を避けることなく存在している。

屋敷には本館の他にいくつもの別棟も用意されており、様々なシチュエーションに対応できるようになっているようだ。

丘の下、街の外に牧場と羊の群れも小さく見えた。
多くの人の視線が集まる中、長男であるアランが進み出て口を開く。
「初めまして。宰相ジャン・シルヴェストルが長男、アラン・シルヴェストルだ。こうして公爵領を訪れることができたこと、そして温かく迎えてもらえたことを心から感謝する」
次いで俺、そしてシャルロットが挨拶。
「リディアーヌよ。期待していた以上に素敵なところで驚いているわ。ここへは療養と、それから見聞を広めるために来たつもりだから、色々教えてちょうだい」
「シャルロットです。殆ど初めてのような感覚で緊張していますが、公爵家の一員として領内の景色をしっかり見て、覚えて帰りたいと思っています」
俺たち三人を使用人はみんな温かい表情で迎えてくれる。中には「直系の方々をようやく迎えられた……！」と泣いている者までいる。公爵家への忠誠の篤さがよくわかる。さすが本拠地だ。
「久しぶりですね、アニエス」
「お久しぶりです。現在はシャルロット様の専属を務めさせていただいておりま

す。ご兄妹のお部屋の準備はできているのでしょうか？」

「ええ、もちろん。いつでも皆様をお迎えできるように準備ができております」

シャルロットの専属であるアニエスが現地のメイドと言葉を交わす。セレスティーヌが婚姻にあたって連れてきた使用人は多くが公爵領にいた者たちなので、こういう時に顔つなぎとして役立つ。部屋の位置とかも案内できるだろうから、と、同行する人間には他にも経験者が採用されている。

旧交を温めたい者もいるだろうが、そこは使用人。さっと用件の確認を済ませたところで、屋敷のある方向に動きがあった。

「大旦那様がご挨拶に参られました」

人垣が割れ、そこを一人の紳士が歩いてくる。隠居した身とは言っても、前世の感覚で言うとまだまだ若い六十代。さすがに親子だけあって父にも、そして父親似であるアランにもよく似た目と髪の色。若干頑固そうなところや、細身だがしっかり鍛えているところも同様。

「よく来たな」

祖父――マティアス・シルヴェストル。

彼を前に俺たちはもう一度礼を取る。顔を上げると、彼は口元を綻ばせた。
「大きくなったな、アラン。若い頃のジャンに良く似ている」
「よく言われます。それから、お祖父様にも似ていると」
上手い。アランのお世辞に「そうかそうか」と頷く祖父。彼の視線はそれから俺に向いて、
「リディアーヌは本当に母親似だな。ジャンが喜ぶと同時に嘆く姿が目に浮かぶ」
「そうね。お酒を飲むと『もう少しくらい私に似ていても』とよく愚痴っているわ」
「そうだろう？　ふっ。聞いていた通り、物怖じしない性格だ。リオネル殿下に気に入られるのもわかる。……それから」
最後に、金色の髪の妖精に。
「シャルロットか。セレスティーヌは元気にしているのか？」
「は、はい。お母様はお元気です」
「そうか」
深く頷くと「ゆっくりしていきなさい」と俺たちへ告げる祖父。『え、それだけ？』。うん、今のは少し違和感があった。

別におかしいという程ではないが、シャルロットとの会話だけ本人についてではなくセレスティーヌについての話で終わってしまった。義妹もさすがに気づいたはずだ。これではまるで、シャルロットだけ歓迎されていないようではないか。

この段階では単なる気のせいという可能性も大いにあるが。

「皆様、ひとまずお部屋へ移動してお召し換えをいたしましょう。積もるお話はその後に」

メイドたちの呼びかけで俺たちは公爵邸の中へ足を踏み入れたのだった。

「ご存じかと思いますが、公爵邸では領主一族が共同でお住まいになり、領地経営に従事しておられます」

俺の案内を担当してくれたのは茶色の髪と瞳を持つメイドだった。名前はソフィ。他についてきたのはアンナと数人の兵士だ。移動ついでに持ってきた荷物の一部を運んでいる。エマは残った荷物の仕分け・運び入れを指揮している。全て運ぶには結構な人数がいるだろう。『一、二か月は滞在するための用意だもの。服だけで

もかなりかさばるのよね』。

この後の予定は着替えの後、みんなで顔を合わせての夕食である。可能なら風呂にも入りたいところだが、馬車の中にいただけなのでそう汚れているわけではない。食事の後か、最悪明日でも構わないだろう。

「リディアーヌ様やアラン様、本家の方々から見ると分家ということになりますが、当然、分家の方が人数は多くなります。ですので広いお屋敷や別棟が必要なのです」

例えばシャルロットの父親は俺から見て「祖父の弟の息子」だ。セレスティーヌはその元嫁。そんな感じで各世代に兄妹や嫁がいる。

全員がここに住んでいるわけではなく、婿養子に入ったり嫁に行ったり王都に家を構えて暮らしている親族も多いし、本格的に隠居したいと別に居を構えている者もいるが、それにしたって直系しか住んでいない王都の屋敷より大きくなるのは当然。毎世代複数人の子供が産まれていれば家族関係もかなり入り組んでいる。

親戚とはいえある程度距離を取りたい時だってもちろんある。

「わたしたちの部屋があちこち離れているのもその関係なの？」

俺の問いにソフィは「そうですね……」と曖昧に答える。

「そうとも言えますし、そうでないとも言えます。というのも、リディアーヌ様とシャルロット様のお部屋に関しては公爵様と奥様のご指定なのです」

セレスティーヌは他の家からここへ嫁いできた身。結婚の時点で公爵家の一員となった彼女だが、夫は前宰相ではなくその弟の血筋。夫自身もあまりガツガツした性格でなかったこともあって一家は別棟の一角に部屋を持っていたらしい。

その夫は不運にもシャルロットがまだ小さい時に亡くなってしまい、未亡人となったセレスティーヌは父に見初められた。

公爵夫人となったことで養母には本邸の良い位置に部屋を設ける権利が与えられたわけだが、これをあの女は拒否したらしい。

『使う機会も多くないでしょうし、既にある部屋から移る必要を感じません』

つまり、別棟にはセレスティーヌが今より若い頃に使っていた部屋がまるまる残っている。シャルロットの趣味は母親とよく似ているので、どうせならそこを使わせようという指示があったらしい。

新しく揃える金は十分にあるが、それはそれとして節約できるならしておこうと

いう養母らしい考えである。シャルロットとしても母の昔使っていた部屋には興味があるだろうし、なかなか悪くない。

じゃあ俺の場合はどうかと言えば、

「リディアーヌ様は前公爵夫人――アデライド様のお部屋へご案内いたします」

まさか、こんなところにそんなものが残っているとは夢にも思わなかった。

母の面影

母――アデライドに与えられていたのは領主夫人用、つまり屋敷で二番目に上等な部屋だった。

基調となっているのは黒と赤。

入った瞬間に「ああ、ここは母の部屋だ」と思った。俺の部屋と雰囲気がよく似ている。初めて入ったとは思えないほどほっとしてしまい、身体から力が抜けそうになった。

定期的に掃除が行われているらしく、さすがに母の匂いまではしない。そもそも部屋が使われたのもほんの僅かな期間に過ぎなかったらしいが、それでも。

「お母さま」

入って正面にあたる奥の壁には三枚の絵が飾られていた。

全て同じ人物を描いた絵だ。一枚は単独で、もう一枚は配偶者と並んで、最後の一枚は産まれたばかりとみられる赤子を抱いて微笑んでいる。

長く美しい紅の髪と宝石のような瞳を持った女性。

特徴を切り出せばその殆どが俺と一致する彼女こそがアデライドだ。その容姿を褒めようとするとほぼ自賛になってしまうわけだが、敢えて言おう。死後もなお語り継がれるのも納得の美貌。学園在学中は数多くの男から求婚されたことだろう。父は良くこんな美女を口説き落としたものだ。

「……お母さまっ！」

溢れた涙を堪えることができなかった。

母の絵を見上げたまま、俺はとめどなく涙を流した。懐かしさと、それを上回る自責の念。寂しさから荒れて年単位で家族を心配させてしまった。その後も素直ないい子ではいられず悪役令嬢を続けている自分。

果たして、母の子に相応しい立派な振る舞いができているだろうか。『ごめんなさい。ごめんなさいお母さま……！　わたし、わたし……っ！』。

「リディアーヌ様」

アンナが後ろから抱きしめるようにして俺の姿を隠してくれる。兵たちがそっと荷物を置いて部屋を出て行ってくれるのが気配でわかる。残ったソフィとアンナは黙ったまま俺が泣き止むのをじっと待っていてくれた。

「みっともないところを見せてしまってごめんなさい」
　目元の腫れを魔法で消しつつ見上げると、二人のメイドは「とんでもございません」と首を振った。
「こちらこそ配慮が足りておりませんでした。夕食はこちらへ運ぶ事もできますので、少しお休みになられてはいかがでしょう」
「いいえ、着替えてきちんとみんなに会うわ。こういうのは最初が肝心だもの」
　思いっきり泣いたお陰ですっきりした。胸のつかえが取れたのでむしろ今は絶好調である。アンナもそんな俺を誇らしそうに見て、
「では、リディアーヌ様。本日はどのドレスにいたしますか？　たくさん持ってきましたから選び放題ですよ」
「それなんだけど……ソフィ？　お母さまのドレスって残ってないのかしら？」
「アデライド様のドレスですか？　……はい、こちらのクローゼットにそのまま残しております。ですが、大人用の丈になっておりますので……」
「大丈夫よ。ただ見せて欲しいだけ」
　やんわりと「着られないと思う」と伝えてくれるソフィにお願いをしてクロー

ゼットを開けてもらう。
「お母さまのドレス」
残っていたのはほんの何着か。おそらくは予備か何かとして置いて行ったものだろう。しかし、質としては十分に高いし、俺とよく似た母の趣味も見て取れた。その中から絵の中の母が着ているのに近い黒のドレスを選んで表から裏までじっくりと見せてもらう。
「……うん。これならなんとかなるかしら」
「あの、リディアーヌ様？　一体何を……？」
「大したことじゃないわ。少しだけ時間をちょうだい」
トルソーを一体用意してもらい、その表面に触れて目を瞑る。サンプルに選んだ母のドレスをはっきり思い返し、３６０°あるそのイメージを元に絵の中の母のドレスを脳内で再構築。サイズ感を今着ている自分のドレスを元に調整し、一気に魔力を放出する。
剣を使えば良かった。
天才と称される俺の魔力がどばっと大盤振る舞いされるのを感じて少し反省する

も、後悔はしない。魔力によって生成された黒い俺用のドレスはアンナとソフィがしばし絶句する程度には良くできていた。

「アンナ。今日はこれを着るわ」

「え、いえ、あの、え……!?　リディアーヌ様、まさかドレスを魔法で作ったんですか!?」

「そうよ。お陰で物凄く疲れたし魔力も一気に消耗してしまったわ。効率が悪いにも程があるから、よほどのことがない限りこれっきりにしたいところね」

物質を生成する魔法は無数にある魔法の中でも高難度に分類される。炎や雷はエネルギーなので魔力から変換するのは比較的易しい。水や氷なら大気中の水分だって利用できる。しかしもっと複雑な物質となると構成要素を魔力で全て補わなくてはいけない。

加えて、形や性質をできる限り具体的にイメージできなければ質の悪いまがい物が出来上がってしまう。今回は記憶探査の魔法まで併用したので縫製や布の質感までかなり再現できたが、それでも職人が一から作った品には劣っているはず。

物凄く大変な思いをした結果がちょっとした金の節約なら素直に注文して仕立て

た方がいい。自分で作っても職人には一銭も入らないし。
「ソフィも、できれば内緒にしてくれるかしら？」
懇願するように問えば、彼女は苦笑を浮かべて答えた。
「きっと、言っても嘘だと思われるでしょう」

どうせなら母とお揃いのドレスが欲しい、と無茶をして無駄に疲れた俺はアンナとソフィに着つけられて無事に着替えを終えた。
エマたちには引き続き荷物の運びこみや整理をお願いし、アンナたちを連れて移動する。
一族との顔合わせは応接間ではなく食堂で行うらしい。人数が多いのでその方がいいのだろう。初めて来る屋敷なので道を覚えたり調度を観察したりしながら歩く。
「内装の趣味はうちと違うのね」
我が家の内装は貴族らしい派手さを最低限押さえつつ趣味良く纏めている感じ。

ここの内装はそれよりもシンプルというか、機能美的な感性を重視している。

これには案内役のソフィが答えて、

「屋敷の管理は旦那様と奥様が行っておりますので、そのせいでしょう」

「お父さまに代わって領地の管理をしている方、ということよね？」

「はい。普段は便宜上『旦那様』とお呼びしておりますが、正確には本来の旦那様――領主様の補佐をなさっている方です。紛らわしいので統一した方が良いかもしれませんね」

別の家に住んでいる父にはこの屋敷の差配はできないので当然といえば当然。この屋敷における『旦那様』なのは確かなのだが、領主の子である俺たちからするとわかりづらい。

「領主補佐はわたしから見て従祖父（いとこおじ）のジェラールさま。それから奥さまのブリジットさま、で合っているかしら？」

「その通りです。お屋敷にいらっしゃる一族の方は他に――」

ソフィが言いかけたところで向かう先に人影が見えた。

ドレス姿の少女。濃紺色の髪に橙がかった赤い瞳を持っている。歳は十四、五と

いったところで傍らにはメイドが一人。
　彼女は俺と目が合うとカーテシーからの挨拶を始めた。
「初めまして。リディアーヌ様でお間違えないかしら？　私はクロエ。クロエ・シルヴェストルと申します」
「クロエさまですね。初めまして、リディアーヌ・シルヴェストルと申します。たしか来年、学園にご入学予定とか」
「お見知り置きいただけたなんて光栄です。在学中は王都に滞在いたしますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたしますね」
　来年入学なのでノエルとは同学年になる。在学中は寮住まいだろうか？　場合によっては屋敷に住むことも考えられる。
「ところで、クロエさまはどうしてこちらに？」
「リディアーヌ様をお待ちしておりました。顔合わせの前にお目にかかりたかったものですから」
　一対一で見定める機会が欲しかったということか。何かろくでもないことを考えているのでなければいいのだが。

ソフィを見ると、困ったような表情ではあるもののあまり問題視はしていない様子。

「では、一緒に参りましょうか」

「ありがとうございます。是非ご一緒させてくださいませ」

移動中に話題になったのは俺とリオネルの婚約の件だった。

「殿下は気難しい方と聞きますが、お相手は大変ではありませんか？」

「リオネルさまは気難しいというよりも奔放かつ遊び好きな性格だと認識しております。ご要望に応じてお相手をして差し上げればとても素直で可愛らしい方なのですよ」

「まあ。リディアーヌ様は殿下ととても仲がよろしいのですね？」

俺とリオネルの仲が良好、と広まる分には問題ない。

あの王子の攻略法を聞き出してどうこう、と考えているのだとしたら困ったものだが、ちょっと話を聞いた程度でどうにかなると思うのもアレだし、もし実際どうにかなってしまったとしたらリオネルの方もアレすぎる。

そもそも、クロエではそう簡単にリオネルに近づけないだろう。

「クロエさま。こちらには一族の方が多く暮らしていらっしゃるのでしょう？　窮屈に思うことはありませんか？」

「いいえ。広いお屋敷がありますから手狭に感じることはありません。時には羊と戯れるのも楽しいものなのですよ」

答える彼女は笑顔。橙色に近い瞳はきらきらしている。ここでの生活が気に入っているのかもしれない。

――クロエ・シルヴェストルはやや特殊な立場の人間である。

彼女の母は養子として公爵邸にやってきた子だった。そのまた母は他家に嫁いだ公爵家一族。そのため一族の血は引いているのだが、魔力がかなり低めだったために養子に出された。

物心つく前から公爵邸で養育を受けたクロエの母は、貴族としての生活よりもむしろ平民に交じって羊の世話をするのを好んだ。そうしているうちに平民の男と恋に落ち、屋敷を出て街での生活を始めた。『来るべくしてここに来た人だったのかもね。本人はそれで幸せだったんでしょう』。

しかし奇しくも、愛する男との間に産まれた娘・クロエは母を上回る魔力量を

持っていた（通常、平民の赤子の魔力検査なんていちいち行わないが、貴族の親を持つということで念のために行われた）。それならば平民ではなく貴族として生きた方が幸せだと母は判断し、娘を公爵家に預けたというわけだ。

見た感じクロエは普通に礼儀作法ができている。貴族としての振る舞いを苦にしているわけでもなさそうだが、一方、都会に行って華やかな結婚がしたいわけでもなさそうに見える。

「羊の毛はほんとうにふわふわしているものなのですか？」

「ええ。きっと感動なさると思います」

「それは楽しみです」

羊について語るクロエは楽しそうで、俺は彼女へ好感を持った。

「リディアーヌ様。変わった事はありませんでしたか？」

「ご苦労さま、ノエル。ソフィも良くしてくれたし、困ったことは何もないわ」

食堂の入り口前でノエルが待っていた。彼女はギーを厩舎へ移動させた後、屋敷

をぐるっと一周したり、俺たちの護衛に関する相談をしたりしていたらしい。
「こちらは騎士様ですか？」
「はい。リディアーヌ様の専属騎士を務めております、ノエル・クラヴィルと申します。どうぞお見知りおきください」
「クロエ・シルヴェストルと申します。リディアーヌ様とは親戚にあたります」
帯剣した少女騎士にクロエはもちろん、ソフィも物珍しそうな表情を浮かべていた。女性騎士と専属騎士を持つ人間の少なさが良くわかる。
「それじゃあ、皆さまにご挨拶に参りましょうか」
扉が開かれると、そこには既に役者が勢揃いしていた。
「リディアーヌ」
「お姉様」
ポーカーフェイスのアランと、ほっとしたような表情のシャルロット。二人共旅装から着替えて見慣れた格好になっている。
二人が座っているのは複数置かれた六人掛け程度のテーブルの一つ。長辺の真ん中にアラン、その片側にシャルロットが座っており、俺の席は義妹と逆側にあった。

他のテーブルにも最大で四人程度が座っており、全体としてはなるべく参加者が顔を見て話せるように配置されている。

奥に置かれたテーブルの中央は空席。その左右に領主補佐夫妻と見られる男女の姿。祖父の席も夫妻に近い位置にある。

「初めまして、リディアーヌ・シルヴェストルでございます。長らくこちらへ顔を出すことができず申し訳ございませんでした。しばらくこちらへ滞在させていただく予定ですので、何卒よろしくお願い申し上げます」

一斉に集中する視線に笑顔で答え、俺は一同に挨拶をする。

アランの隣に腰を下ろすと公爵邸のメイドがすかさず料理を運んできてくれる。父の実家にその父が不在、しかも親戚が勢揃いしているような状況。なかなかのアウェー感だが、上手くやれるかどうかでここでの日々が楽しくなるかどうかが大きく変わりそうである。

対面

公爵邸の一族が担う役割は、ざっくり言えば「領地の管理・運営」だ。

公爵である父も手紙等で指示を出しているし、代理人を遣わして極力領地に関わっているものの、彼は宰相職でどうしても忙しい。そこで、細かい差配は（父から見た）従兄弟夫妻に委任されている。

役職としては領主補佐。

実務上は公爵邸の主であるジェラールが領主であると言っていい。

領主の仕事は物凄く多岐に渡っている。

徴税やそれに伴う人口調査はもちろん、事件・事故・天災への対処。他領地等への輸出入量の調整、農作物等の生産管理や生産量向上のための施策・研究、領地の外周へ建設された壁の管理・補修その他もろもろ、やることはいくらでもある。

だから、業務を遂行するにあたっては一族の者の手を借りている。

「羊関係、綿花関係など大まかな項目に分けた上で担当者を割り振り、私はそれを監督するという形を取っている」

「防壁の補修は土の魔法を用いるのが最も手っ取り早いですから、その意味でも人手があると助かります」

そういった話を俺たちは食事をしながら説明された。

実際に羊と向き合ったり綿花を育てるのはもちろん平民の仕事。貴族の仕事は平民をうまく動かすこと。各人が「牧場担当」「綿花担当」などに分かれて専門的に管理し、それらの担当を領主代行であるジェラールが統括するというわかりやすい縦割り体制。

父はジェラールとやり取りをすれば全体像を把握することができるので色々と手間を省ける。祖父の代に宰相を我が家が担当するようになって以来、この体制で仕事が行われ、王国の服飾産業を今日まで支えてきた。

現在、公爵邸に住んでいる貴族の人数は二十人と少し。

一人一人を挙げていてはきりがないので割愛するが、彼らの関係図と担当割り振りは前もって予習していてもなおややこしいものだった。

「やっぱり、直系のわたしたちが詳しく知らないというのも問題がありますね」

独り言のように言うと、ジェラールと妻のブリジットは笑って、

「ジャンは宰相として忙しいし、セレスティーヌ様にも流行発信という大事な役割があるのだから仕方ない」

「二代にわたって公爵家の人間が宰相を任されているというのはとても名誉な事です。アランにも是非宰相を継いで欲しいわ」

「父の後を継げるよう、精一杯努力するつもりです」

アランが余所行きの笑顔で答える。それを見たシャルロットはかすかに頬を膨らませて不満そうな様子。

ジェラールとブリジット夫妻は初めて会った俺たちに対して若干馴れ馴れしい。直系ではないとはいえ公爵家に属する成人貴族、親族であることを考えれば敬語は必要だが、次期宰相として頑張っているアランへさらに頑張れというのはいかがなものか。

内心で疑問を覚えながら料理（メインは羊料理だった。肉が新鮮だからかとても美味しい）を味わっていると、ブリジットがこちらへと視線を送ってきて、

「リディアーヌ様には是非このままリオネル殿下と結ばれていただきたいと思います。……それから、シャルロットも良い人を見つけなければね？」

「は、はい。ブリジット様」
『は？　なによこの女？』
長男であるアランを差し置いて俺にだけ「様」をつけるとかどういうつもりなのか。しかも、続けてシャルロットへプレッシャーをかけた。
光の加減によっては金髪に見えなくもない茶がかった黄色の髪を持つ、少々化粧の濃い女。俺の中でブリジットへの評価が急激に低下する。
「大丈夫です、ブリジットさま。シャルロットはとてもいい子ですから、心配せずともこちらから選べるくらい求婚がいただけます」
「それならばいいのですけれど」
ここで祖父がふん、と鼻を鳴らして、
「宰相も王子の婚約者も名誉なのは間違いない。立派に勤め上げようとする志は立派だが、無理に当家から選ばれる必要はあるまい」
宰相をしていた当人が言うと強烈だ。ブリジットは笑みを浮かべて穏便に受け流す（言い返せず黙ったとも言う）。
次いで祖父の隣に座っていた青年が口を開いて、

「リディアーヌ様もシャルロット様もとてもお美しい方ですよ、母上。お二人を射止めた男はさぞかし名誉な事でしょう」

髪色はブリジットに、瞳の色はジェラールに似ている。彼はクロード。夫妻の長男であり、現在十九歳。何事もなければいずれ領主補佐の地位を継ぐ事になる人物である。

優しく笑いかけてくる彼を見たシャルロットが恥ずかしそうに目を伏せると、ブリジットとクロエがかすかに眉を寄せたのがわかった。

「ブリジットさまは感じの悪い人ね。お兄さまとシャルロットに失礼だと思わないのかしら」

顔合わせを兼ねた夕食の後、兄妹で俺の部屋に集まった。

飾られた母の絵を見たアランたちの反応は「リディ（お姉様）にそっくり」というものだった。母の記憶もいいかげん薄れていたであろうアランが若干涙ぐんでいたのは彼の名誉のためにも見なかったことにする。

席につき、お茶の用意ができるまでの間に我慢できず吐き出すと、アランが苦笑を浮かべる。
「僕は構わないよ。……というか、ブリジット様に失礼じゃないか」
「扉からの盗聴には対策をしたからたぶん大丈夫よ」
「そういう問題じゃない。……アンナ、リディはいつもこうなのかい？」
「ええと……はい。リディアーヌ様は立場の関係上、外部に漏らせない話や悪意にさらされる機会が多くありましたので」
言いづらそうに答えるアンナ。気を遣ってくれているのがよくわかる。
「だって、ここは知らない場所なのよ。三人の意見くらいすり合わせておかないと危険でしょう？」
「確かに、それは言う通りだ」
一応、ここへは俺が誘った形だが、アランたちも息継ぎする暇が欲しかったのかすぐに乗ってきた。俺が言わなくてもどちらかが提案していたかもしれない。
ちなみに、俺の部屋が選ばれたのはここが一番広いからだ。
「お兄さまより広い部屋というのも問題だと思うのですけれど」

「僕の部屋は一から整えてくれたらしいからね。どちらが丁重かと言えば難しいところだよ」

俺とシャルロットがそれぞれ母の部屋なのだからアランも父の部屋で良い気もするが、そこはむしろ父からやんわりと「ノー」が出たらしい。

領主の部屋を使わせるとプレッシャーになると考えたのか、それとも男女における「同性の家族」との距離感の違いか。父の方はおそらく配慮の結果だが、公爵邸サイドの意図としては何か他にもありそうだ。

家から運んできた茶葉による紅茶を一口飲んだアランはため息をついて眉をひそめる。

「僕としてはシャルロットの方が心配だ。……シャルロット？」

部屋に来てから義妹は部屋の感想以外口にしていない。今も軽く俯いたまま浮かない表情をしている。

「私達はあまり歓迎されていないのでしょうか」

絞りだすように紡がれた疑問は、正直、俺も抱いていた。

「少なくとも『わたしへの』敬意は見えたし、お祖父さまは本当に歓迎してくれて

いると思うけれど」

「お祖父様以外の領主一族にはそれぞれ思惑があるのかもしれないね」

親族とは言っても育った環境が違う上に初対面だ。個人の損得勘定としては他家の貴族並に色々あると考えた方がいい。

俺は入り口を見据えた位置で待機している専属騎士に目を向ける。この部屋にも専属部屋が複数付いているので、ノエルとアンナはここと直通になっているそこで寝泊まりすることになる。

「ねえ、ノエル？　あなたはどう感じた？」

「私は……そうですね」

水を向けられた少女は軽く瞬きをした後で返してくる。

「王都の男性貴族に比べるとかなり『動けそうだ』と」

「これだけ広い土地があれば訓練にも困らないでしょうしね」

万が一、荒事になった場合は身体能力に注意しろというわけか。そもそも俺たちは子供なので最初から負けてはいるのだが、相手のスペックを見誤っていると足をすくわれる可能性がある。

俺はブリジットとクロエの表情を思い返して、

「女の嫉妬って本当に醜いわよね」

「何か感じたのか、リディアーヌ？」

「今の段階ではなんとも言えないわ。それに、あまり意識しすぎても逆に刺激してしまうかもしれない」

せっかく長閑な田舎に来たというのにギスギスした話はしたくないのだが。

シャルロットが冷遇されている理由について一番ありそうなのは「嫉妬」だ。それも、もちろん恋愛絡みの。

高二の時、クラスの地味めな女子がカースト上位の派手女子にいじめられていた。理由は派手な方が彼氏に振られ、地味な方がその彼氏と付き合いだしたから。

友人の多い派手な方はあからさまに険悪なムードで地味な方を笑ったり、休み時間にその子の席を占有したり、服の上からではわからない身体的特徴を男子に吹聴したり、様々な形で嫌がらせをしていた。クラスメートでしかない俺が確認できた

範囲だけでこれなので、見えない場所ではもっと酷かっただろう。

見るに見かねたのと単に鬱陶しかったのもあって「止めてくれ」と頼んでみたが、返答は「あんたには関係ないじゃん」。以降、クラスでのいじめは減ったように見えたものの、とある女子がこっそり教えてくれたところによれば「見えないようになっただけで余計酷くなった」らしい。

じゃあ関係ある人間が言ったらどうなのかと言うと、当の彼氏君に抗議された派手な方はよりエスカレート。結局、交際が破局するまで嫌がらせは続いた。

なお、この話にはオチがあって、派手な方と付き合っていた頃の彼氏君に地味な方が言い寄って奪ったのは言いがかりでもなんでもない事実だったらしい。傍目から見ただけで深い事情はわからないということ。俺の女性不信はこの一件でさらに深くなった。

『なんていうか、世界が違っても女の行動って大差ないわよね』

同じ女である俺が敵視されない理由を考えれば「婚約者がいること」ではないかと想像がつく。既に相手がいる女は基本ライバルにはなりえない。クロエがリオネルとの仲を気にしていたのも破局の可能性を探っていたからだろう。

とはいえ、さっきも言ったように深い事情はまだわからない。
兄妹間での結論はひとまず静観。出会って間もない頃から決めつけるのもおかしいし、こちらから歩み寄る努力もしてみようということになった。
また、兄妹だけで会って情報交換する場を定期的に設けることでも合意。
こうして公爵邸での生活が始まったのだが、
「ねえ、アンナ。もしかして今、わたしって暇なのかしら？」
翌日の朝食を終えたところで、俺は今更な事実に気づいた。
ここには魔法教師役のオーレリアはもちろん、他の家庭教師も一切ついて来ていない。自習や自主練はしておくように言われているものの、教本の暗記なんて向こうでの空き時間にやっていたことだし、自主練にしたって普段の授業より長時間にはならない。
誰かを訪ねたり迎えたりといった予定もまだないので、要はやること、というかやらないといけないことがない。前代未聞である。
すると、部屋の掃除やらなにやら勝手が違うせいかむしろ忙しそうなアンナはややジト目になって、

「魔石作りと読書を並行しながら言われても説得力がありません」
「それは、だってこれは趣味だもの」
念のために暇つぶしの道具は色々持ってきた。本もそうだし、こっちで魔石を量産して魔道具造りでもしようと思っている。石を握りこんで魔力を送るだけの作業はとても退屈なので本を読みながらしようと思ったわけだ。
「でも、家から持ってきた本はいつでも読めるのよね。この屋敷の書庫を使わせてもらえないか、夕食にでも頼んでみなくちゃ」
「リディアーヌ様？　もっと普通に身体を休めてもいいんですよ？」
「……休むってどうするんだったかしら」
お菓子を食べながらベッドでごろごろ？　それでいいのかアンナに尋ねたら「はしたないです」と怒られた。それにこの部屋でだらけていると母に見られているみたいで落ち着かない。
「ねえ、ノエル。剣の稽古でもしない？」
相変わらず傍らに立ってくれている少女に水を向けると、嬉しそうな顔をしてくれる。

「いいんですか？」
「ええ。さすがにただ護衛しているのも退屈でしょう？」
「そうですね。正直、退屈です」
「……まあ、気分転換にはなるかもしれませんし」
あまり気は進まない様子ながら、アンナは公爵邸のメイドに確認を取ってくれた。敷地内（丘の上）の空いている場所なら好きに使って構わないとのこと。
「私もこちらのメイドと交流がありますので、しばらくお傍を離れます。ノエル様がいれば大丈夫だと思いますが、あまり遠くへは行かないでください。もちろん、危ないこともしないでくださいね？」
「ええ、約束するわ」
剣術用の稽古着は新しく仕立てた。ノエルの略式騎士装を参考にしたデザインで、スカートがお洒落かつ可愛らしい。その下も見られていいようにズボンになっていて安心である。
着替えはノエルも手伝ってくれた。よっぽど剣を振りたかったのかもしれない。仲良くなったことを実感すると共に年上の少女を可愛く思ってしまう。

訓練用の木剣を持ってノエルと一緒に屋敷の外へ。すれ違ったメイドは不思議なものを見るような目でこちらを見てきた。どうやらこちらでも剣を振る女性は珍しいらしい。

そして、外でさあ始めようと思ったところで、

「な、なあ、今いいか？」

前にも聞いた生意気な声が降りかかってきた。

相談

平民としては奮発したと思われる、清潔かつ動きやすそうな服装。
公爵家の紋章を腕章のように身に着け、短めの剣を腰に差した少年が二、三歩の距離からこちらを窺っている。
「あら、どうしたの？」
父親はと探せば、離れた場所からハラハラした様子でいるのを発見。
一人で謝りに行って来いと突き放したものの心配で仕方ない、といったところだろうか。
意外と早かったなと思いつつ振り返ると少女騎士が俺たちの間に割って入って、
「何の用だ。見習いの警備兵ごときが公爵令嬢様に失礼だろう」
「いいのよ、ノエル。『言いたいことがあれば来なさい』ってわたしがこの子に言ったの」
「……かしこまりました」
釈然としない様子ながらもノエルが脇へどくと、少年が一歩進み出てくる。

視線はやや下方向に彷徨っていて一点に定まらない。バツの悪そうな態度のまま口が開かれて言葉を紡いだ。

「その、悪かったな。この前は失礼な事言って」

「構わないわ。きちんと気を付けて直してくれれば」

軽く答えた上で「それで？」と先を促す。

言葉遣いは直っていないものの強気な態度がなくなったのは進歩と言える。父親にこってり絞られて少しは反省したに違いない。

彼は若干迷うようにしてから俺と視線を合わせて、

「教えてくれよ。貴族ってのはそんなに偉いのか？　なんで敬語なんて面倒なものを使わなきゃいけないんだ？」

難しい質問である。

「お父さまからは教わらなかったの？」

「親父の教え方じゃよくわからない。貴族は国を治めてて金を持ってるんだろ？　金を持ってれば偉いのか？　偉い相手にはなんで敬語を使うんだ？」

「……愚か者が」

物凄く低い声が横手から聞こえてきて俺まで怖くなる。
気持ちはわかるが相手は子供である。少しは容赦してやって欲しい。
「貴族が偉いのはお金があるだけじゃなくて責任も負っているからよ」
「責任？」
「国を守る責任。民を守る責任。他の国と戦争になれば率先して剣を取り、戦うのも貴族の役目。そして、貴族や王族のお金はあなたたち平民が平和に暮らすためにも使われている」
「暮らすって、貴族が俺たちに飯をくれるわけじゃないだろ。下町には腹いっぱい食えなくて辛い思いをしてる奴だっている」
「下町の人間だって高い壁に守られて生活している。貴族が物の流れを整えて色んな物が都へ入ってくるお陰であなたたちは食べ物が買えるの」
物心ついた時からそれがあった者にはなかなか理解しづらいかもしれない。それでも一定の理は示せたのか、少年はぐっと言葉に詰まった。
「……じゃあ、敬語はどうなんだ？」
「相手への敬意を示すためのもの。面倒な言葉遣いをすることで『自分はそれだけ

あなたを大事に思っていますよ』って伝えているの」
「伝えてどうするんだよ。護衛として役に立つかは腕の問題だろ」
「腕がいくら良くたって、信用できない護衛じゃ意味がないわ。いつ雇い主を殺しにくるかわからないもの」
「そんなの殺される馬鹿が悪いだろ」
平民の世界は自己責任なのだろう。王都の治安はかなり良いが、前世の日本ほど豊かではないし民への教育も行き届いていない。日本だって昭和の時代くらいまでは荒っぽい雰囲気が残っていたくらいだ。
安全な食べ物の見分け方も人との関わり方も自分自身で身に着けるのが当たり前。何かあった時に抗う腕力や逃げるための運動能力も必要。寝床の整頓も食事の支度も護衛まで人にやってもらう貴族とは何から何まで違う。
俺は「そうね」と頷いて、
「なら、私に殺されて死んでもそれはお前の自己責任だな」
「ノエル」
剣を半分まで引きぬきかけた少女騎士は少年を睨んだまま体勢を戻した。

脅し……で、済んでいたかどうか。

貴族には絶対的な権力がある。あまりに無茶な振る舞いは叱責を受けるものの、平民に対してはかなりの自由を許されている。「雇っている平民が十分な働きをしないので殺しました」程度なら普通は何の問題もなくスルーだ。ノエルが殺した場合も我が家に迷惑料を払う程度で済むだろう。

対して、少年はノエルの動きに反応できたか。

目を見開いた状態で「なんでだよ」と呟く。

「俺は、本当は騎士になりたいんだ。なのに、なんでなれないんだよ」

騎士になれるのは基本的に貴族だけだ。

魔法の力が理由である。過去、卓越した武術だけで騎士となった伝説的な平民が何名かはいるものの、彼らは例外中の例外。

騎士になりたい、という平民の願いは一律「無理だ」と否定されるのが常である。

端的に言えば、

「努力だけでは越えられない壁があるからよ」

「っ」

唇を噛んだ彼は俺とノエルをきっと睨みつけてくる。
「なんでこんな女が騎士になれて俺が駄目なんだ……！」
『は？　今、なんて言ったの？』
気持ちが冷えていく。
騎士団において女性騎士の立場は低い。需要が大きいにも関わらずなり手が少ない上、男性騎士に比べて戦闘力が劣ると不当な評価を受けているせいだ。
副団長の娘であるノエルも例外ではない。彼女のしてきた苦労については仲良くなった後、本人から直接、断片的にではあるが聞いている。
だから、返答は思った以上に突き放したものになった。
「ノエルに謝りなさい」
「は？　何で俺が――」
「そう」
右の手のひらを前に差しだす。
貴族の何気ない動作が己の死に繋がる。それはさすがに学習したのだろう。少年はびくっと身を震わせると腰の剣に手をかけようとした。

「動くな」
次の瞬間には鋭利な刃が彼の首にぴたりと突きつけられていた。

遠巻きに様子を窺っていた警備兵たちがすぐに駆け付けてきて、少年を厳重に拘束した。
気持ちのいい話でもないので後のことは流れだけを語るが――とある部屋の真ん中にぐるぐる巻きにされた少年を置き、公爵邸の使用人頭と警備責任者、我が家の護衛代表、少年の父親、ノエルと俺、父の代理としてのアラン（＋俺とアランの専属）で処遇を話し合った。
公爵邸の面々は騎士団への引き渡しを希望した。剣を抜こうとしたのは敵意があったはずだという主張だが、騎士団に渡してしまうと「殺して終わり」が現実的に見える。
一番可哀想だったのは父親である。平伏したまま自身の解雇と罰金を求め、代わりに息子の助命を願った。足りないのであれば自分の命で償うとも。

――息子としてはショックだったはずだ。

彼だって悪意があったわけではない。不条理に気づく勘の良さがありながら底抜けに頑固で、かつ、世渡りのためにプライドを捨てる賢さを持っていなかっただけだ。おかしいものをおかしいと言い続けられる真っすぐな心持ちは前世で一度折れている俺には眩しく思える。

ただ、その結果は少年自身とその養育者である父親までもが容赦なく糾弾されるという現実だった。

口枷をされているため喋れないが、たとえおかしいと叫んだところで何も変わらない。結果を呑み込めず、憤りを表し続けるのであれば、彼は公爵家にとって役立たずどころか害にすらなりうる。

「自分のせいで一家が路頭に迷うことになったら、彼はショックでしょうね。……それとも、解雇した公爵家を恨むのかしら」

「そのような事は絶対にさせません。鎖でつないでも言う事を聞かせます」

父親の決意は本物だろう。

しかし、結局、何をしたところで本人のやる気次第。不満を溜めこむばかりで反

省しなければ何も変わらない。

もしかすると、少年は自分の腕っぷしに自信があるからこそ認められなかったのかもしれない。井の中の蛙であったとしても「認める」のは怖いものだ。

ならば、

「屋敷の人手を減らすのも、命を奪うのも嫌だわ。勿体ないし意味も薄いもの」

俺は条件付きでの罰の軽減を願うことにした。

「この子は戦いと無縁な仕事に就いてもらいましょう。親元を離れて一人で、厳しい指導を受けながら罰金を払うの。お父さまへの罰はせっかく育てた息子を手放すこと。……これでどうかしら？」

「ジゼルに下した罰とほぼ同じか。リディ。まがりなりにも貴族だった彼女とこの平民では立場が違うよ」

「でも、お兄さま。平民への歩み寄りは今後のためにも必要よ」

暗に純血派の存在を示す。

この状況下で平民をほいほい冷遇するのは悪手と言わざるを得ない。

これについてアランは少し考えてから「なるほどね」と言った。

「わかった。他の者に異論がなければ父上に許可を取りつけよう」
「手紙を書くの？」
「いや。遠話の魔法も練習しておきたかったんだ。到着した報告も兼ねて夜にでも話してみるよ」
遠くにいる人間と会話する魔法として最も使われているのは「親しい人間と心を通わせることで心の声を届ける」という方法だ。親や兄弟、夫婦などよく知っている間柄としか連絡を取りあえない代わりに距離の影響を受けづらく、比較的難度が低いとされている。
幸い、他の面々も「公爵様の許可があれば」と了承してくれ、アランはその日のうちに父と連絡を取ってくれた。
結果は父親に「一年間の減給」を科すことと、少年の引き受け先は公爵邸に任せるという条件付きで許可が出た。この処遇について少年は何も言わず「わかった」と受け入れた。
彼は近日中に綿花栽培か羊牧場にでも送られ、えんえんとこき使われることになるだろう。親や兄弟、王都にいる友人に会うには向こうに来てもらうか、あるいは

お金を溜めて会いに行くしかなくなる。
それから、ノエルへの暴言はしっかりと謝らせた。
『まったくもう……一口に平民と言っても色んな人間がいるものね』
純血派などという不届き者が現れたのもある意味では当然のことなのかもしれない。

「リディアーヌ様は定期的に誰かと喧嘩しないと気が済まないんですか！」
「ごめんなさい、アンナ。確かにそういう気持ちはあるかもしれないわ」
「なくていいです！　とにかく、頻繁に喧嘩しようとするのを止めてください！」
アンナにはまた怒られた。これに関しては俺が悪いので黙って話を聞く。
公爵邸からの応援要員として俺に付けられたソフィは、専属とはいえ主人をがんがん叱るアンナを不思議そうに眺めて、
「お二人は本当に仲がよろしいのですね」
「ええ、アンナは本当に優しいの」

「仲がいいなんて……リディアーヌ様には感謝していますし、だからこそ立派になって欲しいだけで……」

俺は笑顔で頷き、アンナも恥ずかしそうにしながら否定はしなかった。ちなみに、それはそれとしてお叱りは再開された。ソフィという他人の目があってもお構いなしである。もちろん、彼女がいい子だと今までのやり取りから感じたからこそだろうが。

「ノエル様も、あまり他の方を挑発しないようにお願いします」

「ですが、リディアーヌ様に失礼な口を利く平民は注意するべきでは？」

「それは、私も注意しますけど」

最初にあの少年へ釘を刺した張本人としてアンナも口ごもってしまう。

とりあえず、ソフィを自由に使っていいと言ってもらえたおかげで人手もあるので、メイド抜きで出歩くのはしばらく禁止、ということで落ち着いた。

屋敷の書庫を使う許可はもらった。少年の引き渡しが済むまで剣の稽古を控えるとしても十分に時間を潰せるだろう。

……と、思っていたらクロエを初め、屋敷に住む一族から次々にお茶会やら外出

やらの誘いが届き始めた。
「もしかしてわたし、人気者なのかしら」
「ようやくお会いできた直系の方々と交流を深めたいと思うのは当然かと」
「リディアーヌ様を放っておくとまずいと思われたのでは？」
ソフィとアンナで全く別の見解が示されたが、とりあえず、一族の人間と仲良くするためにもお誘いは極力受けることにした。手始めにクロエからのお茶の誘いである。

「リディアーヌ様はどのようなお茶がお好みなのですか？」
「わたしは口当たりのすっきりしたお茶を好んでおります。料理やお菓子の味をより楽しみたいものですから」
「そうなのですね。こちらでは甘さを控えた菓子も多いので、私は果物の甘みを加えた紅茶も好きなのです」
クロエの部屋は俺に与えられた母の部屋の三分の一程度の広さだった。それでも

一人で使うには十分広いが、同じ一族でも扱いに差があることがわかる。

ちなみに呼ばれたのは俺一人。聞けば「お忙しいでしょうから」とのこと。確かに、アランは律儀にも過去の統治記録などを見せてもらって勉強しているようで、なかなかに忙しそうだ。

俺はしばし、公爵邸で出る焼き菓子の味や王都での流行などについて話をして盛り上がった後でクロエに尋ねてみる。

「ところで、クロエさまは恋のお話に興味はおありですか？」

「あら、もしかして何かいい本をお持ちなのですか？」

「申し訳ありません。物語本はあまり読んでいないもので……。そうではなく、お好きな殿方はいらっしゃらないのかと。わたしは幼い頃にお相手が決まってしまいましたので、恋のお話を聞くのが好きなのです」

割と露骨に切り出した形だが、クロエは話を流したり誤魔化したりはしようとしなかった。むしろこれ幸いと思ったのか身を乗り出して「誰にも言いませんか？」と声をひそめてくる。

「はい、神に誓って」

人の噂話なんて簡単に広まるもの。どの程度信用されたか謎ではあるものの、俺の返答に気を良くしたようにクロエはそっと教えてくれた。

「実は私、クロード様をお慕い申し上げているのです」

うん、そうだろうと思った。

公爵邸の恋愛事情

「よく我慢できましたね、リディアーヌ様」
「我慢すると言った矢先だったもの、さすがにね」
部屋に戻った俺はアンナの賞賛（？）に肩を竦めた。
クロエとのお茶会は和やかに終わった。ただ、少年の一件がなければ喧嘩を売っていたかもしれない。
椅子に腰かけたまま目を細めて思い返す。室内にはソフィもいるが、彼女を通じて一族の誰かに知られたとしても特に問題はない。

「そうだったのですね。クロードさまのどこを気に入られたのですか？」
「殿下と恋仲でいらっしゃるリディアーヌ様にはお分かりにならないかもしれませんね。クロード様はとてもお優しく真面目な方なのです」
恋する乙女の表情を浮かべたクロエはうっとりとした表情で語ってくれた。

次期領主補佐であるクロードは父の後を継ぐための勉強中。他の一族――各業務の担当者の下について実際の業務を学んだり、父の仕事を手伝ったりしているらしい。要するに宰相職を継ごうとしているアランと同じような立場だ。

華やかな服飾に関わる公爵領の産業だが、その実態はなかなか地味である。にもかかわらずクロードは文句を言うこともなく真面目に勉強を続けているという。

「特に羊の飼育は生き物相手です。独特の臭いもありますし、触れれば汚れる事もあるでしょう？　あの方はそういった事を厭わず、むしろ平民にも気さくに話しかけて直接仕事の様子を確認していらっしゃるのです」

「なかなかできることではありませんね」

「そうでしょう？　もちろん容姿も素敵ですが、私はクロード様のそうした気質に惹かれたのです」

確かに、食事の時以外は顔を合わせないものの、ここ数日話した限りではクロードの人柄は良い。初日に俺たちをフォローしてくれたし、祖父からも目をかけられている感じがある。一族間ではバランサーというか宥め役といった印象だ。

クロエはさらに「私は羊の世話を好んでおりますし、クロード様のお役にも立て

るのではないかと。一般的な令嬢は動物の世話や土いじりの現場は忌避します。私としてはあんなに可愛い羊をどうして嫌がるのか理解できないのですが……」などと続ける。

俺は感心した風に頷きながら首を傾げて、

「ですが、ライバルも多そうですね？」

クロエは「そうなのです」と沈痛な表情を浮かべた。

「幸い、学園在学中に結婚が決まる事はありませんでした。ただ、来年には私が王都へ行く事になります。そうしたらまたお会いできなくなってしまうでしょう？」

「王都との距離を考えると手紙が届くにも時間がかかりますものね」

両親もすぐさま引退するような歳ではない。結婚は焦らなくてもいいと言っているようだが、公爵領の差配を任される領主補佐という立場はかなり魅力的だ。内外からのアプローチは当然、複数件にわたって存在している。

片親が平民であるクロエは立場的、能力的には不利。

関係が進展しないまま離れてしまったら今度こそアウトだと焦っているわけだ。

「クロエさまにとって一番の恋敵はどなたなのですか？」

「それは、その。怒らないで聞いてくださいますか？」
「内容によりますが、善処いたします」
言いづらそうにしながら口された名前は予想通りだった。「シャルロット様です」。
表情はとても冗談を言っている雰囲気ではない。
「シャルロットとクロードさまでは歳が離れすぎでは？」
「十歳程度の差は貴族であれば珍しくないでしょう？」
現国王と王妃もかなり歳が離れている。シャルロットが学園に入学して年頃を迎える頃にクロードは二十代中盤、男盛りを迎えるわけだから、意外といい歳の差なのかもしれない。婚約さえしておけば結婚は送らせられるわけだし、クロードには急ぐ理由が特にない。
公爵家直系であるシャルロットは考えるまでもなく優良物件だ。対抗するなら最低でも侯爵家クラスの権力が欲しい。クロエは公爵家一族とはいえ分家の養女であるため分が悪い。
「リディアーヌ様。どうか私の恋を応援してくださいませんか？」
こちらに近づき、二人きりのお茶会まで開いたのはこのためか。

俺は微笑を浮かべたままやんわりと応じた。
「申し訳ありません。話の流れによっては義妹が悲しむことになりますので、不用意に『応援する』とは申し上げられません。……ですが、せっかくなら想い合っている者同士が結ばれることを願いたいものです」
「リディアーヌ様はクロエ様の側に付かれないのですね？」
仕事の手を止めたソフィがこちらへ向き直って尋ねてくる。
「付くわけないわ。むしろ『恋敵と決まってもいないのにわたしの妹を敵視していたの？』って言ってやりたかったくらいよ」
「お二人は仲がよろしいのですね」
俺に貸し与えられた公爵邸のメイド。呟いた声には負の感情は籠もっていない。むしろほっとしているようにも感じる。俺もまた特に感情を膨らませることもなく当然のこととして「姉妹だもの」と答えた。
血縁的に親戚だとかは関係ない。積み重ねてきた年月、交わしてきた言葉の分だ

け、この家の人間たちよりシャルロットの方が俺との繋がりが深い。
「もちろんお兄さまのことも大好きよ。だから、二人が軽んじられたり遠ざけられるのは許せないの」
「兄弟姉妹を想うのは当たり前の事ですものね」
深く頷いたソフィはどこか感心しているように見えた。
そして、それからは一族からのアプローチが怒涛のようにやってきた。食事の後にお茶を飲んでいれば誰かが必ず「少しお話をしませんか？」と寄ってくるし、散歩の途中で話しかけられて話し込むことも。珍しいところでは書庫で読書中に鉢合わせてそのまま会話になったり。
他愛ない雑談に意図を織り交ぜてくるのがなんとも厄介だ。しかしその甲斐もあって少しずつ公爵家一族の事がわかってきた。
「どうやらシャルロットは複数の女子から『クロードさまを狙う上での障害』と認定されているみたい」
兄妹での二度目の話し合いにて。俺が報告すれば、アランも「そうみたいだね」と頷いた。

「僕も『シャルロット様がこちらへ嫁いでくる可能性はあるのか』と複数人から尋ねられたよ」

「嫁ぐって、どうしてそういうお話になるのですか……!?」

当のシャルロットは驚きの表情。まあ、それはそうだろう。まだ来て数日、しかも単なる里帰りのつもりだったのだから結婚がどうこうとか考えているわけがない。

「シャルロットはそういうこと聞かれなかった？」

「聞かれました。でも、どんなお相手が好みなのかとか、王都を離れる気はあるのか、といった普通のお話だったので……」

「そうだろうね。さすがに本人には聞きづらいだろうし」

「下手なことを言って『その手があったか』ってなられても困るしね」

これに義妹はしゅんとして、

「私、クロード様の事を狙ってなんかいません」

「シャルロットが可愛いからみんな警戒してるのよ」

「ああ、それはあるだろうね」

「お姉様もお兄様も私の事をからかっていませんか？」
からかってはいない。俺もアランも大真面目である。
「でも、面倒くさい話よね。好きな相手がいるなら直接口説き落とせばいいのに」
「クロードはあまり恋愛に興味がないようだからね」
どうやらアランのところにはクロードから一対一のお誘いがあったらしい。妙なプレッシャーをかけられる事もなく、チェスなどに興じながら政治や領地経営の話をしたそうだ。恋愛の話はその中でぽろっとこぼれるようにして登場した。
『貴族の恋愛はとても複雑だろう？　私はもっと、気の合う相手と素朴な恋がしたいんだ』
なるほど。熱烈なアプローチは好みでないらしい。
「そうなると一筋縄ではいかないでしょうね」
「女性からの意見は是非聞きたいところだけど、そうなのかい？」
「だって、クロードさまが望んでいるのは自然に育まれていくような愛でしょう？　ですが、こんな状況では年頃の女性が近づいただけで警戒されかねません」
前提条件が満たせないのではゆっくり交流して居心地の良い関係を作るなんて夢

のまた夢。

そういう意味で言うと恋愛感情も打算もないシャルロットは警戒をすり抜けられる。図らずも女たちの危険視が正しいことになる。

「私にその気はありません、って言えばいいのでしょうか」

「どうかしら。信じてもらえるかどうかは別問題だから……」

言質を取られていいように利用される可能性もある。それから、シャルロットがこれからクロードに惚れる可能性も。

シャルロットは少し考えるようにして、

「では、ブリジット様が私を嫌っているのはどうしてなんでしょう？」

領主補佐夫人であるブリジットはあれ以降もちくちくと嫌味を言ってきている。

「そんなつもりはなかった」とでも言えば逃げられるレベルでしかないので今のところ咎められてはいない。

しかし、ブリジットはクロードの母親だ。

他の女たちのように恋敵だから嫌っているわけではないだろう。

「それはおそらく、シャルロットが分家出身だからだ」

アランが苦い顔をしながら告げた。
「私はここでの生活をほとんど覚えていないのですけれど……」
「向こうは覚えているんだろう。シャルロットにはどうしようもないのが嫌なところだね」

ブリジット・シルヴェストルは領主補佐ジェラール・シルヴェストルの妻として隣の辺境伯領からやってきた女性だ。
ジェラールとシャルロットの父親は兄弟。セレスティーヌから見たブリジットは「義兄の嫁」ということになる。
公爵領で過ごしていた時代のブリジットはセレスティーヌより上の立場だったわけだ。
『なのに、あの女はお父さまに見初められた』
心境としては同情が大きかったかもしれない。父が前妻である俺の母からほいほい乗り換えたとは思いたくない。むしろ、母のことを忘れられないのに妻を娶らな

ければならなかったから「内から選んでも外から選んでも同じだ」とセレスティーヌを選んだのではないだろうか。

しかし、これによってセレスティーヌは分家筋の嫁から本家筋、公爵の妻へと昇格した。ブリジットが女としてのマウントを取って悦に浸っていたのだとすればこの出来事は相当気に入らなかったはずだ。

その上、セレスティーヌの娘であるシャルロットがクロードとくっつくようなことになれば？

『お父さまとの子を産み、娘を分家筆頭に嫁がせたあの女は圧倒的な勝ち組ということになるわね』

派手好きに見えるブリジットとしては王都で流行を主導しているのも気に食わないだろう。

何もかも上を行かれる中、せめて娘へ怒りをぶつけてやろう……と考えても不思議はない。

『なんだろう。なんとなく気に食わないわ』

別にセレスティーヌが憎まれようとどうでもいいが、それがシャルロットに飛び

火するのは嫌だ。

「ソフィ。お祖父さまに面会を頼んでくれないかしら？」

俺の推測が正しいかどうか、知っていそうな人物に尋ねた方が早い。確認してもらったところ、祖父が指定してきたのは意外にも俺の部屋だった。

「この部屋に入るのも久しぶりだな」

入室するなり、彼はしみじみとした口調で呟いた。

席を勧めると鷹揚に頷いて腰を預けてくれる。顔も体格も雰囲気も威厳たっぷりで、柄にもなく少し緊張を覚えてしまう。

メイドたちがお茶や茶菓子の用意をしてくれる中、俺は祖父に尋ねた。

「お母さまとはお話をされたことがおありなのですか？」

「敬語はやめなさい。私の事が嫌いだと言うのなら話は別だが」

「嫌いなわけないじゃない。それじゃあ、お言葉に甘えるわね、お祖父さま」

飾らない性格なのだろうか。尋ねると「他の者が相手なら絶対にこんな事は言わん。たとえ相手が息子でもな」と返ってきた。単に孫が可愛いだけらしい。

「アデライドとの関係だったか。もちろん、何度も言葉を交わした。私はジャンと

彼女の結婚を承認する立場だったのだから」
「お父さまとお母さまは恋愛結婚だったのかしら？」
「ああ、そうだ。ジャンがアデライドを熱烈に口説いて首を縦に振らせたらしい」
答えた祖父はふっと口元に笑みを浮かべる。俺としてもなんだか目に浮かぶようで、ついくすりと笑みをこぼしてしまった。
「お母さまを知っている人と話せて嬉しいわ。お父さまに聞くのはなんだか申し訳ないし、まさか国王陛下に強請るわけにもいかないでしょう？」
「陛下としても答えづらいだろうな。あの方も本気でアデライドを狙っていたはずだ」
母の美貌を妙に褒めていたと思ったら、やっぱりそういうことか。父と国王は同じ女を巡るライバルだったわけである。
「ジャンが相手なら猶更だ。あれは『娘に見られたくないから』とアデライドの絵をわざわざこちらへ送ってきたくらいなのだから」
「だからこの部屋にお母さまの絵があるのね？」
「絵はあれで全部ではないがな。残りは倉庫にしまってある。ジャンも特にお気に

入りの絵はこっそりと隠し持っているのではないか？」

ありそうだ。セレスティーヌにも見られにくい場所となると、やっぱり私室か寝室だろうか。

そんなことを考えつつ、俺は「とある件」について尋ねるなら祖父が適任なのではないか、と思った。両親には下手に尋ねられない。かといって信頼のおけない相手に尋ねるのもリスクが大きい。

知識と経験に溢れた祖父なら何か知っているだろう。

「ねえ、お祖父さま。『竜の系譜』ってなんのことだか知っているかしら？」

祖父の眉がかすかに動いた。

祖父と孫の歓談

「その言葉を誰から聞いた？」

「先の卒業パーティー襲撃の際、純血派の一人が口にしていました。『竜の系譜だけでも片付けて』と。おそらくは人物または物品。さらに状況を加味すれば――」

「止めておきなさい」

ジゼルからの悪意、セレスティーヌの教育、社交のプレッシャー。緊張には慣れているつもりだった。しかしその瞬間、俺は本気で悪寒を覚えた。

表情はほとんど変わっていない。だというのにはっきりとわかる。この話題は大きすぎる地雷だ。王国で宰相を務めてきた大人物でさえ慎重にならざるをえないほどに。『でも、もう少しくらい踏み込みましょう。でないと意味がないわ』。

膝の上に乗せた手をぎゅっと握って口を開く。

「知らなければ巻き込まれない、という保証もないでしょう？」

深いため息。

「相手が可愛い孫でなければ、どんな手を使ってでも口を封じるところだ」

それほどまでに重い秘密か。

小さく息を吐き、紅茶を一口喉へ流す。芳醇な香りが気分をほんの少し落ち着かせてくれた。

背中側にある母の絵がこちらを見つめているような気がする。

「どれくらい強くなれば教えてもらえるかしら」

「……ジャンやセレスティーヌの考えはわからん。私としてはお前がリオネル殿下と結婚した後なら教えても良いと思っている」

おそらくは祖父にできるギリギリの譲歩。

素直に待つにはかなり遠い。常識的に考えて結婚は早くて学園卒業後、十八歳だ。

しかし、自分なりの知識と推測、そして言われた意味を考えあわせればそれなりの回答を導き出せる。

俺は微笑んで堅物めいた初老の紳士を見つめた。

「ありがとう。お祖父さまは優しいのね」

「……本当に、お前はアデライドに良く似ているな」

「良く言われるわ。絵姿を見た後だと自分でもそう思う」

「違う」
ゆっくりと首が振られる。意味がわからず瞬き。
「今言ったのは内面の話だ。あれも気丈な娘だった」
「初めて言われたわ、そんなこと。お母さまは大人しくて優しい方だとばかり」
「普段はな。それがアデライドの処世術だったのだろう」
処世術。そうしなければ生き抜けなかった、ということか。
人に歴史あり。父にも母にも、祖父にも、俺の知らないそれぞれの物語がある。
彼らの全てを知ることは魔法を駆使しても不可能だろう。
聞きたいことはたくさんあるが、ここは我慢して話題を変える。
「……セレスティーヌさまはお母さまと全然違うでしょう？　馬が合わなくて困っているの」
祖父も特に驚くことなく乗ってきた。
「セレスティーヌか。あれは不器用だからな。自分で産んだ娘ならともかく、他人の娘をどう扱ってよいかわからなかったのではないか」
「え、お養母さまが不器用？」

「ああ、そうだ。そうでなければジャンの子を孕むのにこれほどの時間はかけまい」

『待って。別の人の話じゃないわよね？』

にわかには信じがたい話だ。確かに本人もそんなことを言っていたが、他人の評価はまた別。俺にとってセレスティーヌは畏怖の対象、いつまで経っても追いつける気がしない実力者である。その彼女が不器用と言われても「またまた冗談ばっかり」という気分になる。

例えば、これが父の話なら受け入れられる。あの人は厳しいようでいて子供にも女性にも甘いし、甘い物が苦手などの愛敬もある。

母アデライドが完璧な人ではなかった、と言われても特に違和感は覚えない。美貌と魔力以外は目立たない方だったようだし、本人も自己主張の強い方ではなかった。

なら、セレスティーヌは？

様々な策を巡らせ、真意を悟られないように清楚な微笑みを浮かべ、子供たちを厳しく指導し、流行の発信においても一目置かれている。

しかし。

ジゼルを御しきれてはいなかったし、俺から好意を勝ち取ることもできていない。父を篭絡してさっさと子を成すことだって。何もかも計算ずくの怪物だというのならもっと上手いやり方があったのでは？

なんだ、これは。

わからなくなって黙り込んだ俺を見て、祖父はふっと笑った。

「恨むなとは言わない。だが、全てがあれの本意だったとは思わないで欲しい。誰にでも思い通りに行かない事はあるものだ」

「あの、えっと。じゃあ、お祖父さま？　お祖父さまから見たお養母さま――ここにいた頃のセレスティーヌさまはどんな人だった？」

すると、懐かしむように目が細められ、またしても信じがたい回答が紡がれた。

「愛する者と結ばれ、最高の幸せを手に入れた花嫁。公爵家の男に嫁いだ者として精一杯の役割を果たそうと懸命に努力する不器用な娘だった」

もはや、誰のことやら。

「……困るわ、そんなの。お養母さまが前の夫と恋愛結婚だったなんて。その頃から自分の役割を果たそうと必死だったなんて」

「リディアーヌは聡いな。もう少し向こう見ずであれば悩みも減るだろうに」

セレスティーヌ・シルヴェストルは狡猾な悪女ではない。

上手く父に取り入ったわけでもなく、互いに配偶者を失くして傷ついた者同士の結婚だった。セレスティーヌが大きな派閥を作り、流行を発信し、子供たちへ厳しい教育を課してきたのは全て、公爵家の嫁としてやるべきことだったから。

困る。

本当に困る。今まで父と子供ができなかったこと、我が儘放題な俺が放置されていたことなどと合わせて納得できてしまうのが良くない。

「それじゃあ、わたしがあの人を嫌う理由がもうないじゃない」

かつての仕打ちについては恨んでいる。父との子を産んだのも複雑ではある。

しかし、セレスティーヌは「俺の母親」としての役割はともかく「公爵令嬢リディアーヌ・シルヴェストルの母親」としての役割はしっかり果たしている。そしてそれは誰にでもできることではない。

「今言ったのは私から見たセレスティーヌに過ぎない。お前から見たセレスティーヌの姿が異なっていようと、それはおかしなことではない」

「お祖父さまのことは信用しているもの。それを疑うことはできないわ」
「身内に甘いのはお前の悪い癖だな」
「そうね。公爵家の血じゃないかしら」
俺が冗談めかして返すと、祖父は「そうか、血筋では仕方ないな！」と大笑いした。かなりの声量。これにアンナはびくっとし、エマは表情を変えず、ソフィは「仕方ないなあ」という顔。
ひとしきり笑った後、祖父はクッキーを一気にいくつも掴んで口に放り込み、咀嚼する。「甘いな」。呟いた時には表情はもう戻っていた。
「リディアーヌ。ブリジット達の行動についてどう思う？」
「正直に言ってくだらないと思うわ。気に入らないなら決闘でもなんでもすればいいじゃない。こそこそ嫌がらせするなんて自信がない証拠よ」
「豪快にも程があるな」
聞いただけの話で養母への想いががらりと変わるわけではない。それでもブリジットの存在がセレスティーヌも決して楽な人生ではなかったのだろう、と俺に思わせる。養母と義妹にとっての敵がはびこっているというのなら、俺は身内として

二人の側につかなければならない。
そうすると、目の前にいる男の立場が気になるが。
「お祖父さまはシャルロットのことが好き？　嫌い？」
「難しい事を聞くんじゃない」
意外にも祖父は顔を顰めた。
「好きではないってことかしら？」
「そうではない。……だが、接し方が難しいのだ。セレスティーヌが義娘になった以上はあの子も私の孫だが、もともとは弟の孫だからな」
「ああ……」
弟にも可愛い孫が生まれたじゃないか、と思っていたらその子の父親が死んで「この子はこれからお前の孫な」と言われたわけである。自分の孫と同じように溺愛するのも素っ気なく突き放すのも難しい。ろくに会っていなかったのなら猶更である。
「それに、私があの子を構いすぎればブリジット達が過剰反応しかねん。食事など開かれた場ではある程度距離を取るしかあるまい」

「家族とも素直に交流できないなんて、本当、貴族って面倒よね」
「王族入りする人間が言うことではないな。まあ、お前ならなんとかしてしまうだろうが」
「買いかぶりすぎよ。わたしは型通りのやり方ができないから型を壊しているだけなんだから」
「ははは。お前も不器用だと言う事か。案外、セレスティーヌと二人、不得手を補い合っているのかもしれぬな」
当のセレスティーヌは俺の社交について鬱陶しそうにしていたが……もし、彼女と得意分野を分担できているのだとすれば、それは面白い話かもしれない。
俺は照れ隠しも兼ねて肩を竦めて、
「シャルロットを守るにはクロードさまがお相手を決めてくださるのが一番なんだけど、なかなか難しいでしょうね」
いっそのこと「異性には興味がありません」と宣言してくれても構わないのだが。

翌日の午後、公爵邸のメイドが部屋を訪れて伝言を告げてきた。
「リディアーヌ様。クロード様より外出のお誘いでございます。外の空気を吸うついでに牧場を案内したい、と」
「あら。それは嬉しいお誘いね」
あの少年も無事、新しい仕事先への引き渡しが済んだらしい。そろそろ遊びに出てもいいだろう。アンナやノエルも「リディアーヌ様のお望み通りに」と言ってくれる。
「是非お願いしたいわ。着替えて玄関に向かえばいいかしら？」
「はい。少し歩きますので、できる限り動きやすい格好でお願いいたします」
そういうことならと、この間少しだけ着た剣術の稽古着に着替えた。乗馬服としても使えるし、走っても下着が見えないデザインなので色々都合がいい。時間が余ったら剣の練習もできそうだ。
自慢の紅髪はポニーテールにまとめて準備完了。
「さて、誰がついてきてくれるのかしら？」
「え、えっと、エマ先輩。いかがですか？」

「専属であるアンナが尻込みしてどうするのですか」
メイドたちに声をかけたところ、アンナとエマが担当の擦り付け合いを始めた。
エマの方はもっともらしいことを言っているし、アンナも「主のお部屋を守るのも立派な務めです」と反撃しているが、
「二人とも、もしかして動物って苦手？」
直球で尋ねると白状してくれた。別に犬猫くらいならなんでもないものの、もう少し大きな動物になると触れる機会がないので得意ではないらしい。見る機会も多い馬でギリギリ。しかし牧場となれば羊の群れを相手にしなければならない。
『不思議ね。羊ってとっても可愛いと思うんだけど』
「じゃあ、ソフィにお願いできるかしら？」
「はい。私でよろしければ喜んで」
苦手な二人に無理にとは言えない。王都での生活がメインのアンナたちはそうそう羊の相手なんてしないだろうし、ここはソフィにお願いした。
部屋の掃除などはアンナたちに任せ、ノエルも含めた三人で移動する。
「ソフィは羊、嫌じゃないの？」

「ええ。時々脱走して丘を上って来る子もいますし、見下ろすだけでたくさん目にする環境ですから、怖がってなんていられません」
「逞しいのね。やっぱり環境の違いは大きいみたい」
「リディアーヌ様は怖くないのですか？」
「全然。ふわふわした毛を早く触ってみたいわ」
数十分後、俺は自分の台詞を後悔することになった。
玄関でクロードと合流。同じように誘われたらしいアランとシャルロットも一緒だった。アランは乗馬服、シャルロットも公爵領行きのために急遽仕立てた可愛い乗馬服を纏っていた。
それから四人（＋使用人&ノエル）で外へ出て、牧場まで馬車で移動する。途中に丘はともかく街があるので歩いていると少し時間がかかってしまうからだ。
で、牧場の近くで下車。歩いて近づいて行くと、
「もの凄い数がいるじゃない……!?」
「ふわふわしていない子がいるのですが、あれも羊なのですか……!?」
「違うわシャルロット、きっとあれは山羊よ」

「いや、みんな羊ですよ。今はちょうど毛刈りの時期なので」
夏に備えて毛を刈り取られ、すっきりしてしまった個体が交じっているらしい。もこもこの毛を纏った個体と比べるとまるで別の生き物である。
なお、羊の毛刈りはかなりの重労働になるため、毎日少しずつ実施しているのだとか。
「この数に襲われたらさすがに死ぬかな」
「お兄さま、縁起でもないことを言わないでちょうだい」
「そうです。この子達は大人しいからそんなことはしません……よね？」
「まあ、刺激しすぎなければ大丈夫ですよ」
そんなことを言いながら入り口から柵を越えて中へ入ったら「珍しい奴が来たぞ」「誰だ誰だ」とばかりに滅茶苦茶群がられた。
毛はなかなかにふわふわしていたが、思ったよりは白くない。そりゃ日々汚れるから洗わないと白くはならないよな……と思ったところで、気難しそうな一匹から妙に鋭い眼光を飛ばされてびくっとする。
もちろん、こちらが普通にしている分には蹴ったり噛んだりはしてこなかったの

だが。

「羊、なかなか侮れないわね……？」

なお、一番人気はシャルロットで、彼女は身動き取れないほどの羊たちにじゃれつかれた。次が慣れているクロード。俺はその次で、なんというか俺のところに来た羊は物好きというか変わった性格の奴らが多かった気がする。

じゃれついてきた数としては一番少なかったアランはといえば、おそらくメスであろう少数の羊たちを相手に心おきなくその感触を堪能しており、ある意味一番の勝ち組だった。

公爵邸での療養

※予約投稿時間を間違ってました

「見慣れてきたらやっぱり可愛いかも」
「そうですね。ずっと見ていられそうです」
羊たちは来客（俺たち）を囲んでじっと見つめたり、めーと鳴いたり（実際はもうちょっと複雑な鳴き声なのだが文字で再現するのはなかなか難しい）、匂いを嗅ぐような仕草をしたりした後は徐々に散開していき、もうほとんど普通に過ごし始めている。
あっちへ歩いたり、こっちへ歩いたり、草を食べ始めてみたりと自由気まま。いかにものんびりしていて癒しを感じる。
優雅な印象の割に日本のサラリーマン並に忙しい貴族にとってはなかなか羨ましい生活かもしれない。

『いや、ないでしょ。いくらかの羊は子供のうちに殺されて肉にされるのよ？』

脳内で身も蓋もない意見が出る。しばらく羊料理を食べられなくなりそうなので止めて欲しい。

「全部で何匹くらいいるのかしら」

「この牧場にいるのが約３００です。公爵領全体だと２００００程度でしょうか」

「想像がつかないわ。……というか、クロードも敬語は止めてくれないかしら？その方が話しやすいわ」

「いいのかい？　なら、そうさせてもらおうかな」

クロード・シルヴェストルは高位貴族としてはかなり朴訥かつ誠実な性格らしい。羊たちにも好かれているし、牧場の中にリラックスした様子でいるのがなんだか妙に似合っている。

牧場の人員たちは「本家の人間」である俺たちをかなり恐縮した様子で出迎えてくれたのだが、クロードとはだいぶ打ち解けているらしく、かなり砕けた態度を取っている。

「この子達は主に草を食べるのですよね？　草がなくなったりはしないのでしょ

うか」
「もちろん放っておくと食いつくされかねないから、たまに外を歩かせてついでに食事させたりもしているよ。あとは干し草を与えたりだね」
「そうなのですね」
「上等な毛を蓄えてもらうためにも、栄養はたっぷり取ってもらわないといけないものね」
近くにいた一頭に歩み寄って撫でてやる。そいつは撫でられても「飯の邪魔をしなければいい」とばかりに草をはむはむし続けていた。うん、お腹いっぱい食べてくれ。
アランも牧場全体を見渡しながら何かを考えて、
「羊の品種改良も行っているんだろう？」
「ああ。与える餌の種類や飼育環境の違い、交配など色々試しているよ。羊と言っても毛の量が多い種類もいれば毛の質がいい種類もいる。皮や肉の方が目的となればまた別の種が必要になるからね。できることはいくらでもあるんだ」
「試行錯誤の連続だからな。長い目で見なければ結果が現れない事も多い。皆の努

力には頭が下がる思いだ」
「ありがとう。アランがそうやって理解を示してくれるのは本当に嬉しいよ」
笑顔で語るクロード。歳は少し離れているが、そうやっているとアランとはまるで実の兄弟のようにも見える。活動的な兄とやや気難しい弟。組んだらなかなかいいコンビになれるかもしれない。
「ねえ、クロード？　あなたはお兄さまのこと嫌いじゃないの？　順当に行ったらお兄さまが領主であなたは補佐になるわけでしょう？」
「これはえらく直球だな」
「リディ。さすがに失礼だよ」
「いいさ。そりゃあ気になるだろうしね」
さらっと流して俺の方を振り返る彼。
「アランの事は好ましく思っているよ。補佐になるのは小さい頃から聞かされていた話だから、特になんとも思わない。むしろそれが当たり前だと思っている」
これにアランが反応を示した。少し迷うようにしてから口を開き「この際だから聞かせてくれ」と核心を突く。

「もし、僕が領主として直接ここを治めると言ってもそれは変わらないか？」
「お兄さま」
「お兄様？」
アランは何も答えなかった。彼は彼で色々考えているのだろう。例えば、宰相を継がなかった場合に自分はどうなるのか、とか。
『考えてみると、別に領主と宰相が同じ人じゃなくてもいいのよね』
宰相職は世襲制ではない。
補佐を置かないと領地運営が立ち行かないくらいなら領主が公爵領で運営を行い、宰相職を別の子に継がせる（そしてその子と家族が王都で暮らす）のでもいいのだ。
まあ、権力の分散になりかねないし、領主も宰相も優秀な者に継がせたいという事情なんかがあってこうなっているのだろうが。
セレスティーヌの子――公爵家の次男が宰相になることも見据えるのであれば当然、気になるところだ。
果たして、クロードの答えは。

「もちろん、大歓迎さ」
曇りの一つもない晴れやかな表情だった。
「クロード」
「だって、俺の今やっている事をこの先も続けていけるんだろう？　楽しそうじゃないか。アランは細かい仕事が得意そうだから、俺が現場の確認を担当すれば上手くいくんじゃないか？」
クロードが今やっている仕事は補佐の手伝い。領主補佐が実質的領主である現体制を考えれば、トップがアランにすげ代わっても状況的には大差ない。
もっともそんなこと、よっぽど権力欲がないか、それともよっぽどの演技派でないと言えないわけで。
「クロード。君は正直者すぎるとよく言われないか」
「残念だけど、うんざりするほどよく言われるよ」
『なによこの好青年』
あの母親からよくこんな良い子が育ったものである。やはり大自然の力なのか。いやまあ、ブリジットもセレスティーヌ関係以外は善良なのかもしれないが。

「クロードお兄様が素敵な方で良かったです」
「本当。学園ではさぞかしお誘いがあったでしょうに」
「悪いけど、俺は政略結婚とかうんざりなんだ。一緒になるなら協力して領地を良くしていける女性がいいよ」
アランから聞いていた通りである。彼の言葉を鵜呑みにするなら一族の誰かと結ばれるのが一番だろうが、こんな良い奴が安売りされるのは勿体ない気もする。
いや、少なくともクロエには恋愛感情があるっぽいし、そんなに悪くないのか？
……うん。なんというか正解のない問題過ぎて面倒だ。もうちょっとわかりやすいいじめでもあればそいつを懲らしめて状況をわかりやすくするのだが。
「だったらうちのシャルロットなんてどうかしら？　姉の贔屓目はあるにせよ、とってもいい子よ」
「お、お姉様！　突然何を言い出すんですか!?」
「いいじゃない。クロードはとってもいい人みたいだし、シャルロットはむしろ選べる立場なのよ？　選択肢に入れておいても損はないわ」
「そ、そんな事……！」

真っ赤になる義妹。天使のような愛らしい容姿だとそんな姿もとても絵になる。感心していると彼女はもごもごと口を動かして、

「わ、私は王子様の結婚相手を目指しているので」

「あら。やっぱりリオネルさまのことを想って？　だったらそう言ってくれていいのよ。向こうも面倒のない相手なら構わないでしょうし」

「そういうことじゃありません……！　もう、お姉様、変な事言うと怒りますよ！」

頬を膨らませて怒るシャルロットはそれはもう可愛かった。もっと見ていたいくらいだったが、さすがにそれは彼女に申し訳ないので俺は「ごめんなさい」と頭を下げる。

「そういうことみたいだから、クロード。悪いけど諦めてくれるかしら？」

「何も言ってないうちに振られた気がするんだけど」

苦笑を浮かべたクロードは悪戯めいた表情になって、

「残念だよ。シャルロットとなら仲良くやれそうだったからね。でも、こんな可愛らしい子を田舎に押し込めるのは可哀想だし、これでいいのかもしれないね」

「か、可愛いだなんて……」

あれ、意外と脈ありなのか？

恥ずかしそうに俯いてしまった義妹を見てそんなことを思いつつ、俺は続けて紡がれた「可愛いのはお姉様の方です」という言葉に全力でツッコミを入れた。

「わたしの性格を無視して容姿を気に入るのはなかなかの物好きよ。間違いないわ」

公爵領に到着して数日。

シャルロットは俺が指示した魔法の練習（ペンダントをぴかぴか光らせる）を欠かさずこなしていたらしく、久しぶりの魔法授業で「ペンダントに触らずに同じ光景を頭に描いてみて」と指示を出すと、いともあっさり指先を光らせることに成功した。

「すごいわ。……シャルロットは天才なんじゃないかしら」

「もう。お姉様が言うと嫌味にしか聞こえません」

旅に出てから話をする機会が増えたせいか、義妹とは今まで以上に打ち解けてき

た気がする。むしろ俺のおかしな部分がバレ始めたと言うべきか。お陰で前よりも率直に話をしてくれる事が増えてきた。

「わたしを参考にしちゃだめよ。わたしとオーレリアは常識から外れているから」

傍らに控えているアンナがうんうんと力強く頷いてシャルロットとその専属であるアニエスがドン引きした。

「お姉様はどんな覚え方をしたんですか？」

「習いはじめの時は覚えなければ死ぬ状況だったし、覚えたら覚えたで付けられた先生に『教えなくてもできるでしょう？』って丸投げされたわ」

「わけがわかりません」

俺だってわけがわからない。

自分がオーレリアの立場になったとしてもさすがにあんな教え方はしないと思う――いやでも、死にかけの状態から魔法の発動に成功して生き残った挙句、碌にコツも教えてないのにぽんぽん魔法を使って見せる変な生徒を与えられたらああするしかないような気もする。

まずい。結局俺とオーレリアは似た者同士なのか。

「わたしのことはいいのよ。今はシャルロットの魔法の話。と言っても、あなたは第一関門をあっさり越えてしまったわけだけど」
「まさか、ここからは自習なんですか……？」
「そんなことするわけないでしょう。ここからはまず、指先を安定して光らせられるようになること。それができたら光を強めたり弱めたりできるのを目指すわ」
「えっと、物凄く地道な作業ですね……？」
「派手にすればするほど危険になるんだから仕方ないわ」
初手でいきなり自分を熱して病魔を吹き飛ばすとか自殺志願者の所業である。
「でも、同じ事をするだけなら難しく……あ、あれ？」
光を消した後、同じ事をしようとしたシャルロットは一瞬指を光らせたと思ったらすぐに光を消してしまう。本意ではなかった事は表情を見れば明らかだ。
「ね？　魔法は精神集中が大事だから、集中が途切れると途端に成功しづらくなるの。危機的状況でも安定して発動させたければ何度も練習して慣れるしかないわ」
「はい、お姉様」
五秒くらい光らせては消す、という作業を繰り返してもらう。成否はメモしてい

き、成功率の上昇が一目でわかるようにした。そうして成功率が下がり始めた……疲労によって集中力が下がり始めたところで授業を終わりにする。

「また二、三日してから続きをしましょう。くれぐれも、わたしがいないところで練習をしないようにね？　アニエスも目を光らせておいてちょうだい」

「かしこまりました。お任せください、リディアーヌ様」

「お姉様！　アニエスまで、私ってそんなに信用ありませんか……？」

しゅんとしつつ上目づかいで視線を送ってくるシャルロットだったが、あいにくこれに関しては俺自身という反面教師がいるのでその手は食わない。

「こういうのは理屈ではわかっていてもついつい練習したくなるものなの。もしそうやって失敗したら大変なことになるんだから。……ね、アンナ？」

「はい。リディアーヌ様に治癒魔法の使い方を教えて自習を命じたオーレリアの事は今でも少し恨んでいます」

俺たちの会話を聞いてさすがに怖くなったのか、シャルロットは「わかりました」と頷いてくれた。

「でも、早く魔法が使えるようになりたいです」

「焦らなくてもいいわ。使えるようになったらなったで練習の日々が待っているんだし」
「……そう言いながらお姉様は何を取り出していらっしゃるんですか？」
「ああ、これ？　羊の飼育とか綿花の栽培に役立つ魔道具を作れないかと思って、ちょっと試作しているの」
質問へ素直に答えただけなのに、シャルロットに「ずるいです」と若干拗ねられた。

次章以降の展開についてちょっとしたアンケートを設置しました。
現段階で使いたいと思っている設定・伏線はこの章でだいたい出し終えます。
そのうえで、次章以降でどの程度時間を飛ばすか迷っております。
悪役令嬢的にも学園編に行きつかないと終われないと思っているのですが、このままのペースで成長を描いているとなかなかたどり着けません。
いずれにせよ必要だと思った場面は書くことになりますが、のんびり進めるのと

さっと成長させるのでどちらがお好みか、よろしければ投票ください。

妹の奮闘

未使用の魔石には余りがあったので、魔道具の試作品はあっさりと完成。

一定範囲内にある牧草に栄養を供給する効果を籠めた。ただ、普通の魔道具だとこまめに起動しないといけないので、そこを自動型魔道具の応用で対処している。

魔力は大気や大地、貴族以外の生物（平民や動物）も微量ながら保有している。自分の体内以外にある魔力は通常利用できないが、魔道具を大地に直接埋めることで自然から魔力共有できないかと考えたのだ。これが成功すれば特に何もしなくても牧草の生育が良くなるはず。

アランに父と連絡を取ってもらい、実験許可を入手。

クロードと相談の上、街の近くの牧場主に相談、牧場の一角に埋めて試してみることになった。他の用途がない魔道具だから盗まれる心配もないだろう。

「供給できる魔力も少ないし、すぐに成果の出る魔法じゃないから気長に待つしかないわね」

「悪影響が出るようなら撤去を命じるよ」

「お願いね、クロード」
俺たちの滞在中に成果が出るかはわからない。
いずれにせよ、もしも目に見えて効果が上がるようなら追加を頼むかもしれない、とクロードは言ってくれた。
「ああでも、リディアーヌ製の魔道具じゃ費用がかかりすぎるかな」
「暇を見て作れる程度の量ならタダで送るわ。羊たちが喜んでくれたらわたしも嬉しいもの」
「それは助かるよ。持つべきものは優しい親戚だね」
他家の貴族相手なら絶対やらない、自分の家の利益になるからこその安請け合いだ。クロードももしそうなったら何かちょっとしたお礼をくれると約束してくれる。お礼を言った上で「微妙な気分になるから羊肉以外でお願い」と言っておいた。
「それにしても魔道具で業務の補助か。俺にはなかった発想だな」
「クロードも作ってみたらどう？　なにか面白いものができるかもしれないわ」
「魔道具製作は経験が物を言うからな。なかなか難しいよ。なあアラン？」
「ああ。魔力消費が激しいのも辛い」

十分な魔力量を持つはずの公爵家男子二人が顔を見合わせて笑う。俺はシャルロットと視線を交わして首を傾げた。

「寝る前に作業するとしても夜間に襲撃がないとは限らないだろう？」

万が一を考えたら魔力を多めに残しておくのは当然の備えだと言う。

一日の分は使い切らないと勿体ない、という考えは守ってくれる人の多い女子だからこその発想だったらしい。そういえば王国トップクラスの魔道具製作者であるオーレリアも女である。

魔道具製作は女子の内職にちょうどいいのかもしれない。

「土の魔法は便利だから他にも魔力を使いたい」

「戦闘用の訓練も定期的に必要だ」

土魔法は土木作業に重宝する。荒れた土地をならしたり、逆に穴を掘ったりと重機代わりに使えるので領地外壁の補修以外にも大活躍である。

公爵家に土属性が多いのは領地の広大さや主産業ともマッチしている。『それに引き換えわたしの火属性は応用の幅が狭いのよね……』。

火属性は燃やす、熱するといった使い方をするしかない。生活に応用するなら

ぱっと思いつくのが料理だが、自ら料理をする貴族は極めて稀である。下手したら剣術の稽古を始めた時以上に止められるかもしれない。

光属性も明かりを点けるか消すかがメインだが、ぶっちゃけ「照明になる」というだけでお釣りがくるくらい便利なのでそっちはあまり残念感がない。

「……あれ？　もしかして、地面から供給する魔力量によっては夜間照明が作れるんじゃないかしら？」

魔力を自動で補給し、夜だけ点灯する照明。屋敷の傍に何本か立てておけば防犯効果がありそうだ。

するとシャルロットがぱっと笑顔になり、アランは逆に苦い顔になった。

「光属性の魔道具なら私でも作れるようになるでしょうか」

「リディ。少しその発想を分けてくれないか」

ちなみに夜間照明に関しては現在も手動で似たようなこと（メイドが照明の魔道具に魔力供給して発光させる）をしているので、これも費用対効果的なつり合いが取れるかどうか微妙だということだった。

「あの、お姉様？　この間のお話なのですが、お姉様はもし殿下との婚約が破談になったらどうなさるおつもりなのですか？」

こっちに来てから二度目の魔法授業の後。

シャルロットが何気なく投げかけてきた質問に、俺は「そうね……」と少し考えてから答えた。

「適当に性格が良くて家柄的にも悪くない男を捕まえるか、いっそ平民にでもなろうかしら」

「平民に？　お姉様は本当にそれでよろしいのですか……!?」

驚きに目を丸くするシャルロット。もちろん、何の問題もないわけではない。

「できれば避けたいのは確かよ。だって、身分が平民になったら貴族の命令に逆らえないわけじゃない？　反撃したら処刑される生活とかストレスが溜まって仕方なさそう」

平民になったからと言って魔法の力がなくなるわけではない。となれば俺の魔力を狙った貴族がちょっかいかけてくるのは必然なわけで、俺が反撃して相手を怒ら

せるのも規定路線である。
　純血派みたいな連中がここぞとばかりに命を狙ってくるかもしれないし、逆に祭り上げられて幹部にされてしまうかもしれない。
　するとシャルロットは真剣な顔で頷いて、
「お姉様は絶対平民になるなんて考えないでください。お母様にもお伝えしておきます」
「大丈夫よ。最悪の話だからそうそう実現――」
「絶対にしないでください」
「はい」
　しおらしく頷いたらようやく「ありがとうございます」と笑顔になってくれた。
　シャルロットにはできるだけ笑顔でいて欲しい。
「でも、急にどうしたの？　今の答えで参考になったかしら？」
「はい。……大した事ではありません。ただ、お兄様も将来について考えていらっしゃるようだったので」
「なるほどね」

人には立場や能力によって選べる選択肢、選べない選択肢がある。
その中で自分にとって最もいい道を模索するのは当然のことで、いざという時に最良の道を選ぶためにはあらかじめ心の準備をしておくことも重要になる。
「考えておくのはいいことよ。わたしだって先のことはわからないもの」
「お姉様ならご自分で道を切り開いていけそうですけれど……」
「どうかしら。案外、一度崩れたら立ち直れないかも。シャルロットみたいな子の方が土壇場では強いかもね」
「……お姉様は、いつもそうやって私を褒めてくださいますね」
自分に自信が持てないのだろうか。義妹は胸の前で手をぎゅっと握り合わせ、複雑な表情を浮かべる。
「本心だもの。本当の強さっていうのは喧嘩に勝てることでも財力でも、ましてや権力でもない。間違っていることを間違っていると言えて、その気持ちをどんな時でも持ち続けられること。そういうのが本当の強さなんだと思うの」
前世の俺にはできなかったことだ。
俺は自分の出会ってきた女たちが間違っているのを、間違い続けるのを止められ

なかった。今世でもちょっとしたことから自分自身の道を踏み外し、自ら「嫌な女」になってしまった。

今の俺は過去の反省から少しでも正しい道を進もうと必死になっているだけだ。

「シャルロットならきっとそれができるわ。あなたは優しくて強い子だから」

「……私は」

噛みしめるように瞳を閉じ、しばし沈黙したシャルロットは、ゆっくりと目を開けると俺の目を真っすぐに見て言った。

「お姉様。私、クロードお兄様との仲についてはっきりお答えしようと思います。応援してくださいますか？」

もちろん、答えなんて一つしかなかった。

「もちろん。わたしはシャルロットの味方よ」

一日三度の食事を十日間も繰り返せばそれは習慣になる。

公爵邸のシェフも十分に優秀な人材揃いで、食べ物が合わないということも経験

せず済んでいる。強いて言えば『加工前』を見た後だと羊料理に妙な気分を覚えて辛いというくらいか。

大人数での夕食は勉強にもなる。それぞれが何の気なく口にした噂話が後々何かに使えそうだったり、彼ら彼女らの話題運びが参考になりそうだったり。それから短期間に何度も会う相手に対する情報の出し方・制限の仕方の練習もできる。

相手は相手で俺たちに対して色々と考えているのだろう。情報を引き出そうとするあの手この手の話題は日常的に繰り出されてくるし、簡単には欲しい情報を口にしてもくれないが――同じ顔触れが何日も続くとお互いどうしても油断が出てくる。

「王家の方々には金髪の女性を尊ぶ風習があるのですよね」

「ええ。セレスティーヌも王族からの評価は高かったものです」

夕食時。

表面的には和やかに見える会話が続く中、一族の令嬢によるさりげない発言をブリジットが拾った。件の噂自体は間違っていない。王族であるリオネル自身からも話を聞いたことがある。

『金髪は周りに多いし、見慣れているから親しみやすく思えるな。確か、意味合いとしては天馬の目だか毛並みだかになぞらえたとか、そんな話だったか』

『我が国の象徴ですものね。……けれど、それでしたらわたしの髪色は不服ですか？』

『ん？　お前の髪に不満はないぞ。綺麗だからな』

しかし、国王も欲しがったという母アデライドを娶り、美しい金髪のセレスティーヌを後妻にするとか、父の女性関係は各所から恨まれてもおかしくなさそうな充実ぶりである。この辺の怨恨が元で国王から見放されたりしないことを祈る。

それはともかく。彼女たちが真に言いたいのは「シャルロットには他にも相手がいるだろう」ということだ。この手の「攻撃と思わなければ攻撃にあたらない」言葉は日常的に出てくる。

「シャルロット様もお母様に似て綺麗な金髪をお持ちですよね」

二人のキャッチボールにクロエが乗って、さらに当のシャルロットへと水を向けたことで攻撃力がさらに増す。

答え方によっては「あの時こう言っていたじゃない」と後々の攻撃材料にもなる。

本当、そんなことばっかりしていて楽しいかと言いたい。

いい加減イラっとしてきた俺はここぞとばかりに口を挟む。

「ブリジットさまはセレスティーヌさまと仲がよろしいのですね」

「リディアーヌ様？　どうしてそのような事を？」

ぴくりと反応しつつも冷静に返してくるブリジットに、俺もまた笑顔で、

「わたしやお兄さまはお屋敷にいらっしゃる前のセレスティーヌさまを知りませんが、ブリジットさまはまるで友人について語るような口ぶりでしたので。的外れでしたら大変申し訳ありません」

（訳：今のセレスティーヌさまは公爵夫人なのですが理解していらっしゃいますか？　上位者に対して失礼なのでは？　もちろん、親しい仲であれば別ですけれど）

敬称の省略を不快に思っていることは伝わったらしい。さすがに少し慌てた様子を見せながら、それでも笑顔を浮かべるブリジット。

「セレスティーヌ様とは一時期、義理とはいえ姉妹だったのですもの。もちろん仲良くさせていただいていたのですよ」

「あら、そうだったのですね」

「ええ。……ねえ、シャルロット？　貴女はお母様から聞いていないかしら？」

そこまで積極的に会話へ加わらないか、当たり障りのない回答に終始していたシャルロットは、メインディッシュである羊肉ときのこのソテーを切り分ける手を止め、こてんと可愛らしく首を傾げた。

「私は特に何も……。お母様からは『初対面なのだから外部の方と同様に礼儀を持って接しなさい』と言われてただけです」

（訳：上位者となったお母様が下手に出ているのに、ブリジット様は随分とご自分に自信がおありなのですね）

「……っ」

難しいことのわからない、体のいいサンドバッグだと思っていた少女からの反撃に領主補佐夫人は一瞬とはいえ確かに絶句した。

次いで目を吊り上げ、感情的に言い返そうと口を開き――ギリギリのところで踏みとどまって視線を下げる。アランや祖父が威嚇、あるいは値踏みするような視線を送っていることに気づいたからかもしれない。

クロエや他の令嬢複数人から刺すような視線が飛んでくるも、そちらには俺が笑

顔を返してやる。うちの妹に用があるなら聞いてやる、という意思が伝わったのか、彼女たちもあっさりと攻撃的な表情を引っ込めた。

「私の髪は王族の方々に好まれるのですね。実は、私もお姉様のように王族に選ばれるような立派な女性になりたいと常々思っているのです」

ここぞとばかりに表明された「クロードには興味ない」宣言。

またしても勝手に振られた青年は苦笑を浮かべたものの、きっちりと自分で対処してみせた幼い少女に対して「よく頑張ったね」とウインクをしてくれた。

この後、シャルロットを恋のライバルとみなした女たちからの攻撃は大きく数を減らし、食事の時間は俺たちにとってぐっと平和なものになった。

公爵邸での療養 2

「アデライド様が早逝なさったのはとても残念です。あの方さえご健在であれば社交界もより賑わっていたでしょうに」

基調色はワインレッド。アクセントとして用いられる装飾は煌びやかな金色。領主補佐夫人・ブリジットの私室は公爵邸の共有スペースとは異なり高級な雰囲気が強い。口に出して褒めれば、「王都の貴族街にも劣らぬ内装を目指したのです」と誇らしげな返答。

二人きりのお茶会。ブリジットは「シャルロット様への失礼な言動、誠に申し訳ございませんでした」と謝罪から入った。クロードに少しでも良い嫁を付けてやりたいあまり神経質になってしまっていた、と。

終わった話だからと流せば、話題は変わって俺の使っている母の部屋の話に。セレスティーヌが部屋の移動を辞退したことからアデライドの部屋を残すことになり、ブリジットの主導で部屋を綺麗に保ってきたのだいう。これには素直に感謝を述べた俺だったが、話はまた別の方向へと転がっていく。

「成長したリディアーヌ様がアデライド様と並ぶ姿を是非見たかったものです」
「ええ。……せめて学園を卒業するまでは見守って欲しかったと思います」
オーレリアの母王妃もそれを夢見ていた。感傷的な気持ちになりながら目を細めていると、
「幼くてお母様を亡くされ、新しいお母様が来られたのはさぞかしお辛かったでしょう？」
「当時は随分と恨みました。セレスティーヌさまのことはもちろん、結婚を決めた父のことも」
「当然ですわ。血の繋がらない他人同士なのですから、あれこれと指図されたくはないでしょう」
痛ましい、といった表情で瞳を覗き込まれる。苦笑しつつ首を縦に振った。
「今のお母さまとは社交のやり方も性格も合わないです。気の合わない方に作法をうるさく指摘されて苛立ったこともありました」
「まあ。子供は褒めて伸ばすもの。厳しく指摘するばかりでは成長の芽をむしろ潰してしまいます。セレスティーヌ様は子供の育て方がわかっていらっしゃらなかっ

たのですね」
「クロードさまは伸び伸び育てられたからか、とても大らかで優しい方でいらっしゃいますね」
「そうでしょう？　クロードは自慢の息子なのです」
実際、勤勉で真面目なあの青年なら領地を盛り立てていってくれるだろう。できる限りの協力をしてやりたいとも思う。
「セレスティーヌさまは突然割り振られた『公爵の妻』という立場を必死に果たしていらっしゃいます。わたしも、少しでも家の役に立てるよう励んでいきたいものです」
「……リディアーヌ様は少し頑張りすぎなのではありませんか？　もっと肩の力を抜いて、ご自分のお気持ちに向き合ってもよろしいかと」
「自分の気持ち、ですか」
難しいことを言うものだ。人は誰しもしがらみの中で生きている。やりたくてもできないことは多く、やりたいことを優先すればどうしても排他的になる。
つまり、ブリジットの狙いはそれだ。

母のことを思い出させたうえでセレスティーヌとの心の距離を強調。養母との不仲を演出し、協力者として俺にすり寄ろうとしている。

どうしてそんなことをするのか？

シャルロットにしてやられたまま終われないからだ。うまく俺を乗せられれば姉妹の仲を引き裂けるかもしれない。そうなったら一石二鳥である。

「ブリジットさまの故郷である辺境伯領はとても重要な土地ですね」

俺は紅茶に口をつけることで間を置くと微笑んで言った。

「隣国に睨みを利かせ、戦争を抑止する役割。辺境伯さまはとても御立派な方だと思います。……ブリジットさまも、辺境伯領へ貢献するために公爵家へ嫁がれたのですか？」

有事の際、公爵領は辺境伯領への支援を行い、敵を守ぎきれなかった場合には第二の防衛線となる。持ちつ持たれつ。両領地の関係は良好であることが望まれる。

ブリジットは困惑気味の表情を浮かべつつもこれに頷いた。

「ええ。私が公爵領へ嫁ぐことで意思疎通が容易になる。国防の要である辺境伯領の娘として務めを果たせ、と父に言われて嫁いでまいりました」

隣国は竜を象徴する武力に優れた国。過去には何度も戦争になっており、その度に大きな打撃を受けてきた。国境を有する辺境伯領にとっては平和なこの時代であっても変わらず「警戒するべき敵」なのだ。

「外なる敵に立ち向かうためには内でいがみあうべきではない。わたしも辺境伯さまのお考えに賛成いたします」

「……っ」

個人的感情と家の存続は分けて考えるべきもの。セレスティーヌのことが嫌いだとしても敵対する気はない、と遠回しに伝えれば、ブリジットは諦めるように息を吐いた。

「クロードの相手に相応しいご令嬢をどなたかご存じありませんか、リディアーヌ様？」

「国と領地への貢献を第一に考えれば自ずと良い方が見つかるのではないでしょうか」

領地に不利益を齎さず、家格も能力も十二分なシャルロットを門前払いしておいて何を言っているのか、とはさすがに言わないでおく。

「ブリジットさまは意外と放任主義よね。可愛い息子なら勝手に縁談をまとめて来ても良さそうなのに」

夜。

寝る前の時間、のんびりと魔石作りに勤しみつつ、ブリジットとのお茶会を振り返って呟く。

公爵邸側から付けられたメイド――素朴で真面目なところが良かったのか、アンナや俺ともかなり打ち解けたソフィがこれに答えてくれる。

「奥様はクロード様に好いた方と添い遂げて欲しいのだと思います。昔から殊の外可愛がっていらっしゃるものの、過保護にするのではなくクロード様ご自身の意思を尊重していた、と」

「ならシャルロットを目の敵にしなくてもいいのに」

「それはその、奥様は力関係に敏感な方でもいらっしゃるので……」

要するにセレスティーヌに対抗意識を燃やすのと同様、自分を脅かすような令嬢

は受け入れたくないわけだ。

我が儘だなとは思うものの、大事なことでもある。この屋敷を牛耳って我が儘放題、贅沢三昧するような嫁では事業にも影響が出てしまう。

その点、ブリジットは派手な内装を自室だけに留めているし、きちんと自制できている方だ。都会の暮らしに憧れながらも自由恋愛には踏み切れなかった女性。騒がせたお詫びに何か装飾品でも贈ってやろうかと思う。

「後継者の嫁は使用人にとっても重要だものね。下手をしたら仕事の仕方ががらりと変わってしまうもの」

当主夫人として嫁いできた場合なんかだと来て早々に今までいた使用人をほぼ総とっかえするようなケースも割とある。そこまで行かなくとも料理の味が気に入らないだのこのドレスは特別な方法で洗えだの、この時間に掃除はするなだの口うるさく言う者も多い。

これにソフィはこくんと頷いた上で、

「私共使用人は主人に精一杯お仕えするだけです。たとえどのような方であっても、クロード様が好いた方と結ばれるのであればそれが何よりかと」

「ソフィは主人想いなのね」
「いえ、そのようなことは」
照れるように視線を逸らされてしまったが、ソフィの考えは立派だと思う。アンナも感心したように息を吐いている。
「凄いです。……私はもう、リディアーヌ様以外の方にお仕えできる気がしません」
「あら。アンナならどこの職場でも十分やっていけるんじゃない？」
「そんなこと……。今から王宮へ仕えるのが怖くて仕方ないんですよ？」
「正式に輿入れするまでにはエマがしっかり鍛えてくれるわ」
傍らで聞きに徹していたエマが嫌そうな顔をした。律儀な彼女のことだ、嫌がってはいても仕事はきっちりやってくれるはずである。

「さあ。遂に馬に乗れるのね……！」
「馬に乗りたがるだなんて、リディアーヌ様は本当に変わっていますね」
晴れ渡った空の下。剣術着ではなく乗馬服に身を包んだ俺は待ちに待った機会に

歓声を上げた。
　愛馬であるギーと一緒に立つ少女騎士ノエルがラベンダー色の瞳に若干呆れの色を宿すも、その口元はアクティブに動ける喜びからどこか緩んでいる。
　場所は丘の上、屋敷から少し離れた厩舎前である。教師役兼護衛を務めるのはノエルと、それから公爵邸側の警備兵複数名である。
「お兄様、本当に私でも馬に乗れるでしょうか……」
「大丈夫だよ、シャルロット。馬は基本的に穏やかな動物だから」
　アランとシャルロットも一緒である。二人共、羊と戯れた時と同様に乗馬服に着替えている。経験者のアランはさすがに落ち着いていて、不安そうにする妹を率先して宥めてくれている。
「シャルロットなら馬も気を遣ってゆっくり進んでくれそうよね」
「なら、リディアーヌ様は暴走されないように気を付けてください」
「言うじゃない。……と言いたいところだけど、本当に気を付けた方がいいかもね」
　軽口が叩けるのは馴染んだ証拠。不安はないものの、どうも気性の荒い相手に振り回されがちな俺はいつもの展開への警戒を抱いた。俺たちがただそこに立ってい

るだけ（専属たちがしっかり日傘でガードしてくれている）でいる間に人数分の馬が用意される。

どの馬でもいいと言うので、シャルロットに一番に選ばせた。一番大人しそうな馬が抜けた後、アランが「じゃあ次はリディが」と言ったところで、若い女好きの雄馬ことノエルの愛馬・ギーが「俺に乗れ」とばかりに鳴き声を上げる。

「ちょっと。私よりリディアーヌ様に懐いてないかしら？」

「まあまあ、ノエル。でも、貴女さえよければこの子に乗ってみたいのだけれど」

「構いません。この子もリディアーヌ様相手ならさすがに無茶はしないでしょう」

きっ、と自分の馬を睨みつけてから手綱を渡してくれる。当のギーは涼しい顔をしていたが、俺が手綱を握っても特に暴れる様子はない。「よろしくな」とばかりに見つめられたので「こちらこそ」と答えながら撫でてやった。

アランが残る二頭から選び、残った一頭をギーの代わりにノエルが担当。

「では、まず馬に乗るところから練習いたしましょう」

ここまで来るとさすがに日傘は外さざるをえない。あまり長時間浴びることのない日光にさらされながら、俺たちは熟練者によるお手本を見た。

簡単に言うと装具に取り付けられた鐙と呼ばれる器具へ足をかけ、地面を蹴ってひらりと飛び乗るのだが……慣れた人間のそれは一見すると「ジャンプして乗った」ようにしか見えない。何度かゆっくりめに披露してもらってようやく理解できた。

ちなみに装具無しで乗る場合は鬣を掴みつつ、それこそ飛び乗るようにして跨るらしい。

「毛を掴んだりして痛くないんですか？」

「馬は見た目以上に頑丈にできています。人が蹴ったり叩いたりしても大部分の衝撃は殺されてしまって馬には伝わらないのですよ」

「そ、そうなのですね……」

身体が小さく大人しいシャルロットには装具ありでも難しそうだということで、念のために同行していたソフィが同乗することになった。下からアニエスが抱え上げ、上にいるソフィに受け渡す形でシャルロットを座らせる。

「リディは大丈夫かい？」

「ええ、たぶん」

俺は鐙に足をかけた後、身体強化を加えた脚力で一気に飛び上がった。鬣を掴ん

で身体を支えられたお陰でどこかへ飛んでいくとこもなく跨ることに成功。

「いいかしら、ギー？　わたしは初心者なんだからあまりはしゃがないでちょうだいね？　絶対よ？」

大丈夫大丈夫、とばかりの軽い返事が来た。

本当に大丈夫か、と思いながらゆっくり歩かせる練習に入り、どうやらちゃんと初心者に合わせてくれているようだ……と安心し始めたところで、少し早いペースで歩かせようとしたら「よし、俺の本領発揮だな！」とばかりにギーが全力疾走した。

「だから、はしゃぐなって言ったでしょう！」

ノリノリで丘を駆け下りて行こうとする彼を怒鳴ったり、手綱を思いっきり引っ張ったりしてなんとか方向転換、元来た道を戻らせるのに大変な労力が必要になった。

「さすがお姉様です。私には絶対真似できません……」

と、シャルロットが慰めてくれたものの、馬が気を遣って動いてくれる彼女の方が凄いと思う。やっぱり俺はそういう星の下に生まれているのだなと思いつつ、し

ばらく走れていなかったであろうギーができる限りストレス発散できるように付き合ってやった。

公爵邸での療養 3

なんとかギーに道を引き返させ、みんなのところまで帰還した。
どんどん走っていく俺を必死に追いかける羽目になった護衛の男性はほっと息を吐いて、
「リディアーヌ様がご無事で何よりです」
「心配をかけてごめんなさい。でも、乗馬ってとても楽しいのね」
独特の疾走感が良い。足を使ってこぐ自転車とも、いかにも機械な自動車とも、がたごと不規則に揺れる馬車とも違う。生き物特有の息遣いと風を切って走る感覚がなんとも心地よかった。
可能ならギーを好きなだけ走らせてみたかったが、
「今度こそゆっくりと練習いたしましょう、リディアーヌ様」
「はい」
「ギーも、真面目にやらないと餌抜きよ」
主人であるノエルの言葉がわかったのかどうなのか、真面目になったギーをまた

歩かせたり、ゆっくりと走らせたり。
　アランは当然問題なくこなし、シャルロットもまた恐る恐るといった様子ながら着実に上達していった。
「馬って本当に大人しいんですね」
「人に飼われている馬は基本的に従順です。主人が信頼してやれば馬も応えてくれます。ご婦人方が騎乗する機会はあまりないでしょうが、趣味として乗馬を嗜む方はいらっしゃいますよ」
「少し、趣味になさる方々の気持ちもわかる気がします」
「急ぎで馬を駆らないといけないことがあるかもしれないし、覚えておくに越したことはないわよね」
「リディ。そんな急ぎの用はまず作らない事を心がけてくれないか」
　慣れないうちは馬も人も疲れるということで、ひとしきり楽しんだところで乗馬体験は終了となった。ギーたちにお礼を言って厩舎へ戻ってもらう。たっぷりと餌をもらってのんびり疲れを癒やして欲しい。
「少し時間が余ったわね。お兄さま。せっかくだから剣の稽古をしない？」

「構わないけど、木剣はあるのかい？」
「こちらにご用意いたしました」
念のためアンナに言って持ってきてもらっておいた。苦笑したアランは「わかった、いいよ」と言って一本を手に取る。
公爵邸の建つ丘の上は広いので場所には事欠かない。王都と違い多少騒いでも苦情が来たりはしないので、家から連れてきた兵たちも訓練が捗っている様子。
剣の訓練なんてほとんど見たことがないというシャルロットを連れて適当な場所へと移動し、剣を手にアランと向かい合う。
「攻撃は寸止め。先に二本取った方の勝ちでいいかい？」
「構わないわ。お兄さま、思いっきり来てね」
「本気を出すかどうかはリディの腕前次第かな」
自分も剣を振りたい、という顔のノエルによる「はじめ！」の合図で同時に動き出した。
かん、と、木剣同士がぶつかり合う軽快な音。
「意外と早いな」

「ふふっ。わたしの身体強化も馬鹿にしたものじゃないでしょう？」

高められた身体能力が歳の差と性差を埋めてくれる。身長と体重が軽い分、小回りならむしろこちらに分がある。俺は兄の攻撃に注意しながら積極的に攻撃を繰り出していった。

アランは性格通り慎重なスタイル。

こちらの攻撃をよく見てかわし、かわしきれないものは木剣で弾く。そして合間にするっと攻撃を差し込んでくる。この攻撃には意外なほど力が籠もっており、しっかり防がないと木剣を弾き飛ばされてしまいそうになった。

強さで言えばノエルの方が上のはずだが、どうにも戦いづらい。

「やっ！」

小刻みなステップで翻弄し、強引に一本を先取したものの、

「隙あり」

「っ」

いともあっさりと一本を取り返されて一対一に持ち込まれてしまう。

敢えて「見」にまわっていたのだろうと気付いた俺は一か八か、身体強化を強め

ての超速攻を狙うことにした。試合開始と同時に真っすぐに突っ込み、剣を振り上げて――アランと目が合った。

「勝負あり！　勝者、アラン様！」

向こうも身体強化を用いたのだろう。急に動きが良くなった兄に後の先を取られた。急制動をかけた俺は至近で立ち止まりながら「参ったわ」とだいぶ男らしくなった兄の顔を見上げる。

「もっと戦いの組み立て方を勉強しないと駄目ね」

「そうだね。でも、いい試合だった。先生の腕が良いせいかな」

定期的に剣を握っているせいかだんだん硬さが増してきた手が俺の髪を優しく撫でる。

兄はそれからノエルの方を見た。少女剣士もまた無言の挑戦に視線で応じ、こちらへと歩いてくる。

「クラヴィル嬢。手合わせをお願いできるかな？」

「お望みとあらば、喜んで」

さすがは騎士団の制式剣術を学んでいる騎士見習い。ノエルはアランに一本を取

らせないまま二本先取し、容赦なく勝ちをもぎ取った。
若干ドヤ顔でこちらを振り返ってきたので「さすがね」と微笑みを返すと、若干だったドヤ顔がもっとはっきりしたものになった。
「……うん、自衛のためだとしてもまだまだ訓練が必要そうだ」
「ご謙遜を。お忙しい中、真摯に鍛えていらっしゃるのが窺えます。今後はさらに上達なさることでしょう」
それから俺とノエルにアランを加えての剣の稽古が公爵邸から帰るまで、数日おきに行われるようになった。

「リディアーヌ様。ご一緒に街へ買い物に行きませんか？」
ある日の夕食にて。クロエがそんな提案をしてきた。
街、というのはもちろん丘の下の街のことである。物流拠点になっていることもあって商店も多く、辺境伯領を通して入ってきた隣国の商品も多く並んでいるという。

「それはいいですね」
友人たちやリオネルへのお土産もまだ買えていない。できることなら自分の目で掘り出し物を探したいところである。
構わないかアンナたちへ尋ねると、たまには外出も必要だろうと了承してくれた。もちろん、危険なので護衛を付けたうえでだ。
「でしたらクロエ様、私達もご一緒に――」
「アラン様とシャルロット様も是非ご一緒に。皆様をご案内いたしますわ」
他の令嬢達が混ざろうと口を開いたところで先んじてのお誘い。
恋敵を遠ざけるのはやめたのだろうか。シャルロットも驚いた顔をしつつ「お姉様とご一緒でしたら」と了承してくれる。
ある程度人の多い方が護衛はつけやすい。その上で「あまり大人数になりすぎるのも……」と他を断る口実にもなる。さっき言いかけた者たちがどうしたものかと思案しているうちに、思わぬ人物が動いた。
「なら、俺も参加させてくれないか？　アランも男一人では心細いだろう？」
「クロード。ああ、僕はもちろん大歓迎だ」

海老で鯛を釣ったクロエ。もしかして意外と策士なのだろうか……と、思っていたら。

「感謝いたしますわ、リディアーヌ様。まさかこのような機会が巡ってこようとは」

外出当日、昼食を摂ってしばらく時間が経った頃、ロビーに集合したところでそんな風に囁かれた。さすがに狙ってはいなかったらしい。

にっこり微笑んだ上で「ご武運を」と答えておく。やっぱりこの令嬢はなんとなく憎めない。シャルロットを冷遇した件は忘れていないが、それはそれとして幸せになって欲しい気もする。

「それにしても、皆様意外と地味な格好ですのね」

「ええ。人の多い場所ですし、少しでも動きやすい方がいいでしょう？」

男性陣はもともと有事に動ける服が基本なのであまり変わらないが、俺とシャルロットはできるだけフリルやレースが控えめのドレスを選んでいる。どこかに引っ掛けて破いてしまわないように、不意の事故で汚れても大きな被害がないようにだ。

するとクロエはまるでデートにでも望むような華やかなドレスで胸を張って、

「ご安心ください。公爵邸お膝元の住人はきちんと心得ている者ばかりですから」

これには護衛の面々も頷いてくれる。

「皆様が街へ顔を出されるのを皆心待ちにしております。無礼を働く者などいないでしょう」

我が家から来た護衛は半信半疑といった顔だが、領民の忠誠心はこれまでにもよく見てきた。頷いて「よろしくお願いね」と答える。

いざという時にはノエルもいる。彼女にはいつぞやと同様『予備の剣』を持ってもらった。

「……さすがにこの集団に挑んでくる者もいないとは思いますが」

俺、アラン、シャルロット、クロード、クロエで五人。

各自の専属でさらに五人。そこにノエルや護衛の兵が加わるともう二十人近い。

これでもかと目立つし、生半可な襲撃などどうにでもなる。

ちなみに俺が連れてきたメイドはアンナである。

「王都でお買い物する際もこうなるのでしょうか……？」

「さすがにもっと身軽なんじゃないかしら？」

王都では「買い物のために外出」なんてしたことのない俺たちは顔を見合わせて

首を傾げる。
「あら？　王都住まいの方々は華やかな暮らしをしていらっしゃるのでは……？」
「否定しないけれど、季節に一度の採寸でだいたい済んでしまうもの」
「小物であれば見せに来ていただくこともありますし……」
「リディもシャルロットも買い物に関しては効率重視だからね」
ちなみに、シャルロットは母に連れられた社交帰りなどに店に立ち寄ったこともあるらしい。ずるい、とは言わない。王子の婚約者が加わると注目度もぐっと上がってしまいそうだし、下手に加わればそれこそ「女の買い物は長い」を実感する羽目になりかねない。
「それでは参りましょうか」
「はい。クロエさま、クロード、引率をよろしくお願いします」
今日は馬車を使わず、ある程度ならされた道を辿って丘を降りていく。
「大まかに言いますと、高級なお店は屋敷に近い位置に集中しております」
「王都における王城と貴族街の関係か」
「ああ、それがわかりやすいね」

前もって軽く話を通してあるということで、丘から貴族の一団が現れても領民が大慌てすることはなかった。

代わりに「領主様のお子様方を一目見よう」と人だかりができている。きちんと道の真ん中は開けてくれているので邪魔にはならないが、さすがに少々恥ずかしい。

クロエとクロードは割と慣れているのか、自分を呼ぶ声に反応して笑いかけたりしている。

「……これは嫌でも『自分が貴族だ』って実感するわね」

案外、情操教育にも繋がるのではないか。

「あれがアラン様か」

「どっちがリディアーヌ様だ？」

「あの綺麗なほうだろう」

「あっちの金髪の方か？」

「馬鹿。そっちは可愛らしいほうだ」

さすが、平民は賑やかである。都度会話を交わす必要もないので笑顔を向けて声援に答えておく。たったそれだけでさらに歓声が上がるのだから嬉しいと同時に恐

ろしくもある。

「……これだけ注目されていては警戒しきれませんね」

「肩に力を入れすぎて倒れないでね、ノエル」

さて、待ちに待った買い物だが、まずは、

「まずは、やはり服ですわね」

力強くクロエが宣言。クロードに「いいのかしら？」と尋ねると、彼は薄く笑って首肯した。

「自分から同行するって言ったんだ。付き合う覚悟はできているよ」

「紳士として婦女子の服の見立てもできなければならないしね」

アランも覚悟はできている様子。ならばせっかくなのでショッピングという奴を楽しませてもらうことにしよう。実際の商店にどんな品が並んでいたか、地方の貴族がどんな服を好んでいるかといった情報はナタリーへの土産話にもなるだろう。

メモを取ってもらう用にエマにも来てもらうべきだったか。まあ、後で思い出して整理すれば問題はない。

「楽しそうね。シャルロット、お母さまからも結構お小遣いをもらっているのだか

らここは遠慮なく買い物しましょう？」
「は、はい、お姉様」
護衛の兵は荷物持ちも兼ねている。量が多くなるようなら屋敷と街を往復してもらうとか、荷運び用の馬車を回してもらうという手もあるので本気であまり遠慮はいらない。
「ただし、目利きの良し悪しは帰ってからお養母さまに判定されるだろうから、目先の欲に釣られすぎないようにね」
「お、お姉様、厳しいです」
「そんなことないわ。事実だもの」
まあ、シャルロットにはやんわりとした注意と優しい解説、俺に対してはそれぞれの相場価格と支払額との差を示した上で見分けのポイントこんこんとレクチャー、とかになりそうな気がするが。
「セレスティーヌ様はやり手と聞き及んでおりますが、リディアーヌ様とも仲がよろしいのですね」
案内するように前を歩くクロエが感嘆する。

しまった。実の母と身分を隔てられた彼女は母の愛に飢えているはず。下手な話題選びだったが、謝っても余計に傷つけてしまいかねない。

俺は声色が沈まないように心がけながら答えた。

「何事も勉強だと思い己を鼓舞する日々なのです。クロエさま、良い品の見分け方などご存じであればぜひお教えください」

「お任せくださいませ、リディアーヌ様。公爵領の品の豊富さをたっぷりとご覧に入れましょう」

一件目となる高級服飾店はもうすぐそこに迫っていた。

買い物と闖入者

結論から言うと、女の買い物はやっぱり長くなった。

最初に入った店の商品はなかなかの充実ぶり。貴族の数が限られることから値段としては抑え目、平民の資産家でも手の出るものが中心ではあるものの、何着ものドレスや靴、ハンカチや手袋などが飾られ、併せて布地の展示も行われていた。

工房が併設されている店舗らしく、既製品で良いものがなければオーダーメイドも可能。

「あそこの衝立の奥は試着用の場所かしら？」

「いいえ、お嬢様。あちらには殿方の目に触れさせたくない商品をご用意しております」

覗いてみると下着関係だった。試着は奥に専用のスペースがあるという話。

「なるほどね。こういうのは脱がせてからのお楽しみだもの」

「さすがは高貴なる方々。お若く見えても女性なのですね」

「お姉様。脱がせるって、あの、その」

「今はまだ気にしなくてもいいわ。成長して大切な方ができた時のためにとっておきなさい」

異性どころか使用人以外の同性にも素肌や下着を隠すのが淑女のマナー。男に服を脱がされるのは初夜までとっておくのがいいとされている。男性側も長くお預けされた分だけ興奮が高まる。

と、クロエからくいくいと袖を引っ張られて、

「クロード様はどのようなデザインがお好みだと思いますか？」

難問である。下着の好みなんて人それぞれ。前世の記憶に従うにせよ、この世界の感覚とはズレる可能性があるのだが……。

あくまで個人的な見解だと前置きしつつこっそりと返す。

「やはり清楚なものが一番かと。白や黒、あるいは淡い色合いで、布地は少なすぎないものを。フリルが多く使われているものも上品に見えて良いかと」

「……お詳しいのですね。やはり王都のお茶会ではそういった話題も出るのですか？」

「出ないわけではありませんが、さすがに稀ですね」

成人女性による私的な会なら「夫を篭絡するための作戦会議」がメイン議題だったりするかもしれないが、あいにく俺の友人グループは歳の近い未婚の令嬢ばかりである。下着の話をするにしても個人的な色・形の好みが中心になる。

下着売り場から戻るとアランとクロードが微妙な顔をしながらハンカチコーナーの前で顔を突き合わせていた。

「なんの話をしていたんだい、リディ？」

「殿方には聞かせられない話よ。ね、シャルロット？」

「はい。お兄様には絶対に言えません」

赤い顔をしながらしっかりと頷く妹を見て、アランがものすごく寂しそうな顔になった。俺たちの嫁入りの話をする時の父そっくりで思わず笑ってしまった。

「いかがですか、お嬢様方。記念に一からドレスをお仕立てになるというのは」

「楽しそうですけど……お姉様、期間的に難しいですよね？」

「大丈夫じゃないかしら。今のうちに注文すれば戻るまでには納品してもらえるでしょうし」

工房が併設されているだけあって女性店員は納期についても大まかに把握してい

た。素材の在庫や他の注文状況にもよるが大急ぎで一週間。一か月もあれば余裕をもって完成させられるという。

出入りの工房にしても三人のひと季節分を三か月で完成させているわけだから、一着二着の注文ならそうなる。俺たちが帰るまでに十分間に合う時間だ。

俺としてはドレスよりも友人・知人への土産が欲しいのだが……。

家族もしくはそれに準ずる関係でない限りは基本、他人に衣類は贈らない。サプライズならハンカチ、お金だけ払う形でも手袋やマントあたりが限界か。リオネル相手なら婚約者なので服を贈っても失礼にはあたらないが、珍しいものを頼まれている以上はミスチョイスだろう。

「リディアーヌ様、シャルロット様。お店は他にもあります。巡った上で吟味するのもお買い物の醍醐味なのですよ」

ということで、俺たちは判断を保留して何軒もはしごすることに。

クロエやクロードは大事な衣装はお気に入りの職人に依頼するが、それ以外は時々で違う店に頼んだりするらしい。

「そうした方が競争にもなるだろう？」

「なるほど。専属の地位に甘えさせすぎても作品の質を落としかねない、か」
「そういうことさ」
立派な考え方である。平民＝領民である公爵領ならではだろうが、それを聞いたからには公爵家の人間として俺たちもある程度金を落としていきたいものである。
クロードを落とすための服を真剣に考えているらしいクロエに付き合ったり、店員にあれこれ質問をしてみたり、掘り出し物がないか目を光らせたりしていると、不意に耳元で声。
「リディアーヌ。内緒の相談があるんだ。そのままで聞いて欲しい」
声の主である最年長の青年は少し離れたところで商品を眺めている。店内にいる他の人間が彼の声に気づいた様子はない。魔法による内緒話だ。普通に話して声が届く程度の距離なら遠話の魔法もそれほど難しくない。
目線を送って頷きを返すと続けて声がして、
「求婚したい女性がいるんだ。贈り物は何がいいか意見が欲しい」
「きゅ……っ!?」
『求婚!?　急になに言ってるのよ!?』

驚きの声を上げかけて慌てて止めた。代わりに魔法を使って返事をする。糸電話の原理で声を届けるイメージ。

「やっぱり、定番は指輪じゃないかしら」

「そうだね。でも、了承を得られるかわからないし、得ても式までは日が開くだろう？」

貴族の結婚式は手間がかかる。半年前くらいには日取りを決めて招待状を送るのが普通だ。式での感動を考えて結婚指輪と別に求婚の指輪を用意することも多い。求婚を断られた挙句、次の相手へ指輪を使い回す不届き者が噂になることも稀にある。

受け取られなかった際に使い道がなくなるくらいなら、返答に関わらず相手に渡せるような、指輪程は重くない品にするのもアリだ。

「だったら髪飾りとか耳飾りかしら。状況に応じて付け替えるものだから多めにあっても困らないだろうし」

「やっぱりその辺りになるか。……デザインについても何かあるかい？」

そう言われても、正直、相手による。目の色や髪の色、良く着るドレスのタイプ

によっても似合うデザインは変わってくるからだ。
　相手は誰なのだろう。わざわざ内緒話にしたあたりクロエかシャルロットという可能性もある。もちろん、他の誰かでもおかしくない。気になるが、そこまで聞くのは野暮か。
「クロードが相手を想って選ぶのが一番だと思うわ。好きな花なんかを象るのもいいだろうし、実際に着けているところを想像すれば色や形も浮かぶでしょう？　そしてもちろん、渡す時は一緒に真摯な言葉を贈るのよ」
　リオネルみたいに軽すぎるプロポーズはNGである。
　もっとも、あの王子様はときどき無自覚に攻めてくるので「お前の髪に似合うと思ってこれを選んだのだ」くらい素で言いそうではあるのだが。
　離れて立つクロードがふっと笑った。
「ありがとう、リディアーヌ。参考になった」
「少しでも役に立ったなら何よりよ。……お相手が誰かはそのうち教えてくれるのかしら？」
「ああ。君達が帰る前には決着をつけたいと思っている」

シャルロットいじめの件がきっかけになったのだろうか。クロードにお相手ができればブリジット達も大人しくなるだろうし、上手く行って欲しいものである。

いくつかの店を巡った後、俺とシャルロット、アランは王都へのお土産ではなく、公爵邸の面々へのお礼として小物を購入した。

男性陣にはネクタイ、女性陣にはハンカチ。

別途、飲める人には酒、飲めない人には菓子を付けることにする。クロードとクロエには秘密にできない分、好きなデザインを選んでもらってみんなの好みについて相談に乗ってもらった。

終わった後は雑貨店を見て回ったり、喫茶店兼酒場のようなところで少し休憩したりする。高めの店なので昼間からくだを巻いているような酔っ払いはいなかった。俺が頼んだのは羊のチーズケーキ。癖が強いんじゃないかと心配したものの、濃厚な味わいがいい方に作用していて美味しかった。

「だいぶ歩きましたね」

「ああ。このままもう少し行くと平民街に入る。露店が出ていてあれはあれで面白いんだけど、どうしようか？」

たまに視察がてら遊びに行っているというクロードが言う。

「露店というと、串焼きなんかも出ているのかしら？」

「もちろん。羊肉の串焼きは定番だね。後はサンドイッチや揚げ芋、クレープかな。珍しいところだと煮込みを売ってる店もある」

実に美味そうである。屋台飯なんて前世以来だ。

わくわくしながら「行ってもいいかしら」と尋ねると、やはりアンナたちは難色を示した。

「男性ならまだしも、女性には危険が大きいのでは」

「毒見も難しいですから、可能なら避けていただきたいです」

「なら、俺とアランで買ってこようか。リディアーヌ達はどこかで待っていてくれればいい」

「ああ。それなら危険は少ないか」

食べる人間がわからなければ毒も盛りづらい。

公爵邸のお膝元だし変な事はされないだろう、とこれで許可が出た。
「では、どこかに移動して待ちましょう。この店は持ち込み禁止ですので」
「それなら、もう少し雑貨を見ておきたいわ。まだお土産を悩んでいるから」
「あ、私も行きたいです……！」
護衛の半分を連れたアランとクロードが平民街へ向かい、俺たちは彼らと分かれてまだ行っていなかった雑貨屋に入った。
公爵領土産の目途をそろそろ付けておきたい。購入自体は日を改めても構わないが、物が全く決まらないと落ち着かない。
「お姉様は何をお土産になさるのですか？」
「リオネルさまが珍しいものをご所望だから、それが最優先ね。公爵領ならではの物か、あるいは隣国からの輸入品がいいと思うのだけれど」
リオネルの趣味から考えると盤上遊戯、乗馬、剣術、後は食べることと言ったところ。
羊を贈るのは別の機会という話になったし、じゃあ馬ならいいよねという話でもない。剣なら装飾にもなるものの、あいにく公爵領の鍛冶師は特別有名ではない。

チェス駒はもう特級の品を持っているし、ダイスはもう贈る予定がある。
「隣国というと質の良い鉱物が出ることで有名ですね」
「でも、隣国の鉄で打った剣……なんて、さすがに出回っていないでしょう？」
「そうですね。さすがに武器はなかなか……」
どこの国も他国に武器を売るのは慎重になる。貴族用の装飾剣なんかは流通しているかもしれないが、そういうのはなかなか掘り出し物としては売られない。
「となると宝石類か、あるいは羊関係の品かしら」
綿花関連は基本衣類になってしまうからパス。羊も肉を除外するとすると羊毛か、羊皮紙？
「ああ、角という手もあるのね」
店には羊の角から作った工芸品なども置かれている。これはなかなか珍しいし、公爵領ならではの品っぽいのではないだろうか。
傍に寄ってきたシャルロットが不思議そうに首を傾げた。
「そういえば、この間会った羊は角が生えていませんでしたね」
「種類によるのですよ。角にも利用価値があるので、角ありの羊を育てている牧場

もあります」

　クロエが説明してくれる。角の形も種類によって結構違ったりするらしい。なかなか興味深い話だ。それと同時に有効利用されすぎじゃないか、という気もする。

「そうね。わたしは宝石か羊の角にするわ。アンナ、手の空いた時にまとまった量を手に入れられないか調べてくれるかしら？　急がないし、ソフィや兵のみんなを頼ってもいいから」

「かしこまりました」

「？　アクセサリーや工芸品を買うのではないのですか？」

「ええ。どうせなら自分で加工しようと思って」

　輸入品の宝石となるとさすがに値が張るし、羊の角そのままだと（リオネルは喜ぶかもだが）女性陣には受けが悪そうだ。なので宝石にするなら安めの小さな石を多めに購入、角なら加工前の物を買って魔法で加工しようと思った。

　現地でないとなかなか手に入らないものを素材に自分で作れば珍しいものが出来上がるだろう。

「……やっぱりお姉様はずるいです」

首から下げたペンダントをぎゅっと握り、シャルロットが頬を膨らませる。
「シャルロットだって、もうペンダントなしで光らせられるじゃない。練習していけばそのうちできるようになるわ」
「シャルロット様。シャルロット様のお友達は珍しい品よりも可愛らしい品の方が好まれるかと」
専属メイドのアニエスも一緒に宥めてくれ、義妹は気を取り直したように雑貨屋を周り始めた。
クロエが目を細めて呟く。
「可愛らしいですわね」
「ええ。その可愛い義妹をいじめてくれた方もいたけれど」
「反省しましたから許してくださいませ」
目を伏せて言う少女。それならいい。俺は微笑んで、いざとなればシャルロット用にも加工を請け負うつもりだと語った。それを聞いたクロエも悪戯っぽく笑う。
その時、店のドアが開いて新しい客が入ってきた。
身なりのいい商人風の男。それに護衛らしき男が二人。貸し切りではないので客

が来ること自体は不自然ではない。

ただ、彼らの来店により、店の向こう側にいるシャルロットたちの姿が見えなくなった。

『……なんか、嫌な感じじゃない？』

ノエルに目配せ。少女騎士も何かを察したのか迅速に動き出す。

店の外にいた俺たちの護衛兵も念のためにと中へ入って来ようとする。ただ、どちらの動きも終わらないうちに、男達が一斉に動き出した。

懐からナイフを抜き放ちつつ、手を突き出す敵の護衛たち。

二人の手から放たれた「見覚えのある火球」は片方が俺へ、もう片方は入って来ようとしていた兵へ。

俺への火球はノエルが剣を抜いて斬り落とす。護衛兵は咄嗟に後退しつつ腕の籠手で顔を庇ったものの、火球の炸裂は避けられなかった。破裂音が響き、通りから悲鳴が上がった。武器を抜いて臨戦態勢に入った兵たちだったが、彼らには物陰から飛び出してきた平民風の男たちが迫る。

咄嗟に跳躍して店内を見渡すと、壁となった男たちの向こうで店員のお仕着せ姿

のなんとなく見覚えのある女がシャルロットに小瓶の匂いを嗅がせていた。専属メイドのアニエスは「見覚えのある首輪」を装着させられた上、ぐったりと床に倒れている。

幸い、シャルロットもアニエスも外傷はなさそうだが――見覚えのある相手に見覚えのあるアイテムの数々に頬がかっと熱くなる。

『わたしの可愛い妹を狙った以上、覚悟はできているんでしょうね？　覚悟しなさい、倍返しよ！』

追跡

※倍返し前にもうちょっと溜めさせてください

眠り薬か何かだったのだろう。シャルロットはかくんと気絶するようにして意識を失った。反射的な仕草か、その右手は胸のペンダントをぎゅっと握りしめている。

「シャルロットを離しなさい！」

義妹を前抱きにして立ち上がる女。盾にされたのを見て一瞬攻撃を躊躇うと、女は最低限の動作で俺にナイフを放ってきた。

「リディアーヌ様！」

投げるようにして持ち上げられた予備の剣――鞘に入ったままの俺の装飾剣がナイフを弾き飛ばし、そのまま俺の手の中に収まる。お陰で難を逃れ、武器を手にすることもできたが、着地までの僅かな間に女はシャルロットを抱えたまま動き始めていた。

身体強化なしとは思えない素早さで店の裏へ。
裏からは入れ替わるようにして覆面をつけた男が三人飛び出してくる。腕輪が輝き、三発の火球がこちらへ。俺は装飾剣を抜き放ち、それをひと薙ぎ。
生み出された烈風が火球をかき消し、店の商品ごと棚をなぎ倒す。残った風の勢いは三人の身体を吹き飛ばして近くの壁に衝突させた。
射線の関係で吹き飛ばせたのは後から来た三人だけ。
最初に来た男たちだが、弾丸のように飛び出したノエルが一人を瞬く間に斬り伏せてくれた。彼女はそのまま二人目を狙おうとするも、商人風の男が素早い動きで蹴りを繰り出し、牽制してくる。残った一人は外の護衛を阻もうと店のドアを閉じた。
連携ができている。その上、ざっと数えただけでも敵は既に十人以上。
『何人いるわけ!?　パーティーの時と違ってこっちは少人数なのよ!?』
大盤振る舞いにも程がある。それだけ前回の失敗を重く見ているということか。
「追うわ！　アンナはクロエさまを守って！」
「リディアーヌ様、危険です！」

危険は承知、今は一秒でも時間が惜しい。

裏口から出てきた三人に駄目押しの烈風を追加しつつ、とばっちりでぶっ倒れた店員（本物）に「ごめんなさい！　後で弁償するわ！」と声をかける。棚が吹き飛んだおかげで裏へと繋がるドアへは一直線。裏口への道もドアが開け放たれたままになっていてわかりやすかった。

外からは馬のいななきと遠ざかっていく蹄の音。身体強化を用いながら全速で飛び出し――。

「っ!?」

悪寒を覚えて急制動。

眼前を矢が通り抜け、店の外壁に突き刺さった。少し離れた建物の外壁にクロスボウを構えた覆面。風で吹き飛ばすには遠く、火球では無関係者の被害が怖い。剣の切っ先でターゲット指定し、横に飛ぶ雷で撃ち落とした。

『お生憎さま。貴族に狙撃は効きづらいのよ』

風の魔法で逸らせるからとか防御障壁でガードできるから、という以前にさっきのような「虫の知らせ」で運よく回避できることが多いからだ。

これは前にオーレリアから聞いた考察。

貴族の持つ魔法防御というのは「無意識に発動している最低限の魔法」であり、正確には魔法だけでなくありとあらゆる危険に及ぶ。だから、魔力が高く魔法に習熟していればいるほど物理攻撃相手に運よく致命傷を避けたり、第六感が働いて狙撃を避けたりしやすいらしい。

俺もこの考察は正しいと思っている。

「蹄の音はあっちだけど……」

見える範囲に他の狙撃手はいない。防御障壁を展開しながら脚力を強化、大きく飛び上がって確認すれば、音のする方向に確かにいた。金髪の少女とそれを抱えた女。

着地し、とにかくそれを追いかける。身体強化しているとはいえ子供の足、馬相手に追いつけるとは思えないが――。

「リディアーヌ様!?」

「領主様の娘さんだっていう!?」

「何があったんだ!?」

女を追えばほどなく大通りに出た。走り去っていく馬を呆然と見送った通行人たちが今度は俺を見て驚きの声を上げる。

隠れて逃げるより道幅の広さを選んだか。雑踏を物ともせず駆けていくのはさすがとしか言いようがない。

「シャルロットが、妹が攫われたの！　誰か、馬を貸してくれない!?」

「妹さまが!?」

「大変だ！」

みんなが慌てて道を開けてくれ、荷運びをしていた一人の男が「使ってください！」と馬を明け渡してくれる。

「ありがとう！　顔は覚えたから明日にでも屋敷に来て！　きちんとお礼をするから！」

乗馬服でもなんでもないただのドレスだが、もちろん着替えている暇はない。スカートの側面に魔法でスリットを入れて多少動きやすくしたら魔法で革のバンドを形成。装飾剣を太腿の外側に固定してから馬に飛び乗った。

飛び乗るまでの間に荷下ろし（ほとんど地面に捨てたような形だが）は終わって

いる。俺は手綱を握って馬の胴を蹴った。
「お願い！」
言葉が通じたわけではないだろうが、馬は素直に従ってくれた。いななき、走り出すと徐々にスピードを上げて大通りを走り始める。
「道を開けて！　悪党を追いかけているの！」
声を上げて道を開けさせ、可能な限りの速さで疾走。
敵はどうやら街の外を目指している。中心部に向かっても公爵邸があるわけだから当然と言えば当然か。しかし、開いてしまった距離の差は簡単に縮められない。馬の扱いは向こうがだいぶ上、ついでに馬の質でも負けている。重量差を差し引いても追いつくのは容易ではない。
それでもとにかく追いかけていると、
「リディアーヌ！」
服を乱し息を荒げたクロードとアランたち。
騒ぎに気づいて止めようとしたができなかったようだ。見ただけで察して彼らに告げる。

「わたしはこのまま追うわ！　お兄さまたちはクロエさまと合流して屋敷に報告を！」
「リディ、危険だ！」
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！」
言っているうちに馬はアランたちを追い越した。だんだんと街並みが簡素になっていく中、建物の屋根を飛び移りながら並走してくる影がひとつ。
「リディアーヌ様！　馬の速度を一定にしてください！」
「え、ええ！」
身体強化だけで追いついてきたらしいノエルは俺の後ろへさっと飛び移ってくる。驚いた馬が暴れようとするも、手綱を俺から奪って上手く制御。
「ノエル。騎士って思ったよりずっと凄かったのね……？」
「こればかりは身体の小さい私の方が兄より上手いかもしれません。それよりも、リディアーヌ様は魔法で援護をお願いします」
ノエルは視線を前から動かさないまま言ってくる。援護か。そうは言っても何ができるのか。下手に攻撃すればシャルロットを傷つけてしまうかもしれないし、外

の街道に出るまでは視界が開けていないのでそもそも相手を捕捉しづらい。
　少し悩んだ末、馬の空気抵抗を減らしてやることにした。馬の眼前あたりに流線型をした不可視の防護膜をイメージ。魔法を発動させると空気の流れが左右に流れていくようになり、スピードが上がる。
　じりじりと距離を詰めながら街の入り口へ。
「り、リディアーヌ・シルヴェストル様!?」
　入り口はひと騒動あった雰囲気。怪我をした衛兵が何人も見え、襲撃者とみられる捕縛された男が複数人。馬の用意が進められ、今にも飛び出そうとしている。
「悪いけど急いでるの！　このまま妹を追わせてもらうわ！」
　無理やり止められることはなかった。むしろ二頭の馬が少し後方から追いかけてくる。別の一頭は公爵邸へ報告へ向かったのか逆方向へと走り出した。
「見えた！」
　道すがらかいつまんだ事情を説明しつつ高速で駆けると、ようやく敵の背中が見えてきた。
「待ちなさい！」

声を上げたのは失敗だったか、反応した女が馬を操りながら何かを放ってくる。
ノエルはなんとか馬を操作、回避したものの、横目で品を確認すると薬の小瓶だった。相変わらず毒物の類を多用してくる。
これでは迂闊に近づけない上、何か放られるたびに距離を離されてしまう。
「わたし一人なら飛行して接近できると思うんだけど」
「絶対に駄目です。あの女と接近戦など、何をされるかわかりません」
ノエルが一対一で逃がした相手だ。飛行魔法でチェイスしながら戦うには荷が重すぎる。
じゃあどうすればいいのか。
「ノエル。一か八かの方法を試してもいいかしら？」
「シャルロット様に危険がないのであれば」
馬や女を狙うよりは比較的危険は少ない。そう伝えた上で思い切って決行。
馬から飛び降りながら飛行魔法を起動。何度か試したことはあるので発動自体は問題なく成功した。しかし、これで直接敵に挑もうというわけではない。
俺はふわりと地上数メートルの高度まで上昇すると、前方への高速移動を開始。

「――っ」

女がナイフを投げてくるも、三次元軌道中なら簡単には当たらない。余計な行動で速度を落としてくれるならむしろ御の字。

舌打ちし、馬へ鞭を入れようとする彼女をよそに高速飛行で馬を大きく追い越し、前方の地面へと着地。

たん、と、地面へ手をついて、

「何――!?」

地面から土壁が大きくせり上がっていく。

領地の外壁にヒントを得た邪魔な壁作戦。壁の横幅（？）は十メートル近く取ったので迂回するにも方向転換が必要。減速してくれれば後続が追いついて複数人で包囲できる。

『これならさすがに止められるでしょ』

「リディアーヌ様！」

「え……!?」

ノエルの声に、せり上がっていく壁の上に着地する影を見つけた。

確かに壁の厚みはそこそこ厚くした。身軽な者なら足場にできる程度のサイズだが――普通、急に作り出された壁に迷わず飛び乗れるものなのか。

迎撃の魔法を放とうとするも、飛び降りざまに薬の小瓶がばらまかれた。飛びのきつつ防御障壁を展開するのが精いっぱいで、その間に女はひらりと着地してしまう。

互いの距離は数歩分。

たった数歩の距離が遠い。女は片腕でシャルロットを抱えたままもう一方の手にナイフを握り、俺に低い声で警告してきた。

「これ以上暴れれば、首の皮を裂く」

「……っ!?」

身体が硬直した。

上手くやればシャルロットは無傷で助けられる。怪我をさせても死ななければ魔法で治せるわかっているはずなのに、万が一のビジョンがよぎって手も足も動かない。

ほんの数秒の躊躇。

だが、走り出した女がスピードを得るには十分だった。
「要求を屋敷へ届ける。妹を返して欲しくば対価を払え」
「待ちなさい！　何が目的なの!?」
叫ぶように尋ねるも返答はなかった。
背を向けて走っていく女。シャルロットの身体が隠れているため魔法での狙撃は躊躇われる。さらに、道の向こう側から走ってくる馬車が見えた。ここで増援。人質を取られながら複数人を相手にするのはさすがに厳しい。
こっちの仲間は俺自身が作った壁によって迂回を余儀なくされている。
ノエルたちと合流した時には女を乗せた馬車は方向転換を始めている。馬なら追いつけなくもないが、
「一度立て直すべきです」
少女騎士は静かに俺へ忠言した。
「シャルロット様を連れて領外へ出るのは困難です。命を奪うつもりなら最初からやっているはず。ならば、ここは逃げた方向がわかっただけで良しとするべきです」
「……そうね」

唇を噛みつつ渋々頷く。

ノエルは俺の護衛騎士。俺の身を最優先にする立場にある。そして俺は騎士ではない。むしろ、安全な場所で守られるべき人間だ。

なのにここまで付き合ってくれた。彼女だってシャルロットを助けたいと思っている。その上で立て直しを提案しているのだから、それは本当に必要なことなのだ。

わかっていても悔しい。

すぐに助けてやりたかった。あの女に一矢報いてやりたかった。不甲斐ない自分が腹立たしくて仕方ない。

それでも、

『……腐っている場合じゃないわよね。まだチャンスはある。みんなの力も借りてシャルロットを助け出せばいいのよ』

倍返しにすると誓ったのだ。このまま「負け」には絶対にしない。

深く息を吐き、気持ちを整えた俺はノエルたちを振り返った。

「魔法を使わず公爵邸へ戻るわ。少しでも魔力を温存しておきたいの」

公爵邸ではアランとクロードを含む一族全員が俺を待っていた。
街にある騎士団の出張所からも騎士が来ていた。街に駐留する騎士は全五名。うち四名は主要な街道を通りつつ近隣の街や村へ警告にあたり、残る一名が屋敷内で待機している。
各関所には一族の者がそれぞれ一名、屋敷から護衛を連れて検問の強化を指示しに出発済み。
残る一族からの期待するような視線に申し訳なさを感じつつ経緯を説明すると、祖父が「何という事だ！」と大声を上げた。
「公爵領の中心で公爵令嬢が攫われるだと!?　くだらぬ『純血派』をこれほどの人数泳がせてしまうとは。検問の兵は節穴揃いか!?」
「ごめんなさい、お祖父さま、シャルロットを助けられなくて」
「いや、リディアーヌが謝ることではない。むしろ其方はよくやった。敵の方が一枚上手だっただけのことだ」
俺の吹っ飛ばした敵四人はきっちり無力化されていた。その甲斐あってかアンナ

たちは全員無事だった。

アニエスも命に別状はなく、今は別室で寝かされている。ノエルが俺に追いついて来れたのも敵の数が減って倒すのが楽になったからだ。

敵の逃げた方向もかなりしっかり確認できた。

途中で方向転換したかもしれないが、その場合、全速で走る騎士や一族の貴族が先を行ける可能性が高い。敵は袋のねずみだ。

「それで、敵から要求が来るらしいのだけれど……」

「それならもう来ている」

届けに来たのは何の関係もないただの手紙配達人（メッセンジャー）で、念のために尋問をしたものの何も知らなかったという。

そして、肝心の要求は次のようなものだった。

『リディアーヌ・シルヴェストルと第三王子リオネルとの婚約を破談とせよ。方法は問わない。破談が確実だと判断した時点でシャルロット・シルヴェストルは解放する』

敵からの要求

雑貨店の一件で出てきた敵はほぼ全員を確保した。

狙撃手や外の護衛を襲った奴ら、門の襲撃犯なども含めてだ。気絶で済ませられなかった者もいるが、尋問するには十分な人数。

時間がないためかなり強引に吐かせた結果、やはり純血派だったらしい。彼らが街を訪れた時期や手段はバラバラ。一、二週間以内に来た旅人や商人が多いものの、公爵邸行きが決まった頃には来ていた者や街に年単位で住んでいた者、親の代からの住人もいた。

明らかに計画的な行動だ。

関所の検問も怪しげな一団なら止められるが、旅人や商人を一人一人深く疑ってはいられない。それに思想的な危険度は身体検査や軽い質疑応答では見分けられないだろう。

オーレリアの魔道具探知や騎士団による捜索は王都周辺から順に行われているため末端まではまだ行き届いていない。

王都以外の街に常駐する騎士はせいぜい数名なので、彼らでは通常業務と並行して一日数件程度の家宅捜索をするのがせいぜいだ。

今回の作戦はその隙を突かれた格好になる。

「リディアーヌの婚約解消とは……。マティアス様、やはり他派閥からの横やりと見るべきでしょうか」

「……ああ。学園襲撃の件で恨みを買った可能性もあるが、他派閥の支援はあると考えるべきだろうな」

婚約解消によって得をする人間というのは実際たくさんいる。

例えばベアトリスを筆頭とするリオネル狙いの令嬢たち。第一王子派や第二王子派だって公爵家の威光が邪魔だろうし、処刑されたバルト伯爵夫妻の縁者やオーレリアを嫌う人間という線もある。

状況だけではとても絞り切れない。

尋問を続けても支援者の名前はおそらく出ないだろう。貴族当人がのこのこやってきて「やあ、頑張ってくれたまえ」なんて言うわけがない。普通は人を使ってこっそり金や物資を送る。

「婚約解消ね。そんなことで済むなら別に構わないけど、今回はお断りだわ。だって、時間がかかりすぎるもの！」

おおよその状況を把握したうえで、俺は敵の要求を切って捨てた。

王都に戻って面会依頼を出して状況を話して、なんてやっていたら何日もかかる。その間、シャルロットを敵に預けたままにはできない。令嬢として大事に扱ってもらえる保証はどこにもないのだ。

本当は返す気がないのではと憤ったところで、祖父が厳かに口を開いた。

「落ち着け、リディアーヌ。手続きの煩雑さは敵も理解していよう。だからこそ『破談が確実だと判断した時点』などと付け加えたのだ」

「……どういう事ですか、お祖父様？」

アランが尋ねた。彼の表情も決して平静ではない。シャルロットを取り戻すためなら平民の十人や二十人、平気で斬り捨てそうな顔をしている。

そんなアランを見て、祖父は一瞬躊躇うような表情を浮かべてから言った。

「早く済ませたいのならば、リディアーヌに決定的な傷がつけばよい。……王子の婚約者に相応しくないとなれば婚約解消は確実だ」

「……それは」

祖父の言いたいことは理解できた。

治癒魔法は万能ではない。しかし俺ならかなりの怪我も治せる。オーレリアを頼れば腕の一本や二本再生してくれるだろう。その上で言う「決定的な傷」には、物理的な損傷以上の意味が要る。再生できようが「傷ついた」という事実だけでお釣りの来る傷。

目的が婚約解消であるならば答えは一つ。

「妹にそのような事をしろと仰るのですか……!?」

非常時だ。兄を含む男性貴族は全員、帯剣している。だから、アランが声と共に剣へ手をかけると全員に緊張が走った。下手をすれば一族同士での殺し合いになる。次期当主と前当主が争った場合にどちらへ付くか、瞬時に意思統一ができるわけがない。

が、

「愚か者が！　誰がそのような手段を許すか！」

祖父が更なる大声で吼えた。窓の硝子をびりびり震わせる大声に多くの者が身を

竦ませる。
　怒鳴りつけられたアランは怯えるよりむしろ呆けたような表情で祖父の顔を見上げた。
　皺の多い祖父の顔には苦い表情が浮かんでいる。
「お祖父さま？」
「大事な孫に『女としての傷』を付けさせるなど絶対にあってはならん。……それならばまだ、私が兵を率いて王都へ侵攻する方がマシだ」
「マティアス様!?　そのような行為、陛下の忠実なる臣として止めぬわけには参りません！」
「わかっている。要は敵の要求など呑めんということだ」
　ジェラールの忠言に祖父が苛立たしげに返したことで、一同にはひとまずの安堵が生まれた。
　アンナとエマがそっと寄り添うように立って俺を支えてくれる。彼女たちの体温が温かく、なんとも有難い。
「安心してください、リディアーヌ様。もしもの時は命を賭けてでもお守りいたし

ます」

「ありがとう、アンナ。大丈夫よ。そんなことにはならないわ」

むしろアンナを安心させるように笑って答えた。

別に、俺としてはシャルロットが帰ってくるなら応じても構わないのだが――傷自体はともかく（現物でなくとも適当な棒でも突っ込めばいい）、傷が生まれたと証明する作業にはさすがに抵抗がある。しないで済むならそうしたいし、敵の悪辣さに「従ってたまるか」という想いもある。

ジェラールが深いため息を吐いて、

「そもそも、公爵家側に一方的な非のある婚約解消などあってはならぬ」

例えばこれが病気や事故による大怪我なら周りの反応も「仕方ないね」で済むだろう。

しかし、婚約がなくなる程の罪が生まれたのであれば我が家は窮地に立たされる。周囲からの白眼視や王家への賠償で済めばいい方、下手をすれば一族郎党処刑でもおかしくない。

シャルロットが生きて帰ってきてくれても家がどうにかなったのでは意味がな

い。

「それなら猶更、シャルロットを取り返さなくちゃ」

俺が言うと、祖父がこちらをじっと見つめてきた。

冷たい瞳。

「公爵家の前当主として言うのであれば、優先すべきは敵の捕縛・殲滅だ。シャルロットの生存は二の次で良い」

「なっ……!?」

「助けるなと言っているわけではない。ただ、慎重に動くあまり敵に逃げられては元も子もなかろう」

理屈としてはわかる。

血統の上で言うとシャルロットは分家筋。現時点では政略結婚も決まっていない。絶対に助けるべき命ではない。

俺の無事や敵を片付けることに比べれば義妹の生死は些末に過ぎない。

……なんて、そんな理屈。

「納得できるわけないじゃない！」

大きな声で宣言すると、一同の視線がこちらを向いた。
「お祖父さま。家の利益や敵への反抗を考えるならむしろシャルロットを助けるべきだわ」
助けなかった場合、我が家は「血族を見殺しにした」という汚名を被る可能性がある。
王族好みの金髪であるシャルロットは結婚相手としても引く手あまたになるはず。結婚によって得られるはずだった繋がりをみすみす手放すことになる。
何より、娘を溺愛しているセレスティーヌ・シルヴェストルの反感を買う。一族への怒りから彼女が敵に回れば、たかが悪党数名の行方などよりよほど大きな損失だ。
と、いったことを主張し、俺はシャルロットの救出を訴えた。
祖父にしても助けられるなら助けたいのだろう。瞳に理解を示した上で反論してくる。
「ならばどうする？　敵の居場所を特定し、掃討、シャルロットの救出までを少数で行うのは無理があるぞ」

「ええ、普通なら不可能ね。だから、シャルロットはわたしが助ける」

シャルロットには魔法の練習用にペンダントを渡してある。

ロケットの内側に入れた魔石はただぴかぴか光るだけの代物で役に立たない。ただ、俺は別途、ロケット自体にごくごく小さな魔石をこっそり埋め込んでおいた。

オーレリアが新型魔道具に組み込んだ機能を真似たもの。つまり俺の魔力に反応し、俺だけにわかる応答を返す仕組みだ。探査範囲はせいぜい数メートルだが、ないよりはずっとマシである。

「わたしとノエルだけならあまり目立たないでしょう？　それに、わたしが近づく分には奴らも大歓迎だと思うの」

「何？」

「わたしが要求に応じなかった場合、次善の策はわたしを殺してしまうことじゃない？」

死んでしまえば婚約も何もない。家の名声を落とすことはできないが、最低限の目的は果たせる。

「最初からわたしが出てくることも織り込み済みなのかも。その場合、シャルロッ

トは餌よ。わたしが死ぬまでは生かしておいてくれるでしょ」

連れて行ける護衛は専属騎士のノエル一人でギリギリだろう。それ以上は隠密行動的にも敵の心証的にもおそらくアウトだ。

この主張に祖父、ジェラール、アランが揃って首を振る。

「危険すぎる。どこの世界に幼い娘をみすみす死なせる保護者がいる」

「死ぬつもりなんてないわ。わたしが死んだらシャルロットが殺されるのよ？」

「そのシャルロットが人質なのだぞ。戦えるのか？」

俺はふっと笑って答えた。

「次は躊躇わない。走ってる馬の上でもない限りは一撃で致命傷を負わせてやるわ。手を離されて擦り傷を作る程度ならシャルロットも許してくれるでしょ」

俺の提案は長い黙考の後、保護者間での言いあいを経て条件付きで了承された。兵のうち身軽な者を斥候として放ち、敵の居場所をある程度絞り込んだ上で向かうこと。俺とノエルが突撃した後、ある程度の時間差で十分な兵に後を追わせること。

俺たちが失敗するか、あるいは自分たちだけで処理しきれなかった場合には俺の

無事が最優先、最悪の場合はシャルロットを切り捨てるという判断だ。保険としては仕方ない。要は失敗しなければいい。

仮眠と食事で少しでも体力と魔力を回復させながら、俺は出撃の時をじりじりと待った。

◆　◆　◆

気が付くと、シャルロットは薄暗い場所にいた。

目隠しをされているせいで詳しい状況はわからない。木と藁、それに動物の匂い。連想したのは公爵邸にある厩舎や牧場の羊小屋だ。動物の気配は感じないので世話をする平民の住居かもしれない。

壁を背に座らされており、両手首は拘束された状態で身体の前。足も縄か何かで繋がれていてろくに動かせない。

口にも布か何かが巻かれていて悲鳴を上げることさえままならない。

「本当に行っちまうのかよ。ここまで手伝ってくれておいて」

建物の中には何人かの人がいるらしい。三人だろうか。気配と話し声がする。
「雇い主からの命令は果たした。後はお前達で好きにすればいい」
「命令ね。お前だってこっち側の人間だろう。理想に殉じる覚悟はないのかよ」
「理想のために無駄死にする趣味はない」
引き留めている二人が男で、引き留められている一人が女だ。
男達の声は荒っぽい、いかにも平民といった感じのものだが、女の声は冷ややかかつ平坦で聞く者の背筋を寒くさせるような何かがある。
雑貨店。何が起こったのかわからないうちに気を失わされたシャルロットだが、アニエスが腹部に一撃を受けて倒れ、それから女に何かされたのは覚えている。恐怖に小さく震えた後、あの女とこの声の主が同一人物だろうかと考える。
「作戦は上手く行っている。成功させるためにも手伝ってくれないか」
「馬鹿な事を。私は最初から反対だった。こんな作戦が上手く行くはずがない」
自分が誘拐されたこと、彼らが誘拐犯であることくらいはシャルロットにもわかる。だとすると、作戦というのは誘拐の事なのだろうか。だとすれば男の言う通り成功しているようにも思えるのだが、

「私はリディアーヌ・シルヴェストルを殺さなかった。何故だかわかるか？」
　姉の名前を出されてどきっとする。憧れでもある姉の身体が、彼女の髪よりも濃い赤に染まるのを想像して胸が締め付けられそうになる。
「？　第一目標は婚約の解消で、殺害は駄目だった時の目標だからだろ？」
「違う。リディアーヌ・シルヴェストルが目障りなら殺してしまえばいい。私はそう思っている。その上で殺さなかったのは、単に成功率が低かったからだ。だから攫いやすい妹を狙った」
　姉は死んでいない。その事にほっとするシャルロット。アランやクロエ、アニエスも無事なのだろうか。
「お前でも殺せないってのかよ。貴族と言ったってまだガキだろ？」
「だから馬鹿だと言うのだ。……あの娘は高い魔力を持ち、それを振るうことに躊躇がない。その力は高位貴族の正規騎士に匹敵する」
「騎士!?　あのガキが!?」
「そうだ。高位貴族の正規騎士は訓練を積んだ戦士数十名と等価だ。……実際は数十名程度、正面から挑みかかれば返り討ちだろうがな」

深く息を吐いた女は、どこかに向けて歩き出したようだった。
「もう一つ教えておく。リディアーヌ・シルヴェストルとオーレリア・ルフォール。どちらかを殺せと言われれば私はオーレリア・ルフォールを殺す。公爵令嬢には手を出さない。あの見習い騎士が傍に付いているのなら猶更だ」
扉が開く音と、閉じる音。
静まり返った建物内で、男のどちらかが呟くのが聞こえた。
「臆病者が」
違う。シャルロットは思った。姉は、リディアーヌは確かに強い。
学園の卒業パーティー襲撃時には一人で何人もの「不心得者」を倒したという。その時の様子も聞いたが、確かに凛々しい騎士のような活躍だった。だから、あの女の言う事は間違っていない。
「要求を呑むと思うか」
「呑まないだろう。おそらくはこのガキを助けに来る。もし公爵令嬢当人がのこのこやってきたら……」
「総出で殺す。あの女は誇張して言っただけだ。魔法が使えようとあんなガキ殺せ

ないわけがない。十分な戦力も用意した。後は」
「ああ。正しき血を正しい場所へ還すために」
姉が、助けに来る？
ありえないと思った。強いと言っても騎士じゃない彼女がわざわざ戦いに出るなんて、令嬢の作法から激しく逸脱している。王子の婚約者でもあるリディアーヌは安全なところで守られているべきであって、最悪、血の繋がっていないシャルロットの命なんて見捨ててしまったっていいはずだ。
だから、助けなんて来ない。
来たとしてもシャルロットは人質として殺されるかもしれない。こうなった以上それくらいの予想はつくし、貴族として覚悟はしているつもりだ。
それでも、願わずにはいられなかった。
（……助けてください、お姉様）
その時、シャルロットは前方に光を感じた。
おそらく反対側の壁に窓があるのだろう。そこから月明かりが射しこんでいるのか、少しだけ明るい。

（光）

姉からは光の魔法を教わった。ペンダントと同じ程度の光をペンダントなしで出すのが精いっぱい、まだまだ練習中だが、窓があって、光を届けられるのなら自分にだってできることがあるかもしれない。

助けをただ期待するだけなんて嫌だ。

姉のようになれなくても自分なりに励むと決めた。だから。

（まだ駄目。あの女の人がここを離れてから）

心の中で千を数え、それから必死に光を思い描いた。

姉が見てくれるようにと。強く、長い光を。

そして、生まれた輝きは、目隠しされていてもはっきりわかるほど眩く、窓から空へと高く伸びた。

救出

「間違いない。シャルロットの魔法だわ」
空へと斜めに伸びる光の束。
眩い輝きは母の部屋のバルコニーにいる俺の目にもはっきりと届いた。
「敵の陽動という可能性もありますが」
「まさか。あんな綺麗な光、悪党どもに作れるわけないじゃない」
斥候部隊の帰還はまだだが、これはもう確定だろう。
「色々と手間が省けたわ。さすがはシャルロットね」
「リディアーヌ様。お疲れではありませんか？」
「大丈夫。少し仮眠を取ったし食事もしたもの」
着替えは済んでいる。
昼間のようなドレスではなく剣術の稽古着。これなら思いっきり暴れても下着が見える心配はない。
時間短縮のため、ノエルに抱いてもらって地面まで飛び降りた。着地するのと同

時、玄関前に繋がれていたギーが「乗れ」とばかりにいななく。
さっと相乗りしたところで、
「行け、ギー！」
走り出すノエルの愛馬。さすがと言うべきか、昼間乗った馬より断然早い。
「行ってきます！」
「リディアーヌ様、どうかお気をつけて！」
「ええ、あなたたちも屋敷をお願い！」
周囲を警戒していた兵や出撃のために待機中の兵に敬礼で見送られ、丘を駆け下りる。
夜と言っても真っ暗闇ではない。シャルロットの救援要請はもう消えてしまったものの月明かりはあるし、街の表通りには公爵邸の使用人が準備してくれた魔法の明かりがあちこちに灯っている。人気のない通りを駆けるのに支障はない。
蹄の音が近所迷惑なのは一大事ということで許してもらおう。
位置がバレたのは向こうも承知のはず。早く到着しないと逃げられてしまう。できるだけ止まらずに駆け抜けたい。

「っ！」

突如飛来してきた矢がギーに命中しかけ、自動生成された防御障壁に阻まれる。

念のため鞍に物理防御の魔道具をくくりつけておいて正解だった。

方向がわかれば発見するのは難しくない。次の矢を装填しようとしている狙撃手に雷を撃って確実に意識を奪う。

魔道具に魔力を補充しつつ、二人目、三人目と現れる狙撃手も撃ち落とした。

次第に門が近づいてきて、

「開門！」

普段、夜間は開かれることのない門が音を立てて開いていく。

空いた門の向こうには夜闇に紛れるようにして四、五人の武装した不審者。

「私が！」

ノエルが言って、片手を彼らへと向ける。手のひらから放たれた大ぶりの火球が中央に着弾、炎の華を咲かせると共に轟音を響かせる。

爆風が街の中にまで入ってきそうだったので俺が風を生み出して押し返した。

焦げ焦げになった悪党どもは地面に倒れてぴくぴくしていたり、必死に武器を持

ち上げようとしていたり、とても戦える状態ではなさそうだったのでそのまま勢いよく駆け抜ける。はずみで一人をギーが踏んづけたが、変なところに倒れているのが悪い。

「ノエル、方向はわかる？」

「もちろんです！」

門の外はさすがに暗い。持ってきた照明の魔道具を起動して左手で掲げる。足は止めずに可能な限りのスピードを維持。

「覚悟しろ、リディアーヌ・シルヴェストル！」

数分ほど走ったところで前方に馬車。幌付きの荷台からは弓を構えた男が三人顔を出している。

さらに御者台に座った男が馬に鞭を入れ、右手の腕輪を構えてくるが――放たれた矢と火球は俺の風魔法で全て散り、追ってノエルが放った火球によって馬車はあっさり炎上する。

慌てて馬車から飛び降りて武器を構える敵たち。『って言っても、馬鹿正直に相手する必要あるかしら？』。

全部で六人。うち二人にはノエルが風を乗せた短剣を投げてさっさと黙らせる。進行方向にいた一人はそのままギーに撥ねてもらい、残った三人には雷をぶつけた。

「雑魚ですね」

「さすがにその言い方はひどくないかしら……？」

敵は決して弱くない。魔法がなければとても対処しきれないし、魔法が使える者――例えば騎士だって矢を一発でも受ければ大きな痛手だ。毒でも塗られていた日にはすぐに治療しないと命に関わる。もしも平民の私兵中心で攻めていたら妨害の度に数を減らしていたはずだ。

一気呵成に片付けられているのは荒事に慣れているノエルと魔力量の多い俺が息を合わせているお陰。

「まあ、この程度で私を殺すつもりだったのなら笑っちゃうけどね」

光の放たれたポイントに近づくにつれて妨害は強くなった。

立ちはだかる人数が増え、木立ちの隙間からも狙撃が来る。本当にどこからこれだけの人数を集めたのか。前回、卒業パーティーを襲ったのは学園に忍び込ませられる人数、あるいは王都に動員できる人数に過ぎず、純血派の主力はいまだ残って

いると見るべきか。

『もう！　例の女暗殺者はまだ姿さえ見せていないっていうのに……！』

走っている馬に横合いからの矢なんてそうそう当たらない。当たっても魔道具で防げるのでこの際無視する。直接足止めしてくる敵には火球＋烈風のコンボでさっさと殲滅。

ようやくたどり着いた目的地周辺は、

「牧場ですね」

昼間は羊がのんびり過ごしているであろう、柵に覆われた広いスペース。奥には羊小屋や管理人たちの住居などがある。シャルロットが捕らわれているとすれば建物のどれかだろう。この際、ギーには柵を飛び越えてもらい、そのまま近寄ろうとして、

「なっ――!?」

「ギー!?」

着地したギーが再び走り出そうとしたところで、その身体がぐらりと揺れた。前足で踏みしめた地面が陥没。落とし穴だ。

横転するギー。慌てて飛び降り、なんとか助け起こす。骨折してはいないようだが足を痛めている。辛そうな顔をしており、これ以上無理はさせられない。「すまん」と言うように鳴く彼を優しく撫でてやる。

「十分よ。ご苦労様」

「貴方はここで待っていて。後は私とリディアーヌ様で」

ここまでするか。

向こうは殺す気なのだからこのくらいは当然だが、動物を痛めつけられるとどうしても怒りを覚えてしまう。それが交流のあった個体なら猶更。その上、シャルロットが痛い思いをしていたらと思うと……。

唇をぎゅっと結んで装飾剣を引き抜く。

移動しながらだと使えなかったが、これがあれば魔力効率はぐっと良くなる。

「リディアーヌ様、魔力は」

「さすがに辛くなってきたけど、残ってる奴らを片付けるくらいなんとかなるわ」

柵の内側に落とし穴があると見るべきだ。俺たちは柵の外に戻って迂回する。

ノエルが持続する照明魔法を用い、頭上二メートルくらいのところへ浮かべる。

周囲が明るく照らし出され、建物の方からこちらへ向かってくる二十人規模の集団を見た。

お決まりの火球をノエルが投げると、向こうから風が飛んできて威力を相殺される。さすがに対策されるか。いや、というか。

「貴族がいるの……!?」

「もぐりの魔法使いかもしれません。存在の噂だけは聞いたことがあります」

貴族社会から排斥を受けた者が市井でひっそりと生き延び、裏の用心棒になる。魔力を持って生まれてきた平民の子を隠して育てて平民寄りの魔法使いとして用いる。都市伝説レベルだがそういう噂は囁かれているらしい。

あくまでも噂だと思いたいところだったが、可能性としては十分にありえる。もちろん下級貴族が協力しているだけかもしれないわけだが、

「わたしはリディアーヌ・シルヴェストル！　妹のシャルロットを探しに来たの！　居場所を知っているなら教えなさい。知らないなら邪魔をしないで。邪魔をするなら悪いけれど容赦はしないわ！」

敢えて名乗る。これで名乗り返して来なければ「貴族なんていなかった」ものと

して処理する。
　そして、貴族としての名乗りはなかった。
「公爵令嬢！　お前の妹はこっちで預かってる！　殺されたくなければ大人しくその首を差しだしてもらおうか！」
「死ぬのが嫌なら身体で払ってくれてもいいぜ！　こっちとしてはその方が楽しめるしな！」
「止せよ。ガキができたら『穢れた血』との混血だぜ？　貴族増やしてどうするんだ」
「そうそう。要は汚せばいいんだから木の棒なりナイフなり突っ込んどきゃいいんだよ」
「……下衆が」
　ノエルが瞳に炎を浮かべて吐き捨てる。俺としては不快にこそ思えど燃え上がるほどの怒りはない。ただ、これでより一層、遠慮する理由はなくなった。
「妹はここにいるのかしら？」
「ああ。だから大人しく――」

集団の中から一人が答えようとした時、少し遠く、国境方向に一キロほど進んだところからあの光がまた上がった。

思わず笑ってしまう俺。逆に敵たちは舌打ちし、あからさまに動揺を表す。

「本隊がわたしを足止め。最悪目的を達成できなくても、牧場を調べている間にシャルロットを別の場所へ移送して立て直しを狙う、か」

「くそっ！　嗅がせた薬の量が少なかったか！　……仕方ない、かかれ！」

号令と共に一斉に動き出す敵たち。さらに背後の茂みからがさりと音がして増援。

さすがに、この数を二人で相手するのはなかなかきつい。

「……リディアーヌ様。後ろの敵をお願いできますか？」

「いいえ。ノエルが後ろをお願い。前の敵はわたしがやるわ」

「え……？」

ここまで来れば出し惜しみは必要ない。

警戒していたあの女はいないようだし、ここは一気に片付ける時だ。

返事を待たずに一歩踏み出し、装飾剣を横に構えながら大きく宣言する。

「これでもくらいなさい、悪党ども！」
生み出された複数の閃光が夜闇を切り裂き、悪を焼き払った。

◆　◆　◆

「大人しくしてろって言っただろうが、このガキ！」
「っ!!」
馬車の中。目覚めたシャルロットは、家の馬車とは段違いの揺れに顔を顰めるより先にもう一度、己の居場所を伝えようと魔力を振り絞った。
眠らされる直前、男達は姉が来たと言っていた。ならきっと近くにいるはずだ。自分で逃げ出せない無力さを嘆きながらも必死に光を生み出して夜闇を照らす。
もちろん、監視していた男がすぐに気づいて蹴りつけてきたものの、初めて感じる暴力の痛みも縛られたままの不自由も死の恐怖に比べればなんでもなかった。滲む涙をできる限り堪えながらただ祈る。
そんな態度が気に食わなかったのか、シャルロットの身体が持ち上げられる。

ぎしぎしと食い込む縄が痛い。

「残念だな。お前の姉は今頃死んでるよ。……そしてお前はもう一度、お前の家に脅迫するための材料になるんだ」

そんなわけがない。

胸に広がる不安を振り払おうとするシャルロットだったが、気絶している間にどの程度移動したのか見当もつかない。本当に助けは来るのか、用済みになった自分はどうされてしまうのか。不安は不安を呼び、ついにはぽろぽろと涙が溢れ出した。

涙は目隠しを濡らして不快感を余計に高める。監視の男は泣いたシャルロットを見て溜飲が下がったのか手を離してくれた。

成す術もなく馬車の床に転がったシャルロットはただ、泣きながら時を過ごした。

（お姉様――！）

そしてある時、何かがきらりと光った。

「がっ!?」

「おい、どうした――ぐあぁっ!?」

誰かの悲鳴。声を上げた監視の男もまた続けて悲鳴を上げ、どさりと倒れ込む。

最初の悲鳴は御者のものだったのか、何かが馬車から落ちる音と共に馬車の軌道が乱れ始めた。

何があったのか。

疑問は、誰かが馬車に飛び乗って来る音と、ふわりとシャルロットを抱え上げる腕の感触に上書きされた。

一瞬の浮遊感。

シャルロットを抱えた誰かは地面へ着地すると、手、足、口、顔の順に拘束を解いてくれる。

「お姉様……？」

「ご希望に沿えず申し訳ありません、シャルロット様」

「ノエル」

助けてくれたのは姉ではなく、姉の護衛騎士であるノエルだった。

無理をしたのか、顔には疲労の色が濃い。それでもにこりと笑いかけてくれる彼女に、シャルロットはとにかく尋ねた。

「ノエル、お姉様は!?　お姉様は、無事なのですか!?」

「ご安心ください、シャルロット様。リディアーヌ様もご無事です」
そこまで答えてから、ノエルは「ただ」と表情を曇らせた。
怪我をしているのか。
不安を覚えたシャルロットは、少女騎士に抱きかかえられたまま少しの距離を移動した。暗くてわかりづらいが、そこには一人、小さな人間が倒れている。
自由になった手で胸のペンダントを引き出し、明かりを生み出す。すると、地面に広がる赤いものが見えた。悲鳴を上げかけてから、それが血ではなくリディアーヌの髪であることに気づいた。
耳を澄ませると、聞こえてくるのはすーすーという寝息。
「限界まで魔法を使われたようで、先程の光の攻撃魔法で悪党共を倒した直後に気絶なさいました。公爵邸からの応援を待って運んでいただくしかないかと」
「そう、ですか。……良かった、お姉様」
地面に下ろされたシャルロットは地面の上で眠る姉に駆け寄り、その手を握った。
「ありがとうございます、お姉様。このご恩は一生忘れません」
そして、今度は自分が姉を助けられるようになろう。

眠る姉の顔を見下ろしながら、シャルロットは月明かりの下で誓った。

快復と事後報告

起きたら丸一日以上経っていて滅茶苦茶驚いた。
翌々日の朝のようで、窓からは朝日が射しこんでいる。倒れた時に日付が変わっていたのであれば翌日と言うべきか。どちらにせよ二十四時間以上は寝ていたということに変わりはない。
「リディアーヌ様、お加減はいかがですか!?」
「倒れられたと聞いて心配しておりました。不調等、僅かでも気になる点があれば仰ってください」
「すぐに食事の用意をさせますので少々お待ちください。何か食べられそうなものはございますか？」
母の部屋のベッドに寝かされていた俺は、目覚めるなりアンナ、エマ、ソフィからの集中攻撃を受けた。どうやら相当心配させてしまったらしい。
「ありがとう。疲労と魔力不足が重なっただけだから身体は大丈夫よ。むしろ、お腹が空いて仕方ないくらい」

答えると、アンナにぐっと顔を近づけられた。
「だけ、じゃありません！　体力も魔力も酷使した状態なんてとても危ないんですよ？　お怪我がなかったのは良い事ですが、もっと身体にも気を付けてください！」
「ごめんなさい」
深く謝った上で大盛りの朝食をいただく。普段の二人前くらいを平らげ、食後のお茶を飲んでひと息ついたところで部屋のドアがノックされる。
ソフィによって招き入れられるなり早足で入ってきたのはクロード、アラン、それからシャルロットにクロエだった。
「シャルロット！　無事で良かった、怪我はない？　怖い思いはしなかった？もし上手く治らない傷があるようならわたしも試してみるわ。それでも駄目なら早く帰ってオーレリアに――」
「お姉様！　あまり無茶をなさらないでください！」
救出作戦の時は義妹の顔を見られずに倒れてしまった。だから無事を尋ねたのだが、泣きそうな顔のシャルロットは返答の代わりに俺の身体を抱きしめてきた。

安心する温もり。

顔にも肌にも目立った傷は見られない。どうやら大丈夫だったらしいとほっと安堵し、

「お姉様とノエルのお陰です。助けてくださって、本当にありがとうございました」

「大した事じゃないわ。わたしがしたいからしただけ。令嬢としては絶対褒められないような行動だしね」

シャルロットの背中と髪をそっと撫でながら答える。

「お兄さまや皆さまにも心配をかけてごめんなさい。わたしはこの通り、疲れて倒れただけで無事よ」

「ああ、無事で良かった。もしリディに何かあったら父上がここに来るところだった」

「お父さまが!?」

「念話で報告したらそれはもう心配されてね。そのまま旅の支度をしかねない勢いだった」

我が父ながらさすがすぎる。『わたしの行動力はお父さま譲りね、絶対……』。

「すまなかった、リディ。僕とクロードの二人共同時に離れるなんて軽率過ぎた」
「気にしないで。二人がたまたま離れた時に起きたんじゃなくて、奴らは機をずっと窺っていたはずよ。だったら、多少状況が変わっただけで襲撃は発生したでしょう？」
「それでも、いや、だからこそだよ」
「ああ。理由がどうあれ、女子を危険に晒したのならそれは男の責任になるんだ」
父も含め保護者達からはきついお叱りがあったらしい。
もし、俺かシャルロットにもしもの事があった場合は跡継ぎの再考さえありえたという。二人も少しでも汚名返上しようと戦いへの参加を申し出たものの、屋敷で指揮を取ったり後方支援を行うのが仕事だと許してもらえなかったとか。
あらためて貴族の男子の責任が重い。そりゃあもう清らかなご令嬢の一人や二人嫁に貰わないとやってられない。
男女平等を訴えても大した意味はないだろう。
男女に生物としての性能差があるのは当然。男に子が産めない以上、出産を担当する女を守るのは理に適っている。身体能力において女に勝る男が戦いを担当する

のもまた当然の成り行きである。社会の認識を変えていくには長い時間と大きな労力がいる。

「ごめんなさい、お兄さま、クロード。わたし、出すぎた真似をしたわ」

「いや、むしろお礼を言わせてくれ、リディアーヌ」

アランとクロードの手が俺の頭にぽん、と載せられる。

「シャルロットを守ってくれてありがとう」

「無事に戻ってきてくれてありがとう」

じわりとした温かい感動と共に、自分は役に立てたのだという実感を覚えた。

泣きそうになった俺は、アランたちが「謝るよりお祖父様達に元気な顔を見せてくれ」という頼みに笑顔で頷いた。

あの夜、数十名からなる敵の一団に挟撃された俺とノエル。

結論から言えば、戦いは十分もかからずに終わった。

俺がとっておきである光属性の攻撃魔法を使って一気に無力化を図ったからだ。

「リディアーヌ様。あの魔法は一体、どういった原理なのですか？」

公爵邸にいる一族全員が集まっての昼食時。

早めに食堂へ赴いた俺はみんなから声をかけられたり、祖父やジェラールに無茶な行動を謝ったりした後、食事の時間と食後のお茶の時間までかけて報告を余儀なくされた。

ノエルからも一通りの報告はされていたようだが俺からの報告も欲しいということである程度細かく順を追って説明し、それが終わったところでまず、一緒にいたノエルから質問を受けた。

あの時は時間が押していたし、シャルロットの乗った馬車へ追いついて敵を無力化したところで俺が倒れてしまったので詳しい説明をする暇はなかったのである。

（なお、気絶した俺や救出されたばかりのシャルロット、足を痛めたギー、さすがにいっぱいいっぱいだったノエルは追いついてきた公爵邸側の部隊によってまとめて保護され、無事に公爵邸まで帰り着いたとのことである）

「説明してしまえば大した魔法じゃないわ。熱量を持った光を束ねて直線的に照射しただけ」

「待ってください。簡単に言われても原理がわかりませんし、全く簡単には聞こえません」

「簡単よ。ルーペで太陽の光を集めると紙が燃えるでしょ？　あれと同じ事」

前世知識で言うとレーザーである。

貴族家なのでみんなレンズの類は見たことがあるようで「ああ」という顔になった。

「でも、お姉様？　燃えるのなら火の魔法なのでは？」

「光の原理なんだから光の魔法じゃないかしら。……正直、わたしは火も光も属性を持っているから区別がつかないのだけれど」

太陽の光が温かいというのはみんな知っていても、その光が攻撃に転用できるほどの熱量を持つというのはあまり実感が湧かないらしい。

魔法によって「明るいだけで熱くない光」を作り出せる弊害かもしれない。俺としてはしばらく点灯しっぱなしにした電球とか熱いのが当然なので「光は熱を帯びている」と感覚的にわかるのだが。

「太陽って『光と炎の塊』みたいなものだと思うの。ということは太陽の光も火と

光の複合なのかもしれないけれど、重要なのは光が熱いっていうことと、光は風よりもずっと速いってこと」

「光が、速い？」

「そう。暗いところで明かりを灯すと瞬く間に遠くからでもわかるでしょう？　つまりそれは、光の攻撃魔法なら瞬く間に敵を焼けるということ」

「っ!?」

一同にどよめきが走った。

一瞬にして敵を焼けるのなら剣で斬るよりもずっと速い。理屈としては理解できても「そんなの反則だろ」となるのはある意味当然のことだ。

ここでノエルが頷いて、実際に見たことを証言してくれる。

「確かにリディアーヌ様は瞬く間に何人もの敵を焼き――というか、私でも『焼いた』と理解できない方法で倒し、敵に混ざっていた魔法使いまでも無力化なさいました」

「炎を防がれるんじゃ、ああでもしないと多勢に無勢だったもの」

ちなみに魔法使いは一応生きていたらしい。適当に全員動かなくなったところで

ノエルともどもシャルロット救出に向かったのでケアしている暇がなかったが、応援の兵達がきっちり拘束して回収してくれたそうである。

敵は今のところ屋敷内で拘束中。

魔法使いに関しては特に厳しく、目隠しと耳栓と猿轡、手枷足枷をつけた上で腕と胴体をまとめてぐるぐる巻きにし、足は重り付きの椅子に括りつけた上、窓の無い部屋で常時二人以上の監視を付けている。

「……恐ろしい話だ。リディアーヌ、まさかそれはオーレリア・ルフォールの奥義か？」

「いいえ。わたしの独自魔法よ。オーレリアも似たような魔法を使えるかもしれないけど」

祖父が「もはや理解不能」とばかりに首を振ってため息を吐いた。

「捕らえられる限りは捕らえたはずだが、魔法の原理が目撃者から漏れない事を祈るばかりだ」

その発言は同時に「本件は他言無用」という意味を含んでいたが、俺は「大丈夫じゃないかしら」とある程度楽観する。

「現場を見たところで、光った次の瞬間には敵が倒れているもの。理屈と合わせて考えたところで効率よく再現するのは困難でしょう」

見た目に「光って終わり」だからと言って詳細なイメージが不要にはならない。イメージが簡素になればなるほど魔力効率は悪くなり制御も難しくなる。

前世でレーザーやビームなんて腐るほど見てきた俺でさえ魔力消費高めかつ制御の難しい魔法なので、そう簡単に広まることはないと思う。

最強の魔法とは使わない魔法。

魔法法則上、この定義はおそらく絶対だがその上で「使っていい魔法の中で最も最強に近い」のは「見せても真似されない魔法」だろう。

食事を終え、お茶まで飲み終えたシャルロットがほう、と息を吐いて、

「光の魔法なら、私も護身用に覚えたいです」

いや、護身用というか威力的には殺傷用なのだが、

「シャルロットには光魔法の才能があるから、ゆくゆくは使えるようになるかもね」

あの光による救助要請を思い出しながら、俺は義妹に答えた。

ただしもちろん、釘を刺しておくのも忘れない。

「でも、魔法の練習は一人でしちゃ駄目よ。あの時は緊急時だから仕方ないけど、引き続きわたしの指導に従ってね」

誘拐騒動の際に馬を貸してくれた荷運びの男性には公爵邸から十分な謝礼が贈られたそうだ。

現場になった雑貨店の方にもどん！　と見舞金が贈られている。工芸品なんかは戦闘の際に壊れてしまったものも多く、それと店の修繕費を合わせた金額である。

とはいえそれだけだと再オープンまで大変かもしれない。そこで、俺は店に残った無事な商品をまとめて私費で買い取った。

もちろん値段は割り増しで。

「そ、それは助かりますが……本当によろしいのですか？」

「ええ。お土産は多くても困らないもの」

知人・友人へのメインの土産は宝石or羊の角による自作加工品と決めたものの、貴族のお土産や贈り物というのは前世における旅行のお土産とはレベルが違う。公

爵家ともなれば親交の深い家にはあれやこれやどっさりと物を贈ってもいいくらいだ。

まあ、雑貨店の商品が貴族家への贈り物としてどこまで使えるかは難しいところではあるものの、安い商品ならそれはそれで屋敷のメイドや警備兵など使用人達へのお土産にしてもいい。特について来てくれた兵士達には奥さんや娘さんに渡す土産が必要だろう。

足りない分の土産は周辺の他の店から買って迷惑料代わりにさせてもらう。

「ノエルも本当にありがとう。何かあらためてお礼をさせてもらうから」

少女騎士にそう告げると、彼女はふっと笑って首を振った。

「いえ、そんな。護衛対象に戦わせるなど騎士失格でしたし、正直、私も楽しかったので」

「もう、ノエルったら。……でも、わたしの罪滅ぼしも兼ねてちゃんと贈らせて」

するとノエルは少し考えた後で自らの首を指さした。そこには卒業パーティーの時から貸しっぱなしのチョーカーがある。

「でしたら、これを正式にいただけませんか？　今回もお守りとして非常に助かっ

たので」
「駄目よ。だって、それは間に合わせのお守りだもの。もっとちゃんとした物を作って学園の入学祝いにするから」
「なら、それで十分なのですが」
「それも駄目。……そうね、じゃあ予備の剣でも造らせましょうか。魔石入りで何か魔法が発動するものを」
　これにノエルは苦笑した。
「リディアーヌ様。それは絶対に予備の剣ではありません。宝物として保管するか、重要な任務でのみ用いるとっておきです」
　でも、物凄く嬉しそうだったので、彼女へのお礼はそれに決定する。
　あと、一緒に頑張ってくれたギーにはたっぷりのエサと、それから新しい蹄鉄をプレゼントすることにした。

束の間の平穏

シャルロット誘拐事件を受け、公爵領では警戒体制が敷かれることになった。

街の門番や見回りを行う衛兵を増員、見回り自体の頻度も増やす。人はとりあえず屋敷の警備から賄う。俺たちの連れてきた兵が穴埋めできるし、王都からも騎士が増員予定なので当面はなんとかなるだろう。

可能な限りの警戒を続けつつ、大規模な兵の新規募集を行い、領内にある他の村や街の人員も増やしていくらしい。

「街を歩く兵が増えれば抑止力になろう」

何かあった際、迅速に駆けつけやすくもなる。

あの時、俺たちの護衛が仕事をしていなかったわけじゃない。むしろ護衛がいなかったらクロエやアニエス、アンナは攻撃を受けていた。俺とノエルだけではみんなを守るのに精いっぱいでシャルロットを追いかけることもできなかった。

ただ、人数や練度において十分だったとは言い難い。

「平和な時代が気の緩みを齎していたのだろう」

とは、祖父の言葉である。

常識で言えば、貴族に反旗を翻す平民の集団自体がおかしいのだ。

俺とノエルの二人を相手にほいほいダース単位でやられていたように、貴族と平民には大きな力の差がある。そして貴族が政治的な権力を握っている以上、組織的なテロなんて起こした日には反乱と見做されて圧政を敷かれてもおかしくない。

家宅捜索や尋問を順次実施、程度で留め置かれていること自体が温情と言っていい。

敵は、そうした貴族側の油断を突いてきた。

事件はまだ起きるだろう。少しでも被害を減らすためにも可能な限りの備えはしないといけない。

「本当は騎士団を増員して欲しいところだが……」

「貴族の数は急に増えない。当面は平民の兵を募るしかない」

クロードやアランも険しい顔をしていた。

敵を懐に入れてしまう危険は面接や心の魔法を使って削減していくしかない。王都でも衛兵を増やす動きは始まっているという。

「戦争でも始まるのではないか、という物々しさですね」
誰かの呟きがまるで冗談になっていなかった。

俺、アラン、シャルロットにノエルを加えた四人はジェラールの執務室に呼ばれた。
室内にいるのは俺たちの他にジェラールと祖父。ジェラールは盗聴防止効果のある魔道具を起動すると、使用人や護衛を効果範囲外へと下がらせた。
こういう場になれていない義妹が緊張からか唇をきゅっと結ぶ。
「わざわざここまで来てもらったのは他でもない。敵の正体や真の目的について何か思い当たる事がないか確認するためだ」
俺、ノエル、シャルロットは敵との接触が多かった。アランが呼ばれたのはついでだろうが、俺やシャルロットの精神安定的にも居てもらった方が心強い。
次期宰相として教育されているアランは普通に頭も回る。彼は表情を硬くして大人たちに尋ねた。

「敵は純血派ではない、と、お考えなのですか？」
「可能性の一つとして考えておくべきだと思っている」
「少なくとも支援者の存在はほぼ間違いなかろう」
これについてはシャルロットが証言してくれた。
シャルロットを直接攫った女暗殺者――彼女が雇用主の存在を仄めかしていたこと、そしてその雇用主が実行犯と別の立場にあると思われることが誘拐中に聞いた会話内容からわかる。
雇用主は前バルト伯爵夫妻（オーレリアの祖父母）とは別の誰かだろう。夫妻は学園襲撃直後に捕らえられ、既に処刑されている。今回の件について詳細な命令を下せたとは考えづらいし、死んだ人間に忠誠を尽くすタイプには見えなかった。
「捕らえた魔法使いの証言は？」
「市井で育った魔力持ちだと本人は証言している。記憶を探りたいところだが、魔力持ちには効果が薄いため難航中だ」
多少尋問されたくらいで本当のことを言うとは思えない。
貴族として養育されていれば身元を追うことも可能かもしれないが、隠して育て

られていた場合や裏社会出身であれば調査は難しい。
　ここでノエルが軽く手を挙げて、
「私としてはシャルロット様を連れた馬車が辺境伯領方面を目指したのが気になります」
「ふむ……。単に国境に近づくほど警戒が薄いから、とも考えられるが」
「あるいは辺境伯に疑惑の目を向けさせるためか」
　なんとも言えないが手がかりの一つにはなるかもしれない。もちろん、敵にとって頼れる者があの方向にいる可能性も捨てきれない。例えば国境の向こうとか。
　祖父に「言ってもいいか」と視線で尋ねると「黙っていろ」と目を伏せられた。
「今から言う事は一切他言無用とする。守れない者、守る自信のない者は退室を許す」
　続けて祖父はなんとも物騒な宣言をする。
　もちろん、俺とアランは動かない。ノエルは俺が聞く以上はそれに従う。シャルロットが不安そうにこっちを見てきたので「先に休んでもいいのよ」と告げる。
　義妹は表情を引き締め、ふるふると首を振った。

「いいえ、私もお兄様、お姉様と一緒に聞きます」
誰も退室しない事を確認した祖父は深いため息をついた後、厳かな声で告げた。
「純血派の裏にいる組織として推測される相手がある。とてつもなく厄介かつ、一国の王とて容易には介入できない組織――『教会』だ」

事件から一週間が経った頃、俺たち兄妹三人はクロエの誘いでとある牧場を訪れた。
あんなことがあったばかりなので護衛はこれでもかと大人数。街からそこまで離れていない場所とはいえ今は大人しくしているべきじゃないか、という話もあるのだが、どうしても見て欲しいものがあるらしい。その詳細を聞いたら俺たちとしても「どうしても」と言いたくなった。
祖父やジェラールにもお願いしたところ「仕方ない」と苦笑気味に許可が出た。
代わりにアランはもちろん、同行の予定がなかったクロードにも「女性陣を守るように」と指示が出され、男性陣は動きやすい服装に帯剣して万全の態勢を取って

くれた。
「今度こそ傍を離れたりしないから安心してくれ」
「ああ。その場に居合わせさえすれば悪党に遅れは取らない」
若くも凛々しいナイトの姿に感動を覚えつつ、俺たちも念のため乗馬服を纏って牧場へと向かった。
加えて俺は装飾剣も携帯。メイドも護衛の一員として参加を表明し、俺にはアンナとエマとソフィが付いた。
さて。
ここまでしてまで見たかったものが何かと言えば、
「よ、ようこそお越しくださった……お越しくださいました。どうぞこちらへ」
牧場から出された案内役は、奇しくもその牧場に引き取られたらしい兵士の息子のやんちゃ坊主だった。監督役ということか大人が一人ついていたが、そのせいなのか口調はだいぶマシになっている。
つい「久しぶりね」と言いかけてから『わたしが話しかけるとまたダメなんじゃない？』と口を噤んだ。代わりにアランが目を細めて。

「君か。まさか、こんなところで会うとはな」
「……はい。その節はすみませんでした。俺が考えなしだったと思います」
しゅん、となった彼はぽつぽつと引き取られてからのことを語ってくれた。
牧場での生活は両親の元で暮らしていた時の「平民としては比較的裕福な」それとは全く違った。朝は早く起きて仕事があるし、夜はさっさと寝ないと体力が回復しない。反抗的な態度を取ればすぐにどやされ、物理的な暴力が発生することも珍しくない。
他でもない腕っぷしによって上下関係を教え込まれた彼は牧場のスタッフが領主を褒めているのを聞き、食ってかかってまた殴られた。
腐って逃げ出そうとしたこともあったが、そんな彼を踏みとどまらせたのは意外にも羊たちだった。
「羊を見ていると俺の悩みが馬鹿らしくなってくるんだ……です。先輩達が言う『人は自分にできることをするしかないんだ』っていうのも本当なのかな、って」
「ご立派ですね」
素直で優しいシャルロットに言われるのは満更でもないのか、少年は照れながら

俺たちを案内してくれた。

「めー」

そして、出会った「それ」を見た瞬間、思考が内なる自分に乗っ取られた。

「小さい！」

「可愛いです！」

シャルロットと一緒に歓声を上げ、その白くて小さな生き物に釘付けになる。

そう。

どうしても見たかった、会いたかったものとは羊の子供だった。まだ生後一週間だそうで、母親羊と比べると何分の一かのサイズしかない。それでも羊は羊。むしろあまり外界に触れていない分、毛は白くてもこもこしており、どうしようもなく愛らしい。

動物を愛でる気持ちに男女は関係ない。俺としてもこれは素直に可愛いと言うしかなかった。

念のため触らないようにと柵越しなのが残念だったが、それがこっちを見たりそっぽを向いたり、とてとて歩いたりするだけで十分過ぎるほど楽しい。ついつい

しばらくの間、視線を外せないままにきゃあきゃあと声を上げてしまった。
なお、一緒に来たメイドたちは冷静だったかと言うと、
「ああ……っ！」
「可愛いです……！」
主人の手前、大きく声を上げるのは我慢していたものの、その分、恍惚としたため息がいくつも重なる。
余裕があったのはソフィやクロエなど公爵邸に住んでいる面々だけ。そんな彼女たちでさえ「可愛いですよね！」とテンションが上がっているのだから、その可愛らしさや推して知るべし、である。
こほん。
我に返ったらしいクロエはわざとらしくも可愛い咳ばらいをすると「喜んでいただけて何よりです」と微笑んだ。
「この子は事件の夜に生まれた子なのです」
そう言われるとなんとなく感慨めいたものがある。
いい日ではなかったので記念というのもアレなのだが、大変だったあの日にまた

別の形で頑張っていた命があったのだ。

子羊をつかず離れずで見守っている母羊も含めて「無事でよかった」と思わずにはいられない。

羊といえば、敵に占拠されていた牧場主やスタッフも無事だったらしい。殴られてボロボロになった者はいたものの、全員拘束されただけで殺されてはいなかった。羊もちゃんと小屋の中で大人しくしていてくれたので、大変なのは怪我の治療と穴だらけになった地面の埋め直しくらいだったとか。

「クロエさまはこの子の誕生を知ってらっしゃったのですか？」

尋ねると、少女は少し恥ずかしそうにしながら「ええ」と頷いた。

「あんな日でなければ近くで待機したいくらいだったのですが、残念ながら自室で無事を祈るのが精いっぱいでした。……あ、もちろん、リディアーヌ様やシャルロット様の無事もお祈りしたのですよ？」

「疑ってはおりませんのでご心配なく」

羊の怪我や病気、出産などに関してはできる限り情報を入れており、手の空いている時には様子を見に行ったりしているのだと言う。本当に羊が好きなのだとほっ

こりしてしまう。もしかすると母親に会いに行く口実も含まれているのかもしれないが、それはそれで構わないと思う。

クロードはそんなクロエを微笑ましそうに見守っている。悪くない雰囲気にも見えるが……？

「赤ちゃんって、本当に可愛いんですね……」

「シャルロット」

義妹の呟きには深い実感が籠っていた。『いや、人間の赤ん坊は羊ほど可愛くないと思うけど……』なんて本音はさすがに言えない。

母性本能をくすぐられればそう思うのも当然だ。俺としてはクロエから羊の出産がどういったものなのかを詳しく聞いて「うわぁ、苦しそう」という感情が先に来てしまうが。

セレスティーヌもシャルロットを文字通りお腹を痛めて産んだのだと考えると、義妹が無事で本当に良かったとあらためて思った。

「あ、あの、クロード様！」

羊を愛でたり出産話を聞くのが一段落したところで、次期領主代行の青年を呼び

留める声。

「大事なお話があるのですが、聞いていただけないでしょうか」

わかりやすく頬を赤くした少女は、想い人である青年だけをじっと見つめている。

くいくいと俺の袖を引いた義妹が「私達、ここにいていいのでしょうか？」と訴えてくるので「静かに見守りましょう」と答える。見られて困るのならこのタイミングで話を持ち掛けたりはしない。むしろ、この場所なら他の貴族にみられる心配はほぼ絶対にない。

大事な話というのが何かはもちろんクロードにもわかったのだろう。彼は真剣な表情で「ああ」と頷くとクロエの前に立った。

「……ずっとお慕い申し上げておりました。どうか、私を貴方の妻にしていただけないでしょうか？」

『言った……!?　言ったわよ、ねえ、クロエさまったらついに告白したわ……！』

自分に関係ない愛の告白を聞いたのはこれが初めてだ。

内心でテンションがものすごいことになりつつ、変な声を上げないように我慢しながらなおも見守る。

クロードも告白の準備はしていた。二人が両想いなら何の問題もないが、果たして。

「すまない、クロエ。俺には他に想っている人がいるんだ」

「……っ」

青年からの断り文句を聞いた直後、少女は複数の感情を一瞬で表した。

衝撃。怒り。悲しみ。理解。そして、諦め。

いくつもの感情を呑み込み、制御し、瞳に涙を浮かべながらも微笑んでみせる。

「薄々は感じておりました。貴方の気持ちが私に向いていらっしゃらない事は」

「クロエ。……本当にすまない」

同じところに住む親戚を振るなんて相当勇気がいるだろうに、きっぱり断ったクロードも偉い。

ここまでも十分に格好いい男だと思うが、彼は意を決したように顔を上げて宣言した。

「本当は俺の誕生日に告白するつもりだった。だけど、こうなったら今、俺の想い人を告げさせてもらう」

まさか、この場にその人物がいるのか。
本当にシャルロットだったりするのだろうか。俺はそうなった時に妹の背中を押しだせるよう、彼女の手を握って逃げられないようにした。
そして、青年がゆっくりと「想い人」のところまで歩いていく。
彼が歩き出した方向は、こちら。目が合いそうになって『え？　まさか、そんなはずないわよね？』と思っていると、彼は俺のすぐ横を通り過ぎて、傍に控えていた一人の女性の前で止まった。
服のポケットから腕輪が取り出される。
表面に施された精緻な装飾は、綿毛と羊を意匠化したもの。嵌まっている石は彼と彼女の瞳の色を表す二種類。
「ソフィ。君の事を愛している。どうか、俺の妻になってくれないか」
どうにかソフィを引きぬいて家に連れて帰れないか密かに考えていた俺は『なんですって……!?』と内心で大きく悲鳴を上げた。

束の間の平穏2

滞在日数が少なくなってきたクロード・シルヴェストルの誕生パーティーが屋敷に住む一族および使用人を招待客として公爵邸内のホールにて執り行われた。

幸運にも非番だったメイドや衛兵たちも身の丈に合わせた晴れ着を着こみ、なかなかもらう機会がないだろう招待状を手にしてホールへと集まってくる。入り口で招待状を確認する上、みんな顔見知りなので不届き者が潜入する心配もほぼない。

パーティー中は無礼講に近い「ある程度崩した態度でも多目に見るよ」という取り決めであり、料理や飲み物も人数に合わせて大量に用意されている。

俺は催事用の黒いドレスを纏ってパーティーへ参加した。

好みの関係で赤系と黒系のドレスは何着も持っている。もちろんデザインは一つ一つ別だ。以前のドレスとの差別化を図りながら季節に合わせた作品を複数作り上げる職人たちには頭が下がる。

なお、アンナとエマはいつも通りのメイド服である。

どちらか一人いれば十分なので、話し合って一人はドレスで参加すれば……と提

案したのだが、

「パーティーは苦手ですので職務に専念いたします」

「専属の私がパーティーに現を抜かすわけにはいきません」

と、両方から辞退されてしまった。

そして、公爵邸での生活をサポートしてくれていた三人目のメイド――ソフィは使用人ではなくパーティーの主賓として参加している。

ほんのりと茶がかった赤色のドレス。明るさを抑え目にした清楚な一品は、急な話だったのもあって私物を流用したものらしい。地味な印象ではあるものの、ソフィの落ち着いた雰囲気には良く似合っている。

俺が黒を選んだのはなるべくソフィの印象を喰わないためだ。紅色で目立つ髪も編むことで見た目のボリュームを落としている。

ただ、要らない心配だったかもしれない。

礼服姿のクロードの横に佇む彼女の笑顔からは幸せがにじみ出ている。左腕に着けられた求婚の腕輪も明かりを反射して目に美しい。

聞けば、ソフィは伯爵家の三女なのだとか。それなら礼儀作法もある程度できる

だろうし、家柄的にも悪くない。実家からの承認はまだだが「反対されるようでしたら縁を切ります」とのこと。

きっぱりさっぱりしていて気持ちがいい。

「あらためておめでとう、ソフィ。クロードも」

会場に人が増え、パーティーの開始時間が近づく中、俺は彼女に声をかけた。

「ありがとうございます、リディアーヌ様」

支度にはそれほど時間がかからないと言ってお昼までは普通にメイドをしてくれていた（休んだら、と言っても聞いてくれなかった）彼女は、仕事中の控えめな笑顔とは少し違う、恋する女の笑顔で応じてくれる。

すると、二十歳になった本日の主役が苦笑する。

「リディアーヌ。俺への祝福はついでかい？」

「そんなことはないわ。ただ、クロードは誕生日のお祝いだけどソフィは恋愛成就のお祝いだもの。だから、ごめんなさい」

「ああ。リディアーヌにとってはソフィも大事なメイドなんだな」

親戚同士のじゃれ合いとはいえ、笑って許してくれるあたり懐が広い。

愛しの女性に結婚を取りつけられたのだから当然か。

あの後。

急な告白を受けたソフィは目を丸くし、口へ手をあてて硬直した。

落ち着くのに要した時間は数秒。

赤くなり始めていた頬さえも元の色へ戻して嘆息し、

「……冗談はおやめください、クロード様。私はあくまでも公爵邸の使用人。断る言い訳に使われるのはクロエ様が可哀想でございます」

咎めるような淡々とした響きは、会ったばかりの俺を甲斐甲斐しく世話してくれた心優しい彼女にしては少々「冷たすぎるのではないか？」と思えるものだった。

発言は間違っていない。

主人と使用人の恋は珍しくない。世話される側と世話する側。敬意が親愛に、親愛が恋愛に変わるのはある意味自然なことだ。だからこそ女性貴族の仕事としてメイドは人気があるし、若い貴族には同性の使用人が宛がわれることが多い。

道ならぬ恋とまでは言わないが、
「公爵家の利益を考えれば他家から嫁を取るか、家業を良く知る一族の女性を娶るべきです」
他家との繋がりと、家業の安定。
両方を放り捨ててまで選ぶメリットがない……というのは、忠誠心の高い従者としては当然の説得だ。
しかし、クロードは折れなかった。
真っすぐな瞳を向けたまま「冗談なんかじゃない」と答えたのだ。
「家業なら君だって知っているはずだ。食事の際の報告をいつも熱心に聞いているし、視察の手伝いにもよく志願しているだろう？」
「それは、単にメイドとして」
「よく仕えてくれているのは知っている。だから、君なら家を第一に考えてくれる。それに他家の女性と言うのなら君だってそうだろう？」
「それは……っ、そう、かもしれませんが」
反論を封じられたソフィは言い訳めいた言葉を紡ぎ、半歩の距離を後退した。

視線を下ろすことでクロードから表情を隠す。
ただ、身長の低い俺には彼女が真っ赤になりながら言葉を探しているのが丸わかりだった。
『なんだ。ソフィったら脈ありじゃない』
さっきの理屈は自分自身を納得させるための方便か。
「私とクロード様では釣り合いません」
「釣り合うかどうかなんて考えなくていい。僕が相手じゃ不満か、そうでないか。それだけを聞かせて欲しい」
いや、格好良すぎないかこの男。
なかなか言えることじゃない。前世で男をやっていた俺にはよくわかる。
彼の場合、女を落とすために適当言ってるということもないはず。火遊びがしたいのなら証人が大勢いる場所でメイドを口説いたりしない。
逃げ道を塞がれたソフィは唇だけを何度か動かし、やっとの思いでまた答えた。
「今まで、そんな素振りなさらなかったではありませんか」
これにはクロードも反論しない。

「迷惑になると思ったからだよ。……本当は、不自然にならないように気を付けながらずっと見ていた。二十歳の誕生日まで君が独り身だったら告白するつもりだったんだ」

学園を卒業し、家の仕事にも慣れてくる時期。

将来の展望を見据えた上で共に歩く女性を決められる頃合い。

「いつから、ですか？」

「初めて会った時から、かな」

気づけばソフィはぽろぽろと涙を流していた。

彼女のそんな表情は一度も見たことがない。それはそうだ。仕事上の主にはこんな姿は見せられない。

泣いて、泣いて、彼女はこくん、と頷いた。

「……はいっ。一生お仕えさせてください、クロード様」

まるで劇の一場面のようなやりとり。

俺を含むその場にいた他の面々は半ば呆然となりながらも、想い合う二人に、そしてクロードの結婚相手決定に大きな拍手を送った。

パーティーは順調に盛り上がっている。

使用人も一緒の会場とはいえなんとなく住み分けはされていて、入り口に一番近いあたりから平民の男、平民の女、メイドや執事などの（主に貴族である）使用人、そして公爵家一族といった具合。入り口の方からはいい感じに楽しんでるっぽい大きな声が聞こえてくる。

この機会に別の恋がさらに芽生えたりとかもあるかもしれない。

始まってからしばらくソフィ（＋クロード）は色んな人たちから入れ替わり立ち代わり挨拶をされて忙しそうだった。

二人の結婚は既に一族からの承認を受けている。

反対した者との話し合いもあったがなんとか解決した。特にブリジットは「そんな地味な子じゃなくても」みたいなことを言いだしてクロードを怒らせたらしい。一時は「認めてくれないなら家を出る」という発言まで飛び出したとか。

なお、メイド以下使用人はほぼ全員が「めでたい！」と肯定的だった。同僚や

下の者の方がメイドとしてのソフィの働きを良く知っていたのだろう。
「クロードは聞いた？　ソフィもね、初めて会った時から好きだったんだって」
「り、リディアーヌ様！」
ようやく挨拶が終わって二人がひと息ついたところで再び声をかけにいく。
一緒にいる時間に聞いた惚気話を教えてやると、クロードは酒のせいで赤くなった顔を「聞いたよ」と頷かせた。せっかくの端正な顔立ちが若干だらしないレベルに蕩けている。
『なんだ。もう話してあるなら慌てなくてもいいのに』
「一目惚れ同士、何年も想い続けていたなんて素敵じゃない」
「本当だね。これは運命だったのかもしれない」
「クロード様！　リディアーヌ様も、もしかして酔ってらっしゃいますか？」
「残念ながら素面よ。お酒は大きくなってからと決めているの」
周りで美味そうに飲まれると「もう飲んじゃおうかな」という気分になるが、ここは我慢である。
「我慢する代わりに上等なお酒を買い込んで取っておくわ」

「家族や友人へのお土産にする分と自分用はしっかり分けておくのをお勧めするよ」
「お父さまはそこまで酒に魅入られてないと思うけれど、忠告をありがたく受け取るわ」
父への土産としてももちろん買うつもりだ。娘が買ってきた酒なんて銘柄が何でも喜んで飲んでくれるに違いない……ああ、うん。自分用は絶対に隠しておこう。間違って全部飲まれそうだ。
「そうそう。二人にわたしからプレゼントがあるの。……アンナ」
「はい。こちらはクロード様に。それからこちらはソフィ様へ」
手のひらに乗るような小さな包み。手製の品物をアンナに頼んで包装してもらったものだ。
店の商品ではないため、包みからは何だかわからない。二人は興味深そうにそれを眺めた後で開けてもいいかと尋ねてくる。
快く了承すると包みがゆっくりと解かれて、
「これは……魔石のアクセサリー、ですか？」
「魔石は魔石なんだろうけど、質感が少し違うな。リディアーヌ、これは？」

「それは確かに魔石よ。ただし、素材には羊の角を使ったの」
形状はビー玉を少し潰して楕円にした感じ。茶と白が混ざりあった不思議な色合いをしている。
魔石の素材は一本の羊の角を分割して形を整えたもの。
友人たちへのお土産としても渡すつもりの品と同じ仕様。前から考えていた「友好の証としての贈り物」を兼ねており、少し特殊な魔法を施してある。
「その魔石に魔力を籠めると、近くにある同じ魔石を探して光で示してくれるの」
元が一本の角だったお陰か上手く魔法が馴染んでくれた。
これによって似たような品を偽造したとしても判別が可能。かなり近くにいないと駄目だが、有事の際の人探しにも使えるかもしれない。
「二人の場合は、お互いが今どこにいるかを確認するのにも使えるんじゃない？」
「あ……っ！」
ソフィが口を大きく開き、慌てて手をあてて隠した。
愛しい相手が近くにいることを確認しあえる。少々ロマンチックすぎる気もしたが、どうやら気に入ってもらえたらしい。

深いお辞儀と共にお礼の言葉が俺に向けられる。
「ありがとうございます、リディアーヌ様。大切にいたします」
「こちらこそありがとう。邪魔じゃなかったら使ってあげて。……要らなくなった時は粉々に砕くのだけを忘れないでね」
小さい品なのでピアスでも指輪でもペンダントでも加工は簡単だ。なんならナイフとかに埋め込んでもいい。
照れ隠しに壊してもいいと告げると「壊したりしないよ」と言ってもらえた。
と。
「リディアーヌ様。私にはいただけないのですか？」
白いドレスを着たクロエが若干拗ねた感じで声をかけてくる。
「求婚を保留にされた女にはお祝いは早いということでしょうか」
絡むなよ、ひょっとして酔ってるのか？
……などとはもちろん口には出さない。彼女はクロードたちが幸せになった分、若干割を喰った形になった。飲まなきゃやってられない部分もあるだろう。
「クロエさまの分も一応用意してありますが……」

「ではください」

「意気揚々と魔石を使ってクロードさまを探しに行ったらソフィがいた、ということになりかねませんが、それでもよろしいですか？」

そう言うと急に微妙な顔をして「……やっぱり止めておきます」と首を振った。

「クロエさまには正式に結婚が決まり次第、なにか別の品を贈りますね」

「そうしていただけると助かります」

クロードに振られた挙句、そのクロードが想い人と結ばれるのを見せつけられたクロエ。

三日くらい部屋に閉じこもっても許される状況だったが、彼女はめげることなく「私は第二夫人でも構いません」と言ってのけた。

これについてはクロードも予想していなかったらしく断り文句が出てこなかった。貴族は二人以上の配偶者を持つことも割とよくある。法律や社会通念で逃げることはできず、ここで息子が大事で仕方ないブリジットが割って入った挙句「いいじゃない」とまさかの賛成。

結果、クロードは「まだソフィとの結婚も済んでいないから」と「保留」にする

のがせいいっぱいだった。
　それでも、とりあえずクロエが学園を卒業するまで――約四年は引き延ばせる。それだけあればソフィと結婚するには十分すぎるし、上手く行けば子供だってできるかもしれない。
「ソフィ。クロエさまが外堀を埋めてしまう前に地位を確立しておくのよ？」
「心得ております。クロード様のためにも第一夫人の座は守り通そうと思います」
　ソフィはクロードが他の妻を持つことに反対しなかった。
　むしろ「クロエ様でしたら歓迎します」とまで言うほどだった。確かに、クロエは他の令嬢と違ってクロード自身が目当てだから我が儘放題はしないだろうし、羊にも愛着があるので実務面でも役に立つ。
　クロードもクロエのことは別に嫌いではない、むしろソフィがいなければOKしていたかもしれない程度には好きだったらしく……まあ、なんというか四年後には「リア充爆発しろ」というような結果が訪れるだろう。
　家格的には「伯爵家の三女」と「平民の両親から引き取られた公爵家傍系の娘」。どっちが第二夫人でも問題ないくらいなので、夫に愛されているソフィが第一夫

人で落ち着きそうである。

「……でも、残念だわ。できればソフィを引きぬいて家に連れていきたいと思っていたのに」

「申し訳ありません。そのご希望には沿えませんが、お帰りになられるまではしっかりお世話させていただきますので」

「ありがとう。結婚の準備が滞らない程度で構わないから、よろしくね」

こうして懸念だったクロードの結婚問題も片付き、俺たち兄妹は無事に（？）王都帰還の時を迎えることになったのだった。

兄妹の帰宅

「長い間お世話になりました。我々兄妹を快く迎えてくださった事に感謝致します」

帰りの馬車は荷物でいっぱいだった。

持ってきた品のうちの何割か――贈ったり消費した分のスペースにはお土産が詰め込まれている。荷物の余裕はあまりないものの、帰りの道中でもいくらか増えるだろう。

帰ったら帰ったで荷物の整理が大変そうだ。

「とても楽しい時間だったわ。羊に会えなくなるのが寂しいくらい」

見送りには屋敷の使用人が大半以上出てきてくれた。

笑顔の者もいれば泣いている者もいる。大袈裟ではあるが、歓迎してくれていたことがわかってなんとも嬉しい。彼らにも心地良く過ごさせてくれたお礼としてちょっとした贈り物をした。

一族からはジェラールとブリジット夫妻、祖父にクロード、それにクロエ。送別会は昨夜賑やかにやってもらったので今日は親しかった者だけが出てきてくれた形

だ。ソフィはメイドとして参加している。彼女には荷造りまで手伝ってもらった。本当に引き抜けなかったのが惜しい。その分、クロードと幸せになって欲しい。

「機会があればまた、是非伺いたいと思います。その時も快く迎えてくださると嬉しいです」

到着した時はだいぶ緊張していたシャルロットも笑顔だ。

精神的にぐっと成長したように思う。令嬢たちから睨まれなくなったし、ブリジットの態度も軟化した。怖い思いをさせてしまったのは残念だが、あれ以来魔法のコツを掴んだのかどんどん上達中だ。

和解後はクロエと仲良くなったらしく、笑顔で握手を交わしていた。

「リディアーヌ様、それにシャルロット。また会えるのを楽しみにしています」

「はい。クロエ様もお元気で」

クロエは呼び捨てなのにシャルロットは敬語なのか？　と思ったら当人が「年上の方ですから」と譲らなかったらしい。義妹らしい律義さだ。

俺は「ふうん」と二人を見て、

「クロエ。わたしとはもう親しくしてくれないのかしら？」

「……まさか。リディアーヌはお守りをくれなかったから、そのお返しよ」
不敵な笑みが返ってくる。そのまま睨み合った後、どちらからともなく笑った。
「次に会えるとしたらクロードとソフィの結婚式かな」
「ああ。アラン達にも是非出席して欲しい」
アランの言葉にクロードが深く頷く。
結婚式をどうするかはまだはっきりしていない。公爵邸でやるのか、それとも王都で行うのか。ソフィの両親は参加してくれるのか等々。
我が家を使ってくれれば俺たちも参加しやすいし出席者も集まりやすい。その辺りは保護者間で話し合って決めることになるだろう。
「いざとなったら空を飛んででも駆けつけるから安心して」
「リディアーヌ様。それは危険ですのでお止めください」
半分冗談のつもりで言ったらソフィから真面目な顔で言われてしまった。
昨日もさんざん話したというのになかなか言葉が尽きない。ある程度別れを惜しみあったところで区切りを知らせるようにジェラールが進み出てきた。彼は俺たち三人、特にアランを見ながら言ってくる。

「本家の子供達が健康かつ立派に育つ事を祈っている。……そして願わくば、領地運営をこのままクロードに引き継げれば良いと思う」

『ジェラールさまはなんというか、素直じゃないわね』

クロードに仕事を継がせたい、というのは「アランは領主の仕事にまで出しゃばるな」という意味にも取れるが、裏返せば「アランに父親の後を継いで欲しい」ということでもある。継承に失敗してこっちへ来るなよ、という彼なりの激励だろう。

真面目な人なのだろう。公爵邸の主としても領主代行としてもちゃんと務めていたのに、余計な策を巡らせたりして来なかったせいか印象が薄くなった。

あとは祖父に遠慮していたのもあるかもしれない。

「長いようで短い時間だった」

その祖父は最後に声をかけてきた。

「叶うなら来年の春になるまでこちらに居て欲しいものだ」

「お祖父さま。それじゃほとんどまるまる一年じゃない」

くすりと笑って言うと、彼は真面目な顔をしたまま答えて、

「良いではないか。十年以上もお預けを喰ったのだぞ」

「だったらもっと話す時間を作ってくれればよかったのに」
「そんな気恥ずかしい真似ができるか」
話したいことはたくさんあっただろうに、こちらからお誘いをかけた時以外はほとんどアプローチをかけて来なかった。
男だから、年上だからみっともないという話ではなく「気恥ずかしいから」というのが可愛らしい。
気にしないで好きなだけ構えばいいと思うのだが、世代が違いすぎるとどうしても気遅れしてしまうことはある。高校生時代に相手をした姪っ子だって（性別の差を除いても）別の生き物だった。貴族である祖父の場合には猶更だ。
俺は「仕方ないわね」と苦笑し、彼の右手を両手で取った。
「また会えるわ。それまで長生きしないと駄目よ、お祖父さま」
「……おお」
目を見開いて感動された。ならば、と俺は義妹を振り返り声をかける。
「ほら、シャルロットも」
「え、ええと。……でも、いいのでしょうか？」

「悪いわけないでしょう。ほら」
呼びかけられたシャルロットは遠慮がちに近づいてきて、見様見真似で祖父の左手を取る。
「お祖父様。今後のご健康をお祈りしております」
「……ああ」
深い息を伴う返答と共に瞼が伏せられる。
「お、お祖父様!?　どこか悪いのですか!?」
「ただ感動して泣きそうになってるだけじゃないかしら」
「……リディアーヌは口が悪いな。だが、正解だ」
涙を堪えきったらしい祖父は再び目を開けると苦笑した。
「また会おう。リディアーヌも、アランも……シャルロットも、な」
「っ。……はいっ！」
来た時と同じく三人で馬車に乗り込み、動き出した後は窓から手を振って別れを告げた。
丘の下、街中では住人達が列を成していた。警備強化に伴い増員されている衛兵

たちが「これぱっかりは厳しくしすぎるのもなあ」という顔をしながらも整理に四苦八苦している。そんな中でも歓声を上げ、手を振り、拝み倒してくる人々の姿に気持ちが温かくなる。

「この中にも純血派が混ざっているかも、と思うと複雑ね」

「何もしていない民に罪はない。平民との付き合い方については今後より一層考えていく必要があるな」

「いい方のほうがずっと多いのですから、必要以上の悪意が向けられないようになるといいのですが……」

裏で『何者か』が糸を引いているかもと思うとさらに気分は複雑になる。

その何者かが『教会』とやらであるとは限らないのだが、こそこそと安全圏から策を巡らせられるのは癪だ。叩き潰してやるから隠れてないで出てこいと言いたい。

まあ、その辺りはひとまず大人たちに任せるとして、俺たちは帰ってから遅れた分の勉強を頑張らなければならない。

勉強時間を増やそうにもあっちこっちに出向いたり、あるいは人を招いたりして

お土産を渡したりもしないといけない。両親に話したいこともいっぱいなので物凄く忙しくなりそうである。

ひょっとしたらクロードとソフィの結婚式まであっという間なのではないか。式をどこで行うにせよ出席すれば祖父にも会えるだろうし、約束は意外と早く果たせそうだ。

「もう少し気軽に行き来するためにも、なんとか街道を整備できないかしら」

街を抜けた後「またしばらくこの揺れを味わうんだな……」と思いながら呟く。

「リディ。それは明らかに個人で行う事業じゃない」

「もちろんわかっているわ。でも、土属性持ちをたくさん集めたらいけそうな気がしない？」

形状さえ正確に分かれば石畳を魔法で作ることは可能だ。おそらく水はけのために溝か傾斜がつくのが厄介だが、コツコツやれば結構な数を作れる。

「幸い公爵家にはたくさんいるし、王都までの道だけならなんとかなるかも」

「全ての石を切り出すよりは楽だろうけど、魔力がいくらあっても足りないな。確かに、ここから王都までの交通を整備できれば今まで以上に物資の運搬も捗るんだ

が」

「今までやっていないのはお金がたくさんかかるから、なのですよね？」

シャルロットも話に入ってきた。こくんと笑顔で頷いて、

「魔法で解決しすぎると石工の仕事も奪ってしまうしね。用意するにしても何分の一かが限度かしら。……ああ、一定品質の石材を作り出す魔道具なら作れるんじゃない？」

土属性と親和性の高い宝石――トパーズとか？　を使って上質な魔石を作ればある程度魔力効率は高められる。

これなら土魔法の腕に関わらず魔力さえあれば誰でも参加できるので、魔力の余った使用人に少しずつ作らせたりもできそうだ。

意外といけるんじゃないだろうかと思いながら兄妹に説明すると、二人は顔を見合わせて、

「上等なトパーズを魔石化してその上魔道具にするのか……費用がかかりすぎてなかなか出てこない発想だな」

「自分で魔道具を作れるお姉様ならではですね」

じゃあまずはトパーズを魔法で作ればいいんじゃないかと提案したら「何を言っているのかわからない」という顔をされた。

幸い、帰りの道中で敵に襲われることはなかった。

公爵領にいる間は向こうとしても動きづらいだろうし、王都へ近づくにつれてリスクが上がる。その辺りを考慮したのか、単に実働部隊が足りなかったか。次の作戦を考えている途中なのか。

護衛たちもさすがにぴりぴりしていたし、俺たちも襲撃の可能性を思い浮かべずにいられなかったせいか、王都が見えてきた時にはほっと息を吐いてしまった。

「なんだか物凄く久しぶりに感じるわ……」

「公爵領に比べるとこちらの空気は少し複雑なのですね」

「向こうの澄んだ空気に慣れてしまったからね。しばらくは違和感があるかもしれない」

馬車の一団は大通りを堂々と進んでいく。公爵家の兄妹が無事帰還したことは今

日のうちに王都中に――おそらくは黒幕の耳にも届くことだろう。
それはさておき、
「良かった。屋敷は変わりなさそう」
戦闘の跡もないし、庭が荒れ果てていたりもしない。移動を含めても三か月弱なのだからそう変わられても困るのだが。
「お父様とお母様はお元気でしょうか」
「二人共見た目以上に丈夫だし、大丈夫よ」
馬車が敷地内に停車するとまず、メイドたちによって俺たち三人が馬車の外へと導かれた。
荷物を下ろしたり運んだりは使用人の仕事。早く両親に顔を見せて欲しいと言われ、屋敷の入り口へと足を向ける。
歩いているうちに玄関の扉が開き、そこから両親が顔を出した。
『ほら、やっぱり元気そう』
父は仕事を休んだのだろうか。アランとの念話で到着日はわかるし、あの人がやりそうなことだ。というか待ちきれなかったのと久しぶりに会えて嬉しいのが一目

見ただけで伝わってくる。

養母の方は――元気そうではあるものの、別れた時とはだいぶ見た目が変わっていた。

隠しきれないほどお腹が大きくなっている。身体のバランスも変わるはずだし何より重いはずだが、それでも俺たちを見て微笑むとゆっくり歩を進めてくる。

「お父様、お母様っ！」

シャルロットが早足になった。転ばないようにスカートを軽くつまみ、さらにスピードを上げるとほとんど小走りで二人のところへ向かっていく。アニエスがもしもの時に支えられるように慌てて追いかけていった。

幸い、義妹は金色の髪を乱しながらもなんとか転ばずに到着。

ホームシックだったのかもしれない。軽く涙を浮かべながら両親を見上げ、そしてセレスティーヌの胸へと飛び込んだ。

勢いはそれほどついていなかったらしく、養母も驚くことなく娘を抱き留める。

「お帰りなさい、シャルロット。よく無事に帰ってきてくれましたね」

「ただいま戻りました、お母様。……また、お母様に会う事ができて本当に嬉しい

です」

母娘の抱擁は一分近くも続いた。

その間に俺とアランも到着。兄は父と無言で視線を交わし合うとシャルロットたちの邪魔をしないようにただ待つ。

ようやく身を離した時には義妹も泣き止んでおり、セレスティーヌもそっと涙を拭ってから俺たちへと視線を向けてくる。

『たち、っていうかお兄さま無視されてない、これ？』

「よく戻りました。……リディアーヌ、それにノエル。危険を顧みずシャルロットを救い出してくれたこと、心から感謝します」

ほら。

いくら義理とはいえ母親に放置されるのはアランも複雑なんじゃなかろうか。まあ、その分は父が声をかけ始めてくれたのでそちらに期待しようと思う。

俺はセレスティーヌを見上げ、一礼してからにっこりと笑った。

「大切な妹を守っただけのことです。姉としては当然の役割かと」

彼女が「公爵家の女」として役割を全うしているのだとすればこれで通じるだろ

う。

どうだろう、と思って反応を窺っていると、義妹によく似た美女が浮かべたのは驚きの表情だった。

それから、噛みしめるような笑顔に変わって、

「そうですか。……そうかもしれませんね」

仲の悪い俺たちの挨拶はそれだけで十分だった。

第三章はこれで終了です。

何話か閑話を挟んだ後で次章に入りますが、いよいよストックがやばいのでまた数日お休みをいただくか、何日かおきの更新に切り替えるかもしれません。

一応第一話の前書きにも「不定期更新です」と書きましたし、速度についてはご容赦いただけますと幸いです。

閑話

母娘の語らい？

セレスティーヌとゆっくり話す時間が取れたのは、公爵邸から帰還した翌々日――それも夜になってからという、なんとも遅いタイミングだった。

こっちも「あのねあのね、お養母さま！　こんなことがあってね！」なんて柄ではないので、向こうの時間が空くのを待っていたらこうなった。ここまでの時間も養母は忙しい中、アランやシャルロットの話を聞いたり部下から報告を受けていたようで、決してサボっていたわけではない。

食事の際に差しさわりのない報告はしたし、父とは昨夜話す時間を作れたのもあって、無理に話をしなくても良かったくらいだ。

だというのに、あの女は譲らなかった。

「一人一人から話を聞かなければ全体像が見えて来ないでしょう？」

というわけで、俺は夕食や入浴も終わった自由時間に養母の部屋へと向かうことになった。

帰還の報を受けて屋敷に戻ってきたオーレリアが「私にも土産話を聞かせなさい」と割としつこく引き留めてきたが、彼女とはいつでも話せるから、ということでなんとか納得してもらった。

旅行中に作った魔道具をいくつか代わりに置いてきたので一晩くらいは遊んでいてくれるだろう。

なお、そのオーレリアは「母娘の団らんを邪魔したりしないわ」とついてきていない。団らんとかそういうのでは決してないのだが。

「アンナ、お土産は忘れてないかしら?」

「もちろんです。リディアーヌ様が『これだけは直接渡す』と仰っていましたから」

「……そんなこと言ったかしら。いえ、言ったんだけど」

普通に他の品と一緒に贈れば良かった。現物のチェックは使用人がやって当人には目録が行くシステムだから、注目されなければ何気なく消費される可能性もあった。その方が羞恥心というか「慣れないことをしてしまった」という想いは抱かず

に済んだだろう。

「さあ、覚悟を決めましょう。リディアーヌ様、帰ってきてからずっとそわそわしてたじゃないですか」

「そわそわなんかしてない……！　と、思うのだけれど」

微妙に自信がなくなってきて、答える声は尻すぼみになった。

落ち着かなかったのは事実ではある。ただ、それは早く話がしたいからではなく、むしろどんな顔をすればいいかわからなかったからだ。

俺は公爵邸でかつてのセレスティーヌの姿を知った。

祖父から話を聞いた後、クロードやジェラール、ブリジットとも話をした。彼らの語る養母像はおおむね祖父から聞いたそれと矛盾していない。

セレスティーヌ・シルヴェストルはその都度自分にできる仕事を必死に片付けてきただけで、悪女でもなんでもない。

納得してしまった俺は今までのようにツンツンした態度を取れなくなってしまった。だって、それではまるで素直になれない娘だ。まるでというかそのものかもしれない。それは困る。あの女相手にツンデレとか、少なくとも俺が得しない。

「まあ、でも、向こうもたぶん戸惑ってるはずなのよ。だからここで落としどころを作っておくのは悪いことじゃないわ」

思えば、出発前の思わせぶりな態度は「昔の自分についてあれこれ知られたら恥ずかしい」という感情だったのだろう。

俺たちの間柄では「私も昔は若かったので、色々と黒歴史もあります」などとはぶっちゃけられない。あの時点の俺がそんな話を聞いたら「今度はなんの策略だ?」と思うか「これは付け入る隙になるのでは?」と思ったに違いない。

だからセレスティーヌはさりげなく釘を刺し、それはたぶん、うまいこと効果を出した。

状況についてあらためて確認しながら歩いていると、アンナが小さくため息をついて、

「本当に、お二人とも素直じゃありませんよね」

「もう、アンナ。そういうのじゃないったら」

「はいはい。そういうことにしておきます」

アンナはどんどん意地悪というか、俺のあしらい方が上手くなっている。今では

もう本当に「仲のいい姉」のような関係だと思う。そんな彼女との時間が心地良く、幸せに思える。

「オーレリアが屋敷にいられる日を狙ってお休みを作るから、アンナも休んでね」

「はい。ありがとうございます」

笑って答えるものの、アンナの表情は「自分の勤め先がブラックだと気付いていないOL」のようだ。

帰ってきてからも彼女は働き通し。俺の分の荷物はアンナかエマでないと細かい仕分け指示が出せないので頼りきりになってしまっている。しかし、俺が自分でやろうとすると「のんびりしていてください」と怒られる。貴族というのはなんとも厄介なものである。

今日までで荷物の整理もほぼ終わったので、まずは一般メイドであるエマに休暇を与えなければならない。アンナの仕事を代われるのはエマか、ぎりぎりでオーレリアだけなので、アンナが休むには最低でもどちらかが暇していないといけない。

「やっぱりソフィを引き抜きたかったわ……」

「それはもう何回も聞きました」

などと言っているうちに目的地へと到着した。
ノックをすると、いい加減慣れ親しんだ養母の専属から返答がある。入室すると、セレスティーヌはマタニティのゆったりとした寝間着に身を包み、椅子にその身を預けていた。
「こんばんは、お養母さま」
「ようこそ、リディアーヌ。さあ、遠慮せず座ってください」
向かいに腰かけるとすぐにお茶の準備が始まる。手に包みを抱えているアンナは動けなかったが、たったの二人分だし養母の専属は優秀なので問題ない。
「その包みはなんでしょう?」
「お養母さまへのお土産です。特別な品なので直接見ていただこうと思いまして」
「そうですか」
捉え方によっては毒を盛ったとも取れる言い方だが、返ってきたのはあっさりとした言葉一つだけだった。
アンナが贈り物をテーブルへ置き、包みを解く。
実のところ、お茶の準備が進む中で出すものでもないのだが……。

「……これは」

珍しく養母の表情が驚きの色に染まったのを見て、俺は「どうだ」という気持ちになった。

「思い出のお酒だと窺ったもので、何本か持って参りました」

「残りはリディアーヌ様のお部屋にひとまず保管しております」

特別なお土産として持ってきたのはとある銘柄のワインだ。それはかつて、セレスティーヌにとても近しい人物が好んで飲んでいたらしい。

祖父らからそれを聞き出した俺はアランやシャルロットには内緒でお土産リストにそれを加えた。

「ご不要でしたらわたしが将来的に楽しみますが」

「いいえ」

きっぱりとした返答がやや食い気味に来た。

「ありがたくいただきます。……グラスを」

『って、さっそく開けるつもり!?』

使用人への指示を聞いてさすがに驚く。妊娠中はアルコールを控えるべき、とい

うのはこの世界でも通説として存在している。当然、専属は止めにかかるのだが、
「一杯だけなら問題ないでしょう？　せっかく娘が用意してくれたのだもの」
主人にそこまで言われては強硬に反対もできない。
コルクの栓が抜かれ、注がれたワインは深い紅色をしていた。何気なくじっと見つめていると「飲みますか」と尋ねてくる。
知らず唾を呑み込んでしまってから「いやいや」と首を振って、
「誘惑を向けないでください」
「特段、どうしても我慢しろというわけではありませんが」
「ここで負けるくらいなら向こうにいた時に負けています」
「そうですか」
頷いた表情がどこか残念そうに見えるのはきっと気のせいだろう。
グラスが傾けられると形のいい唇に深紅の液体が流し込まれていく。『なんていうか、絵になるわね……』。美女の飲酒姿というのは芸術的であり、同時に蠱惑的でもある。一口を飲んでグラスが離れた後のかすかに濡れた唇なんて特にそうだ。
俺は酒の代わりに紅茶を口にする。落ち着く味である。飲み物としてはお茶が最

強だと思っている俺だが、酒を飲めるようになったら価値観が変わるだろうか。

「……あの人はこのワインが好きでした。私は白の方が好きなのですけれど、二人きりの時はよく杯を交わしあったものです」

起動された盗聴防止魔道具をテーブルへ置きながら、いつになく感傷的な言葉が紡がれる。

大人の恋愛なんて俺にはわからない。ただ、話に付き合った方がいいように思って相槌を打った。

「どちらから告白したのですか？」

「お義父様から聞かなかったのですか？」

などと言いつつも、セレスティーヌは「あの人の方からです」と答えてくれた。

「もっとも、私の方も好意を隠せていなかったと思いますが」

「女の方から想いを告げるのは、やっぱりはしたないから？」

「違います。……ただ、告げる勇気がなかっただけのこと」

結婚を二度経験し、公爵夫人として十二分に活躍する彼女にも令嬢時代はあった。当時は今ほど優秀ではなかっただろう。

当然といえば当然の話なのだが、想像しようとしても上手くいかない。シャルロットが成長した姿を思い浮かべてようやくそれっぽい像を結ぶことができた。

「公爵邸にはお母さまの絵も残っていました。お父さまが向こうへ送ったのだとか」

「ええ。私には『残っているのは嫌なものだろう?』などと言っていました。私は気にしないと答えたのですが、アデライド様の姿絵は一つ残らず屋敷から消えました」

「お気に入りをこっそり隠しているのではないか、とも聞きましたが」

「場所を教えても構いませんよ」

微笑すら浮かべて言ってくるセレスティーヌ。いや、やっぱりこの女は怖い。知ってて黙っているのは優しさなのか、それとも「いざという時の切り札にするため」なのか。

「お父さまに怒られそうなので遠慮しておきます。もう会えないと思っていたお母さまに会えただけでも十分ですから」

「そうですか」

かすかに目を細めながら、養母はグラスの中のワインを飲み干した。

お互いに「部屋を残しておいてくださってありがとうございました」とか「絵を残しておけなくてごめんなさい」とかは言わない。柄ではないのはお互いに分かっていたし、そこまで配慮しないといけないほど仲がいいわけでもない。

空になったグラスをメイドに渡すと、セレスティーヌはティーカップを手にして、

「貴女がここまで成長するとは、正直驚いています」

「褒めても何も出ませんよ」

「知っています。放っておいても次から次に何かをしでかすことも」

急に雲行きが怪しくなってきた気がする。シャルロットを助けるために無茶した件は当然父からも叱られた。お説教から逃れるために義妹をダシに使うわけにもいかないので、こればかりはどうしようもなく。

一杯とはいえ酔っているセレスティーヌはいったいどれくらい厳しいのか、少々緊張しながら待っていると、

「今日は、小言は止めておきましょう」

「……お養母さま？　やはり体調が悪いのではありませんか？」

それとも明日の天気か。既に季節は夏を迎えている。急な雨はメイドたちにとっ

ても大敵だと聞いているから勘弁して欲しい。
と、咎めるような視線が俺に突き刺さって、
「私の体調より、むしろ心労の方を心配して欲しいものですね」
「小言は止めると仰いませんでしたか?」
「今のは小言ではなく、単に要望を述べただけです」
ああ言えばこう言う。しかし、セレスティーヌは確かにそれ以上は何も言ってこなかった。
「さあ、貴女が公爵領で見たもの、聞いたものを聞かせてください。初めての経験もたくさんあったでしょう」
「……そうですね。順を追って話すのであれば……」
それから俺は出発まで遡りながら旅の間のことを話した。
幸い記憶はきっちり再生できる。四苦八苦したのは必要な情報を省くことなく可能な限り時間を短縮することの方だった。
体調管理はできていると言ったものの、身重の彼女に無理はして欲しくない。というか伝えておきたい情報が多すぎる上、セレスティーヌも時々詳しい説明を求め

てくるのでとても語り切れない。

「お養母さま、続きはまた今度にしませんか？」

「仕方ありませんね」

紅茶を二回ずつお代わりしたところで今回の話はお開きとする。続きは互いの予定をすり合わせつつ、なるべく早いタイミングで行うことにする。

「わたしとしてはこんな面倒な話よりシャルロットとの時間を優先して欲しいのですけれど」

「シャルロットとは十分に話をしていますよ。これからも以前よりは時間を取れるはずです」

妊娠したせいか。

身体が重いのでなかなか外出はできない、と言えば「そこをなんとか」とは言われづらいし、あまり親しくない相手からの誘いは断れる。屋敷にいられる時間が長いから暇も見つけられるだろう。

「わたしにできることがあれば言ってください。重要でない手紙の代筆くらいならできるかもしれません」

「魔法で私の筆跡を真似るつもりですか」
くすりと笑って、セレスティーヌは深く頷いた。
「手が足りない時はお願いするかもしれません。貴女にとっても勉強になるでしょうから」
話をしているうちに俺たちの関係は「なんとなく」適当なところに落ち着いてくれた。
以前と変わったような、変わっていないような。ただ、どこか「すとん」と入ったそこは思ったよりも居心地が良かった。

遅くなりましたがたくさんのアンケート回答、ありがとうございます。
いただいた回答の結果を参考にしつつ、次章は少し急ぎ足にしつつ話の続きを追っていけたらなと思っております。
現状での次章の予定はリディアーヌ十一歳の誕生日からの王族キャラ追加、辿りつけたら年を進めた上でとある重要イベント発生といった感じです。

新しい服飾用品

「今日はよく来てくれた。其方の協力に感謝する」
「と、とんでもございません」
齢五十を数えようかというその男は、公爵――ジャン・シルヴェストルを前にひどく緊張していた。
彼は細工師。依頼していた服飾部品が完成したというので屋敷へ呼んだ。今日は成果物の確認および評価を行うことになっている。
屋敷の応接間。ジャンの隣にはセレスティーヌが座り、周囲はメイドと護衛兵、さらには護衛騎士が囲んでいる。
確かに緊張するのも無理はない。苦笑しつつ茶を勧めると、職人らしく気難しそうな男は恐縮しきった様子でティーカップを取った。
「では、品を見せてもらおうか」
兵士の一人が細工師の持ってきた包みを解き、中の品物を丁寧に取り出す。
危険物は同梱されていない。

次いで品物自体の確認が行われ、ようやくジャン達の前に『試作品』が置かれた。
「どうぞ、公爵閣下。奥様」
「うむ」
「ええ、ありがとう」
依頼していた品は三つ。
『ファスナー』に『ホック』、そして『スナップボタン』だ。一種類毎に大きさや形を微妙に変えて数点ずつ製作されている。デザイン画の段階でも思ったことだが、やはり非常に細工が細かい。
元のデザインは全て長女――リディアーヌが担当した。
当人にも実現可能かわからないというそれをジャン達は一度預かり、こうして職人に試作させた。果たして娘の考えたこれらは実用に足るのか。
（リディにも見せてやりたかったが、旅先では仕方ない）
帰って来るまで待っていては遅くなってしまう。
職人を遊ばせておくくらいならここで確認後、作り直しを命じるか量産体制に入らせるべきだ。息子のアランとは定期的に念話で話をしており、彼を通して判断は

委任されている。結果も同じようにアラン経由で伝えればいいだろう。

さて。

ジャンはまず『スナップボタン』を手に取った。

「小さいな。これが分離するというのか？」

それこそボタンほどの大きさの金属部品。

小さいので少々難しかったが、何度か試して外す事に成功。ぷち、と軽い音を立てて外れたそれを再び合わせて力をこめるとかちっ、と嵌まった。

コツを掴むとなかなか楽しい。何度も付けたり外したりしていると「旦那様」とセレスティーヌから釘を刺された。そう言う妻は大きさの違うスナップボタンをドレスのあちこちに当てて何やら思案している。どうやら用途を考えているらしい。

「実際には布に縫い付けて用いることになりますが、金属部分ではなく周囲の布に力を入れて外すことも可能ですか？」

「はい。金属ですのでボタン側の強度は問題ありません。取り付ける際にしっかりと縫い付けてやる必要はあると思いますが」

「これはどの程度で壊れるのだ？　回数、あるいは期間がわかれば知りたい」

「二千回ずつ試しましたが壊れませんでした。一日の付け外しは多くて十回程度と考えれば年単位で使えるんじゃないかと」

「ふむ。それならば悪くないな」

力任せに引っ張っても千切れたりせず、むしろ一定以上の力がかかれば外れる仕組み。

やはり最初に思い浮かぶのは外套か。風の強い日でも飛ばされにくくなるだろうし、脱ぎ切らずに前開けして作業する事もできそうだ。ボタンのように飲み込んでしまう心配がないので子供服にも使えるかもしれない。

少しセレスティーヌと話しただけで幾つもの用途が思いつく。

一つあたりの値段も思ったほどではない。

スナップボタンは「あり」だろう。妻と頷き合い、次に『ホック』を手に取った。

「こちらはスナップボタンよりも単純な仕組みですね」

爪のような形の部品を対になった「受けるための部品」に引っ掛けて用いる。受けの部品は形の違う爪状でもいいし、単なる輪のような形でもいい。

これは大きさと形の幅が広い。形も単純なので値段も安くできるという。

力の入れ方によっては外れやすいのが難点だが、逆に言うとコツさえ掴めば力がなくても外せる。

「女や子供は重宝するかもしれんな」

「ええ。リディアーヌによれば上の下着に用いると良いそうです」

女性の上半身用下着は上からかぶる形状が主流である。胸の補正が必要な場合はかぶった後でボタンを留め、胸を中へ収めるような形となる。

どうして知っているのかと言えばまあ、それは脱がせた経験があるからだが、それはともかく。

ごく小さなホックを用いて下着を固定できれば、より胸の部分の補正に特化した下着を用意できるとセレスティーヌは語った。加齢に伴う体型の乱れは女性全体の悩みである。これを解決できるとなれば大きな需要が見込めるだろう。

「ホックは大量に生産し、服飾工房へ流すべきでしょう」

「服の素材をまた一つ当家が握ることになるかもしれぬ、か」

なお、下着の固定に有効ということはコルセットにも応用できそうだが――これは大のコルセット嫌いである発案者（リディアーヌ）が聞いたら嫌な顔をしそうである。

「さて……そして、最後か」

敢えて最後に残しておいたのは一番の注目どころにして不安要素。

『ファスナー』。

細かい金属部品と細かい金属部品を細かい金属部品で纏めるという、「これでもか！」と職人の腕を要求したこの服飾部品は案の定というかなんというか、腕のいい職人に時間をかけさせてもなお、見た目から苦心の跡が窺える出来だった。

それでも一応、想定していた使い方はできる。手のひらほどの長さを引き上げる間に何度も引っかかるが、仕組みとしては実現可能な事がわかった。

職人によると、さらに時間をかけて試行錯誤すればより滑らかな物も作れるだろうとのこと。

問題は値段。一つ作るのにドレス一着分以上の金が必要と聞いてさすがにセレスティーヌともども遠い目になった。

大量に買えば安くなるかと言うと、これぱかりは技術料なので限度があるという。

「……むう、しかし惜しいな」

ジャンは試作ファスナーの一つを睨んで呟いた。

「旦那様。一着分や二着分ならまだしも、量産は現実的でないかと」
眉を寄せて穏やかな表情を少々崩しながら妻が言ってくる。
彼女の言う事は正しいのだが、やはり手放すには惜しい。ファスナーには大きな可能性がある。
……いや、別に用足しの手間を惜しんでいるだけではない。この部品があれば他の服、例えば女性のスカートだってデザインの幅が劇的に広がるだろう。
ドレスの脱ぎ着も楽になる。その分、よりデザインの凝ったドレスも作れるかもしれない。
（職人に作れぬと言うのならば、いっそ）
手の中にある「見本」を睨みながら、ジャンはもう一方の手に己の魔力を集中した。
彼の持つ土属性には鉱物に関する魔法も含まれる。金属製の細工物、それも現物がこの場にあるのならば「より精密で美しい形」を頭の中で再現する事ができる。
シルヴェストル公爵家は過去、傍系の王族を迎えた事もある由緒正しい家柄。その魔力量は道理を引っ込めるのに十分だ。

「これは……！」
「まさか」
公爵の手の中に生まれた光を見て、その場にいた一同が息を呑む。
一瞬後。光の収まった後、ジャンの手には試作品のファスナーと寸分違わぬ――いや、試作品よりも整ったファスナーが握られていた。
合わさった状態で具現化したそれを下ろしてみると、今度はかなり滑らかに動いた。
どうだ。
「オーレリア・ルフォールだけが抜きんでた使い手ではない。私とて土の魔法であればこのくらいはできる」
あの女が「リディアーヌの魔法教師」に収まったのが未だ気に食わないジャンは勝ち誇った顔で妻を見た。
賞賛を求められたセレスティーヌは困ったような笑顔で「お見事です」と言ってくれた。
「ですが、これはアランにはまだ荷が重いのでは？」

（訳：まさか貴方ご自身が魔力を消費して量産するおつもりですか？）

「……いや。一つ二つならともかく、実用的な量は難しいな」

魔法は上手く行ったものの、あの一回で魔力をかなり持って行かれた。公爵であり宰相でもあるジャンはもしもに備えるため魔力を温存しなければならない。ファスナーを作るためにたびたび消耗するわけにはいかない。

魔法の精密さから言って使用人には任せられない（オーレリアなら可能だろうが、彼女には魔力を使わせられない）。

となれば、

「いっそ公爵領へ送って事業の一つとしてしまうか？」

「悪くありませんね。羊毛等と一緒に送らせれば手間もかかりません」

ドレス一着分に相当する精巧な細工だ。まとまった数を作り、上手く売れればかなりの金になる。家と領地がさらに潤う事になるかもしれない。

（結局、三つとも利用価値あり、か。リディの提案は思った以上に有用だったな）

期待していなかったと言うと嘘になるが、駄目だった時に娘を慰める心づもりはしていた。

しかし、こうなるとむしろ大手柄だ。帰ってきたら目いっぱい褒めてやらなければ。

「ああ。これは良くやってくれた」

ジャンは笑みを浮かべると、使用人に指示を出し、一枚の書類を受け取った。

次いでペンを受け取り、さっと金額を記入する。

「今回の報酬だ。口止め料も含まれているが、労いの気持ちが大きい。受け取ってくれ」

「あ、ありがとうございま……こんなに!?」

細工師が目を見開いて驚くが、おかしな額ではない。

「正当な報酬だよ。この試作品にはそれだけの価値がある」

大まかな報酬額については前もってセレスティーヌとも話をしてあった。今回は「大成功」の場合の金額へ更に色を付けた。

書類――契約書にサインをすればその場で記載額が彼の物になる。

細工師は仕事一つの単価が大きく裕福な者も多いが、反面、材料や仕事道具にも金がかかるため収入が安定しにくい。平民の一家が贅沢をせずに暮らせば数年はも

つ額の報酬は役に立つだろう。

「それから、更に追加の仕事を頼みたい。スナップボタンとホックの量産、および精度を上げたファスナーの試作だ」

「後日、組合を通して正式な依頼を行います。仕様書および数量もその際に。ひとまずはファスナーの試作を行いつつ、量産の準備をお願いします」

「あ、ありがとうございます！」

スナップボタンとホックも安いと言っても公爵家基準での話。大量注文となれば工房が潤うのは間違いない。

数量と工房の許容限界によっては組合を通し別の工房にも依頼をかける事になるだろうが、どこまでできるかは彼の頑張りにもかかっているだろう。

（この者にも養うべき家族がいるのだろうな）

今回の仕事は他家の息がかかっておらず、仕事熱心で、かつ十分な腕を持つ無名の職人を選んだ。これまで大きな仕事の無かった彼にとって躍進の機会となるかもしれない。躍進の結果、彼の妻子が喜んでくれれば言う事はない。

貴族にとって平民とは替えのきく存在。

成果を出せなければすぐに他を探すし、万が一、家に反抗するようであれば躊躇なく排除するが、自分自身も親であるせいかジャンはどうにも平民を「ただの道具」とまでは割り切れない。

甘いと言ってもいい彼の気質を前妻――アデライドは好ましいと言ってくれた。

今の妻であるセレスティーヌも「信頼は信用を勝ち取る手段として有効です」と彼女なりに肯定してくれている。必要であれば非情な判断を下せる彼女のお陰でジャンは随分と助かっている。

（リディはきっと、私に似たのだろうな）

屋敷の兵へ定期的な差し入れを行っている長女。彼女もまたジャンに似て甘いところがある。この甘さは役立つ事もあるが、裏目に出る事もある。

到着してほんの数日のうちにアランから受けた見習い兵の不祥事は兵を管理する立場にあるジャンにとっても胸の痛い出来事だった。平民との関わり方、兵の管理方法についてこれからも考え、学んで行かなければならない。

頭が痛い。

国内にもだんだんと不穏の種が増えている。宰相としてそちらにも心を配らなけ

ればならない。

早く子供達が帰って来ないものか。

家族全員での食事に慣れているせいか妻と二人きりの食卓はどうにも寂しい。妻も食欲が安定せず、時には別々に食べる事も多いため猶更だ。

これではなかなかやる気が出ない。

アラン、リディアーヌ、シャルロット。大事な子供達の顔を思い浮かべたジャンは彼らの無事と早めの帰還を密かに祈った。

メイドと主と大浴場

「では、アンナ先生。ご指導をお願いします」
「からかうのは止めてください」
使用人教育に用いられる小部屋の一つにて、アンナは先輩メイド二人を前に緊張していた。何故なら今回はアンナが二人へ教える立場だからだ。
内容は「リディアーヌの入浴について」。
専属についてから――正確には死の淵を一度彷徨ってからずっと部屋の風呂を使っていた主人が先日、ようやく大浴場の使用を了承してくれた。
信用してくれるのは嬉しいし、専属以外のメイドを避けるのも「あんなこと」があった以上は当然なのだが、他のメイドが全く手伝えないとなると色々と不都合なのも事実。そこでまず、リディアーヌ本人とセレスティーヌの希望を元に二人を選んで入浴補助とすることになった。
選ばれたのは仕事ができて人格的にも問題ない者。必然的にアンナより勤続年数の長い先輩方である。

格上新人のオーレリアを教えるのと気分的には大差ない。
ちなみにリディアーヌは現在勉強中。傍にはエマが付いている。この指導のために代わってもらったのだ。
「私が教師役なのは今まで担当していからに過ぎません。教えるほどの事ではありませんし、先輩方ならすぐに覚えられると思います」
アンナが言うと、二人の先輩は首を傾げた。
「簡単に行くかしら。入浴は他の仕事とは勝手が違うでしょう？」
「目上の方の肌に触れる機会なんてあまりないもの」
貴族に入浴は欠かせない。
清潔でいる事は社交の初歩、大前提と言っていい項目だし、肌や髪は丁寧に世話してやればやるほど美しく長もちすると言われる。特に若い女性にとっては武器の手入れをするに等しい時間だ。
一方、入浴中は無防備になる。服さえ纏わない状態で複数人に囲まれるのだから、貴族、特に狙われる理由の多い上位貴族は警戒心を強く持つ。
少し手が滑って肌を引っ掻いただけでもクビにする理由になりかねない。

（そういえば、リディアーヌ様の入浴はみんな嫌がっていたっけ）

ふと昔の事を思い出した。まだアンナが専属ではなかった頃。普通に大浴場を利用していたリディアーヌは入浴の度にメイドへ文句をつけていた。髪の洗い方が雑だとか、石鹸の泡立て方が足りていないだとか。クビにしてやる、と言われた者も少なくない。

娘の要望を受けたセレスティーヌが素直にクビにした例は決して多くはなかったが、

「大丈夫ですよ。リディアーヌ様はとても寛容で大人しい方ですから」

初めて二人きりになった時から怒られた経験なんてほとんどない。こうして欲しい、とお願いされる程度だ。

これを伝えると先輩達もほっとしたように表情を緩めた。

「では、アンナ先生。何から始めましょうか？」

「先生は止めてください。……ええと、そうですね」

アンナはあらためてリディアーヌとの入浴を振り返って、

「リディアーヌ様。今日から大浴場へ移らせていただきますね」
さっそく翌日から先輩方の出番がやってきた。
「ええ、よろしくお願いね」
アンナの主人――リディアーヌ・シルヴェストルは美しい少女だ。
母親譲りの髪と瞳は一流の庭師が育てた薔薇、あるいは高級なワインを思わせるような紅。対照的に肌は白く透き通るように白く、普段から肉・魚の食べ過ぎを控え果汁よりも茶を好んで飲んでいるお陰か体型はすらりとした状態を維持している。
本人は「少し目つきがきついのよね」と気にしているが、下の者にさえにこりと優しく微笑みかける姿はまさに令嬢の鑑。品よく笑顔を作っていればきつい印象など吹き飛んでしまう
と、あらためて思いながら先輩方の挨拶を見届けたアンナは、三人と共に大浴場へと移動する。
「あそこへ行くのも久しぶりだわ」

「そうですね。もう二年近いんじゃないでしょうか」

主人の声音はいつもと変わらない。大浴場が嫌というわけではなさそうだ。

（とっても素敵なお風呂だもの）

初めて見た時、アンナは思わず歓声を上げてしまった。

シルヴェストル公爵家の大浴場は先々代の当主が一流職人に造らせたこだわりの空間だ。白を基調とした広い部屋。装飾を施された複数本の柱が天井を支え、軽く二十人以上が入れそうな大きな浴槽は総大理石。魔道具と繋がった天馬の像の台座からは絶えず温かな湯が注がれ、同量の湯が底面にある小さな穴から排水されることで循環が行われている。

循環した湯は浄化と過熱の魔道具を通って再び使われる。水量を微調整するために水を作成する機能も組み込まれた多機能な魔道具だけでもいったいいくらしたのか想像がつかない。

年に一度、職人を入れて本格的な手入れをしていること、公爵本人がこまめに強化の魔法をかけていることもあってガタが来る様子も全くなく、アランの代が終わるくらいまでは普通に使えるのではないかと思える。

「では、リディアーヌ様。失礼いたします」
「ええ」
脱衣所に着いたら一枚一枚丁寧に服を脱がせていく。
広いスペースだが、他の家人は一緒ではない。
掃除で湯を抜く時以外、大浴場はいつでも入れるようになっているが、日に一度の入浴の際は時間を決めて他の者と被らないようにする。貴族は同性の親子でも滅多に一緒には入らない。父である公爵は下手をすると赤ん坊の時も含めてリディアーヌの裸をみたことがないだろう。
「まあ……！」
「リディアーヌ様のお身体、あらためて見ても惚れ惚れいたします」
「ありがとう。でも、褒めてもなにも出ないわよ？」
恥ずかしそうに答えるリディアーヌだが、先輩達の気持ちもわかった。
公爵令嬢の身体には一切無駄がない。女性らしい身体の起伏はまだ出来あがっていないものの、普通ならあってしかるべき小さないらない脂肪が彼女にはない。まるでそうあるのが当たり前のように、絵画や彫刻のような美しい線を形作ってい

る。

羨ましい。

自分の身体と比べてそう思ってしまうのは無理もない話だろう。少なくともアンナは毎回思っている。

「リディアーヌ様は将来絶世の美女に成長なさいますね」

「そうね。お母さまに似たからきっと綺麗になるでしょうね」

リディアーヌは、容姿に関しては謙遜しない。

シャルロットやヴァイオレットに「自分より美人だ」と告げることはあっても、自分の容姿が整っていないとは決して言わない。他人から低く見られるというのもあるが、それ以上に生母――アデライドの美しさまで貶すことになるからだ。

しかし、そうしても嫌味ではないというか、たとえ嫌味だったとしても「彼女なら仕方ない」と思える独特の風格が彼女にはあった。

「あの、リディアーヌ様は何か特別な美容法を実践してらっしゃるのですか？」

入浴の際、担当するメイドたちは基本的に簡素な浴衣を用いる。

薄い生地なので透けるし、濡れれば体型も丸わかりだが……大浴場に入ったリ

ディアーヌは「相変わらず綺麗ね……！」と感嘆し、風呂の造りを一通り眺めた後はふっと大人しくなる。いつもと同じだ。世話をする間は真っすぐに前だけを見てよそ見をしない。

アンナの存在を忘れてしまったかのようだが、普通に話はしてくれるし、必要に応じて身体も動かしてくれるので、単に洗いやすいようにしてくれているのだろう。

そうして風呂用の椅子にリディアーヌが腰かけたところで、先輩の一人が尋ねた。アンナは「その質問は駄目だ」と思ったが、リディアーヌはくすりと笑って、

「化粧水や石鹸なんかはお養母さまが用意したものを使っているだけよ。特別なことと言えば、魔法で体型維持のおまじないをしているくらいかしら」

「魔法で、ですか？」

「ええ。美しい自分になれますように、って一日に何度か魔法をかけるの」

「なるほど。魔法を……」

先輩二人が「理解できない」とばかりにアンナを見てくる。

（思い切った質問をしすぎです、先輩）

内心で呟きつつ頷いて答えた。

「私達の魔力では足りませんし、失敗すると逆効果です。残念ながら同じ方法は使えないかと」
「そんな……」
「残念です」
「みんなも綺麗じゃない。そんなに悲観することはないわ」
「ありがとうございます」
女という生き物は美に貪欲な生き物。もっと上が欲しいのであって現状で満足とはいかないのだが……確かにアンナ達も貴族として恥ずかしくない程度の容姿は持っている。
過度な不摂生や病気、怪我などの影響がない限り、貴族はたいてい美しい。平民は個々のばらつきが激しいので、純血派の思想ではないが貴族と平民では種自体が違うのではないかと思う事がある。
「たぶん、それも魔法の力なのよ。無意識に危険から身を守っているように、綺麗で健康になろうとする力も働いているの」
「？？？」

オーレリアとリディアーヌの魔法談義に同席させられているアンナはともかく、先輩達はいきなり言われても良くわからなかったらしい。首を傾げる彼女達を見て「自分も昔はああだった」と懐かしく思った。

魔法防御は無意識の魔力行使説はそれほど有名ではない。

便利に使うために魔法を習っただけで理論に興味がなければ知らなくて当然だ。

とりあえずアンナに言える事は、

「リディアーヌ様の仮説が正しいとすると、高位貴族の方や王族の方はとてもずるいと思います」

湯で髪と身体を丹念に湿らせた後はまず髪を洗う。

髪が終わったら浴衣と似たような素材の帽子で髪を纏め、身体へ。用いるのはスポンジなどではなくアンナ達自身の手だ。それが一番肌を傷つけない。滑らかなリディアーヌの肌にまたも負けた気分になるが泣いてはいけないし、粗相をしてもいけない。

先輩達にはアンナが手本を見せながら少しずつ手伝ってもらう形にした。ぎこちないものの真剣に手を動かしてくれている。

リディアーヌも身を任せてくれているが……何か思いついたのか小さく呟いているのが聞こえた。
「シャワーがないとやっぱり不便よね。ガワさえ作れば後は魔石で水を作るだけだし、お父さまお母さまに提案してみようかしら？」
「リディアーヌ様、シャワーってなんですか？」
「ああ。お湯の出る蛇口を手で持って操作できるようにしたようなもの……かしら？　蛇口は形を工夫して、小さな穴がたくさん開いているような形にするのよ」
すると、湯が穴から雨のように降り注ぐのだという。ここまで言われたらアンナ達メイドには「ああ」と思い至るものがあった。
「じょうろの先のようなものですね」
「そういえばそれがあったわね。……あら？　だったらシャワーができていても良さそうなものなのだけれど」
「魔道具を作る方には馴染みが薄いからかもしれません」
魔道具を作るのは魔力の多い高位貴族が主体だ。彼らはお金が余っているか、製作した魔道具を売って金を稼いでいる。当然、使用人をふんだんに使えるので庭の

手入れなど自分達ではしない。
　一方、メイド達は園芸用品としてじょうろを知っているが、自分では魔道具なんて作れないため、どちらも「魔道具とじょうろを組み合わせよう」なんていう発想が出てこない。
「じゃあ、これも上手く行けば売れるかしら」
「公爵家の服飾産業からは離れますが、提案してみる価値はあるのではないかと」
「ありがとう。……でも、ホースの部分が作れないとあまり自由には動かせないのよね。いっそのことゴムも魔法で作ってしまおうかしら」
　今度は「ゴムって何なのか」という疑問が湧いたが、リディアーヌはこちらの問いには「内緒」と言って答えてくれなかった。
　何はともあれ、入浴自体は無事に済んだのでアンナとしては一安心である。
　ただ、
「気持ち良かったわ。……なんだか温泉に入りたくなってきたわね」
　湯上りに冷えた麦茶を飲みながら、リディアーヌが呟いた言葉はやっぱりよくわからなかった。

第四章：王都の変化と王族の干渉（仮）

お土産と誕生パーティーの予定

公爵領から帰ってきて二週間弱が過ぎた。

帰宅してからは向こうでののんびりした日々が嘘のように慌ただしい。

荷物の整理に溜まっていた手紙の処理、遅れた分の勉強にお茶会の日程調整、すぐに会えそうもない知り合いにはお土産を送れるように手筈を整え、向こうでの生活について両親へ報告、さらにはアンナになんとか休みを取ってもらったり、オーレリアの相手もしなくてはならなかった。

本当に一年くらいのんびりしてくれば良かったか、と現実逃避的な思いに囚われる一方で「ああ、帰ってきた」と実感。

立て続けに命を狙われたことで魔法の訓練や剣の鍛錬、役立ちそうな魔道具の開発も今まで以上に必要になる。三か月も働きっぱなしだったノエルには悪いが定期

的に呼んで稽古相手を頼んだ。
さすがに怒られるかと思ったら、むしろ彼女は嬉しそうに笑って、
「いくらでも申し付けてください。毎日でも構いません」
向こうでの働きぶりを上司から褒められたらしい。我が家からの礼金の他に騎士団からもボーナスが出たそうで、「このお金で装備を新調したいと思っています」と言っていた。
服でも宝石でも食べ物でもないあたりがさすがノエル。とりあえず「魔道具が欲しいなら格安で引き受けるわ」と囁いておいた。プレゼントする予定のアイテムも込みで彼女にはどんどん強くなってもらいたい。
「いっそのことうちの屋敷に住む？」
騎士団に用事の際は逆に遠くなるが、我が家へ何度も通わなくて良くなる。
冗談めかして言ったところ真面目な顔で「悪くありませんね」と言われた。実際、専属部屋はあと一つ空いているし、冬の間はそこへ何度か泊まってもらっている。公爵邸でも専属部屋で生活していたので今更抵抗を感じるものでもない。
ノエルさえ良ければ、と伝えるとさっそく親に相談したらしく、次に会う時には

「駄目でした」と肩を落としていた。
「お金とか迷惑の問題なら気にしなくていいけれど」
「いえ。兄達が『妹に会えないなんて耐えられない』と言われまして」
「それは……あまり無下にもできないわね」
男所帯の末っ子なのでそれはそれは可愛がられているらしい。当面は帰りが遅くなりそうな時に泊ってもらう程度で我慢してもらおう。
さて。
帰ってきて最優先で手紙を書いたのは婚約者であるリオネルのところだった。
「久しぶりだな、リディアーヌ。土産と土産話はたっぷり用意してきたか？」
「ご無沙汰しておりました、リオネルさま。ええ、わたしも頭を悩ませて趣向を凝らした品をご用意いたしました。そちらはお変わりありませんでしたか？」
「うむ。特に風邪もひいていない。相変わらず勉強は大変だが」
「勉強の大変さはわたしも痛感しております」
「いや、俺の方が絶対に大変だぞ。建国からの歴史や作物の収穫量の見方なんてお前は勉強しないだろう？」

大変さを主張してきた王子様に「礼儀作法や話術の勉強はわたしの方が大変だと思います」と言い返しつつ、向かい合って腰かける。

なんだかリオネルの部屋に来ると落ち着くようになってきた。ここも物が増えたり減ったりはしているのだが、定期的に来ているせいか見慣れているのだ。

俺たちが腰を落ち着けたのを見計らってアンナがセルジュへ目録を手渡す。

中身を確認して頷いたセルジュはリオネルの前に目録を置いた。

「リディアーヌ様が心を配ってくださった事がわかります。私からもお礼を申し上げます」

「ありがとう。リオネルさまにも喜んでいただけるといいのだけれど」

贈り物は様々だ。

羊のミルクやチーズ、公爵領産のワインと葡萄ジュース、特産である綿花を利用した生地や糸やハンカチ、向こうの地理や風土・歴史・伝承などの書かれた書物などなど。リオネルが一部を自分の物にしたら残りは近しい使用人や家族に分配されるので本当に大量である。

「とっておきのお土産だけはこちらに用意しました」

「ほう？」
目を輝かせるリオネルの前に、アンナが小さな箱を置く。
蓋を開けると中には茶がかった硬質な素材で作られたアクセサリーが入っている。独特のカーブを描いており、その形はある物を連想させる。表面は光沢があり、指で叩くと硬い。
「これは、羊の角か？」
「ええ。羊の角を小さく分割し、形を整えて装飾品にしました。魔石化してあるので普通の角よりも丈夫ですよ」
「魔石だと？」
「わたしの居場所を示す魔法がかかっています。かなり近くにいないと反応しないのであまり意味はありませんが、面白いでしょう？」
他の友人たちに贈るものとは形や効果が少し違う特別製。
リオネルはアクセサリーを指でつまみ上げるとしげしげと眺め「うむ」と言った。
「どうせならもっと格好いい魔法が良かったが、なかなか面白い土産ではないか」
「恐れ入ります。わたしからもそれの位置を探れますので、何かの形で携帯してお

いてくださると有事の際に役立つかもしれません」
　口では文句を言いながらもいろんな角度からじっくり観察しているので、実際は結構気に入ってくれたものと思われる。
　傍に控えるセルジュが感心したように頷いて、
「お二人の仲が引き裂かれないためのお守りというわけですね」
「リオネルさまが誘拐されたら一大事ですからね」
「俺は黙って誘拐されるほど弱くないぞ。いざとなったら自力で逃げ出してやる」
「それは頼もしいですね。できればそもそも誘拐されないでいただきたいですが」
　面倒な事態が起こってしまった時用の備えだ。
　できれば何らかの方法で探査距離を伸ばしたいところだが……それは今後の課題である。一応、現状でも対象を俺に限定することで魔力効率を高め、無差別探査よりは若干距離が伸びてはいる。
「誘拐といえば、シャルロットは大変だったな。怖い思いをしたのではないか？」
「ええ。あの子は女の子ですし、まだ魔法も練習中でしたから……。それでも必死にわたしたちへ居場所を知らせて自分自身を助けてくれました」

「そうか。強いな、シャルロットは」
感心したように頷くリオネル。
二人は何度か顔を合わせているものの、特別親しくはない。アグレッシブな少年と大人しい少女だからそんなものなのだろうが……。
「シャルロットが気になりますか？　今から婚約者を変えたくなりました？」
「馬鹿なことを言うな」
じろりと睨まれる。王子様の人差し指がぴっ、と俺の方を向いて、
「どこの世界に自分から婚約解消したがる令嬢がいる。まさか、他に好きな男でもできたか？」
「それこそまさかです。単に後になるほど解消しづらくなります、という念押しですよ」
「ならいい。……婚約解消などということになれば父上も母上もうるさいだろうからな」
肩を竦めて「小言は勘弁だ」と呟くリオネル。相変わらずたっぷりと気にかけられているらしい。

ちょうどいい温度に冷めてきた紅茶を口にした少年は「さあ」と話を区切って、
「旅先での話を聞かせてもらおう。初めて王都を出た感想はどうだ？　馬には乗ったのか？　羊の感触はどうだった？」
「そうですね。まず、王都を出た時の景色からですが……」
今までで最高レベルに話が盛り上がり、滞在が長引いた結果、俺は城の料理人が腕を振るった贅沢な夕食までいただいてしまった。

そんなこんなで慌ただしさが少し落ち着いてきたある日。
「ねえ、お父さま？　わたしの誕生パーティーって今年はどうするのかしら？」
その日の夕食は柔らかいパンにハンバーグとレタス、トマト、チーズなどを挟んだ料理――ハンバーガーだった。
きっかけは我が家への贈り物。
帰宅から約一週間後、公爵邸から「来てくれたお礼」として何頭もの羊が届いたのだ。もちろん嬉しいが、これをどう料理したものか料理人は首を捻った。何か食

べたいものはあるか、と希望のヒアリングがあったので『そういえばこの世界では食べてないわね』と思い出した。

サンドイッチはお茶の際などによく食べている。ただ、あれは気軽につまめるよう小さめサイズかつ具材を程よく挟んだものが一般的だ。大きなパンに食べ応えのある具材がたっぷり入ったいわゆるハンバーガーとは違う。

貴族の食事は前菜にスープにと品数が多いのもあって、一品完結の料理は考慮の外だったらしい。むしろ平民の間には似たような料理が広まっているとか。

『でも、せっかくだし食べたいじゃない？』

駄目もとで頼んでみたところ、なんとOK。

出産を控えているセレスティーヌは今、自室で別メニューなので、鬼の居ぬ間ではないが「試しに作ってみてもいい」と言ってもらえた。料理人が新しい挑戦に腕を振るってくれた結果、なんともゴージャズな羊肉バーガーが完成した。ちなみにサラダやスープ、デザートもしっかりついている。

手で持ってかぶりつくのは「はしたないから駄目」と言われてしまったのでナイフとフォークで切って食べる。これはもうハンバーガーではないのでは？　と思

いつつも、口に入れたら間違いなくハンバーガーだった。ジューシーなハンバーグにとろとろのチーズは反則と言っていい。

これは前世で食べようとしたら千円超えること間違いなしである。ちなみに兄妹にも好評で、アランなどは「これはまた食べたいな」と静かにご満悦だった。

それはともかく。

美味しそうにハンバーガーを味わっていた父は俺の質問に手を止めて「ふむ」と呻った。

「普段より盛大にやりたいということか？」

「ううん。そうじゃなくて、お養母さまが身重でしょう？　大きな催しは負担にならないかしら」

養母のお腹の中の子は順調に育っている。

経過観察や生理のなくなった週から逆算すると出産予定日はちょうど秋――俺の誕生日付近になる。下手したら当日に生まれる可能性さえある。もちろんパーティーには出られない。

ただ、屋敷内が騒がしくなると休むのも難しいだろう。あと、無いとは思うが

迷ったフリをして会いに行こうとする輩なんかも警戒したい。
父もその辺りは考えていたらしく俺の発言に深く頷き、
「冗談だ。もちろんそれは考えてある。陛下に相談し、今回は城でパーティーを開いてもらう依頼している」
「お城で!?　びっくりするくらいの特別待遇じゃない」
まだ婚約者、解消の可能性だってゼロではないのにまるで王家の一員扱いである。
『向こうには手放す気がないんでしょうね。むしろ将来の王族入りをアピールする狙いだわ』
シャルロット誘拐事件の際、敵が要求してきた内容は王家にも伝わっている。となれば我が家だけでなく純血派を後援している何者かに対してもアピールは必要だ。城でのパーティー開催はその辺りをまとめて片付ける有効な一手。
気が重いので欠席――などという我が儘が通るわけがない。というか、魔法で体調管理している俺が仮病なんて使おうものなら王家との関係が悪くなる。
「正式決定するまでにはまだ少し時間がかかる。城に行くのはもう慣れているだろうし心配することはないが、心の準備はしておきなさい」

「わかったわ。ドレスは一番いいのを着ていきましょう」
「ああ、それがいい」
城でのパーティーとなるといったいどのくらいの規模になるのか。
婚約お披露目があったリオネルの誕生パーティーほどではないだろうが、我が家で行うパーティーの倍くらいは覚悟するべきか。家で行う場合は仲の良い家を中心に選べるが、王家の主催となるとなるべく公平に招待状を送らなければならない。嫌がらせにも備えておこうと考えていると、シャルロットが「お城で誕生パーティーだなんて、お姉様」と声を上げた。
これまでのように「凄いです！」と言ってくれるのかと思ったら、彼女は心配そうな表情になって、
「責任重大ですね。頑張ってください、お姉様」
「ありがとう、シャルロット」
セレスティーヌがいないのでシャルロットは俺の隣に座っている。笑顔で感謝を述べると照れくさそうにはにかんだ笑みを浮かべてくれた。
うん、なんだか日に日に可愛くなっている気がする。

「シャルロットも良いドレスを選んでね。お城に行くのだから王子様の目に留まるからもしれないでしょう？」

「え？　あ、そうですよね。お姉様のパーティーなのですから、私も参加するんですよね」

自分のことを忘れていたなんて彼女らしい。俺と父、アランは揃って和やかな笑顔を浮かべ、子供扱いされたシャルロットは頬を膨らませて怒った。

章イメージ



お土産と誕生パーティーの予定 2

※念のためガールズラブタグを追加しました。

「いらっしゃい、ヴァイオレット」
「久しぶり、リディアーヌ。会いたかった」
約三か月ぶりに再会した友人を出迎えると、いきなり駆け寄られて手を握られた。銀糸のような髪に青色の瞳。月の妖精を思わせる可憐な少女――ヴァイオレットに至近から見つめられた俺は思わず赤面してしまう。
柔らかな手の感触と控えめな花の香りが思考を惑わしてくる。急だったので猶更である。
彼女と再会したのは帰ってきてから四日後のこと。
帰還報告と共に「お土産を渡したい」という手紙を送ったところ、その日のうちに「いつでも大丈夫」と返事が来た。気合いの入った返答に嬉しくなったので（リ

オネルを除いて）一番に会うことにした。
「ヴァイオレット。恥ずかしいわ」
やんわり伝えると、大胆過ぎる行動にようやく気付いたのか少女は慌てて手を離してくれる。
「ごめんなさい。また会えたのが嬉しかったから」
肌が白いので頬が染まったのがよくわかる。そんな顔まで可愛いのだから、本当に罪造りな少女である。今まで目立たない振る舞いをしてきたというのも頷ける。
とりあえず席についてもらってお茶を注いでもらう。暑くなってきたので冷たい麦茶にした。ヴァイオレットの分はアイスティーである。
「もっと大人しい子だと思っていたから意外だったわ」
「好きなことになるとつい興奮してしまうの。火属性を持っているからだと思う」
「あら。ヴァイオレットも火の属性があるの？」
「私は火と水の二重属性なの」
なるほど、と俺は頷いた。
「だから積極的な時と大人しい時があるのね」

「……本当に恥ずかしいからあまり言わないで」
目を伏せ、小さな声で言ってくる。親しい友人の前ではっちゃける分には別に構わないだろうに。
「わたしは好きよ。積極的なヴァイオレットも」
「本当？」
「もちろん」
笑顔で答えると、ヴァイオレットの顔にも微笑が浮かんだ。左手を胸に当てて「良かった」と呟く。
真面目で心配性。本当にいい子だ。友達になってよかったと思う。
「お土産をたくさん持ってきたから、欲しい物を持って帰ってね」
少し離れたところへ並べておいた土産物の数々にヴァイオレットは目を輝かせ、とっておきとして別に渡した例のお守りには感激したように目を潤ませてさえくれた。
「大した物ではないけれど、お守り代わりに持っていてくれるかしら？」
「リディアーヌ。羊の角から作った魔石なんて十分に高級品」

くすりと笑って首を傾げ、
「これは貴女の居場所はわからないの？」
「え？　ええ。わたしも同じ物を持つつもりだけど、他の友人にも同じ物を配るから。誰が引っかかったかはわからないの」
ついでなので、リオネルには特別な品をあげたことも伝える。彼に関しては他の令嬢に居場所を探知されては困るのである意味当然の措置だ。
と思ったらヴァイオレットの表情がどんどん真顔になっていく。
「リディアーヌ。お金は払うから、殿下と同じお守りも作って欲しい」
「そのくらいならお金はいらないわ。完成したら送ればいい？」
「うん」
笑顔になってくれた。しかし、そんなに気に入ってくれたのだろうか。大事そうに箱へ戻してメイドへ渡す姿を見てむず痒い気分になった。
「ねえ、リディアーヌ。公爵領でも大立ち回りをしたんでしょう？　何があったのか聞かせてもらってもいい？」
「ええ。でも、戦いの話なんて聞いてもつまらないんじゃない？」

「大丈夫。聞きたいの」
目が真剣だったので、ひとつ頷いてシャルロット誘拐事件について話をした。
話が進むに従って目を細め、笑顔が剣呑な感じになっていくヴァイオレット。小さく「裁きを」とか聞こえてきて若干怖い。
「ごめんなさい。危ないことをしたから怒っているんでしょう？」
「？　いいえ？」
にっこり笑って首を振られる。俺は後ろのアンナと一緒に「え？」と硬直した。
「怪我をしたなら怒るけど、無事だったならそれでいいの。怒ったのは悪い人たちに対して」
「そうね」
シャルロットを誘拐し、羊たちの憩いの場を穴だらけにした。とばっちりを受けた雑貨店の店主だって可哀想だ。人々を変な道に引きずり込んで手下として使おうとする純血派と、それをいいように利用する何者かには相応の報いが必要だ。
ヴァイオレットのルフォール家は忠臣として名高い。有名なあだ名は『中立のルフォール』。あくまでも王家全体の利益と国王の意向を優先する実家の教えは彼女

の中でも息づいているのだろう。
　俺は言えない部分を省いて情報を開示しながら、ヴァイオレットの知っていることや彼女としての見解を尋ねた。
　この国の行く末に関する意見交換には意外にもかなり熱が入った。

　他の友人たちも公爵領土産を喜んでくれた。
　貧乏な伯爵令嬢であるサラには生地や糸など実用的な品をメインに贈り、「材料があればドレスや下着が安く仕立てられます」と大変喜んでもらった。弟ともども次の冬に向けてあったかい衣類を準備して欲しい。
　他の令嬢たちは生地やご当地の酒、チーズなども喜んでくれたが、一番喜ばれたのは角魔石のアクセサリーだった。
　材質と機能を話すと「素晴らしいですね」と絶賛され、その場で「私は扇子の柄に使おうと思います」「私はお気に入りのネックレスと一緒に」などと使い道が話され始める。

喜ばれすぎて逆に驚きだったが、

「皆が同じ品を持ち、アレンジも可能。一つの角を分けて作った以上、新しく用意したとしても全く同じ物にはならない。しかもお互いの居場所を知らせあえる。派閥の証としてとても役立つと思います」

彼女たちの間では仲良しグループではなく『派閥』という認識らしい。まあ、言い方の問題ではあるので、実態さえ乖離しなければ構わないのだが。

「みんな、この三か月くらい何事もなかった？」

「なかったかと言えば嘘になりますね。大小様々嫌がらせや攻撃はございました」

「ですが、サラ様や位の低い方も含め一丸となって対処しましたので」

誰かが攻撃されれば他の誰かがフォローする。一人ではなく親しい仲間がいるのだとアピールすることで乗り切ったという。

「もちろん、品格を貶めない程度の反撃も致しましたのでご安心を」

「さすがね。みんな頼もしいわ」

首謀者や実行犯については細かく聞いて記憶しておく。主観等が混じっているかもしれないので差し引いて考えはするが、今度の対応の参考にしようと思う。

あからさまな敵意さえ向けられなければこちらから潰しにかかる気はない。できればみんなで仲良くしたいのだが……まあ、婚約解消のためにシャルロットが誘拐されたりもしたのだ。むしろ俺が邪魔な者はたくさんいると見るべきで、平穏な生活への道のりは遠そうである。

と、兄のアランに愚痴ったところ身も蓋もない答えが返ってきた。

「いっそのこと殿下と結婚してしまうというのはどうだい？」

「お兄さま。いくらなんでも無茶では？」

この時は珍しいことにアランの方からお茶に誘ってきてくれた。

忙しいんじゃないのかと思えば「これも自分のためだよ」と笑う。一人で勉強して息詰まるより人と話して別の視点を得るのも大事だと考えたらしい。

迷惑なら止めるという兄に、俺は「この国の平和のために協力しましょう」と笑って答えた。これからは兄妹の時間を増やすことができそうだ。

そんなアランはふっと笑って、

「リディも次の誕生日で十一歳だろう？　式までに一年かけるのは珍しくないし、十二歳なら結婚年齢としては十分だよ」

結婚可能年齢を厳密に定めた法律はない。

学園卒業後――つまり十八歳以降に結婚するのが一般的だが、在学中に結婚する者もいる。夫が十分な地位や金を持っている家相手の場合はアランの言った通り十二歳程度で嫁ぐ例もある。そういうのは後妻や第二夫人というケースがほとんどだが……。

俺とリオネルの場合は同い年なので「ぐへへ」な意味にはならないし、相手が王族なので生活資金の心配もない。向こう側にどうしても状況を確定させたいという意思があれば成立するだろう。

「でも、そうするとわたし、お城に住むことになるんじゃない？　お兄さまは寂しくない？」

首を傾げて問えば、兄は僅かに視線を逸らした。

「父上やシャルロットは確実に寂しがるだろうね」

『素直に寂しいって言えばいいのに。お兄さまもお年頃なのね』

結婚したけど生活拠点はそのまま、ということも可能だろうか？　それはそれで冷遇されているだの妻になる気がないだの言いたい放題言われそうだ。

いっそリオネルをこっちに呼ぶ？　そうすると事実上、正室の子が王位継承権を放棄したように見えてしまう。後継者争いが発生した時に不利になりそうだ。

結婚したけどお互い子供同士という場合、どういう生活になるんだろうか。生活拠点が城へ移って妻としての教育が入ってくること以外は大して変わらないんだろうか。とりあえず、王城で専属筆頭をすることになるアンナがパニックになりそうだ。

うん、あまり考えたくない。

「お兄さまは誰かいないの、将来の奥様候補」

「いないよ」

ティーカップを手に遠い目をしながらアランは答えた。何かトラウマを思い出したのかもしれない。

「そういうのは学園に入ってからでいいよ。そうでないと利害関係もはっきりしない」

「もう。そうじゃなくて恋のお話を聞きたいのに」

「恋は突然落ちるものらしいからね。落ちていないものは語りようがない」

確かに。俺自身、転生してからは恋なんて一度もしていないわけで。偉そうに恋バナが聞きたいなどと言える身分ではない。

アランはふっと息を吐いて視線を宙に寄せ、

「僕はこの家と宰相職を継ぐつもりだ。だから、嫁いで来て公爵夫人を務められる女性が希望になる。伯爵家以上で家に継ぐ覚悟のある有能な女性だ。学園でじっくり見定めない事にはなんともね」

「なるほど。つまり、お養母さまのような方が理想なわけね」

兄が紅茶を噴き出しかけた。

俺を恨みがましそうに睨み、ほんのりと頬を赤くした彼は「変な事を言うんじゃない」と釘を刺した上で、

「……まあ、そうだね。僕らの産みの母上は少し目立ちすぎる方だったから」

俺たちの生母アデライド。

高い魔力と類稀な美貌を持ち、現国王も妻にしようと狙っていたという。

俺はくすりと笑って、

「お父さまは相当頑張ったのでしょうね。あの陛下を諦めさせてお母さまをものに

したんだから」

「僕はご免だよ。下手をしたら次の国王陛下と険悪になってしまう」

次期国王がリオネルだった場合は取り合いになる心配はなさそうだが。

現国王には現在四人の妻がいる。故人であるオーレリアの母を含めれば通算で五人。なんともわかりやすい女好きである。これに関しては先王が側室を持たない妻一筋の人であった反動とも言われているが、果たして本当のところはどうなのやら。

ともあれ。

取り合いになりそうなほどの魔力と美貌の持ち主か。俺たちの代だと誰になるだろう。

「ああ、ヴァイオレットなんてぴったりじゃない。お兄さまは知ってるかしら？」

「ルフォール侯爵令嬢だろう？　知っているけど、だからあの娘は明らかに母上と同じ類じゃないか」

儚げで魔力の高い美少女。早逝してしまうところまで似ないことを祈るばかりである。彼女が結婚後体調を崩すようなら栄養のある食材を山と送ってやろうと思う。

「リディ。シャルロット誘拐の件を受けて、君を巡るいざこざは今まで以上に大きくなるはずだ。どうか気を付けて欲しい」
「ええ。注意と備えは今まで以上にしていくつもりよ」
城で行われる俺の誕生パーティー。
これはきっと一つの転機になる。下手をするとリオネル以外の王族もちょっかいをかけてくるかもしれない。
幸い、これまで他の王族とは深い関わりがなかった。相手としてもこちらとしても不用意に仲良くはできない立場。しかし、純血派のテロをきっかけとして情勢は大きく動き始めている。
四人の妃。彼女たちの下にはそれぞれ複数人の子供がいる。正室は基本、俺の味方と考えていいだろうが、側室たちとその子供たちにそれぞれ思惑があるとすればこれはもう、城の中だけで一本ミステリー小説が書けそうである。
「できれば平穏無事に済んで欲しいところだけれど」
おそらく、そう上手くは行かないだろうと思った。

十一歳の誕生パーティーと王族の接近

「リディアーヌ様。この度は十一歳のお誕生日、おめでとうございます」
「ありがとうございます。わたしのためにわざわざ足をお運びいただき、皆さまには心から感謝しております」
リオネルの誕生パーティーでも恒例の王城内大ホール。
あの時は子供たちだけ別会場に移されていたが、今回は普通に参加者全員がここに集合する形だ。そのため、逆に年齢層は高めになっている。下限は俺やリオネルと同年代あたりか。アランやシャルロット、父も会場のどこかで挨拶に追われているはず。
今日の主役である俺は赤を基調とした華やかなドレスを身に纏っている。胸元には布で作った真っ赤な薔薇があしらわれており、目いっぱい人目を惹く。
薔薇はドレスに直接縫い付けるのではなく、スナップボタンを利用して取りつけている。
俺たちが旅行中に試作品が出来上がり量産体制に入ったということで急遽、既存

のドレスにも流用してみた。これなら薔薇以外のオプションにも付け替えが可能だし、いちいち縫い合わせてドレスを痛める心配もない。新技術のお披露目としても役に立ち、令嬢の多くは興味深そうにこれを見ていた。

整然と並べられた数多くのテーブルには趣向を凝らした料理が並べられ、給仕のボーイやメイドが最上級のサービスを提供する。振る舞われている酒もかなり上等なもののようで、酒好きな大人たちはみないい笑顔を浮かべている。

そんな中、俺は代わる代わる話しかけてくる招待客たちに応対していた。

今年は王城での開催になったが、客を招いたのはあくまでも俺――シルヴェストル公爵家という建前になっている。

なので、やってきた貴族を邪険にすることはできない。例年のキャパを超える人数が来場していようと笑顔で対応するのみである。

テンプレとしては話しかけてきた相手に名前付きで返事をし、二、三、世間話的に言葉を交わす。初対面の相手なら挨拶を受けてその顔を覚えることになる。

多くの者が話題に出すのはやはりシャルロット誘拐事件。

危険を顧みずに妹を救い出した俺を褒めると見せかけて無謀だと非難してきた

り、非道な手段を用いてまで婚約解消を求められたことを引き合いに出し「殿下の婚約者に相応しくないのではないか」というムードを演出してきたり。

もちろん普通に心配してくれる人もいるので切り分けが難しい。下手な者なら妙にわざとらしかったりするのだが、上手い者は言葉の端にやんわりと敵意を滲ませてくるのでうっかりスルーしそうになる。

まあ、気付いていてもよほどのことがない限りはスルーするのだが。

「リディアーヌ様。誕生日おめでとうございます。これで十一歳。随分とご活躍ですので、お歳をついつい忘れてしまいそうになりますわね」

「ベアトリス・デュナン様。とんでもございません。将来のために日々、勉強に勤しむ身でございます」

数少ない俺と同階級、公爵令嬢のベアトリスの挨拶に俺は愛想笑いを浮かべて応えた。

『もう。面倒だから今日くらい出て来なくていいのに』

俺やリオネルより二歳年上の彼女は現在十三歳。二次性徴によってぐっと成長し始めており、身長も伸び、体型も女性らしさを増している。客観的に見れば十分に

美少女と言っていい容姿。自分への自信からくる悠然とした笑みは健在で、ある種のカリスマさえ漂わせている。

これでいちいち突っかかってくる悪癖さえなければ友達になりたい相手なのだが。

「心ない者たちからの要求にはわたしも随分と頭を悩ませました」

さっと目を伏せて誘拐の件についてこちらから触れる。

「大切な義妹の命とリオネルさまとの婚約。選べるはずがありません。悩みに悩んだ末、わたしは『どちらも死守する』という選択をするしかなかったのです」

「まあ。それはそれは、リオネル殿下は大変愛されていらっしゃるのですね」

舌打ちが聞こえてきそうな苛立ちの表情をほんの一瞬だけ浮かべたベアトリスは俺の隣で「話しかけるな」オーラを放っていたリオネルに流し目を送った。

王子様も俺のエスコート役として十分に着飾っている。

男として日に日に成長している彼もぴしっとした格好だと美少年と言って差し支えないのだが、何度も話して気心の知れる仲になったせいか、内心物凄く面倒くさがっているのが俺にはよくわかった。

それでも少年は余所行きの笑顔を浮かべて、
「ありがとう、ベアトリス。私はリディアーヌとの関係がこのまま続く事を願っている。邪な意図を以って妨げられる事は断固拒否したいところだ」
（訳：婚約解消する気はないからさっさと諦めろ）
悲しげに目を伏せた後、さりげなく俺を睨みつけたベアトリスは愛想笑いを浮かべながら踵を返そうとして、
「申し訳ありません、リディアーヌ様。もう一つだけ言わせてくださいませ」
去り際、気を抜いた瞬間の追撃というのは定番。だからこそ必殺の威力を秘めていることのある警戒すべき攻撃だが、
「駆け引きのために乙女の貞操を弄ぶなどあってはならない事ですわ。……貴族の威厳を保つためにも、貴女が賊の要求に乗らなかった事を感謝致します」
ベアトリス・デュナンのその言葉には何の悪意も感じ取れなかった。
『……もう。だから憎めないのよね、この娘』
俺は心の中で嘆息しながら、以降も続く貴族たちからの挨拶に対応し続けた。
「もう言われ飽きたでしょうけど……誕生日おめでとう、リディアーヌ」

「ヴァイオレット。ありがとう。そのドレス、とてもよく似合っているわ」
「リディアーヌこそ。薔薇のお姫様みたい」
寄って来る人が少なくなってきた頃、そっと近寄ってきたヴァイオレットはその細い身体に淡い水色のドレスを纏っていた。
微笑みと共に俺へと賛辞を送ってくれた彼女はリオネルへと視線を移し、上品に一礼した。
「こうしてお目にかかれたことを光栄に存じます、リオネル第三王子殿下。ヴァイオレット・ルフォールと申します」
妖精からの挨拶を受けたリオネルは二、三度瞬きを繰り返した後で「うむ」と答えて、
「ルフォールの娘か。侯爵夫人に連れられてパーティーへ参加しているのを何度か見かけたと思う。リディアーヌとは仲が良いのか？」
「はい。親しくお付き合いさせていただいております」
細い指が自身の髪を軽く撫でつけると、ピアスとして取り付けられたお守りがちらりと覗く。

「……うん？　リディアーヌ、俺の物と形が違うが？」
「あれは友情の証として制作した品ですので、リオネルさまには特別な品をお贈りいたしました。あれを頼りに女性が寄って来ても嫌でしょう？」
「ああ、それは確かに――」
「それに関しまして、殿下には一つお詫びしたいことがございます。実はリディアーヌ様に無理を言って、殿下に贈られた品と同じ効果のものを強請ってしまったのです」
　少女がそう言って逆の耳を見せると、そちらにも羊の角から作った魔石が揺れている。『って、なんで無駄に挑発しているのよヴァイオレット!?』。
　俺は慌てて隣へと視線を送り、
「リオネルさまにお贈りした品は形にも拘った特別製ですから、効果が同じでも価値が違います。羊の角を模した形を作るのにはなかなかの苦労が……」
「リディアーヌ」
「はい」
「角はどうせまだ余っているのだろう？　チェス駒十六個分を形だけ加工して寄

越せ。代金は払う」

「魔石化なしでいいのでしたら構いませんが――」

俺はそっと会場内を見渡す。大勢の参加者が思い思いにパーティーを楽しんでいる……と見せかけて、実は複数の貴族がこちらの様子を窺っている。俺たちの会話を聞いている者だって少なくはないだろう。

「婚約者の友人に嫉妬した、などと噂が立ちますよ？」

「不仲だと広まるわけではないのだから問題なかろう」

「……かしこまりました。そういうことでしたら」

渋々引き下がった上で「どういうつもりなのか」という視線を親友に送ると、「上手く行ってよかった」とでも言いたげな表情が返ってきた。

もしかして今のやり取りを狙って引き出したのか。リオネルが先の一件を気にしていないこと、俺を婚約者として大事に思っていることが広まるように。

「ありがとう、ヴァイオレット」

魔法を用いて当人にだけ声を届けると、少女は嬉しそうに笑って「それではまた」と俺たちから離れていった。

「……はあ。ようやく挨拶が終わりか」
「ええ。さすがに多かったですね……」
お互いに笑顔を張り付けたまま小声で言いあう。
話していた相手が離れる→新しい相手がやってくるのループが完全に途切れた時にはもう、来場者たちの何割かがいい感じに酔っぱらっていた。赤い顔で楽しそうにしている彼らが羨ましくもあり憎くもある。俺たちは完全に素面だというのに。
『しかも、立食形式だから飲み物はカップじゃなくてグラスなのよね。ノンアルコールのドリンクは水と果汁ばっかり。言えばアイスティーくらい用意してくれるけど、毎回頼むわけにもね』
ちなみにリオネルも酒は飲んだことがないらしい。
貴族たちからの挨拶に応じている時に「十二になったら少しずつ慣らそうと思っている」と口にしていた。初めての飲酒の際はアイスティーで付き合う、と声をかけるとなんだか不満そうにされたが、俺はもう少し後まで我慢する予定だから仕方

ない。

さて

王城の大ホールということもあっておパーティーの閉会時間は明確に決まっていない。盛り上がりに盛り上がった場合は夜通しでも可能という太っ腹ぶりだ。もちろん参加者は適宜都合に応じて帰っていいわけだが、今のところ人が大きく減る様子はない。

「リディアーヌ。碌に食べていないだろう。何か腹に入れたらどうだ」

「そうですね……。正直、疲労であまり食欲はありませんが」

「でしたら、何か食べやすい物をお持ちいたします」

世話係としてついて来てもらったアンナが率先して申し出てくれる。リオネルの世話係として付いているセルジュが「離れている間はお任せください」と請け負ってくれる。セルジュはついでにリオネル用の料理もアンナに頼んでおり、役割分担もばっちりだ。

やっぱり専属がいてくれると頼もしい。

今回は主賓かつ会場が広いということで来てもらったのだが、俺たちが話してい

る間に飲み物を取ってきてくれたりとすごく役に立った。身軽には動けなくなるので一長一短だが、これからもアンナには居てもらった方がいいかもしれない。

ちなみにエマは屋敷で留守番している。「アンナ一人で不足でしたらオーレリアをお使いください」とあまり来たくない様子だった。アンナが後から教えてくれたところによると、昔の職場なので「私はこんなに昇進したの。貴女は？　え？　まだ一般メイドなの？　ほら、城仕えを辞めたりするからうんぬんかんぬん」とか話しかけてくる知り合いがいたりするらしい。

普段、俺に付いてくる分には「職務中ですので」で逃げられるが、パーティー中だとメイドも手持ち無沙汰の時間ができるので危険なのだそうだ。

「さすが、お城の料理人は腕が良いですね。冷めていても美味しいです」

「公爵家の料理人よりも腕は上か？」

「どうでしょう。求められる技術が違いますからね。私たちの好物を作らせたら我が家の料理人に敵う者はいないでしょう」

アンナの持ってきてくれた料理を味わいながらしばし雑談。

俺用の皿には一口サイズのサンドイッチやカナッペなど食べやすいものが並び、

リオネル用の皿は肉！　揚げ物！　おまけに炭水化物！　といった感じだった。さすが男の子ということか、それとも慣れているせいか、王子様は普通に食欲旺盛らしい。

そうして腹ごしらえをしていると、今度は挨拶ではなく長めの雑談のために話しかけてくる者が現れる。もう休憩タイムは終わりということらしい。仕方ないのでこれにも笑顔で応じる。話の合間にちょこちょことサンドイッチを齧ったりしつつ相手の話に相槌を打ち、質問を投げる。

俺の横でリオネルは「今回の主役は俺ではない」とばかりに肉を頬張っていた。若干イラっとしたが、たまにいいタイミングで口を挟んでくれたりするのが心憎い。

あまり得意でなかったり派閥的に近しくない相手の場合はセルジュが「あちらに美味しそうな料理がありましたのでいかがですか？」などとさりげなく話を中断してくれた。

『でも、案外攻撃としては大人しいのかしら』

嫌味や言葉によりかまかけは度々あるが、ドレスを汚しに来たり虫を寄越したり飲み物に刺激物を混ぜたりといった嫌がらせは今のところない。元騎士という経歴

を持つセルジュと専属歴三年にして荒事に巻き込まれること二回、俺やオーレリアの無茶振りを日常的に受けるアンナが目を光らせているお陰で思いとどまってくれているのかもしれない。

先の一件も俺が負けていたりシャルロットが怪我をしたならともかく、その日のうちに救出が終わって俺も普通に勝っているので「婚約者の資格なし」と大きく主張するには弱い。お転婆すぎる点などは攻撃材料だが、面と向かって糾弾できるほどの材料にはならない。

せいぜい水面下で「反第三王子・反リディアーヌ派」の拡大を狙っている程度か。

と。

「リディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢。良ければ私にも挨拶をさせてもらえないだろうか」

これまでに何度か聞いたことのある――そして、俺が今回、おそらく何か仕掛けてくるだろうと警戒していた声が俺の耳へと入ってきた。

十一歳の誕生パーティーと王族の接近 2

「こんばんは、シャルル殿下。このような席にわざわざお越しいただけるとは光栄の極みでございます」

俺は、その人物に対していつも以上にかしこまった礼を返した。

美しいプラチナブロンドに黄緑色の瞳。

すらりとした長身にきっちりした礼服を纏い、この国ではまだまだ高級品である眼鏡をかけた男性。どことなくリオネルに似ているような気もする彼とは初対面ではない。挨拶を交わした程度ではあるが面識がある。知識によれば御年二十歳。

シャルル・ラ・リヴィエール。

彼はこのリヴィエール王国の第一王子。第二王子と第三王子（リオネル）の上に立つ王位継承権第一位、現国王が不測の事態により亡くなった場合は自動的に王となる高貴な身分。

俺のことを本当の娘のようにかわいがってくれ、二人きりの時は気の良いおっちゃんくらいにしか思えない現国王よりもある意味取り扱いに困る重要人物（VIP）であ

る。

それは周りも同じのようで、彼の存在に気づいた貴族たちは「シャルル殿下……!?」とざわついている。

リオネルも「兄上……！」と目を丸くして驚いている。

「挨拶に顔を出すかもしれない、と仰っていましたが……随分と目立つご登場ですね」

「言った通り挨拶に来たつもりだよ。目立つのは立場上仕方のない事じゃないかな」

ふっと笑った彼はお付きの騎士や世話役に視線を送る。彼らはシャルルと俺たちへ向けて軽く目礼を送ってくるだけで何も言わない。この場において下手に口を挟めば不敬になると理解しているからだ。アンナも「絶対に何も言いません！」と決意に身を硬くしながら固唾を飲んで状況を見守っている。

閑話休題。

継承権においてはトップにありながら、実際の継承レースにおいては二番手あるいは三番手と論じられることも多い王子さまは、俺に柔らかな微笑みを向けて「おめでとう」と口にする。

「時が経つのは早いものだ。リオネルと婚約した時にはまだ幼い女の子だったが、今ではもう立派な小さいレディだ。君が学園でその才を発揮する日も近いかもしれないね」

「身に余る光栄でございます。……入学までにあと三度、このようなお言葉を頂戴するかもしれないと思うと、緊張で震えてまいりますね」

「身構える必要はない。歳を取るほど月日が経つのは早くなるものでね。君は君らしく自分の早さで成長してくれればいいさ」

「ありがとうございます」

深く一礼しながら「怖いな」と思う。

第一王子シャルルは知的かつ温厚な王子として知られている。実際会っての印象もそこから外れたものではないものの、俺は人というものが第一印象と周りからの評価だけで測れるものではないと知っている。他でもない俺の養母セレスティーヌが良い例だ。

彼がなんらかの目的で他者から「そう見えるように」振る舞っている可能性も十分にある。それが考え過ぎだったとしても、俺たちと彼とは利害が一致していない

のだから、ある程度の策略やいざこざは覚悟してしかるべきだ。
何しろ、国王の椅子は一つしかない。
現国王もまだまだ現役であるとはいえ、後継者争いは現時点で既に熾烈を極めている。貴族たちはそれぞれの理由でそれぞれに「この人に王になって欲しい」という相手を見定め、それを支援している。目に見えるもの見えないもの合わせればその動きはもう理解不能な域にあるだろう。
そして、このシャルル自身もおそらく王になることを望んでいる。
少なくとも「そういう噂」は広く貴族社会に流れている。
「兄上。リディアーヌは私の婚約者です。あまり親しげに話すのは止めてください」
期せずして見つめ合う格好になっていると、リオネルがこほん、と咳ばらいをして間に入ってくれる。
弟の抗議を受けたシャルルは「すまない」と身を引いた。
「弟の婚約者を奪うつもりはないよ。ただ、リディアーヌ嬢とは仲良くしたいと思っている」
「兄上……」

胡乱げな目をするリオネル。王族ともなると一挙手一投足に意味を求められる。なんの気なしに発した言葉が邪推されて拡散される、なんてよくあること。お子様王子も普段セルジュや俺から口酸っぱく言われているせいか、出会った当初よりはその辺をわかっている。

要するに、弟の婚約者と仲良くするというのも邪推を受けやすい行為なわけだが、「不安ならば君も同席すればいい。何も二人きりの場が欲しいと言っているわけではない」

「兄上は一体何をされたいのですか？」

前にリオネルから、第一王子や第二王子とはそこまで仲が良くない、と聞いたことがある。

『兄上達は正直苦手だ。何を考えているのかわからない事が多い。……姉上達も似たようなものだが、そちらはまだマシだな』

彼によるとシャルルや第二王子に比べればオーレリアの方が心の距離は近かったらしい。年に一度会うか会わないかでそこまで好かれているわが師はやはり只者ではない。いや、単に「魔法以外に興味のないただの変人」だとわかりやすいので警

戒がいらなかっただけかもしれないが。
　弟の視線にシャルルはにっこりと微笑み、軽く膝を折ると俺に手を差しのべてきた。
「リディアーヌ嬢。一局、お相手いただけませんか？」
「……まあ」
　一局、と来たか。
　この言い回しが指すのは基本的に「あれ」だ。今回のパーティーは舞踏会ではないし、まさかここで「ダンスのお誘いですよ」などとは言わないだろう。
　どうしたものか。一瞬迷いながらも俺は、むしろ曖昧な言い回しがされているうちに用件を確定させてしまうことにした。
　軽く手を取りながら、困ったように首を傾げて言う。
「盤と駒がございませんが、目隠しでいたしますか？」
　シャルルは予想していたように微笑んで答えてきた。
「こちらに用意がございます。腰を落ち着けられる椅子も併せてご用意いたしましょう」

彼が軽く目配せをすると、さっと二人掛けのテーブル、そして二脚の椅子が準備される。その上にはいかにも高級そうなチェス盤が置かれた。駒は木製。精緻な彫りが施された上で白と黒に塗り分けられ、向かい合うようにして並べられる。

チェス駒の素材が石だったりすると指している間に手が疲れてきたりするのでありがたい。

「おい。まさかやる気か？」

「挑まれた以上、逃げるわけにもいかないでしょう？」

パーティーでチェスが行われるのは珍しくない。普通は端っこの邪魔にならないところを使って、こんな目立つところではやらないが。

椅子の片方に腰を下ろし、駒に手を伸ばす俺とシャルル。

かつん、かつん、と駒音を響かせ手を披露しあううちにわかったのは、相手が俺よりもかなり格上である、ということだった。

噂によると彼は見た目通りの勉強家で知識も豊富。「知」の第一王子との異名まで持っている。勉強のできる奴がチェスも得意とは限らないが、頭の回転が早い奴はだいたいこの手のゲームに強い。

プレイスタイルは堅実かつ安定型。

セオリーに従って進めながら、攻めにも守りにも堅い手を打ってくる。今まで戦った相手の中だと父に近い。特に目立った強みがないとも言えるが、こういう手合いはこちらがちょっと気を抜いただけであっという間に有利を取ってくる。

俺は『これ、どうしようもないんじゃない？』と思いつつも、強い駒をばんばん動かして萎縮を誘う。

「私相手の時と随分動きが違うな」

「リオネルさまは攻めるのがお好きでしょう？　わたしまで応じていては疲れてしまいます」

攻めっ気の強い者同士がぶつかると紙一重の攻防を読み切った方が勝つ。あるいは小細工無用と割り切って真っすぐ突っ込める者。俺にはどちらも少々荷が重い。

今回は相手が強気に来ないのでむしろ攻めに出たわけだ。

「ふむ。リディアーヌ嬢は意外と柔軟なのだね。もっと攻め好きかと思っていたよ」

「指し手に性格が出るとは言いますけれど、殿下から見てわたしはどのようにお見えですか？」

ほんの少し顔を上げた第一王子が黄緑色の瞳で俺を見据えてくる。
「思ったよりも思慮深い。その反面、自らの思考力を信じきれていない。少々勿体ないな」
微笑みを浮かべて内心を隠し、視線を盤へと向ける。
彼の指摘はおそらく正しい。今回、いちかばちかで攻めたのも守って勝てないと思ったから。慎重な読み合いの勝負に持ち込むのを恐れたのだ。
チェスは互いの持ち駒と配置が全く同じ。ＴＣＧのように自分だけの持ち札を用意できるわけではない。基本的に腕の良い方が勝つこのゲームにおいて実力で勝ち切るだけの自信が俺には持てない。
そんな俺が『紅蓮の魔女』などと呼ばれて恐れられている所以が公爵令嬢という立場、そして高い魔力にあるのだということを、おそらくシャルルは既に読み切っている。
『高くついたわね。……まあ、隠しきれるものでもないでしょうけど』
奇策は看破されてしまえば弱い。俺の攻め手はしっかりと守り切られ、気づくと逆に俺のキングの退路が断たれていた。

「チェックメイト」
「……参りました。さすがはシャルル殿下。噂通りお強いのですね」
「私などまだまだだよ。国王陛下やジャン宰相には及ばない」
うちの父は本気を出すとこいつより上らしい。さすがだと頷きながら、もしかすると彼の指し方には父の影響もあるのかと思う。
アランはもう少し守備寄りの指し方だが、やはりシャルルに似通ったところがある。二人は意外と馬が合うかもしれない。
「やはり不用意な攻撃は避けるべきでしたね」
「そうだね。あるいは攻めるなら攻め切るべきだった。女王（クィーン）の用法には見るところがあったから、そちらを研究してみるのもいいかもしれない」
「貴重なご指南、感謝いたします」
あっさり負けた気恥ずかしさを誤魔化すように感想戦を続けていると、シャルルは「もう一局、試してみるかい？」と誘ってきた。
どうしようか、と迷ったところで、
「いや。私が代わろう。リディアーヌ、敵は取ってやる」

横で見ていたリオネルが俺に「そこをどけ」と言ってきた。
瞳には戦意が漲っており、既にやる気満々。
「リオネルさま。わたしと大差ない腕では勝算は低いと思いますが」
「お前は俺相手の勝率がだんだん落ちているだろう。こちらの方が強いのだから勝負はわからん」
「……ええと、よろしいでしょうか、シャルル殿下？」
「構わないよ。婚約者の敵を取ろうと燃えるなんてリオネルもやっぱり『男』なのだね」
許可が出たのでリオネルに場所を譲り、観戦に回る。
すると、いつの間にか周囲に人だかりができているのに気づいた。目立つところでチェスなんてやっている上に対局者が第一王子と公爵令嬢。これは見ておきたいと思った人が結構いたらしい。
俺はアンナから「大勢から見られてとても緊張したんですよ」と恥ずかしそうに耳打ちされた。
と、銀髪の小柄な少女が傍に寄って来て、

「リディアーヌ。どっちが勝つと思う？」
「ヴァイオレット。……そうね。リオネルさまに勝って欲しいところだけれど、力量と経験を考えれば難しいんじゃないかしら」
「そこは婚約者の応援で背中を押すところじゃないの？」
「剣の試合ならともかく、思考の勝負じゃあまり意味がないと思うわ」
結果、俺が応援しなかったから……かどうかは定かでないが、リオネルは兄の軍勢相手に果敢に挑みかかるも無残に蹴散らされ、プレイヤーの分身である王の駒は敵の兵士（ポーン）によって討ち取られた。
ギャラリーから「やはりシャルル様の方が上手か」という呟きが聞こえてくる。別の誰かが「お歳が違いすぎる」と反論するも「つまり年長者である第一王子が適任ということだ」とさらに誰かが反論した。何に適任か、は言うまでもない。
人の歳の取り方は一定。後に生まれた者が先に生まれた者を追い越すことはできない。よって、経験の差も埋まることはない。チェスに関してだけなら相手より長く勉強すればいいが、人生経験となれば話は別だ。
「リディアーヌ」

どうする？　と尋ねるように青い瞳が向けられてくる。俺は首を振って微笑んだ。

「リオネルさまと二人でもっと特訓が必要みたいね」

特に反論する気はないが、リオネルが勝ちたいと望むなら俺は応援する。別に王になどなりたくないと言うのならそれでも構わない。……というか、将来王妃になるなんて考えると胃が痛いのでそっちの方がいいくらいだ。

「リオネルは思い切りがいいし勘も働くが、少し考えが足りないな。強気の手に惑わされない相手と戦うためにはもう少し搦め手も学んだ方がいい」

「くっ……兄上！　もう一回です！」

「リオネルさま。今日は一局で我慢しておきましょう。……他にもシャルル殿下に挑みたい方がいらっしゃるかもしれませんし」

熱くなって再戦を希望する王子様に俺はやんわりとクールダウンを促した。俺の言葉に反応し「では私が！」と名乗り出る貴族が複数名。知的遊戯を得意とする第一王子に挑みたい者は思ったよりも多かったらしい。

「これは面白い。せっかくだ。誰からの挑戦でも受けようじゃないか」

シャルルが快く挑戦を受けたことで、人だかりはどんどん大きくなり、パーティーがお開きになるまで盤の周りから人がいなくなることはなかった。

終わる頃には日付が変わっていたのではないかと思う。城の使用人たちの勧めで城に泊まることになった俺は別室へと案内され、ひとまずソファに腰を落ち着けた。すかさずお茶と軽食が用意され、パーティー中あまり食べられなかった俺はここぞばかりにそれにありつく。

と。

「長いパーティーになってしまったな。……兄上のせいですよ」

「これは申し訳ない。弟の婚約者ともう少し交流する機会が欲しかったのだ」

同じ部屋に案内されたリオネルが兄弟らしい気安さでシャルルに抗議。肩を竦めた第一王子はワイングラスを片手に笑みを浮かべる。どうやら静かなところで飲み直すつもりらしい（というか、ずっとチェスをやっていたので彼も軽食くらいしかつまんでいない）。

いや、これ、あまり休憩にならない気がするんだが……？

思わず目を細めた俺の元に、新たな入室者を告げるメイドの声が届いた。

十一歳の誕生パーティーと王族の接近 3

「よう。久しぶりだな、リディアーヌ・シルヴェストル」
「……アルベール殿下。お会いできるとは思いがけない幸運です」
アルベール・ド・リヴィエール。
少しくすんだ金髪に褐色の瞳。身長はシャルルより高く、体格もごつくはないもののしっかりとしている。身に纏う衣装は十分な品格を備えつつも極力動きやすく作られているのがわかる。その目的は腰にさした剣を見れば明らかだ。
『あんたが来るとは思ってなかったわ』。
現在十八歳の第二王子は含意を察したらしく、にやりと笑って答えてくれる。
「パーティーは面倒だから兄上に任せた。だけど、せっかくだから挨拶くらいしておこうと思ってな」
「なるほど。この部屋は君の手引きだったのか」
直接俺たちを部屋に戻すのではなく、休憩室を用意する。アルベールはそこを訪問すれば会いたい人間にだけ会えるという寸法だ。

納得するような兄の呟きに第二王子は片手を持ち上げて、
「俺は兄上達が『こういうところ』へ引っ込むようなら教えろと命じただけだ」
「まあ、余裕のある時はよくこうして内々の話をしているからね」
だからシャルルも疑問に思わなかった。とはいえ、アルベールの命令も暗に「こういう状況を作れ」と言っているに等しい。
さらに言えば、内々の話をするための場に部外者を巻き込まないで欲しいのだが。
愛用の装飾剣を持ってくればよかったと手持ち無沙汰に思いつつ、手にしていたティーカップを置いて、
「もし兄弟喧嘩をなさるおつもりでしたら先に仰ってください。お邪魔はいたしませんので」
「しないから安心しろよ。あったとしてもせいぜい言いあい程度だ」
『いや、あのね？　口喧嘩だって喧嘩よ？』
俺はこっちの王子様とも挨拶くらいはしたことがある。その時もシャルルよりだいぶフランクというかラフな話し方だった。
第二王子アルベールは兄とは毛色が違い武闘派として知られている。なんでも

しょっちゅう騎士と稽古しているとか、遠乗りに行ったついでに狩りをして帰ってくるのが趣味だとか。実際、彼の手は手袋に覆われていてもなお太くしっかりしているのがわかる。

　そんなやんちゃ王子様は俺たちともシャルルとも別のソファへ腰かけるとメイドから赤ワインのグラスを受け取った。ちなみにシャルルが飲んでいるのは白である。

「実はそのワインは生き血……などということはありませんよね？」

「ははははっ！　ないない。肉を食っていれば血は足りる。わざわざ直に飲まないって」

　愉快そうに笑うアルベールを見てリオネルが顔をしかめる。ちなみに彼は俺と同じく紅茶だ。

「兄上は必要なら本当に飲みそうだから困ります」

「ん？　まあ、どうしても飲むとしたら処女の生き血だろうな」

「リディアーヌ。兄上に迫られたら燃やしていいぞ。俺が許可する」

「怒るなよ。冗談だって」

『冗談じゃないわよ!?』

燃やすのはまずいとしても軽く火傷させるくらいなら構わないだろう。もしもの時はそうしようと心に決めた。

愛想笑いが若干引きつるのを感じつつ俺は口を開いて、

「殿下はどうしてこちらに？　夜も遅いですし普段はお休みになられている時間でしょう？」

「だからお前と話をしに来たんだよ。聞いたぞ。チェスで兄上に負けたんだって？　不公平だから今度は俺の相手もしてくれよ」

「アルベール殿下のお相手……念のためにお伺いしますが、チェスですか？」

「いや。もちろんこっちだ。お前もいける口だろう？」

ぽん、と、腰を剣が叩かれる。うん、そうだと思った。そりゃあ確かに俺も多少は剣を齧っているが、

「わたしでは殿下には敵いませんよ」

「リオネルと二人がかりでもいいぞ」

やんわりとした断り文句をあっさり無視する王子様。むっとした弟君が俺に視線

を向けてきて、
「リディアーヌ。今度、ノエルと一緒に城へ来い。連携の練習をするぞ」
「いえ。試合を行う方向で話を進めないでくださいませ」
軽いノリに騙されているのか、あるいは相性が良い（悪い？）のか、リオネルは口車に乗せられすぎである。

と、まあ、ここからしばらく、口数の多いアルベールがあることないこと喋って俺とリオネルが振り回される展開が続いた。
第二王子様は食べる方も好きらしく、用意された軽食を酒のつまみ代わりにどんどん消費していく。減った分はさりげなく補充されているが、給仕をするメイドも大変そうである。ついでに言うと男三人――しかも王位継承権上位者が集まった空間にアンナは立っているだけで辛そうである。
いっそのこと「眠いから」で席を立ってしまおうかと思ったところで、主導権を握る王子様が「で、だ」と本題に入った。

「せっかくだから聞いておきたかったんだよ。リオネルにリディアーヌ。お前らの心づもりってやつを」
「心づもり、ですか？」
問い返すリオネル。そんな弟を見てアルベールは「とぼけるなよ」と軽く目を細めて、
「『第三王子派』とやらを利用して玉座を狙う気があるのか。あるとしたらこの国をどう動かしたいのか。そういうことだ」
「アルベール」
時折口を挟む程度だったシャルルが短く釘を刺す。しかし、その程度でやんちゃ王子は止まらなかった。
「こういうのはさっさとはっきりさせた方がいいだろ。こそこそ情報集めて、とか面倒臭いんだよ」
できればよそでやって欲しかったが、俺も対象に入っているのではどうしようもない。
それに、この王子たちは普段なかなか腹を割って話せない立場にある。

第三王子リオネルは正室の子。第二王子アルベールは第二夫人の子で、第一王子シャルルは第三夫人の子。全員、産みの母親が違うからだ。

（ちなみに正室は問答無用で第一夫人だが、第二夫人以下の序列は単に妻になった順番で決まる。国王の最初の妻は現第二夫人。空席だった正室の座を若い現王妃が射止めたのはだいぶ後になってからだった）

俺とアラン、シャルロットだって食事の時間以外はなかなか会えないのだから、別の母親がいて広い城で暮らしている彼らの場合は猶更だ。イベント事で顔を合わせる機会はあるだろうが、落ち着いて話をすることはなかなかできない。

アルベールが率直な方法を選ぶのも頷ける。

シャルルとしては予定が狂っただろう。それでも、彼はこの状況を利用することに決めたのか「わかった」と頷いた。

「だが、アルベール。ならば尋ねた張本人が先に宣言するべきではないか？」

「ああ、確かにそうだな」

ふっと笑った第二王子は赤ワインをぐいっと飲み干すと、服のポケットから魔道具を取り出した。魔力の供給によって俺たちの周囲に風の結界が生まれ、外部との

音を遮断する。アンナを含むメイドたちは慌てて結界の範囲外へと下がった。
すかさず、シャルルが同様の魔道具を取り出して結界を二重にした。念には念を入れている。話が話だけに当然か。
「俺は次期王の座を狙っている。そして、俺が王となった暁にはこの国の軍備をもっと増強し、戦争への備えとする」
こいつ、本当に言いやがった。
武闘派らしく内容も戦いに寄ったもの。もちろん、内政を行わないという話ではない。マニフェストとして何を掲げるかという話だろうが、
「他国と戦を行うおつもりなのですか？」
俺が問えば「そこまでは考えてないさ」と返ってくる。
「現状ではな。必要なら戦うし、機運も無いのに戦っても仕方ない。状況次第だ」
「純血派の台頭も原因でしょうか？」
「理由の一つではあるな。父上の対応は手ぬるすぎる。貴族に弓を引いたのなら家族もまとめて処刑するのが妥当だろう。そうでなければ余計な禍根が残る」
父親が加担していたのなら妻子も、子供が協力していたのなら両親も。親しい人

間が同じ思想である可能性は高いし、罪の重さを示す意味でも手段の一つではある。

これに対し、リオネルは眉をひそめて、

「あまりにも酷ではありませんか？　家族に秘密にしていた者だっているでしょうし、殺す人数が増えれば反発も大きくなります」

「秘密だったかどうか確かめる方が面倒だし、誤って見逃した場合は取り返しがつかない。人数が多いから殺さない、などと言えば舐められる」

「行使しない武力に意味はない、ということですか」

「わかっているじゃないか、リディアーヌ。さすが、自力で妹を救いだした女だな」

アルベールが感心したように褒めてくれる。確かに俺も舐められっぱなしは性に合わない性格だ。彼の言い分にも納得できるところがある。俺の内心も『歯向かう奴は痛い目に遭わせればいいのよ！』と息巻いているが、平和な日本で暮らしていた感覚が「やりすぎじゃないか」とも訴えてくる。

「戦争や処刑はともかく、先の一件で騎士・衛兵の不足は痛感しました。アルベール殿下はその辺りも憂いていらっしゃるのでしょうか」

「ああ。騎士の増員、および練度の向上は急務だろう。人は一朝一夕で増えるもの

ではないからな」

「増員とは具体的にどうするつもりだ？」

シャルルがワイングラスを揺らしながら尋ねた。

「婚姻や出産、騎士団への入団を王自らが命じるのか？　それこそ貴族の反発を招くだろう」

「騎士の給金や家への恩賞を増やしてやればいい。余分に子供を作っても騎士団へ入れればいいのなら勝手に励むだろう」

人手を増やすにはどうしたらいいか？　という問いに対する最も単純な答えは「給料を上げろ」だ。

シャルルに比べるとふらふらして見えるアルベールだが、やはり全くの考えなしではない。彼は彼なりに自身の得意分野から国を憂いているのだ。

「そういう兄上はどうなんだ？　もちろん王になりたいんだろ？」

「もちろん、私は物心ついた頃から『王になった時のために』励み続けているよ」

何気ない返答。そこに含まれた重みに俺は寒気を感じた。

物心ついてからずっと、なんてそれはもう目標なんてレベルを通り越している。

義務。あるいは呪いだ。

「私は先祖代々続いてきたこの国の良き伝統を受け継ぎ、平和で安定した国を次代へ繋ぎたいと思っている。侵略への備えも必要だが、より優先すべきは産業の発展と食料の生産向上、民の幸福だ」

「呑気に構えている間に攻められたら終わりだろうが」

「戦争には大量の武器と食料がいる。戦線を支えられるだけの物資を用意できなければ待っているのは敗北だ」

豊かな国を攻めるのは骨が折れる。盤上演習にも農地を発展させて兵站を増やし、兵の数をもって敵を蹂躙する戦法が存在する。兵士も騎士も身体を動かす関係上、たいていは人一倍食べるのだ。

第一王子シャルルは保守派の安定志向。

第二王子アルベールは急進派で戦への関心が高い。

平時であればシャルルのバランス感覚がとても役立つだろうが、国が乱れつつある今、アルベールの感覚こそが必要になるかもしれない。

騎士団員をはじめとする武闘派貴族の多くはアルベールを推すだろうし、国の重

臣たちは今のやり方に近いシャルルに期待するはずだ。第一王子派、第二王子派などとグループが分かれるのもよくわかる。どちらもこの国の未来を考え、意欲に溢れているからこそ簡単にはまとまらない。

そして。

「リオネル。君はどうかな？」

ここ数年、急速に勢力を伸ばしているのが『第三王子派』だ。

もともとリオネルを推していたのは臣下の中でも伝統を重んじる一派。正室の子が後を継ぐのが最も安定に繋がっていた者たちだ。

そこに俺とリオネルの婚約が決定。

以降、第三王子派の中核と見做されているのは我がシルヴェストル公爵家である。父は宰相という立場上贔屓はできないし、養母も表立って「リオネル殿下を王位に」などと触れ回ってはいないのだが、それでも最大級の後ろ盾には違いない。

もともと王妃と仲の良かったセレスティーヌの派閥や俺の仲良しグループなどもやんわりとこれを支持することで無視できない勢力となっている。

もちろん、リオネルもこの状況を全く知らないわけではない。

セルジュたちがどこまで詳細を語っているかは不明だが、自分を王へと推す者たちがいることは当然知っている。兄たちとは歳の離れている彼がピンとこないのも当然だが、時代の機運というのは成長を待ってくれるとは限らない。

第一王子と第二王子からの視線を受けたリオネルは膝の上に置いた手をぎゅっと握り、一呼吸置いてから顔を上げて告げた。

「私も王になりたい。私が望むのは皆が笑いあえる楽しい国だ」

他の王子に比べれば曖昧で現実味のない望み。

それでも、

『……言ったわね。我が儘王子様』

「ほう。それは兄上と同じように国内の安定を図るって事か？」

「わからない。それが一番いい方法ならそうする」

「なら、君の考える『楽しい国』とは何かな？」

「決まっている」

少年の視線がちらりとこちらを向いて、

「私達が民の暮らしを見て、その上で『良い国だ』と思えるような国だ」

「……リオネルさま」
いい答えだ。
その志を忘れず、いい臣下に恵まれればリオネルはきっといい王になるだろう。名君でも英雄でもないかもしれないが、いい王に。
兄二人は弟の答えをしばし噛みしめるように受け止め、それから俺へと視線を向けてきた。
「リディアーヌ嬢。君も同じ考えかな？」
「わたしは」
俺の考えは決まっている。俺にとって一番大事なことは一つだ。
「わたしは争いを好みません。ですから、わたしが望むのは争いのない国。それが無理ならば、せめて世界から『無益に人の死ぬ戦』がなくなることです」
「新型魔道具の件か」
あの件で俺の口にした見解は一部の者には広まっている。主に父であるジャン経由なので詳しく知っているのは王族がほとんどのはずだが。
あの時と気持ちは変わっていない。俺は深く頷いて、

「戦争なんてない方がいいのです。どうしても争うというのであれば、人は自らの鍛錬によって身に付けられる範囲で争うべきです。それができないというのであれば実力をもってでも排除するべきかと」
「……なんというか、物騒なのか物騒じゃないのかよくわからないが」
アルベールが苦笑し、次いでシャルルが呟くように言った。
「リディアーヌ嬢。それは、わが国が戦争を仕掛ける側であっても同じですか」
「はい」
「そりゃあ、いっそのことお前が女王にでもなれって思想だな」
「わたしに王位継承権はありませんよ」
公爵家には王族の血もたまに入っているが、その程度で継承が認められるわけがない。
ただ、この国の王族に嫁ぐ以上、俺の望みが完全な形で叶えられることはない――その事実はもう一度、受け止め直さなければならなかった。

リディアーヌと慌ただしい日々

二人だけになった後、リオネルとこんな話をした。
「リディアーヌ。お前は父上が魔道具を使って戦争を始めたら、本当にそれを潰すのか？」
「最後の手段としては考えていますが、実際そうすることになるとは思っていません。止めようと訴えることも、代案を示すこともできますからね」
不安だったのだろう。穏便な手段もあると伝えたところ、リオネルはあからさまにほっとしていた。
「ん？　……ちなみに、代案というのはなんだ？」
「個の力で戦況を変えうると示すこと。要するに魔道具がもたらすはずだった戦果をわたしが持ってくれば文句はないわけでしょう？」
「待て。どこの世界に先陣を切って敵をなぎ倒す王族がいる」
「この世界の歴史に時々いらっしゃったと思いますが……まあ、これも非常手段ですね」

兵器開発の行く末は核だのバイオ兵器だのドローンだのが示している通り、自国の兵を損耗することなく相手の兵――あるいは都市を破壊する戦争だ。そんなものあってはならない、というのは変わらない俺の信念である。

「もし、そんなことになればリオネルさまにもご迷惑をおかけしてしまいますね。……やはり、わたしは婚約者に相応しくないかもしれません」

すると、少年の手がぽん、と俺の頭に乗せられて「気にするな」と明るい声。

「お前が我が儘なのはずっと前から知っている。殺戮を望むのならともかく、人死にを減らしたいという望みくらい俺が一緒に叶えてやる」

「……リオネルさま」

「だから、その、なんだ。婚約者に相応しくないだの婚約を解消するだのと気軽に口にするな。そういうのは他に好きな男ができた時にとっておけ」

なんというか、思ったよりも俺は大事にされているらしい。

ややこしくて冷たい考えに沈みかけていた胸に温かい火が生まれる。俺はくすりと笑って「はい」と答えるとこう答えた。

「リオネルさまに好きな女性ができた時まで、婚約解消の話はとっておきます」

俺の誕生パーティーから数日後、養母セレスティーヌが出産を迎えた。
陣痛が始まったのは平日の午前中。
出産の対応は医師と助産師が協力して行い、メイドたちがその手伝いにあたる。
人手は足りているし誤って怪我でもしたら大変だからと俺やアラン、シャルロットは手伝えることもなく、事が終わるのを部屋で待つことしかできない。
「せめて一緒の部屋で待ちませんか？」
シャルロットの提案により、俺たちは食堂に集まって時を過ごすことにした。
どうせ勉強なんて手に付かない。お茶を飲んだりチェスをしたり、食事をとったりしているうちに知らせを聞いた父が仕事を放りだして帰ってきた。
「父上、城の方は大丈夫なのですか？」
「部下に任せてきた。アラン、家族の一大事に駆け付けるのは家長としての役目だ。それができないようならいっそ仕事など投げ捨ててしまえ」
「もう、お父さまったら。任された部下は大変でしょうに」

「でも、お母様はきっと心強いでしょうね」

なお、父はやたらそわそわしながら何度も妻の様子を見に行った挙句、メイドたちから「どうかお部屋でお待ちください」と食堂に戻された。

まあ、セレスティーヌとしても夫の顔を見られて多少気が楽になっただろう。

なおも落ち着かない様子の父に兄妹で声をかけ、話をしたりチェスに交ざってもらったりして時を過ごした。

「その時」はなかなかやってこなかった。

出産には時間がかかる。陣痛の間隔が短くなっていって、みたいな話は知っていたが、待つ方としてもこの長さは精神的になかなか辛い。

もしかしたら当事者の方があっという間かもしれない。ただその分、えんえんと痛みが続くわけで……やっぱり出産なんてしないで済ませられるならその方がいい、と思ってしまう。

『アルベール殿下の「騎士を増やす」政策って、女に余分に産ませる話なのよね……』

人口を増やすには医療の進歩が必須かもしれない。とはいえ前世の日本でさえ出産は一大事だったので、どこまで行ってもお手軽簡単とはいかなさそうだ。

「いっそのこと早く出て来てくれないかしら」
「まあ、こればかりは子供の機嫌にもよりますからねえ」
侍女のマリーによるとなかなか出てきたがらない子、さっさと出てきてくれる子、というのはいるものらしい。さすが経験者。
さて。
結果的に、俺たちの新しい弟は早くもなく遅くもなく、極めてマイペースに生まれてきた。
残念なことに産声は食堂まで届かなかったものの、メイドたちが活気づいたことで「その時」が来たのはわかった。
父が真っ先に立ち上がり、シャルロット、それから俺の順で後に続く。アランは「行くべきか待っているべきか」という顔で視線を彷徨わせていたので「さ、お兄さま」と俺が彼の手を引いた。
で、四人して食堂の入り口でマリーに止められ、
「出産は無事に終わりました。セレスティーヌ様もご無事でございます。皆様、どうぞこちらへ」

知らせに来たメイドの後に続いてようやく養母、それから弟と対面した。
「旦那様」
「良く頑張ったな、セレスティーヌ。無理せずゆっくり身体を休めてくれ」
「はい。……シャルロット。リディアーヌ。アランも、良く来てくれました。どうか弟に挨拶してあげてください」
セレスティーヌはさすがに疲れ切っていた。少女のようだった肌も普段ほどの艶がなく、微笑む表情もどこか弱々しい。
それでも気丈に振る舞おうとする彼女には寝ているように伝え、乳母に抱かれた赤ん坊の前に立つ。
「可愛い！　ね、可愛いですよね、お姉様？」
「え、ええ、そうね」
やっぱり俺にはあんまり可愛らしさがわからなかったが、ともあれ俺たちの弟は元気そうだった。
「初めまして。私が貴方のお姉様ですよ」
「だー」

シャルロットが声をかけると言葉にならない声で反応を示す。そういう仕草はどことなく動物的で、確かに可愛いと思える。
「父上。この子の名前は決まっているのですか？」
「ああ。……レオンだ。レオン・シルヴェストル」
「レオン」
噛みしめるように頷くアラン。それから四人で弟に「レオン」と呼びかけ、母と弟が疲れ切ってしまわないうちに退室する。
レオンの世話は主に乳母が担当する。それを手伝うのはメイドの仕事だ。
セレスティーヌは基本的に授乳だけを行うことになる。母乳の出る者を雇っているのでいざとなれば乳母が全て済ませることもできる。
「お母さまもこれで少しは休めそうね」
「そうだな。……夜泣きで起こされることはどうしてもあるそうだが」
おしめを替えたりあやしてやれば済む場合はともかく、お腹が空いているのであればどうしようもないという話。
『ミルクも代用品があればいいのにね。粉ミルクとか。……あれってどうやって

作っているのかしら？』

首を傾げてみても知らないものは知らない。少なくとも牛乳を粉末状にしただけではないだろう。それで済むならみんな牛乳をあっためて使う。

その辺がわかれば自分の時にも役立ちそうなのだが、残念なことに特に思い当たることはなかった。

「リディアーヌ様。見てください、これ。凄いですよ」

俺宛てに届けられた『贈り物』を確認したアンナがどこかはしゃぐような声を上げた。

つられて覗んだ俺は「あっ……！」と思わず歓声を上げてしまう。

工具箱のような金具付きのしっかりした箱。中には仕切りがされ、柔らかな布で念入りに保護された上で色とりどりの石が収められている。

宝石である。それも大粒の。

部屋で作業中のオーレリアも呼んで一緒に見てもらう。集中しているところを邪魔された師は若干不機嫌そうだったが、箱の中身を見た瞬間に表情を変えた。漆黒の瞳を爛々と輝かせながらすっと細めて、

「いいじゃない、これ。どうしたの？」

「シャルル殿下とアルベール殿下連名での贈り物です。友好の証に、ということで……」

この間会った際、二人から「欲しい物はないか？」と尋ねられた。なんでもいいというので「大粒の宝石」と答えた結果がこれである。

『宝石か。やはりリディアーヌ嬢も女の子なのだね』

『いえ。もちろん綺麗な宝石は好きですが、今回は魔石の製作に使いたいと思いまして』

『ふっ、ははは！　魔石か！　さすが、オーレリアの弟子だけはあるな！』

アルベールからは爆笑、シャルルからは苦笑されたが、二人は律儀にお願いを聞いてくれたらしい。

「我が家と言えどもこの大きさの石は気軽に買えないもの。お二人にはお礼状を書

かなくちゃね」
「そうですね……。カットはされていませんし透明度も均一ではありませんが、それでもかなりの高額になるはずです」
「私でも私費で買うのは躊躇するわ。原価が高すぎて売りづらいもの」
どんな宝石がいいかと聞かれた俺が出した要望は特定の属性と相性が良いことと、サイズが大きいこと。サイズは籠められる魔力量に影響するので重要である。
欲を言えば高純度かつ均質な品だと魔力効率が良くなるのだが、そんな宝石は観賞用としても高い。その点、今回贈られた石は加工賃がかかっておらず、質が一定でない分だけ値段は抑え目のはずだ。その代わりに全部で八つも用意してくれている。
「ねえ、リディアーヌ。これ、私にくれないかしら？」
「トパーズ以外なら構いませんけど……なにを作るおつもりですか？」
「特にないわ。作りたい物が思いついた時のために持っておきたいだけ」
「それでしたらご自分で買ってください」
毎週、城へ魔道具を納品しているオーレリアはぶっちゃけ物凄く儲けている。公

爵邸と侯爵邸に部屋があって生活費はほぼかかっていない以上、宝石の一つや二つ気軽に買えるはずである。

「リディアーヌ様。トパーズでお作りになるのは『石畳を作る魔道具』ですか？」

「そのつもりだったのだけれど、どうせ公爵領へ送るのなら優先すべき魔道具ができてしまったのよ」

俺の手元には完成品のファスナーがある。職人が必死に作り上げた見本を基に父が魔法で作った品――をさらに俺が見ながら自分で作ったものだ。

作ってみて実感したが、魔法で生成するのもなかなかに骨である。特に毎回精密なイメージを形作るのが辛い。「一日一個寝る前に作れ」と言われたら夜が嫌いになりそうなレベルだ。

というわけで、せっかくの大きなトパーズは魔力さえ注げば自動でファスナーを作ってくれる機械――もとい、魔道具の素材にした。

残りの石についてはひとまず保留である。

贈られてきた石の中にひとつだけ属性相性のフラットな石があったので、これは俺の魔力に最適化して便利遣いするのがいいかもしれない。今使っている装飾剣に

ひとまず不満はないので、国王におねだりした剣が出来上がったらそれに合わせてカスタムしようと思う。

「あと、問題はこの石ね……」

八つ中七つの石は特定の魔法属性と相性が良い品だった。

七つの魔法属性には一つだけ他とは一線を画する属性がある。つまり、贈られてきた石の一つも魔石にするなら相当、特別な品になるということだ。

その石、見方によって虹色の輝きを放つウォーターオパールはひとまず厳重保管しておくことにする。他の石は俺の寝室に置いた金庫（重くて持ち運べない。魔道具化しており俺が触れない限り絶対に開かない仕様）に入れておくが、このウォーターオパールだけは金庫の底に備えた隠しスペースに入れた。

そのうち何かに使うことがあるかもしれない。それまで大事に眠っていて欲しいものである。

魔道具作りと並行して、俺は国にとって自分にできることがないかを考え始めた。

極めて利己的な発言をしてしまった罪滅ぼしというわけではないが、国王や父が頑張っているのをただ見ているだけでは申し訳ない気がしたのだ。

特に気になるのは平民から貴族への心証。

全員が全員ではない。ただ、一部の平民が貴族に対して反感を抱いているのは事実。おそらく純血派はそういう人間の心をさりげなく――世間話や酒場での雑談レベルで煽ることで対立ムードを盛り上げているのではないだろうか。

平民側に立って扇動しているからこそ、これは効果的だ。

貴族側からこの動きを止めるのはかなり難しい。いや、止めるだけなら「国政や貴族への不満を言っただけで罪」とかやればいいんだが、それだと明らかに圧政である。

何かもう少し穏便な手段で平民感情を掴めないか。

考えた末、ひとつのアイデアを思い付いた俺はある日の夕食時に父へと相談した。

「お父さま。平民向けの学校を作ることはできないかしら？」

結論を言うと、学校設立のアイデアには難色を示された。

リディアーヌと慌ただしい日々 2

平民向け学校というアイデアは却下された。

俺が考えたのは安価あるいは無償で多くの子供を受け入れ、読み書きや計算、国の歴史などを教える――いわば小学校のような施設だ。

ポイントとしては道徳、つまり思想教育を含むこと。教師が「皆さんの暮らしていられるのも、こうして勉強ができるのも貴族様のお力あってのものなのですよ」と教えることで自然と次世代の人間たちに忠誠心が根付く。

学園という教育機関が既に存在しているので学校の概念は説明するまでもない。

平民街にも個人レベルで運営されている私塾はいくつかあるらしいので、それの大きいやつだと言えば平民にもわかりやすいだろう。

意外といけるんじゃないかと思ったのだが、

「……すぐに実現するのは少々難しいだろうな」

「やっぱり、平民に学をつけさせるのは危険だから？」

現状、平民の中には字の読めない者がかなりいる。本を読むこともできない彼ら

は「他の思想」というものを取り込みづらい状態にある。日々の暮らしをしていくので精一杯で、革命だの反乱だのを起こそうなんてそうそう考えない。

下手に知恵をつけさせると逆に反抗的になるのでは、という考えはあって当然だ。

「それもあるが、資金的な問題も大きい」

「……ああ、そっちね」

学園の運営費は王国からの補助金と各貴族からの寄付金が大部分を占めている。日本の私立学校でもそういうところは多いはずなのでこれは珍しいことではない。

重要なのは学校運営にそれだけのお金がかかるということ。

もちろん、平民用の学校に学園と同じ設備は必要ない。とは言え収容人数の多い校舎と机や椅子、勉強道具を準備し、教員にも人件費を支払わなければならない。我が家単独で始めるのはもちろん、国政として行うにしても「オッケー、じゃあ来年から始められるように準備するわ」とは簡単に言えない。

「考えとしては悪くない。むしろ検討する余地はあるだろう。こちらで嘆願書を作成して受理しておこうか？」

「いえ、嘆願書ならわたしが書くわ。その方が喜んでくれる方もいるでしょうし」

「ああ、陛下は確実に喜ぶだろうな」

意見としては受け付けるし相応に検討もするが、決定には時間がかかるし予算的に承認されないことも覚悟しておけ、とのこと。

まあ仕方ない。衛兵の増員および新型魔道具の確保という優先事項があるのだ。こんな時に平民に金を割けるか、という意見も間違ってはいない。

となると、

「うーん……もう少し規模を小さくしてうまくやる方法はないかしら」

発想のヒントが欲しくなった俺は差し入れを用意し、屋敷の兵士たちに聞き取り調査を行うことにした。

参加した兵士たちは軽食に舌鼓を打ちつつ嬉々として答えてくれる。

「貴族様の飯は美味いですし、料理屋を開くのはどうですか？　もちろん、店の名前にお嬢様の名前を入れて」

「剣の訓練場はどうです？　強くなりたい男はいっぱいいますし、見込みのある奴はそのまま兵士に勧誘すればいいじゃないですか」

「いっそお嬢様が歌って踊るとか」

面白いアイデアがぽんぽん出た。ただし歌って踊るのは除く。容姿と美声をたっぷり生かして目立つというのはなかなか魅力的だが、俺が定期的に公演するとか忙しすぎて死ぬ。

どれもなかなか面白く、一方で決め手がない。そんな中、

「学校って、字とか教えてくれるんですよね？　ちょっと孤児院に似てるな」

「孤児院？」

「はい。俺はもともと孤児だったんですけど、孤児院にいた母ちゃん――先生が『名前くらいは書けるようになっておけ』って勉強を教えてくれたんです。簡単な計算も教えてもらったので、給料をもらえるようになってからも店で変なぼったくりに引っかかりませんでした」

「なるほど、孤児院ね。いいわね、それ」

孤児院にいる子供たちには親がいない。どのような教育を施すかは担当者および出資者が決められる。

文字通り生殺与奪の権限を握っているのだから自然と貴族の恩恵を理解するだろうし、成長した者の中に見込みのある者がいれば引き抜くこともできる。

既に運営されていて金に困っている孤児院へ話を持って行く形なら学校と違って設備投資は少なくてすむ。面倒を見る人数もぐっと減るから俺の私費でもなんとかなるかもしれない。

これを父に相談すると、

「それはセレスティーヌの方が詳しそうだな」

というわけで、養母の方へ。

産後で疲れているんじゃないかと思ったら「むしろ、休め休めと言われて困っているくらいです」と快く相談に乗ってくれた。この女も大概ワーカホリックである。

ひとまず俺のやりたいことと動かせる金を明確にまとめた上で、王都にある孤児院のリストやその内情を知らないかも含めて相談してみると、

「良いと思います」

「本当ですか？」

「ええ。孤児院の運営――慈善事業に携わるというのは知名度向上に役立ちます。リオネル殿下の婚約者は幼いながらも慈悲深く、国の将来を憂いていると噂を流すこともできるでしょう」

「少々過分といいますか、都合が良すぎる気もいたしますが……」
「気にすることはありません。親を失って困っている子供を助ける。それが善行であることに間違いはないのですから」
　真の善だろうと偽善だろうと、実際に助けられた子供たちにとっては救い主に等しい。
「運営費は貴女の私費だけでは少々心もとないでしょうが、それについても問題ありません。ファスナーやホック、スナップボタンの収益の一部を流用しましょう」
「それは……甘えてしまって良いものなのでしょうか」
「発案者はリディアーヌなのですから、貴女には利益を受け取る権利があります。ファスナーに至っては製造の魔道具まで担っているのです。それを家の事業として提供してもらっている以上、むしろ甘えてもらわねば困ります」
　そういうことならとありがたく頂戴することにする。
「孤児院の一覧と概要についても頭に入っていますが、少々古い情報ですのであらためて収集、精査した上で教えましょう。既に貴族家の出資を受けている施設も多いはずですし、金を横領するような者が主であればすげ替える必要もありますから

ね」

「お養母さま、休めと言われているのでは？」

「部下に命じ、後は手紙を二、三通用意する程度です。どうということもありません」

「いえ、細かい文字を追うのは意外と神経を使います」

手紙はセレスティーヌの専属に代筆してくれるようお願いした。ワインの件も知っているせいか、彼女も以前に比べてだいぶ俺への当たりが弱くなった。快く了承してくれたどころか、言われなくてもそのつもりだと微笑んでくれたくらいである。

こうして一週間もしないうちに孤児院の情報が集まり、俺とセレスティーヌはその中から立地が治安の悪い地域に寄り過ぎておらず、担当者に悪い噂がなく、かつ特定のオーナーのいない施設をピックアップした。

「このようなところへわざわざお越し下さり、誠にありがとうございます」

孤児院は錆の浮いてきた金属製の門の奥、最初は白かったであろう少々薄汚れてきた外壁の建物を本拠としていた。

管理人室だというさして広くない部屋の中、向かい合って座る。ソファはだいぶへたってきていてあまり座り心地が良くない。

院長は五十代の平民女性。もともとは豪商の次女だったらしい。作法や表情には教育を受けてきた者特有の雰囲気がある。美人だったであろう整った顔立ちは加齢と苦労によって少々疲れた印象になってしまっている。

対するこちらは余所行き用のドレスに身を包んだ俺とアンナ、エマ、オーレリアとメイドが勢揃い。家からの護衛も何人か連れている。セレスティーヌがまだあまり外出できないのでその分、こちらを大きく見せるためにも人数を連れて行け、ということになったのだ。

俺とオーレリアがいればたいていの非常事態はなんとかなる。平民の刺客程度なら一ダースや二ダースは余裕である。

「ご存じかとは思いますが、当院は私が若い頃に立ち上げたものです」

公爵令嬢という肩書き（あるいはそのバックにいる両親）に怯えているのか、少々

硬い声で院長は話してくれた。

博愛精神に溢れていた彼女は父に頼み込んで孤児院運営を始めた。おそらく商人である親としては名声アップの狙いもあったのだろう。実家からの資金援助もあり、当初は何の問題もなく運営が行われていた。

「ですが、兄へと代替わりしてからは実家の資金繰りも綱渡りになり――また、兄が孤児院へいい印象を持っていなかった事から援助金は年々減っていきました」

資金繰りに奔走したものの、なかなか継続的な出資者は現れなかった。良い返事がもらえたかと思えば院にいる子供が目当て（主にいかがわしい意味で）だったりして受けるに受けられない。子供たちの面倒を見ながらできる内職程度には十分な収入にはならず、一定の年齢に達した子供たちを外へ働きに出し、その稼ぎを利用することでなんとか食いつないでいるような状態なのだとか。

院長はため息をついて、

「巣立って行った子供も多くなり、昔に比べて子供の数も減りました。ご覧になられた通り掃除や設備の修繕も足りておりません。『見返り』を期待されているのであればもっと良い出資先があるかと存じます」

彼女には前もって手紙で用件を伝え、使者を出して訪問日程のすり合わせも行っている。なのであらためて細かい説明をするまでもなく話が通じた。

本当にうちなんかでいいのか、と言っているように思える台詞だが、実際のところは「下心のある施しなら不要」という拒絶に近い。これまでの経験から警戒されているのだろう。失礼にならないギリギリ、あるいはギリギリ失礼な口ぶりである。

ノエルがいたら院長を睨んでいたかもしれないが、俺は笑顔でスルー。精一杯奮発したであろう（我が家で飲んでいるものよりはかなり質の落ちる）紅茶を口にした。

魔法で毒消しをしているので確実ではないが、異物混入はされていないようだ。

「あら。見返りを求めるのは当然じゃないかしら？　問題なのはその種類がどういったものか、でしょう？」

「それは……」

「単刀直入に言うわ。わたしは婚約の決まっている身の上だから火遊びなんてできないし、シルヴェストル公爵家に子供を弄ぶような下卑た趣味の持ち主はいない。わたしが求める見返りというのは名声、それから成長した子供たちの活躍よ」

「……活躍、ですか？」

ようやくこちらに興味を持ってくれたらしい。院長の表情がだいぶ柔らかいものになった。

「ええ。子供たちには将来役に立つような最低限の教育を受けてもらう。その上で『就職先』の斡旋を行うわ。優秀な人材は男の子なら衛兵、女の子ならメイドか下働きとして屋敷で雇ってあげる。お抱えの商人や職人への口利きもできる」

「願ってもない話ですが、それでは見返りとして少なすぎるのでは？」

「ええ。だから、子供たちにはきちんと話して欲しいの。わたしの出資によって彼らの生活が成り立っていること。この孤児院にはわたしの庇護があることを。その結果、子供たちが自発的にわたしへ感謝してくれるようになれば理想的ね」

「つまり、名声ですか？」

「そうよ」

ずっと年上の相手にする態度かと思いつつも、ここは上位者としての態度を敢えて押し出していく。どのみち俺は悪役令嬢なわけだし。

「この国の平民には貴族への感謝が足りていないと思うの。だから、貴族が直接的

に平民を救った事例を増やしたい」
「ですが、子供達に考えを強制するのは……」
「染めるほどに強制するつもりはないわ」
心配そうに表情を曇らせる院長。
彼女へ向け、俺は軽く目を伏せて告げる。
「嫌な言い方をしてごめんなさい。子供たちを心配する気持ちもわかるわ。……親を亡くした子供の辛い気持ちも少しはわかるつもりよ」
「え？」
「現公爵夫人であるセレスティーヌ様は後妻です。前妻であるアデライド様はリディアーヌ様が五歳の時に亡くなられています」
「それは……」
はっとするような表情。
彼女には打算も含めて隠さず話すより、人情に訴えた方が効果がありそうだ。少々卑怯なやり方だが、別に嘘を言っているわけでもない。
「……大変失礼な事を申し上げました。心よりお詫び申し上げます」

院長はテーブルに額がつきそうなほど深く頭を下げてくれた。腰が心配になるので止めて欲しいと思いつつ「頭を上げて」と声をかける。

顔を上げた彼女は何か迷うような表情で俺を見て、

「私は子供達を守りたいのです。あの子達が不幸になるような事は本当にありませんか？」

「ないわ。……と言いたいところだけれど、幸せなんて人それぞれだもの。住むところも食べるものも着るものもあって教育を受けさせてもらえるからといってそれが幸せとは限らない。無責任な事は言えない。ただ、衣食住は公爵家の名にかけて保証します」

院にいる子供たちは現在二十人ちょっと。出てこないように言われていたのか直接会うことはなかったものの、道中、隠れて様子を窺っている子と目が合うことはあった。

重篤な栄養失調に陥っている子はいないものの、痩せていて服もあまり状態が良いとは言えなかった。

「後は院長の判断次第よ。口にした内容が必ずしも真実とは限らない。笑顔で嘘を

言う人間はいるものよ。だから、わたしが信用できないと思うのだったら断っても構わない。考える時間が必要なら日を改めるわ」

俺の言葉のどこが決定打になったのかはわからない。

ただ、院長は真摯な表情を浮かべてもう一度俺に頭を下げてくれた。

「公爵家に――そして、リディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢様に感謝と忠誠を。どうか、この孤児院の主となってください」

こうして、孤児院が俺の所有物となった。

契約が正式に締結され次第、一か月分のお金と平民用の清潔な服、それから手っ取り早く食べられるパンや果物を運び込んだ。

一緒に挨拶に行ったら子供たちはおおむね大喜び。一部に生意気な子もいたが、まあ、そこはひとまず長い目で見ようと思う。

普段の管理は院長にそのまま任せ、警備員代わりに我が家の私兵を数名ローテーションで派遣する。正しく運営がされているかの確認はお抱えの執事が定期的に訪問して実施してくれることに。俺は彼の報告を聞いて指示を出しつつ、一か月おきくらいに訪問するのが主な仕事だ。

なお、一月後くらいに実際に赴いたところ、孤児院の壁は掃除が行われてだいぶ綺麗になり、門の錆も一生懸命に落とされてだいぶマシになっていた。

リディアーヌと慌ただしい日々 3

「お姉様はどう思われますか？　アルベール殿下とシャルル殿下のこと」

俺の誕生パーティーやらセレスティーヌの出産やらでごたごたしている間に、シャルロットの下へ二人の王子からお茶の誘いが届いた。

お茶会、ではなく「お茶」の誘い。

加えて言えば連名ではなく別々に、だ。行ってみたら複数の令嬢がいて蚊帳の外でした、なんてことはおそらくない。むしろ護衛や使用人がいる以外は一対一である可能性が高い。

困ったシャルロットは両親に相談し、俺たちには夕食時に父から通達があった。

両王子はシャルロットを妻に欲しているのか。

仮に義妹がどちらかの王子と良い仲になった場合、シルヴェストル公爵家は第三王子派という立場を崩すことになる。派閥としてはかなり痛い。王子様に見初められたい、というのは義妹自身の望みでもあるので悪辣な手とも言い難い。

男としてのシャルル、アルベールの性格はわからないが……人としては目的意識

を持って努力する王族であり、姉である俺としても忌避感はない。

もしかするとシャルロットを厚遇することで俺からの心証を良くしておくことで、もしシャルロットとの結婚が成らなくとも俺とリオネルの婚約が解消になった際、俺に求婚することができる、などという意図もあるかもしれない。

政治的な判断はなかなか難しい。

姉妹で王子に見初められるような事態になれば他家からのやっかみも加速するだろう。そう考えれば断ってしまうのも一つの手ではあるものの、父と養母の選択は「シャルロットの意思に任せる」というものだった。

現在、王位継承の有力候補とされているのは第三王子まで。

三人のうち二人の妻を我が家から出せれば、どちらかが未来の王妃となる可能性が高い。その上で姉妹で協力し、互いの夫を「仲良くさせる」ように動けば国政をよりよい方向に動かしていくことも可能だ。

なので、別にどっちへ転んでも悪くはない、という判断である。

ただ、任せると言われたシャルロットは困ったらしい。夕食後、俺を部屋に招いた上で眉を下げ、意見を求めてきた。

どうしてアランには聞かないのかと尋ねれば「お兄様はきっと反対すると思うので」とのこと。彼もなかなかのシスコンなのでさもありなん。義妹的にも恋愛の話を異性にするのは躊躇われるお年頃だろう。

そこまで把握した上で、俺は「そうね……」と考えて、

「シャルル殿下は好いた相手に粘着質なところがあるかもしれないわ。逆にアルベール殿下は情熱的に求めて来そうだから、前もって覚悟しておいた方がいいんじゃないかしら」

「い、いったい何のお話ですか……っ!?」

真っ赤な顔をして怒られた。俺より一つ年下とはいえ、男女の営みについてはもう軽く触れる程度には知っている。幼さゆえの潔癖も手伝って少々刺激の強すぎる話題だったらしい。

「ごめんなさい。……でも、あらかじめ考えておくことも必要よ？　男というのは親しい相手にだけ別の顔を見せることもあるから」

「見てきたように仰いますが、お姉様はリオネル殿下との関係を『覚悟』されているのですか？」

「ええ、まあ。なんとなく、リオネルさまの場合はわたしがある程度、方向性を支配できる気がするから」

「……お姉様でしたら確かにできるかもしれませんね」

遠い目になったシャルロットは息を吐く。「お父様もそうなのでしょうか」と呟くのが聞こえたが、それについては俺にもなんとも言えない。意外と情熱的だったりするかもしれないし、意外と淡白だったりするかもしれない。

最近のセレスティーヌなら教えてくれるだろうか？　いや、興味本位で聞いたが最後、父への感情が変わってしまいそうなので止めておこう。現状でさえ「チャイナドレス風のランジェリーで興奮して子供ができました」とか考えると「お父さま……？」ってなるし。

「お父さまも言っていたけれど、最終的にはシャルロットの気持ち次第よ。まだ本当に『そういうつもり』かどうかもわからないし、もしそうだったとしても、あのお二人なら悪いようにはしないでしょう」

「でも、お二方ともいいお年頃なのに、お相手がいらっしゃらないんですよね？」

「表向きには婚約者がいるからでしょうね」

シャルルは王弟の娘の一人と、アルベールはシャルルの妹と婚約関係にある。

この婚約は令嬢たちからの求婚を避ける目的で行われた偽装、あるいは情の薄い関係であるということが広く知られている。いかに嘘っぽくても婚約者がいる以上、令嬢たちも不用意には近づけないため、両王子は浮いた話から守られているというわけだ。

そのとばっちりもあって第三王子であるリオネルが大量の求婚を受けたわけだが――うん、そう考えるとあのお気楽王子様にもわりと同情したくなる。

「長年、隠れ蓑にされているお二方も大変ではないかと思うのですが……」

「彼女たちの思惑も本人に聞いてみないことにはわからないわね。もしかするとオーレリアのように結婚に興味のない方かもしれないし」

我が師である黒髪黒目の魔女ならば「邪魔をしないこと」を条件にさっさと婚約を受け入れただろう。実際、隠れ蓑にされてもおかしくなかったと思うが、そうならなかったのは母親との一件から外聞が良くないと判断されたからだろうか。

「シャルロットはどうしたいの？　王子様に求婚されるの、夢なんでしょう？」

「お姉様。私はお姉様に釣り合う女性になりたいだけで、王子様なら誰でもいいわ

けではありません。素敵な方であれば王族でなくともいいのです」

　少々不服そうに主張してくるシャルロット。心配しなくても今の時点で十分、引く手あまたの美少女だと思うのだが。

「シャルル殿下とアルベール殿下、どちらか気になる方がいるなら受ければいいし、そうでないなら断ってしまいなさい。幸い、王国には今、五人も王子様がいるわけだし」

　ちなみに現在第四王子は十歳、第五王子は七歳である。思想が定まり切っていない上、歳が近いためコントロールしやすいという意味でも彼らの方がシャルロットの相手には向いているかもしれない。

　俺の答えになっているか怪しい答えに、シャルロットはしばらく考えた後で一つの結論を出した。

「お茶のお誘いはどちらもお受けしようと思います。ですが、もし求婚のお申し出があった場合にはよほどの事がない限りはお断りします」

　やっぱり、義妹はだいぶ強くたくましくなってきたような気がする。

「ねえ、師匠？　今までに城へどのくらいの新型魔道具を納品したか憶えていますか？」

ある日の夜。

お仕事モードを終えて寝間着を纏ったオーレリアと向かい合い、重要な質問を投げかけてみる。

いつも通り漆黒の双眸を誇るように煌めかせながら、我が師はふん、と笑って、

「もちろん憶えているわ。けれど、極力口外すべきではない事項ね」

「そこをなんとかお願いします」

「主人の命令とあらば仕方ないかしら」

再度頼むと案外あっさり、しかも若干嬉しそうに答えてくれる。

まあ、王家としてもルフォール侯爵家と俺個人には漏れる前提だろう。俺に関しては魔道具製作の現場自体、覗こうと思えば覗ける環境なわけだし。

盗聴防止の魔法を起動後、オーレリアが口にした具体的な数字は、

「威力二割増しにした改良型火球の腕輪が二十。魔力吸収の装身具が五。自動防御

の装身具が同じく五ね」

「……結構多いのですね」

王命が下ってからここまで半年と少し。このままのペースなら王の定めた優先期間である三年で百以上の火球の腕輪が出来上がることになる。

魔力源である新型魔石は付け替えが可能なので、腕輪は破損しない限り再利用が可能。そう考えると既に魔力消費なしで火球を放てる騎士、あるいは火球の魔法を用いる衛兵が二十人が向こう数十年は用意できるわけだ。

二十人を三グループに分けて三段撃ちでもさせれば戦場における効果は絶大だ。何しろ飛ぶのが金属の弾ではなく火球だ。着弾箇所で爆発して周囲にも被害を及ぼす。ちょっとした爆弾を発射しているようなものであり、一発で二、三人くらいは倒せてもおかしくない。

「本格的な戦争となれば心許ない数。ですが、同数の戦力で対峙した際、あの魔道具がいくつかあるだけで戦果が大きく変わってきます」

「加えて言えば、宮廷魔法師達も必死に分析をしているはずよ。優秀な人間なら新型魔石くらいはもう安定して作れるようになっているでしょうね」

「師匠が教えたのですか？」
「いいえ。魔道具の納品は命じられたけれど、作り方を教えろとは言われていないもの。忙しい中教えに行く分、割り増し料金を請求したら『自分達でなんとかする』ですって」
『さすがとしか言いようがないわね、漆黒の魔女』
お陰で俺としては助かった。リバースエンジニアリングは我慢するとしても、製作者自らにほいほい技術を広められたらたまったものではない。
安堵した俺を見て、オーレリアはくすりと笑って、
「安心しなさい。『魔女』として技術の安売りはしないわ。……それに、貴女も嫌がると思ったもの」
「師匠」
「でも、個人の魔力には限りがあるわ。貴女の行こうとしているのは茨の道よ、リディアーヌ」
俺は量産された新型魔道具に個の力で勝ろうとしている。それはつまり、魔石が続く限り撃ち続けてくる相手と己の魔力だけで競うということだ。

こちらも新型魔石を使う、という選択肢は（その魔石が自作だとしても）極力避けたい。結局魔道具の方が強いんじゃないか、と言われるのは嫌だからだ。

しかし、

「わかっています。……それでも、わたしだって『魔女』ですからね」

笑って言えば、師は満足そうに頷いてくれた。

「それでこそ、リディアーヌ・シルヴェストルね。それで？　具体的にはどうするつもり？」

「新しい魔法を考案しながら剣の修行をします。個の戦力を高めるには白兵戦も重要ですからね。あとは、日々回復する魔力はできる限り使い切る方向で。少しでも魔力を伸ばすつもりです」

「今までと変わらないじゃない」

「別にこちらからどこかへ喧嘩を売るつもりもありませんし。……というか、師匠こそ身体を鍛えたらいかがですか？」

「嫌よ。私は魔法の研究をする方が性に合っているわ」

重い物など持ったことのなさそうな師の細い指が白くすべすべしたお腹に触れ

る。あの時の腹パンを示唆しながら意味ありげに笑うのは止めて欲しい。二度は上手く行かないぞ、という意味なのか、それとも。

「確かに貴女の場合、剣の腕や格闘術も磨いておくに越したことはないでしょうね。本気を出せばノエルに勝てるからと言って、騎士が一目置いてくれるかは別の問題だもの」

「そうですね」

剣の稽古では未だにノエルに手も足も出ないが、ノエルと本気の殺し合いになった場合にはおそらく数秒のうちに俺が勝つ。光の魔法をしこたま撃ち込んでやればそれで終わるからだ。オーレリアが言っているのはそういう話。単騎での殺傷能力において騎士は《魔女》に敵わない。

しかし、腕っぷしで勝負しない相手の力を騎士は軽く見る傾向にある。「いくら魔法が強くても殴られたら避けることもできないんだろ？」という相手に少しでも納得してもらうためにも剣を学んでおくのは有効だ。

「いっそのこと私設騎士団でも作ったらどう？　魔法師団でもいいけれど」

「悪くはありませんけど、陛下に忠誠を誓うのであれば既存の騎士団と変わりませ

んし、誓わないのであれば単なる反乱分子ですからね」
「ある意味、反乱をしようとしているのは間違いないじゃない」
「そうですけれど」
ただ強いだけの個人だから見逃してもらえるのであって、組織になったら普通は前もって潰される。
どうしてもやるなら組織というより、本当にごく少数の信頼できる仲間だけで密かな盟約を結ぶ感じだろう。協力してくれるかも？　という人物の顔も一人二人くらいなら浮かばなくもないが……さすがに「いざとなったら王家を裏切って戦って」とは言いづらい。
『そもそも裏切るのは最終手段なんでしょ？　悩んでも仕方ないんじゃない？』
そうなのだが、そうと言い切ってしまっていいものなのか、というか。
状況によっては本気で動かないといけなくなるんじゃないか、というか。
学園に入学するなり、リオネルと結婚するなりしてしまえば逆に悩まなくて良くなるのだが。祖父の言っていた「結婚した後なら」という言葉にあらためて納得してしまう。

「孤児院の運営もありますし、現実的でない考えは置いておくしかありませんね」

雑多かつみっちり詰まったタスクをこなしつつ日々を過ごしているうちに、また王都に冬がやってきた。

リディアーヌと慌ただしい日々 4

「お風呂が豪華になって幸せが増したわ……」

大浴場で湯に浸かるようになってから数か月。

今日も今日とて入浴から帰ってきた俺は、火照った身体を包む幸福感に深い息を吐いた。貴族としても元日本人としても入浴は必要不可欠な行為である。

日々俺の入浴を手伝っているアンナも笑顔で頷いて、

「はい。あれはちょっとした暴力ですね……」

公爵家の大浴場はもともとかなり豪華だ。適温に調整された湯が循環する仕組みと石造りの広い浴槽が備わっており、一流ホテル並みと言っていい。

入浴のたびに複数人のサポートがついてきて視線のやり場がないこと、俺の身体を洗うのにメイドたちが自然と身体を押し付けてくること以外は十分すぎる環境なのだが、せっかくなのでもっと便利にしたいと、両親の許可を得て新たな設備を追加した。

上から適度な温水が降り注いで全身の汗を流してくれる設備、シャワーである。

当初はゴムを使おうと考えていたのだが、学校やスポーツ施設なんかだと固定式のもあったしひとまずそれで良いのでは？　と思い直し、貴族家向けの高級じょうろに使われている金属製のパーツを流用、液体を細かく降り注がせられる仕組みを大浴場の一角に取り付けた。

魔道具で再現する関係上、水とお湯の二種類だけで温度調節はきかないものの、これの効果はなかなかに劇的だった。注いだ分の魔力が切れるまで何もしなくても湯が降ってくるので楽だし気持ちいい。都度湯を汲んで使っていたアンナたちメイドの助けにもなっている。

「立った状態のリディアーヌ様を洗わせていただくのがとても楽になりました」

「湯の入った桶を持ち上げるのも少々大変ですし」

「傾けすぎるといっぺんに湯がかかってしまうので加減が必要で……」

メイドたちが（俺を洗ったついでに）自分で使う時も全身くまなくさっと洗えるということでとても好評だ。

女性らしく綺麗好きなセレスティーヌやシャルロットはこのところ入浴時間が少し長くなっているし、アランも「身体を動かした後にさっと汗を流したいんだ

が……」と、自室の浴室にシャワーを取り付けられないか俺に相談してきた。

ああ、体育の後のシャワーは格別だよな、と快く了承して取りつけてからは剣の稽古に前より身が入っているらしい。せっかくだからと俺の部屋とノエル用の部屋にも取り付けたところ、これは確かに日中汗を流したい時に便利である。

（なお、オーレリアは自分で作って自分の部屋に取り付けた。アンナは魔力的に厳しいからと辞退した）

「サウナの方も好評ですよ。特に旦那様は毎日のように入られています」

「お父さまはあれがとっても気に入ったみたいね。新しい玩具をもらった子供みたいで可愛いわ」

シャワーのついでにサウナも作った。熱い霧を作り出す魔法具によるミストサウナである。

普通の霧を作る魔道具はもともと戦闘用などに使われているので、アレンジとしては霧の温度を上げただけ。さほど目新しいものではないが、意外と反響が大きかった。

「南方の熱い地域では熱した石などを使って行われていると聞くが……魔道具で代

用する方法があったか。これならば使用人の仕事をいたずらに増やすこともないな」

これに関してはエマがこっそり「サウナの掃除はメイドの仕事ですが」とこぼしていたが、仕事で忙しい父が喜んでいるのでそこは勘弁してやって欲しい。

サウナと言えばダイエットにも効果が高い。

これを伝えたところセレスティーヌの目の色が変わった。

「お養母さまは全く太ってらっしゃないでしょう？」

「今は授乳のためこれまで以上に食べなければならない時期なのです。レオンが離乳食に移行した後は体型を戻さなければなりません」

なるほど、やっぱり出産の影響は大きいらしい。

貴族の中にはカロリーの高い食事を摂りすぎて太り気味の者もいたりするので、そういう人にもサウナは喜ばれるかもしれない。

「それは良い情報ですね。口にする時期は慎重に選ばなければ」

「そうだな。私もサウナについてはまだ口を閉ざしている」

上手くやればこれも家の利益になる。できれば販売用の魔道具がいくつか出来上

がった後で噂に上らせたいということで、俺とオーレリアはお小遣いをもらって追加のシャワーとサウナを作った。

シャワーの先端は既製品を購入したが、本体（？）の金属部分はアランが作ってくれた。

「僕にも手伝わせて欲しい。金属を扱う魔法も練習しているんだ」

ファスナーの件で「自分も作れるようにならないと」と練習メニューに追加したらしい。魔石の作成も併せて少しずつ練習しているそうだ。

一方、シャルロットはというと、俺の見ている前で光の明るさを無段階調節できるまでに成長していた。

「どうですか、お姉様……？」

光を消して心配そうに尋ねてくる彼女に、俺はにっこりと笑顔を返す。

「ばっちりよ。もうあの時の長い光も普通に再現できるんじゃない？」

すると義妹は少し考えてから「やってみます」と頷いた。

光魔法の訓練用に厚手のカーテンで明かりのほとんどを遮った部屋。ぼんやりと互いの姿が見える程度の空間の中、シャルロットが片手を壁の一点に向けて――。

眩く直線的な光が周囲を照らしながら壁へとぶつかった。

ぱっ、と、天使のような顔立ちに笑顔が浮かぶ。

「できました……！」

「やったわね、シャルロット。これだけできれば他の魔法に応用するのも難しくないでしょう」

「本当ですか？　お姉様の光の攻撃魔法も使えますか？」

「あれは色々危険すぎるから護身用にはして欲しくないけれど……例えば短くて強い光を放って目くらましにするのはどう？　相手の動きを止めたり逃げるチャンスを作るくらいはできると思うの」

「なるほど……」

これはすぐには難しかったものの、イメージの助けとなる具体的な情景を挙げることで上手くいった。

「朝、カーテンを一気に開けたりすると『眩しい』って思うことがあるでしょう？

あんな感じで他人の目を眩ませるの」

「カーテンの……それなら、できるかもしれません」

俺たちは光を直視してしまわないようにしつつ何度か練習すると、シャルロットは閃光の魔法を発動させることができた。やっぱり光系統の魔法に関してはかなりの才能がありそうだ。

「これならお姉様のお役にも立てそうです」

「そうね。でも、使う時は気をつけてね？　敵も味方も関係なく目くらましになるから、できるだけ味方の後ろで、前を向いている敵に使うようにしなさい」

「かしこまりました、お姉様」

まあ、目くらましが必要になるような状況は無い方がいいのだが……シャルロットがたいへんやる気なので、次の課題は拘束用のロープをどうにかする魔法、それが終わったら走って逃げる時のための身体強化ということになった。

この調子で成長されると学園で魔法を学ぶまでもなく十分な腕を身に着けてしまいかもしれない。

「少し早いけれど入学おめでとう、ノエル」

俺の専属騎士であるノエル・クラヴィルは無事に学園への入学資格を得た。

まあ、資格と言っても試験があるわけではなく、貴族の子息・令嬢であり、かつ所定の入学金を納めれば基本的に許可が降りるのだが。

そうだとしても入学がめでたいことに変わりはない。俺はノエルへの入学祝いをしっかりと渡した。

卒業パーティー襲撃の件で作った防御のチョーカーの改良版。派手すぎず地味すぎず、プライベートでも護衛中でも使えそうなデザインで、仕込んだ魔石は気合いを入れて作った一品だ。

急造品だった前のチョーカーに比べると魔力効率および防御性能に優れている。

これならつけっぱなしにしていてもノエルの魔力なら十分賄えるし、騎士であるノエルは不意の一撃さえ防げれば後は臨機応変に対処ができる。

物理防御、魔法防御、毒耐性それぞれ一回ずつをコンパクトにまとめた形がおそらく彼女にはジャストフィットである。

「ありがとうございます、リディアーヌ様。大切に使わせていただきます」
「ええ。機転のきく相手なら一発目で防御を破った後、そのチョーカーを狙うでしょうから。そのまま首まで貫かれないように気をつけて」
「肝に銘じておきます」
また、日頃のお礼や旅行のボーナスも兼ねた贈り物として剣も贈った。
正確に言うと現物はノエルの指定した鍛冶師に依頼中で、後から嵌めこむ魔石も製作中だが、代金は先払いで俺が払った。
ノエルは「普通の剣で構わないんですが……」と言いつつ、堪えきれないというようにニヤニヤしていた。気持ちはよくわかる。服を仕立てるのは半分ノルマになりつつあるものの、俺だって前世ではスマホを買い替える度にカタログを眺めてニヤニヤした。
「ですが、私が学園に入ると護衛が心配です」
学園在学中は平日のうち五日間が勉強で潰れる。寝泊まりするのは実家でも俺の屋敷でも騎士団の宿舎でもなく学園の寮だ。
高校のように時間割がびっしり埋まるのではなく大学のように行きたい講義を選

択する形式だし、実家等からの通いが認められていないわけではないものの、俺のスケジュールに合わせて講義を履修するとか毎日俺の屋敷まで帰ってくるとかは正直ノエルの負担になりすぎる。

休日、たまに護衛してもらうくらいはあるにせよ、しばらく専属騎士としての役割はお休みである。

「しっかり学んで強くなるのも騎士としての使命よ。気にしないで頑張りなさい」

「はい。剣も魔法もあらためて鍛え直したいと思います。……それはそれとして、後任が気になるのも事実なのですが」

「後任というか穴埋めね。そっちはまだ検討中らしいわ」

第三王子の婚約者で、しかも実際に襲われた経験が二度もある公爵令嬢。

実績のせいでノエルが選定された時より条件が厳しくなっている。付けないのは論外だし、できれば正規騎士から人を出したいところだが、例によって女性騎士は人手不足。下手な者を付ければ派閥等の不都合が起きかねない……ということで、国王も騎士団長も色々手を考えているらしい。

と、いう話をクラヴィル伯爵家で開かれたノエルの入学記念パーティーにて話し

ていたところ、四人もいる兄たちが寄ってきて、
「我々であればいつでも喜んで護衛の任に就かせていただきます」
「お兄様方、男性は論外です。というか、既に専属が決まっている方まで交ざらないでください！」
ノエルが身内相手だからか、いつもより可愛らしく怒った。
兄たちはさすが騎士の家系、いかにも体育会系といった感じのさっぱりした人たちだった。背が高く引き締まった身体で、俺から見るとかなりの威圧感がある。ただ、剣を振る関係上ムキムキマッチョという感じではないし、顔は貴族らしく整っている。
例えるなら剣道部のイケメン男子、といったところか。
俺への態度も「高貴なお嬢様」と「妹の友人」の中間といったところで、変な下心とかは感じない。声をかけてきたのも親しみを込めた冗談という意味合いが強そうだ。
「俺はまだお仕えする方がいないし、妹の主人に手を付けるほど節操無しじゃないぞ」

「結婚していても他の女に手を出すのが男という生き物でしょう」
「ノエル。まさか俺がそんな男だと思っているのか？」
「もしそんな男だとわかったらお兄様とは絶交です」
「それだけは勘弁してくれ」
なるほど、愛されてはいるがとても暑苦しい。
このノリで代わる代わる四人に来られたらうんざりするのもわかる。それでいてノエルも完全に嫌がっているわけではないのがなんというか、ああ家族だなあ、とほのぼのした。
「騒がしい家で申し訳ございません、リディアーヌ様」
「クラヴィル夫人。いいえ、とても温かくて楽しそうなご家庭だと思います。きっとご両親の教育が良かったのでしょう」
「光栄でございます。私達としても自慢の子供達なのですが、今回はお役に立てそうにありませんね。リディアーヌ様の護衛代理、良い方が見つかる事を祈っております」
「ええ、ありがとうございます」

ノエルの母親は騎士ではないらしく、普通の貴族女性だった。ただし、男の子四人を育てながら夫の制御までしていただけあって気が強くしっかりした感じの人だ。はきはきとした喋り方が心地いい。性格的に俺と相性が良いのかもしれない。

『もし騎士経験があったらこの方にお願いしたかったくらいだわ、残念』

せっかくなので色々と話を……と思っていると四人の兄たちやノエルの父（何度か会った騎士団の副団長だ）が話しかけてきてその都度話が中断される。別段邪魔をされているわけではなく、気安いノリの時はこれが普通のリズムらしい。

「本当に騒がしい家で申し訳ございません」

重ねて告げられたお詫びの言葉には苦笑いを返すしかなかった。

ノエルの代わりの件、クラヴィル夫人は自分からも知人に話を通してみると約束してくれた。そして、その甲斐があったのか、俺の新しい護衛はそれからしばらくして決定したのだった。

新しい護衛騎士

「モニカ・モンターニュと申します。こうしてお目にかかる事ができ光栄でございます、リディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢様」

新しい護衛と引き合わされたのは、学園の入学式が行われる数日前のことだった。

屋敷の自室。

オーレリアやノエルも傍に控える中、数名の騎士と共に現れたのは紺碧の髪と瞳を持った一人の女性だった。騎士装を纏い、腰に剣を差している。

カーテシーではなく男性のそれに近い一礼の後、にこりと笑顔を浮かべる彼女。

ノエルとは印象がだいぶ違う。年齢的にもだいぶ上。情報によると現在四十一歳。

ただ、高位の貴族ほど若作りなので歳相応には見えない。

俺は彼女にカーテシーを行い、形式的に自己紹介を行った上で礼を告げる。

「このような役目を引き受けてくださり、誠にありがとうございます。まさか、モニカさまほどの方が名乗り出てくださるとは望外の喜びです」

「モニカ、で構いませんわ、リディアーヌ様」

結婚して大きな子供もいるご婦人らしい柔和さで答えてくれるモニカ。
確かに、これから主従となるのであれば呼び捨てるのが当然なのだが、
「騎士団長の奥さまを呼び捨てというのは、なかなか緊張してしまいます」
「慣れていただくしかありませんね。お気になさらず。私など、出産を機に騎士を引退し感覚を取り戻し切れていない中年女に過ぎません。夫の肩書きなど護衛としての働きとは関係ありませんわ」
『いえ、あなた、自分だって十分凄い血筋でしょうに』
モニカの祖母は先々代国王の妹だ。
つまり、現国王やリオネルたちとも遠い親戚にあたる。王族の基本条件である「国王から数えて三親等以内」からは外れているものの、実家の家格は（元王族であるため）我がシルヴェストル公爵家よりも高い。
侯爵位を持ち騎士団長職（権限的には宰相と同格）に就いている夫の権威があってもなくても礼節を以って対応すべき相手である。
彼女に白羽の矢が立ったのは選定が難航していたのと、ノエルの母が護衛探しに動き出したのが原因だった。

『適任者が見つからないのでしたら私がやりましょう。そうすれば、貴方から「誰か良い者はいないか」と毎日愚痴を聞かされなくても済みますもの』

騎士団長から愚痴られた副団長から愚痴られた兄から聞かされたノエルの話によると、そんな一言があったとかなかったとか。

お屋敷で紅茶を嗜んでいる方が似合いそうなおしとやかな美貌と裏腹に、彼女は結婚後子供ができるまでは騎士団に所属していたらしい。剣の腕もなかなかのもので、王族の血に由来する高い魔力による身体強化も交えて活躍、当時はもっと低かった女性騎士の地位向上に一役買ったそうだ。

しかもぶっちぎりで年上。

さすがに若干気遅れしてしまうが、そんな俺を見たモニカは困ったように首を傾げて、

「私では不服でしょうか？　でしたら夫に一言苦言を呈した上で別の者を連れてまいりますが」

「不服などもちろんありません。ですから、旦那様を叱るのは止めてくださいませ」

慌てて謝った後、呼び捨てにするのは誓いの儀が済んでからということにしても

らった。

「では、誓いの儀を済ませてしまいましょう」

セレスティーヌにも見届け人になってもらい、モニカの剣を受け取って肩へ当てる。

あらかじめ心づもりをしていたお陰か、それとも成長したお陰か、ノエルの時のように重くて落としそうになることはなかった。

儀式は無事に終了。

前任者であるノエルも「モニカ様でしたら何も言う事はありません」と素直に引き継ぎに同意してくれる。彼女の場合はモニカの武勇伝があってもなくても兄の背を追いかけていたはずだが、それはそれとして憧れの存在ではあったとのこと。

「三年という短い期間ではございますが、剣を捧げた以上、命に代えてもお守りいたします」

「あなたというかけがえのない騎士が命を落とすことのないよう、わたしも精一杯励むわ、モニカ」

儀式の後は細かい条件の確認や俺、ノエルとの模擬戦などを行った。

もともと、そろそろ復帰したいと身体を鍛えていたというモニカ。「まだまだ勘が鈍っています」とのことだったが、俺はもちろんノエルも彼女には歯が立たなかった。

公爵家相当＋αの魔力もさることながら、その熟練の風格が手の内を読ませてくれないのだ。そのくせモニカの方は簡単にこっちの手を看破してくる。

「私は水と心の属性を持っております。そのせいか、人の心理を推測するのは得意分野なのですよ」

「あら。意外といるのね、二重属性の人って」

「高い魔力を持つほど発生しやすいようですから、高位貴族においては稀というほどでもありませんね」

三つ以上の属性を持つ者もたまーにいるらしい。なお、オーレリアの全属性は言うまでもなく超レアである。

と、ノエルが少々興奮した様子で、

「モニカ様が凄いのは属性だけではありません。治癒魔法の使い手としても名を馳せていらっしゃるのです」

「恥ずかしながら、怪我の治療に駆り出された事は幾度となくございます。名を馳せるというのは言い過ぎですが……そうですね、戦いの傷に関してはそれなりの腕だと自負しております」

治癒魔法を学んだのは怪我をした人を見ていられなかったから、騎士を心ざしたのは怪我する人を一人でも減らしたかったからなのだとモニカは語った。

「立派だわ。モニカには足を向けて寝られないくらい」

「勿体ないお言葉です。単に性分だっただけのことなのですよ。属性の影響かもしれません」

なんでも、水属性の者は治癒魔法に興味を持つことが多いらしい。

治癒魔法自体は属性が多いほど扱いやすくなるという厄介な魔法なのだが、おそらく水の属性持ちが性格的に向いているからなのだろう。大成する術者は水属性持ちが多い。四肢の欠損さえ治すオーレリアも（当たり前だが）水属性を持っている。

「逆に水属性持ちの騎士は多くありません。モニカ様の存在はとても貴重だったと聞き及んでおります」

「水属性は温厚な方が多いものね」

アンナやヴァイオレットが好例だ。

「水は時と場合によって姿を変えます。大雨が降れば濁流になりますし、尖った氷は生き物を傷つけることもあります。大きく降り積もった雪は街を閉ざして人々を凍えさせるでしょう？　同じように水属性の中にも様々な人間がいます」

「そうね。火属性だって見るからに苛烈な人間ばかりじゃないわ。お母さまは暖かな暖炉の火のような方だったと聞いているし」

水属性っていうか毒属性なのでは、という女も一人知っている。

「モニカも穏やかな中に激しいところを秘めているってことね。そのうち、そういう一面も見られるのかしら？」

「そうですね。リディアーヌ様やノエルが剣の腕前を上げていけばそういうこともあるでしょう」

穏やかに笑ったモニカは「ですので」と続けて、

「よろしければお二人の指導役を務めさせてください。現状の腕前では一人前と呼ぶのに不都合がございますから」

その申し出にはどこか有無を言わさぬ迫力があった。

俺もノエルも発展途上の身。鍛えてくれるのはむしろ望むところではあるのだが、なんだろう、そこはかとなく怖い。

それでもその場は「お願いします」と答え――俺たちは後に知ることになる。こと戦闘関連において、モニカが「物腰柔らかな鬼軍曹」であることを。

「では、本日より護衛の任に着かせていただきます。前もってお伝えいたしました通り、週に一、二度家へ戻る時間をくだされば後は自由にお使いください。お屋敷内に一室をお貸しいただければ泊まり込みでの護衛も問題ございません」

「助かるけれど、本当にいいのかしら？　家庭内の差配もいろいろとあるでしょう？」

「信頼できる者に任せてあります。使用人達についてもこういう時のために鍛えてまいりましたし、夫も泊まり込みの多い立場です。滞りなく運用が行われているか定期的に確認できれば十分かと」

「それは本当に助かるわ」

部屋はノエルに時々貸していたところを使ってもらうことにした。

騎士団長夫人を使用人部屋に押し込めるのもどうかと思ったのだが、「リディアー

ヌ様の部屋から遠くなる方が問題です」とモニカ。
　ノエルの私物もさほど多くはない。寮の部屋に移してもらえばちょうどいいということで落ち着いた。ノエルがこっちに泊まる時は客室を準備すればいいだろう。
「それじゃあ、ノエル。学園で充実した時間を過ごせるように祈っているわ」
「はい。名残惜しいものがありますが、気持ちを切り替えて励みます」
　そうして、季節は春へと移り変わった。

「久しぶり、リディアーヌ。会いたかったわ」
「クロエも。元気そうで良かった」
　学園に入学する者は身近にもう一人。
　公爵領で知り合った親戚にして友人――クロエ・シルヴェストルが新しい屋敷の住人として我が家へとやってきた。
　仲良くなった相手との再会に俺やシャルロット、アランは喜び、クロエも父やセレスティーヌとの対面に緊張しつつも一緒に暮らせることを喜んでくれた。

入学にあたっては寮へ入る道もあった。むしろその方が通学時間がなくて便利ではあるのだが、そうしなかった理由はというと、

「良妻賢母を目指すため、セレスティーヌ様へ教えを乞いたいからよ」

クロードの第二夫人の座を絶対射止める、という熱意が凄かった。

「お養母さまは確かに良妻だけれど、きっと厳しい道のりよ？」

「構わないわ。クロード様からの寵愛でソフィに勝てないのなら実務面で攻めなくちゃ。公爵領の役に立って手放せない人材と認められるのよ」

生後半年程度のレオンがいる難しい時期に迎える新しい住人。とはいえクロエは身内であり利害が一致している。念のためセレスティーヌによる面談、およびモニカの心の魔法を用いた意思確認も行われたが、何の問題もなくOKだった。

むしろ俺的にはいじめ、もとい厳しい指導でクロエが泣かないかが心配である。

セレスティーヌは体調もだいぶ戻り、屋敷内での活動を中心として復帰している。クロエの申し出にも意外と乗り気で「では、最初の大仕事として結婚式の手配をお願いしましょう」と言っていた。

「やっぱり、クロードとソフィは我が家で結婚式をすることになったのね」

「ええ。ジェラール様から公爵様へ念話でもお伝えしているし、手紙でも伝えた通りよ。二人からの伝言としては『また会えるのを楽しみにしている』って」

「わたしもとっても楽しみだわ」

結婚式は秋に行われる予定だ。ソフィの実家とも無事に話がつき、結婚が認められたらしい。反対されても押し通す気満々の様子だったけれど、認められたのなら猶更めでたい。

招待状の送付は既に始まっており、その相手にはなんとリオネルも含まれている。旅から帰ってきた後の土産話で結婚の話をしたところ「俺も出たい」と言い出したので招待客に加えてもらったのだ。

貴族が結婚する際は城へ両人の名前や式の日時、場所などを伝えるのが習わしになっている。これは王族なら誰でも何人でもウェルカムという意味を含んでいるものの、王族が本当に参加することは極めて稀。そこまで織り込み済みの伝統であり、それとは別に名指しの招待を行うことは王族からそれだけ目をかけられているという証明となる。

王子が参加することになってクロードとソフィも胃が痛いだろうが、何しろ公爵

領の次期管理者の結婚だ。王族から誰かが出てくるのはそうおかしな話ではない。

『会場がわたしの家なら実際、リオネルさまが来るのが一番自然よね』

「そうそう。それとは別にクロードから手紙をもらっているわ。送ってもらった魔道具のお礼と、それから、牧場に埋めた魔道具があったでしょう？　あれが思ったよりも有効だからいくつか作って欲しいって」

魔道具の効果範囲だけ牧草の生育が早く、羊たちも喜んでいるらしい。他の牧場にもあると便利なので暇を見つけて作って欲しいそうだ。羊たちのため、クロードたちのためならできる限り力になってやらなくては。

「クロエ、羊が恋しくはない？　大丈夫？」

「ええ。……正直、今から恋しくて仕方ないわ。ねえリディアーヌ、このお屋敷で羊は飼えないわよね？」

「無理をすれば飼えなくはないでしょうけど、敷地内は大半が石畳だし、庭の花を食べられたらさすがにお養母さまも怒るんじゃないかしら」

花をもぐもぐされた怒りを羊にぶつけるセレスティーヌ――少々見てみたい気もするし、俺としても羊の癒し効果は是非とも欲しいのだが、クロエと顔を見合わせ

て「止めておこう」と意見を一致させた。

さらなる異変

孤児院の朝は早い。

院で飼っている鶏が最初の一鳴きを上げると、院の子供達はもぞもぞと身を起こし始める。十歳にしてここでの生活が五年目になる少女――ルネもまた眠い目を擦りながら起床した。

院では「自分の事は自分でする」「一人でできない事は助け合ってする」のが決まりだ。食事の支度などの家事も自分達で行わなければならない。もっと寝ていたい欲求を無理やり押さえつけ、寝床を軽く整えてからベッドを降りた。

同じ部屋にはルネも含めて四人の少女がいる。

歳はバラバラ。ルネはこの部屋では二番目で、女子全体だと七番目になる。一番上の姉（もちろん血は繋がっていない）やお母さん（正式には院長だが、みんなお母さんと呼んでいる）によると「昔はもっと小さい子が多かった」らしい。

部屋のベッドはずっと昔から大事に使われているという二段ベッド。ルネの場所は左側の上段だ。あちこちボロボロで大きく身動きするだけで軋む音がしていた

が、しばらく前からそれはなくなった。下に降りるためのはしごも丈夫になったので、横着して直接飛び降りる必要ももうない。

（あいつのお陰、なのよね）

下のベッドで寝ている妹を起こし、何人かで協力して水汲みをする。冷たい水で順番に顔を洗い、櫛で髪を整えながらルネは思った。

あいつ、というのはお母さんに代わって孤児院の「所有者」になったという少女だ。

リディアーヌ・シルヴェストル。

公爵令嬢、というのがどういうものなのかルネにはよくわからないが、とにかく「とっても偉い貴族様」らしい。確かに、いったいいくらするのか想像もつかないような綺麗なドレスを着て、思わず見惚れてしまうような紅の髪と瞳を持っていて、さらに肌はすべすべだった。見ただけで自分達とは住む世界が違うのだとわかったし、何人もの大人が彼女を守るように目を光らせていて少し怖かった。

それでも、ルネが最初に感じたのは少女への反感だった。

ルネにとって、この孤児院はお母さんのものだというのが当たり前で、それを貴

族が買い取ったと言われても　お母さんがいじめられたのだとしか思えなかった。
　実際にはお母さんはお母さんのまま孤児院に残ってくれているし、リディアーヌは食べ物や水、服などを持ってきてルネ達に振る舞ってくれた。
　水を汲む桶も、髪を整える櫛も新しいものになった。それどころかリディアーヌは魔法でベッドや井戸自体をも修理してくれた。
『さすがに大きい物はすぐには無理だから間に合わせだけど、これでしばらくはもつんじゃないかしら』
　なんて言っていたが、ベッドは五年前に来た時よりもずっと綺麗な状態に戻っていた。しばらくどころか十年以上は使えるだろう。
　孤児院へお金をたっぷりくれたお陰で食べるものにも困らなくなった。
　鶏も増えたし、その鶏を盗まれる心配もしなくてよくなった。
「おじさん、おはようございます！」
「ああ、おはよう。みんな今日も元気そうだな」
　リディアーヌの家の兵士が三人ほど孤児院に住み、朝も夜も交代で見張りをしてくれているからだ。彼らは暇があると小さい子達と遊んでくれたり家事を手伝って

くれたりもする。お陰で子供達はほぼみんな懐いている。

全部、リディアーヌのお陰だ。

足りないお金を賄うため、夜になると「お仕事」へ向かっていた最年長の姉達も院にいてくれるようになったし、兄達が無理な仕事をして身体を壊す事も少なくなった。

それでも、ルネはリディアーヌの事があまり好きではなかった。

「みんな、今日はリディアーヌ様がいらっしゃる日です。失礼のないようにお出迎えをしましょうね」

「はーい！」

だから、朝食の時間にお母さんからそう告げられても一人、浮かない顔をしていた。

ふくれっ面のまま院内の掃除をし、姉に「月に一度のお出迎えなんだから」と良い服を着せられる。可愛い服を着られるのは嬉しいが、口をついて出るのは文句だった。

「別に、いつもの服でいいのに」

「駄目。リディアーヌ様のお陰でこんなに生活が良くなったんだから」
「みんな『リディアーヌ様のお陰』ばっかり。そんな事言って、きっとそのうち『あいつのせいで』って言う日が来るんだから」
「ルネ！」
姉に頬を引っ張られ「貴族様にそんな事言ったら殺されちゃうんだからね！」と怒られた。ルネだってそれくらい知っている。街で貴族を見かけても絶対に失礼をしてはいけない。最悪「目つきが気に入らない」程度でも平民を殺せるのが貴族だからだ。
しかし、
（あいつはこのくらいじゃ怒りもしないじゃない）
リディアーヌ・シルヴェストルは暴力を振るうどころか院の子供達に笑いかけ、時間があれば一緒に遊ぶ事さえある。年少の子のなんでもない話を楽しそうに聞くし、月に一度の訪問日には必ず美味しいお菓子を持ってきてくれる。
ルネがぶすっとしたまま受け答えしても悠然と微笑んでいるだけで怒りを露わにした事なんて一度もない。

それに、

（私達を殺すのは貴族だけじゃない）

ルネの両親は五年前――ルネが五歳の時に物盗りによって殺された。「隠れていなさい」「絶対に声を上げるんじゃないぞ」と言って木箱の中に押し込められていたルネだけが辛うじて生き残り、こうして孤児院へと引き取られたのだ。

言いつけ通り木箱から出なかったルネは両親が殺されるところを直接見てはいない。しかし、物盗りの荒々しい声と母の悲鳴、父の上げる怒りと苦痛の声は彼女の耳にもはっきりと届いた。そして、全てが終わった後の『現場』も、見た。

続くと思っていた幸せは一夜にしてあっけなく崩れた。

だから、リディアーヌが何の前触れもなく豹変し、この孤児院をめちゃくちゃにすることだってあるかもしれない。そして、それを予見できるのはルネだけなのだ。

「こんにちは、ルネ。元気にしていたかしら？」

「……見ての通りです」

だから、ルネはリディアーヌに恭順しない。

自分は疑っているのだと示し続ける。それくらいしか彼女に出来る事はない。せ

めてそれくらいはしないといけない。
リディアーヌはいつも通り意に介した様子もなく「そう」と微笑んで、
「ルネはとってもいい子ね」
「どこが」
反論が考える前に口から出ていた。姉が「ルネ！」と悲鳴を上げて口を押さえてくるも、出てしまった言葉は取り消せない。
（殺されるかな？）
そうすれば、すっかり懐柔されている院のみんなも考え直してくれる。リディアーヌ様はひどい、と口を揃えて言うようになるだろう。
口を押さえられたままきっと睨むようにする。
殺すなら殺せ。強い感情は少なくともある程度は伝わったはずだが、ぽん、と、柔らかい手が頭に乗せられて、
「一人でも『信用できない』って言う子がいれば、他の子も『そうかもしれない』って考えられるでしょう？　そうやって頭の片隅で疑い続けることで誰かの身を守れるかもしれない。なら、それはとてもすごいことよ」

「っ」

見透かされている。

お前の考えなんてお見通しだから無駄な事は止めろ、とそう言いたいのだろうか。敗北感から余計に反抗的な気持ちを覚えながらリディアーヌを見て――その微笑みに毒気を抜かれた。

（良い人のフリをするなら、いっそのこと一生続けなさいよ）

ふん、と顔を背けてその場を離れる。リディアーヌもそのお付きもルネを追ってくることはなかった。

彼女達は暇ではない。群がっていく子供達の相手がある。遠巻きに見ている分には平穏無事に過ごす事ができる。それに、こうして院のみんなの楽しそうな顔を見るのも悪くはないのだ。

「やっぱり、リディアーヌ様は本物の方が綺麗！」

「当たり前だろ。っていうかあの絵、あんまり似てないじゃねえか」

話はリディアーヌ様の肖像画、というか似顔絵の話に移ったようだ。

最近、街では貴族の肖像画が流行している。と言っても、貴族のお墨付きをもら

えるような絵師の作ではない。せいぜいがそうした『本物』の作品を誰かが模写したもの。悪ければ模写の模写とか、模写の模写の模写とかそういうものだ。

ただ、質が悪い分だけ値段も安い。

使う絵の具の種類を減らしてさらに値下げしたものなどもあり、平民でも手に取りやすくなっているため、この孤児院でも「リディアーヌ様の絵が売っていたの！」と誰かが買ってきて話題に上っている。最近では買った絵を元に自分で描くのも流行しつつあるらしい。

（まあ、実際、本物の綺麗さには絶対敵わないわよね）

美しさばかりは認めなければいけない。

同じ女として少々釈然としないものを感じながらも、ルネはリディアーヌと子供達のやり取りを眺め続けた。

◆　◆　◆

「平民の間で貴族の肖像――それも、粗悪品が流行しているみたい」

何度目かの孤児院通いから帰ってきた日の夕食時、俺は両親に子供たちから聞いた話を伝えた。

なんでも「貴族様のお顔を知る事で感謝の気持ちを育てよう」などと言って露天商などがこぞって販売しているらしい。

孤児院の子はそれを本当に感謝や尊敬の気持ちから買ってきて日々眺めたり、似顔絵を描いたりしていたらしいのだが、

「頼み込んで現物をもらってきたわ。アンナに持たせてあるから、食事が終わり次第見せるけれど……正直、あまり似てないのよね」

俺の肖像画は毎年、新しいものが製作されている。

成長の記録を残すのだと父がうるさいので最低でも年一回は絵師が呼ばれて絵を描かれているのだ。モデルになるのも楽ではなく、何時間かただ座っていないといけないのであまり気が進まないのだが『写真のない時代だと確かに貴重よね』という想いと、そういえば母も肖像画は多かったな、という想いから渋々引き受けている。

父がどうしてもと言うだけあってオリジナルの肖像画は出来が良く、俺としても

納得の完成度なのだが、院で見せられたそれはぱっと見「誰？」と言いたくなるくらい微妙な感じだった。

『描いた絵師を「本物を見たことがあるのかしら？」と問い詰めたいくらいには不本意だわ』

しかし、単に似ていないから不快だという話がしたいわけではない。

「お父さま。この流行が意図的に作られた可能性はない？」

「……その可能性は私も懸念している」

先日、平民街にて、貴族の肖像を傷つけた罪で一人の男が捕縛されたのだという。家や個人を象徴する品――肖像画や紋章などを故意に傷つけた場合は罪に問われる。王族関係なら不敬罪として重罪、貴族関係でも基本的に罰金や労役などが科せられる。

「その者を尋問したところ、街で肖像画が流行していると言う。そこで、人を使って状況を探らせている」

「じゃあ、状況によっては？」

「陛下からお触れを出していただこうと思っている。明日にはおおよその結果が纏

められて上がってくるはずだ」

　さすが、仕事が早い。

　と、シャルロットが首を傾げて、

「似ていない絵が出回ると困るから、ということですか？」

「それもある。似ていない絵によって大衆が勘違いを起こせば、顔を勘違いされた貴族に不利益が及びかねないからな」

　本物が偽物扱いされたり、似てないと馬鹿にされたり。怒った貴族が馬鹿にした平民を殺害、なんて事件も起こりかねない。

「捕縛された男のように肖像を傷つける者を減らす必要もあるわ」

「犯した罪は償わせなければならないが、平民を大量に捕らえるのはこちらとしても本意ではないからね」

　アランが頷いて捕捉してくれる。

　父も「うむ」と厳かに答え、さらに言って、

「最大の問題は、この流行が貴族への尊敬ではなく逆の感情を育ててしまいかねない事だ」

似ていない絵を放置すれば、似ていない絵があってもいいと暗に認めることになる。

似ていない絵を元に「もっと似ていない絵」を描く者も増えるだろうし、それが容認される土壌が出来上がっていってしまう。

そうなれば、今度は絵の取り扱い自体も軽視されかねない。

似ていない似顔絵が道端に捨てられたり、失敗作だからとずたずたに裂かれて捨てられたり。最終的には「抗議の意味で肖像を傷つける」行為のブームを招くかもしれない。

待っているのは平民の大量捕縛。これを貴族の横暴と考えた平民がさらなる抗議として行為をエスカレートさせれば――最悪、国家の破滅だ。

「微妙に似ていないのも厄介よね。実在する人物だとは思わなかった、とかシラを切られるかもしれないし」

「絵の正確性が損なわれていけば判断する側にもブレが生じる。愉快な話ではないな」

一部の者をダシに使ってでも反貴族ムーブを作り出そうとするやり方。

もしかして、これも純血派の仕業なのだろうか。

さらなる異変 2

『美術品の贋作製作は法で禁じられている。また、王族・貴族の似顔絵をみだりに描いてはならない。不敬と判断した場合には罪に問う事もある』

国王の名の下に肖像画販売に関するお触れが出された。これは街の各所に書面で張り出される他、衛兵が家を一軒ずつ知らせて回る。当然、街のあちこちで噂になるので「知らなかった」は通用しない。知らない方が悪い、で終わりである。

同時に絵を販売した商人や絵の購入者にも「贋作と知っていたのか」や「絵の制作者は誰なのか」等の尋問・聞き込みを行う。

貴族家が画家に依頼して描かせた絵には本物の証として家の紋章が押される。

贋作だとわかって販売・購入した場合ももちろん罪になるが、紋章は腕のいい贋作師なら偽造が可能だ。まさかいちいち魔石を埋め込むわけにもいかないので真似られてしまうのはどうしようもない。真贋を見極められなければ一発アウト、などというのはさすがに厳しすぎるのであまり重い罪には問えないだろう。

描いた絵師についても果たして本当の情報を知らされていたかどうか。

違法な複製品や粗悪品に関しては適宜押収する。しつこく新しい品が出回ればその都度取り締まっていくしか当面は手がない。

「これでまた平民が大勢捕まるのか。……なんなのだ、我が国の民はそんなに捕まりたがっているのか？」

恒例になったリオネルとの交流会。この日の話題は珍しく楽しい話ではなく、目下の問題に関する愚痴となった。

「今回の件については難しいところですね……。普段あまり意識することのない法律ですから、多くの民にとっては『そんなことで罰せられるのか』という意識だったかもしれません」

「だが、売った側は知っているべきだろう」

「組合に登録している正規の商人は知っているべきですが、違法品かどうかの見極めは専門知識の量によります。それに、露天商の中には敷物一枚で不用品を売っているようなモグリもいるのですよ」

出自も良くわからない代わりに安値で物を売るこうした露天商は案外、金に余裕のない庶民の味方だったりする。一般庶民なんて「安くて物が良ければ盗品だろう

が構わない」くらいのスタンスの者の方が多いのだ。
「不心得者がわざと流行を作り出そうと思えばできてしまう、ということではないか」
はあ、と深いため息を吐いてテーブルに頬杖をつくリオネル。
幼い王子が国の現状を憂いている。成長を感じられる一幕だけに「行儀が悪い」と注意しづらいのか、お付きのセルジュは微妙な表情で直立していた。
俺も『まあ、頭が痛いわよね』と思いながら紅茶を口にして、
「お触れが出された以上、それ以降に続けている者は取り締まることができます。しばらくすれば流行は止まるでしょう」
「そして、大量の捕縛者が出た事に不満が募るわけか」
「罪は罪ですから、取り締まらないわけにもいきませんし」
純血派の構成員のように全員が無条件で重罪、というわけではない。絵を買っただけの者のほとんどは厳重注意で済むだろうし、売った商人もせいぜい罰金だろう。
懲役が付くわけでも殺されるわけでもないのだからそれくらい我慢しろ、と言いたいところだが、まあ、平民の中には自転車操業的に日々を暮らしている者も多い。

少額の罰金でもダイレクトに響いて立ち行かなくなったりもするかもしれない。
　文句を言うな黙ってろ、と言うのも無理がある。
「リディアーヌ。何か良い策はないのか？」
「あったらお父さまに提案しています。この件は魔法や魔道具でぱっと解決するようなものではありませんし」
　コピー機的な魔道具を作ってオリジナルの複製を直接販売する、とか頑張ったらできなくはないかもだが、その精巧な複製を「偶像の破壊」という反貴族活動に利用されたりしたらたまらない。
　リオネルは遠い目になって椅子へと背を預けた。
「……私としては、絵が広まって皆に顔が知られるのなら悪くないと思うのだがな」
「その結果、広まった絵を見た平民から『もっと不細工だと思っていた』などと言われたらどう思います？」
「もの凄く腹が立つ」
「でしょう？　……それに、そうならなくとも、買った絵を皆が大事にするとは限りませんからね」

孤児院の子供たちは俺の絵を喜んでいた。
彼らには「ちゃんとした絵を用意して院内に飾らせる」と約束して納得してもらったが……みんながみんなそうした代案を与えられるわけではない。
庶民の娯楽を一つ潰してしまったというのは心苦しいところだ。
俺も少々遠い目になって、
「いっそのこと本当に歌って踊ってみましょうか」
「なんだそれは？」
「いえ、家の兵から民の心を惹きつけるための策として提案されまして……」
簡単に説明すると、王子様は「なるほど、見世物か」と頷いた。
「私も何度か見たことがある。芸の達者な者を城に招いて広間などで見る形だったが……セルジュ、平民の間でもああいう娯楽はあるのか？」
「吟遊詩人や芸人が広場などで芸を披露し、投げ銭を回収する、といった事は時折行われております。平民の貴重な娯楽の一つですね」
吟遊詩人にしろ芸人にしろ一箇所に定住している者は少なく、多くの者は旅をしながら芸をして日銭を稼いでいる。そのため、いつどんな見世物があるかは運次第。

前世にて歳のいった親戚から聞かされた伝説の『紙芝居屋』とかもそんな感じだったのだろうか。

『あら？　紙芝居屋はともかく、意外と面白いんじゃないかしら』

「リオネルさま。見世物を用意して人心を掌握する、というのは良い策かもしれません」

「む？　私の雑談が役に立ったということか？」

「ええ。とても役に立ちました」

俺はにっこりと婚約者様に向けて微笑んで、

「さっそく今日の夜にでもお父さまへ相談……いえ、せっかく城にいるのですからこの場で提案書を仕上げて提出すれば良いかもしれません。リオネルさま。案の詳細を詰めるのにご協力いただけますか？」

笑いかけられたリオネルは「急だな」と苦笑しながらも頷いてくれる。

「よかろう。だが、提案書は連名にするぞ。お前と私の名があれば読まずに捨てられるような事にはなるまい」

「感謝いたします。ではまず、どういった見世物が適しているか、という問題です

が……」

使用人に紙とペン、インクを用意してもらった俺は椅子をリオネルの隣へと移動させ、納得のいく案が出来上がるまで二人で話し合いを続けた。

残念なことに、俺とリオネルの出した案がそのまま採用されることはなかった。費用対効果も考えたつもりだったものの、実現は少々難しいということで形を変えて採用となった。シャルルやアルベールが提出した解決策も参考にした良いとこ取りで決定された『見世物』の内容は、

「騎士による公開試合、か」

場所は王都の広場。

人の多く集まるその場所に特設の会場を用意し、衆人環視の中でトーナメントを開く。優勝した者には褒賞と共に類稀な実力の持ち主だという栄誉が贈られる。

平民の見物料は無料。貴族用の席も設けられ、そちらに関しては席のグレードに応じて料金が徴収される。そんな内容の手紙を自室に受けた俺は、なるほどと思っ

た。

「試合とはいえ現役騎士同士の戦いならそれは見ごたえがあるでしょうね」

俺から手紙の内容を聞いたアンナもこくりと頷いて、

「騎士の戦いを無料で見物できるだなんて、平民が少し羨ましいくらいですね」

確かに。

貴族が参加しようと思ったら金がかかる上、平民からジロジロ見られるというリスクまで犯さなければならない。最悪、暴動が起きて巻き込まれる可能性だってあるのだから不公平だと思うのも無理はない。まあ、平民に交ざって立ち見ができる貴族なんて多くはないだろうが。

『ヴァイオレットならできるかしら？　人目を惹く美人の癖に気配を消すのが上手いのよね、あの子』

オーレリアにもこの話をしたところ、彼女も感心していた。

「平民に息抜きを与えると共に示威行為にもなる、と。アルベール殿下の考えが取り入れられた結果かしら」

騎士の戦いを目の当たりにすれば多くの者は「敵わない」と悟る。そうやって反

乱を抑止しようというアルベールらしい策である。
師は感心した後で眉をひそめて、
「けれど、参加希望者が集まるかしらね。誰だって手の内を明かしたくはないでしょうに」
試合のレギュレーションとしては一対一。武器、魔法、魔道具の使用は自由というもの。観客を傷つける行為や対戦相手に致命傷を負わせることは禁じられてはいるものの、制限はかなり緩い。
勝ち上がろうと思えば魔法の力も含めた実力を開示しなければならない。
家や自分の利益を考えれば他者に力量を測られるのは避けたい、と考えるのが普通。平民の見物が自由となれば他国のスパイが紛れ込んでくる可能性さえある。褒賞がリスクに見合っていないと多くの騎士は参加を見合わせるだろう。
すると、護衛として傍に控えていたモニカが微笑んで、
「リディアーヌ様。備考の欄はご覧になられましたか？」
「え？」
あらためて確認したところ、手紙には付け加えるような形でこうあった。

――なお、試合には現騎士団長夫妻の参加が決定している。

騎士団長夫妻というと、今、俺の傍にいる彼女とその夫ということで、

「事前にご相談すべき案件かとは思いますが、決定まで口外を許されていなかったものですから……申し訳ございません。当日はお休みをいただきたく」

「ええ、それは構わないわ。わたしも観に行くでしょうし、むしろ楽しみなくらい」

「ありがとうございます。それでしたら、私の出番以外は護衛として務めさせていただきます。出番の間は他の者に依頼する必要がありますね。……ああ、いっそのことノエルにも声をかけましょうか」

騎士団長にその妻まで参加するとなればネームバリューはばっちりである。参加して結果を残せれば騎士団における出世コースに乗るのも夢ではない。単純に二人へ憧れる者の参加もあるだろうし、告知段階でこれを記載したかった理由もよくわかる。

なんだかモニカがうきうきしているのは腕を振るえるのが嬉しいからだろうか。

「モニカは実力を公開してしまって構わないの？」

「ええ。私は一度引退した身ですから、騎士団の基本戦力には含まれておりません。

情報として伝わったところで何ができるわけでもないでしょう。護衛として支障が出ないよう配慮もするつもりです。……試合では用いられない魔法も当然用意がありますから」

「なるほどね」

レギュレーションによる制約は少なめだが、それでも殺傷能力の高い魔法は事実上制限されている。

見世物として行われる試合である以上、見た目的に地味な魔法も封印するべきだろう。モニカの属性である水と心のうち心の魔法はほぼ使えないと見た方がいい。

俺だってこの条件を課せられたらレーザーを撃てない。火力を絞って火球を撃つか、かわせないタイミングで雷を放つか。氷の槍ですら逸れたら平民を傷つけかねないし……うん、かなり戦い方が限られてきそうだ。

「どうせだからこの試合、わたしも出られないかしら。個人的に実力を披露しておきたい理由があるのだけれど」

騎士の強さを見せつけるだけでは他の貴族が軽んじられる可能性がある、とかなんとか言えば参加させてもらえないだろうか。

と、これにはモニカも苦笑して、
「私個人としては面白いお話だと思いますが、宰相閣下が聞けば反対なさるのではないかと」
めちゃくちゃ反対された。
「駄目だ。試合とはいえ怪我をする可能性は十分にある。女の子の身体に痕が残ったらどうする」
「大丈夫よ、お父さま。会場にはモニカもいるんだもの。怪我をしてもすぐに治してもらえるから、痕が残ることはそうそうないわ」
「それでも万一ということがあるだろう」
「でも、わたしだって原案を出した一人よ。わたしにも参加する権利はあるんじゃないかしら」
すると父はため息をついて愚痴をこぼすように言った。
「そういう我が儘はアルベール殿下だけで十分だ」
「お父さま？　つまり、アルベール殿下が同じような理由で参加をねじこもうとしているわけね？」

「な」

しまった、という顔をしても遅い。

にこりと笑って「殿下と協調して参加への理解を求めます」と脅迫――もとい宣言をしたところ、見事「こちらで調整するから独自に動くのは止めなさい」と言ってもらえた。

結果、俺とアルベールは優勝者決定後にエキシビションマッチとして戦うことになった。

図らずも第二王子との対戦が実現してしまった。こうなるとリオネルも「参加したい」と言い出したが、公の場で兄弟喧嘩なんかさせられるかと父を含め周囲の者が説得したり宥めすかしたり拝み倒したりしてなんとか納得してもらった。

その代わりリオネルの期待は俺に向けられて、

「兄上に勝つのだ、リディアーヌ」

「また無茶を仰いますね……」

とりあえず、戦闘用の魔道具を新調しておくことにした俺だった。

闘技大会での出来事

「これは、すごい人出ね……！」

試合当日。

王都の中央広場には大勢が詰めかけ、大通り以上に広いはずのそこが人でいっぱいになっていた。

戦いの舞台は広場の真ん中に設けられた特設ステージ。土属性の魔法を使って円形に作られた石の舞台はがっしりとしていて揺らぐことはない。破損した場合は宮廷魔法師によって補修が行われ、次の試合には万全の状態で臨むことができる。

広場の数か所には貴族用の観客席。こちらは木材を使って土台を組み、天井には天幕（要するにテントだ）が張られている。寛げるようにテーブルや椅子が置かれ、メイドや護衛が控えられるだけのスペースもきちんとある。

「こんなに人がいるのでは私達は邪魔になるのでは……？」

「ご安心ください、シャルロット様。皆様のお席は前もって確保されております。試合に不参加の騎士も警備として動員されておりますので危険はございません」

シャルロットの呟きに護衛役のモニカが答える。
今日のモニカは帯剣だけでなく動きやすい部分鎧まで身に着けた戦闘モードである。今は被っていないが兜も小脇に抱えている。
彼女の言う通り、広場には騎士と衛兵の姿も多い。特に衛兵は「おい、押すな！」「くれぐれも貴族様に失礼な真似をしないように！」と平民に向かって声をかけ続けており、その苦労が窺える。
「シャルロットの事は僕も守るよ」
「いざとなれば兵や騎士、使用人が盾となります。ですが、貴女達も逃げる心づもりだけはしておいてください。お茶の飲み過ぎは禁物ですよ」
「は、はい、お母様」
こくんと素直に頷いたシャルロットだが、たぶん、彼女は言葉通り「邪魔じゃないか」と言っただけで身の危険を案じたわけではない気がする。
まあ、いつでも危機を警戒しておくのは悪いことではない。俺もにっこりと義妹に微笑みかけた。
「もちろん、わたしもシャルロットのことを守るわ」

「お姉様はご自分の怪我を心配してください！」
「はい、ごめんなさい」
逆に心配されてしまった。
俺が（エキシビションとはいえ）試合へ出ることにシャルロットは反対なのである。というか父もアランも反対している。唯一、明確に反対まではしていないのがセレスティーヌだが、彼女からは「どうせ止めても無駄でしょう？」と嫌味をもらっている。
着替えの手間を減らすため、既に剣術用の衣装を纏っていることもあって少々肩身が狭い。
そこへ、参加者兼俺の護衛として来ている少女騎士――ノエルが笑って、
「私はリディアーヌ様と対戦できないのが残念です」
「ありがとう。ノエルは優しいのね」
するとモニカが不思議そうに、
「対戦ならいつでもできるでしょう？」
「それはそうですが、訓練と真剣勝負は別ですので」

「私がいる時なら治療もできますから真剣勝負をしてもらって構いませんよ」
「なるほど」
良いことを聞いたとばかりに頷くノエルに、シャルロットが「もう少し危ない事を控えてください！」と怒る。俺とモニカもまとめて「ごめんなさい」と謝った。
「類は友を呼ぶというか、リディアーヌ様の影響は大きいようですね」
「オーレリア。あなたが言わないでください」
間違いなく俺へ多々影響を与えている魔女様にアンナが突っ込んだ。なお、今日のオーレリアはメイド姿だが世話係というよりは護衛要員である。
走って逃げようとするとすぐ息切れする彼女が力を発揮するのは「もういいから民衆ごと敵を焼き払え」くらい切羽詰まった状況が主なので、なんというか暇してくれることを祈る。
そうして。
貴族の送迎用に人払いされたルートを使い馬車でやってきた俺たちは、シルヴェストル公爵家用の席へと腰を落ち着けた。
途端、あちこちから送られている視線。

「リディアーヌ。あまり顔を動かさないように」
「はい、お養母さま」
視線の多くは平民のものだが、中には他の貴族のものもある。
席は細かく区分けされており、階級が高い家ほど中央かつ物理的高所に設けられている。我が公爵家はほぼ中央に位置しているうえ高台に家族がほぼ全員揃っているので非常に目立っている。
『他の家は出席していても一人か二人だものね』
人が多いうえに平民の視線にさらされる場所だ。好んでやってくるのはよっぽどの物好きである。そうでない家は不参加か、出席したという事実を作るために男子を一人だけ送り込んできている。
立ち見の平民の中には催しの顛末を報告するよう命じられた貴族家の使用人も混ざっていることだろう。
と。
「よう、リディアーヌ。剣の腕は磨いてきたか？」
「リディアーヌ。無様な結果に終わったら承知しないからな」

俺たちのすぐ傍――最上段の席に男と少年が一人ずつ姿を現した。

第二王子アルベールと第三王子リオネル。複数の騎士に守られ、見るからに高そうな服を着た彼らがどういう身分なのか、大した知識のない平民でもおおよその想像はつくだろう。

来るなり気さくに話しかけられてしまった俺は本来必要な長ったらしい挨拶を省略、カーテシーと「ごきげんよう」だけで誠意を見せた上で二人に笑顔を向けた。

「自分なりに納得のいく努力ができたと感じております。本番では精一杯の力をお見せできればと」

「楽しみにしておこう。……ああ、それから公爵家の皆も息災のようだな。セレスティーヌ、赤子は元気にしているか？　シャルロットは今日の衣装も可愛らしいな。アラン、勉強ばかりでなく運動もして息を抜かないとジャンのような堅物になってしまうぞ」

俺と同じく剣術用の衣装を纏ったアルベールは俺の家族にもそれぞれに声をかけていく。

近くにいる知り合いだから話しかけること自体は問題ないのだが、ここまで来る

とばっちり特別扱いである。いやまあ、リオネルの婚約者がいるんだから特別で間違ってはいないが。

リオネルに「どうにかしてください」と目線を送っても「放っておけ」とばかりに肩を竦められるだけ。

仕方ないので侯爵家用のスペースにちょこんと座っているヴァイオレットに手を振っておいた。向こうも嬉しそうに手を振り返してきてくれて癒し効果はばっちりだった。

『リディアーヌが戦うんでしょう？　だったら、絶対観に行く』

と、前もって話を聞いてはいたのだが、まさか本当に来てくれるとは。友人にまで見られているとなるといよいよ無様な戦いはできない。

「というか、リディアーヌ。面倒だからお前、こっちに来い。どうせリオネルと話をするだろう」

「よろしいのですか？」

「俺が許可したのだから問題なかろう」

我が家の面々に声をかけ終えた（ついでにモニカやオーレリアとも話していた）

アルベールがとんでもないことをあっさりと告げ、俺の席がリオネルの隣に移された。周りからの視線がさらに痛い。それでも優雅にしているのが貴族の務め。

俺は婚約者に雑談をもちかける。

「今日の参加者は十六名でしたよね」

「ああ。お前と兄上を除くと十六名だ。思いの外参加希望が多かったため、いくらかの者は弾かれたらしい」

どうせなら全部の試合を見たいと思うのが人情。別会場で並行して、というのは難しかったため、時間的な都合もあって人数制限が行われたのである。

なお、参加者が増えた理由は騎士団長夫妻参戦の他、副団長の家から兄弟全員が参加を希望したことなどが大きかったらしい。なお、その四人に関しては「一人でいいだろう」とくじ引きによって次男だけが参加資格を得ている。

その割にノエルが普通に参加できているあたり作為的なものを感じる人選である。まあ、彼女に関しては若い女性騎士枠なんだろうが。

「お前の出番は最後だ。それまではのんびり観戦しておけ」

「はい。この席ではあまり気も休まりませんけれど、そういたします」

それから他の家がリオネルたちのところへ挨拶に来て、ついでに我が家に挨拶して行ったりしているうちにイベントが開始された。

『皆。今日は良く集まってくれた。父である国王陛下に代わって礼を言わせてもらう。今日の催しは普段、騎士の戦いぶりなど直接見る機会のない平民のために考えられたものだ。是非、騎士達の素晴らしい戦いぶりを心行くまで楽しんで行って欲しい』

この場における最上位者であるアルベールが拡声の魔道具を用いて挨拶を行い(リオネルは「兄上がいて良かった」と呟いていた)、司会と審判は試合に参加しない中年のベテラン騎士が務める。

「第一試合、始め！」

何度か軽く剣を打ち合わせ、対戦相手に一礼をした上で試合開始。

優雅だったのはベテラン騎士が合図をした瞬間までで、次の瞬間には両者の間合いが一気に詰まって鍔迫り合いが起こっていた。

片方が押せば、もう片方は素早く離れて立て直す。剣が何度も打ち合い、鈍い音を響かせる。平民たちの遠慮のない歓声の中にあってもなお、戦う者たちの息遣い

が聞こえてくるような臨場感。

『自分が戦うことを考えてしまうからかしら。それとも、彼らが真剣だから？』

刃の入っていない剣の応酬から「斬られまい」という強い意思が伝わってくる。

攻撃魔法を使わないのは苦手だからか、それとも逆に隙になると考えたからか。

いずれにせよ、めまぐるしく動き、チャンスを窺いあう姿は十分に見世物として機能している。

「私は希望すれば騎士の訓練を見られる立場だが……それでも、これは見ごたえがあるな」

「ええ。参考になります」

「ふん。我が国の騎士は決して衰えていないと、これで少しでも周辺国に伝わればいいがな」

ああ、逆に他国へ「見せる」意図もあったのか。

この国が手強いと思わせられれば攻められる危険が減る。無駄な戦争は避けた方がいい。軍備を重視するアルベールも積極的に戦争がしたいわけではないのだろう。

試合は大きな問題もなく着々と進んでいく。一つの試合が終わった後は舞台の清掃と補修の後、素早く次の試合が始まって観客を飽きさせない。平民向けに飲み物やちょっとしたつまみを販売している商人もいる。

「あら？　優勝者を予想して当てたら倍になって返ってくる……なんて言っている方もいますが、アルベール殿下、あれはよろしいのですか？」

「ああ。いくつかの商会には会場の設営機材を用意させる代わりに賭けの胴元となることや商売の許可を出した。それ以外の商人が行っているのであれば取り締まるがな」

儲けさせてやるから協力しろ、というわけか。商会としてもそれ以上の儲けが出ると踏んだからOKしているわけで、Ｗｉｎ-Ｗｉｎの関係というやつである。

「あ、ノエルの番だわ」

「相手は男の正規騎士か。さすがに分が悪いのではないか？」

「あら、ノエルも捨てたものではありませんよ、殿下？」

少々緊張しているのか、険しい表情のまま舞台へと上がった少女騎士は試合開始と同時に後方へと跳躍しながら火球を放った。

「ほう」

そこまでの戦いではあまり行使されていなかった魔法攻撃。

炎が平民に当たる危険は跳躍と同時にやや下方向に放ち、外れても舞台の床を舐めるだけにすることで避けている。大胆かつ無謀ではない攻撃にアルベールが僅かに感嘆した。

しかし、対する騎士も落ち着いてこれに対処。避けるのではなく左手に持った盾で防ぎながら急接近し、ノエルに先制の斬撃を仕掛けた。

ノエルは軽いステップで回避。上段から振り下ろした剣をかわされるとすかさず片手を剣から離し、武器の間合いよりさらに踏み込んで相手の顎を拳で狙った。

「剣での戦いには拘らないか。リディアーヌに連れられて実戦を経験した成果か？」

「むう。逞しいのは良い事だが、要するにそれはこいつの悪影響を受けているということではないのか？」

剣、魔法、体術。多彩な戦い方が功を奏したのか、ノエルは初戦を制して二回戦へと勝ち上がった。安堵の息と共にようやく笑顔を見せた彼女に拍手を送る。

次の試合はモニカの番。

気負った様子もなく悠然と剣を構えた彼女は、どこか緊張の見える現役騎士を終始翻弄。まるで稽古をつけるかのような雰囲気のまま勝利を収めた。

これにはアルベールも満足そうに頷く。

「よし。女の騎士が勝ち上がってくれるのは良い事だ。女性騎士の増員や騎士団全体の士気向上が見込める」

「兄上。まさか対戦相手の騎士にわざと負けろ、などと言ってはいないでしょうね？」

「そんな事をするわけがないだろう。長く剣を握っていなかったとはいえ、モニカの才覚は本物だ。並の騎士では相手にならん。……ノエルの方は思いがけない奮闘だったがな」

そんな二人は第二試合でぶつかり、結果はモニカの勝利に終わった。

順当と言えば順当。試合後のノエルの表情も納得半分、悔しさ半分と言ったところだった。戻ってきた少女に直接聞いてみたところ「胸を借りたという気持ちが大きいですが、やっぱり勝ちたかったです」と答えてくれた。

それはそうだ、誰だって負けるつもりで挑みはしない。
決勝戦はクラヴィル家次男vs騎士団長。
団長に声援が集まる中、ノエルの兄は豪快な戦いぶりで攻め続け、見事にそのまま戦いを制した。
まさかの番狂わせだが、これは団長が準決勝で妻――つまりモニカと当たったことが大きい。二人とも真剣に戦ったものだから疲労が蓄積しすぎていたのだ。逆に若く体力のあり余っていた次男は技量と魔力量による不利をひっくり返して見せた。
『見応えのある見事な試合だった！　優勝した騎士には約束通り褒美を贈ろう』
次男は「妹からの祝福のキス」を所望してノエルから物凄く怒られた挙句、アルベールから同情されて金一封を与えられた。
なお、キスはちゃんと行われた。頬に。

闘技大会での出来事 2

『さて、最後に一勝負行いたいと思う。これは完全な余興だ。どうか気楽に見守って欲しい』

クラヴィル家次男が舞台から去り、ノエルが真っ赤な顔で戻ってきたところで第二王子アルベールは高らかに宣言した。

『戦うのはこの私と、ここにいるリディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢だ！』

拡声の魔道具を使用人に手渡すと、木製の手すりに飛び乗り――さらに跳躍！

どよめきが上がる中、靴音を大きく響かせながら舞台へ立つと、こちらを「エスコートが必要か？」とばかりに見上げてくる。

俺は微笑で応え、数歩の助走からふわりと宙へ跳び上がった。魔法の力を借りて大きく緩やかな放物線を描き、アルベールから一メートルほどの距離に着地する。

「さすがは《紅蓮の魔女》。この程度で臆する事は無いか」

「あまり好みではない異名ですが、名に恥じない程度には研鑽を積んでいるつもりです」

すらり、引き抜かれた剣は陽光を反射して鈍く輝く。刃を落とした試合用で王子の愛剣ではないが、並の品ではないことが窺える。

対する俺が抜いたのは愛用の装飾剣だ。俺にとって武器であり魔法の増幅具でもある。長身のアルベールを見上げるようにしながら刃を打ち合わせ、一足一刀の間合いよりもさらに数歩の距離を取って一礼。

静寂。

ほんの一瞬、人でひしめく広場が確かに音を失った。俺の緊張が観衆にまで伝わったのだろうか。

第二王子様の方はただただ楽しそうに笑っておいでなのだが、こっちは既に心臓がうるさいほど高鳴っている。まあ、そのくらいの方が頭は回るはずだ。深呼吸までではいかない、軽い呼吸をひとつ行って剣を構える。

「始め！」

開始の合図のあった直後、俺は床を強く蹴って飛び上がり――その俺を追うように強い閃光が生まれた。

目が眩む。身体強化に風の魔法も使って数メートルは上がったお陰で多少はマシ

だが、視界が不完全でアルベールの姿が追えない。

『確か、要はピント調節の問題なのよね……!?』。目に魔力を流して正常な状態を速攻で回復。身体が降下に入るのを感じながら下を見ると、こちらへ向けて炎を取り込んだ風が吹き付けてきているのが見えた。

「ちょっと……!?」

風が来ていると分かったのは巻き上げられた炎が完全に消えていなかったお陰だが、熱風(あんなもの)を食らいたくはない。さっさと風で相殺する。

『やりたい放題じゃない、王子様！』

第二王子アルベールの属性は火と光。奇しくも俺と同じである。さらに言えば、魔力量にも大きな差はない。身体能力の分だけこちらが不利だと言っていい。

ついでに先手も取られた。大きく跳んだのは舞台中央に火球でも落としてやろうと思ったからだが、それを逆に利用されてしまった。

まあいい。

俺は剣を振るいながら刀身に魔力を流し、無数の氷柱(つらら)を形成すると舞台へ降らせる。にっ、と、王子様の口元へ笑みが浮かぶ。慌てず騒がず再度熱風を生成して相

殺しに来た。

「そろそろ、お返しさせてもらうわ！」

今日はスカートじゃないのでこっちも好き放題できる。

頭を下に。風を生んで推進力を得ると、むしろ熱風に突っ込むように高速で降下。舞台上に立ったままのアルベールへ急接近すると、姿勢を制御しつつ落下の勢いを全て装飾剣の一撃に叩き込んだ。

下段からの切り上げが俺の剣を迎え撃つ。

衝撃。

身体強化vs身体強化。思い切りぶつかり合った刃が耳障りな音を響かせる。剣から伝わってくる手ごたえも生半可じゃない。アルベールめ、身体強化だけじゃなく刀身保護か何かを併用して威力を上げてきたか。押し切るのは無理と判断し、地面に着地すると同時に後ろへと跳ぶ。

ぱきん。

直後、俺の剣が音を立てて砕けた。

『あー……やっちゃったわね』

衝撃に耐えきれなかったらしい。幸い、折れた刀身は舞台上に転がったためレギュレーション違反にはならない。ちなみに向こうの剣は無事な模様。子供用と大人用の差か。どうせなら折れてくれればいいものを。

「なかなか面白いものが見られた。どうする？　ここで終わりにしておくか？」

「冗談でしょう!?」

床を蹴って接近。三分の一も刃の残っていない剣を振り、その先に不可視の刃を形成する。正確には刃というか、ゲームで言う「当たり判定」だけを生んでいる感じ。質量はないが当たると痛い。

見えている部分だけならそもそも当たらない一撃。しかし、アルベールは何かを察したのか剣を振り、見えない剣を弾いた。

「ふっ。油断も隙も無いな、お前は！」

つま先が跳ね上げるように持ち上がって顎を狙ってくる。『こいつ、女の子を気遣うつもりはあるのかしら？』。かわしきれないので防御障壁を形成、硬いブーツの先を受け止めたところで体勢を立て直す。

上段からもう一度見えない斬撃。アルベールは元の刀身の長さ分だけ距離を取っ

てかわそうとし――その頭上で、さっきの倍の長さに伸ばした不可視の刃と、念のために張ったものであろう王子の防御障壁がぶつかり合った。

決定打が生まれない。

ただ、相手に十分な力があるのは確認した。俺もそうだが、アルベールも万一のために複数の魔道具で護身しているはず。『一発くらい、防御される前提でぶっ放してもいいわよね？』。

見れば、第二王子もまたにやりと笑んでこちらを見ている。

俺たちの眼前にそれぞれの生み出した火球が輝き、互いの真ん中で見事に衝突、火の粉を舞台上へと撒き散らした。

「そこまで！」

火球同士の衝突からさらに数分、魔法と剣、体術を用いて戦い続けた俺たちは、見るに見かねたような審判の声によって試合を中断させられた。

動こうとしていた身体を急停止し、息を整える。心臓は酸素をもっとくれとしきりに訴えており、紅の前髪は乱れ額には汗がびっしりと張り付いていた。

『……うわ。いったん止まると途端に身体が重くなるわね』

戦っている最中は気づかなかったが、どうやら相当疲れているらしい。
それでも、どうせならもう少し戦いたかった。我が儘なことを思いつつ、剣を鞘へと納める。刀身がほぼなくなったせいでなんかぐらぐらするが、留め具で押さえておけば大丈夫だろう。
前へ一歩足を踏み出せば、アルベールの方も同じようにこちらへと歩み寄ってきていた。彼の髪の毛もいつの間にかだいぶ乱れている。
ぎゅっ、と、会場の真ん中で握手を交わして、
「アルベール殿下。手加減をなさいましたか？」
「最後の方はだいぶ本気だったさ。お前だって似たようなものだろう？」
「……そうですね」
最後の方は「多少怪我させてもいいかな」くらいで技を振るっていた。それでも、審判がきちんと止めてくれたお陰でお互い目立った傷はない。
「ほら、先に退場しろ」
「ありがとうございます」
笑いあった後、俺は王子に先んじて舞台中央から離れた。すると、いつの間にか

脇で待機していたらしいアンナがモニカと共に俺へ駆け寄ってきた。
「……もう、やり過ぎです、リディアーヌ様」
「ごめんなさい、アンナ。つい楽しくなっちゃって」
気心の知れた専属メイドの手で服や髪の乱れを直される。見苦しくない程度に直ったところで、先に舞台から離れようと俺はアンナの手を引いた。中央ではアルベールが自前の魔法で拡声し、最後の挨拶を始めている。
「ほら。落ち着くのは席に戻ってからにしましょう？」
「そうですね。馬車の手配は済んでおりますので、皆様と合流して帰宅を――」
「アンナ。リディアーヌ様の盾になりなさい」
「っ!?」
俺たちの会話にモニカが突然割って入ってきた。彼女は言いながら素早く俺たち二人の前に立ち、防御障壁を展開する。
会場内の数か所。平民たちの人混みの中から飛んできた火球が障壁に遮られて四散、消滅する。悲鳴と怒号が響き、広場に無秩序な人の動きが生まれた。
逃げようとする者。愕然と立ち尽くす者。何事かを叫ぶ者。衛兵は不届き者を

捕らえようと動くも、人波に阻まれてなかなかうまく行かない。もっとも、火球を放った連中も逃げようにも逃げられない状況だが。

――そんな中、広場から離れようとするのではなく舞台へと向かってくる男が一人。

服の長袖を捲り上げ、右腕に装着されたゴテゴテした装備――複数の魔道具が連結された結果、ガントレットのように見えるそれを俺たちへと向けてくる。

モニカが腰のベルトから短剣を引き抜き投擲。風の魔法によって後押しされたそれは男の首に狙い違わず突き刺さり、鮮血を激しく吹き出させた。

ぐらり。

倒れる男の腕で魔道具が輝く。発動済みなら制御の要らないタイプ。俺は咄嗟に舞台へ落ちたままの砕けた剣先を念動力の要領で操作。瞬時に出せる限りの出力をもって魔石を砕いた。

そこへ、王子のかざした右手から炎が放たれ、着弾すると火の粉をばらまくのではなく火柱を吹き上げて男の全身を焼き尽くす。機能を保てないほど破壊されたのか、火柱が収まっても魔道具が効果を発揮することはなかった。

『皆の者、騒がせたな。心なき者の企みは挫かれた。残りの賊もじきに捕らえられよう。どうか、いたずらに騒ぐのではなく兵や騎士に協力してくれないか』

火球を放った者たちは全員、程なく取り押さえられた。例の腕輪を装着していたのでわかりやすい。どさくさ紛れに逃げようとする彼らを捕まえるのには一部、腕っぷし自慢の平民の協力もあった。

騒ぎのせいで大きな怪我をした者には特例として治癒魔法が振る舞われ、広場に残っていた平民たちは衛兵・騎士の誘導のもと順次広場を後にすることとなった。貴族は専用ルートから馬車に乗ってそれぞれ帰宅。

俺の家族たちも無事に帰っていったが、残念なことに俺はみんなと一緒に帰してもらえなかった。状況把握のために証言を聞きたいと城に連れて行かれたからだ。モニカにノエルにアンナにオーレリアと、俺関連の護衛と使用人も一緒である。

「普通の貴族なら騎士団の本拠で十分なんだ。城で寛げるだけ温情だと思え」

「殿下と同じ部屋で寛げる貴族令嬢はそういないと思いますが」

「ん？　それは俺が美形すぎて落ち着かないという事か？」

燃やしてやろうかこの野郎、と半ば本気で思ったものの、口に出すのは「ご冗談

を」という小さな嫌味だけにしておいた。
「現場の確認にも多少時間がかかる。その間に着替えて来てもいいぞ。着替えならこちらで用意できる」
「？　わたしの着られるドレスが城にあるのですか？」
「こういう時のために常時二、三着は用意しているらしいぞ。不要なら不要で調整して王女の誰かに贈ればいいからな」
「助かりますが、さすが、王族の皆様はやることが大きいですね……」
俺を着替えさせたことのあるメイドも複数いるので、アンナとオーレリアがいれば十分困らない。貸し与えられた、というか「そのままお持ち帰りいただいて構いません」と言われたドレスは我が家の余所行き用として何の遜色もない品だった。
戻ってきた時には舞台の検証も最低限終了しており、騎士団長が城を訪れていた。
「さて、リディアーヌ。あの場で起こった事について証言のすり合わせをしたいのだが、覚えていることを話してもらえるか？」
「ええ、もちろん構いません。……ですが、もしお望みでしたら私の見たものをそのまま再現いたしましょうか？」

「は？　お前はいったい何を言っている？」
「実際に見ていただいた方が早いかもしれませんね」
真っ黒い布を持ってきてもらい、それを壁一面に固定してもらった俺は、さらに照明をやや落としてもらった上で布をスクリーン代わりに記憶の情景を『投影』した。
記憶を再生するついでに映写機のごとくみんなに見られるようにしただけなので俺としては大した作業ではないのだが、
「おい、お前。これが事もなげにやることか？」
と、さすがにアルベールからも半眼でツッコまれた。

闘技大会での出来事 3

「リディアーヌの魔法にいちいち驚いていては身がもちませんよ、兄上。これの師が誰なのかお忘れですか？」

「……ああ、そうだったな。師が師なら弟子も弟子か」

少々呆れた様子で呟くアルベールに、直立不動で控えている黒髪黒目の美女が「恐れ入ります」と答えた。こういう時は彼女が師匠で良かったと心から思う。

と、隣に座ったリオネルが軽く身を寄せて耳うちしてくる。

「それはそうと、よくやったぞリディアーヌ。兄上とあれだけ戦ったのだ。誰も無様な結果だと笑うまい」

「ありがとうございます。頑張った甲斐があるというものです」

「ああ。少々やりすぎだがな。……魔法を使うお前に勝つには恐ろしい努力が要りそうだ」

「逆に言うと剣だけではとても勝てません。リオネルさまにはリオネルさまの魅力があるのですから、無理をなさる必要はありませんよ」

幸い上映会の方は上手くいった。

映し出したのはアンナに身嗜みを整えてもらったあたりからの俺の視界そのもの。見たものをそのまま映しているので映像は非常にクリアだ。

咄嗟に視力強化を行い辺りを見渡したので、火球を放ってきた数人の姿もしっかりと記憶に残っていた。

「これはどの程度正確な情報なのだ？」

「ほぼ事実そのままと思っていただいて構いません。魔法で記憶を掘り起こし、そのまま投影しています。わたしが無意識に記憶を改ざんでもしていない限りは何の偽りもありません」

「それは良い。正確性も情景保存の魔道具と合わせれば担保できるだろう」

ビデオカメラのように情景を写し取る魔道具らしい。レンズの幅が狭いため遠景を撮ろうとすると今度は解像度の問題が出てくる扱いづらい品だが、記憶に頼らずとも後から情景を再現できるという点で画期的な効果がある。

今回はその場に来られない王族のため、またいざという時のために宮廷魔法師に使わせていたそうだ。

「最後に出てきた男の容姿も確認できるな。お前のいた位置からだと少々遠いが」
「でしたらその部分だけを拡大しましょう」
「……もう驚かないからな。驚かないぞ？」
拡大して見てみると、やはり男が使っていた魔道具は一つではなく、別々の魔道具を連結して用いているように見える。
一つは身体にぴったりフィットする腕輪……いや、男が右手に着けている手袋までがワンセットか？　もう一つは腕輪の四点へ細い鎖をがっちりと巻きつけ、さらに男の腕にも同じく鎖を巻きつけたペンダント（というかなんというか）な魔道具。
どちらも俺の記憶にある魔道具ではない。と言っても、俺が直接見たことがあるのは我が家にある品か、そうでなければオーレリアの作った品がほとんどだ。
「俺とリディアーヌで念入りに破壊したからな。せめてこうして確認しなければならん。……オーレリア、この魔道具がどんな効果なのかわかるか？」
尋ねられるまでもなく《漆黒の魔女》は映像内の魔道具に注視している。
アルベールは実のところ一つ年下の弟。慣れないであろう呼び捨ても特に気にし

た様子はなく、一分に満たない思案の後に推測を口にした。
「腕輪ではない方――無理矢理繋げられた魔道具に用いられているのはおそらく新型魔石です」
「ほう？　となるとこの者は貴族ではなく平民か」
男の顔に見覚えのある者はこの場に一人もいなかった。となると、平民でないにせよモグリの魔法使いか、でなければ国外の人間である可能性が高い。
「新型魔石は先に輝いた後、輝きを弱めています。これはおそらく起動を終えたため。そして、装着者が致命傷を負った後、強い輝きを放っていたのは腕輪の方。この事から見て、新型魔石の魔道具は旧来の魔道具を強引に機能させるためのものかと」
言わばコンバーター、あるいはスターターだ。魔力持ちにしか使えない魔道具に新型魔石を繋げ、魔力供給を行うことで平民でも扱えるようにするための魔道具。
「これまでに用いられ、押収された数から見て火球の腕輪はそろそろ打ち止めのはず。男のこれは新型魔石を利用した新たな戦い方を模索するためのものでしょう」
「なるほど。……それで？　肝心の魔道具の効果は推測できるか？」

アルベールの問いにオーレリアは笑みを浮かべた。
どこか艶やかで、どこか超然とした笑み。《漆黒の魔女》はその知識と才覚をいかんなく発揮し、見事にそれを推測してみせる。
「男をけしかけたであろう何者かも、男が即殺される事はわかっていたはず。であれば、おそらくこの魔道具は最初から『装着者が死んでも機能するように』作られたものです。当人の息の根を止めただけで満足し、魔道具の破壊を怠ればそのまま起動し何らかの効果を発揮する、という筋書きです」
「使い手の生死に関係なく？　となると……」
「考えられるのは主に二つ。一つは何らかの情報を誰かに伝える効果。そしてもう一つは装着者もろとも周囲に破壊を撒き散らす効果。わざわざ用いるとすればおそらく後者でしょう」
例えば、周囲に爆炎を撒き散らすようなもの。
要は自爆テロだ。被害の範囲にもよるが、あと少し対処が遅れていたら死傷者が何人も出ていたかもしれない。
「この手の魔道具は噂として聞いたことがあります。起動と同時に使用者の魔力ど

ころか生命力すらも全て奪い尽くして効果を発揮する絶死の魔道具。国家間の戦争が活発だった頃に製作された品を持ち出してきたのではないかと」

魔力全てを消費して用いる自爆魔道具。

戦争時でも使いどころがなかなか難しそうである。起動さえすれば照準をつける必要がない代わりに敵陣まで切り込まなければならない。あるいはスパイのごとく敵地に潜入してしまえば良いが、魔道具を用いるのは貴族なので顔でバレる危険が高い。そもそも、戦争に勝つためとはいえ自爆したいと思う貴族なんて極稀だ。

平和になってからは死蔵されていたであろう魔道具を何者かが今になって持ち出してきて、別の使い方を編み出した。

新型魔石から魔力供給が可能となる魔道具を作り、平民に使わせる。平民なら見ない顔でも警戒されづらいし、死んだところで大して痛くない。むしろ平民一人の命で貴族を殺傷できるかもしれないのなら安いものだ。

『なによ。こんなの自爆テロそのものじゃない……!?』

早すぎる。

新型魔道具の開発にはまだまだかかると高をくくっていた。そうしたら、魔道具

に比べれば解析・製造が容易であろう新型魔石を利用して旧式の魔道具を活用する方法が現れてしまった。

どこの馬鹿、あるいは天才か知らないが余計なことをしてくれた。

コンバーターなんて発想がこんな早く出てくるのなら、新型魔石をしこたま使った大規模バッテリーだって近いうちに登場してしまいかねない。

「リディアーヌ様」

オーレリアの声にはっとする。いつの間にか身体に力が入っていたらしい。爪を立てた手のひらと噛んでいた唇からうっすらと血が滲んでいる。慌ててアンナがハンカチを押し当て、オーレリアが治癒魔法をかけてくれる。

おかげで少し冷静になった。

残っていた紅茶を飲み干し、アルベールと騎士団長に告げる。

「門の警備、および見慣れない者への警戒を今まで以上に強くするべきです。魔道具を隠し持っていないかは特に厳重に。でなければ、いつどこで平民が破壊を撒き散らすかわかりません」

「そうだな。走行中の馬車にでも走り寄るだけでも中の貴族を殺せるかもしれん」

「……もちろん、そう易々と取れる手段ではないはずです。実行する平民の命はともかく、起動用の魔道具を新造する手間は惜しむでしょう」

自爆魔道具だってストックが尽きれば造るしかない。そうなると倍のコストがかかるわけで、そこまでしてテロをするか？　という話になる。

もしかすると「いつテロが起きるかわからない」という状況を作ること自体が敵の目的なのかもしれないが。

オーレリアが息を吐いて、

「おそらく、実験の意味もあるのでしょうね。今回は上手く対処できたものの、逆に言えば対処できないよう工夫をすれば良いだけのこと。警戒の強い催しの際ではなく不意に用いるという手段を思いつくのも遠い話ではないかしら」

「オーレリア・ルフォール。念のために聞くが其方は関与していないのだな？」

「冗談はお止めください、騎士団長閣下。リディアーヌ様を危険に晒すような真似、たとえ死んでもいたしません」

「……まったく。お前は愛されているな、リディアーヌ」

リオネルが呆れ半分、安堵半分といった表情で言った。俺としては苦笑いである。

オーレリアの発言は本心だろう。ただ、なんとなく彼女の場合はいつか「他人が殺すのは駄目だけど、私との殺し合いで死ぬのは別よ」とか言いながら魔法合戦を挑んできそうな気もする。そうなったらいつかと同じようにぶん殴ってでも二人とも生き残るが。

「実際、オーレリアにそんな暇はありません。騎士団でも監視を付けていらっしゃるでしょうし、当家の屋敷から抜け出すだけでも多数の人目を避けなければなりません。もちろん、シルヴェストル公爵家が首謀者だと仰るのなら話は別ですが」

「ないな。あの時はお前達だって十分危険な位置にいた。わざわざ身を危険に晒すとは思えない」

アルベールがきっぱりと切って捨ててくれる。

一番近くにいたＶＩＰはこの第二王子自身だが、ぶっちゃけ彼を殺したかったのなら試合中に俺が直接やった方が早い。加えて、自爆テロの阻止には俺自身も動いているわけで。

俺に知らせず他の家人が動いた可能性も正直ありえない。王国宰相という地位にある父やその妻であるセレスティーヌがバレる危険を冒してまでアルベールを狙っ

たりしないだろう。というか、普段あれだけ溺愛してくれている父が俺を巻き込もうとしたとか本当だったらさすがに泣く。

「まったく、何だと言うのだ。平民を使って貴族を狙う手口はこれで何度目だ？　それほどまでにこの国に恨みがあるというのか？」

「おいおい、リオネル。恨みなんていくらでもあるだろう？　俺たちと利害の一致していない奴なんてたくさんいるんだからな」

この場で結論が出るはずもなく、ひとまずは肖像画の件の捜査結果で何かわかったらいいな（おそらく望み薄だろうが）ということになった。

やっと家に帰れる。

どうせなら泊まって行っても構わないとも言われたが、そうやって甘えていると客間どころか専用の部屋を用意されかねない気がするし、シャルロットたちも心配しているだろうから丁重にお断りした。家への馬車を一台用意してもらい、準備が整うまでの間に身支度を整える。

と。

「そういえば、悪かったなリディアーヌ。お前の剣を折ってしまって」

「ああ、これですか。お気になさらないでくださいませ。剣はいつか壊れるものですし、幸い、いずれとっておきの品を賜れるはずですから」
「ああ、父上に強請ったあれか。刀身よりも装飾の方に時間がかかっているようだから完成にはもう少し時間がかかりそうだぞ」
「急いではおりませんので気長に待つことにいたします。この剣も、むしろ重要なのは柄の方ですし」
　いっそ刀身がなくても専用化した魔石だけで十分価値がある。刃の入っていない刀身だけ新しい物に付け替えれば十分である。
「なら、替えの刀身は俺が代金を払おう。それだけだと味気ないから、ついでに髪飾りでもやろうか？」
「兄上。リディアーヌを本気で口説く気ではないでしょうね？　それほど気に入ったとでも？」
「こんな面白い女を俺が放っておくわけがないだろう。もし婚約解消する事があれば俺が求婚してやろうか、リディアーヌ？」
「申し訳ございません。リオネルさまから『婚約解消の話はするな』と命じられて

おりますので」

「ほう？　なんだリオネル。お前もなかなかやるじゃないか」

どこまで本気だったのやら。さっさと弟をからかう方向にチェンジしてしまう第二王子様。矛先を向けられたリオネルは嫌そうにしているが、この兄弟、思ったよりも仲が良さそうである。アルベールが割と屈託なく誰とでも仲良くなれるタイプなのも大きいだろう。

気さくに話しかけてくれるタイプだし、実際彼が婚約者でもそこそこ楽しくやれたかもしれない。もちろん、それはそれとして婚約解消するつもりはない。

とはいえ。

『わたしが狙われる理由、有耶無耶にしておくのもさすがに限界なんじゃない……？』

家に帰ると案の定、心配してくれていたシャルロットがとてもほっとしていた。アランも「また派手にやったね。怪我がなくて良かった」と笑顔を向けてくれた。

セレスティーヌは、

「リディアーヌ。報告をお願いします」

怒りはしなかったものの、有無を言わさず事の経緯を細かく報告するよう言ってきた。やっぱりこの養母は一筋縄ではいかない。

公爵家での結婚式

「ご無沙汰しております、リディアーヌ様。公爵家の皆様に私達の結婚をお祝いいただける事、心より嬉しく存じます」
「久しぶりだね。素晴らしい魔道具を贈ってくれてありがとう。お陰で公爵領も良い意味で大忙しだよ」
「久しぶり、ソフィ。しばらく会わない間にとっても綺麗になったわね。クロードも。結婚が決まって貫禄が出てきたかしら」
結婚式の一週間前、はるばる公爵領からクロードたちが到着した。
式に関する手配は既にほぼ完了しているものの、会場の下見や当日の進行に関する打ち合わせ等、忙しく過ごすことになる。
今日までの日々もなかなか慌ただしかったはずだが、メイド服ではなくドレスを纏ったソフィはとても美しく、クロードも幸せそうでとても良い感じだ。なんというか「末永くお幸せにねっ！」と微妙にやっかみの入った祝福を強く叩きつけたくなる。

もちろん、シャルロットやアランも二人を大歓迎。特にアランとクロードは積もる話もあるだろう。男同士で恋バナとかしてアランの恋愛事情を引き出してくれたりすると嬉しい。

「ご両親や他の親族は後から移動してくるんだろう？」

「ああ。父上と母上が抜けてしまう以上、あまり大勢で来ると領地の運営が滞るから他に来るのは若い世代が中心になるよ」

「じゃあ、皆さんにもまたお会いできるんですね」

若い世代というとシャルロットをいじめた奴らが含まれるわけだが、また会えると屈託なく言える義妹は本当に凄いと思う。

明るいムードに俺は微笑み、それから首を傾げて、

「でも、それならお祖父さままで来てしまうのはまずいんじゃないの？」

「一週間や二週間留守にした程度で困り果てるような教育はしておらん。奴らの能力を測る意味でのいい機会だ。……それとも、リディアーヌは私に会いたくなかったのか？」

「まさか。歓迎するわ、お祖父さま」

クロードたちに同行してきたのは（使用人や護衛を除くと）祖父一人。言っていることが出産時の父とそっくりである。

彼は俺たち三人に少々だらしない表情で挨拶をすると、出迎えに来たセレスティーヌと顔を合わせた。

養母はレオンを抱き、柄にもなく多少緊張した様子で立っている。抱っこされている弟は状況がよくわかっていないのか、母の腕の中で大人しくしていた。

「ご無沙汰しております、お義父様。ようこそお越しくださいました。主人と積もる話もおありでしょう？　どうぞごゆっくりお過ごしくださいませ」

「ああ。セレスティーヌも、今日まで公爵の妻という大役をよく務めてくれた。噂は公爵領にもしっかりと届いている。これからもジャンをよろしく頼むぞ」

「お任せくださいませ。力の続く限り役目を全うさせていただきます」

「うむ。……さて、これがレオンか？」

「ええ。どうぞ、抱いてやってくださいませ」

セレスティーヌが渡したレオンの身体を、祖父はあまり慣れていない様子で受け取り、ぎこちなく「レオン？　レオン？」と呼びかける。すると、顔か声か、は

たまたごつごつした手が嫌だったのかレオンが泣き出した。
「あら。小さい子にとってお祖父さまは少し怖いのかしらね」
「む。これでも精一杯怖くないようにしたつもりなのだが、私はまた孫に泣かれてしまったか……」
「お祖父様。というと、私達も？」
「泣かれた。アランはまだ控えめだったが、リディアーヌはそれはもう盛大に泣いた」
「ふふっ。なんだかお姉様らしいです」
「今思えば性格もあったのだろう。だが、それで懲りた私はシャルロットを抱くのを避けた。少々惜しい事をしたかもしれんな」
「そうね。シャルロットなら笑って受け入れたかも」
本当は、単に生まれた時点では孫ではなかったから抱かなかっただけかもしれない。それを上手く笑い話に仕立ててくれた祖父は本当にもう義妹に隔意を持っていないのだろう。それがあらためて感じられて俺はほっとした。
「というか、クロエはどうして隅で大人しくしているの？」

「ひっ!?　リディアーヌ、そこはそっとしておいてくれてもいいでしょう!?」

使用人の陰に立って「見つからないといいなー」みたいな顔をしていたクロエがびくっと身を振るわせて小声で抗議してくる。いや、もともと公爵領の人間なんだからむしろ身内だろうに。怯えてないで羊の話とかで盛り上がったらどうなのか。

「クロエか。ちょうど良かった。こっちに来なさい」

「っ。マティアス様。その、できればお叱りはほどほどで勘弁していただけると……」

学園に通い魔術ほかさまざまな事を学ぶ傍ら、うちの屋敷でセレスティーヌの教えを受けていたクロエ。

彼女が意気揚々としていたのはせいぜい最初の一か月までで、それ以降はハードなスケジュールとセレスティーヌから与えられた「結婚式の差配」という課題に四苦八苦していた。

時々愚痴を聞いたりお菓子を差し入れたりはしていたものの、俺も正直割と多忙な身。本格的に構っている暇はなかなかなく――最近は「少し早まったかもしれません」という呟きが漏れる程度に疲弊していた。

うちの養母が割とスパルタなのもあってか自信喪失気味の彼女はどうやら、祖父

にまで駄目出しされたら本格的にやばいと思ったらしい。びくびくしながら前に進み出てきた。

そんな彼女に祖父はゆっくりと手を伸ばし、ぽん、と軽く頭を叩いた。

「よく頑張っているようだな。だが、もう少し肩の力を抜きなさい。心配せずともセレスティーヌが補佐はしてくれているだろう」

「……え？」

ぽかん、としたクロエ。彼女が振り返ると、セレスティーヌは微笑んで頷く。

「問題があればこちらで修正できるよう準備はしていました。……もっとも、あまり必要ありませんでしたが」

「セレスティーヌ様。……もしかして、意外とお優しい方なのですか？」

『クロエもお養母さまの罠に嵌まったのね』

一見穏やかで優しそうに見えるセレスティーヌ。

その実、指導を受ける立場に立ってみると、必要だと思った指摘を容赦なく笑顔で飛ばしてくる鬼軍曹に見えてくる。しかしそのまま耐えていると「実のところ無駄に厳しいわけではない」ことがわかってくる。俺も通った道である。

まあでも、厳しいのも間違いないので「意外と優しい」とまで言ってしまうクロエは少しちょろい気がする。

さて。

シルヴェストル公爵家における主要人物の一人、クロード・シルヴェストルと公爵邸のメイド・ソフィとの結婚式には多くの招待客が詰めかけた。

少し前にテロ事件（あんなこと）が起こったため、警戒態勢の中での実施。来客全員、お付きの使用人に至るまで身体検査の上で屋敷へ通す形を取った。当然使用人と警備兵は総動員。当日は十名を超える騎士にも協力してもらう形となった。

「ご協力に感謝いたします、リオネルさま」

「なに、私は何もしていない。式に参加するのは当初からの予定だった。予定通り参加すると言ったら『危険です』と騎士が動員されただけだ」

王族代表、および俺の婚約者として参加したリオネルは城でのパーティよりも幾分か楽な格好。

式の後のパーティーではマイペースに肉を食らいつつ、挨拶してくる貴族たちに鷹揚に対応していた。話の長い相手には「主役への挨拶はいいのか？」とやんわり釘を刺し、また肉を食っていた。

「リオネルさま。もう少し野菜も食べましょう」

「最低限は食べているぞ。それで十分だろう」

「いえ、肉の量に野菜の量がまったく見合っていません。偏った食事は身体に悪いのですよ」

サラダを差しだすと嫌な顔をする王子様。だいぶ大人になったかと思いきや、こういうところはあまり変わらない。しまいには「なら食べさせてくれ」とか言い出したので「あーん」してやった。

この国の結婚式は明確に決まった形がない。

この世界にも宗教は存在するものの、国教に定められているわけでも国民の多くが信仰しているわけでもないからだ。

そのため、神を特別信じていない家の結婚は大枠を伝統に則りつつ、細部は自分たちでアレンジして行われる。法的には国へ届けが出され、婿または嫁を迎える家

の同意が得られていれば式を挙げる必要もない。それでも優雅さが求められる貴族のこと、式を挙げない結婚は極稀だ。

クロードとソフィの場合、新郎が黒のスーツを、新婦が白の豪奢なドレスを纏い、公爵家の代表である父の前で誓約することで結婚成立とした。

両者の衣装には我が家が開発した新しい服飾部品が用いられている。特にソフィのドレスはファスナーの採用によって上半身のタイトなデザインを実現しており、若い女たちの羨望の眼差しを集めた。『お陰でコルセット必須だけど……まあ、ウェディングドレスくらいは仕方ないかしら』。

それから指輪の交換と誓いのキス。

招待客から拍手で祝福が贈られ、大量の花束が手渡された。その他の祝い品については別途目録が用意され、後から順次届けられることになる。

「私達の結婚もこのような式になるのか？」

「どうでしょう。リオネルさまに希望の形式があればそのように整えられるかと思います」

「こういうのは女の希望に合わせるのが円満の秘訣だと聞いている。お前こそ希望

があるなら遠慮せずに言え。早めに言ってもらった方がこちらとしても覚悟ができる」

『そんなに変な希望は出さないわよ。どうせなら思い出に残るようにちゃんと式は挙げたいけど』

式の後はさっきも言ったようにパーティー。

豪華な料理と酒が振る舞われ、来客へ感謝が示されると共に新郎新婦が来客とゆっくり会話する機会となる。親族にあたる俺はパーティー中でなくても話せるため、一言お祝いだけを言ってその場を離れた。クロードたちがひっきりなしに対応に追われているところを見ると正解だったらしい。

もちろん俺のところへ話しかけに来る者もいる。「ここ数年で何度も命を狙われるとは本当に運の無い」とか心配するフリをしながら嫌味を言ってくる輩もいたが、誕生日の時に比べれば人数も割合もだいぶマシである。

親族の結婚式で悪意を振りかざしてくる輩だ。式が終わり次第、名前と家の一覧と具体的な嫌味の内容をリストアップして両親と共有、しかるべき対応を取ることになる。

「リオネル殿下、リディアーヌ。ごきげんよう。素敵なパーティーへお招きいただき誠に感謝しております」
「ヴァイオレット。それからルフォール侯爵夫人」
招待客の中には銀色の髪の母娘もいた。もちろんこの二人は俺にもクロードたちにも嫌味なんて言っていない。それどころか丁寧で心の籠もった祝福の言葉を新郎新婦へ贈り、豪華な祝いの品まで用意してくれたくらいだ。
「来てくださってありがとうございます。わたしからもお礼を言わせてください」
「リディアーヌの大切な親戚ならわたしが来るのは当然」
「当家としてもシルヴェストル公爵家とは友好的な関係を続けていきたいと思っております。どうか今後とも、ヴァイオレットともども仲良くしていただければと」
「ええ、もちろん」
笑顔で挨拶をし、いくつか言葉を交わした後、侯爵夫人は「セレスティーヌへ挨拶をしてくるわ」と娘に告げてその場を離れて行った。
「そうか。お前達の両親は仲が良いのだったな」
「はい。なんでも学園在学時代からの親友だとか」

「どことなく似ているし、きっと気が合ったんでしょうね」
　残されたヴァイオレットは「私もお話に交ぜていただけますか？」と静かにリオネルを見た。
「ああ、構わない。別に大した話をしていたわけではないからな」
「あら、リオネルさま。珍しく女子にお優しいのですね？」
「別に女を選んで冷たくしているつもりはないぞ。苦手な相手に女が多いだけだ。……ルフォール嬢は私に興味がなさそうだからな。話をするのに抵抗が無い」
　確かに、ヴァイオレットはいつも自然体。第三王子を前にした気負いも、自分を売り込もうという気概も感じられない。今もきょとんとした顔で首を傾げて――。
「私は殿下ともお近づきになれたら、と思っておりますが」
「え」
「なに」
　俺とリオネルは二人揃って硬直させられた。
「ヴァイオレット。いきなりなにを言っているの。それ、聞きようによってはリオネルさまを口説いているように見えるわ」

「大丈夫。間違ってないから。でも安心して。リディアーヌを押しのける気はないから。もし選んでいただけるのなら第二夫人でいいの」

いや、ちょっと待て。もっと自分を大切にしろ。

『というか、真顔で言われても冗談にしか聞こえないわよ!?』

リディアーヌとヴァイオレット

「それで？　説明してもらいましょうか、ヴァイオレット。どうしてあんなことをあんな場で言ったの？」

パーティーが終わり、招待客が帰って行った後――俺は自室でヴァイオレットと向かい合った。

場所を移したのはもちろん、あそこだといろいろ都合が悪いからだ。

今日は親子で泊まっていってもらうことにした。侯爵夫人も今頃、セレスティーヌやブリジットあたりと歓談していることだろう。

リオネルは釈然としない顔で「そんな事を言われても簡単に決められるはずがなかろう」と言い、ノーに近い保留を表明。俺たちと別の話を続けた後、「とりあえず、こいつと話し合っておけ」と俺に言って帰っていった。

そりゃあまあ、あんなやる気があるのかないのかわからない求婚をされたら混乱する。

ヴァイオレットもヴァイオレットであの話がなかったかのように普通に話をして

いたし。

今も我が家の大浴場を堪能し、ほんのり肌を火照らせ髪を下ろした状態で向かいに大人しく腰かけている。俺の貸した寝間着（ほぼ新品）は彼女には若干大きめだが、寝間着ならそう問題はない。むしろ袖を余らせているのが可愛いと思える。

男に見せたら殺傷能力が高そうだなと思いつつ、俺は親友からの返答を待って、

「だって、あの場で言えば勝手に噂が広がるでしょう？」

「……故意だったのね」

「もちろん。あんなこと軽々しく言ったりしない」

「十分軽そうだったんだけど」

言いながら、傍に控えている侯爵家のメイドを見る。

女性としては長身の彼女はポーカーフェイスのまま直立しており、主の動向を心配している様子はない。職務外のことには口を挟まないタイプなのか、それとも。

俺はアンナの入れてくれた紅茶を口にして気持ちを落ち着ける。秋になって涼しくなってきたし、今は麦茶よりも紅茶の気分だ。逆にヴァイオレットは湯上りなのもあってか冷えた麦茶を少しずつ口にしている。

「つまり、本気でリオネルさまの第二夫人を狙っているのね？　第一夫人ではなく」

白く形のいい顎が縦に揺れる。

「リディアーヌが第一夫人になるとしたら、第二夫人は自派閥、もしくは友好的な派閥から選ぶしかないでしょう？　あなたは敵と味方がはっきりしているから」

好意的な相手からはとても好かれるが、敵対的な相手からは蛇蝎の如く嫌われている。

リオネルが王位継承するとなれば国内のバランスを考えて第二夫人は「反リディアーヌ派」から選ぶという手もある（その場合の筆頭候補はベアトリスか？）ものの、その場合は妻同士の仲が険悪になりかねない。派閥抗争が俺たちの子供世代にまで波及していくだろう。

それを考えれば、最初から俺と仲のいい相手を第二夫人につける方がいい。

「という建前で、リオネルさまを落とそうってこと？」

「ううん。私はリオネル殿下に懸想をしていない。他に好きな男性がいるわけでもない。きっとこれからもできないと思う」

「じゃあ、どうして？」
「そうすれば大切な人の傍にいられるから」
青色の瞳がかすかに揺らめき、紫に近い色へ変わる。
真っすぐに見つめられた俺はなんとも言えないこそばゆさを感じながら、親友の発した言葉の意味を吟味した。まさか。いや、でも、ストレートに考えるとそういうことになってしまう。思い当たる節もいくつか、いやけっこうある。
「もしかして、ヴァイオレットの好きな人って――わたし？」
「駄目？」
本当にそうだった。
『ちょっと待ってよ。え？　なにこれ？　どうしたらいいわけ!?』
「だ、駄目ではないわ。むしろ嬉しいけど……ええと」
男の人格も女の人格も混乱しっぱなしの俺。一方、銀色の妖精はぱっと華が咲いたように笑顔を浮かべて「よかった」と小さくこぼした。
柔らかそうな右の手のひらが胸に押し当てられ、左の手のひらがそこに重なる。
「駄目だって言われたらどうしようかと思った。……嬉しい、って言ってもらえた

だけでも幸せ」

なんだこの可愛い生き物。いや、そうではなく。

「じゃあ、わたしの傍にいるためにリオネルさまの妻になろうっていうの？」

「うん。もちろん、それだけじゃなくて国の利益も考えた結果だけど」

言って、ヴァイオレットは胸から両手を離した。代わりに耳に付けたピアスを片手で弄ぶ。チャームは俺が旅行土産で渡した飾りだ。

「ルフォール家が『中立のルフォール』と呼ばれていることは知っているでしょう？」

「ええ。国への忠誠が篤く、特定個人に肩入れすることのない忠臣。……でしょう？」

「そう。でもね、それだけじゃないの」

ヴァイオレットが言うには、ルフォール家の人間は代々、国のためにひっそりと活動を行ってきたらしい。

主な活動は情報収集。

舐められないように実力をつけ、それでいて存在感は消し、様々な人間から様々

な噂話を収集する。収集した情報は国を良くするために役立てる。
　諜報員の家系――というほど大袈裟ではないが、マウント合戦が当たり前なところのある貴族社会において特異な存在であるのは間違いない。
「私のお母様は『稀代の秀才にして最高の問題児』と言われていたんだって。そして、私は小さい頃からお母様にそっくりだって言われて育った。今は自分でもそう思ってる」
「ルフォールの血族なのは侯爵夫人の方なのね」
「うん。お父様も遠縁の血筋だけど、ルフォールの役割を小さい頃から教え込まれてきたわけじゃない。だから、侯爵位はお父様が持っているけど公式行事に顔を出すのは主にお母様なの」
　侯爵としての表の役割を父が、ルフォール家の『本業』を母が担当しているということか。女の領分が強いシルヴェストル公爵家と少し似ているかもしれない。
「最高の問題児っていうのは……」
「目的のために感情を殺しきれないから。お父様と結婚したけど、お母様には別に好きな人がいたの。結婚までには相当、お祖父様やお祖母様と揉めたって」

「でも、最終的には諦めたんでしょう？」
「うん。お母様が好きなのは結ばれることのできない相手だったから」
既婚者か、歳が離れすぎていたか、他国の貴族だったのか。少し気にはなるものの、そこまで尋ねるのは野暮というものだろう。
ヴァイオレットは自嘲するように笑って、
「私はもっと問題児なの。本当なら止めなきゃいけないお母様が私の味方だから」
侯爵夫人は自分が諦めざるをえなかった分、娘の希望を後押ししたのか。
「もちろん、私も教育は受けてる。だからできる限り国の利益も考えるけど、私の最優先はリディアーヌ。お兄様やお姉様がいる私は家を継ぐ必要もないから」
「そこまで、わたしのことを？」
「変？」
「……いいえ、変なんかじゃないわ。望みのために全てを犠牲にするつもりならともかく、ヴァイオレットはきちんと弁えているもの」
その上で譲れないものを追い求めるのはなんの問題もない。むしろ俺としては好感が持てる。

「でも、まさか初めての告白が女の子からとは思わなかったわ」
「殿下から求婚されたのでしょう？」
「婚約者になれ、という命令は告白じゃないでしょう」
そのリオネルとさっさと婚約してしまったので他の男からのまともな告白や求婚はない。
まともじゃない告白というと「王子はやめて俺の女になれよ」的なものとか、相手の自宅で二人っきりにならないかといったあからさまに罠なやつだ。
それを聞いたヴァイオレットはこてんと首を傾げて、
「じゃあ、私にもチャンスはある？」
「ごめんなさい。リオネルさまを裏切ることはできないし、女同士では結婚も子供を作ることもできないもの」
「リディアーヌの魔法でも子供は作れない？」
「やったことのないものを具体的に思い描くのは無理よ」
「そう」
残念そうにしゅんとしてしまった。申し訳ないが、そのまま納得してもらおう。

結婚できないのは本当だし、ヴァイオレットの子をお腹に宿すことができないのも本当だ。前世で男だった記憶を用いれば逆はできるかもしれないが、言っても話がややこしくなるだけである。

少女が顔を上げるまでにかかった時間はほんの僅か。また真っすぐに俺を見つめて、

「でも、傍にいるのはいい？　これからも仲良くしてくれる？」

「もちろん。わたしからもお願いしたいくらい」

「リディアーヌは優しいね」

熱っぽく言われて、思わず頬が熱くなってしまう。これも前世の影響か、俺はわりと女子に弱い。なので優しいのとは全く別である。

というか、紫っぽかった瞳がほとんど赤に染まっている。

「前から思っていたけど、あなたの瞳って綺麗よね。色が変わるの？」

「うん。普段は青だけど、興奮するほど赤くなるの。気味が悪いって言われることもあるんだけど……やっぱり、リディアーヌは私にとって特別」

「ヴァイオレット、瞳が完全に赤くなっているわ。少し落ち着いて。これからのた

めに線引きをしておきましょう！　どこからは駄目でどこまではやってもいいか、きちんと決めておくの！」

キスは駄目、押し倒すのも駄目。手を握ったり軽く抱きつくくらいならいいが時と場合を弁えること……といった条件は全面的に受け入れられた。当人としても歯止めがきかないままエスカレートしてしまうより良い、ということらしい。

「でも、リディアーヌ。あなたを支援してくれる第二夫人の存在は必要だと思う。リオネル殿下にとっても、第一王子殿下や第二王子殿下にお飾りの婚約者しかいない今、結婚後の体制を確立できるのは有利に働くでしょう？」

「それはそうだけれど、リオネルさまは正々堂々実力で勝ち取るつもりだと思うわ。どうしてヴァイオレットがそこまでするの？」

「決まっているでしょう？　リディアーヌを王妃にして、何があっても守るため」

『何があっても、か』

俺もきちんと聞かされていない俺の秘密について、ヴァイオレットも知っているのだろう。

親世代だと結構な人数が知っているようだから、情報を集めるのが仕事のルフォー

ル家は当然把握しているはず。
「ねえ、ヴァイオレット？　わたしを狙っている人間、あるいは純血派の裏にいる人間に心当たりはない？」
「私が聞かされている範囲だと、国内の反リディアーヌ派は首謀者じゃないと思う。多少の金銭的・物的支援くらいはあるかもしれないけど」
「じゃあ」
「たぶん他国の人間。国外になると極端に情報を集めにくくなるから、詳しくはわからないけど」
翌日、俺はリオネルに「三人で話がしたい」と手紙を出し、話し合いの場を設けてもらった。
盗聴防止と専属以外の人払いを用いた話し合いの結果、ヴァイオレットが第二夫人を希望していることは口外して構わない。ただし、リオネルから公式的な返答をするのは俺と結婚した後、ということになった。
「殿下からの寵愛は求めません。お二人の利益はできる限り尊重します。ですので今後もリディアーヌの傍にいることをお許しください」

「愛でも政略でもない求婚というのは初めて受けたんだが、これはどうしたらいいのだ？」

「わたしとしては他の者よりはヴァイオレットが第二夫人である方は望ましいと思います。ですのでご自分の利益と感情に従ってお決めになってください」

「わかった。……煩わしいあれこれが無いというのであれば、私としても悪くはない。妻に娶るとは言えないが、ありがたく利用させてもらおう」

春生まれのリオネルは既に十二歳。そろそろ女の子が気になりだしてもおかしくない頃合いだ。そうなったら自分がどれだけ恵まれた立場にいるかさすがの彼でも気づくだろう。

俺を怒らせるとヴァイオレットまで失う。そうなると浮気はよりやりづらいだろうから……思ったよりもこの体制は強力かもしれない。ベアトリスとかけっこうな胸の大きさに育ちつつあるので一応牽制しておきたい。

『殿下にも納得していただけてよかった。これからもよろしくね、リディアーヌ』

ほっとしたり先のことを考えたりしていたら、不意に頭の中へ直接ヴァイオレットの声が響いた。

思わず視線を向けると柔らかな笑みが返ってくる。前よりもさらに好意があからさまになっていて頬が熱くなることこの上ない。

どうしたものか。俺は親友へ答えようと、お互いの頭を通して声を届けるようなイメージで魔力を流し、

『もしかしてこれ、念話？』

『うん。今までにも何度か試していたんだけど、やっと通じたみたい』

『相性があるらしいから、それは難しかったでしょう』

『要は心の距離の問題。だから、リディアーヌが受け入れてくれれば後は簡単』

送られてきた声に返答するのは自分から送るよりは難易度が低いらしい。送り返す方でまずコツを掴めば自分から送るのも楽になるので、今後は他の相手とも念話ができるようになるんじゃないか、とのこと。

せっかくなので帰ってから試してみたところ、父やアラン、シャルロットにも声を送ることができた。これで父やアランとは離れていても報告や相談が可能である。シャルロットはまだ声を送り返すのが難しそうだったので、これからの練習課題に追加である。

なお、何故かセレスティーヌとの念話も成功した。相手も釈然としない顔をしていたのでお互いに似たような認識のようである。まあ、便利だから良しとしておこう。

そんなことがあってからしばらく。

十二歳の誕生日を迎えた俺はある日、王都のある一点から天へ向けて大きく立ち上る光の柱を見た。

『聖女』の出現

俺の誕生日から二週間ほどが経った休日の午後のこと。

だんだんと明るさの弱まりつつある空を再び昼に戻すかのような強烈な光が、突然、窓から部屋の中へと飛び込んできた。

早めの入浴を終えて部屋に戻り、アイスティーを口にしようとしていた俺は危うくグラスを落としそうになりながら慌てて立ち上がった。

「なにこれ、なにが起こったの!?」

「お待ちください、リディアーヌ様！」

窓に駆け寄ろうとした俺をアンナが制止。二人がかりで髪の手入れをしてくれていたオーレリアは即座に窓――というか光の来る側の壁全体に防御障壁を展開した。少し冷静さの戻った俺も障壁を重ね掛けし数秒間、魔法攻撃か衝撃波か、来るかもしれないなんらかの脅威に備える。

しかし、恐れたような変化は訪れなかった。

障壁を消さないまま窓へと歩み寄る俺たち。見えたのは街のどこか――方向と距

離からして平民街のどこかから立ち上り続ける白い光だった。
　柱の太さは誘拐時にシャルロットが出した光のおよそ十倍。光の質も異質というか別格だ。どういう原理なのか、その光からは美しく清浄な力を感じる。受ける印象としては危険とは正反対。だからこそ俺の知る常識からかけ離れている。
「オーレリアがここにいるということは、あれは別の誰かの魔法ということよね」
「貴女も一緒にいる以上、私達以上の使い手が現れた事になるわね」
　冗談めかして呟くと、メイドモードではない素のオーレリアから返答があった。
　するとアンナが困惑気味に口を挟んで、
「リディアーヌ様やオーレリアよりも上の使い手なんてそういませんよね？　それよりも、これはそもそも魔法なんですか？」
「魔法じゃない方が問題でしょう」
「それはそうですが……」
　話をする間もオーレリアはその漆黒の瞳を柱から外していない。
　攻撃が来ることはなさそうなので障壁は消した。
「リディアーヌ。あれが何かわかるかしら？」

「一つ、思い浮かぶものはあります。もしも正しければ歴史的大事件ですが……」
「奇遇ね。私も同意見よ」
「あの、それっていったい……？」
尋ねられた俺は答えを口にしようか迷う。言うと事態が確定してしまうのではないか、という気がしたからだ。
推測が正しければ相手は悪魔や妖怪ではなく清らかな性質のはずではあるのだが。
俺はため息を一つ吐き出して、
「聖属性魔法の使い手が目覚めたのよ。よりにもよってこんな時に、この国にね」

この世界には七つの魔法属性がある。
火、水、土、風、光、心。ここまでが六大属性とされ、一般的に属性と言えばこれを指す。その理由は、最後の一つが他とは比べ物にならないレベルでレアだからだ。

聖属性。

他の六属性全てを兼ねるこの属性は、癒しや浄化を主に司る。治癒魔法が難しいとされるのは聖属性の魔法である（属性が少なく、また属性魔法の習熟が甘いほど効率が下がる）ためだ。

オーレリアの全属性にも聖属性は含まれていない。

聖属性の持ち主こそが真の意味での全属性。力に目覚めた時点であらゆる魔法使いの上を行く可能性を秘めた存在であると考えて良い。

「聖属性は私も知っています。たしか、ここ二、三十年程は現れていなかったとか……」

「ええ。歴史を紐解いてみても平均二、三十年周期よ。国単位ではなく世界全体合わせてこれなのだから希少さがわかるでしょう」

だから、時期的にそろそろ現れるのではないか、という噂は囁かれていた。

現れること自体は予定調和だったわけだが、

「……困ったことになったわね」

「そうね。国王陛下をはじめ、首脳陣は頭が痛いでしょう」

「え……？　あの、どうして困るのですか？　聖属性を擁する事は国益に繋がるでは？」

「もちろん。一人いるだけで国を安定させられるくらいには意味があるわ」

過去の聖属性持ちは土地を蝕む悪い毒を浄化して豊穣をもたらしたり、疫病を根絶して国を危機から救ったり、人々の心を浄化して大戦争を終結させたりしている。

男であれば『聖人』、女なら『聖女』などと呼ばれて伝説的な扱いをされており、前回出現した聖女――存命しているもう一人の聖属性使いは遠い北の国で王を上回るほどの特別待遇を受けている。

「ただ、ね。聖属性に限っては誰にでも発現の可能性があるのよ」

貴族の血が混ざっていない完全な平民にも等しくチャンスがあるということ。

人数比を考えればむしろ平民から出る可能性が高い。

実際、過去の聖属性持ちも多くが平民だ。

「……あの柱、平民街の方からだったのよね」

光の柱は数分ほどで自然に消失した。
程なくして部屋をメイドが訪れてセレスティーヌからの指示を告げる。「しばらくの間、どうしても避けられない用事以外では屋敷の外へ出ないように」とのこと。
養母も柱の意味を重く受け止めたらしい。
当然、城も同じだ。城へ出ていた父は泊まり込みが確定。夕食を共にできないという連絡ついでに最低限の情報を屋敷に送ってきてくれた。セレスティーヌを通して伝えられたそれによると、
「先刻、街で発生した光の柱は聖属性魔法の発現によるものでした」
目覚めたのはやはり平民。
「現在十二歳の少女です。家は大衆酒場。仕込み中に怪我をした父親を心配したのがきっかけだとか」
「少女――ということは『聖女』ですか」
「十二歳という事はお姉様と同い年ですね」
「同世代なのね。どこかで会う機会もあるかしら」
アランが感嘆し、シャルロットが俺を見る。

セレスティーヌはこれに頷いて、
「いずれ顔を合わせる事になるでしょう。魔力に目覚めた以上、平民の世界では暮らしていけません」
現場には騎士と共に城の使者が急行。
事情を聞くと共に魔力測定の魔道具を使わせたところ、少女の魔力量は王族の平均値を超えていた。
俺やオーレリア並の魔力持ち。それだけで欲しがる貴族はいくらでもいるだろうし、平民から妬まれる可能性も高い。
国からの庇護を受け学園に通うことになるのはほぼ確定。
養子縁組によって貴族になれればなおいい。
「後見人として陛下が名乗り出られる可能性もあるでしょうか」
「ないとは言い切れません。話の流れ次第ではありますが、最も不満の出ない対処方法かもしれませんね」
聖女はひとまず王城で保護された。
各種確認や事情説明のため、何より誘拐を防ぐためだ。攫った上で養子縁組なり

婚姻を迫る貴族がいないとも限らない。
当人にもひとまず落ち着いてもらい、今後の身の振り方を選んでもらわなくてはならない。
「お父さまは大変ね。落ち着いたら思い切り労ってあげなくちゃ」
「そうですね、お姉様」
俺とシャルロットのダブルアタックならかなりの効果がありそうだ。アフターケアは頑張るので、父と国王には頑張って欲しい。

頑張って欲しいと他力本願でいたら王城に呼び出された。
柱が立った二日後の夜のことである。
今日まで父は家に帰ってきていない。着替え等は都度運ばせているし、健康状態にも問題はないが「娘達に会いたい」と愚痴をこぼしていたとか。
『でも、わたしに会うためだけの呼び出しとは思えないわね』
日付指定は翌日の午前中。異例と言っていいほど急ぎの用件である。招待状の差

出人はリオネルになっているが、筆跡が王子自身のものでもセルジュのものでもない。聖女絡みとみて間違いないだろう。

俺は受け取ったその場で了承の返事をしたため、運んできた城の使用人（騎士による護衛付き）に渡した。

同じ招待状がアランにも届いた。

「お養母さまは無視してわたしとお兄さまだけってどういうことかしら？」

「向こうには父上がいるから保護者は不要と考えたのかもしれないが……詳しい事は聞いてみないとわからないな」

念話で聞いてみるという手もあるが、向こうから送ってこない以上は「会って話した方がいい」という判断だと思われる。

「仲間外れにしてしまってごめんなさい、シャルロット。お養母さまとお留守番していてくれるかしら？」

「任せてください。お屋敷を守る者も必要なのですよね？」

「ええ。シャルロットは本当にいい子ね」

義妹は性格的に攻撃魔法は向いていないらしくあまり上達していない。一方、破

壊を伴わない魔法はめきめきと腕を上げており、守りの魔法もそこそこの精度になりつつある。使用人や兵士と協力すれば十分に戦力として数えられる。

レオンのこともある。セレスティーヌも家に残ることを決めた。

「旦那様がいらっしゃれば心配はないと思いますが、心の準備だけはしておいてください。おそらく、何か大きな事態が動いているはずです」

「かしこまりました、母上」

「なにもわからず待たされるよりはずっといいでしょう。求められた以上は精一杯務めを果たしてくるわ」

華やかな用事ではないが王城行きには違いない。俺とアランは余所行きの中でも上等な衣装を纏って参上した。

案の定、通されたのはリオネルの部屋ではない。

階段を何度も上り、通路をあるいた先にある応接間――王族が貴賓を歓待する時などに使われる特別な場所だった。

「二人共よく来てくれた。さあ、こちらへ」

室内には国王と王妃。さすがに若干疲れた様子の父もいる。さらにルフォール侯

爵夫人。護衛騎士を統括するのは騎士団長だ。
「よう、お姫様」
「また会ったね」
アルベールとシャルルまで揃っている。どこからどう見てもやっかいごと。国の重要人物が目白押しで、俺と兄が場違いなのではないかとさえ思える。
「お待たせしてしまいまして申し訳ございません。アラン・シルヴェストルおよびリディアーヌ・シルヴェストル。ただいま参上いたしました」
「よい。話が尽きなかったのでな。先に集まっていただけの事だ」
鷹揚に答える国家元首。相変わらず子供には甘い。一方で、彼の言ったことも嘘ではないのだろう。既にお茶と茶菓子が用意され、それなりに消費された跡がある。俺たちの分の紅茶もすぐに用意された。
「最後の一人も直に来るであろう」
『最後って、まだ増えるわけ？』
予想された通り、俺とアランが腰を落ち着けて程なくメイドが到着を告げ、第三王子リオネルがその姿を現した。年齢的に話し合いには参加していなかったと思わ

れる彼は室内の顔ぶれを見て一瞬硬直すると、すぐに挨拶をして席についた。
俺やアランと同じソファ。リオネルが真ん中で左右に俺とアランという配置だ。
父は国王と王妃の後ろに立っている。
盗聴防止の魔道具が複数起動され、部屋の入り口を騎士が警戒。窓にもカーテンがかけられており照明の魔道具が起動している。
「さて、皆に集まってもらったのは他でもない。先日、我が国に現れた聖女の件だ」
声の聞こえる範囲にいる者は全員、驚く事もなくこれに頷いた。
「予備知識は全員あるようだな。知っての通り、聖女は現在城で保護している。彼女の処遇を巡り協議を重ねているが、これは少々難航している」
父が「少々どころではない」と言うように眉を動かした。
「主な原因は当の聖女がこちらの提案に難色を示している事だ。家に帰って父の店を手伝いたいとな」
貴族との養子縁組も学園への入学もノー。平民として普通に暮らせればそれでいいと言い張っているらしい。まあ無理もない。加えて、彼女が聖女である以上は無碍に扱うこともできない。立場上は平民だからと強制すれば反感を持たれて国益を

損なう。

しかし、聖女を平民街に置いておくのは非常に難しい。

常時複数人の騎士を置いて警護にあたらせるのが最低条件。それでも危険が防げる保証は全くない。人間である以上は油断もあるし、純血派のような不届き者が大挙して押し寄せたら単純に手に余る可能性だってある。

「父上。やはり純血派が問題なのですか？」

リオネルが緊張を含む声で尋ねる。

「奴らが聖女を危険視し、攻撃するかもしれない。そうなれば今度は貴族ではなく平民にも直接的な被害が出ます。国はさらに乱れることになる」

「それもあるが、それだけじゃないな。俺たちは逆の心配もしなくちゃいけない」

答えたのは国王ではなくアルベールだった。

「兄上、逆とは？」

「純血派ってのは平民至上主義なわけだろ？　だったら、平民から生まれた魔力持ちってのは奴らにとって『貴族を否定する格好の材料』なんだよ」

「っ!?」

ごくごく低い確率でしか生まれない以上、貴族の優位性を崩すほどではない。それでも平民出身の魔力持ちを旗頭にできれば純血派の勢力拡大は間違いないだろう。

何しろ聖属性はあらゆる魔法の頂点と言っていいのだから。

「この際ですからはっきりさせてしまいましょう。純血派と呼ばれる存在が具体的にどのようなものであるか。その背景に何があるのか」

ルフォール侯爵夫人が静かに言う。彼女が口にしたのはかつて俺たちも耳にしたことのあるとある組織の名だった。

「北の果てに位置する『教国』そして『教会』。それが純血派の生まれた発端です」

『聖女』の出現 2

『教国』は大陸の北端に位置する小国だ。

面積は王国の三分の一程度。国のトップは教皇と呼ばれ宗教的なトップを兼ねている。この世界で最もメジャーかつ人口の多い宗教。そして、その教えに基づいて動いているのが『教会』である。

「教会の教えでは、我々貴族の起源は古の『神』にあるとされています」

神とは天馬、竜、一角馬等の伝説的な幻獣たちのことだ。

教会はこれらを架空の存在ではなく「かつて実際に存在し、世界を支配していた神」と位置付けて信仰している。貴族の祖は神々から力を与えられた者たち。つまり貴族も平民も元は同じ人間だったと。

この辺りは俺たちも歴史の勉強として教えられている。

「だが、それが純血派とどう関わる？　教会の教えでは、平民とは『神々から力を授からなかった』者の末裔だろう。むしろ貴族を賛美する宗教だと思っていたのだが」

「それは、教会において『天使』が別格とされているからです」
七種類いたとされる神々の中で唯一、人に近い姿をしていたとされるのが天使だ。
聖属性はこの天使が施した力だとされている。このことから教会の認識では天使の下に他の神が置かれる。これを上司と部下とするか親と子とするか、はたまた別とするかは解釈によって異なるのだが、
「聖属性を持つ聖者・聖女は教会において最重要視される存在。先代の聖女は平民出身ですが教皇陛下との間に子を成しています。最上位にある天使の力を発現しているのですから当然ですね」
「平民出身者が国の頂点と同等かそれ以上の権力を持つのか……。ん？　なるほど、そうか！　だから純血派などという発想がでてくるのだな？」
「はい。聖属性使いの多くは平民出身。貴族から出た聖属性使いもいますが、彼らの血統を辿ると多くの場合、そこに聖者・聖女がいます」
聖属性に目覚める平民に貴族の血は入っていないが、聖属性に目覚める貴族には『平民の血が入っている』。
「教会の中でも過激派とされる純血派はこれを根拠に平民至上主義を掲げていま

す。……おそらく、我が国において活動を行っている者達はもはや信仰とはほぼ切り離された反貴族派と言っていい手段ですが」

「では、教国も純血派を支持しているわけではないのか？」

「むしろ異端と言っていいでしょう。教国の主流派は聖女を皇妃あるいは教皇とすることを望んでいますが、一般の平民を政に関わらせたいとは考えておりません」

国教には定められていないがこの国にも教会の支部はある。国の象徴に幻獣――つまり神を用いている国は直接的な末裔とされ教国からも一目置かれている。そのためたとえ邪魔だと思っても付かず離れず、上手く関係を保っておく必要があるのだ。

『宗教家って一度敵認定した相手にはとことん残酷になるものね。下手に絶交できないってわけ』

この国の純血派は中枢から離れた末端がさらに過激さを増し、貴族に反感を持つ平民を取り込んで化学変化を起こしたものと見られる。

中枢メンバーは信仰に篤い――端的に言えば狂信者が務めているかもしれないが、その他のメンバーは貴族を否定する理由付けとして賛同していたり、単に反政

府活動的に支持していて宗教的な考えなんて一切なかったりするごった煮状態だ。
「教国内の純血派が金銭的・物的支援を行っていない確証もありませんが、教国の主流派による支援はないと言っていいでしょう」
「ふむ。……となれば、なおさら聖女を純血派にはやれんな」
聖女が唆されてテロリスト化なんかしようものなら大事である。
下手したら教国内の純血派までが勢いづいてクーデターとか起こしかねない。平民偉い、貴族は聖女の奴隷！　みたいな思想の奴らが国を牛耳った日には周辺国家へ次々と宣戦布告を始めたり、それこそテロが頻発することだってあるだろう。
「陛下。聖女にはそのあたりの事情を伝えたのですか？」
「反応を見ながら少しずつ説明を試みているところだ。いっぺんに説明されたところで理解できるとは思えないからな」
国がいくつもあってそれぞれに歴史的背景があって、かつ国内にも複数の派閥があって……なんて、今まで平民だった者には難しすぎる話だ。無理に詰め込めばそれこそ「いいからうちに帰して！」となりかねないし、そこは仕方ないところだろう。

ここでシャルルが俺たちを見ながら口を開いて、
「リオネル。リディアーヌ。アラン。何かいい策はないかい？　歳の近い君達の方がまだ聖女の気持ちは理解しやすいのではないかと思うのだが」
「そう言われましても……私も平民の感覚に疎い身ですから」
困ったように答えるリオネルが「おい、なんとかしろ」とこっちを見てくる。どんな無茶振りだ。いや、王子様に比べたら平民に近いのは事実だが。
仕方ないので代わりに意見を口にする。
「多少無理にでも『保護』すべきかと存じます。当人が説得に応じないのであれば親に説明し、娘の説得を依頼するのも良いかもしれません。十分な報酬を約束し、店の改装費に当てろと告げたり、平民として過ごせば周囲に迷惑がかかると話すこともできます」
「やはりやむを得ないか。リディアーヌ。もしもの時は其方に説得を頼んでも良いか？」
「陛下のご命令とあらば喜んで」
同性かつ同年齢とくれば俺に白羽の矢が立つのもある意味自然な流れ。人間、話

す相手によっても聞く耳持つかが変わってくるものである。
「多少進展があったな。……では、ここからが本題なのだが」
『今までのは前置きだったの!?』
それは本当にただ事ではない。
事情を知らないお子様三人は顔を見合わせ、三人を代表する形でリオネルが父親に尋ねる。
「一体、何が起こったのですか？」
「これは極秘事項である。外部に漏らした者は誰であろうと厳罰に処す。よいな？」
「――――！」
息を呑みながらもこくりと頷く俺たち。それを確認してから国王はゆっくりと告げた。
「昨日、『教国』からの使者が我が国へと転移して来た。教皇の正式な代理人として、だ。彼らは聖女への可能な限りの厚遇を我々に要求している」

「早すぎる。不眠不休で馬を走らせたとしても本国へはまだ辿り着かないはずだ」

しばしの沈黙の後、アランが表情を引きつらせながら言った。

王都から公爵領まで馬車で二日以上かかった。馬車よりも馬の方がスピードは出るし、単独であれば食事や休憩の時間なども短縮できるとはいえ確かに早すぎる。

これに答えたのは父だ。

「王都に諜報員を置いていたのだろう。光の柱の出現を確認後、直ちに早馬と遠話魔法を駆使すれば不可能とまでは言えん」

教国では魔法使い――貴族の扱いが異なる。全員が教会の一員として教育を受け、中には他国の教会に駐在員として派遣される者もいる。

父とアランが王都と公爵領間で念話を成立させていたように、魔法を併用すれば確かに速度は上がる。そのためには近親者を揃って諜報員化するか、あるいは別の理論に基づく高精度・遠距離用の遠話魔法の開発が必要なはずだが、これも宗教国家の執念か。

ここで国王がため息。

「加えて転移の魔道具だ。……まさかあれが実際に起動するとは」

転移の魔道具は国の機密の一つ。

存在すらも限られた者にしか明かさず、城の奥深くに厳重に保管していたらしい。

元々は大昔の国王が当時の教皇から贈られた品で、対となる魔道具同士を共鳴させることで空間を繋げるらしい。本当ならば間違いなく国宝級。凄腕の魔道具製作者が何年もかかりきりになってようやく完成するレベルの品ではなかろうか。

教国は神にまつわる古い国々全てにこの魔道具を提供しており、緊急の用件があった際に使者を送ってくるのだという。天馬を象徴するこの国もその対象というわけだ。

（ちなみに、使用に尋常じゃない魔力が必要なので軍事侵攻に使われる心配はない。そうまでして兵を送り込むくらいなら魔力持ちを陸路で送ってテロさせた方がまだ有益である）

「可能な限りの厚遇ということは、聖女を自分たちへ引き渡せと言っているわけではないのですね？」

「当初はそれを要求されたが断固拒否した。聖女もこれに関しては我々と同意見だ」

今までの生活ができなくなるのは嫌だが、住み慣れた土地を離れるなんてもっと嫌だというわけだ。

「で、その厚遇ってのが問題なんだよな。奴らとしては聖女の望みを最大限叶えるのが最上らしいんだが、じゃあただの村娘として扱っていいかと言ったら『そのような事は許されるわけがありません』とか言ってくるんだよ」

確かにそれは「どっちなんだよ」と言いたくなる。

「彼らにとっては衣食住を整え何不自由ない生活を送らせる事が前提なのだろうね。教会にとって聖女は最上位者なのだから」

「だけど、聖女自身が嫌だって言ってる以上は強制もできない。俺達に『なんとかしろ』とやんわり圧力をかけてきている最中ってわけだ」

『うわ、面倒くさいわね、それ』

聖女に手厚い対応をしろ、と言う以上は下手な貴族と縁づかせることもできない。一方で当人の希望も尊重しなくてはならない。下手に扱うと宗教国家が怒って攻めてくるかもしれない。

やっぱり聖女は厄介事の種だった。

「早く落としどころを見つけなければ他国からの介入もありうる。そして、聖女が他国に渡る事を希望した場合、教国はそれを後押しするだろう」

説得を担う者の責任は重大である。俺のことだが。

「幸い、聖女の説得については道筋が立った。国の利益を考えれば我が養女としたいところだが、聖女の望みは出来る限り尊重しようと思う。シルヴェストル公爵家、あるいはルフォール侯爵家であれば十分にその役割を果たしてくれよう」

「陛下からのご信頼、誠に嬉しい限りでございます」

それで俺たちが呼ばれたわけだ。ヴァイオレットが呼ばれていないあたり、俺かアランに説得を任せるのはほぼ決まっていたのではあるまいか。

「では、説得はいつにいたしますか？　聖女の親を召喚し、協力を要請した後の方がよろしいでしょうか？」

「少し待ってくれるかしら、リディアーヌ。実はもう一つ、貴女にやってもらわないといけない事があるの」

積極的に話を進めようとすると、王妃からまさかの待ったがかかった。この上さらにやっかいごとがあるとか、本当に大変すぎる気がするのだが。

俺は姿勢を正して口を閉ざし、先を促す。

この国で最も偉い人間である国王がどこか沈痛な面持ちを浮かべ、俺に言った。

「教国からの使者はもう一つ重要な要求を行ってきた。聖女とこの国の王族、およびその婚約者の正確な魔力を確認する事だ」

「正確な魔力？」

「城には高度な魔力確認の魔道具が置かれている。国に一つしかない貴重な品でな。それを用いる事で属性と魔力量、そして各王家に連なる血の濃さを測る事ができる。聖属性の有無も含めてな」

オーレリアがかつて俺に用いたものの豪華版といったところか。

後から聞いたところによると、あの杖状の魔道具では聖属性の適性は測れないらしい。《魔女》であるオーレリアでさえ見たこともないのだから当然と言えば当然だが。

城にある貴重な魔道具を使えばその辺りも含めて完璧にわかるというわけだ。

「使者は聖女の正当性を疑っているのでしょうか」

「単にはっきりと確認したいだけだ、と主張している。無論、我ら王族までも対象

に含める以上、先方にも相応の覚悟を要求したが、引き下がらなかった」

外交問題になりかねないのを承知で王家の血を確認したいと言ってきた教国。

表向きな狙いはこの国に聖女を擁するだけの正当性、権威があるかの確認。裏の目的は『ひょっとしてわたしとお兄さま……なのかしら』。

見れば大人たちはみなどこか沈痛な表情を浮かべている。できることなら避けたかったが、無理に拒否するよりはここではっきりさせた方がいい、という判断か。

なら、それでいい。

どのみちそろそろ限界だったのだ。ありがたく確かめさせてもらおう。

「かしこまりました。もちろん、わたしは構いません。わたしもリオネルさまの婚約者ですから」

とりあえずここで一区切りです。

何割か閑話風の話が続いたので閑話はそのぶん少なめになりますが、その後はストックの関係でまたお休みをいただいたりするかと思います。

閑話

目覚めた聖女と初めての城

自分を中心に、見たこともないような光の柱が空に向かって立ち上っている。

リヴィエール王国の都で父と二人、平凡な大衆酒場を営んでいる少女――セリアは、自分が引き起こしたはずの現象を見つめながらぽかん、と口を開けた。

事の発端はちょっとした出来事。

芋を茹でていた鍋を父が誤ってひっくり返してしまい、熱湯で腕を火傷してしまった。

「くそ。これじゃ凝った料理はしばらく出せねえかもな」

ぼやく父を見て、セリアは胸を痛めた。安酒とちょっとした料理を出すだけのなんてことのない店。昔は人を雇っていたらしいが、セリアが手伝えるようになってからは二人だけで切り盛りしている。もう少ししたら本格的に料理を教えてくれる

と言われているが、今のところ父の味を出せるのは父一人しかいない。
動かないわけではないので騙し騙しやることはできるが、酷使するのは父の負担になる。料理を目当てに来てくれている常連がそれで満足する品を提供できるかどうか。
「心配すんな。しばらく客が減ったくらいで困るほど貧乏はしてねえよ」
ぽん、とセリアの頭に（無事な方の）手を置いて笑う父だったが、娘から見ると彼は少し元気がないように思えた。
できるならいつも通り店をやりたいのだ。
セリアには母の記憶がほとんどない。まるで貴族様のような金髪と青目をくれたのは彼女なのではないか、と疑っているのだが、父によると彼女はただの平民でセリアとは似ても似つかず、しかもうだつの上がらない父を見捨てて金持ちの男の愛人になり逃げてしまったらしい。
昔の女に未練があるのか、それとも単にモテないのか、父が新しい妻を見つけようとする様子はない。つまり、彼を助けられるのはセリア一人だ。
（どうか、お父さんの腕が早く治りますように）

頭をよぎったのは少し前、大広場で開かれたという剣術大会のこと。

騎士の他、王子様やご令嬢（！）までもが剣の腕を振るったというその大会では、最後に不届き者による攻撃があったという。幸いなことに死人も大きな怪我人もいなかったが、貴族様の魔法によって人が死ぬ様は衝撃的だったらしい。

店があるので直接は見られなかったセリアだが、広場に行ったというお客さんからその話は飽きるほど聞かされた。首と腕に刃物を突き立てられ、最後には炎で焼かれて死んだ男の話。

父にはそんな風になって欲しくない。

ただの火傷と重ねるのは大袈裟かもしれないが――切実な願いは奇しくも、絶対に起こらないはずの奇跡を起こした。

湧き上がった光が父の腕を癒し、さらに天へと光の柱を立ち上らせたのだ。

「なに、これ……？」

答えを求めて父親を見ると、彼はセリアよりももっとぽかんとした表情を浮かべていた。

「これは、まるで魔法だな」

近所の人々が何事かと駆けつけてきて、それに「よくわからない」「お父さんが怪我をして」などと答えていると店に騎士様と城からの使いだと言う身なりの整った貴族様がやってきた。

「セリア様。貴女にはおそらく魔法の素質があります」

言われるがまま、魔道具だという水晶玉に手を触れると――突然、玉がまばゆい輝きを放った。

セリアはただ綺麗だと見惚れるばかりだったが、騎士達は驚愕し、それから平民であるセリアと父の前に膝を折った。

「どうか我々と共に城へお越しください。今後の対応についてご相談させていただきたく」

なにがなんだかわからなかったが、自分の出した光の柱が魔法だということは理解した。

それに、貴族様の要請に応えないわけにもいかない。

心配する父に「大丈夫だから」と答え、着のみ着のまま用意された馬車に乗り込んだ。場違いな気がしたが騎士達は皆セリアのことを丁重に扱ってくれ、まるで貴

族の令嬢にでもなったかのような対応だった。

（わたしの髪と目はただの偶然で、貴族でもなんでもないんだけど）

数日間の滞在用にと宛がわれた部屋は、下手をしたら店よりも広いくらいだった。大人二人でのびのび寝られそうなベッドはふかふかで夢のような触り心地。世話役としてメイドが三人も付き、喉が渇いたとかお腹が空いたと言えばすぐにお茶やお菓子が用意された。

なんでも、セリアは何十年かに一人しか現れない『聖女』なのだという。

「聖女は国を救うような魔法を操る特別な存在です。貴女の目覚めを知った者がどのように動くかわかりませんので、しばらく保護させていただきたく」

「あの、何かの間違いじゃないですか？　わたしはただの街娘で……」

「いいえ。たとえ聖女でなかったとしても、セリア様が高い魔力を持っていらっしゃるのは確実です。貴女の魔力量であれば高位貴族との養子縁組も可能でしょうし、もしかすると王族との婚姻すら可能ですよ」

お城に住むこの国の王様や王子様。彼らに見初められて華やかに暮らす夢は見たことがある。

今まで遠目に眺めるだけだったお城に馬車が近づいていくのも胸が高鳴る光景だったが、さすがに十二歳にもなれば物事の分別くらいはつく。

自分は父の跡を継いで店を続け、料理や接客のできる適当な男と結婚するのだと当たり前に予感していたし、それでいいとも思っていた。

だから、貴族の養子になるとか王族と結婚するとか言われても実感が湧かない。

「家に帰してもらえませんか？　父を一人で残してきたので心配なんです」

「ご安心を。セリア様のご実家には騎士と衛兵を配置しております。護衛の他、雑用も可能なように命じておりますのでお店の方も心配ないでしょう」

「……そうですか」

至れり尽くせりだ。

きっと良い人達なのだろう。でなければもっと高圧的な態度にだって出られる。聖女だとかなんだとか言ったってセリアはただの平民で、彼らは貴族なのだから。

案内してきた城の使い（宰相の指揮下にある文官だと名乗っていた）が退出していくと、後にはセリアとメイド、それから護衛の騎士だけが残される。騎士は大人の男性だ。急な話なので女性騎士が用意できなかったのだと申し訳なさそうに言わ

れた。
「わたしなら大丈夫ですから無理に用意していただかなくても……」
「そういうわけには参りません。貴女様に何かあっては皆が困るのですから」
話し合った結果、落ち着かないのでせめて部屋の外で警備してもらうことになった。
ほっとひと息。メイドが「殿方は融通が利かないので困ります」と言ってくれたが、セリアとしては正直、汚れの一つもないような衣装を着た『使用人』の彼女達ですら雲の上の存在、落ち着かない原因の一つだった。
しかし、世話係としてつけられたというメイド達は己の職務を譲ってくれない。
「セリア様。まずはお風呂とお食事にいたしましょう」
入浴専用の部屋が据え付けられていて、魔法の道具――魔道具を使って水が張られ、湯が湧かされていた。
きちんとした風呂なんて初めてだった。
大きなかまどがある上、接客業であるセリアの家は比較的清潔に気を遣う方で、水で濡らした布で身体を拭くのは毎日、二日に一回は水浴びあるいは湯浴みをして

いるが、浴槽などという贅沢なものは家にない。小さい頃は湯を張ったたらいの中で直接洗われていたので、あれを風呂と呼んでいいなら一応経験はあるが。

浴衣一枚きりになったメイド達（全員かなりの美人で気後れしてしまう）によってたかって世話されながらの入浴はまさに至福と言ってよかった。

しかも、用いられた魔道具は水を張るのと湯を沸かすものだけではなく、

「せっかくですからシャワーも使いましょう」

適度な温水が頭上から降ってくる、という、それこそ魔法としか言いようがないような道具まで使ってもらった。頭からつま先まで綺麗にする必要があるからということだったが、実際石鹸を使って綺麗に洗われ、香油を用いて仕上げをされたセリアの身体は端から端までぴかぴかになっていた。

大きくて映りのいい鏡の前に立たされると、まるで自分が自分でないかのよう――それこそ貴族のご令嬢に間違えられそうなくらいで、思わず自分自身に見惚れてしまった。

「とってもお綺麗になられましたね、セリア様」

「もともと顔立ちが整っていらっしゃいますから、肌や髪を丁寧に世話していけば

もっと綺麗になれますよ」

メイド達は下着から新品のドレスまでを用意してくれていた。

もし汚したりしたら弁償できないと拒否すると、気にしなくていいと言われてしまう。

「ドレスはもともとリディアーヌ様――セリア様と同い年のご令嬢に合わせて予備として作ったものです。急ぎで必要なものではありませんので、足りない分はまた作らせれば問題ございません」

「でも、そのリディアーヌ様に怒られるんじゃ」

「リディアーヌ様はこの程度の事でお怒りになるような方ではございませんよ」

リディアーヌ・シルヴェストル。

公爵家のご令嬢にして第三王子の婚約者。自分のお金で孤児院を買い取り孤児たちの世話をするほど慈悲深い人物であると共に、国一番の魔法使いに師事する魔法の天才でもあるという。

セリアとはまるで住む世界が違う。

このまま行ったら当人と出会う事もあるのだろうか。いや、きっとそんな凄いご

令嬢ならセリアの事など相手にもしないだろう。

丁寧に世話をされればされるほど貴族との違いを見せつけられるような気がしながら、運ばれてきた食事を平らげた。

まだ温かさの残る香ばしいパンに具だくさんのシチュー、焼いた子牛の肉、飲み物は果汁とミルクを混ぜ合わせたもの……。

あまりの美味しさについ夢中で完食していた。「おかわりはいかがですか？」と言われたのでつい頷くと快く追加の分が供される。食べきるとまた「おかわりは？」と聞かれるので、これはキリがないなと悟って「もうお腹いっぱいです」と答えた。

「詳しいお話は明日からになります。本日はごゆっくりお休みくださいませ」

食事が終わったらもうやることがなかった。普段なら閉店した店を掃除し、明日の仕込みをしている頃だ。夕食は適当にまかないを食べ、自室で仕事着を脱いだら最低限の用事を済ませてベッドへ飛び込む。その頃には疲れ切っているのが常だ。

今日は営業の途中で出てきてしまったので体力が余っている。美味しいものも食べたからぐっすり眠れそうだが――いつも使っているベッドとは何から何まで違う

寝床にすぐ向かう気にはなれなかった。

「あの、わたしはこれからどうなるんですか？」

メイドは「使用人に敬語は不要でございます」と一言告げた上で、少し考えるようにしながら答えてくれた。

「最終的には陛下のご判断となります。ただ、おそらくセリア様には貴族としての身分を手に入れていただき、魔法の訓練に励んでいただく事になります。ゆくゆくは貴族の子女が通う学園へ入学し、さらにその才を磨いていただく事になるかと」

「もちろん、セリア様のご希望も可能な限り考慮させていただきますが……身の安全も考えますと、貴族に身を寄せていただくのがよろしいかと」

「そう、ですか」

しゅんと肩を落としながらセリアは頷いた。

希望を考慮すると言っても「家に帰って元の生活に戻りたい」という願いは叶えられない。そう言いたいのがわかってしまった。

善意で言ってくれているのがわかるので文句も言えない。聞き分けが良いのはセリアの長所であり短所だ。男手一つで育ててくれた父にあまり心配をかけたくない

と、できるだけ我が儘は言わず「いい娘」を心がけてきた。
こういう時くらい騒いで暴れた方がいいのかもしれないが、すっかり染みついてしまった性分にはなかなか逆らえそうになかった。
温かくふかふかの寝床に潜り込み、目を閉じると部屋の照明が落とされる。
とても恵まれた環境にいるはずなのに、なぜか無性に寂しいと感じた。
この時のセリアはまだ知らない。
自分を待ち受ける今まで予想もしなかった出来事の連続を。そして、紅髪の公爵令嬢との出会いが既に近くに迫っている事を。

第五章：隣国の接近（仮）

『聖女』と『竜の系譜』

話がまとまった後、俺はアンナとモニカを連れて聖女の部屋へ向かった。
魔力検査は教国使者の立ち合いのもと、対象者を集めて行われる。現場で「お貴族様の一団」として顔を合わせるよりは先に挨拶しておいた方が距離を縮めやすいと思ったのだ。
城のメイドに案内を受けながら俺は呟くように言う。
「着替えて来た方がよかったかしら」
「リディアーヌ様は今日もお綺麗です。ドレスや髪の乱れもありませんから大丈夫ですよ」
「でも、わたしって性格きつそうに見られるじゃない？　せめて赤いドレスは止めた方が良かったかも」

「関係を深めていけば内面は自然と知られるものです。でしたら最初から、ありのままのリディアーヌ様をご覧いただけばよろしいかと」

二つ目のアドバイスはモニカ。納得の意見だが、もしかして「見た目だけじゃなく実際性格がきつい」と言われたのだろうか。しかし、あまり言い返すこともできないので「そうね」と頷いておく。

程なく目的の部屋が近づいてくる。

国賓レベルの人物に宛がう最上級の部屋。ドアの左右とその向かいの壁に騎士が一人ずつ、計四人立って警戒している。騎士のうち一人は女性であり、人手不足の中で最大限配慮されていることが窺える。

姿勢を正して敬意を示してくれる騎士たちに目礼を返し、メイドのノックに返事が来るのを待つ。

「聖女様へお客様をお連れいたしました。リディアーヌ・シルヴェストル公爵令嬢様です」

僅かな間があった後、ドアがゆっくりと開かれた。

「リディアーヌ様。ようこそお越しくださいました。どうぞ中へ」

「ええ、ありがとう」

室内へと足を踏み入れる。件の人物は部屋のやや奥まった場所で椅子に腰かけていた。

光を反射して煌めく金髪。澄んだ湖のような碧眼。肌は白さこそ貴族に劣るものの、ムラなく健康的な色合いで目だつ肌荒れや傷の跡もない。

同年齢と聞いていた通り背格好は俺とそう変わらない。背は俺より少し高くて胸は俺の方が大きい。

服は中位くらいの貴族令嬢向けドレスだ。初日は俺用の予備を着てもらったものの、高級すぎて落ち着かないと要望があったためランクを落としたものを用意した、と前もって聞いている。

『まさに王族好みの容姿ね』

数日にわたるケアの成果もあるとはいえ、この美しさは街で評判の美少女だったんじゃないか。覚醒以前に誘拐されなくて良かった。魔力持ちは容姿が良くなる説はやっぱり正しい気がしてきた。

目が合う。

にっこりと微笑みかけると、彼女は慌てて立ち上がった。気にしなくても良かったのだが……。ひとまず一、二メートルほどの距離を置いて立ち止まり、スカートを摘まんで挨拶する。

「初めまして、聖女セリアさま。わたしはリディアーヌ・シルヴェストル。公爵にして王国宰相であるジャン・シルヴェストルの長女です。本日はご挨拶と、ひとつセリアさまへお願いがあって参りました」

「せ、セリアです。あの、お願いというのは……？」

「はい。少々ご説明も必要になりますので、腰を下ろさせていただいてもよろしいでしょうか？　こちらのアンナとモニカはわたしの専属メイドと護衛騎士です。わたしも含め、セリアさまを害するような真似はいたしませんのでご安心くださいませ」

「あっ……はい、もちろんです、どうぞ」

少女の座っていた向かいの席へ腰を下ろさせてもらい、セリアにもあらためて座ってもらった。

すぐに紅茶の用意をしてくれようとするメイドを手で制し、代わりにアンナへ指

示を出す。我が専属メイドはひとつ頷くと持ってきた包みから円筒形のガラス容器を取り出した。

蓋を捻ると本体から分離してグラスになる。その状態で本体を傾ければ、中に入っていた琥珀色の液体がグラスへと注がれた。

「リディアーヌ様。こちらは珍しい容器ですね」

「精巧なガラス製で美しいです……。こちらの液体はブランデーでしょうか？」

「まさか。ただの麦茶よ。この容器は携帯用のティーボトルね」

気軽に麦茶やアイスティーを携帯できたら、と自作した品である。

最初はステンレス製の水筒を再現しようと思ったのだが、アンナやオーレリアから「美しさが足りない」と言われ仕方なく透明なガラス製になった。

前世で聞きかじった知識を元に間へ真空を挟んだ二重構造を作っており、魔道具ではないが保温効果がそこそこ高い。姉のよく飲んでいたチューハイの缶を参考に表面にダイヤモンドカットを施したことで無駄に高級感もある。

「素敵です……。こちらはどちらの職人が？」

「わたしが魔法で作ったの。いくつかの職人にも再現できるか聞いたみたけれど、

とても無理だと言われてしまってわ」

「残念です。では、手に入れる方法はないのですね。陛下や王妃様にも是非ご覧いただきたい出来ですのに」

思わず、といった感じで質問してくる城のメイドには「大事な方への贈り物としてわたしが個人的に製作することはできるわ」と言って話を打ち切ってもらった。

今はセリアと話をしにきたのであって、メイドが前に出てくるのは本来かなり失礼な行為にあたる。

「大変申し訳ありませんでした、セリアさま。お詫びと言ってはなんですが、一杯いかがですか？」

おかしなものではないと示すため、グラスに口をつけて三分の一ほど飲んでみせる。

セリアはそれをじっと見つめた後、恐る恐る頷いた。

「そんな。わたしもその瓶に見惚れてしまっていたので……。でも、いただけるのなら飲んでみたいです」

すぐに少女の分のグラスが用意され、アンナの手で麦茶が注がれた。そっとグラ

スを傾けて飲み込んだセリアはあっと声を上げて「すごくすっきりしてる……」と言った。

「ええ。特に夏場にはぴったりの飲み物なのです。材料も麦ですからそれほど高価にはなりません。平民の方でも手が届く範囲ではないでしょうか」

「そうなんですか？　だったら昼の営業とかで出してみてもいいかも……」

「ふふっ。お父さまが酒場を経営していらっしゃるのでしょう？　お酒好きの男性方には物足りないかしら」

「そんなことないです！　仕事の合間に飲むと親方に怒られる、なんていう若い人もいるし、女性客だって来るから……って、すみません！　つい楽しくなってしまって！」

「お気になさらず。なかなか自由に街を散策、とはいかない身分ですので、教えていただけて嬉しいです」

孤児院へ行くようになったお陰で親しい平民は増えたが、あの子たちはあの子たちで特殊な環境である。我が家や公爵邸で働く兵士たちも同じ。

打ち解けたいという目的はあれど、せっかくだから聞いておきたいのも事実だ。

笑顔を浮かべてそれとなく先を促せば、セリアは不思議そうな表情を浮かべて俺を見た。

「貴族様はもっと怖いと思ってました。他の人もとても良くしてくれて、びっくりしました」

「もちろん、怖い貴族もいるのですよ。ですが、わたしたちはセリアさまと仲良くしたいと思っております。ですからできるだけこちらを良く見せているのです」

一人で大人たちの思惑と戦うにはあまりにも小さな肩がびくっと揺れる。

「それは、わたしが聖女だからですか？」

「もちろんそうです。あなたがただの平民なら、多くの貴族は歯牙にもかけないでしょう。なにかをさせたければ命令すれば済むと思ったかもしれません」

少女の唇がきゅっと結ばれ、もやもやした思いをそのまま吐き出すように開いて、

「魔法の力がそんなに大事なんですか？」

「ええ、大事です」

俺はそっと右手をテーブルの上にかざすと、手のひらに炎の蝶を呼び出した。一羽、二羽、三羽――数を増やしながら羽ばたき、小さな火の粉を鱗粉のように振ら

せる。少女の周りを遊びに誘うように、けれどその肌や髪に触れて怪我をさせないように。

　母の得意だったこの魔法は今もなお練習中だ。鳥と蝶を何匹も同時に、しかも自然な動きで操るのは今でもまだ難しい。発想でなんとかなるレベルを超え、特別な感覚がなければ成し遂げられない絶技。今はまだ完璧にほぼ遠いものの、少女を楽しませることはできたようだ。

　瞳を丸くし、蝶を追うように視線を動かす聖女に俺は語った。

「我が国が今日の姿で在るのは魔法のお陰です。魔法がなければこの国はもっと貧しかったか……あるいは、この世に存在すらしなかったでしょう。貴族の一般的な魔法ですらそうなのです。セリアさまの持つ聖属性の魔法であれば猶更」

「……そんなに、わたしの魔法は凄いんですか？」

「聖属性は『誰かを救うための魔法』だとわたしは思っています。傷や病気を癒したり、土地を豊かにしたり、争いを食い止めたり……それはもう、魔法を通り越して奇跡と言ってもいいくらいです」

　天使だの神だのという考え方もあながち間違いではないのかもしれない。そんな

力、手に入るなら俺だって欲しい。
その上、普通の魔法も好きなように使えるのだからチートである。これが物語の世界なら彼女が主人公に違いない。
「でも、わたしはただの街娘です。貴族になんてなれるわけ……」
「大丈夫。わたしたちもあなたをいきなり貴族の世界へ放り出すつもりはありません。常識や礼儀作法をきちんと身に着けられるようできる限り手助けをします」
「……リディアーヌ様」
大したことは言っていない。似たようなことは既に何度も話されているはずだ。それでも歳が近いお陰か麦茶効果か、セリアは俺の話を真剣に聞いてくれた。
少しは心に届いただろう、と手ごたえを感じながら、俺はあらためて微笑みを浮かべる。
「ですから、まずはもう一度、実感を得てみませんか？　あなたが確かに聖女で、すごい魔法の力を持っているのだと自分の目で確かめるのです」
「自分の目で……」
あの光の柱を見れば一目瞭然とはいえ、あの時は彼女も何が何だかわからなかっ

たはず。
説明を受け、多少は予備知識を持った今あらためて、自分が納得するために儀式を通過すればいい。
「はい。確かめたいです。わたしの目で、もう一度」
結果は成功。セリアはこくんと頷き、魔力検査への参加を承諾してくれた。

細かな説明などを行った後、俺はセリアと共に魔道具のある部屋まで移動した。
またしても城の奥まった場所。エリア自体が限られた者しか侵入を許されない一角である。案内するのに城の上級メイドとセリアを護衛していた騎士がついてきたあたりからも重要性がわかる。
せめて少しでも少女を怖がらせないよう、俺は彼女と歩調を合わせる努力をした。
「リディアーヌ様はこういうところ、慣れてるんですか……？」
「多少は慣れていますが、今から行く部屋はわたしも初めてです。公爵令嬢と言ってもわたしもまだ子供ですし、城は王族の領域ですからね」

多少の親近感。

おっかなびっくりといった様子のセリアが不安からか俺のドレスの端に手を伸ばしかけたあたりでメイドが到着を宣言した。

開かれた扉の向こうには国王に王妃、さらに第一から第三までの王子様、うちの父と兄までが揃っており――なんというか圧が凄い。雰囲気を和らげているのは「一応ついてきただけ」といった感じで隅の方にいるルフォール侯爵夫人くらいである。

彼とは少し離れて立つ、この国の様式とは違った服装の男性が教国からの使者だろう。世話係らしき少女と戦闘要員とみられる男を一人ずつ連れている。

使者の首には独特の聖印。

基本の形はアンクレットに近いのだが、楕円の形の反対側――突き出した棒が先の方で二又に分かれている。さらに楕円と横棒の間に斜めの棒が左右一つずつ突き出しており「翼の生えた人間」を限界までシンボル化した形をしている。

これは見た目通り天使の姿を表していると共に、中心から七つの線に分かれていることから七柱の神をも表しているらしい。

「来たか、リディアーヌ。それから聖女殿、よくぞ参られた」
「は、はい」
びくっとするセリアに「国王陛下。この国で一番偉い方」と囁くと、ついにドレスをつままれてしまった。同い年なんだが、なんだか姉になった気分である。
幸い国王はさほど気にした様子もなく「待っている間に私と妃は済ませてしまった」と言ってくる。いや待ってろよ、と言いたいところだが、この国の重鎮ばかりの空間にセリアも長居はしたくないだろうし、むしろ良かったのかもしれない。
何が起こるかの見本としては三人の王子と俺がいれば十分だ。
さて。
「陛下。あれが例の魔道具なのですか？」
「ああ。輝く宝石の数と種類。そして中央部の輝き方によって魔力量と王家の血の濃さがわかるようになっている」
人間の子供くらいの高さがある魔道具だ。
台座には七色の宝石。中央部には大きな水晶が安置されており、要はこの宝石と水晶が光るらしい。宝石自体も大粒だし、透明度が高い。さらに金や銀で装飾まで

施されている。作ろうと思ったらいったいいくらかかるだろうか。

「じゃ、さっさと済ませようぜ、兄貴」

「わかった。……ご令嬢。残念ではありますが、ご挨拶はまたの機会に。まずは我々があれに触れるところをご覧ください」

アルベールがセリアにウインク。呆れたようにしつつも聖女へフォローしたシャルルが魔道具へと歩いていき、台座に触れる。

輝いた宝石は二色。水晶の半分程まで光が満ち、それとは別に表面へ天馬の紋章がはっきりと浮かび上がる。

王家の血っていうのはそういうことか。

「なるほど。これはわかりやすいわね……」

シャルルの属性は光と心。アルベールは既に知っている通り光と火。二人共血の濃さに大した違いはない。次いで試したリオネルが光らせた宝石は風属性を示す一つだけ。やはり天馬の紋章ははっきりと輝いた。

兄と比べて属性で見劣りすると思ったのか、若干不満げに帰ってくる婚約者に「大丈夫ですよ」という想いをこめて微笑んでおく。今動くとセリアが不安がるだ

ろうし、次は俺かアランの番だろうからあまり話し込むわけにもいかない。
　と、思ったら。
「リディアーヌ。お前のところのアンナを借りてもいいか？」
「わ、私ですか!?」
「王族だけで試しても代わり映えしなくてわかりづらいだろ。ほら、危険はないから行って来い」
「り、リディアーヌ様」
「大丈夫よアンナ。もしあなたに何かあったら王家に宣戦布告してでも責任を取らせるから」
　そんなリスクを冒してまで悪戯する馬鹿はいない。納得してくれたのか恐る恐る近づいていったアンナは台座に触れ、青い宝石を輝かせた。魔力量を表す水晶の輝きは最低に近く、表面には何の紋章も現れない。若干可哀想だがわかりやすい結果である。
「では、聖女殿。お願いできるかな？」
『わたしとお兄さまは後回しなわけ!?』

構わないが、セリアが若干不安そうである。
「セリアさまの後にわたしも試しますので、近くまで一緒に参りましょう」
「あ、ありがとうございます、リディアーヌ様」
そうして触れたセリアの結果は劇的だった。
七つ目を含めたすべての宝石が輝き、水晶の明るさもシャルルやアルベールと同等。表面に浮かび上がったのは使者が下げているのと同じ天使の紋章。
『聖属性が血統によらないという根拠の一つがこれかしら。天使の末裔としての資格は血ではなく素質で決まる……ってこと？』
輝きの色も他とは異なるどこか清らかな色。ほう、と、王族たちですら感嘆をこぼしたことからもセリアの特別性がわかる。
そっと台座から離れた聖女に「お疲れさまでした」と声をかけ、少し冗談めかして言う。
「セリアさまの後ですと見劣りしてしまいそうですが、わたしも試させていただきますね」
光属性と火属性、二つの宝石が輝いた。

魔力量は努力の成果か、セリアたちよりも上。そして肝心の紋章だが――。

うっすらと浮かび上がる天馬の紋章に隣り合うようにして、『竜』を象った隣国の紋章がはっきりと浮かび上がっていた。

あらすじにAIに描いてもらったイメージ画像を追加したのでよろしければご覧ください

血の真実

「どういう事だ、ジャン！　どうしてリディアーヌが隣国王家の血を引いている!?」

「落ち着け、リオネル。これは予想されていた事だ」

セリアを部屋まで送り、少し話をしてから応接間へと戻ってきた。

教国からの使者にも部屋へ戻ってもらっている。彼は「やはり」とかなんとか意味ありげな呟きを残し、俺の姿をじっと見つめていた。いいから聖女の方に注目していてくれと言いたい。

相当我慢していただろう。俺が隣に座るなりリオネルは声を荒げ、父を強く睨みつけた。国王の傍に立ったままの父はそれをただ黙って受け止める。

国王が窘めるように口にすると、少年は目を見開いて身を震わせる。王妃が手を差しのべようとするも、まだ幼い第三王子はぎゅっと拳を握りしめ、唇を噛みながらもソファへと戻った。

「紋章はアランにも浮かび上がっていたな。……という事は、血の由来は産みの母

親か」

俺の後でアランと父も魔力検査を実施した。二人共俺よりは天馬――この国の王族の血が濃く、アランが浮かび上がらせた竜の紋章は俺よりもだいぶ薄かった。

血、と一口に言っても親となる者の組み合わせだけで決まるものではないのか。DNA的な「王族の資格を司る部分」が存在し、それがどの程度受け継がれるかが関係してくるとかだろうか。まあ、今のところそれはどうでもいい。

重要なのはリオネルの尋ねた部分。

さすがにもう誤魔化しようがない。父――ジャン・シルヴェストルはその重い口を開き、王子の問いに肯定を返した。

「その通りです、殿下。アランとリディアーヌの母、アデライドの『本当の出自』はおそらく隣国の王女だと思われます」

「おそらく、とはどういう事だ」

「アデライド本人すら真実を知らなかったのです。彼女は辺境伯家ゆかりの家で養女として育てられましたが、もともとは辺境伯本家が赤子の頃に拾ってきたと言われています」

魔力量から貴族であることは間違いない。

ただ、具体的にどこからどう拾ってきたのか？　その部分について辺境伯は頑なに口を閉ざしていた。もしかすると彼もはっきりとは知らなかったのかもしれない。母の身の安全を考慮して敢えて口にしなかったのかもしれない。

いずれにせよ、はっきりとしたことがわからない以上は推測するしかない。

「アデライドの身の上について推測に足る材料は十分にありました」

隣国は竜を象徴とする武に長けた国だ。

王族は『黒と赤』を尊ぶ傾向にあり、一族には『赤系統の髪色』が多い。属性としては『火属性』。

魔力量や魔法の才についても王族であったのなら納得がいく。おそらく俺たちの親世代以上の貴族にとって、母の出自は「聡い者なら気づく程度」の秘密だっただろう。

しかし、誰もが推測していながら口を噤んだ。言ったところで良い事なんてないからだ。ただ、母が多くの貴族から求婚を受けた理由にはそれも含まれていただろう。

「私も、後妻となったセレスティーヌもアデライドの子――アランやリディアーヌにさえ推測を語りませんでした。むしろ、子供達が真実に辿り着かないように心を配ったと言っても過言ではありません」

母の姿絵を隠し、信頼のおける公爵邸と自室にのみ残したのもその一つか。

他にも国王と共謀し、母の素性を辿る手がかりを減らしていくくらいはしたかもしれない。

「……どうしてそんな事をした」

「子供達に何も気にする事なく生きて欲しかったからです。アラン達が隣国王家の血を引いていようと、私とアデライドの子である事に変わりはない」

リオネルを挟んで座っているアランが小さく身を震わせた。

「私は父上を尊敬しております。貴方のようになりたいと励んでここまで来ました」

「わたしもお父さまのことは大好きよ。……お養母さま――セレスティーヌさまのことも、まあ、ほどほどに」

「……お前達。それでは私が我が儘を言っているようではないか」

「まさか。わたしたちを心配してくださったことはきちんとわかっております。あ

りがとうございます、リオネルさま」
「う、うむ」
素直に感謝を述べたところ、照れくさそうに目を逸らされてしまった。男子はこういう時に素直になれないから面倒くさいんだよな。
「というか、リディアーヌ。其方、ひょっとして知っていたのか？　いつからだ？」
「はっきり知っていたわけではありません。ただ、純血派の構成員がわたしを『竜の系譜』と呼んでいたので。後はお父さまがそうしたように状況証拠から推測しただけです。……お祖父さまですらはっきりとは答えてくださいませんでしたので」
「父上も口を噤んでくださったのだな。……有難い」
「結果的に、お祖父さまの指定した期限――わたしとリオネルさまの結婚まではたどり着けなかったけれど、ね」
事態が確定した今、祖父が言い淀んだ理由は俺の身柄関連だとわかる。
俺とアランにはこの国と隣国、両王家の王族の血が混ざっている。特に俺に関しては隣国の血の方が強い。当然、事実が公になれば隣国が黙っていないだろう。

事実が露見したのが結婚が成ってからであれば「でももう結婚しちゃったし」で押し通せる。別の国の王族がこの国で成立した婚姻をどうにかできるわけがないからだ。

ただ、結婚ではなく婚約段階なら話は別。

何しろ王族級の血統だ。婚約について再考を求めたり、自国から別の婚約者候補を出したりするくらいはできる。少なくともこちらから強く「ノー」と言うことはできない。

「父上。結果を予期していながら要請に応じた理由は『今しかなかったから』ですか？」

深呼吸をし、冷静さを取り戻したアランが尋ねる。

「……そうだ。今この時であれば聖女出現の衝撃を利用してお前達の件をある程度隠す事ができる。加えて、教国という第三者がこの結果を公認してくれる」

「教国は融通のきかぬ相手だが、幻獣――神々の末裔とされる王家の『血』には誠実だ。奴らがアランとリディアーヌの出自について虚偽を告げる事はない。二人に竜の血と同時にシルヴェストル公爵家の血が入っている事も保証してくれる」

隣国が一方的有利に立つような状況にはならないということだ。父の血が入っている以上、この国の王族に嫁いでも十分正当性がある。ならば既に婚約している分のアドバンテージも加えて十分、相手方の無茶な要求に対抗可能だ。

「父上。念のために聞いておきたいのですが、私がリディアーヌと婚約したのもこれを我が国に留めておくためだったのですか？」

「違う。考えの一つとしてそれがあったのは事実だが、それだけが目的であれば最初から『リディアーヌと婚約せよ』と命じた。シャルロットを選択肢に含めたのは其方の意思を尊重したかったからだ」

「リオネル。貴方は貴方のしたいようにしていいのよ。……もし、リディアーヌとの婚約を解消したいというのなら、そうしても構いません」

国王の返答に続けて王妃が言うと、第三王子は「いいえ」と首を振った。

「今更、リディアーヌ以外の相手を見つけるなど面倒でたまりません。……もちろん、リディアーヌが『解消したい』と言うのなら話は別ですが」

「わたしもリオネルさま以外との結婚なんて考えられませんよ」

微笑んで答えた上で、俺は「ですが」と続けて。

「情勢がそれを許してくれるか、政略としてそれが正しいのかはわかりません」
「……そうだな」
息を吐いてソファへ身を預けるリオネル。まだ十二歳の王子様には荷が重すぎる話だろう。
場を和ませるためか、アルベールが冗談めかした明るい声を上げて、
「残念だ。リオネルがシャルロットを選んでいれば、俺がリディアーヌに求婚できたかもしれないのにな」
「アルベール殿下。貴方には婚約者がいらっしゃるでしょう」
「わかっているさ、宰相殿。だが、妻は別に二人いたって構わないだろう？」
「大事な娘を第二夫人に据えるくらいなら他の相手を探した方がマシです」
さすがうちの父。第二王子の第二夫人だって十分良いポジションだろうに、きっぱりと「駄目だ」と言ってのけた。
まあ、ほぼ首脳会議のような面子が揃っているとはいえ非公式の場だからこその発言だろうが。
「隣国はなにか動きを見せてくるかしら」

「動くのは確定であろう。アデライドの出自についてはあちらもある程度把握していたはずだ」

執拗に俺が狙われた理由は目立っていて邪魔だったから……ということだけではなかったわけだ。

純血派が気にしていたことを考えると、奴らのバックにいるのは俺が邪魔だった者。隣国の反主流派か、あるいはこの国に他国の血統を入れたくないと考えている過激派といったところか。

「先方が狙ってくるのは私ではなくリディアーヌだと考えて構いませんか？」

「おそらく、な。リディアーヌは容姿からしてアデライドによく似ている。求められるとすればリディアーヌだろうと以前から考えていた。……その考えは間違っていなかったと今日証明された」

この場合、むしろ貧乏くじを引いているのは俺の方であって、「たぶん狙われなくて済む」と言われたアランは喜ぶべきところだ。

シャルルとアルベールが揃って頷いて、

「隣国は諸事情から王家の血が薄れていると聞いています。王族の血を濃く有して

いる女性がいるのであれば是非欲しいところでしょう」
「女の方が子のでき方を制御しやすいからな。むしろ好都合だろう」
下手に王族クラスの男子をもらってきた結果、種をあちこちにばらまかれたりしたら次代のお家騒動を招きかねない。
その点、女なら一度に作れる子供の数が決まっているし、宛がう相手を考えればほいほい騒動の種が増えたりはしない。
「アランの血統――仮に『王族適性』とでも呼ぼうか。それは現状の隣国でもそれなりに用意できる程度だ。あれこれと策を弄してまで手に入れに来るとは思えぬ」
「逆にもし、アランが隣国の女性と恋仲になり、添い遂げたいと願うのであれば許しても良いと思う」
「あら、お父さま？　お兄さまが宰相を継いでくれるのを楽しみにしていたんじゃないの？」
父はむっとした顔になって、
「もちろん楽しみにしていた。だが、アランの幸せが最優先だろう。……無論、婿に行くのではなく嫁を取って宰相を継いでくれるのならばそれが一番良いが」

「父上。少なくとも今はそのような気は全くありません。話が先へ行き過ぎです」
そりゃあ隣国の貴族や王族なんて会う機会はそうそうない。接点がなければ恋仲になりようがないという話である。
さて。
アランなら構わないと言うことは、逆に言うと俺はまずいと言うことだ。俺の適性値だと隣国に決定的な影響を及ぼしかねない。
『王族不足の今なら女王を狙えるくらいだったりするのかしらね？』
どう対処するかは相手の出方次第。
「陛下。教国と共同で声明を発表するのはどうでしょう？　リオネルの婚約者であるリディアーヌは隣国王家の血を引いている、と」
「ふむ。……こちらから告げる事で機先を制する、か。悪くない。検討してみるとしよう」
「親父。純血派が隣国と通じている可能性が高くなった。公爵領の警備を今まで以上に強化するよう打診できないか？」
「必要であろうな。騎士団と連携し警備強化を行うとしよう。連中の尻尾を掴めれ

ば動きやすくなる」

その他こまごまとした対策は打っておくとして、基本的には状況が動くのを待つ形になる。

俺は引き続き聖女の相手役というか相談役？　みたいな立場を継続するように命じられた。こうなった以上、セリアの力を借りて国力強化を狙いたいところ。なんとしてでも協力を取り付けなければならない。

「……意外と変わらないものなのだな」

話が終わった後、俺はリオネルと一緒に彼の部屋へと引っ込んだ。兄は兄で父と何やら話をしに行った。

「あれだけの事実が判明したのだ。すぐにでも何かが大きく動くものだと思っていた」

「すぐには動きませんよ。……いえ、動いていることに気づくのが難しい、と言った方がいいのかもしれませんが」

「難しいな」

肩を竦め、笑うリオネル。

「いずれにせよ、お前を手放すのは避けたいな。お前がどこかへ行くとなったら姉上も付いていくだろう？」
「下手をするとヴァイオレットも一緒に来たがるかもしれませんね」
「我が国は大損害ではないか。聖女一人では割に合わん」
いや、聖女の力は十分凄いと思うが。
俺のことを手放したくない、と言ってくれるリオネルの気持ちは素直に嬉しいと思った。

【登場人物・家名等一覧】にキャライメージ画像をさらにいくつか追加しました
今後もこっそり追加するかもしれません

聖女の今後

「来てくれてありがとう、ヴァイオレット」
「ううん。リディアーヌが頼ってくれて嬉しい」
翌日、俺は再び城へと参上した。
聖女と面会して説得を行うためだが、今日会いにいくのは俺一人ではない。親友にも一緒に会ってもらうことにした。
急な話だというのに嫌な態度も取らず来てくれたヴァイオレットは青色のドレスに身を包んでいる。にこりと俺へ微笑むと、合流&打ち合わせ用として用意してもらった応接間のソファへそっと腰かける。
俺の隣に。
「ヴァイオレット？　向かい合った方が話しやすくない？」
「？　この後、聖女様を呼び出すのでしょう？　その時に場所を移動するより合理的だわ」
なんだか誤魔化された気もするが一理ある。

今日はセリアの父親も交えて話をする予定だ。そっちには城の方から使いを出してもらい、簡単な説明をして連れてきてもらうことにしている。

さすがにセリア当人は多少、城での生活にも慣れてきただろうが、父親の方はそうもいかない。城の奥の方にある聖女の部屋まで連れて行くよりはこの応接間に呼ぶ方がまだマシか。

「当人たちを呼び出す前に話しておきたいことがあるんだけど」

「聖女をどこの家が引き取るか、でしょう？　お母様ともある程度話しあって来ているわ」

「さすがね。それで、わたしも両親と相談してきたけれど……シルヴェストル公爵家もルフォール侯爵家も聖女を引き受けない方がいい気がするのよ」

「リディアーヌも注目の的だものね。これ以上人目を惹かない方がいい」

昨日発覚したばかりである俺の血筋の件を当然のように理解しているヴァイオレット。

前もって予期していながら黙っていてくれたことと言い、彼女がいてくれてよかったと心から思う。

「ヴァイオレットの家も似たようなものでしょう？　リオネルさまの第二夫人候補と元王族を抱えているんだもの。さすがに特権を握りすぎだわ」

国王ならびに王妃が両家を頼ろうとしているのは「一番信頼がおけるから」だ。重要な役割を担うに足る、と思ってもらっているわけだから白羽の矢が立つのは当然なのだが、あまり権力が集中しすぎると他の貴族から反発を受ける。

今でももう十分すぎるくらい重要ポジションにいるのでこれ以上は勘弁して欲しい。

「でも、別の適任者が思いつかない」

「モニカに家へ戻ってもらってモンターニュ家で指導してもらう、っていうのも考えたんだけど……」

「武の要職に就く我が家は避けた方がよろしいかと。聖女を軍事利用しようとしている、という批判は避けられません」

「面倒くさい話よね。そうなるとノエルのクラヴィル家も駄目でしょう？」

代替わりして間もないバルト家とかも「本当に信用できるの？」っていう感じだし、ベアトリスのデュナン家も聖女を任せるには不安がある。

サラのモレ家とかになってくると家の持つ権力が不足気味。というかうちやルフォール家と繋がりの深い家だと根本的な解決になっていない。
有力なのはモニカの実家のような王家ゆかりの貴族家か、あるいは、
「一つ思いついたのよ。一応、陛下からも許可はいだいているんだけど……」
「聞かせて。相手方の希望次第を誘導するためにも、有用な選択肢は多い方がいい」
俺たちはしばし話し合いを続け、それから聖女親子と対面した。

「お忙しい中ご足労いただきありがとうございます。どうぞ気負わず楽にしてください」
セリア親子が応接間まで案内されてきた。
俺とヴァイオレットの姿を見て一も二もなく平伏する父親に出来る限り優しく声をかけ、ソファに並んで腰かけてもらった。
あらためて俺とヴァイオレットの自己紹介をしているうちにお茶の準備は整った。

「お父さん、リディアーヌ様は優しいから大丈夫よ。そんなに緊張しないで」
「馬鹿。若くて話しやすくたって貴族様だ。しかも、身なりからして俺たちなんかとても敵わないくらいの大物だろう。緊張して当たり前だ」
「本当にご心配なく。わたしもヴァイオレットもお二人を取って食うつもりはありません。できるだけご希望に沿うようにしたいと考えております」
　それから聖女のことについて概要をおさらいする。
「つまり、セリアさまは現状、世界に二人しかいない強力な魔法の使い手です。この力を使わずにおくのはあまりにも勿体ない。そして、力の訓練は平民の世界では困難でしょう」
「セリア様が目覚めた際に立った光の柱により、この国の貴族ほぼ全員が事情を把握しています。他国の中にも察知している者がいるでしょう。このまま平民として過ごしていても力と命を狙われる事は明白です」
　宝くじに高額当選した挙句、名前と住所までテレビで公表した人間が玄関に鍵もかけず外出しているようなものだ。
『三日も経たずに家の中ごちゃごちゃになるでしょうね。ちなみに複数犯よ』

安全のためにもセリアには貴族として生活した方がいいと訴えると、父親は唸るようにして思考を巡らせてから尋ねてきた。
「こいつは近所の奴らみんなから好かれています。悪い奴が来れば全員で立ち向かう。それでも足りませんか？」
「足りません。なにしろ相手も貴族です。もちろん、こちらからも騎士や衛兵を護衛に出しますが、多勢に無勢となったり隙を突かれることはあるでしょう。先日の広場での騒ぎについて話くらいは聞いていらっしゃるのでは？」
「軽挙妄動によって死ぬ事となった男は周りに炎を撒き散らすつもりでした。もし、平民街で同じような事が起これば他の家も危ないでしょう」
「……なるほど」
再び考え始める父親を、セリアは不安そうな表情で見つめていた。
そして、
「貴族だろうとなんだろうと、大事な一人娘はやれねえ。こいつの親は俺だ」
「お父さん」
「だがな」

首を振って俺を見る彼。
「娘は貴族様に守られていた方がいい。俺もそう思います」
「っ」
「セリア。お前、あの時俺の腕を治しただろ？　お陰であれからなんともねえ。むしろ体調が良くなったくらいだ。あれは凄い力だ。だったらちゃんと使えるようにした方がみんなのためだろ」
「それはそうだけど、いいの？　お店も手伝えなくなっちゃうし、お父さん一人になっちゃうじゃない」
「別に離れて暮らすようになったって親子じゃなくなるわけじゃないだろ」
「ええ。養子縁組をする、しないに関わらず、時々実家に帰り親子で話す権利は保証させていただきます。もちろん、護衛は厳重にしますが」
ついでに父親への謝礼・慰謝料・迷惑料としてかなりの額を支払う用意があること、父親の方を誘拐しようとする輩も考え護衛を派遣することを説明。
「ははっ。それなら店を直すどころかもっと立派な店が建てられるな。なんなら良い相手だって見つかるかもしれねえ」

「……お父さん」
瞳を潤ませ、指で目を擦るようにするセリア。
「本当にいいの？」
「ああ。養子縁組ってのは要するに別の親ができるんだろ？　なのに親子として話してもいいなんて優しすぎる。……お前の言う通りいい人なんだな、この方達は」
「うんっ」
少し時間を取ろうか？　とも尋ねたが、二人は不要だと答えた。
「わかった。わたし、リディアーヌ様たちにお願いしてちゃんと魔法の練習をする。それでいつか、街のみんなの役にも立てるような立派な魔法使いになる」
「ああ、それがいい。お前が立派になるのを楽しみに待っているからな」
「ありがとうございます。お二人の決断に感謝と敬意を表します」
そこからは具体的な身の振り方の相談だ。
大きく分けると選択肢は三つある。
一つは王族の養子となること。一つは貴族の養子となること。
「最後の一つは陛下から家名を賜り、セリアさまが貴族家を興すことです」

跡継ぎ以外の子供が財産を分け与えられて分家になるのと同じ要領だ。一人だけの新しい家だからセリアが自動的に当主になる。

「これなら人間関係を気にすることなく貴族の立場だけを得ることができます」

国へ多額の寄付をするなどして多大な貢献をした平民が貴族位を与えられた例はある。

結婚していない女性が当主というのは異例だが、国王の了解も得ているので問題ない。

「だが、肩書きが貴族になったからって安全になるものなのか？　あ、いや、なるものなのですか？」

「普通に話しても構いませんよ。……確かに、財産も屋敷も使用人もいないのでは軽く見られるでしょう。平安を得る代わりとしてそれは覚悟していただかなければなりません」

もちろん国からも援助はする。

護衛騎士は付けられるだろうし当座の生活費も賄えるだろうが、さすがに屋敷を買えるほどの額は難しい。現在のセリアにお金を出すのは言わば先を見据えての投

資なので、もっと援助して欲しいと言うのなら相応の成果を示さなければならない。
「ああ。お父さまも一緒に貴族になりますか？　それでしたら当主が未成年という部分だけは回避できますが」
「よしてくれ。俺は貴族なんて柄じゃない。きっとセリアの足を引っ張るだけだ」
貴族には礼儀作法が必須だ。
今は平民だから許されているのであって、貴族になれば不作法は咎められて当然になる。
「王族の養子となる場合は陛下の娘――この国の王女という立場になります。この場合、五人の王子殿下とは兄妹ということになりますので、嫁入りを検討されるのであれば貴族家の養子となる方が良いかもしれませんね」
「貴族家の養子を希望する場合、具体的にどの家の子となるかが重要となります。シルヴェストル公爵家とルフォール侯爵家はお望みとあらばセリア様を引き受けさせていただく用意がございますし、おそらく多くの家は望まれれば快く応じるでしょう」
「ただ、家によって待遇には差が生じると思ってください。財産があり屋敷があり

後ろ盾となる親がいる代わり、セリアさまも娘として家の役に立たねばなりません。時には『やりたくない』と思ったことを無理に命じられることもありえます」

なかなか難しい選択だ。

俺がセリアの立場でも「一年くらいかけて少しずつ話を進められませんか？」という心境に陥るだろう。

それでも、自分の身を守るためには自分で考えて選ばなければならない。

「……わたしは」

聖女は俯き、迷うように言葉を切った。

「今すぐ決断しなくとも構いません。数日程度は待てると思いますので、じっくり悩んではいかがですか？　しばらくの間、わたしが毎日参りますので質問があればなんでも聞いてくださって構いません」

「何から何まで、申し訳ない」

セリアの父が深く頭を下げてくれる。俺は彼にそっと微笑みを返して、

「お気になさらず。わたしとしてもセリアさまには人々の力になって欲しいと思っているのです。国が荒れた時に最も力を発揮するのが聖女の力。平和のための力だ

と思っていますから」

「ありがとうございます、リディアーヌ様」

返答はひとまず先送りにされた。

俺は勉強やその他の用事をこなす傍ら城へ通い、少女の質問に答えたり他愛ない雑談を交わしたりした。

一方、国の上層部と教国の使者との間で協議が行われ、聖女と俺に関する公表内容が決定。これらは城内に広く周知され、その日のうちに貴族の間にも伝わっていった。

使者は一度本国へと帰還した。

俺の下へは彼らからの手紙が届いた。その内容は、要約するとこのようになる。

『貴女の血は非常に濃い。血統面から言えば、現国王の跡を継ぐべき者は他にいない。その気があるのならば教国はその血筋を喜んで保証する』

政治闘争には協力しないが、俺がどこの馬の骨かは保証してくれるという。

一国の代表者からの有難い申し出にお礼の返事を送ったが、彼がそれを受け取ったのは再びこちらへやってきてからのことになった。

その間にセリアは自身の身の振り方を決定。
「わたしは、自分のことは自分で決めたいんです。だから王様から爵位をもらってわたし自身が貴族になります」
最も険しいが最も自由な道。
平民らしい向こう見ずとも、聖女らしい自由な精神とも言える。俺はそれに敬意を表して微笑んだ。
「かしこまりました。……では、我がシルヴェストル公爵家も微力ながらセリアさまの力になりましょう」
最低限の衣食住を提供したり家庭教師の手配を手伝ったり、そういう用意はできている。ヴァイオレットのルフォール侯爵家も同じように支援を決定している。
これにセリアは驚いて、
「それじゃ、わたしが一方的に得をしていませんか？」
「家族として後援するわけではありません。あくまでも友人としての助け合いです。ですからなんの問題もないのですよ」
「……だったら、ひとつお願いしてもいいですか？」

「なんでしょう？」
聖女の放った『お願い』に今度は俺の方が驚かされた。
「お友達として助けてくれるなら、わたしを聖女として扱うのは止めてください。わたしをセリアとして見て欲しいんです。……どうでしょうか？」
「……ふふっ。まさか。もちろん構わないわ。それじゃあ、これからは敬語なしで話すわね、セリア」
「あ……はいっ！　よろしくお願いします、リディアーヌ様」
こうして、街娘セリアは王から男爵位を授かった。
家名はプリエール。プリエール男爵の誕生である。
『どうでもいいけど、女の子なのに男爵って座りがわるいわね。早く子爵に昇格してもらわなくっちゃ』

新男爵お披露目会

セリア・プリエール女男爵の誕生。

このニュースは国内貴族の注目を大いに集めた。『光の柱』から一か月という異例の早さで行われたにも関わらず、就任式には多くの者が参加を表明した。

婚約発表を兼ねたリオネルの誕生パーティーと同じかそれ以上の人数と言えば凄さがわかるだろう。

「男爵って階級の中で一番下なんですよね？　こんなに集まらなくてもいいと思うんですけど……」

城のメイド数名による着付けを受けながら言ったのは今日の主役である聖女・セリアだ。

煌めく金髪に吸い込まれるような青い瞳。肌も栄養状態が良くなったことでますます艶を増している。水仕事で荒れがちだった手もすっかりすべすべになったし、店を手伝い力仕事をしていたおかげで身に着けた筋肉は小さめな身長と胸を大きく見せるのに役立っている。

彼女は今日まで城の一室に住み、就任式のための教育を受けていた。お陰で姿勢や言葉遣いは一か月前よりもだいぶマシになっている。

実質的に使えた時間は二週間と少しだったので、あくまでも「まだマシ」程度。気を抜いても「ですます」が抜けることはないし、気を抜かなければ背筋を張っていられるという程度だが――平民にしては頑張っている、という評価は十分にもらえるだろう。

「噂の聖女の姿を一目見たいのよ。それに、挨拶をしておけばお近づきになれるかもしれないし」

同じようにアンナ、エマ、オーレリアから着付けを受けながら答える。今日の装いは自重の全くない赤いドレスだ。少し離れたところではヴァイオレットも綺麗な青いドレスに着替えさせられている。

「セリアの場合は後から昇格させる前提の男爵位だから」

聖女の希少性や有用性の割に位が低いのはそれが理由だ。

最下級の男爵位であれば「平民の癖に生意気な」という声をある程度抑えられる。高い魔力を持っているからとお飾りの位を与えられただけだ、と、わかりやすい見

下しポイントを用意してやったわけだ。
昇格は数年に一度くらいは起こるイベントだ。国への大きな貢献があればお声がかかる。セリアが何かすれば国王は喜んで位を上げてくれるだろう。
「低い位ならまだ気が楽だと思ったんですけど……」
既にホールへ集まり始めているだろう参加者を気にするようにちらり、と壁に視線を向けるセリア。
俺はくすりと笑って彼女に言った。
「大丈夫よ。男爵の就任式で過剰に礼儀を求めてくるようなのは敵だから。仲良くするのは諦めて他の人と話せばいいわ」
「リディアーヌの言い分は極端だけど、概ねその通り。私達も付いているから安心して」
少しは元気が出ただろうか。少女はこくりと頷いて答えてくれた。
「はいっ。精一杯頑張ります！」

「わたし――セリアは歴史あるリヴィエール王国貴族の新たなる一員として偉大なる国王陛下に忠誠を誓い、国の発展と民の安寧のために力を尽くすことをここに宣誓いたします」

「よかろう。其方には男爵の位と共にプリエールの名を授ける。これからはセリア・プリエールを名乗り、その才を存分に磨くが良い。そして、いつの日か余とこの国を助けてくれ」

「陛下の御心のままに」

俺やヴァイオレットと共に高台から入場したセリアは、国王の前に跪いての宣誓を噛むこともなく言い終えた。

『百回以上、繰り返し練習した甲斐があったわね……』

あらかじめ作成してもらった式の流れを俺やヴァイオレットと一緒に必死で暗記した成果である。言い慣れない言葉ばかりだっただろうによく頑張ってくれた。

今日のために用意されたセリアのドレスは純白。

男爵就任ということで値段は抑え目だが、それでも伯爵家レベルの品だ。明るく純真な彼女に良く似合っており、参加者の中にはほう、と感嘆のため息を吐いてい

る者もいた。

「さて、堅苦しい話はここまでにしよう。新たなる貴族の誕生を祝い、ささやかながら宴の用意を整えてある。プリエール女男爵の就任を見届けてくれた礼だ。皆の者、時間の許す限り楽しんで行ってくれ」

後は貴族恒例のパーティーである。

王城主催の宴がささやかなわけがなく、美味い料理と酒がふんだんに振る舞われる。

メイドやボーイが料理を次々に運び込んでいくのをぼかん、と眺めるセリア。俺は彼女の手を引き、パーティーへと誘った。

「さあ、行きましょうセリア。せっかくだから料理も楽しまないと損よ」

今日はオーレリアも連れてきた（エマは別室で待機）。とりあえず料理を色々取ってきてもらい、三人であれこれ言いながら食べる。

「貴族のお料理はどれもとても美味しいです……！」

「材料にも拘っているもの。でも、調理の工夫なら下町でも真似できるものがあるかも」

「研究のし甲斐がありそうです」
セリアは目を輝かせながら一つ一つの料理を吟味していた。
調理技術は一種の秘伝として弟子にしか教えられないケースが多い。なので料理人から直接聞き出すのはご法度だが、料理から推測するのは問題ない。
父親から簡単な料理を教わっていたという彼女なら何か思いつくかもしれない。それを父に伝授するのも合法だ。
「そういえば、セリアはお酒を飲むのかしら？」
「はい。あまり多くは飲ませてもらえませんでしたが、十歳の頃からよく飲んでいました。あ、もちろん安いお酒ですけど」
「そうなの。わたしはまだだから少し羨ましいわ」
「リディアーヌ様はお酒強そうな気がしていたので少し意外です。じゃあヴァイオレット様は……？」
「小さい頃から適量を飲んで身体を慣らしておきなさい、というのが我が家の流儀」
毒物みたいな扱いである。でも間違っていない。
……と、呑気に話をしていられたのはほんの僅かな間だけで、その後は飲み物や

食べ物を手に入れた参加者たちが列を作る勢いでセリアに殺到してきた。

最初の方に声をかけてきたのは公爵家――つまり王家との距離が近い家なので大きな波乱はない。セリアの男爵就任に表立って異を唱えれば「王の決定に不満がある」という表明になるからだ。俺とヴァイオレットが傍にいるのは「下手なことを言えば一言一句違わず王に伝わるぞ」というプレッシャーのためでもある。

しかし、公爵家と一口に言っても派閥は色々あるわけで。

ちくちくとした嫌味攻撃は当然のようにやってくる。そしてそれはセリアに、ではなく俺やヴァイオレットに、だった。

「シルヴェストル公爵家とルフォール侯爵家が援助するとなれば聖女様の前途も明るいでしょう」

「ええ。セリアさまには友人としてできる限りの助力をするつもりです」

「当家としてはひとまず、セリア様に屋敷の一室をお貸しする事になっております。正式な住居の目途が立つまではそちらで生活していただくことになるかと」

両家がバックに付いたことは国王による発表にも含まれている。その上で部屋の貸与は初めて出す情報。城の一室から離れることは今後接触を試みる上で朗報だろ

うが、移る先がルフォール侯爵家ではあまり不用意に手を出せない。
「随分と仲がよろしいのですね。陛下は聖女様を第三王子殿下の第二、いや、第三夫人にお考えなのか？」
「ご存じの通りルフォール侯爵家は中立でございます。リディアーヌ様、リオネル殿下との親交は私個人の判断であり、家の意向とは必ずしも一致しないものとご承知おきくださいませ」
「なるほど。では、第三王子殿下はお二人との繋がりを大事にしなければなりませんな。空から獲物をさらうのは何も鳥だけとは限りますまい」
「いかに速い生き物と言えど、天馬の隙を盗みさらに無事に逃げおおせるのは至難の業でしょう」
矛先がこっちなのでこっちで対応できるのは助かった。
セリアはまだ「はい」「いいえ」「ありがとうございます」「申し訳ありません」を簡単な言葉と組み合わせるぐらいしか受け答えできない。貴族の遠回しな言葉には毎度「？？？」と疑問符を浮かべてフリーズしていたし、そのくせ籠められた感情がポジティブかネガティブかは割と敏感に察するらしく、俺たちの会話を傍で聞い

ているだけでも震えたり唇を噛んだりと反応が表に出てしまっていた。

と。

「ごきげんよう、プリエール女男爵様。わたくしはベアトリス。デュナン公爵家の長女ですわ。どうか以後お見知りおきくださいませ」

「ご、ご丁寧にご挨拶をありがとうございます。こちらこそよろしくお願いします」

胸と態度の大きな美少女が明るい紫色のドレスを纏って挨拶に来た。毎度のことながら俺の内心は『うわ来た』である。

「当家は新たな貴族の誕生を心から歓迎しておりますの」

『嘘言いなさい。どうせ「ライバルが増えた」とか思っているんでしょう？』

「ですが、プリエール様は十二歳。これから貴族としての振る舞いを勉強なさるのは大変でしょう？　わたくし、想像しただけで辛くなってしまいます」

『本当に口は達者よねあなた。なに？　もしかしてセリアを口説いて派閥に誘うつもりなの？』

「つきましては、デュナン家からも援助をさせていただきたいのですが、よろしくて？」

「え？」

思わず声に出して驚いてしまうと、セリア、ベアトリス、ヴァイオレットの視線がこっちに集中した。

俺は誤魔化すようににっこりと笑うと首を傾げた。

「ああ、いえ、申し訳ございません。わたしとベアトリスさまは意見の対立が多いでしょう？　ですから協力してくださるのが意外だったのです」

「ふん。別に大した事ではありませんわ。物資なり金銭なり、足りないものを多少融通して差し上げると申し上げているだけです」

つん、と顎を逸らし、どこか馬鹿にするように彼女は笑って、

「貴女とヴァイオレット様が付いていれば心配はいらないでしょうけれど、頼れる者は多い方が良いのではないかしら？　……貴女達がいつも傍にいられるわけではないし、不慮の事態が起こらないとも限らないもの」

『あら？　ひょっとして、わたしが隣国へ行く可能性を心配しているのかしら？』

「ベアトリスさまはお優しいのですね。間接的にわたしたちを利するような行為はお避けになるかと」

「だから、勘違いしないでくださいませ！」

睨まれた。

「リオネル殿下により相応しいのはこのベアトリス・デュナンです。その想いはあの頃から変わっておりません。……ですが、奪い取る前に恋敵にいなくなられては面白くないでしょう？　ただそれだけ。セリア様へ援助するのも後の利益を考えての事であって貴女の事などどうでも良いのです」

うん、その、なんだ。

前々からうすうす感じてはいたが、ひょっとしてこの令嬢、意外と可愛いんじゃないだろうか？

「ベアトリスさま？　今さらではございますが、お友達になっていただくことはできませんか？　派閥を一つにせずとも協調することは可能だと思うのです。例えば合同でチェス大会を開くですとか」

「はっ。わたくしとあなたが友達に？　笑わせないでくださいませ。貴女から施されるほど落ちぶれてはおりませんわ」

『いっそ「ベアちゃん」とか呼んでみたかったんだけど』

残念なことにベアトリスはきっぱり申し出を拒否して帰っていった。

ただ、合同でのチェス大会は「つまり勝った方の派閥が上、ということですわね？」と乗り気だった。勝っても「チェスの腕において」上だと証明されるだけではあるが、まあ、楽しそうだったから水を差すのはやめておいた。

なお、挨拶はそこから侯爵、伯爵、子爵、男爵とだんだん低いランクになっていったのだが、中盤あたりが一番風当りが強かった。

「平民から貴族に取り立てられるだなんて異例なのですよ。陛下に感謝しなくてはなりませんね。平民なのに魔力だけで貴族になれたのですから」

「リディアーヌ様は相変わらずお美しい。特にその髪と瞳などこの国の花に例えるのが難しいと思えるほどで……外国、例えば隣国などにはこのような美しい花もあるのでしょうか」

「侯爵家が異端の子を女当主に据えた時にはどうなる事かと思いましたが……やはり、異端の子の娘も異端でしたね」

男爵家まで行くと逆に仲間意識もあるのか「頑張ってください」といった素直な応援が増えた。そのお陰もあったのか、セリアは嫌味に言い返したり暴れ出したり

することなくパーティーを終えてくれた。
後から聞いたところによると、
「こいつぶん殴っちゃだめかな、って何度か思いました」
とのこと。さすが平民の娘。手を出す時は手を出す。ちょっと親近感が芽生えたが、余計面倒なことになるから絶対やらないように、とあらためて言い含めた。

憩いのひととき?

セリアが貴族になってひとまず安心。

生活の世話はルフォール侯爵家がやってくれるし、家庭教師もきちんとした人に依頼する手筈になっている。

後は孤児院と同じようにときどき様子を見に行って話をしてやればいい。

『あ。孤児院に顔を出す時に声をかけてみようかしら。わたしよりは子供たちとも気が合うでしょう?』

俺の血筋の件をセリアの就任式で王が口にすることはなかった。

問われても「既に通達した通りである」で終わり。余計なことを言わないことで騒ぎを抑えようとしてくれているのが素直に有難かった。

ただ、それでもやっかみはあるようで、孤児院には最近小さな嫌がらせが頻発しているらしい。

門の前にゴミが捨てられたり、外壁に落書きされたり、故意にぼろぼろにされた赤髪の女の子の人形が投げ込まれたり。

現行犯の場合は都度捕まえているものの、犯人はいずれも平民。嫌がらせをするよう金で頼まれた、という者が多かったが依頼者は顔を隠していたので詳しい特徴はわからないという。

既に「公爵家の所有物」である孤児院への嫌がらせは貴族への攻撃とみなされて処罰される。基本的には罰金や数日間の拘禁程度だが、人形の件などは「公爵令嬢への殺意」を認められて処刑された。

常駐している衛兵が三人では常に門で見張るのも難しいので、両親に頼んで警備人数を増やしてもらうことにした。

「ふむ。ならば孤児院にいる年長の男子を雇い上げれば良かろう」

「いいの？」

「孤児院の警備に限定すれば問題ない。そこでの素行や成果を加味し、優秀であれば屋敷の兵として正式採用も考える」

「それはいいわね。ありがとう、お父さま」

こうして我が家の警備人数を減らすことなく孤児院の警備兵が三人増えた。見習いだが、孤児院に悪意を向ける理由なんてあるわけがない、という意味ではうって

つけである。

なお、我が家の警備体制もほんの少し強化された。

衛兵は順次面接して良さそうな人間を雇い入れているし、『家』に対する護衛騎士が騎士団から一人派遣されてきた。新しい騎士はクラヴィル家――ノエルの実家の四男である。

「妹の代わりにシルヴェストル公爵家をお守りしたくこの任務を希望いたしました。どうかなんなりとご用をお申しつけください！」

「クラヴィル家の騎士となれば非常に心強い。どうか我が大切な家族を守って欲しい」

「はっ！　この命に代えましても」

ノエル兄には主に屋敷周辺の見回りや衛兵たちの訓練、それからアランが外出する際の護衛をお願いすることになった。

俺にはモニカという頼もしい護衛がいるし、いざとなればオーレリアも戦闘要員にできるが兄の身の周りはやや守りが薄いからだ。

隣国が狙ってくるのはおそらく俺、と言われてはいても絶対とは限らないわけだ

し用心は重要である。
「シャルロットも、できるだけ人の少ない場所は避けるのですよ」
「はい、お母様。……それから、お姉様についてはあまり情報を出さないように、ですよね？」
「ええ。リディアーヌの身の振り方は国家における重要事項です。正式決定するまでみだりに口外してはなりません」
義妹は俺とアランの出自について文句を言ったりはしなかった。
『アデライド様は本当に凄い方だったのですね。私もお会いしてみたかったです』
敵の狙いが俺だったとすれば誘拐事件は俺――ひいては母のせいだというのに、そう言って微笑むのだ。思わず抱きしめてしまったのは仕方なかったと思う。
「く、苦しいですお姉様。どうなさったのですか？」
「シャルロットが良い子だから抱きしめたくなったの。駄目？」
「……いいえ。でも、もう少し優しくお願いします」
言われた通り腕の力を緩めてしばらくくっついていた。
「でも、そんなに力を入れたつもりはなかったのよ。わたし、思ったよりも成長し

ているのかしら?」

「暇があれば剣を振っているのですから成長するのは当然では?」

「腕力だけじゃなくてお身体も成長していますよ。だいぶ女性らしくなられてきたと思います」

部屋に戻ってあらためて鏡を見てみると、確かに。

身長は少し伸び悩んでいるものの、腰にはくびれができ始めているし胸も結構膨らんできている。今までもインナーは身に着けていたので「胸が擦れて痛い」と感じる機会はほぼなかったのだが、これはそろそろ、ナタリーに頼んで作ってもらっていた新しい下着を使うべきか。

『いや、ただのブラなんだけど』

バストを重点的にしっかりとガードする、という意味で画期的な代物だ。

従来の下着はカップ付きキャミソールに近いものだったところ、ホックの採用によってより高い補正効果を得られるようになった。

子供の胸を育てるのにも役立つが、むしろ成人女性の体形維持に役立つはず……という話をしたら養母の目の色が変わっていた。

「お養母さま、意外と美容に目がありませんよね？」
「意外でしょうか？　流行を広めるには自分自身が流行に聡い必要があります。食わず嫌いをしていては務まりませんよ」
要するにお洒落に目がない普通の女性だということで……本当、本性を理解した後だと詐欺としか思えない。
なお、貴族にして服飾職人という稀有な人材であるナタリー・ロジェは先日めでたく自分の工房を持ち工房長となった。
新型ドレスにホックにファスナー、スナップボタン。新しいものをいち早く取り入れた結果、元いた工房が大繁盛。規模を拡大することになり、それに伴う事業仕分け的な形で「新デザイン開発専門」の工房を任されたのである。
『リディアーヌ様とは今後とも良い関係を築いていきたいと思っております』
アイデアさえくれれば期待以上のものを仕上げてみせる、という意味だ。
実際、ファスナー付きドレスもブラも俺ではデザインしきれなかった。新しいものをどんどん取り入れて良い物を生み出す彼女にはこれからも活躍してもらわないといけない。

ホックやファスナーが売れると公爵家も儲かるのだからもはや一蓮托生である。

そんなこんなでようやく日常へ戻れるか――と思っていると、セリアの男爵就任の余韻がまだ醒めきらないうちに再び城へと呼び出された。

人払いをして国王、王妃に父、リオネルらと対面。

もはや慣れてきている自分が怖いが明らかに頻度がおかしい。

「忙しい中呼びつけてすまないな、リディアーヌ。実は昨日、隣国から公式の書状が届いた。内容は向こうの第七王妃ほか数名にてこの国を訪問したいというものだ」

「第七王妃、ですか」

「七人とは……一体、隣国の国王はどれだけ節操がないのだ」

「隣国の国王陛下は在位期間が長いそうですからね。それだけ求婚も多かったのでしょう」

向こうの王は御年七十歳というご高齢。

死ぬまで王位を譲らないという無駄な頑固さ――もとい、政治的ポリシーを持っており、政務の大部分を子供世代、孫世代や側近に任せながらも可能な限り執務を

続けているらしい。
　そんな彼には政略的な問題か七人もの妻がいる。
　第七王妃は現在二十二歳だったか。嫁いだ時点で王の側に子を成す能力は残っていなかっただろう。形だけの妃か、あるいは王妃という名の女性官僚とでも考えるべきか。
「妃のうち既に三名は世を去っている。しかし、王命により王妃達の序列は変更していないらしい。数が多く思えるのはそのせいもある」
　うちの国王陛下も既に亡くなっているオーレリアの母を含めると五人の妃がいるからあまり変わらないわけだ。
「目的はなんと？」
「療養、それから買い物との事だ。我が国の服、装飾品、宝石、香水等を購入し持ち帰りたいそうだ」
「それらしい理由ではありますね」
　主にうちの家の影響でこの国の服飾はレベルが上がっている。輸入品だけでは足りない、もっと欲しいと思ってもおかしくないだろう。特にやってくるのがまだ若

い王妃となれば猶更。

「真の目的は其方やアラン、そして聖女であろう」

「王妃殿下がいらっしゃるとなると重要度の高い案件なのでしょうね。……女性が来られるのは意外ですが」

「互いに牽制しあった結果かもしれん」

年齢的に国王自ら来ることは不可能。その上で王族が来るということは俺やセリアを直接見極めたい、ということに違いない。

結果次第では後継者レースに大きな影響がある。男子を来させるとその者が一気に優位に立つ可能性があるため避けられたのかもしれない。

「先方の目的はお洒落ということですが、『詳しい貴族を紹介してくれ』という要望も出てくるでしょうか」

「そうなった場合、こちらが紹介するのはシルヴェストル公爵家になるだろう。もし、第七王妃が手頃な子供を連れてきていた場合、併せて子供同士の交流を望むのも自然な流れだ」

一手でここまでの流れがお膳立てされているわけか。

国家レベルの政治というのはやっぱり難しすぎる。
「来訪は春になってからの予定だ。他言は無用だが、心の準備だけはしておくように」
「かしこまりました。どのような話が来ても良いよう、可能な限りの準備を整えます」
「頼む」
話が終わった後はついでに婚約者との時間を取ったが、リオネルは部屋に戻ってもまだ難しい顔をしていた。
「リオネルさま？　なにか気になることでも？」
「いや。……ただ、話が急速に進み過ぎると思ってな」
「……そうですね」
お互いまだ十二歳だというのに王位継承争いに関わることになってしまっている。本当ならもっとゆっくり力をつけてから関わりたかったものだ。
時代の流れというのは人の成長を待ってくれない。
若くして渦中に立たされてしまった以上、俺たちは俺たちの力で抗わなくてはな

らない。
「できることからこなしてまいりましょう。できないことは周りの方々が力を貸してくださるはずです」
そう告げると、王子様はきょとんとした顔をして、
「お前でもできなくて困ることがあるのか？」
「もちろん。たくさんありますよ。例えば、わたしは人と仲良くなるのが苦手です。友達をたくさん作るのはリオネルさまの方が絶対にお上手です」
「友達か。ああ、お前は軽々しく敵を作りすぎるからな」
「でしょう?」
見つめ合って笑いあう。
出会ったのが幼い頃だったのは幸いだ。あれからずっと屈託なく逢瀬を重ねてきたお陰でこうして遠慮なく言いあい、笑いあえる。
と、リオネルはふと気づいたように目を瞬き、首を傾げて、
「ところでお前、少し太ったか？」
少年の目線は俺の胸元。試作型ワイヤー付きブラによって膨らみが強調された部

分である。
　俺は思わず半眼になって、
「リオネルさま？　女性に『太ったのか？』は禁句ですよ。本当だったとしても伝える際は細心の注意を要します。失敗すれば即座に敵認定でしょう」
「理不尽すぎるだろう。というか、太ったとかお前も気にするのか？」
「気にするに決まっているでしょう？　体型を維持するのにわたしがどれだけ甘い物や脂っこいものを我慢していると思っているのですか」
　軽く睨んでやると素直に「すまなかった」と謝ってくれた。
「で、それは太ったせいか？　それとも筋肉か？」
「本当にわかってらっしゃいますか……？　いえ、まあ、それはともかく。これは下着を替えたせいです。だんだん胸が大きくなって参りましたので」
「ああ、そうか。お前もこれから剣を振るのが大変になっていくのか」
「……まあ、そうですね」
　白兵戦をするには明らかに邪魔な脂肪である。心臓を守る効果はあるのだがそれ以上に重いし揺れるし邪魔である。

でも俺は成長した自分の姿をバランスぎりぎりの巨乳で思い描いている。どうせ女になったのなら可能な限り魅力的な姿になりたいと思うのが人情である。

ちなみに身長があまり伸びないのもおそらく『小柄な方が活躍した時にインパクトあるわよね』とか思っているせいだ。

「しかし、女と男が違うのは仕方のないことです。これからは女としての剣の振り方を模索していけば良いでしょう」

ノエルもモニカも胸は小さめなのでそのまま参考にはできないかもしれないが。

「ですが、わたしの胸を凝視するなんて……リオネルさまも女性に興味が出てまいりましたか？」

リオネルの後ろに控えているセルジュや城のメイドたちが「なんという話題を振るのですか!?」という顔をした。お互い思春期を迎えつつある今、下手な話題選びをすると猥談に突入しかねない。そうなると周囲としてはいたたまれない、ということだろう。

しかし言ってしまったものは仕方ない。ここはせっかくなのでもう少し攻める。

「ベアトリスさまはかなりの大きさをお持ちでしょう？　どうせならわたしも大

きくなりたいと思うのですが、お好みはいかがですか？」
　視線を送られたリオネルは「なっ」と声を上げて、
「何を馬鹿な事を言うのだ。そんな事を私に聞かれても困る」
『いや、あんた以外の誰に聞くのよ？』
　でもまあ、なんか顔を真っ赤にして照れているので大きい分には問題なさそうだ。ひとまず成長プランはこのままでいこう、と内心決める俺だった。

成長とこれからのこと

「閨の教育を始めましょう」

ある夜、セレスティーヌから部屋に呼び出された。

何かあったのかと思ったら宣言されたのは予想外の一言。同時に「ああ、ついに来たか」とも思う。思わず口からため息が漏れた。

そんな俺の様子を見た養母は「気が進みませんか？」と尋ねてくる。

「必要だとわかってはいます。……ただ、軽い気持ちで学べることではないでしょう？」

「そうですね。ですが、公爵令嬢ともなれば疎かにはできません」

まだまだ若く美しい養母も二人の子を産んでいる。当然ながら子供は自然には産まれない。何も知らない乙女どころか男を誘う術を知っているわけだ。

『チャイナ風ランジェリーをこっそり用意してみたりね』

セレスティーヌは何食わぬ顔でカップを手にし、紅茶で唇を軽く湿らせる。

「殿方とは非常に気分屋かつ気難しい生き物です。主人となる方を上手くその気に

させ、閨を共にしなければ子を授かる可能性すら生まれません。確実に子を成したければ繰り返し『求められる』ことが必要となります」

この世界の女性にとって結婚をし子供を産むのはほぼ義務だ。高位の貴族女性ともなれば猶更。

王子と婚約している俺に至っては世継ぎを求められる可能性すらある。一人と言わず二人、三人と子を成さなければならない。

「……気が重いお話ですが、殿方を上手く誘導するためにも知識と技術が必要なのでしょうね」

「わかっているのであれば話を先に進めます」

頷き、当然のように宣言するセレスティーヌ。

「口では文句を言っていようと義務なら果たすでしょう？」と見透かされている感じだ。

俺の気が重い理由はおそらく養母が思っているのとは少し違う。

純情な乙女的なアレではなく、貴族のご令嬢ですら（というか令嬢だからこそ）男を手玉に取るための術を積極的に学ばされるという事実や「男を手玉に取って当

然」みたいに自然と考えてしまっている自分に「うわぁ」となっているからなのだが……まあ、必要なら学ばないといけないのも事実。

「新しい教師が付くのでしょうか？」

「そうですね。一般的には既婚の女性が教師となります。私が教えても構いませんが――」

「勘弁してください」

「でしょうね。では、ルフォール侯爵夫人に依頼しましょう。既に仮の了解は取り付けてあります」

自分の親に手ほどきされるのはもはや罰ゲームだが、友達の親もなかなかに気まずい。

「あら？　そうなるとひょっとして、お養母さまが代わりにヴァイオレットを教えるのでしょうか？」

「ルフォール侯爵家は内々で済ませるでしょう。秘伝の技術を伝えていると聞いています」

じゃあヴァイオレットもそういうのを修得するのか。

あの妖精に手ほどきされるリオネル……うん、意外と想像はつくが、なんとなく悔しい。どうせならあの王子様は俺が操縦したいところである。

「秘伝は教えてくださらないでしょうが、是非教師をお願いしたいと思います」

「少しはやる気が出てきたようですね。では、先方の都合次第で月に一度か二度、時間を設けることにします」

「かしこまりました」

ちなみに、男子もそういう教育を受けるのか？　と尋ねたところ、年頃の男子には複数回にわたって「練習相手」が宛がわれるらしい。

『ふーん、そう。羨ましいじゃない。良かったわね王子様』

女性的感性の俺の機嫌が氷点下だった。男としても純粋に羨ましい&妬ましいので「せいぜい頑張れば？」と思うことにしてその件については思考から抹消した。

◆　◆　◆

「なあ、セルジュ。リディアーヌは前からあんなに可愛かったか？」

「……は？」

第三王子リオネルの世話係セルジュは手にしていたティーポットを危うく落としそうになった。

ぎりぎりで支えてほっと一息。振り返ると、主は己の発言に恥ずかしくなったのかほんのりと頬を染めていた。

「急に何を仰るのですか、殿下？　シルヴェストル公爵令嬢様は以前からとても美しい方でしたよ。殿下もよく褒めていらっしゃったでしょう」

紅の髪を傷つけたくないだの瞳の形がいいだの、不意のタイミングでさらりと口にするものだから「狙っているのだとしたら末恐ろしい」と度々戦慄していた。何度か経験すると「ああ、単に思った事を口に出しているだけでしたか」と理解したが。

王子は翠色の瞳を気まずそうに逸らし「まあ、そうなのだがな……」とこぼした。

「私は一体どうやってあれを褒めていた？　考えれば考えるほどわからなくなってきた」

「今までは考えていなかったのでは？　……ははあ。わかりました。婚約者様の

美しさが気になって普通に接する事ができなくなりそうなのですね？」
「む。……うむ、まあ、そういう事になるか」
紅茶を淹れ終え、菓子と一緒に供する。
昔は甘い菓子の類はあまり好んでいなかったが、リディアーヌと月に一度か二度、定期的に会うようになってからは以前より好むようになった。
あの令嬢が事あるごとに「野菜を食べろ」と言うお陰で肉好きもある程度抑えられている。まったくリディアーヌ様々というか、王子は知らず知らずのうちに習慣の面でも大きく影響を受けている。
琥珀色の液体が少年の唇へ流し込まれる。
少女のよう、と形容しても良いほど整っていた容姿は少しずつ男性的魅力を増して頼もしさが出てきている。令嬢達からの人気が絶大だったのは何も地位だけが理由ではないわけだが、その端正な顔立ちが今は悩ましげに歪んでいる。
「その、なんだ。この間あいつと胸の話をしただろう？」
「ええ。盛大に叱られましたね」
「それは言うな」

ちらりと室内を確認する。
特に何をするでもない休憩時間のためメイドは下がらせている。警護の騎士、兵士も全員男性で「こういう話」には理解がある。何も問題ない。
「あの時は本当に太ったのかと心配していただけだ。だが、文句を言われたせいか？　逆に気になってきたというか……リディアーヌも母上やメイド達のように胸が膨らんでくるのだな、と。触ったら柔らかいのだろうな、と思えて仕方なくなった」
「で、気づいたら他の部分も気になるようになってしまいましたか」
「ああ。なんだあれは。本当に俺と同じ種類の生き物なのか？　度々剣を持って大立ち回りを繰り広げているから騙されていたが、頬も唇も手足も柔らかそうだし、近づくと良い匂いがする。本当に前からあれはああだったのか？」
「ですから、あの方は以前からお綺麗でしたよ」
ついでに言うと方向性が違うだけでリオネルの容姿が劣っているとも思わない。同じ生き物かと聞かれれば同じ人間だが、男と女は別の生き物だとも言える。なかなかに哲学的な問いかもしれない。
しかし、何はともあれ。

「……あの王子がついに女性の魅力を認識してくださいましたか」
左腕の怪我によって騎士を辞める事となり絶望していたところを王家に拾われ、第三王子の世話係となった。
幼い頃からこの少年と共に過ごしてきたが今日ほど達成感を覚えた日はない。セルジュは涙ぐみ、服の袖で目元を拭った。
「お前、ひょっとして馬鹿にしているな？」
「そのような事は決して。ただ、殿下はとてもお子様だったな、と」
「馬鹿にしているではないか。俺だって美しさがわからなかったわけではない。ただ、感じ方の質が変わったというか、あれに触れてみたくてたまらなくなっただけだ」
「完全に目覚めてしまいましたね。……ああ、いえ。それが正常ですのでご安心を」
誰もが通る道だ。女性の魅力を理解した上で紳士的な振る舞いができるようになって一人前。相手の都合を無視して押し倒したり誰彼構わず口説くようでは粗野な平民と変わらない。
「ただ、一つ言うとすれば、リディアーヌ様は殿下の婚約者です。手放さなければ

結婚後はお好きなようになさって構いません」
「好きなように、だと？」
「ええ。お好きなように。初夜は一晩中相手を寝かさない、という方も決して少なくないと聞きます」
ごくり。リオネルが息を呑むのがわかった。きっと想像したのだろう。今すぐに欲しくなってしまったかもしれない。
「残念ながらご結婚まではまだまだ先ですよ。どうかそれまで自重していただけますよう」
「待て。結婚なんて早くとも学園卒業後だろう!?　それまで我慢しろと言うのか!?」
「その通りです。……ああ、もちろん、他のご令嬢に手を出すのもいけません。特にベアトリス・デュナン様やヴァイオレット・ルフォール様にはご注意を」
前者は積極的に過ちを誘いに来るだろうから危険度が高い。後者はリディアーヌとの協調を宣言し第二夫人を希望しているが、だからこそ順序を逆さまにする事は許されない。第一に愛されるのは婚約者にして第一夫人に内定しているリディアー

ヌであるべきだ。

「……うむ。ベアトリスにヴァイオレット、だな」

二人でも想像してしまったらしい。

罪ではない。想像するだけなら自由だ。男とは手を出す気がなくともつい考えてしまうもの。セルジュにも覚えはいくらでもあるし、リオネルが「そういう風」になってくれた事はむしろ健全だとさえ思う。

主とこんな話ができるようになるとは、きっと今日の夜飲む酒は美味いだろう。

「これは、早急に殿下への教育が必要ですね」

「教育だと？　ひょっとして何か叱られるのか？」

「ご安心を。殿下にとっても悪い話ではありません。ひいては将来のお相手にとっても良い結果を齎すはずです」

男性王族向けの性教育。

情報を外部に漏らさない、万が一惚れられても突き放せるなど複数の条件に合致した成人女性から「手ほどき」をさせるというものだ。

初夜で結婚相手を喜ばせられるように、相手の身体をむやみに傷つけるようなこ

とのないように、といった意図のほか、年頃を迎えて欲求不満になった王族に欲の抑え方を覚えてもらうという役割もある。

この王子の事だ。

リディアーヌ以外を相手にしろと言われたら抵抗するかもしれないが、

（私も、お二人の幸せを願っているのですよ）

主の話し相手をそつなくこなしながら、セルジュは内心で呟いた。

◆　◆　◆

閨の教育はともかくとして。

隣国についてもっと詳しくなるために向こうの歴史書や博物辞典などを購入した。また、ついでなので教国の資料も併せて買った。

輸入品なので量・質共に限られる。詳しく書かれた本があれば喜んで買うと伝えたら出入りの商人が色々探してきてくれてそこそこの本が揃った。

知らない内容も多く読むのは大変だが、同じ事について自国の書物とは異なる記

述もあったりしてなかなかに興味深い。一般向けの本としてのアレンジなのか、それとも自国に都合がいいように事実が改ざんされているのか調べてみるのも楽しそうだ。

きっと学者というのはそうやって沼に嵌まっていくのだろう。

「それで？　リディアーヌ、貴女は隣国へ行くつもりなのかしら？」

「まだ決めたわけではありません。状況と向こうの事情次第です」

買った本はオーレリアも興味を持った。アンナも読もうと頑張っているがなかなか進まない模様。モニカも俺の読み終わった本を借りて行って読んでくれている。

俺の行動に師である《魔女》様は思うところがあったのだろう。ある日の夜、直球で尋ねてきた。

「事情ね。貴女の妹を狙った件にどんな事情があれば許すつもりなのかしら」

「許しませんよ。ですが、誰がやったのかを特定するためにも情報が必要でしょう？」

他国の実情なんて詳しくわかるわけがない。おそらくこの国と同程度にはややこしいはずの勢力図を知るには理解している者に教えてもらうのが早い。

「純血派の支援者と対立する派閥からの要請なら心証も良いですし、対価と条件によっては受けてもいいかもしれませんね」
「条件ね。そんなに美味い条件が出されるかしら」
「それが蓋を開けてみないとわからないっていう話じゃありませんか」
「そう。まあ、私はどちらでも構わないわ」
黒い前髪をさらりとかきあげた師は艶やかに笑って、
「貴女が行くというのならついていくだけよ。向こうの魔法事情も調べてみたかったしちょうどいいかもしれないわね。王女の身の上じゃなかなかできなかっただろうし」
「師匠は自由ですね」
「貴女に言われたくないわ」

準備と相談

『紅蓮の魔女は災いの申し子』
『王家に他国の血を入れるな』
『売国の犬』
『この国から出て行け』

屋敷に届いた嫌がらせの手紙の数々に俺はため息をつき、思わず愚痴をこぼした。

「読むのを止めてしまいたくなるわね」

とは言えそうもいかない。念のため内容および相手の筆跡を覚えておけば（正確には思い出せるようにしておけば）何かの役に立つかもしれない。

メイドによる検閲は終わっているため剃刀の刃などの危険物は入っていないし、ここは仕事の一つと考えて頑張るべきだ。

と、山のように積まれた手紙をアンナが睨んで、

「酷すぎます！　いったいリディアーヌ様が何をしたと言うんですか！」

これらの手紙は全て俺宛てだ。

多くは平民の手紙配達人を介している。彼らは基本的に急ぎの依頼（特急料金が必要）以外は半日分～数日分をまとめて届けるので「これを持ってきたのはどんな奴だった？」とかいちいち憶えていない。

依頼者の情報を売る配達人も一部いるため、対策として無記名の手紙も珍しくない。逆手に取ればこっそり嫌がらせができる。

金を握らせて「顔を憶えておけ」と頼むこともできるが、別の平民をさらに間に挟むケースもある。

情報として逆に利用することも考えれば結局、受け取って確認するのが一番である。さすがに無記名の小包とかは開けずに捨てるが。

「まあ、挙げていけば結構色々やったわね」

今はやっていないが昔はメイドをいじめていたし、その関係で一人平民落ちさせている。

第三王子の婚約者となって同世代の令嬢中心にグループを結成。新たな服飾部品やデザインを生み出して産業を活性化させたり、テロ対策を手伝って褒賞をもらったりもした。

さらに第一王子や第二王子とも親交があるうえ、先日の試合ではアルベールといい勝負をして武力をも見せつけた。

この国一番と言っていい魔法使い&魔道具製作者であるオーレリアを抱えており、その薫陶によって俺自身もいくつもの魔道具を製作している。

「だからって『出て行け』なんてあんまりです。リディアーヌ様が齎すはずだった利益を損なうことにだってなるんですよ？」

「ありがとう、アンナ。でも、嫌がらせをしてくる奴らからしたら『わたしが利益を上げること』自体が気に食わないのよ」

例えば、第一王子派と第二王子派にとっては俺に消えてもらうことで推している王子を相対的に躍進させられる。

服飾関連に力を入れている貴族家にとって公爵家は目の上のたんこぶだろうし、戦いは男の領分だとする頭の固い男&万一にも「戦え」などと言われたくない女にとっての俺は「余計なことをする女」だ。

誰かが得をすれば誰かが損をする。

他人を下げてでも得したいと思うのはおかしなことではない。野球でもサッカー

でもオリンピックでもいいが、応援しているチーム（選手）に勝って欲しいがために相手のミスを願った経験はきっと多くの者にあるはずだ。

「だから、放っておきましょう。……まあ、差出人の見当がつくものは情報をまとめておくし、内容に嘘の交じっているものは対処するけど」

俺がいなくなれば純血派も大人しくなる、と本気で信じている者も中にはいそうだ。

資金や武器の提供がなくなって活動に支障が出たりはするかもしれないが、末端の人間は単に「貴族をぶっ潰したい」とか思っているだけなわけで。完全に活動が止まることはおそらくない。

「……最近、少しずつ荷物を纏めているんです」

ふと、アンナが声のトーンを変えた。

「最低限の服や日用品を鞄に詰めて持ち出せるようにしています。いつ、急にこのお屋敷を出ることになってもいいように」

タイミングを考えれば、どうしてそんなことをしているかは明白だ。

俺は顔を上げ、大切な専属メイドを見つめて尋ねた。

「アンナ。もし、わたしがこの国を出ることになったら、一緒に来てくれる？」
「当たり前じゃないですか！」
感極まったようにぎゅっと抱きしめられる。
「リディアーヌ様のお世話は私が一番上手いんです。見知らぬ土地で一人ぼっちになんて絶対にさせません」
「たぶん、オーレリアも来てくれるけど」
「二人きりには猶更できません」
きっぱり言われた。
まあ、俺の世話は仕事だからやってるだけで、取り繕う必要がなくなったら全部魔法で済ませそうだしな……。俺がツッコミ役という時点で明らかに破綻している。
もちろん、今すぐ国を追われるようなことがあるとは思えない。
嫌がらせに嫌がらせで返すことはあっても国外追放レベルの犯罪なんてやった覚

えもない。国王と宰相がこちらの味方なのだから、これで濡れ衣着せられたら洗脳を疑うべきである。

ただ、俺に国を出て欲しいと思う者は利害の対立する者以外にもいるようで。

「対話の機会を与えていただき、感謝いたします。リディアーヌ・シルヴェストル様」

「頭をお上げください。教国の全権代理様となれば国の第二位と言っても過言ではないお立場です。敬意を表さねばならないのはわたしの方でしょう」

一週間ほどのインターバルの後、再び転移してきた教国の使者は城内に用意された応接間にて俺と向かい合うとまず最初に頭を垂れた。

こちらの国の人間による監視付の状態。

噂にでもなれば教国の公式的な態度として扱われかねないというのに、だ。

そして、彼の恭しい態度は顔を上げても変わらなかった。

「いいえ。使徒の血を色濃くお持ちの貴女様は我々にとって尊敬し、尊重すべきお方。この場にいるのが私ではなく教皇であったとしても同じ態度になるでしょう」

「過分なご配慮、心より感謝いたします」

せめてもの礼にこちらも深く頭を下げてから、何気ない風を装って尋ねる。
「あの。例えばのお話ですが、隣国の国王とわたしであれば、あなた方はどちらに敬意を尽くされるのでしょうか？」
かなりクリティカルな質問だったと思うのだが、使者の表情はさして動かなかった。
「かの王は古より続く国を良く治め、時代へ残そうとしているという意味では尊敬に値します。……ですが、血の尊さで申し上げればリディアーヌ様が上でしょう」
「っ」
長年君臨してきた為政者への敬意と信仰から来る敬意は別、ということか。
であれば。
「私は、正しき血はあるべき場所に帰るべきだと考えております。神代から遥かな時が流れ、使徒の血が散逸してきた今だからこそです」
ある種の熱狂を含む真摯な瞳が俺を見据える。
「先日いただいたお手紙はそのようなお考えからのものだったのですね」
「お返事を受け取るのが遅くなってしまい申し訳ございません。政としての判断に

ついて本国への共有も必要だったものですから」

おそらく、大きな混乱は起こらなかったのだろう。彼の涼しい顔からも、国内の様子からもそれが窺えた。

しかし、国の中枢＝宗教団体と言ってもいいかの国においても政治的判断と宗教的な判断は必ずしも一致しないのか。

俺はさりげなく室内の様子を確認する。城から付けられた使用人や騎士たちはポーカーフェイスのまま待機している。今回、部屋の外への盗聴防止は実施しているが彼らへは会話が筒抜け。一番動揺しているのが俺の傍に立つアンナという若干不思議な状況になっている。

「わたしが隣国へ移りたいと願うのならば支援していただける……と、思ってよろしいのでしょうか」

「物的・金銭的支援をお望みであれば答えは否です。ですが、貴女の血の正当性を証明し、教皇からの親書を用意する程度であれば喜んでお手伝いさせていただきます」

十分すぎる。というか、むしろ代えのきかない部分で支援を受けられるのだから

破格の申し出である。

「お望みとあらば早急に手筈を整えますが」

「申し訳ありません。今のわたしはこの国の貴族でありリオネル殿下の婚約者です。国王陛下に忠義を尽くし、国の利益のために働くのが役割。国同士のやり取りが始まらないうちはなにもお答えすることができません」

「これは大変失礼いたしました。……ですが、ご安心を。我々の立場と見解は易々と変わるものではございませんので」

さすがの教国も他国に強い圧力をかけられるほど向こう見ずでも強大でもない。だから俺の身の振り方を強制はしないが、彼らとしては「血統に従うべきだ」という考えを変えることはない、ということだ。

「……という魔道具を考えたんですが、どう思いますか？」

教国の使者との会談から数日後。

俺はオーレリアとの夜の語らいの時間を利用して新しい魔道具の構想を話した。

基本的な考え方は公爵領の牧場に埋めた自動型・半永久稼働の魔道具と同じ。自然発生する魔力を地中から回収、それを用いて魔法を発動するというものだ。

今回はその発動する魔法を豊穣ではなく防御に使う。

例えば門壁の一部として魔道具を地中に埋めれば、魔力の続く限り門・壁への攻撃を自動防御してくれる魔道具になる。

魔法戦は基本的に先手必勝。先に有効打を入れた方が勝つ。ここで重要なのが防御の手数。つまり、自爆テロが来ようとも最初の一発さえ防げればかなり対処が用意になる。そこで考えたのがこの魔道具である。

「いくつか懸念と疑問があるわね」

俺の説明を黙って聞いていた師は静かに口を開いた。

「まずは魔力の供給量。公爵邸の敷地全体から引き出すとしてもそう大した量ではないでしょう。攻撃に反応する半自動型とするとしても時間経過による魔力の消耗が痛すぎる」

「業腹ではありますが、新型魔石を用いることで消耗は回避できます。攻めるためではなく守るためですし、必要になるような事態が発生しなければ永遠に発覚しな

いので心情的にはまあ、アリですね」
　新型魔石なら時間経過で魔力はほぼ減らないので、充電しておいて攻撃が来た時に防御効果を発揮することができる。
「なら、次に防御範囲。門と壁全体を対象とするとおそらく範囲が広すぎるわ。東西南北で四つくらい魔道具を作れば緩和できるでしょうけど……今度は製作時間と費用の問題が出てくる」
「防御は門に限定してもいいかもしれません。壁はそれ自体が一度きりの防御魔法のようなものですから、壁の破壊に最初の一撃を割いてくれるのであれば目的は十分に果たしています」
　我が家には土属性の使い手が複数いるので、その気になれば壁の増設や補修も簡単だ。
　ここまでの回答にオーレリアは頷いて、
「じゃあ、一番の問題。既にできている門と一体型の魔道具を地中へ新設するっていったいどうするのかしら？」
「……まあ、それなんですよね」

門を新しく作り直してもいいが、それだと「何か細工をしました」と言っているようなものである。警戒されては防御効果は半減以下。

門の下に魔道具だけ埋めようとしてもあまり変わらない。誰かに見られて情報を広げられたら同じだし、夜に工事なんてしたら近所迷惑である。

「それについては根本的な解決が思いつきません。門、というのは一例なので、屋敷の正面扉に設置するという手はあるかもしれませんが」

「賊が馬鹿正直に正面扉から侵入してくれればいいわね」

「ですよね……」

普通に窓から侵入してくる可能性も普通にある。というか、事前に下調べをしてターゲットの部屋に直行する可能性が高い。

オーレリアが額に指をあてて考え込む。

「防御ではなく警報の魔法具にする……いえ、家人とそれ以外の判定が複雑すぎるわ。発想はいいけれど、なかなか実現は難しいんじゃないかしら」

「そうですね。単純に窓ガラスを強化するとか、そういった方向性のほうが有用かもしれません」

窓ガラスなら魔法で二重三重にするだけでもある程度の対策になる。あとは間にフィルムを挟むんだったか？　詳しくは憶えていないが、割れにくくなれば侵入は難しくなるだろう。

家族の部屋だけに限定しても結構大変そうなのはまあ、なんというか必要経費と割り切るしかないか。

「貴女がいなくなった時の対策？」

漆黒の瞳に見つめられた俺は「それだけではありません」と苦笑した。

「現状でも自爆の魔道具に狙われる可能性はあるでしょう？　守りを少しでも固めておくのは悪いことではないはずです」

「まあ、そういうことにしておきましょうか」

師も多くを尋ねてはこなかった。彼女もアンナと同じく非常用の荷造りをしていることを俺は知っている。というか俺自身、最近は先を意識した魔道具作りで忙しい。

いったい、この先どうなるのやら。

魔女と聖女の憩いの時

「突然呼び出してごめんなさい、リディアーヌ」
「気にしないで。ヴァイオレットに頼ってもらえるなんてむしろ嬉しいわ」
親友からの念話を受け、俺はルフォール侯爵家の屋敷を訪れた。
白をベースとした爽やかな外観。庭園には季節の花が咲き、たくさんの使用人が出迎えてくれる。妖精のようなヴァイオレットにぴったりの空間に感嘆の息がこぼれる。
実際は使用人の一部が諜報員としての教育を受けていたりと華やかなだけの場所ではない、と念話による内緒話で教えてもらったが、それはそれで手間暇がかかっていて凄い。バルト家が戦闘メイドならルフォール家はスパイメイドか。
『もしかして我が家が普通すぎるの？　オーレリアに頼んで魔法メイド部隊とか組織した方がいいかしら』
うちの男は土属性が多いから「戦いは正面からするもの」という感覚が強いのかもしれない。もちろん専門の警備兵にも利点は多いので一概に間違ってはいないの

だが。

「昨夜念話でも話したけど、セリアの扱いに困っているの」

家だというのに余所行きっぽいドレスを纏った銀色の妖精は俺を聖女の部屋へと導きながら告げた。

「ヴァイオレットや侯爵夫人でも手を焼くなんて驚いたわ」

「色々な意味で私達の常識にはなかったものだから」

到着した客間は玄関から適度に遠く、かといって隅に追いやられているというほどでもない絶妙な立地。広さも十分……というか平民なら家全体より広いくらいだ（セリアの場合は店舗兼自宅なのでさすがに家の方が広いが）。

ノックをしてメイドに開けてもらうと、椅子に腰かけていた少女が「あっ」と声を上げて立ち上がった。

「こんにちは、リディアーヌ様。お久しぶりです」

「元気そうで良かったわ、セリア。……なんでも結構やんちゃをしたらしいじゃない？」

こげ茶色の落ち着いた、というか地味なドレス姿の彼女に駆け寄られる。

あまり急接近するのは貴族的にNGだったりするが、言葉遣いや所作は前より良くなっている。むしろ、自然に笑顔で人を出迎えられるのは心根が真っすぐだからこそ。彼女の長所だ。

こちらも微笑んで挨拶をした後、直球気味に水を向けると少女はさっと視線を逸らした。

「いえ、その。……すみません、つい」

「その『つい』に私達は振り回されっぱなし」

「うう」

助けを求めるように見つめられて「どうしたものか」と思う。

ルフォール侯爵家に居候するようになってからしばらく。聖女セリアは礼儀作法をはじめとする各種勉強のために忙しい日々を送っている。

階級が男爵とはいえ周囲から注目される身だ。三年後の学園入学までに一定水準まで到達させなければいけない。元平民のセリアにとってはかなりハードだ。

そのストレスからか、あるいは単に平民の感覚から来るものなのか、彼女の「やんちゃ」は複数に及んでいるという。

身体を動かしたいと言って中庭に出たと思ったら空間をいっぱいに使って走り回ったり飛び跳ねる。挙句木に登ろうとする。

気晴らしにと厨房を借りてお菓子作りを始め、服を粉だらけにする。

寝酒にと飲み始めたワインをボトル一本開けた挙句泥酔する（金の問題はないが淑女としてはしたない）。

寂しいからとしきりに使用人へ話しかけ、持ち前の明るさからあっという間に打ち解ける。それは良いのだが、フレンドリーに会話をするようになった結果仕事を滞らせる使用人を何人も出す。

箱入りの貴族令嬢もいるメイドたちに「小さい頃湯浴みの時に見たお父さんのアレ」について語る、などなど。

一つ一つはまあ可愛いレベルではあるのだが、頻発されると割と困る。

俺は自分より背の高いセリアの顔を見上げるようにして、

「駄目よ、セリア。あなたは居候の身なんだから。この家の流儀に合わせてあげないとみんな大変だわ。そういうのは自分の屋敷を持ってからにしなさい」

「はい、反省しています……って、あれ？」

観念したのか、しゅん、と項垂れた彼女は何かに気づいたように首を傾げて。
「自分の屋敷ならいいんですか？」
「外出先やお客様の前で取り繕えていれば別にいいんじゃない？　わたしだって部屋では自由に過ごしているわ」
「そうなんですか？　じゃあ、お部屋では下着だけで過ごしたり？」
「そうなの、リディアーヌ？」
こらヴァイオレット。「見たい」という顔でこっちを見るんじゃない。
こほん。俺の傍に立っていたアンナが小さく咳をして、
「リディアーヌ様はお部屋でもきちんとしていらっしゃいます。おかしいのは魔石を作りながら読書をしたり、屋内で炎の蝶を出したり、棋譜もなしに過去のチェスでの対局を完全に再現して検討を始めたり、といった方向性です」
「わたしはまだお酒を飲めないから、湯上がりには麦茶か紅茶ね。疲れた時には砂糖を入れた麦茶もなかなか良いのよ」
「なんだ。とってもリディアーヌらしい素敵な過ごし方」
くすりとヴァイオレットが笑い、逆にセリアは残念そうな顔になった。

「そんな格好いい過ごし方、わたしには無理です」
「あら？　魔法の勉強は順調に進んでるって聞いたけど」
「あ、はいっ。魔法ってやってみると楽しいですねっ！　わたしにもこんなことができるなんて夢見たいです」
言いながら右手の指を持ち上げる少女。ぴん、と立てた人差し指の先へ小さな水の球が生まれたかと思うと、それは螺旋を描くようにして少女の身体をぐるぐる取り巻いていく。思わず瞬いた次の瞬間には水は消失。その現象を起こした張本人はにこにこ顔だ。
「セリアは万事この調子。この間はついに、教師役を命じられたうちの家令が『自分には荷が重い』って匙を投げた」
「す、すみません。なんだかできそうだったのでつい調子に乗って色々試してしまって」
既に心を除く五属性の魔法は今見せたのと同等の操作が可能。聖属性の治癒魔法も「痛いのとんでけー」くらいのノリで簡単な擦り傷切り傷くらいなら治してしまうという。

「セリアは間違いなく天才ね。才能はうちの師匠以上かも」
「リディアーヌも初めて自覚的に使った魔法で風邪を吹き飛ばした癖に」
「風邪を吹き飛ばす……そんなこともできるんですね。わたしは風邪、ひいたことがないんですけど、お父さんが寝込んでいる姿はいつも辛そうでした」
馬鹿は風邪をひかないんですよね、なんて言って笑うセリア。おそらくそれは無意識の魔力行使が原因だ。
俺も風邪を引いたことはない。ヴァイオレットの言葉は『毒』という真相を隠すための方便である。
「じゃあ、今度わたしが風邪を引いたらセリアに頼んでもいいかしら？」
「はいっ。もちろんですっ」
その後、セリアから近況を聞かせてもらったところ、あれから二度ほど父親のところへ会いに行ったらしい。
周囲が騒ぎ立てて大変だったらしいが、定期的に顔を見られるだけでも嬉しいと少女は笑った。
平民から一人、貴族の仲間入りをさせられた彼女。少しくらいのやんちゃは大目

に見てもらえるようにヴァイオレットやその使用人にお願いした。
そして、
「ねえ、セリア？　良かったらわたしの孤児院を一緒に視察しない？」
俺はこの機会に少女を外出へと誘ったのだった。

「リディアーヌ様！」
「こんにちは、みんな。元気にしていたかしら？」
「うん、もちろん！」
「ご飯も美味しいし、布団も暖かくなったからみんな元気だよ！」
「そう、それは良かった」
孤児院はだいぶ補修や清掃が行き届き、見た目にも居心地の良い空間になってきた。
許容人数が増えた結果、新しく受け入れた子供もいる。そういう子たちはオーナーの俺へ特に素直に接してくれる。

もちろん、他の子も基本的にとても素直だ。生意気なのはルネという女の子くらい。まあ、ルネに関してはそういうツンツンしたところが可愛いのだが。

『同族嫌悪の逆かしら。ついついあいう子を構いたくなっちゃうのよね』

いつものように隠れているか後ろの方に立っているはずの少々の姿を探していると、ドレスの裾をくいくいと引かれて、

「リディアーヌ様。こっちの人達は？」

「ああ、そうだったわね、ごめんなさい。彼女はセリア男爵様、わたしのお友達よ。それからこっちはわたしの大切な妹のシャルロット」

「よろしくね、みんな」

「よ、よろしくお願いします」

「よろしくおねがいしまーす」

元気よく答える子供たちが微笑ましい。

こういうノリに慣れているセリアはさっそく近くにしゃがみこんで笑顔で話を始める。向こうも「このお姉ちゃんは話しやすそう」と思ったのかすんなりと応じ始めた。さすがの順応性。元が平民な上に客商売をやっていただけはある。

シャルロットの方は慣れてないせいか、困ったような顔で俺の傍に寄ってきた。
「あの、お姉様。私までついて来て本当に良かったのでしょうか」
「なに言ってるの。わたしの孤児院なんだからシャルロットも来ていいに決まっているでしょう」
と言っても、実際のところ俺が無理を言って来てもらったのに近い。
「ほら、レオンももう少ししたらやんちゃになるでしょう？　そういう時のための予行演習だと思って相手をしてみない？」
「それは……確かに練習が必要かもしれません」
「シャルロット様。ご無理をなさる必要はないかと」
「大丈夫よ、アニエス。心配してくれてありがとう」
気遣わしげな表情を浮かべる専属メイドに微笑み返したシャルロットは「行ってきます」と手をぎゅっと握りしめ、ゆっくりと歩き出した。
向かった先は集団からぽつんと孤立してつまらなそうにしている女の子――『って、ルネじゃない！』。いきなり輪の中に入っていくよりはやりやすいと思ったのだろうが、実際は雑魚戦を無視してラスボスに挑んだようなものである。

止めようにも、下手に止めると義妹に失敗体験が残りそうだし、既に向こうもシャルロットの接近に気づいてしまった。
スカートが地面に付かないように軽く身を屈めて義妹がルネに声をかける。
（ちなみにセリアはスカートとか気にせず思い切りしゃがんでいる）
「こんにちは。お名前を教えてくれるかしら？」
ルネがぶすっとした表情で金色の天使を見つめる。これはやっぱり駄目か……と。
「……初めまして。ルネと申します、シャルロット様」
「ちょっと。わたし相手の時との態度の違いはなによ」
「落ち着いてください、リディアーヌ様」
小声で入れたツッコミにアンナが反応し、俺の肩をそっと押さえた。
ルネもＴＰＯは弁えているということか、シャルロットには丁寧に対応し、それに安心した義妹は他の子供たちにも話しかけるようになった。
セリアもシャルロットも若い女の子なのもあってか和やかな光景が展開される。
「これ、ひょっとしてわたしが舐められてるってことなのかしら？」

「リディアーヌ様には安心して話しかけられる、ということじゃないかと」
「そうなのかしら」
二人共十分打ち解けているように見える。まあ、良いことである。出入りする貴族が俺だけじゃないとなれば嫌がらせもしづらくなる。
例えば俺のことは嫌いだが聖女とは仲良くしたい者、聖女を排除したいが公爵家の力は怖い者、どちらにとっても動きづらいはずだ。
これからは定期的に連れてこようと思いつつ、二人に子供たちの相手をしてもらっている間に院長とも話をした。困っていることや欲しい物などをヒアリングするのも重要である。
すると、
「リディアーヌ様がどこか他の土地へ移られる、というのは本当なのでしょうか」
「今のところそんな予定はないけれど、どうして？」
「いえ。……シャルロット様を連れ来られたのはそういう事なのかと」
「まあ、そうね。万一の時のため、という意図もあるわ」
俺が何らかの理由で来られなくなった場合、貴族の出入りが途絶えてしまいかね

ない。

　金自体はファスナー等々の売り上げからセレスティーヌが出してくれるだろうが、養母に孤児院の管理まで任せるのは少々難しい。

　今のうちに後任になれそうな者を連れてきて顔つなぎをしておきたいと思った、というのも本音である。

　シャルロットなら家柄的にも俺との関係的にも適任だろう。なんならセリアと共同で管理してもらってもいい。

「もしそうなってもお金は滞らせないようにするから安心して。……もちろん、万一の時のための備えはいつでも必要だけど」

　こっそりへそくりを作っておけ、と暗に伝えられた院長は目を伏せ、深く頭を下げた。

「リディアーヌ様のお力添えによって院の経営状況は大きく改善いたしました。特に設備の改修・新調を行えた事で寿命は大きく伸びました。もし資金提供が来月から中断されたとしても完全に以前のように戻る事はないでしょう」

「良かった。……まあ、そんなことにならないのが一番なんだけど」

俺は微笑み、窓の外を見た。
春はもうすぐそこまで迫っている。

隣国の王妃

隣国より馬車二十台以上からなる一団が辺境伯領へ入ったと知らせが来た。
騎士は馬車と同数程度。騎士の数を上回る兵士を伴い、車体や鎧には大きく竜の紋章を掲げているという。
途中、辺境伯家や公爵邸に宿泊、道中の大きな街へも立ち寄りながら一週間程度をかけて王都へと到着する見込みになっている。迎えとしては副団長を含む騎士十名程度が兵を伴い合流したとか。
「王族からは正妃アンリエット殿下と第二王妃レティシア殿下、レティシア殿下の次男グレゴール殿下の三名。文官数名の他、アンリエット殿下の姪で侯爵令嬢のジャンヌ様が同行しているそうです」
例によって夕食時。
参加者確定の報を受けて城で会議中の父に代わり、父から念話を受けたアランが教えてくれる。現時点では機密事項だが、このくらいの情報はおそらく数日後には上位貴族ほぼすべての耳に入っているだろう。

ただ、

「待ってお兄さま。正妃殿下と第二王妃殿下ってどういうこと？　事の発端は第七王妃殿下だったはずでしょう？」

「ああ、僕も驚いている。だけどこれには理由があるんだ」

「……なるほど。故人の名を名簿から消すという口実で序列を再決定したのですね。敢えて今この時期に」

一足早く結論にたどり着いたセレスティーヌの言葉にアランが「そういう事です」と頷いた。

「現正妃のアンリエット殿下は元第七王妃。そして第二王妃のレティシア殿下は元第三王妃にあたります。存命中の王妃としてはレティシア殿下が最年長ですね」

王妃は既に三人死んでいるという話だから、つまり元正妃と元第二王妃、それから四から六までの誰かがこの世を去っているわけか。

それにしたって四人残っているわけで、元第七王妃が正妃抜擢というのは豪快な話である。

「随分買われているのね、アンリエット殿下は。よっぽど顔がいいのか、それとも

よっぽど頭が切れるのかしら」

　序列の入れ替えには反発もあったはず。それを押し切って実現させた理由としてはアンリエットが飛びぬけて寵愛されているか、愛を飛び越えた政治的な右腕として重用されているかだ。

　養母もまたこれに頷く。

「第七王妃の肩書きでは不足と考え、最も信を置く妃に正妃の座を与えたのでしょう。敢えてこの時期を選んだのはおそらく国内の対応を封じるため」

「隣国の国王陛下としてはなんとしてもアンリエット殿下の派閥になにかを成し遂げさせたい、と」

「ジャンヌ様は御年十一歳。リディやシャルロットと歳が近いから話しやすそうだね」

　案の定、先方は子供を一人連れてきた。

　なお、グレゴール王子は既に三十を超えているのでお子様ではない。

「もしご指名があったら、私もお姉様のお役に立てるように頑張ります」

「ありがとう、シャルロット。でも、なにもないならない方が気楽でいいのよね」

「安心してください、リディアーヌ。ほぼ確実にお呼びがかかります」
『まあ、そりゃそうよね』
むしろ今から会議に呼ばれなくてほっとしているくらいだ。まだ十二歳の小娘ではあるが、最近の登城率からするとありえなくもないから困る。
「でも、辺境伯家や公爵邸に泊まるっていうのも不穏ね。隣国の王族なのだから領主邸で歓待するのは当然ではあるけれど」
「アデライド様のお話を詳しく調べるため、なのでしょうか……？」
「強硬に話をするつもりがあるかはともかく、圧力をかける狙いはあるだろうね。何しろ王女が一人、赤子のうちに他国へ移されているんだ」
辺境伯家は既に回答を用意しているだろう。そもそも詳細については隣国側の方が詳しいのではないかという話もある。
「三人とも、隣国の情報については可能な限り頭へ入れておいてください。どんな知識がどこで役に立つかわかりません」
「かしこまりました」
セレスティーヌの指示に俺たちは素直に答えた。

隣国の王族一行の来訪から一週間ほどは何事もなく過ぎた。

城へ呼ばれてあれこれ命じられたり会議に参加させられることすらなし。というか、逆に「呼ぶまで城には近づかないこと」という指示まで出された。

意図しないところでばったり、という可能性をなくすためだ。

アンリエットたちは城の離れが丸ごと一つ貸し出され、そこで生活することになったらしい。離れと言ってもうちの屋敷より広いくらいの規模で、騎士や兵の生活スペースも十分にある。王都内の空き家を貸さなかったのは監視をやりやすくするためだろう。

そして。

「お初にお目にかかります、アンリエット・アン・ソレイル正妃殿下。そして初めまして、ジャンヌ・バダンデール様。リディアーヌ・シルヴェストルと申します」

「シャルロット・シルヴェストルと申します。本日はお招きいただき光栄でございます。若輩者ではございますが、精一杯お相手を務めさせていただきたく存じます」

義妹と共に離れ内の一室を訪れた俺は、アンリエットとジャンヌの二人に挨拶した。

アンリエットは橙に近い赤毛と赤に近い橙の瞳を持った大人の女性だ。胸元はなかなかのボリュームをお持ちながら四肢はすらりと引き締まっており、パフスリーブではないシンプルなドレスをさらっと着こなしている。

ジャンヌの方はまっすぐな金髪に薄い翠色の瞳。同じ金髪なのでシャルロットに似ているかと思えば、顔立ちがきりっとしていて下手するときつく見えそうなタイプ。アンリエットもわりとそのタイプだが、顔立ちはどこか俺に似ているかもしれない。

ともあれ。

並んでカーテシーを披露した俺たちにアンリエットはにっこりと微笑んで、

「初めまして。会うのを楽しみにしていたわ。さあ、座って頂戴」

「ありがとうございます。では、失礼いたします」

並んで座っている二人の向かいに腰かける。俺がアンリエットの前で、シャルロットがジャンヌの前だ。

城のお仕着せとはタイプの違う、フリルやレースが多めの衣装を纏ったメイドが紅茶を淹れてくれる。香りが普段飲んでいるものとは少し違う。
「お嬢様方、ブランデーはいかがですか？」
「止めておくわ。まだお酒は飲めないから」
「残念ね。香りが立って美味しいのだけれど」
アンリエットが残念そうに言って自分の紅茶には入れてもらっている。ジャンヌのカップにも二、三滴が垂らされた。
ブランデーは隣国――ソレイル王国でメジャーな酒だ。そのためか紅茶に入れるのも一般的な飲み方らしい。
「じゃあ、お菓子ならどうかしら」
「これは、チョコレートですね」
お茶請けに出されたのは焦げ茶色をした、それぞれに形の違ういくつもの菓子。ホストの二人が口にするのを確認してから一つ口に入れると、良く知っているあの甘みと苦みの後、とろりとした液体が舌の上に乗った。口の中が熱くなる感覚。似たようなものは前世で何度か口にしたことがある。入っている量としては大し

たことないはずなのに結構「来る」のも変わらずだ。
俺は慌てているように見えないよう気を付けながらカップを傾け、酒の風味に紅茶の風味を混ぜ合わせた。
隣でシャルロットが多めに紅茶を含んでいる。
「お味はいかが？」
「初めていただきましたが、素敵な趣向ですね。ほんのりと身体が熱くなって楽しい気分に包まれる感覚です」
「そ、そうですね。紅茶とよく合うと思います」
「良かった。……シャルロット、お茶のお代わりは十分に用意してあるから遠慮なく味わって頂戴」
「はい。ありがとうございます、アンリエット様」
こくんと頷き、カップに残った紅茶を飲み干すシャルロット。
暗に教えてもらった通り、このチョコレートはつぎつぎ口に運ぶようなものではなく、ゆっくりと口の中で溶かしながら飲み物と一緒に味わうべきだ。紅茶はもちろん、ワインにも絶対合うと思う。

俺やシャルロットのようなお子様の場合、飲み物が紅茶でも酔いかねないから注意が必要である。

こんなことならヴァイオレットの家同様、以前から少しずつ慣らしておくべきだったか。

『でも、本当に悪くないわね、この感覚』

ほんのりとぽかぽかして気持ちがいい。調子に乗ってもう一つ食べたくなるが、酔って思考が乱れるようなことになれば目も当てられない。できるだけペースは落としておく。

アンリエットは俺たちの様子を観察しながらふっと笑って、

「リディアーヌはいける口かしら。ソレイルの王族は男女問わず酒豪が多いのよ」

「アンリエット様もお酒を好まれるのですか？」

「ええ。私の実家も何度か王家の血が入っているもの。私よりも直系に近い貴女もきっとこの味に夢中になるわ」

事もなげに紡がれた開幕の合図に、シャルロットが小さく肩を震わせる。

俺としても、もう少し雑談が続いた後、搦め手を使って本題を進めてくるかと

思っていたが。

「お二人から見て、わたしはソレイル王家の血統ですか？」

相手がその気ならこちらも応じるまで。直球で尋ねると「ええ」と首肯された。

「間違いなくソレイル王家の系譜よ。ねえジャンヌ？」

「はい。肖像画で見たかつてのロクサーヌ様によく似ています」

「ロクサーヌ様というと、ソレイル王国の第二王妃様……あ、ええと、元第二王妃様ですよね？」

「そう。亡くなられた元第二王妃ロクサーヌ様――紅の髪と瞳を持ったソレイルの至宝よ」

リヴィエール王国において金と白が尊ばれるように、ソレイルでは赤と黒が尊い色とされている。

「リディアーヌのような目に映える色の紅は特に貴重なの。高位貴族の男はたいてい赤毛の女を好むから、きっとソレイルなら引っ張りだこでしょうね」

「わたしの母も親世代の間でとても人気だったと聞いております」

「アデライド様が若くして亡くなられたのはとても残念だわ。早いうちに陛下の耳

に入っていれば王女として最上級の待遇を用意できたでしょうに」

母の血筋について先んじて発表した効果はあったようだ。教国のお墨付きまで付いている以上、王家の血筋ではないととぼけることはできない。

「母は詳しい身元が不明のまま辺境伯家に拾われたと聞いております。預けられた家でも愛情を籠めて育てられたそうですから、十分に幸せだったのではないでしょうか」

「そうね。王女として遇されたとしても、水や食事が合わなかったかもしれないもの」

生まれたばかりの母が何故、この国の貴族へ託されたのか。

きな臭い事情を思い浮かべずにはいられない。普通にしていたら幼くして暗殺されていた可能性だって十分にある。

アンリエットが小さく「話が早くて助かるわ」と呟く。同じテーブルについている俺ですら聴覚を強化していないと聞き逃してしまうような声量。

顔を上げた彼女は俺をじっと見つめて尋ねてきた。

「知っていて？　ソレイルの現国王陛下は王家の血があまり濃くはないの」

「知識としては見聞きしております。先王陛下から深い寵愛を受けられた結果だと」
「その通りよ」
現ソレイル国王の母親は先王の第三夫人だった。
彼女は伯爵家出身と決して高位の貴族ではなく、髪や瞳の色も伝統色からは外れていたものの王からの寵愛を一番に受けていた。
そんな彼女との間に儲けられた男の子を王は当然のように溺愛し、当然のように王太子に指名してしまった。親馬鹿な上に妻にも全く頭が上がっていない。一国の主がそれでいいのかと言いたいが、まあ、あんまり良くなかったわけである。
「反動もあって、現陛下は王家との関わりの深い家から妃を選んだわ。少しでも王家の血を取り戻そうとね」
近親婚を繰り返しでもしない限り血なんて少しずつ薄まっていくのが当たり前なのだが、伝統を重んじる老人たちにとって血の維持は重要事項。
また「王家の権威＝古い血をどれだけ守っているか」であると信じているやっかいな国――すなわち教国の存在もある。貴族たちからの支持を得るためにも王は血の保存を優先しなければならなかった。

しかし、父親が固定されている時点で生まれて来る子の血の濃さには限界がある。

「ロクサーヌ様は特に血の継承という観点から望まれた妃だったらしいわ。けれど、生まれてきた子は悉く父親似だった。……もしかしたら、ロクサーヌ様はその事に業を煮やしたのかもしれない」

次代の王をより血の濃い王にするにはどうしたらいいか。

答えはある意味簡単だ。

王家の血を濃く引き継ぐ男との子を王との子だと偽って産み、育てればいい。ソレイルにも魔力測定の魔道具はあるだろうから、王が血の濃さを真に重要視しているのならその子が後継者となるだろう。

つまり。

『お母さまがこの国へ流されたのは男の子ではなかったから。もしくはロクサーヌさまの企みが誰かに露見してしまい危険が生じたから、なのかしら』

乱入者

「母がこの国に逃れたお陰でわたしが生まれた。わたしにとっては有難い話ですが、ソレイル王国にとっては痛い誤算なのでしょうね」
「……そうね。けれど、悪い事ばかりではないわ。我々は貴女が生まれてくれた事を類稀な幸運と考えているわ」
向かい合って座ったまま、互いに声を荒げることもなく会話を続ける俺たち。それでもやはり単に和やかな話し合い、というわけにはいかない。
小さく唾を呑み込んだシャルロットが恐る恐る口を挟む。
「お姉様に何を期待していらっしゃるのですか？」
「悪い話じゃないから安心して頂戴。ただ、お願いしたいことがあるだけ」
義妹の声には若干の棘があった。
貴族はたとえ兄弟姉妹であっても運命共同体とは限らない。アンリエットはシャルロットが俺と協力体制にあることを理解したはずだ。たかが他国の令嬢一人とはいえ、本当に俺へ『お願い』をするつもりなら強硬な手段は避けたいはず。

間をもたせるようにカップが傾けられ、それから言葉が続けられる。
「単刀直入に言うわ。リディアーヌ、どうか私達を――」
「お待ちください、現在は来客中です！」
「黙れ！　いいから中へ入らせろ！」
部屋の外からの声がアンリエットの『本題』を遮った。
隣国の第一王妃となった若い女は苦笑を浮かべて言葉を切った。
どうやらいいところで邪魔が入ったらしい。護衛として立つモニカは既に剣へと手をかけているが、それをアンリエットが制した。
「荒事の心配はないはずよ。……あいつらも王族だから下手な対応は避けなさい」
「ご忠告、感謝いたします」
聞こえてきたのは男の声。ということは相手は一人しかいない。
ここまで大人しく話を聞いていたジャンヌがため息をついて俺たちへ告げてくる。
「グレゴール殿下はレティシア殿下によく似ていらっしゃるから、気を付けた方がよろしいかと」

ばん！　と音を立てて扉が開き、メイドの制止を振り切るように一人の男が入ってきた。

角ばった印象のある厳めしい顔つき。身体も筋肉質かつ大きい。服や腰にさした剣にはソレイルの紋章が入っており、彼がやんごとなき身分であることを証明している。

彼の後からはいかにもきつそうな目つきをした女性が入ってきた。男は三十代、女は五、六十代といったところか。

俺は慌てて立ち上がって跪く。シャルロット、ジャンヌも同じだ。

「グレゴール・ドゥ・ソレイル殿下、ならびにレティシア・ドゥ・ソレイル第二王妃殿下とお見受けいたします。お初にお目にかかります。わたしはリディアーヌ・シルヴェストル。リヴィエール王国宰相ジャン・シルヴェストルが長女でございます。両殿下におかれましてはご機嫌麗しゅう――」

「抜け駆けとはいい度胸だな、アンリエット！」

応えるどころか俺の挨拶が終わるのも待たず、太い声が応接間に響き渡った。

顔を上げられないまま俺は事の成り行きを待つ。

「あら。客人の応対中に乗り込んでくるなど、そちらこそ失礼が過ぎるのではありませんか、グレゴール様？」

明らかに怒っている男――ソレイル王国の王子グレゴールに対し、アンリエットの声は静かだ。しかし、堂々と言い返しているあたり一歩も引く気はない様子。

靴のヒールが床の絨毯を叩く衝撃がかすかに伝わる。

「私達を差し置いてリディアーヌ・シルヴェストルと会おうなどと邪な策を講じるからです。七番目の王妃としての分を弁えなさい、アンリエット」

第二王妃レティシア。

「これは失礼をいたしました、レティシア様。……ですが、シルヴェストル家の両令嬢を呼んだのはドレス等の買い付けを手伝ってもらうためです。お二人は買い付けにこられたわけではなかったと記憶しているのですが、私の勘違いでしょうか？」

「ふん、白々しい嘘を。どうせこの小娘に良からぬ事を吹き込むつもりだったのでしょう？　陛下をどうやって誑かしたのか知らないけれど、子を授かる見込みがないからと他所から手に入れようとするなどと――」

『あら？　なんだか大事なことをぺらぺら喋ってくれているわね、この人』

どうやら両王妃は仲が悪いらしい。それはそうだ。年齢から言っても圧倒的に格下だった娘が自分を差し置いて正妃に選ばれてしまったのだから。

位から言えば今はアンリエットの方が格上。グレゴールもレティシアも敬語を使うべきなのだが、染みついた習慣は簡単に変えられない。何よりプライドが許さない。

その上、俺の扱いでも何やら対立している雰囲気。

大方、アンリエットにしてやられないよう強引に同行を決定したのだろう。

なおも２ｖｓ１での言い争いを続けた後、レティシアは急に俺たちへ向けて言った。

「いつまで跪いているつもりかしら。さっさと退席しなさい」

『いや、少なくともこっちの国じゃ、王族が「面を上げよ」って言うまで跪いているのが当たり前なのよね』

心中で毒づきつつ顔を上げ、侮蔑の表情を浮かべる第二王妃と顔を合わせる。

「お言葉ではございますが、アンリエット殿下から受けた招待でございますのでご

命令に応じるわけには――」

「うるさい！　礼儀知らずの小娘は黙りなさい！」

今度は高い声が室内に響く。なるほど、確かに良く似ている。

姿勢を崩さず顔だけ上げたまま口を噤むと、グレゴールの舐めるような視線が俺の全身を撫でた。

「面倒だ。母上、さっさと用件を済ませてしまいましょう。これなら母体としては十分でしょう」

「ああ、そうね。グレゴールが気に入ったのなら良かったわ。そのためにこの国までやって来たのだもの」

似たもの親子が俺を見下ろす。アンリエットが何かを言おうとしたが、二人分の眼光を受けて黙った。

「リディアーヌ・シルヴェストルに命じる。俺の妻となってソレイルのために奉仕しろ。それが尊い血を受け継いだ者としての使命だ」

「グレゴール殿下！　恐れながら、それはあまりに横暴かと――」

「黙れ、ジャンヌ・バタンデール！」

抗議の声を上げたジャンヌも一喝されて口を閉ざしてしまう。
仕方ない。臣下である以上、不敬を続ければ罰せられる可能性もある。自分だけの処分ならともかく家の評価をも背負っているのだから下手なことはできない。
だが、
「グレゴール殿下。立ち上がる許可をいただいてもよろしいでしょうか？」
「うむ。許そう」
許可をもらって立ち上がってから、何十センチも身長の違う三十路男の前に立ち、カーテシー。
「お初にお目にかかります。リヴィエール王国宰相ジャン・シルヴェストルが長女、リディアーヌと申します。両殿下におかれましてはご機嫌麗しゅう――」
「挨拶は既に済ませただろう。何故もう一度続けるのだ」
「先ほどのご挨拶はどうやらお耳に入らなかったようでしたので」
姿勢を正した俺はにっこりと微笑んで彼に告げた。
「わたしはリヴィエール王国の貴族であり、第三王子リオネルさまの婚約者です。王命による婚約を自分の意思で違えることはできませんし、自国の利益を考えれば

おいそれと他国へ嫁ぐことはできません」

平たく言うと『何で別の国の王子様が偉そうに命令してくるのかわからないんだけど？』ということである。

これにかちんときたのか、グレゴールは額に青筋を浮かべて、

「不敬だぞ。この場で斬り殺されたいのか」

剣の柄に手がかかる。

『へえ、ふーん？　そんなことするのね？』

「アンリエット殿下。お伺いしたいのですが、城の離れを借り受けるにあたって武器の使用に制限はかけられなかったのでしょうか？」

振り返って尋ねると即座に答えが返ってくる。

「もちろん、当日中に誓約書を交わしたわ。帯剣を許されるのは護衛およびグレゴール様のみ。その上で、くれぐれも自分から騒動を起こす事の無いようにと言われているわ。攻撃の意思ありと判断した場合、リヴィエール王国側は独自の判断で対応する、とね」

「では、グレゴール殿下がわたしを前に剣を手にした時点で、わたしとモニカには

応じる権利がありますね」
「騎士が剣を抜き、あなた自身も魔法を準備するくらいは仕方ないでしょうね」
「なっ」
許可が出た瞬間にモニカの剣が引き抜かれる。
照明と陽光を反射して輝く刃にメイドたちが悲鳴を上げた。
ソレイル側の護衛たちもまた色めき立つが、彼らは対応に迷うように視線を彷徨わせながら立ち尽くしていた。これに憤ったのは似た者親子。
「何をしている！　早くこいつらを叩き出せ！」
「ソレイルの騎士たる者が何という体たらくなのかしら！　ほら、さっさとグレゴールの命令を聞きなさい！」
「しかしながらレティシア殿下。自衛を咎めて武力を行使すればこちらが非を背負う事になります。国際問題ともなれば陛下の心労ともなるかと」
ちっ、と、グレゴールが舌打ち。
「使えない奴らだ。ならばこの俺自ら立場の差をわからせて――」
「よろしいのですね？」

「っ!?」
「離れの中にいる我が国の戦力はモニカ一人。対してソレィルの騎士は大勢います。その状況で殿下が剣を抜かれれば、わたしは身を守るために全力で抗うしかありません」
「私が証人になりましょう。先に仕掛けたのはグレゴール様の方だった、とね」
『だ、そうだけど？』
アンリエットはなんだか楽しそうな表情である。さては、グレゴールたちの失言を引き出すために途中でわざと反論を収めたな？　お陰で矢面に立たされてしまったが、騎士たちが従わなかったあたりグレゴールたちの横暴さは広く知られているのか。
「……ぐ。口だけは回るようだな。仕方あるまい。こちらとしても手荒な真似は本位ではないからな」
『こら。ちょっと。謝りなさいよそれでも男なの？』
「モニカ」
「はっ。……皆様には失礼をお詫びいたします」

グレゴールが剣を離し、モニカが剣を収めたことで騒ぎは収束。
いっそのことさくっと始末してしまった方が世のためだったかもしれないが、そこまでするには先に向こうに一太刀くらい許さないといけない。さすがにそれはなかなか危険というものである。
ともあれ、こういう時に強気で行ってもOKなのは悪役令嬢の特権。
「グレゴール殿下。わたしに求婚いただくにはリオネルさまとの婚約を解消する必要があります。前もって陛下と交渉を行っていただき、婚約解消の許可を取り付けてくださいますでしょうか。そうでなければこちらとしてはなんの返答もできかねます」
「許可が出れば俺の嫁になるんだな？」
「両国にとって利益となる有意義な条件を提示いただければ、喜んで」
にっこりと微笑んでやると、強面の顔に再び青筋が浮かんだ。
しかしこちらは何も変なことは言っていない。
レティシアがため息をついて、
「こんな子供、第二夫人以下だとしても願い下げよ。グレゴール、女なら私がいく

らでも見繕ってあげるから止めておきなさい」
「第二夫人以下？」
小さくシャルロットが呟く。礼儀正しく、依然として跪いたままの彼女。背を向けているのもあって表情は見えないが……なんだか、今まであまり聞いたことのないような低い声音だったような気がする。
グレゴールは気づかなったのか、ふん、と鼻を鳴らして、
「アンリエット。これとはまだ何も話をしていないのだな？」
「ええ。交渉については全てこれからです、グレゴール様」
「ならばいい。……リディアーヌ・シルヴェストル。俺の申し込みが先だという事を忘れるなよ」
そうして、来た時と同じく乱暴な態度でグレゴール、レティシアは去っていった。
扉が閉じてから十数秒。嵐が去ったことを確認すると、護衛の騎士も含めた全員が安堵の息を吐いた。全員の心が一つになった瞬間である。
「怖い思いをさせてごめんなさい。……まあ、正直面白いものが見られて私としては楽しかったけど」

ようやく立ち上がったジャンヌが堪えきれないというようにくすりと笑った。
「さっきの話はまた今度にしましょう。今日のところは本題を進めさせてもらえるかしら？」
「喜んで」
服飾関係の買い物に伴う商人への仲介依頼。これについては情報さえ持って行かれなければ譲歩する用意がある。
おそらく俺たちの心証に気を遣ってくれたのだろう。和やかなままに話し合いは終わったのだった。

隣国からの要請

「お姉様が第二夫人以降だなんておかしいと思います……！」

帰りの馬車内にて、義妹は珍しく本気でご立腹だった。

頬を膨らませてぷんぷん怒る姿はとても可愛い。相手が特にひどかったとはいえ他者に悪意を向けられるようになったのもある種の成長だろうと思いつつ、この子に怒った顔はあまりさせたくないとも感じた。

宥めるためにも苦笑を浮かべて俺は応じる。

「あの歳だもの。夫人の一人や二人いるでしょう。そこまで不思議な話でもないわ。……正直『馬鹿なの？』とは思うけど」

「お姉様だっておかしいと思っていらっしゃるのではありませんか」

まあ、そりゃあ、あいつ馬鹿王子丸出しだったし。

「この国からだとどうしても情報の精度が心配だったけど、思った通り、向こうの王家は相当混沌としているみたいね」

「現国王陛下の在位期間が長すぎたせい……ですか？」

「ええ。七十歳というご高齢にあって未だ王位にあるせいで王族が増えに増えているみたい」

一番上の王子なんか五十近いらしい。

当然、王子にもそれぞれ妻と子供がいる。血の繋がりを基本とした派閥が形成されるのは自然の流れであり、利害が対立している以上、マウント合戦も激しいだろう。

「どうしてもっと早く王位を継承しなかったのでしょう」

「さあ？　王位を譲りたい子供がいないからとか？」

「お姉様、さすがにそれは失礼かと……」

シャルロットの言う通り、実際はそこまで単純でもないだろう。どうしても自分で成し遂げたかった政策があったのかもしれないし、単に権力が惜しかったからかもしれない。

ただ、グレゴールたちの醜態を見てしまった今、あながちありえない話でもない気がする。

「誰に王位を継がせるかってすごく難しいわよね。一人しか選べないうえに取り返

しがつかないじゃない？」

「先王の思想が引き継がれない事も歴史的に珍しくないのですよね……」

うちの国にしても現国王は安定路線だが、アルベールとリオネルは別の思想を抱いている。

彼らに関しては（少なくとも見える範囲では）全員国を良くしようと考えているからまだいいが、歴史を紐解けば単に「王様になってやりたい放題やってやるぜ！」とやった王もそう珍しくはない。

好き放題やりたい奴に限って外面は良かったりするので油断はできない。在位期間が長くなればなるほど慎重になり、継承の機を逃してしまうということもある。

「とりあえず、グレゴール殿下には王になって欲しくないわ」

「ええと、それはその……正直、私もそう思います」

しかし、もちろん第二王妃レティシアとしては我が子を王にしたいはず。子の中でも一番見込みがある（言う事を聞いてくれる？）のがグレゴールだからここへ連れてきたのだろう。

あの男が王家の血を濃く引き継いでいるぽっと出の娘――つまり俺を妻とした場

合、果たしてどの程度可能性が高まるか。

『もし国王が血の濃さを気にしているのだとしたら、結構大きく変わるかもしれないわね』

後日、グレゴールやレティシアから狩りやお茶会への招待が届いたが、とりあえず全部お断りした。

王子殿下の乱行については俺からも上層部に報告、包み隠さず伝えた上で対応をお願いした。

幸いアンリエットが公正な立場を取ってくれたので話はすんなりと終了。リヴィエール王家からソレイル王家へ正式な抗議が行われた上、グレゴールの帯剣は禁止に。さらにお詫びという形を取って多少の金銭的賠償が行われることとなった。

お詫びの品は俺が要望していいということだったので「カカオの実とチョコレートの製法をください」と言っておいた。

さすがに今は持っていないし量が多くなるからとこれは後日送られてくることに。これを機にこの国でもチョコ関連の菓子作りが発展したらいいと思う。

「リオネルさま。暖かくなってまいりましたし、本日は剣術などいかがですか？」

色々とごたごたしていたのもあってこのところリオネルとの面会は間隔が空きがちだった。

一か月と少しぶりに彼の部屋を訪れ、剣術着の用意があることをアピールすると、意外にもお子様やんちゃ坊主の王子様は「いや」と首を振った。

「止めておこう。それよりチェスでもどうだ？」

「チェスなら前回もいたしましたが……もしかしてリオネルさま、どこか具合が悪いのですか？」

傍に立つセルジュへ視線をやると「私の口からはなんとも」とでも言うような曖昧な笑み。

深刻な話なら教えてくれるはずなのであまり心配はないのだろうが……俺は席を立って婚約者へ近づこうとして、身を庇うような彼の動きに足を止めた。

「馬鹿者。……女なのだから少しは自重しろと言っているのだ」

「リオネルさま？　もしかして悪いものでも食べられました？」
「食べていない！　俺だって成長している。色々考えるところもあるのだ！」
ふむ。
若干言い訳めいてはいたものの、嘘ではなさそうな言葉にひとまず納得して席に戻る。
じっと正面から見つめてやると頬を染めて視線を逸らすリオネル。
なんというか、このところ少々様子がおかしい。思い返してみると前回チェスをした時も会話がぎこちなかったような気がする。
俺は俺でセリアの件やら隣国の件やらルフォール侯爵夫人による閨の教育があったりして色々考えることが多かったので若干そわそわしていたのだが。
『ははあ。もしかして「そういうこと」かしら？』
ひとつの推測にたどり着いてにやりと笑う。
「もしかしてリオネルさま。恥ずかしがっていらっしゃいますか？」
「なっ!?」
目を見開いて俺を見返してくる王子様。

「何の根拠があってそんな事を言っている」
「いえ。先ほどからのご様子を見て、わたしと身体的距離が近づくのがお嫌なのかと思いまして。違うと仰るのでしたらそれで良いのですが」
ちらり、と、だんだんと膨らんできている胸に目をやって、
「ねえアンナ、そろそろ剣術着も新調する頃かしら。ドレスと違ってサイズに余裕があまりないものね」
「そ、そうですね。男性の衣装に近いデザインですから、お胸やお尻はきつくなりやすいかと……って」
はっとしたアンナが口をつぐむ。見ればリオネルが頬を赤く染めながら黙り込んでいた。
これは、ビンゴか？
要するに王子様もお年頃ということである。男子だった経験のある俺としては不思議な話でもない。年頃を迎えても紳士なのが変わらないうちの兄の方が希少種なのだ。いくらリオネルと言えど女子にドキドキしたりして当然。
『ヴァイオレットのお母さまからも色々教わっているしね』

さすがにルフォール家の秘伝については教えてくれないものの、夫人の教え方はなかなかに実践的かつ具体的だ。セレスティーヌの方針でもあるのかもしれないが、恋愛においても閨においても女が男を転がしてうまく操るべし、という思想が根本にある。

男の衝動的な欲望なんぞに身を任せていたら身体がいくつあっても足りないから自分でなんとかしろ、というわけだ。実に正しい。

俺はわざとらしく目を伏せて、

「格好良く誘っていただければ、わたしとしても逢引きに応じるのもやぶさかではないのですが」

リオネルは気を取り直したように「ふん」と笑って、

「今更お前とそんな事ができるか。……挑発に乗るとも思うなよ。俺はもう子供ではないのだ」

「？　子供じゃない、とは？」

「それは」

セルジュが「いけない」という顔をする。話の流れで素直に口を開いたリオネル

は言わなくていいことまでしっかり喋った。
「ミュレル侯爵夫人が私の教育係についたのだ。彼女から色々と手ほどきをしてもらったお陰で世界が変わった。そのせいか、お前の我が儘も可愛く見える」
「へえ、そうですか」
王家の親戚筋の出で早くに夫を亡くした女性だったか。子育てや家の切り盛りという義務を持っている一方、操を立てるべき相手は既にいないというちょうどいい相手。
淑女教育同様、紳士教育も義務だ。
しかし、そういうことをわざわざ口に出すんじゃない。普通の令嬢だったら泣いて「もう婚約やめます！」とか言い出してもおかしくないぞ。
俺は笑顔で頷いて、
「リオネルさま。本日は盤上演習にいたしましょう。日頃から賽を振って運を消費しておくべきです」
「構わんが、よくわからない理由だな」
演習の流れは適度に国土を富ませつつノリノリで攻めてくるリオネルに対し、防

戦に徹しながら資源・物資の拡充を狙う俺という構図になった。
　最初はこちらが劣勢だったが、敵地に間諜を送り込み相手の戦力を把握、主要都市で毒を撒く作戦が成功したことで一気に形勢逆転。反撃に出たこちらの軍は次々と相手の都市を制圧していった。
「……おい。お前、ひょっとして怒っているのか？」
「まさか。ただ少し完勝を狙いたくなっただけです」
「やっぱり怒っているんじゃないか」
　咎めるように見つめてくるリオネル。顔に出さないようにしていたのにそれを察せるあたり確かに進歩している。
「言っておくが、あくまで教育だぞ。それに」
「それに？」
「お前との婚約だってこのまま続くかわからないだろう」
　なんでも、グレゴールが俺とリオネルの婚約を解消させるよう王に嘆願したらしい。
　答えは当然No。話にならないとばかりに打ち切りになったらしいが、それでも、

他国の王族なら要求する権利はあるのだと思ったらしい。
「グレゴール殿下に求婚されてもわたしは逃げますよ」
「なら、もっと良い相手ならどうだ？」
「相手の好みと出された条件次第ですね」
「お前、そういうところだぞ」
さらに睨まれた。しかし、そんなことを言われても正直困る。
「わたしが色恋に興味を持たないのは良く知っていらっしゃるでしょう」
「ああ、知っている。知っているが、俺だけ余計に悩まされるのは不公平だ」
『あら？　それはわたしを手放したくない、ということかしら』
もう少しからかってやろうかと俺は王子の瞳を見返して、
「リオネルさま？　わたしは色恋に興味がありませんが、あなたを好いていないと申し上げたことはありませんよ？」
「は？　……ちょっと待てお前、それはどういう事だ」
言うだけ言ってダイスを振りだした俺を立ち上がってまで咎めるリオネル。彼の手が俺の手首を掴もうとしたところでセルジュの咳払い。

仕方なさそうに席に戻った彼に俺は微笑んで告げた。
「ご存じありませんでしたか？　女というのはずるい生き物なのですよ」
騙しているつもりはない。告げたことは全て本心だし、俺の方針もはっきりと表明している。
しかし、俺はふと前世で出会った嫌な女たちのことを思い出した。目的のためなら恋や結婚さえも手段にする。そういう意味では似たようなことをしているのかもしれない。
笑みに自嘲の色が交じるのを感じながら続けて告げる。
「お互いに最善の方法を考えましょう。わたしたちには課せられた義務があるのですから」
王子は若干苦々しい表情で頷いた。
「……そうだな。俺も、俺のために何が必要かもう一度考え直すとしよう」
「ここでならゆっくり話ができそうね」

ソレイル王国第一王妃アンリエットと姪のジャンヌがシルヴェストル公爵家へとやってきた。

先日打ち合わせた商人とのつなぎの件だ。

屋敷には我が家と繋がりのある商人を併せて招き、直接買い付けや注文をしてもらった。ただし、ナタリーを含む職人は呼んでいない。商人が拠点を移すのは手間がかかるが、職人は引き抜かれてしまう可能性があるからだ。

ただし、ファスナーなどの新しい服飾部品は単体での購入も許可した。

もちろん売るのは本人や家族の分くらいまで。本格的な輸入に関しては国家間の交渉になる。特にファスナーは国内にも十分な数が行き渡っていないくらいだ。

……と、そんな用事を十分に済ませた上で、以前の面子にセレスティーヌやアランを加えて向かい合う。

「たとえ他国の要人であろうと、無理に屋敷へ押し入ろうとする者は敵対者とみなします。よほどの事がない限り介入は避けられるでしょう」

セレスティーヌが保証し、カップに手をつける。

アンリエットはひとつ頷いてから話しだした。

「これから話す事は極秘事項よ。話が進むまで誰にも話さないで欲しいの。良いかしら」
「決して口外しないと誓います」
盗聴防止は念入りすぎるくらいに用意してある。それほどまでに用心して話される内容とは、
「リディアーヌ。貴女に我が国へ嫁いで欲しいの」
「……それは」
一瞬反応が遅れる。
予想していなかったわけではない。ただ、現実的には「我が国」ではなく「我が国の誰々」が相手だと思っていた。
人物名を省かれたということは、
「陛下がわたしを第八王妃としてご所望だと？」
「いいえ。陛下は貴女を正妃として迎えたいとお考えよ。もちろん私も同じように考えている」
入れ替わったばかりの序列を再度変更するつもりか。なんとも思い切った采配で

ある。

　アランどころかセレスティーヌまで目を見開いていることからもことの重大さがわかる。

「わたしを王族として――たとえばアンリエットさまの養子として迎えるのではなく、この国の貴族という身分のままに陛下へ嫁がせてくださると？」

「ええ。……もちろん、正妃に迎えられるとは言っても『八人目の王妃』には違いない。しかも、子を成す事のできない清い結婚になる。良い条件とばかりも言えないでしょうけれど」

　隣国の正妃はちらり、とシャルロットを見てから続けて言った。

「公爵家、および王家への謝礼以外に、リディアーヌ個人にも謝礼を付けるわ。ソレイルの玉座を貴女にあげる。その代わり、国の改革に協力して欲しいの」

隣国正妃の願い

「陛下はご高齢よ。特別な病を患ってはいないけれど、おそらくもう長くはないでしょう」

この世界は前世に比べると医療が発達していない。

怪我は魔法で治せるが、七十ともなると身体自体ガタが来ているはず。ちょっとした弾みでころっと逝ってしまってもおかしくない。

「継承順位の付け方はソレイルもほぼ同じ。直系の男児が最優先――つまり、陛下が亡くなった場合は通常、第一王子殿下が王となるわ」

五十代の新王誕生である。

正直、どうせならもうちょっと若い奴にしないかと思う。

「ただし、例外がある。王からの指名があった場合はそれに従うの」

「陛下がわたしを後継者に指名してくださる、と？」

「陛下はもしもの時のために遺言書を作っていてね。それは彼の死後に表へ出るようしかるべき形で保管されているの」

遺言書には暗殺防止の効果もある。

誰が後継者かわからなければ「親父を殺してさっさと王位を奪うぜ！」とはやりづらい。

「もし、リディアーヌが嫁いでくれるのなら新しい遺言を作る用意があるわ。併せて、婚姻が成立し次第陛下からの指名も行う」

ここでセレスティーヌが静かに確認を取る。

「ソレイル国王の意向を証明する手段はお持ちでしょうか？」

「玉璽の押された直筆の書状を預かっているわ。本人の了承が取れればこちらの国王陛下へお渡しして正式に交渉を行うつもりよ。もちろん、会談の場には同席してもらっても構わない」

書状の内容とアンリエットの発言に食い違いがあればそれを国王に伝えて「わたしは嫌です」と表明すればいい。ここまで言った以上、嘘は含まれていないと考えていいだろう。

「……血の保存、というのはそこまで重要ですか」

「少なくとも陛下はそうお考えよ。教国の公認もあるとなれば裏付けも十分でしょ

う」

他の王妃や王子たちとしてはたまったものではないだろうが、簡単に異議申し立てが通るようでは王位継承ルールを定めた意味がない。

後継者がぽっと出の小娘であっても手続きは行われる。

「陛下はご高齢。子を成すどころか行為すらままならない。リディは清いまま王位を継承し、あらためて夫を選べばいい――というわけか」

「歳の差のある結婚をお姉様が強要されるわけではないのですね」

むしろ女王を望むくらいだ。俺には清いまま婿を取って血の濃い子供を残してもらわないといけない。国王は積極的に俺を守ってくれるだろう。

隣国国王が現在病床でないのなら地盤固めの時間はある程度取れる。

女王という地位が手に入れば俺個人ではなくソレイル王国そのものを使って各国の軍拡に釘を刺せる。

『魔道具兵器の開発ではなく騎士の育成に力を入れればいいのよ。わたし自身が手本になって一騎当千の騎士が何人も生まれれば流れも変わるでしょう』

自国の血を引いているとはいえ他国の王族内定者をもらい受けるのだから国や家

への謝礼・賠償も相当なものになるはずだ。
その内容に応じて先方の本気度がわかるし、こちらとしては割に合わないと思えば断ればいい。
美味い話だ。
美味い話すぎて怖い。
「ソレイル王国がリヴィエール王国に乗っ取られる危険もあるかと存じますが」
「貴女がリヴィエールの血統を本流とするようなら今度は教国が敵になる。国内に反対派を抱えたままあの国と戦うのは愚策よ」
二対一のような構図になるとはいえ、純血派やら反対勢力に妨害されたら戦力はがた落ちだ。国内が二分した挙句仲間割れで自滅することにもなりかねない。
「もし、それでも貫き通す覚悟があると言うのなら私は歓迎よ。古い体制なんて一度根本から叩き壊した方がいいのかもしれない」
「女王の即位は新体制を強調するのにちょうどいい象徴ですね」
「ええ。優秀ならば子供でも女でも王になれる。権力にあぐらをかいていた男達は泡を喰うでしょうね」

そこまで言うということは、
「アンリエットさまの望みはなんですか？　お金？　権力？　それとも――」
「国の繁栄よ」
きっぱりとした口調で返答が来る。
「残念な事に、我が国の王族にはくだらない人間が多すぎるの。陛下は善政を敷いているけれど、このままでは国が腐ってしまう。そうなる前に荒療治で膿を取り除きたい」
『実例を見せられたお陰で納得してしまうわね……』
うちの国の王子はシャルルもアルベールもリオネルも真っ当な人間だ。思い余って行き過ぎることがないとは言い切れないし、王になっても欲にかられることがないとも言えないが、少なくとも王子である現状で横暴な人間だったりはしない。
グレゴールみたいなのが複数いて、そのバックにレティシアみたいなのがそれぞれついているのだとしたら……少々『大掃除』をしたくなってくる。
「わたしが未成年で王位継承したとして、その後見人となるのはどなたでしょうか？」

「ソレイルの貴族と養子縁組を行わず直接嫁入りを行う以上、貴女には国内に縁者がいないわ。だから、貴女の王妃教育および継承後の支援については私が担当しましょう」

「なるほど。アンリエットさまにとっても利のあるお話というわけですね」

「一方的にうま味のある話よりも納得しやすいんじゃないかしら？」

「ええ、その通りです」

つまり、王とアンリエットが結託したのは利害が一致したからだ。

他の王妃や息子たちでは「他国の貴族に王位を継がせる」なんて世迷言に賛成してくれないので彼女に話が回ってきただけのこと。

グレゴールたちが妨害しようとしてきたように、他の王族――というか、ソレイル国内の大多数がこの話に反対すると見ていい。

美味い話だけでは終わらない。だからこそ真実味がある。

「あの。でも、お姉様とリオネル殿下の婚約はどうなるのですか？」

「もちろん、婚約は解消してもらうことになるわ。それについては話し合ってもらうしかない。こちらにできるのは少しでも良い条件を提示することだけよ」

これに、シャルロットとアランが黙った。
真っ向から否定もできないものの、すぐには納得できないといった様子。
「私としては大歓迎ですわ。リディアーヌ様とは話が合いそうですもの」
「ジャンヌさま」
「ジャンヌで構いませんわ。ねえ、リディアーヌ様？　グレゴール殿下のこと、どう思われますか？」
「……そうね、あの四角い顔を一発殴ってみたいとか？」
「まあ素敵！　いつか実現してくださいませ」
いや、さすがにそんな日は来ないだろうが。
ジャンヌは見た目の印象以上にはきはきと喋るうえ、性格が割と過激だ。普段から護身用に体術や剣を習っているらしく、アンリエットは「近親者の中ではこの子が一番私に似ているの」と自慢するように言っていた。
「ともあれ、この場での相談はあくまでリディアーヌの意思確認よ。陛下からの了承が下りるかどうかはまた別の話」
先に俺へ話を持ってきた、という点ではグレゴールたちと同じであるものの、ア

ンリエットのこれは横暴ではなく事前の根回しだ。先に国王の承認を得てしまうと俺の気持ちがスルーされてしまうし、俺に聞いた時点で「ノー」が出たら話をなかったことにもできる。

要は許せるか許せないかの違いではあるものの、重要な違いだ。

「どうかしら、リディアーヌ。受けてくれるのなら私は後見人として、そして臣下の一人として貴女に尽くすわ。……生まれ故郷でもない国のために尽くしてもらうのだから、その程度では足りないでしょうけれど」

アンリエットの赤い瞳に嘘は見られない。

「……そうですね。わたしは」

俺は、アンリエットの問いにひとつの答えを返した。

そして。

城の離れへと帰る途中、アンリエットとジャンヌは馬車ごと爆破された。

「命に別状がないようで安心いたしました、アンリエットさま」

「ありがとう。私とした事が不覚を取ったわ。……いえ、注意していたところでどうしようもない、とも言えるのだけれど」

事件の翌日、俺は見舞いのために城へと向かった。

通されたのは離れではなく城の中の一室。アンリエットはベッドに半身を横たえて休んでいた。その左腕は清潔な布でぐるぐる巻きに固定されている。

傍らには椅子に座ったジャンヌの姿。幸い、彼女に大きな怪我はなかった。

「ジャンヌさまも災難でしたね。まさか馬車ごと攻撃されるとは」

「いいえ、私は大丈夫です。伯母様が咄嗟に守ってくださいましたから」

目を細めて首を振る少女。怖くなかったはずはない。ただ、大怪我を負った伯母の方が心配なのだろう。

使用されたのは例の自爆魔道具とみられる。

御者台に同乗していた護衛騎士によると、馬車の進行方向から平民風の少女が突然飛び出してきたらしい。御者はすぐさま警告の声を上げたものの、少女は逃げるどころか轢かれようとするように立ちはだかってくる。相手の容姿につられたお陰で車内への注意勧告は一瞬遅れた。

いっそ跳ね飛ばしてしまおうと加速した馬車（貴族の馬車に平民が轢かれた場合、九分九厘平民が悪い）が少女に衝突しようとした時、爆発は起こった。

事件後の現場には馬と御者だったものと車体の約半分ほどを失いひっくり返った馬車、そしてばらばらになった破片が残されていた。

騎士は咄嗟に防御魔法を用いてなんとか一命をとりとめたものの、全身打撲と火傷ですぐには動けない状態。

アンリエットも防御魔法と護身用の魔道具によって爆発自体には耐えたものの、車体ごと吹き飛ばされ石畳に叩きつけられた際、左腕を強く打って粉砕骨折。

「本当に世話になったわ。この謝礼は必ずさせてもらうから」

「ありがとうございます。……本来なら『当然のことをしたまでだ』とお断りするべきなのかもしれませんが、有難く頂戴いたします」

治療に大きく貢献したのはセリアとオーレリア、それからモニカだ。

お陰でアンリエットの腕は形としてはほぼ再生している。

『一度切断して新しいのを生やす方がまだ楽だったのよね』

原型はほぼ元通りになったものの、まだ思い通りには動かせないし動かすと痛み

が走るということで固定中。
　護衛騎士の方はより深刻で、凄腕の治癒魔法使いたちが腕を振るわなかったら命を落としていただろう。
「尊い方の助けになれたとあれば我が家の誉れにもなりましょう」
　俺の護衛騎士として同席しているモニカは元気そうなアンリエットを見て微笑んでいる。
　オーレリアとモニカが治療に参加したのは俺が命令したからだが、きっとモニカなら俺が命じなくても自分から申し出ていただろう。
　騎士団長の妻が隣国の要人を助けたとなれば両国の関係にも良い影響を及ぼす。気持ち良く人助けができたうえに利益もあるのなら一石二鳥である。
「アンリエットさま。既に何度も尋ねられたでしょうけれど、犯人に心当たりはございますか？」
「多すぎて絞り切れない……と言うのが正確かしら。平民に命じて実行させるだけなら貴族の大半に可能だし、私はかなり恨まれているから」
『まあ、そうよね。何しろ第七王妃から正妃さまだもの』

隣国王族のうち現国王以外の全員から命を狙われています、と言われても驚かない。

と、ここで彼女の目が細められて、

「私達が馬車で出た時刻を正確に把握できた、という意味ではシルヴェストル公爵家も疑わしいのだけれど」

「伯母様！」

「本気で仰っていないことはわかっております。我々に気を配ってくださっているアンリエットさまにここまでする理由がありませんし、殺すつもりなら治療するのは逆効果です」

「ええ。……ごめんなさい、嫌な言い方をしてしまって」

要するに誰も彼もが疑わしい、ということだ。

「自爆の魔道具の出所から洗うことはできませんか？」

「危険物として所在の一覧は作成しているけれど、国に帰らなければ詳細は確認できない。慣れた魔道具製作者なら新造も不可能ではないし、国に伝えず秘匿している分があるかもしれないからあまりあてにはならないでしょうね」

「恐れながら、入国および入城の際の荷物確認はどの程度行われたのでしょう？」
「箱を開けて品物を一つ一つ確かめられたと聞いているわ。それに関しては貴女方のほうが詳しく確認できるんじゃないかしら」
「そうですね」
父から聞いた確認内容もアンリエットが口にしたのと相違ない。
ただまあ、箱が二重底になっていてそこに隠してあったとか、あるいはただの装飾品に偽装されていたとか、あるいは単に見落とされた可能性も否定はできない。
広場での試合の時点で既に持ち込まれたものが今になって使用された可能性もある。
だが、
『一番怪しいのはグレゴールさまとレティシアさまよね』
動機的にも機会的にも彼らは最有力候補だ。自爆した当人も魔道具も吹き飛んでしまっているので調査のしようもあまりないが、現場検証は行われているし警備も強化されている。
「リヴィエール王国の協力が得られたのは幸いだったわ。……大事な物もなんとか

守りきれたしね」

「書状、持ち歩いていらっしゃったのですね」

「失くしては困る物は肌身離さず持ち歩くものよ。まあ、それを保護するために魔力を割いた結果、腕が一本なくなるところだったけど」

『それ、全然笑える話じゃないわよね!?』

なるほど。箱だか筒だか、防御の魔法がかかった魔道具に入れて持ち歩いていたのか。その分、護身用の魔道具はひとつ少なくなっていたと。

アンリエットは「でも」と笑んで、言った。

「お陰で予定通り陛下にお目通り願えるわ。どうやら、話は早く済ませた方が良さそうだしね」

会談

会談はその日の夜に実施された。

国王の仕事が山積みになっていたせいと、話が長くなることが予想できたからだ。

王族用の会議室に集められたのは錚々たるメンバー。

国王と王妃、それから第一から第三までの王子。宰相に騎士団長、宮廷魔法士長、俺にセレスティーヌとルフォール侯爵夫人、そしてアンリエット。俺の護衛およびメイドの中にはモニカとオーレリアも含まれている。

アンリエットの差し出した細い筒を国王が騎士団長経由で受け取り、中身を一読する。

「……これは」

彼はその後、声を出して書状を読み上げた。

内容は基本的に俺たちがアンリエットから聞かされたものと同じだ。

「馬鹿な」

読み終わった直後にリオネルが声を上げた。立ち上がるのはギリギリで我慢した

ようだが、両の拳はぎゅっと握りしめられ、視線は父親へと真っすぐに向けられている。

「リディアーヌは私の婚約者だ。グレゴール殿下の嘆願を却下した時と変わらない。そうでしょう、父上」

しかし、この国の王は「いや」と厳かに首を振った。

「グレゴール殿下の話は『要求』であり、ソレイル国王の承認もなければ我が国への補償も不十分だった。しかし、今回は王自らの要請であり、代理人としてアンリエット殿下も来られている。少なくとも『一考に値しない』とはならぬ」

「では、こんな馬鹿な話を受けると……!?」

「受けるか否か。決めるにはまず本人の意思を確認せねばなるまい」

単なる気の良いおっちゃんではなく、一国の主としての王の瞳が俺に突き刺さる。

「リディアーヌよ。この話をいかに考える？」

俺は、努めて国王だけに注目しながら答えた。

「またとない良いお話かと存じます。この国にとって十分な利を得られるのであれば是非お受けしたいと」

「リディアーヌ!?」
リオネルの声はほとんど悲鳴のようだった。
「お前は、私を見捨てて隣国へ赴くというのか？」
「見捨てる、などとは思っておりません。わたしは――」
「ならば何だ!?　二人で良い国を作ろうと約束しただろう!?」
彼の方を見るのが辛い。いつか聞いたあの言葉は俺にとっても嬉しいものだった。それを思えば、俺の選択はとても不義理だ。
だからこそ、俺は婚約者である少年に視線を移す。
らしくないことに指が震えている。それを悟られないように気をつけながらはっきりと答えた。
「もちろん、忘れておりません。ですから作りましょう。わたしたちで素敵な世界を」
「……世界？」
硬直する少年へと微笑みかけて、
「一つの国だけに留めておくなんて勿体ないではありませんか。一つよりも二つ。

二つよりも三つ。一番いいのは世界を変えることです」
「お前、全てを好き放題に変えるつもりか？」
「好き放題とはまでは言いませんが、変化が局所的に留まったのでは単に『流れに乗り遅れる』ことにしかなりません。大きな流れを作り出すことこそが肝要かと」
しん、と、一瞬の静寂。
アンリエットがこの機を逃さずに口を開く。
「陛下。よろしければ私は一度退席いたしますが」
「構わぬ。質疑応答が必要になることもあろう」
この短い間にリオネルは呼吸と思考を整えていた。幾分か冷静になったようだが、今度はぶすっとしたような表情を浮かべて、
「だが、俺との婚約を解消することに変わりはなかろう」
「……それは、本当に申し訳ありません。わたしがお手伝いしなければリオネルさまの王位継承は遠のいてしまいますから」
「それは関係ないだろう。別にお前がいなくても俺は王位を願う」
この宣言に国王夫妻が嬉しさ半分といった感じの苦笑を浮かべる。アルベールが

「何を聞かされているんだ俺たちは」と愚痴り、シャルルは「良いではありませんか」と笑った。

『ええ、まあ、痴話喧嘩よね……』

しかし、止めるわけにもいかない。

リオネルには納得してもらいたいし、できる限りの説明をするのが俺の義務だ。

俺は引き続き少年に向き合う。

「公爵家の後援は関係ない。今更お前にいなくなられても困るのだ」

真っすぐな気持ちは素直に嬉しい。

気まぐれに決めた婚約者だっただろうに、俺たちの繋がりはあの頃とは比べものにならないくらい深くなっている。

小さく息を吸い込んで、

「では、しばらく婚約者は未定で居られてはいかがですか？」

「何？」

「わたしがソレイルに赴くとなれば、ヴァイオレットは同行を希望するでしょう。そうなれば多くのご令嬢――少なくともベアトリスさまは婚約を希望するはずで

す」

「ヴァイオレットからは既に希望を受けております。リディアーヌ様がこの国を離れるのであれば自分も同行したい、と」

ルフォール侯爵夫人からお墨付きが出た。つまり、第一夫人内定者と第二夫人候補がいっぺんにいなくなる。王族と縁づきたい令嬢にとってはカモだ。

そこを敢えて「誰とも婚約するな」と言う。

「わたしが首尾よく女王となり、リオネルさま以外の方が王位に就けなかったその時はソレイルにお招きします。あらためて婚約を結びましょう」

「……それは、女王と王配として、か？」

「ええ。女王と王配として」

まあ、その場合、おそらく俺とリオネルの子に王位は継がせられない。他の夫を取るか親戚筋を次代に据えるしかなくなるだろうが、そこはそれ。今考えても仕方がないし、俺が血の濃さだけで女王になったら他の王族もこぞって血の濃い血族を作ろうとするだろう。

俺の在位が続けば血統問題は自然と解決へ向かう。

と、リオネルが深いため息を吐いた。
「お前、言っている事があまりに自分勝手すぎるぞ。自分が成功して私が失敗する前提で話を進めるな」
「申し訳ございません。今のはただ希望を申し上げただけです。もちろん、リオネルさまには新しい婚約者を選ぶ自由がございます。ベアトリスさまでも構いませんし、シャルロットに求婚なさるのもよろしいかと。他にもきっと良い方が見つかるでしょう」
「いや、だからそれが面倒なのだが……だが、そうか、希望か」
難しい顔をしていた少年がふっと笑みを浮かべる。
得意げな、俺を挑発するような笑み。
「そもそも、本当に女王になどなれるのか？　いくら陛下が希望しようと他が反発するだろう」
「そこは腕の見せ所でしょう。味方を増やし敵を叩き、自分にとって良い環境に変えていけば良いのです」
「単身奮闘するつもりか。リディアーヌ、そこまでしてお前が行く必要はあるのか

？」

　単身ではない。ヴァイオレットもオーレリアもアンナもついて来てくれるのだから百人力だ。……というのはまあ、置いておくとして。

「必要性はわかりませんが、行きたい理由はあります。こそこそとこの国に干渉をしてきている不届き者には目に物を見せてやりたいので」

　アンリエットが自爆魔道具で狙われたあたり、もう確定だろう。

　やられっぱなしのまま俺が終わると思ったら大間違い。狙いやすいように出向いてやるから攻撃して来いという話だ。

「女王の地位があればやりたいことをやり放題ですし。大人しく婚約者として微笑んでいるだけ、なんて性に合わないのです」

「いや、今までも十分やりたい放題だったが……」

　呟いたリオネルは表情を苦笑に変えて「わかった」と答えた。

「仕方ないから納得してやる。お前こそ、もし女王になれなかったら帰って来い。養子縁組ではなく婚姻なのだからそのくらいの自由は利くだろう」

「それこそ簡単に行くかはわかりませんが、良いお話ですね。その時はまた婚約し

てくださいますか？」
「ふん。新しい婚約者ができていなければ考えてやる。もしできていたら第二夫人以下に格下げだな」
ああ言えばこう言う。
俺たちが同レベルかつ低レベルの言い争いを繰り広げ始めたところで、アルベールが制止の声を上げてくれた。
「ほら、そこまでにしておけ。……お前達が言った通り、この話を受けるだけのメリットがあるのか、遺言書の話を信じていいのか話し合う必要があるだろ」
「……お騒がせして申し訳ございませんでした」
「私も、軽率に話を進め過ぎた事をお詫び申し上げます」
そこから話は俺を嫁入りさせる前提で、そこからどんな利益を引き出せるか、という話になった。
「アンリエット。具体的な補償額についても其方に裁量権がある、と考えて良いか？」
「基本的には問題ございません。私の一存で決めかねないほど補償が高額になるよ

うであれば一度持ち帰らせていただくことになりますが」
「ならば良かろう。……となれば、できる限りの補償を要求したいところだ。リディアーヌに加えてヴァイオレットにオーレリアまで失うとなれば我が国の負担が大きすぎる」
　この国トップの魔法使いはセリアに入れ替わったものの、二位と三位はおそらく俺とオーレリアだ。
　魔道具の製作能力および有事の軍事において大きなマイナスとなるのは間違いない。
　アルベールがくくっと笑って、
「女が何人出て行こうと国への影響はない、と主張する者達も出てくると思いますが」
「高い魔力の持ち主は男女の区別なく有用である。役割分担と絶対的な価値の違いをはき違える愚か者の言など考慮に値せぬ」
　王はあっさりと断言した。
「陛下。リディアーヌはともかく、オーレリア・ルフォールおよびヴァイオレット・

ルフォールに関してはこちら側の要求に含まれておりません。貴国が自由意思で差し出す人員にまで補償を求められるのは如何なものでしょうか」

　完全にアウェーな状況にありながらアンリエットも黙ってはいない。少しでも補償内容を緩和しようと口を挟んでくる。

「これはおかしな事を言う。リディアーヌの身の安全、およびソレイル国内での地盤固めのためにも信頼のおける駒は必ず必要になる。其方らが本当にリディアーヌを担ぐつもりだと言うのなら、むしろ十分な人員をそちらで用意するのが筋ではないか？」

「もちろん、我々としても選りすぐりの側近を用意させていただく所存でございますが――」

「であれば、その人員の一覧を頂きましょうか。口だけで『選りすぐりである』と言われたところで納得はできません。一覧が出せないというのであれば、こちら側から出す側近に十分な補償金をいただくのは当然の話では？　ああ、もちろん一覧には経歴等の情報も付けていただきたいですね」

　国王の反論にさらに反論しようとすれば、シャルルが笑顔のままに要求を突きつ

ける。

これはさすがに分が悪いか。

アンリエットも女としては破格の地位、および交渉能力を持っているが、王の他にアルベールとシャルルまで揃っていては言い負かすのは難しい。ましては今回は向こうがお願いをして引き抜きをかけている立場だ。

「であれば、婚約解消およびリディアーヌの嫁入りに伴う補償に加えて金貨を――」

結果、アンリエットが口にした金額はかなりのものだった。

個人や家レベルではなく、国として見た上での「かなり」だ。一部が公爵家に分配されるのを考慮してなお、公共事業の一つくらい起こせるレベル。

しかし、向こうがいくらまでの出費を覚悟しているかはわからない。こちらには「じゃあやっぱりリディアーヌは嫁入りさせない」という切り札もある。価格交渉もまた腕の見せ所だ。

『というか、わたしとしては向こうの出費は抑えた方がいいのかしら？』

悩ましいところだが、自分についた値段を値切るのは避けたい。ここは素直に黙っていると、

「そもそも、私としては大事な娘を七十の老人に嫁がせたくないのだが」
「旦那様。公的な場で私人としての発言はお控えいただけますか？」
「そうよお父さま。形だけの結婚なのは明らかなんだから我が儘言わないでちょうだい」
父がこの期に及んで親馬鹿な発言をしたのでセレスティーヌと一緒に一蹴した。
「……お前達は本当に似てきたな」
なんだか聞き捨てならないことを言われた気がするが、ここは仕方なくスルーする。
父には昨日の時点で（アンリエットに許可を取って）保護者として話を通した。その時、彼は当然のように猛反対した。危険すぎるのも苦労が大きいのも事実なので説得には骨が折れた。
それでもなんとか納得してくれたからこそ、ここでは子供みたいな発言だけで済ませてくれているのだ。地味に傷ついたらしい父のメンタルは後で個別に話をして回復させようと思う。俺だって彼には感謝しているし、離れたくない気持ちもある。
そうして、話は少しずつ纏まっていった。

補償は金銭以外の物資による分も含めかなりの内容に。
決定事項は公文書として二部を発行し、それぞれの国で持つ。正式な調印については後日国境地帯で行われることとなった。ソレイル側の反応によっては調印式の前に契約内容の微調整も行うことになるだろう。
書記官が丁寧かつ迅速に筆を走らせる中、アンリエットは頷いて、
「では、これで仮の合意としてよろしいでしょうか？」
「待ってください。……アンリエットさま、実はあと一つ、提供していただきたいものがあるのですが、よろしいでしょうか？」
「何かしら、リディアーヌ。私にできることならなるべく叶えてあげたいけれど」
俺は微笑む隣国正妃を真っすぐに見据えて告げた。
「欲しいのはわたしの可愛い妹を攫った挙句、どこかへと逃げた女の首よ。貴女ならどこにいるのか知っているんじゃないかしら？」

会談を終えて

「何故、あの場であのような話を？」
夜は危険だということで、城下の人間たちには客間が用意された。
セレスティーヌに呼び出された俺は彼女用の部屋に二人きりで向かいあい、視線を交わらせる。
「求める答えが得られない事は明白でしょう」
「ですが、あの場なら公式的な回答になるでしょう？」
突然の問いかけにアンリエットは大きく動揺することもなく答えた。
『シャルロットの誘拐事件については私も聞いているわ。許しがたい手口ね。……けれど、会ったこともない犯人を引き渡せと言われてもどうしようもないわ』
『では――アンナ』
『はい、リディアーヌ様』
あらかじめ用意していた『あの女』の似顔絵。バルト邸で見た時と学園卒業パーティーの時、それからシャルロット誘拐の時の顔を精巧にスケッチしたもの（投影

の魔法を使って絵師に描いてもらった）を渡してから約一分。
『これ、もらってもいいかしら？　もしも彼女を見かけたら引き渡すと約束するわ』
確約は取れたが、もちろん本当にこれで解決するとは俺も思っていない。
本当に知らない可能性も十分ある。
もしくは既に顔を変えていた場合「絵の女を引き渡す」という約束は履行されなくても問題ない。この世界では整形なんて簡単ではないが、方法はある。人為的に顔を損壊した上で治癒魔法をかければいい。そうすれば魔法をかけた者が思い浮かべた容姿で再生される。
「もしこれでアンリエットさまがあの女と繋がっていた場合、わたしに嘘をついたことになります」
「証人は我が国の人間ばかりです。有効活用するのは難しいと思いますが」
「嘘をつかれた、とわたしがわかれば十分です。……その時点でアンリエットさまを敵と認識できますから」
わざわざアンリエットに尋ねた理由はあの場でも確認されたが、シャルロット誘

拐の件だけ他と毛色が違うからだ。

『シャルロットを直接攫った女は他の男たちとは別口でした。これは男たちの証言から裏付けが取れています。つまり、彼女の主には別の狙いがあったと見るべきです』

シャルロットの証言からも、女はあの作戦が失敗すると考えていたことがわかる。

『正しき血を正しい場所へ還すために。これは男たちの一人の台詞です。彼らは熱狂的な純血派――貴族よりも平民の方が上だと本気で信じていたのでしょうが、そこに別の意味が隠されていたとしたらどうでしょう？』

竜の系譜を竜の国へと戻すための策の一部。

事件を大きくして俺を目立たせ、時代の流れに取り込ませる狙い。あるいは、俺に担ぎ上げるだけの価値があるかを試すつもりだったか。また、純血派の人員を大きく削って勢いを削ぐことまで計算に入っていたかもしれない。

そう考えると、あの女の主はむしろ俺が邪魔だったのではなく俺を欲していた可能性も出てくる。

「幸い、アンリエット殿下は軽く流されましたが、不興を買って話自体が流れてい

てもおかしくありませんでした」

「あの程度で流れるような話ならこちらから願い下げです。やましいところがなく、本当にわたしが欲しいのであれば怒る必要がありません」

王侯貴族は時に喜怒哀楽すらも目的のために利用する。有利に立つために敢えて怒って見せることもあればその逆もある。

まあ、だからすぐに感情を出し過ぎる俺は優等生とは言えないわけだが。

セレスティーヌは小さく息を吐いて言った。

「わかっているのなら構いません。……ですが、リディアーヌ。貴女の戦いはおそらく貴女が思っている以上に厳しいものになりますよ」

「覚悟の上です」

「そうですか。……そうなのでしょうね。貴女は私に似ていると言われますが、きっと、貴女が似ているのはやはりアデライド様なのでしょう」

そう語る養母の表情はどこか寂しそうに思えた。

母に嫉妬している？　いや、そんなはずはない。俺とセレスティーヌは利害が一致しあう限り協調し共闘するが、慣れ合いや連帯感を生むような関係ではない。

それでも。

ここまで見守り、手助けをしてくれた彼女に恩はある。初期に冷遇されていた件はまあ、その恩と差し引いてみなかったことにしてもいい。

「リディアーヌ。貴女には『役割を全うする』だけの人生は似合わない。貴女の役割は貴女が決めなさい。……ただし、細心の注意を払うことは忘れないように」

「心得ております、お養母さま」

「どうでしょうね。……貴女はすぐに頭に血が上り、細かい事柄を脇へ置いてしまいますから。それは私には到底真似できないことであり、貴女の弱点でもあります」

『褒められているのか貶されているのかよくわからないんだけど？』

言われていることは全て当たっているので反論もしづらい。

「お養母さま。まだ嫁ぐと決まったわけではありませんので」

そう言って小言を妨害すると、セレスティーヌは意外にもあっさりと引き下がりこくりと頷いた。

「そうですね。これから陛下や旦那様が会議にかけ、重臣達からの承認を得ます。その上でソレイル王国が余計な欲を出す事無く調印にこぎつけてようやく貴女の嫁

入りが決定します」

「道のりはまだ遠いようですね」

しかし、皮肉なことに俺の嫁入りは俺の敵対派閥から強い支持を受けるだろう。対立している相手で反対してくれるのはおそらくベアトリスくらいだ。あいつはひょっとしてライバルを通り越して親友なのではないだろうか。ツンツンしっぱなしが実に惜しい。

「調印までにはどの程度時間がかかるでしょうか」

「早くとも、アンリエット殿下が帰国されてから三か月後……といったところでしょうね。国家間での調整となると日程を決めるだけでも時間がかかります」

調印式に両国王が出向くとは限らない。国境まで赴いた挙句、敵兵に討たれる可能性を考えればむしろ出ない可能性の方が高いだろう。それにしたって十分な用心は必要であり、護衛の用意等々準備は必要になる。手紙を送るのにも時間がかかるとなれば三か月でも早い方だ。

「では、それまでに可能な限りの準備は済ませておかなければなりませんね」

俺は今まで以上に、自分がいなくなった時のための準備を進めることにした。

「こちらがリヴィエール王国の騎士団訓練場なのですね……！」

会談から数日後。

俺はジャンヌを連れて騎士団の訓練場を訪れていた。彼女が「どうしても騎士の訓練が見たい！」と言ったからだ。

訓練内容は軍事機密といえば軍事機密。あまり他国の人間に見せるものでもないのだが、熱意ある懇願から「あ、これ本当に興味があるだけだな」と思ったこと、通常訓練を一日眺めた程度で十分な情報は得られないことなどから許可が下りた。

条件は監視つきの上で俺が案内すること。

『考えてみると、わたしがソレイルに嫁ぐ時点で情報は筒抜けになる前提なのよね』

故郷への愛着もある。本当に機密となる部分まで話す気はないし、無理に聞き出されたりはしないだろうが、各地の特産や主だった貴族の好物等々、あると便利な情報はいくらでも頭に入っている。ソレイルの人間として尽くすことになれば活用せざるを得ない。

だから、国を跨いでの婚姻というのは慎重にならざるをえないわけだ。
今回の補償にはそうした意味合いも含まれている。
「あまり女性が見て面白いものではないと思うのだけれど」
「あら。そういうリディアーヌ様も楽しみにしていらっしゃったのでは？」
「まあ、そうね」
今日の俺は剣術用の稽古着。
ジャンヌも同じく動いても下着が見えたりしないパンツルックで、自前の模擬剣まで携帯している。隙あらば剣を振るう気満々である。
騎士でもないのに剣を振るうなんて、と言われることの多い俺に負けず劣らずの変わり者だ。
「ノエルもごめんなさい。せっかくの休日だっていうのに付き合ってもらっちゃって」
「お気になさらないでください。訓練場は庭のようなものですから、むしろ気晴らしになります」
今日は護衛――というか同行者としてノエルを呼んだ。

休んでもらうにあたってモニカはむしろ残念そうにしていた。せっかくだから今の訓練をじっくり見たい、とのことだったが、騎士団長夫人にして伝説的な女騎士に来られたのでは騎士たちも気が気ではない。下手をしたらモニカによる猛特訓が始まってしまうので、遠慮してもらって正解だろう。

「リディアーヌ様、ジャンヌ様。ようこそお越しくださいました。このような場所ゆえ大したおもてなしもできませんが、どうかごゆっくりご覧になってください」

「はい。他国の騎士様を観察する機会などそうありませんから、本日はしっかりと目に焼き付けて帰りたいと思います」

応対は副団長がしてくれた。色んな意味で身内であるノエルには挨拶なしである。そのノエルはなんとなくむず痒そうな表情になっている。

「副団長。せっかくですから私もお二人に訓練をお見せしたいと思うのですが、よろしいでしょうか」

「護衛の任務中に失礼だろう。……と、言いたいところだが、この場においてはそこまでの警戒も必要ないな。お二人のお相手は私に任せ、少し汗を流して来るといい」

「ありがとうございます。では、リディアーヌ様、ジャンヌ様。少し失礼させていただきます」
「ええ。頑張ってね、ノエル」
なお、ジャンヌが「なんなら私達も参加できませんか？」と言ったがさすがに断られた。興味があるとはいえ騎士ではない女性に訓練をさせるわけにはいかない、とのこと。さもありなん。万一怪我でもさせたら本人ではなく外野が騒ぎ出す危険もある。
代わりに俺たちは日傘を差したり日陰に陣取ったりしながら訓練を見学させてもらった。
型に従って剣を振ったり走り込みをしたり魔法で的を狙ったり。訓練だけあって地味かつきついメニューが繰り返される。音を上げる者が出て来そうなものだが、基本的にみんな志願して騎士になっているからか、むしろ楽しそうにしている者もいた。
ジャンヌも俺の隣で目を輝かせながら見ているので同類だろう。
『さすがにわたしはそこまで体育会系じゃないわ。見学に来たのも参考になると

思ったからで、純粋に見るのが愉しいってわけじゃないし』

そう言いつつなんだかんだ楽しんでいるのは内緒にしつつ、

「もしかしてジャンヌさまは騎士を目指されているのですか？」

「ええ。そうなれたら良いと思っております。親からは反対されているので、今のところ個人的に訓練するのがせいいっぱいなのですが……」

「女性騎士の結婚相手はどうしても男性騎士に限られる事が多いですからな」

「副団長さまもノエルのお相手には騎士をお望みなのですか？」

「それは……まあ、そうですね。欲を言えば私から一本取れるような男を望みます。さらに欲を言えば誰にも渡したくありませんが」

「ふふっ。親子仲がよろしいのですね。羨ましいですわ」

訓練が一対一の模擬戦に進んだところで、副団長から「よろしければ参加なさいますか？」と申し出があった。あまりにも興味深そうにしていたのと、試合形式ならある程度状況をコントロールできるから、といったところだろう。

もちろんジャンヌは一も二もなく頷き、俺もせっかくだからと参加を表明した。

ジャンヌが対戦することになったのは若い女性騎士だ。その中にはノエルもい

た。手加減しつつきっちり一本取った上で「なかなか筋が良いです」とジャンヌを褒める。実際、技術的にはなかなかだ。俺よりも剣は上手いかもしれない。

しかし当の少女は負けたのが悔しいらしく、瞳をかすかに揺らめかせながら、

「リディアーヌ様、私と対戦いたしませんか？」

「ええ、いいわ。やりましょうか」

刀身部分に綿を巻いた木剣、という怪我に最大限配慮した武器を握って向かい合い、何度も剣を打ち合わせた。

ジャンヌは腕は良いが、身体能力や魔力では俺の方に分がある。ある程度手加減をしつつも勝利を収めることができた。

試合後、悔しそうに唇を噛むジャンヌ。負けてあげた方がよかったか。しかし、あまりわざとらしいのもお互いのプライドを傷つける、と考えていると、

「やっぱり、私は騎士になりたい。もっと強くなりたいのです」

呟いた彼女の姿に、ああ、大丈夫そうだと思った。

「素敵な夢じゃない。応援するわ」

「本当ですか？」

期待に満ちた視線がこちらへと向けられて、

「リディアーヌ様にはソレイル出身の女性騎士が必要になるのでしょう？　お歳を考えれば長くお傍にいられる者が良いと思うのですが、いかがでしょうか？」

ここぞとばかりに滅茶苦茶売り込まれた。

友人たちとのお茶会と嫌な贈り物

「リディアーヌ様がこの国を出られるなんて……私、これからどうしたら良いのでしょうか」

久しぶりに開いた友人たちとのお茶会。

俺たちの間では可愛い妹分、あるいはマスコットのように扱われている少女、サラ・モレは薄紫色の瞳に涙を滲ませた。

「もう。泣かないで、サラ。モレ家の資金繰りも以前に比べたら良くなってきているのでしょう？」

「それは、確かにそうですけれど」

サラが俺たちのグループに入り、俺や他の令嬢から庇護を受けるようになったことでモレ家の当主――サラの両親はこれまでとは身の振り方の変更を余儀なくされた。

身の丈に合わない買い物をしたり、他の貴族に唆されて賭けごとを行ったりする度にちくちくと警告（サラをメイドとして雇おうか、とか弟のコームを養子にした

いとか）が行くので思うように散財ができなくなったのだ。
　サラ自身もだんだん自信がついてきて両親に意見できるようになってきたため、姉弟が食べるもの着るものに困ったりすることはなくなっている。
「リディアーヌ様がいなくなってしまったらまた元通りになってしまうかもしれません」
「じゃあ、いっそのこと本当に誰かのメイドになってしまう？」
　他のメンバーを見渡せば、複数人が「我が家なら大歓迎」と言ってくれる。サラが自分で稼げるようになれば家がどうなろうと問題ない。ついでにコームを養子にできればなお良しだ。
　するとサラは少し考えてから首を傾げて、
「では、リディアーヌ様についていってもいいですか……？」
「それは少し難しいかもね」
　メイドならオーレリアとアンナがいる。実務経験のないサラを敢えて連れて行く必要が薄いし、何より彼女の身を守ってやれる保証がない。それに、向こうに行ってしまえば今まで会ったこともない貴族の中から結婚相手を見つけなければならな

くなる。
「コームとも離れ離れになってしまうし、国内に留まった方がいいと思うわ。我が家のメイドになりたい、と言うのなら賛成よ」
「……そうですか」
しゅん、としてしまうサラ。
それを見ていたヴァイオレットがくすりと笑う。普段は来たり来なかったり、むしろ俺と一対一で会いたがる彼女だが今日はきちんと出席している。
「サラはリディアーヌへ特に懐いているものね」
「ルフォール様が仰らないでください……！」
いいぞサラ、もっと言ってやれ。
そこへ別の令嬢が、
「ところで、ヴァイオレット様はどのようにして同行されるおつもりなのですか？先方の貴族と養親縁組をされるおつもりで？」
「いいえ。私はリディアーヌのメイドとしてついて行きます」
きっぱりと言い切るヴァイオレット。

外国で貴族としてやっていくのであれば後ろ盾はどうしても必要になる。でないと圧力をかけられた時に身を守る方法がほとんどなくなってしまうが……使用人として雇用契約を結んでいるのなら話は別だ。その場合は俺自身が後ろ盾になれる。

国ではなく俺個人の予算から給料を出すのであればソレイル王家へ必要以上に阿る必要もない。実家はルフォール侯爵家のままだからいざとなればリヴィエール王国へ帰ってくることもできる。

「ヴァイオレット様はメイドの経験がおありなのですか……？」

「実務経験はありませんでしたが、メイドの仕事内容は十分に把握しています。ここ一か月ほど我が家のメイドから教えを受けてもいますので問題ありません」

ルフォール家の令嬢はただの貴族令嬢ではない。環境に適応できるだけの素養はあるし、ヴァイオレットの魔力なら自分の身は自分で守れる。

「ありがとう。でもいいの、ヴァイオレット？　向こうに行ったら針の筵かもしれないわよ？」

「それくらい構わない。リディアーヌの傍にいられることの方が重要」

「そう。……本当に感謝するわ。あなたがいてくれてよかった」

メイドという肩書きならたいていの場に同行させられるので俺としても好都合。オーレリアとヴァイオレットに関しては表向きメイドという体にしつつ、実質的には相談相手や秘書といった役割をしてもらうこともできるだろう。

『そうだ。エマにも来てもらえないか頼んでみましょう。たぶん断られるけど……』

「リディアーヌ様がいなくなられたらこの派閥も解散ですね」

「主人であるリディアーヌ様がいないのでは仕方ありません」

「あら。別に誰かに引き継いでもいいのよ？」

残念そうに言う友人たちへ俺はそう答える。

「私たちはただの派閥じゃない。意見の合う者同士が互いに助け合うための繋がりでしょう？　これからも立場や考えが変わらないというのなら続ければいい。個々人の友情だって一瞬にして消えてしまうほど脆くはないでしょう」

もちろん、邪魔だと思うのなら残る必要も残す必要もない。俺の権力を借りられないならベアトリスあたりに取り入る、という強かな令嬢だっているかもしれない。個人の気持ちと損得勘定は別として運用できるのが貴族令嬢というものだ。

「そのあたりはみんなで話し合ってちょうだい。調印が無事に終わるまではわたし

もどっちに転んでもいいように動くけどね」
「かしこまりました、リディアーヌ様」
「もしソレイルに行かれても、いつか遊びに来てくださいね。その際は積もる話をいたしましょう」
「楽しみにしているわ」
一応、ベアトリスの派閥に入りたいなら頭を下げるなり殴り合いの喧嘩をして分かり合うなりする、とも言っておいたのだが、その後、友人たちは「シャルロット様の派閥と合流しようと思います」というとても無難な選択をすることになる。
ついでにセリアを入れてあげてくれ、と言ったら喜んで了承してくれた。

オーレリアとも協力し、屋敷の窓を全て強化ガラスに改造した。これで普通に矢を射られたくらいならある程度防げるようになった。
土地を肥やす魔道具をさらにいくつか量産して公爵領へ送った。羊の成長や綿花の生育は公爵家の収入に直結する。これで少しは収入を増やす助けになるだろう。

「そう言えば、師匠には三年間の協力義務があるんですよね。場合によっては後から来ていただくことになりますが、よろしいですか？」

「仕方ないでしょう。……と言っても、期限まではあと一年もないわ。調印の後で輿入れの準備でしょう？　普通に同行できてもおかしくないでしょうね」

俺の世話をするためという理由なら期間短縮も可能なもしれない。その交渉材料として新型魔石および新型魔道具の余剰在庫を増やしている最中だという。

そんな中、俺宛てに大量のチョコレートが届いた。

カカオを要求した件でチョコ好きだと思われたらしい。確かに好きだが、そんなにいっぱいあっても食べきれない。とはいえ捨てるのも勿体ないので毎日地道に消費していくことにした。

幸い、魔道具の冷蔵庫のお陰ですぐに悪くなることはない。

「今日はデュナン家名義で届いたチョコにしましょうか」

メイドによる分別の時点で要注意、食べない方がいいと判断された品だ。

ベアトリスからは別途、嫌味をつらつらと書き連ねた手紙が届いている。要約すると「寂しいから行かないで」となるあたりが「さすがベアちゃん（仮）」といっ

た感じで逆に和んでしまったわけだが……さて、別に家名義で届いたこれはどういう意図か。

封蝋の造りが若干甘いし、運んできた使用人も見覚えのない顔だったらしい。なお、受け取ったメイドが聞き出した所属と名前は念のために控えてある。

「アンナ。いつでも吐けるように容器を用意してちょうだい。それから水も多めに」

「あの、リディアーヌ様。本当にやるのですか？」

「ええ。これも用心のためよ」

最悪の場合に備えて医者も呼んだし解毒剤の類もできる限り用意してある。

食事の度に使っている解毒の魔法を敢えて普段より弱めに用いた上でチョコをひとつ無作為に手に取る。半分に割って針などが含まれていないのを確認したら、中からとろりと流れてくる液体も含めて片方だけ味わってみる。

チョコの苦みとアルコールの風味のせいで味の違和感は判別が困難。

口の中で溶かすようにしながらじっくりと『結果』を待っていると、やがて、身体の奥から違和感がこみ上げてきた。

あらかじめ用意しておいた容器へ吐き出し、解毒の魔法を強めながら水を大量に

流し込む。食べたのは一個だけだしすぐに吐いたので影響はすぐ収まった。
『はい、毒確定』
わざわざ身体を張った甲斐があったというものである。
食べた端から無毒化してしまっては毒かどうかわからないし、俺を殺すための毒をメイドに味見させたら即死しかねない。
公爵令嬢が実際に食べて苦しんだ、という実績があれば罪を確定できる。なお、このための証人として使用人は多めに控えさせている。
「これ、証拠物だから丁重に扱ってちょうだい。一つはお医者さまに送って毒の鑑定を。残りは城に報告の上、箱や手紙、包装も含めて提出するわ」
「かしこまりました」
一般メイド代表としてエマが率先して動き始めてくれる。
なお、エマには先日「一緒にソレイルに行ってくれ」とお願いして「嫌です」と断られている。やっぱり普通が一番らしい。
そんな中、他の一般メイドが青い顔で、
「本当に毒が仕込まれているなんて……！」

「デュナン家には厳重に抗議するべきでは……!?」
「待って。我が家だけで動くべきではないし、そもそもこれはおそらくデュナン家の仕業じゃないわ」
俺の発言にアンナが深く頷き「騎士団を通して厳正に判断してもらうべきです」と言って、
「それはそれとして、リディアーヌ様。もう少し解毒の魔法を強めてください！それから半分はオーレリアに協力してもらいましょう。いいですね？」
「……はい」
オーレリアと二人でせっせとチョコを食べた結果、他にもいくつかやばい毒入りのチョコが発見された。
差出人は俺と仲良くない家はもちろん、サラのモレ家、ルフォール家の親戚筋まで様々。複数の家による毒殺未遂。本当に彼らが犯人なら国を揺るがす大問題である。
『本当に差出人の通りなら、ね』

運び人の帰り道をこっそり尾行させたり。
メイドの証言を元に似顔絵を作成したり。
陶器など指紋の残りやすいものが含まれていた場合はきっちり採取したり。
都度、思いつくだけの証拠を取って提出した。その結果、意外と早く答え合わせの時間がやってきた。普段、屋敷の窓口役を務める使用人を伴っての召喚。
案内された先はなんと玉座の間である。
さすがに慣れてきてはいるものの、若干緊張しながら王と王妃に挨拶をする。まさか怒られるのか……と思ったらそんなことはなく、むしろこまめな報告を褒められた。
ちなみに、傍に控えている父は見るからに激怒していた。
「安心しろ、リディ。不届き者の正体は今日この場ではっきりさせる」
「ということは、突き止められたのですね、宰相さま」
「ああ。アンリエット王妃の協力のお陰でな」
同じく召喚されたアンリエットは付き添いというかオマケであるジャンヌと共に

白のドレスを纏っている。黒を象徴色とするソレイルの人間が敢えて白というのはおそらく身の潔白をアピールするためだろう。

跪いたアンリエットは頭を垂れたまま、

「この度は大変申し訳ございません。言葉だけの謝罪で許されるとは考えておりませんが……どうか、私とジャンヌ、および我が夫にリディアーヌへの害意がない事だけは信じていただきたく」

「それは詳しい聴取と調査の上で判断する」

俺は「危険だから」と玉座の方まで来るように言われた。王妃の椅子の隣あたりに立つと、護衛役のモニカが俺たちを守るように立つ。国王と父の前には騎士団長。

アンリエットとジャンヌも三人もの騎士に囲んで守られた（あるいはプレッシャーをかけられた）状態で新たに連れて来られたのは――大方の予想通りの人物。

きんきんと響く高い声の持ち主と高慢かつ遠慮のない大声の持ち主。

「わたくしを誰だと思っているのです!?　このような真似が許されるとでも!?」

「この件は本国に帰った後で厳重に抗議する。覚悟しておく事だな！」

「黙れ。貴殿らに自由な発言の権利はない。武器の携帯は禁止。護衛の同行も遠慮

していただく」

「拒否すると言うのなら『やましいところがある』と判断するが？」

厳しい態度の騎士たちにより連れて来られたレティシアとグレゴール。二人は俺の姿を見つけて驚きの表情を浮かべた。

『……いや、あのね？　死んでるどころかぴんぴんしてるのが不思議だったんでしょうけど、そこは隠しなさいよ？』

陰謀？の首謀者

騎士団では別途、アンリエットとジャンヌの暗殺未遂事件について調査が行われていた。

結果、ソレイル側が下働きとして連れて来ていた少女が一人、行方不明になっていることがわかった。城に入る際に使用人から下働きまで全員分のリストを作っていたお陰だ。

どこに行ったのかと尋ねても「知らない」の一点張りだったが、ここで毒入りチョコレート事件が発生。こちらを調べると食料のうちチョコの材料がごっそり減っていることがわかった。レティシア配下の使用人の一人がこっそり薬屋に出入りしていたことも判明。

「リディアーヌよ。毒物を運んできた者はこの者達で間違いないか？」

連行されてきたのは使用人の男女二人。

メイドに視線を送るとしっかりとした頷きが返ってくる。事前に作った似顔絵にもそっくりだ。

「間違いありません」
「違う！　俺はやっていない！　どこにそんな事をする理由がある!?」
『いや、あるでしょいくらでも』
「そうよ！　これはアンリエットの陰謀だわ！　わざと怪我をする事でわたくし達に罪を着せて失脚させようとしているの！　捕らえるならあの女よ！」
『あんたたち二人のために腕一本失いかけるとか、ちょっとリスクが大きすぎるんじゃない？』
　騒ぎ立てる馬鹿母子を王と父の厳格な声が制する。
「ここはリヴィエール王国である。例え他国の人間であろうと罪を犯せば等しく罪に問われる。ソレイルの王族ならびに我が息子の婚約者の殺害を企てたとなれば最上位の罰が必要となろう」
「責任の所在は明確にせねばならぬ。上からの命令に逆らえぬ事情は汲むべきと考えるが……其方ら、何か申し開きはあるか？」
　これを受けた使用人二人は自分の受けた命令について慌てて喋り出した。
　名前の出て来た上司の名前は書き留められ、捕縛の命令を受けた騎士団長が伝令

を送る。これに青くなったのはグレゴールたちだ。
「貴様ら、覚悟はできているのだろうな……!?」
「黙れ」
「ぐっ!?」
「止めなさい！　わたくしはソレイルの王妃なのよ!?」
二人がかりで取り押さえられ、床に跪く彼ら。
「まだ自分達の過ちが理解できていないようだな。……アンリエット王妃は怪我の後、城で療養を行っていた。これは心ない者から守るためであると同時に行動を監視するためでもある。毒入りの菓子をリディアーヌへ贈るよう命令する事は不可能に近いのだ」
「な、ならば別の何者かの陰謀です！　わたくし達は本当に何も――！」
「であれば、部下からの忠誠を得られなかった事、所有物の管理を疎かにしていた事が其方らの罪だ。陰謀があったか否かについては拘束した後に調べれば良い」
「この、アンリエット！　この恨みは絶対に晴らすからな！」
もはや、周囲の視線は完全に冷ややかである。

重い罪を犯した上に雑な言い逃れ。他国の王族だから拘束で済まされているのであって、こっちの貴族なら一発二発は既にぶん殴られている。

国王は興味を失ったように視線を外すとアンリエットを見た。

「アンリエット。何か申し開きはあるか？」

「いいえ。彼らの罪に関しては貴国のご判断に従います。その上で、もし希望を申し上げる事が許されるのでしたら一つだけ申し上げたい事がございます」

「申してみよ」

「ありがとうございます。……もし、レティシア並びにグレゴールを処刑なさるおつもりであれば、どちらか一名はソレイルへ引き渡して頂けないでしょうか。処刑された、という事実のみを伝えた場合、貴国への反感を買う恐れがございます」

「ふむ。なるほど、良かろう、検討する」

「陛下のご厚情、誠に感謝いたします」

既に処刑が前提で話が進んでいる。

次いで、レティシアたちを御しきれなかったアンリエットの罪へと話が及んだ。

隣国の第一王妃はこれを粛々と受け入れる。俺を嫁入りさせた場合の補償とは別

に、俺の命を脅かした罪や国の保有する馬車を損壊した罪などについて賠償金が積み上がっていく。

　アンリエット本人も狙われたという事実を加味し、ある程度金額は差し引かれたものの、ソレイルにとってはかなりの打撃だろう。

「賠償金の一部はレティシア、ならびにグレゴールの私財より支払わせていただきます。もし、お許しいただけるのであれば品物の形で代替させていただく事も可能です」

「悪い話ではないな。品物によっては嫌悪感も残るが、貴重な品もあるだろう。……リディアーヌ、何か欲しい物はあるか？」

「はい、陛下。可能であれば宝石を希望します。魔石の良い材料になりますので」

「ははは、魔石の材料か。其方らしいな。良かろう。ジャン、賠償金の徴収および物品の回収についてはアンリエットと相談の上で進めよ。……シルヴェストル公爵家には迷惑をかけた。其方やセレスティーヌも欲しい物があれば優先的に持って行くが良い」

「はっ。陛下のお言葉、有難く頂戴させて頂きます」

と、ここまでの会話をグレゴールたちは辛い姿勢のままで聞かされたわけだが。
「処刑などと！　本国にいるわたくしの息子たちが黙っていませんよ!?」
だから片方連れて帰って罪人として処罰する、という話である。
他人であるリヴィエールの人間が全て行ってしまうと確かに禍根が残るが、正妃であるアンリエットが処刑を実行すればそれは「自国も同じ判断」という証明になる。
「リディアーヌ・シルヴェストル！　貴様が素直に我が妻になっていれば！」
なっていたら俺もソレイルもお先真っ暗だっただろう。
と、玉座の間の外から小規模な戦闘音が聞こえてくる。レティシアたちに心酔する騎士が暴れ出したか。大きな騒ぎにはなっていないし応戦している様子なので直に収まりそうだ。
冷ややかな目で見下ろしてやると、
「くそっ、この死にぞこないが……！」
吼えたグレゴールが身体の周囲に炎を纏わせる。
当然、拘束していた騎士も魔法防御は行っていたものの、さすがは王族というべ

きか、炎は防御を超えて騎士たちの腕を焼いた。
拘束が緩んだことで巨体が自由になる。
石の床に手をつくと魔法によって変形させ、即席のハンマーを作り出すグレゴール。警戒していた騎士がすぐさま取り囲み、モニカや騎士団長も剣を抜くが、
「ねえ、モニカ。ここはわたしにやらせてくれないかしら」
「しかし、リディアーヌ様」
「大丈夫よ。お守りもたっぷり持っているし、一発ぶん殴ってやるだけだから」
「……そこまで仰るのでしたら」
渋々、といった様子でお守りに回ってくれるモニカ。彼女の防御魔法があれば身に着けた魔道具に頼るまでもないだろう。
まあ、そもそも怪我をするつもりもないが。
「無様ですね、グレゴール殿下。こんな小娘一人殺せないなんて」
「リディアーヌ・シルヴェストル！　お前はグレゴールには相応しくないわ！　まして女王だなんて！」
「それは貴女が決めることではありません、レティシア王妃殿下。毒殺はあなたの

発案でしょうか？　陰険な女はいつも毒に頼りますね」

今日は装飾剣を持ってきていない。

モニカの剣を借りてもいいが、必要ないだろう。ジャンヌとも約束したことだし、

「この、小娘が！」

再び炎を這わせて周囲を牽制したグレゴールが真っすぐこちらに向かって走り出す。

俺もまた彼を迎え撃つように床を蹴り、斜め下方向への力を得た。

振り上げられるハンマーは間に合わない。

俺は風の魔法でさらに勢いをつけると、隣国王子の四角い顔を思いっきり踏みつけた。

「殴るより威力が出ると思ったんだけど、ちょっとはしたなかったかしら」

靴底とヒールを顔にめり込まされた王子は悶絶、背中からばったりと倒れて乱暴する力を失った。

「現行犯が追加ね。まだ文句があるかしら、レティシアさま？」

「――っぁ!?」

ソレイルの第二王妃はその場で失神。
外の騒ぎも直に収まり、騎士三名が捕縛・拘禁されることとなった。

アンリエットの嘆願は受理され、第二王妃レティシアはソレイル側に引き渡されることが決まった。ただし、リヴィエール側で国境まで護送した後、ソレイル王国から受け取りの人間が来ることが条件。
王子グレゴールについては諸々の罪で処刑である。
「こんな王子がのさばっている国、いっそ滅ぼしてしまえばいいのではないか？」
「確かに手っ取り早いが、思い切った判断はなかなか難しいところだな」
嫁入りの件の調印が成るまでの間、俺とリオネルの婚約は継続している。ただ、二人っきりだと気まずいというか、あんまり婚約者らしい関係を続けて変に誤解されてもまずいので、今回の逢瀬には兄王子のアルベールも同席してもらった。
第一王子のシャルルは既に国政の手伝いを行っていてわりと忙しいし、アルベールの方が気楽な話をするにはちょうどいい。

いつものリオネルの部屋ではなくアルベールの私室。王族らしく高級な家具が並んではいるが、なんとなくラフというか「ああ、男の子の部屋だな」感があって意外と落ち着く。

そんなアルベールは「ソレイルの流儀に倣ってみるか」などと嘯きつつブランデー入りの紅茶を美味そうに飲んで、

「この際、距離の離れている教国は置いておくとしてもだ。我が国もソレイルも他の国とも国境を接している。これがどういう事だかわかるだろう?」

「我が国がソレイルを攻めると、他国も戦争に乗り出す可能性がある……という事ですね、兄上?」

「そうだ。でもって、そいつらがソレイルを攻めるとは限らない。逆にソレイルを援護して恩を売ろうとする国があるかもしれないし、手薄になった隙にリヴィエール王国を攻めてくる所だってあるかもしれない」

「我が国は聖女の出現によって羨ましがられていますからね。敵に回る国は多いかもしれません」

あまり険悪になると逆効果だが、駆け引きの範囲内でうちの国力を削いでおきた

い、と考えるのは利害が対立している以上は当然の話である。
「加えて言えば、ソレイルを攻め落としたとして統治する余力があるか？　という話もありますね。属国として元の王族に統治させるのでは結局、膿を落とすことはできません」
「使えそうにない王族は全員処刑して頭の良い奴だけ残すって手はあるけどな。例えばあのアンリエット殿下だって馬鹿王子共よりは上手くやるだろ」
「仮にも王族があっさりと処刑されていくものだな」
逆に王族だから、という話もある。
関わるのが国政という大きなものになるので責任も比例して大きくなる。失敗しただけならまだしも、私欲を満たすために余計なことをしたり足を引っ張ったとなれば完全にアウトだ。
レティシアは国へ帰った後で罪人として糾弾され、よくて一生幽閉、悪ければ処刑。彼女の息子たちも廃嫡になる方向で話を持って行く予定らしい。
グレゴールの件の後始末が済み次第帰国することになったアンリエットが教えてくれた。

「ところで、リディアーヌ。グレゴール殿下の助命は求めなくて良いのか？」
人一人分ほどのスペースを開けて座っているリオネルがそっとこちらを見ながら尋ねてくる。
「其方は人命が損なわれるのが嫌いだろう？　何度かそういうことがあったと聞いているが」
「特にグレゴール殿下へかける情けはございません。わたしは単に人死にが嫌いなのではなく、わたしのせいで命が失われるのが嫌いなのです」
ジゼルの件は俺が我が儘放題だったのも原因の一つだし、あの頃はまだ覚悟も決まっていなかった。さらに言うならあの女を生かしたのは温情ではなく嫌がらせだ。
「グレゴール殿下は自分の意思でわたしを狙って失敗しただけです。処刑を嘆願するならともかく、助けてくれと願い出ることはありませんよ」
「そうか。……お前は本当に覚悟を決めたのだな」
「決めたというか、わたしはもともと、感情任せに人を傷つけられる人間ですからね」

苦笑して答える。良いか悪いか――前世の価値基準で言えば悪いのだろうが、この世界では殺されないために殺すのは一つの処世術だ。

これにリオネルは微笑んだ。笑った、のではなくどこか優しげに微笑んだのだ。

「良いのではないか。お前はお前らしくやればいい。無理して令嬢らしく振る舞ってもボロが出る」

「……なにを仰るのかと思えば、リオネルさま？　実はあまり褒めていませんね？」

俺は心の中で感謝しながら、彼をジト目で睨みつけた。

真夜中の侵入者

「できるだけ早く準備を整えるから、待っていて頂戴」
「良い結果をお待ちしております」
「リディアーヌ様。またお会いいたしましょうね」
「ええ、ジャンヌ様。どうかお元気で」
アンリエットたちがソレイルへと帰国した。
しっかりと買い込んだ服飾関係の品やこっちの酒、菓子、つまみ類、工芸品などを馬車に満載し、本国へと護送されるレティシアに先だっての出発である。
レティシアの護送は彼女たちが国へ戻って手筈を整えたうえで行われる。
王族が他国でやらかした罪について説明し、理解を求めた上で護送の手配、さらに調印の準備を進めなければいけないのだから大変である。
一方、俺はわりと暇だ。
本決定前に荷造りを完成させてしまうのも逆に困りかねないし、各種手続きに関しては上層部の仕事であって俺の出る幕はない。

毒殺未遂事件もあって「あまり出歩くな」と言われている。
知人への挨拶回りも前々から進めているので急ぐ必要がない。
結局、やることと言えば勉強と魔道具作りくらいである。
「妃教育はソレイルへ赴いた後、あちらの形式で覚え直す事になるでしょう。ですが、ある程度応用は利くでしょうから引き続き教育を受けてください」
「かしこまりました、お養母さま」
予定が王子の婚約者から王の嫁に代わっただけ。礼儀作法等々、高水準で学んでおいて良かったと言うものである。
そんな中、
「待たせてすまなかった。学園襲撃の件における其方の功績、その褒美を受け取るが良い」
「大変貴重な品、有難き幸せでございます」
リクエストして作ってもらっていた俺専用の剣をようやく受け取ることができた。
長さは一般的な成人女性用より少し小ぶりなくらい。柄は両手でも持てるように

やや長め。刀身は刃が入っていない代わりに厚く丈夫に作られている。精緻な装飾が施され、複数の宝石が嵌めこまれた美しい剣だ。

宝剣、と言っても差し支えないだろう。

「今後はこちらを携帯させていただきます」

「うむ。護身のためにも、遠慮なく使ってやってくれ。……どうせなら『斬れる』剣の方が良かったかもしれぬな」

「いいえ。必要ない時は斬らなくて済む方が好都合でございます」

儀礼用の剣なら公の場に持ち込んでもうるさく言われないし、殺したくない相手に鈍器として使ってもいい。

既に宝石が嵌まっているあたり思った以上に大盤振る舞いしてくれたようだが――これならそのまま魔道具としても加工できる。

これだけの品をもらってしまったのであればちょうどいい。

「陛下。お礼に一つ、献上させていただきたい品がございます」

「礼？　褒美なのだから特に礼は不要なのだが……」

アンナではなくオーレリアが布に包まれた小箱を差しだす。父が受け取り、中を

確認して息を呑んだ。そうだろう。これを運ぶためだけにオーレリアにも来てもらったのだから。

父から手渡された王もまたその品物に絶句する。

「これは……!?」

「ウォーターオパールで作成したお守りでございます。周囲の金属装飾が新型魔石と同じ効果を発揮し、注がれた魔力を維持した上で、必要な際には宝石に籠められた『治癒の魔法』が自動発動します」

対象が誰であるかに関わらず、当人を健康な状態に戻すように設定した。もちろん過信は禁物だが、毒、切断、打撲、火傷などおよそあらゆるダメージや状態異常に効果があるはず。

効果の大きさも「心臓を貫かれても止血と応急処置が可能」な程度にはある。

持ちこたえている間に誰かがかけつけてくれれば本格的な治療ができるし、お守りに魔力を補充してやれば当然追加の治療が行われる。

「それが本当ならば国宝級の品ではないか……!?」

誰かの上げた声が正直心地いい。

聖属性――治癒魔法に適性のあるウォーターオパールを贅沢に使った上、他の作業と並行しながらとはいえ俺とオーレリアの二人がかりで一か月以上もかけて製作した品だ。少しくらい驚いてもらわないとつまらない。

「念のため効果の実証をしていただいた方が安全かと存じますが、その際も十分、安全にご配慮くださいませ」

「わかっている。……其方らが私を害そうとする、などとは思っていないがな」

国王は苦笑交じりの笑みを浮かべて俺を見つめた。

「しかし、これほどの品であれば其方自身が持っているべきであろう。最も危険なのが誰か理解していないわけではあるまい？」

「恐れながら、最も失われてはならない命は国主である陛下以外にございません。わたしの我が儘でオーレリアとヴァイオレットを連れて行くのですから、せめて御身を守る助けになればと」

高位貴族三人の魔力には釣り合わないが、文字通りお守り、保険という意味ではそこそこ役に立つだろう。

嘆息。

「……わかった。これは有難く受け取っておく。代替わりした暁には新しい王に引き継ぐとしよう」
「心より感謝致します、陛下」

レティシアの護送、および引き渡しは特に襲撃を受けたりすることもなく終わったらしい。
副団長率いる騎士の一隊が無事に帰ってきた後、しばらくしてソレイルから書状が送られてきた。
第二王妃レティシアは無事（？）塔への幽閉が決定、レティシアの子供たちも継承権はく奪の上で貴族に格下げ、私財の大半について没収が決まったという。
今後、男子は騎士団に入れられて根性を叩き直され、女子はメイドとして他者に仕える生活だそうだ。
『甘い措置ね。罪と認めさせるだけでも一苦労だったとか？』

処刑となると「横暴だ」という声も強くなる。社会的に死ぬとしても命が助かっていればまだ反対は少ないだろう。

個人的にはさくっと殺してしまった方があと腐れなくていいと思うが、処刑が新たな火種を作ることもある。

あるいは敢えて泳がせるつもりなのか。

調印式の日取りも追って決定。

式には代表としてアンリエットが出席するらしい。これはまあ予想通り。

我が国はアルベールが代表。序列で考えるとシャルルが適任だが、向こうから攻撃されることも想定した人選だ。荒事ならアルベールの方が向いているし、第二王子なので最悪死んでも大事に至らない。

『当人としてはこれを利用して点数を稼ぐつもりでしょうね』

ちなみに俺は式に出ない。

嫁入りを正式決定するだけで結婚式ではないからいなくてもいい。むしろ攫われたり命を狙われた方が困るからだ。

（もちろん可能性としては低い。ただ、嫁入り話自体がフェイクという危険も一応

は残っている）

条件の微調整についてはアルベールに裁量権がある。大きな変更が入るようなら「やっぱりナシで」と帰って来ることも含めて、だ。

「この分だと嫁入りはオーレリアの年季明け以降になりそうね」

春になってからやってきたアンリエットたちが二か月近く滞在し、帰ってからあれこれあった後、調印式の日取りが三か月ほど後に決定。

式が終わる頃には季節は夏を通り越して秋だ。

「どうせなら後一年延ばせないか、と、ノエルが嘆いておりました」

護衛として傍に控えるモニカが思い出したように言う。

来てもらうようになってから約一年半。合間に世間話を交わすことも多くなった。とはいえもちろん、騎士団長夫人である彼女はソレイルに連れて行けない。

現在、学園の二年生であるノエルも同じだ。

「わたしとしてもついてきてくれたらとても心強いのだけれど、さすがに一年延ばすのは不都合が多いのよね」

アンナにオーレリア、ヴァイオレット。よく知っている相手がごっそり居なくな

ると知ってノエルは少々ご機嫌斜めである。

俺が上手く女王になった場合、ノエルは第一の騎士である。

叶うなら一緒に行きたかったという気持ちはよくわかる。ただ、学園を中途退学した見習い騎士なんておそらく向こうでも白い目で見られる。ソレイルに赴くなら卒業後が望ましい、というのがノエルの両親および俺の共通見解である。

「別に後から来ちゃだめ、というわけでもないんだし、一年間は訓練に励んでもらうしかないわ」

「一年空ければ他の騎士に取り入られる、というのが気に食わないのでしょうけれど」

敵地と言っていい場所に護衛なしで一年間、なんてできるわけがない。

こっちから連れて行くのかアンリエットに用意してもらうのかはともかく、騎士についてもらう必要はある。

最有力候補はジャンヌである。あの子なら実力はともかく、俺をちゃんと守ろうとしてくれることだけは信じられる。

「ノエルのお兄さまに来てもらえたらちょうどいいんだけど」

「国から男性騎士を連れて行くとなると別の陰口が心配ですね」
愛人と離れたくないから連れてきたんじゃないか、とかそういう類だ。
となると連れて行くなら女性騎士。ろくにいない中、セリアの護衛も絞りだしている状況でモニカ以外の人員なんて用意できないので、この国から連れて行くのはわりと絶望的だ。
なら、向こうに用意してもらうのが手っ取り早い。今まで接点のなかった相手なら男性騎士でも「昔からの愛人」とは言われないわけだし。
「ノエルが来てくれるか、忠誠心のある騎士が育つまではオーレリアとヴァイオレットが護衛代わりかしら」
「心配ではありますが、リディアーヌ様の場合には魔道具と魔法がありますからね」
「ええ。護身用の道具は出来る限り用意しておくつもりよ」
最も重要な武器として宝剣の魔道具化も優先的に進める。この剣はこれから長期にわたって頼りにしていきたいところである。
アンナがにっこりと笑って、
「向こうへ行ったら慌ただしい毎日でしょうから、今は少しでも羽根を伸ばしてく

ださい」
「そうね。アンナも今のうちに休みを取っていいのよ」
「いえ、私はリディアーヌ様のメイドですから」
「もし休むのが苦痛ということであれば、護身用に体術など指南しましょうか？」
やんわりと休みを断ろうとしたアンナは、モニカから優しく声をかけられて硬直。その後、震える声で「適度にお休みをいただこうと思います」と宣言した。
モニカは笑顔のまま「残念です」と呟き、
「可能であればご令嬢程度取り押さえられるようになって欲しいのですが、緊急時にすぐさま動き出せる程度の心構えで手を打ちましょう」
結局、アンナは『さすがにメイドの領分を超えてるんじゃない？』という特殊訓練を受けさせられていた。

「アルベール殿下、ご武運をお祈りしております」
「ああ。何事も無く終わるに越した事はないが、交渉もある意味では戦だからな。

負けに終わる事のないよう励んで来よう」
あっという間に時が流れ、調印式に向かう一団の出発日。
見送りに出た俺に第二王子アルベールは笑って答えてくれた。首にかかった鎖が軽く持ち上げられると、そこから出てきたのはウォーターオパールのお守り。
「父上が持って行けとさ。まったく過保護な事だ」
「殿下を心配なさっておいでなのです。あなたさまは決して捨て駒なのではないと」
「わかっている。これを無事に終わらせれば少しは点数になるだろう」
ぽん、と、頭に手が乗せられ、
「おっと。そろそろ子供扱いも終わりにした方がいいか」
「構いませんよ。下手に女性扱いされるよりも心地良いですから」
「そうか」
俺たちは笑って別れた。
『これで、あとは待つだけね』
この機を狙った国王暗殺の可能性もなくはないが、王の護衛は俺の役割ではない。むしろ仕事を増やさないように屋敷に籠もって時を過ごし――。

アルベールが出発してから二日後の夜、事件は起こった。
夜の静寂を切り裂くようにして鳴り響くベルの音。
自室の窓に仕掛けておいた警報の魔道具だ。音によって意識を急浮上させた俺はベッドから跳ね起きると、傍に置いてあった宝剣を手に取る。
もう一方の手で放った魔法の明かりが寝室を照らし、室内に立つ黒ずくめの『女』の姿を照らし出した。
覆面のせいで顔は見えない。スカート等で隠しているが服のあちこちにはナイフ等々が仕込まれている。
「夜遅くに何の用？」
開け放たれた窓。
侵入者であることは間違いないが、相手に襲い掛かってくる様子はない。一定の距離をあけて立ったままこちらを見つめて、
「アンリエット殿下からの救援要請をお持ちしました」
と口にした。
「レティシア派の残党による調印式襲撃計画がございます。リディアーヌ様へ至急

お知らせせよ、と」

それを聞いた俺は一瞬驚きに身を震わせ、

「そう」

宝剣を一閃――することもなく魔法を用いて不可視の刃を生成、女の左腕を一瞬にして斬り飛ばした。

「顔は変えてるんだろうけど、声帯までは弄らなかったのね。……声でバレバレよ、あなた」

しばらく動けなくなる程度に加減した電撃を放ち、倒れたところで駆けつけてきたアンナと共に彼女を拘束、とりあえず腕は再生させずに傷だけ塞いで身ぐるみを剥いだ。

「アンナ、至急城へ連絡を……いえ、やっぱりいいわ。ヴァイオレットと念話できるんだから、あの方とも繋がるでしょう」

俺は念話をリオネルに繋げ、緊急事態を国王へ伝えるよう話をつけた。

使者と王都での騒動

「何故だ」

かつて二度も俺の邪魔をしてくれた女暗殺者は口にあてられていた布が取り払われるなりそう尋ねてきた。

覆面を取り払った顔はやはり以前とは変わっている。

「腕を落とした理由なら、あなたに恨みがあるからよ。生かしておいた理由なら、あなたの発言が本当だった時に困るからね」

城へ連れて来られても困ると指定されたのは騎士団の本部だった。

女は窓の無い部屋にガチガチに拘束された状態で座っている。もちろん思いつく限りの武装解除は行った後だ。

普段ならまだぐっすり眠っている時間なので少々眠い。

急ぎだったのでドレスも普段着用の比較的シンプルなものだ。

「口の中に吹き矢まで仕込んでいたのは驚いたわ。それから自爆用の魔道具も装備していたみたいね」

「必要な装備だ」
「敵対派閥から狙われた時のため？　それとも、この国の誰かを殺すためかしら」
周りには数人の兵士が守りを固めている。俺の前にも副団長が立ち、万一にも攻撃が届かないようにしている。
裸に剥いた上に口の中まで調べたのでもう武器はないと思いたいが。
「で、調印式が襲われるっていう件だけど」
「嘘ではない」
「ええ。あなたが持っていた書状は本物みたいね」
アンリエットの直筆で、筆跡は俺が覚えているのと一致した。グレゴールの兄――レティシアの長男が旗頭となり、レティシア・グレゴール派の騎士が参加してアンリエットおよびアルベールを襲撃する計画があるらしい。
リヴィエール側に救援を要請したい、と書かれている。
「今、手の空いている騎士が準備を進めているわ」
そう言うと彼女は安堵したように小さく息を吐いた。
「感謝する」

「？　ああ、勘違いしないでね。まだ救援に向かうと決まったわけじゃないの」
「何？」
準備しているのは念のため。他の可能性も考慮したうえで早急に動けるようにするためだ。
「質問なんだけど、あなたは今、誰の命令で動いているのかしら？　アンリエットさま？　それとも別の人？」
「もちろん、アンリエット様だ。あの方からお前に書状を渡すよう命令された」
「そう。アンリエットさまから私に、ね」
俺は思わず笑ってしまった。吐息が小さく音を立てる。
「リディアーヌ様？」
「副団長さま。わたしはこの書状が罠だと思います。救援に向かうべきではありません」
「――何故だ」
「書状を持ってきたのがあなただからよ」
簡単な話だ。

俺は嫁入りの条件として彼女の首を要求した。それをあのアンリエットが忘れるわけがない。となれば、彼女を寄越したのは「好きにしていい」というメッセージだろう。

『やっぱり知ってたんじゃない、というのはこの際置いておくけれど』

一度はしらばっくれておきながら今になって譲ってくれたのは事情が変わったからに違いない。例えば、別の人間からも指示を受けているとわかったから、とか。

「襲撃の情報はあなたからアンリエットさまに持っていったんじゃない？　そして、アンリエットさまはそれを鵜呑みにしなかった。これは罠だと伝えるため、あなたをわたしのところへ送り込んだのよ」

調印式を襲撃すると見せかけた救援部隊狙いといったところか。

俺の発言に副団長は顎へ手を当て、

「……確かに。アルベール殿下は襲撃を前提として準備をしておいでです。予想通りだったからと言って安易に救援を送る必要はない」

「はい。それにそもそも、本当に警告のつもりならアルベールさまに連絡すべきはずです。どうしてわざわざわたしに伝えてきたのでしょう」

まあ、俺も当事者だし、城へ忍び込むより難易度は低い。実際リオネルへの念話も可能だったわけで、上層部に繋ぐには適任と言えば適任なのだが。

『アルベールさまが危ない！　助けに行かなくっちゃ！　……なんて言うわけないじゃない、そんなの飛んで火にいる夏の虫よ』

副団長が指示を出し、騎士の一人が伝令のために出て行く。ここまでの情報、および推測は団長や国王、父に伝えられ最終的な判断が下されるだろう。

「副団長さま。この女はもう用済みかしら？　斬っても構わない？」

「お待ちください、リディアーヌ様。まだ尋問の途中ですし、貴女が手を汚される必要はございません」

「残念。……まあ、情報を引き出すために生かしておいたんだものね」

腕一本斬り落としてやったからある程度留飲は下がった。

不可視の斬撃は距離が離れるほど精度と威力が落ちる、という欠点があるものの、近接距離においてはレーザー以上の初見殺しだ。

初動も何もないので対策のしようがほぼない。この女にも通用する、ということがわかったのは収穫だった。

俺は女を見つめて、

「今、どんな気持ちかしら？　あなたの目的は果たせそう？」

アンリエットは俺からの要求内容について彼女に伝えなかったのだろう。

つまり、彼女は飼い主から捨てられたわけだ。

「私は暗殺者だ。命じられた仕事を全うするだけ。……失敗すれば死が待っているのは当然のこと」

女は淡々と、表情を変えることもなく答えた。

受けた命令にもよるが、シャルロット誘拐の件も失敗と言えば失敗だ。アンリエットだけでなく、もう一人の飼い主の信用も落ちているのか。

飼い犬というのは大変だ。俺の寝込みを襲っていれば最低限の任務は達成できたかもしれないのに、それ以上を強制された結果がこの有様。

「副団長。どうか十分にご注意ください。自分の身体の関節を外して拘束から抜け出すくらいのことはするかもしれません」

副団長は一瞬「そんなびっくり人間がいてたまるか」という顔をしたものの「了解しました」と真面目な表情になって頷いてくれた。

騎士団本部から出た俺はそのまま馬車で城へと送られた。

夜の城というのは結構不気味だ。幸い、主だった通路は照明が灯されており明るかったのが幸いである。全部を魔法で賄うのは魔力的に厳しいからか、照明にはオイル式のランプも併せて用いられている。

会議室にはアルベールを除いた首脳陣が勢揃い。さすがに王妃は休んでいるらしく不在で、代わりに（俺が念話で叩き起こした）リオネルがいる。

というか、俺が参加する必要はあるのだろうか？　まあ今更だし、護衛対象を一箇所に集める意味もあるのだろうと思いつつ挨拶をして席へ着く。話は既に大方伝わっており、今の議題は救援要請を完全に無視するか否か、だった。

「救援部隊を出させるのが敵の狙いだとして、作戦がそれで終わりとは限らないだろう？　こちらが動かないのであれば調印式の参加者を挟撃する腹積もりかもしれぬ」

リオネルが簡潔に説明してくれる。

確かに、救援部隊を道中で叩くつもりならその部隊は国内に入っているはず。ソレイル側に待機している部隊と共同作戦、という可能性はある。

人数的に大した規模にはならないはずだが……自爆の魔道具と平民を用いるつもりなら攻撃力は十分に確保できる。

「アンリエットさまは敵の計画をある程度把握しているはずです。であれば当然、十分以上に警戒しているのでは？」

必要と判断すればアルベールとの情報共有も行うだろう。両国の協力があればそうそう心配はない。

「救援要請自体がソレイルの罠、という可能性もあると思いますが……」

「アルベールもその可能性は承知していた。あらゆる可能性を考えて対処するそうだ」

そうか、念話か。

親子間なら連絡がつく。危険性を知っていれば奇襲を受ける心配はぐっと減るはずだ。

「敵は本当に国内へ侵入しているのでしょうか？　国境の警備とて甘くはないはずです」

これはリオネル。

王もこれには頷いて、
「易々と侵入されたと思いたくはないが……我々もあらゆる可能性を考慮すべきだろうな」
「あるいは、国内の攻撃部隊は純血派で構成されているのかもしれませんね」
シャルルの発言にも一理ある。
リヴィエールの国民なら国内にいるのは当たり前。彼らに武器を供給するだけなら難易度はぐっと下がる。
まあ、だとすると純血派は革命どころか売国する気満々、ということになってしまうが……。
「賊の活動が予想される以上、街道の警備は詰めるべきか」
「アルベールへの救援はともかく、治安維持のために騎士の派遣は必要でしょう」
騎士＋兵士からなる小規模なパトロール部隊を複数作り、街道の見回りをさせることになった。
敵が馬鹿正直に街道を通るとも限らないが、やらないよりはマシだ。併せて聞き込みを行えば不審な人物の噂を聞けるかもしれない。

俺は嘆息し、呟くように言う。

「できるのであれば純血派を殲滅してしまいたいですね」

「騎士団の大規模調査によって少数ではあるが捕縛者も出ている。年単位で活動が制限されていた以上、大した数は残っていないと思いたいところだな」

アルベールたちは明日にも辺境伯領に到着。三日後には調印式に臨むことになる。あまり時間はない。騎士団には早急な部隊編成および見回りの開始が命じられた。

併せて、連絡のつく地方領主たちにも警戒の強化が指示される。辺境伯にはアルベールから伝達できるし、公爵領にも父から祖父へ念話が可能だ。

なお、俺は「家で大人しくしているように」と厳命された。

「リディ。くれぐれも軽率な真似は控えなさい。誰と婚礼を上げるにしろ、お前の身体はお前一人の物ではないのだ」

「かしこまりました、お父さま。……わたしだってこの状況で出しゃばるほど考えなしじゃないわ。安心して」

小規模で隠密行動とかされるとむしろ俺とは相性が悪い。堂々と大人数で来てく

れればむしろ魔法で「どーん！」と吹き飛ばせるのだが。
「ならば良い。……モニカ。リディアーヌを頼む」
「心得ております。この命に代えましても必ず」
「うむ。……夜分遅くに呼び出して済まなかったな、リディアーヌ。明るくなるまで城に泊まって行くといい」
「ありがとうございます、陛下。ですが、母や妹が心配ですので屋敷に戻りたいと思います」
「そうか。ならば馬車を回そう。くれぐれも気を付けるのだぞ」
程なくして「準備ができた」との知らせが来る。俺は皆に一礼してから立ち上がった。
「リディアーヌ」
「そんなに心配そうな顔をなさらないでください、リオネルさま。モニカもいるのですから大丈夫です」
リオネルがすかさず呼び留めてくる。お前はいつからそんなに心配症になったのか。

「むしろ、リオネルさまこそお気をつけください。使用人や兵の顔はちゃんと全て憶えていますか？　ものを口にする時は必ず毒見を通してくださいね」
　彼の瞳を見つめて問えば、むっとした様子で返事がきた。
「城に出入りする人間が何人いると思っている。……心配されずともわかっている。私とてこんなところで死ぬつもりはないからな」
「お互い長生きいたしましょう。……それでは、また」
　城の入り口で馬車へと乗り込む。そこで俺は少し考えてからモニカにお願いをすることにした。
「モニカ。御者台に同乗してくれないかしら？」
「自爆対策ですね。……ですが、それでは中の警護ができなくなります」
「中にいる分には基本的に安全だもの。生半可な矢は通らないし、わたしもアンナも防御用の魔道具を持っているから」
　アンリエットたちがやられたように馬車ごと直接爆破されるのが一番危ない。そう告げるとモニカもすぐに納得してくれた。
「かしこまりました。では、異常があれば即座に警告いたします」

「怪しい人間は全て排除して構わないわ。お触れも出ていることだしね」
馬車爆破の一件後、「貴族の馬車へ不用意に近づいてはならない」とあらためて周知されている。殺されても文句言えないぞ、という脅し付きだ。よって、前に飛び出てきた時点で悪いのは相手方である。
「さすがになにも起こらないと思うけれど」
「用心するに越したことはないでしょう。夜は視界も利きませんから」
俺とアンナを中に、モニカを御者台に乗せて走り出す馬車。
馬車にはランタンが吊るされている他、魔道具のライトまで付いている。お陰である程度の見晴らしはあり、普通に進む分には何の支障もない。
問題は、異常が起こった時だ。
城と公爵邸の中間あたりに差し掛かった時、俺たちの耳に馬のいななきと小さな爆発音が届いた。
「ちょっと、噂をすれば、っていう話なわけ!?」
急に加速し始める馬車。次いで衝撃。近づいてきた不届き者をモニカが炎の魔法で撃退、念を入れてとどめを刺すために撥ね飛ばした、といったところか。

と。

「何者です!?　そこをどきなさい！」

悲鳴に近いようなモニカの声。ただ事ではない。

無茶を承知で窓を開け前方を見ると、五、六もの男が前方に立ちはだかっている。容易には撥ねられない人数で強引に止めに来たのか。

馬車は自動車ほど無茶がきかない。御者はやむなくスピードを落とし、モニカは炎の矢を複数作り出して男たちを攻撃する。しかし、魔力の防壁が矢を阻んで致命傷を防いでしまう。

「貴族を殺せ！」

「俺たちで国を変えるんだ！」

夜明け前に相応しくない怒号が響く。モニカは矢ではなく火球を生み出すも、男たちが構わず向かって来るのを見て舌打ちする。距離が近いと爆風がこっちにまで影響してしまう。

「いいわ、モニカ！　撃ちなさい！」

馬車から飛び出しつつ指示。即座に放たれる火球。着弾し、爆風が生まれると同

時に俺は風を放って自分たちへの影響を阻止する。そこへ別方向から飛来する矢。魔道具の一つが効果を発揮して矢を弾く。

振り返った俺は魔法で暗視を強化しつつ、レーザーで射手の心臓を貫いた。

ぐらり。倒れて屋根から落ちていく射手は空中で爆発を起こし、とある屋敷の壁に穴を空けた。

ほぼ同時に城の方からも爆発音。

救援要請を囮に騎士の数を減らした上、純血派を使っての王都襲撃か。

『いいわ。向こうから来たのなら仕方ないもの！　予定通り、ここで面倒な奴らを一掃してしまいましょう』

使者と王都での騒動 2

火球を受けても倒れなかった男はモニカが氷の槍でとどめを刺す。
自爆魔道具は使用者の命をもエネルギー源とする。下手に生かすよりは良いと思ったのだが、後から出てきた五、六人の中に爆発する者はいなかった。さすがに全員分用意できるほどの余裕はないと言うことか。
念のために距離を取ったまま様子を見ていると、後方から新しい気配。
「死ね、リディアーヌ・シルヴェストル！」
新手が二人。
宝剣に手をかけつつ不可視の斬撃を放ち、彼らの首、手足を切断した。モニカに倣い、俺も氷の槍を降らせて分解したパーツを破壊。
どこにどんな形状で魔道具を隠しているかわからないための措置。功を奏したのか、それとも最初から持っていなかったのか爆発は来なかった。
全身を一発で吹き飛ばせれば話が早いのだが、市街地で炎系の魔法はできるだけ控えたい。

「さっきの火球は騎士団を呼ぶのにちょうど良かったと思うんだけど……どうしたものかしら」

念入りに攻撃した結果、前にも後ろにもグロい死体が出来上がってしまった。外に出てこようとしたアンナがそれを見て口を押さえながら引っ込んだくらいだ。

俺としてもあまり見たい光景ではないが、前世で見たホラー映画なんかのお陰で多少は耐えられる。血とか自分のを毎月見ているし。

「城も襲撃されたようです。騎士団も手一杯かもしれません」

「面倒ね。残しておくわけにもいかないけれど、回収するのも骨だわ」

移動するにしてもどこへ向かうべきか。

城も気になるが、家の方も心配だ。敵の増援があるとしたら下手に移動するよりこのまま馬車を中心に防衛した方が良い可能性もある。

しばし悩んでいるとこちらへ向かってくる靴音。純血派ではなく、最寄りの屋敷の主とその護衛だった。

「爆発音に起こされ慌てて確認すれば、夜間の警備人員が全員殺されていた」

「こちらは城からの帰り道に襲撃を受けました。自爆されないように全員殺すしか

なかったのですが……」

彼らと情報を共有。貴族街に平民がこんなにいて気づかれなかったのは、気づくべき警備の人間が黙らされていたからしい。

屋敷の壁まで爆破されたこの家はとんだとばっちりである。

「わたしたちが倒した相手はそれほどの手練れに見えませんでした。警備兵を殺した者と顔を合わせませんでしたか？」

「いや。我が家に残されていたのは警備兵の死体と爆発の跡だけだ」

「妙ですね。だとすると何処へ消えたのでしょう？」

俺は少し考えてから家へ戻ることにした。騎士団がやってきた場合の対応などはこの可哀そうな紳士に一任する。

「リディアーヌ様、何かお考えが？」

「自慢できるほどの考えじゃないわ。……ただ、狙いはわたしなんじゃないかと思っただけ」

再び馬車に揺られながらセレスティーヌに念話を送る。幸い屋敷は無事だった。可能な限りの兵を動員し、警戒にあたらせているという。

『杞憂だったかしら。いいえ、でも』

屋敷に到着する。警戒中の兵たちが敬礼で出迎えてくれ、俺たちの無事を喜んでくれた。

「誰か怪しい人間が来なかった？」

「いいえ。屋敷の中、および周辺は警戒していますが、今のところ異常はありません」

忍び込んできたあの女暗殺者だけか。少人数の方が見つかりづらいのだから理には適っているが、

「……なっ!?」

「モニカ、どうしたの？」

夫――つまり騎士団長と念話していたモニカが不意に声を上げた。彼女は珍しく動揺した様子で俺を見つめ返してくる。

「混乱の隙を突かれ、拘禁中だった例の暗殺者を取り逃がしたそうです」

「――っ」

『ああもう、だから注意しろって言ったじゃない！』

セレスティーヌにアラン、シャルロットは屋敷の食堂に集まっていた。
「お姉様！」
「リディ、無事で良かった。怪我はないかい？」
「大丈夫よお兄さま。シャルロットも怖かったでしょう？　……お養母さま。残念ながら状況は予断を許さないかと」
「ええ。旦那様も含め主要な人間への被害は出ていないようですが、城も城壁が一部損壊、自爆してくる敵の対処に追われているようです」
自爆魔道具の大盤振る舞いだ。グレゴールたちが持ち込んだのが一つではなかったと見るべきか？
「それだけではありません。わたしが捕らえた女暗殺者が逃走しました。……おそらく、彼女と同等の手練れが逃がしたのでしょう」
貴族屋敷一つの野外警備兵を全員殺した何者か。次善の策として屋敷で待っているのかと思ったが……タイミング的に仲間を逃がしに行った、と考える方が妥当だ。
彼女たちは果たしてどこに向かうのか。
「お養母さま。屋上のバルコニーをお借りできませんか？」

「リディアーヌ。まさか、囮になるつもりですか？」
「はい。敵の狙いにわたしが含まれているのなら、わかりやすい場所で待ち構えた方が被害を少なくできます」
屋上バルコニーは星を見たり日光浴をしたり、有事に弓兵を配置したりするために設けられているスペースだ。小中学校の屋上程度のさほど広くはない（当社比）空間だが、高いところに明かりと共に待っていれば目立つだろう。
「屋敷に引きこもった結果、警備兵を軒並み殺されるようなことは避けたいのです」
「賊を食い止めるためにこそ兵がいるのです。貴女が自らを危険に晒す必要はありません」
「いいえ。……あの女はわたしが倒す。心残りなくソレイルへ赴くためにも必要なの」
どうやら向こうの王族は暗殺が大好きらしい。物騒なことこの上ないが、だからこそ内側から大掃除が必要だ。
もしアンリエットがグルだった場合は泣かす。
しばし睨み合う俺たち。セレスティーヌはため息をついて、

「兵を連れて行きなさい。それから、夜明けを迎えたら屋敷の中へ戻る事。……絶対に傷を残さないのを前提とした上で、です」
「ありがとうございます、お養母さま」
「お姉様、危険です！」
「大丈夫よ、シャルロット。この程度で躓いているようじゃ女王なんて夢のまた夢だもの。……お兄さま、シャルロットとお養母さまをお願いします」
「……わかった。騎士も連れて行くかい？」
「いいえ。モニカがいるもの。こっちはそれで十分だわ」
あまり人数が多くなっても動きづらい。俺は食堂にアンナを残し、代わりにオーレリアを拾ってから屋上のバルコニーへ出た。
据え付けの照明を起動させ、俺たちの存在をアピール。
「後は任せておきなさい、リディアーヌ」
火の粉の鱗粉を散らしながら飛ぶ炎の蝶が空へと浮かび上がる。
「師匠もそれ、使えたんですね」
「何度も見せられていれば真似くらいできるわ」

炎は何よりのアピールになる。
そのまましばし、師によるデモンストレーションを眺めていると、だんだんと薄くなりつつある夜の闇を最大限利用するようにしながら屋根をつたって駆けてくる二つの人影。
速い。
身体強化なしの人間の速度か、と言いたくなる。あんなのはさすがに一般の兵ではどうしようもないだろう。実際、バルコニーから弓で狙っても全く当たらない。蝶を消したオーレリアとモニカが氷の針を雨のように降り注がせても大半をかわされ、当たりそうになった一部もマントを利用して防がれてしまった。
そうしているうちに二人は屋上まで到達。
どちらも女だ。片方は片腕。さすがに装備までは取り返しきれなかったのか、一人分を二人で分けたような装備構成になっている。
「まさか本当に来るなんてね」
当然、こっちも準備は万端。
着替えている暇はなかったが、ドレスのスカートにはスリットを入れて動きやす

くしてある。宝剣は鞘に納めたまま右手で握った状態。刀身で斬るつもりはないのだから抜くか抜かないかは些細な問題でしかない。

「誰の命令なのかしら？　冥途の土産に教えてくれない？」

「答える必要はない」

計四人。護衛として配置された兵が二人ずつ斬りかかるが、女たちは最小限の動きでかわし、逆に兵の一人に蹴りを叩き込んだ。悲鳴を上げて転ぶ仲間にもう一人が動揺したところで俺とオーレリアにナイフを投擲。

見えているナイフは当然、障壁で防いだが――彼女らはその隙に再び動き出している。護衛を無視して俺たちの方へ。

舌打ちするオーレリアと背中合わせに電撃。速度があり殺傷力を調整しやすく、動きを止めさせる副次的効果も見込める。極めて優秀な術だが、予想していたように放たれたナイフが避雷針の如くそれを吸収してしまう。

『師匠はすばしっこい相手が苦手なのよね。運動が大っ嫌いだから』

面倒なので突風を生み出して牽制。さすがにこれは対処できないのか斜め後ろに飛んで勢いを殺す。ついでとばっかりに引っ掴まれた兵の一人が風に巻き込まれて

屋根を転がっていくが……まあ、大きな怪我にはならなさそうだ。
むしろ人数が減って動きやすくなった。
残った兵が斬りかかる。敵がそっちに気を取られたところで立て続けに電撃。これもナイフで防がれたが、武器のストックはどんどん減っていく。
『魔法が使えない以上、対処の方法は限られてくる。いくら戦闘技術と身体能力が優れていても防げない攻撃はある』
兵がさらに一人バルコニーから放り捨てられる。こちらに迫ろうとしてくる二人のうち、オーレリアに向かった方全な方をモニカが迎え撃った。
「前の小娘よりは腕が立つようだな」
「ノエルだってあの頃よりずっと強くなっているわ」
俺に向かってきたのは片腕の方――あいつだ。
電撃では駄目だとレーザーで狙えば、瞬間、光が空へと打ち上げられた。ぴかぴかに磨かれたナイフの表面で跳ね返ったらしい。偶然？　いや、電撃を防ぐつもりだったのだとしても攻撃のタイミングと狙った部位はバレている。
『どうやって？　まさか、目を見ればわかるとでも言うわけ!?』

レーザーは光なので反射する。
もしも精巧な鏡で正反射させられれば俺がカウンターを受ける恐れさえある。そもそも『合わせる』ことさえ困難だと思っていたが……一体、どこまで超人なのか。
もし、こんなのがいっぱいいるのなら純血派の言い分もわからなくはない、などと余計な思考を浮かべつつ、俺は宝剣を跳ね上げるように持ち上げ相手に突きつけた。
「っ」
途端、無理な姿勢変更を行ってまで横に跳ぶ彼女。見えない斬撃に殺されかけたことは記憶に新しい。あれは彼女でも「事前察知してかわすしかない」のだろう。
『やっぱり初見で殺しておくんだったわ』
とにかく俺は宝剣を通して魔法を起動。生み出された炎が鞘を破壊しながらバルコニーの床を焼く。避けられたせいで炎は当たらないが、これでいい。
晒された刀身が照明を受けて美しく輝く。
奥行きのある不思議な質感は、ある方法によって加工された金属ならではのものだ。

「まさか」
くるっと振り返って切っ先を女へ。『突き』の形で放った不可視の刃を彼女は床に転がって回避。
無防備になったその身体を、俺は不可視の斬撃で断ち切った。
二つに分かれて転がる胴体。さすがにもう、起き上がってくることはない。
「できれば、詳しい話を聞きたかったわ」
情けをかければかけるほど、こいつは強くなって帰ってくる。ここで殺せなかったら次は不可視の斬撃にさえ対応されるかもしれない。情報を持ち帰らせないためにも葬るしかなかった。
可能であればもう一人は無事に捕らえたいところだが。
「リディアーヌ様。こちらもちょうど終わったところです」
見れば、もう一人は首から下を凍結させられた状態で気を失っていた。モニカが牽制している間にオーレリアが凍らせ、身動き取れなくなった相手の意識をモニカが心の魔法で奪ったらしい。えげつないというか素晴らしいというか迷う連携プレイだった。

「二人ともありがとう。……体温低下で死なれたら困るから、解凍しつつ身ぐるみ剥いで拘束しましょうか」

１００℃近い熱湯に丸ごと放り込んでも起きなかったのでそのまま目的を完遂した。

しばらくすると城の方も混乱が収まったらしく、拘束した女暗殺者（二号）は騎士団に回収してもらった。もちろん、今度こそ逃げられないように、と口酸っぱく文句を言った上でだ。

「これでなんとかなるかしらね」

事後処理は大人たちに任せ、睡眠不足＋消費した魔力からゆっくり休んだ。

目覚めた俺はアンリエットとアルベールが敵の襲撃を無事片付けた、という知らせを受け、本当に安堵したのだった。

真夜中の乾杯

先の事件によって捕縛された純血派は十名以上、死者はその二倍程度の人数に上った。

城が攻撃を受けた点を王家は重く受け止め、取り締まりをこれまで以上に強化した。捕縛者に心の魔法を用いることで潜伏する仲間をあぶり出し、捕らえた仲間にまた自白させる。用済みになった純血派は処刑という慈悲を捨てた方策だ。

反発も起こったが、強気に出る材料は十分に揃っている。批判が考慮されることはなく、王侯貴族に逆らう罪がどれほど重いかあらためて周知される結果となった。

『おかげで心の魔法の使い手が引っ張りだこなのよね』

年季が明けていないオーレリアは騎士団の要請を断れないし、モニカにも「可能であれば手伝っていただきたい」と話が来た。俺は残念ながら我が強すぎる上に人生経験が足りなくて心の魔法には向いていないので役目は回って来なかった。

調印式に向かったアルベールは無事に帰ってきた。

辺境伯家に到着した彼の下にアンリエットから使いが到着。敵対勢力からの攻撃

を察知したため掃討したい、との内容に呼応し、共同戦線を張ったらしい。
　別にアルベールが出て行く必要はなかった。むしろ罠だった場合は危険だったわけだが、
『アンリエット様を信用した理由？　勘としか言いようがないな。あの方はお前と同じで、騙し討ちはしても裏切りはしないタイプだろう』
　まあ、暗殺者の件は黙っていたわけだが。知らないと言ったのはギリギリ嘘じゃないし、俺の性格を知っていて送ってくれたのも事実。
　結果的にリヴィエール王国はソレイル王国にさらなる恩を着せることに成功。敵の規模も大きくはなかったため、こちらの連合部隊が十分に注意して挑めば敵ではなかった。
　調印式を潰そうとしたレティシア派は全員処刑、彼らの象徴であるレティシアも短い幽閉を終えてこの世を去ることになった。
　最初から始末しておけばこんなことにならなかった、というのは結果論であり、余計な反乱を起こしてくれたから思い切った一斉処分に踏み切れたというのもある。その分、賠償がさらに上乗せされることになったが。

『いや、もうこれ、わたしが行く前に国庫が空になるんじゃない？』

実際はレティシア派の溜め込んでいた資産を転用できるので心配はないのだろうが、王の所業に反発した一派のせいで他国がどんどん潤っていくのだから皮肉な話である。

ただ、アンリエットも「うまいこと反対派を処分しましたね」では済まない。裏の意図があったとはいえ俺に誤情報を流したのは事実だし、あの女暗殺者と繋がっていたことも隠していた。この件については正式に抗議を行い、ソレイル側としては謝罪および賠償金の他、俺の嫁入りをもってアンリエットを王族から除外し、俺の側近とすることを表明した。

調印が成った時点で国王によって「自身の死後はリディアーヌに王位を継承する」と大々的に宣言されたこともあり、前正妃が全面的に傘下に入る形での嫁入り、王位引き継ぎのための準備期間となる。

教国もこれを支持したので反対派も下手に手が出せなくなった。いや、今までのも十分暴挙なのだが。

アンリエットとしてはある程度予定調和なんじゃないか、というのが若干不満だ

が、王族でなくなったアンリエットを王族になった俺がどう扱うかは自由になるわけで、自分の命を賭けた駆け引きと考えるとそれほど嫌いでもない。

調印式は当初の予定よりもこちらに有利な条件で終了。

ここまで来るともはや「攻め込んで征服してもいいんだが？　賠償金だけで済ませてやってるんだからうちの公爵令嬢を丁重に扱えよ？　これ以上嘘をついたらわかってるだろうな？」というレベル。

これでもし俺に何かあったらそれこそ戦争する大義名分が立つし、道義的に他国がソレイル側に味方する可能性もぐっと低くなる。

もちろん、俺が女王になったらリヴィエールとは協調体制を取る。隣国へ嫁ぐのはぶっちゃけ俺の我が儘だが、祖国には輸出入とか色々な面で利益を投げられればと思う。

輿入れは春を待って行われることに。

正妃として迎え入れるにはかなり慌ただしいスケジュールだが、公費が許す限り盛大に祝ってくれるらしい。

もったいないとは言うなかれ。箔付けの意味もあるのだろう。

王は歳だから長時間の式典とか体力的に辛いだろうし、国民を巻き込んで広めるのが手っ取り早い。

捕らえた女暗殺者二号だが、心の魔法まで用いた尋問の結果、わかったことがある。

――彼女たちは魔法による人体改造の被験者だった。

平民の孤児を拾ってきては魔法による強化実験を施し、用済みになったら捨てるというのを繰り返しているマッドな研究者がいたらしい。顔や声を憶えさせない用心をしていたらしくどんな人物かは記憶していなかったが、少なくとも相当ヤバい奴である。

成功作、というか生き残った子供を捨てる先は基本的に決まっており、彼女たちはその貴族の下で私兵として教育を受けていた。一定以上の練度に達した者は野に放たれて各地に潜伏し、必要な際に命を受けて『仕事』を行うのが役割だったらしい。

あの女がバルト家にいたのは武装メイドがいっぱいいて紛れ込みやすかったから、というわけか。

で、雇い主の失脚を察知して逃走。元いた国に戻って工作員を続けていたと。

『本当、わたしやオーレリアも真っ青のマッド魔法使いね』

自分の身体に魔石を埋め込んでいたオーレリアの母親だって娘や使用人には手を出していない。改造するだけしてデータを取り終わったらポイ、というのもやばい。何かに利用するためではなく研究したいからするというタイプだ。

そんなやばい奴がそうそういるわけもない。ソレイル国内の詳しい情報が手に入れば当たりはつけられるだろう。いずれ何らかの対処は必要になる。

暗殺者を飼ってる奴の方は情報が揃い次第、うちの国からソレイルに厳正な対処を要求する。

『ここまでガタガタの国だもの。わたしが好きにいじっていいわよね？　駄目って言われてもやるけど』

さて。

季節は秋。調印式が終わってまだ間もないタイミングで俺の十三歳の誕生パーティーが執り行われた。

会場は公爵家の屋敷である。

婚約解消が予定されているのに城を使うのもアレだし、この国で行う最後のパーティーになるかもしれないとあって父が家でやりたがったからだ。

年々上がっていく知名度のせいで参加者は大量。かなりの広さがある屋敷のホールでさえ手狭に感じるほどだった。俺はそんな中、貴族たちから嵐のような「おめでとう」を聞くことになった。

「隣国へのお嫁入り、誠におめでとうございます」

タイミング的に「誕生日おめでとう」よりもそっちの方が多かったのは良いのか悪いのか。

少なくとも、一応まだ婚約者という建前で出席したリオネルはとても不服そうだった。そりゃそうだ。形式的な祝福だとしても「王子より王様の方が格上ですよね！」みたいな空気を出されたらイラっとする。なので空気を読める貴族は失礼にならない言葉を選んでいたが。

「私はお前の誕生日を祝いに来たんだがな」

「心から感謝しております。ですから、そのようなお顔をなさらないでくださいませ」

「不敬な貴族達が悪い。それに」
「それに？」
リオネルは軽く俺を睨みつけて、
「お前と酒を飲む約束もフイになってしまっただろう」
「あら。憶えていてくださったのですか？」
「忘れるわけがないだろう」
若干頬が赤い。前に「十二歳から飲み始める」と言っていた通り、今はもう酒を口にしているのだが、だからといってこれはワインのせいではないだろう。
「お前こそ、まさか忘れていたのか？」
「まさか。ちゃんと覚えておりました。その証拠に用意もしてあります」
「用意だと？」
「ええ。リオネルさまのお時間さえよろしければ、ですが」
未だ賑わう会場の中、俺はもうすぐ婚約者でなくなる男にそっと囁いた。
「パーティーの後、静かな場所でお酒に付き合ってくださいませ」
その日、リオネルは屋敷に泊っていくことになった。

もちろん俺の部屋に泊まるわけではないが、お目付け役や使用人同伴の上で二人っきり（？）になることは許された。

俺の部屋に二人で向かい合って座り、アンナにワインを用意してもらう。

「公爵領産のワインか」

「ええ。あの時のお土産を自分用に一本とっておいたのです」

自分の前に置かれたのがワイングラスだというのがなんだか不思議な感じだ。前世も含めるとかなり長いこと酒はお預けを喰らっていた。ようやく飲めるのかという感慨と、飲んでもいいのかという奇妙な不安が入り混じって落ち着かなくなる。

アンナが俺の目を見てにっこりと微笑み、ワインの栓を抜こうとして――うまく行かずに悪戦苦闘し始めた。そうか、俺が初めてなんだからアンナだってあまり経験はないのだ。見かねたセルジュが手伝ってくれて無事に栓は引き抜かれた。

お手本としてリオネルのグラスにとくとくとワインが注がれ、見様見真似のアンナが俺のグラスにも注いでくれる。

こつん。

小さくグラスを打ち合わせて乾杯する。

「リディアーヌの十三歳の誕生日を祝って」
「リオネルさまの前途が明るいことを願って」
果実の芳醇な香り。葡萄ジュースとはどこか違う口当たりに「おっ？」と思った後、酒の通り抜けた後の喉に熱さを感じる。
おつまみはナッツとチーズの盛り合わせ。塩気のあるそれらを口にしてから二口目を口に含むと、なるほど、酒に合うという感覚が少し理解できた気がする。
グラスに残った少しのワインをくいっと飲み干してひと息。
「これは、なかなか良いものですね」
「うむ。口当たりが良い一方で深みもある。女性でも飲みやすかろう」
「ええ、お養母さまも好んでいらっしゃるようです」
寝起きから少し経った頃、あるいは少し眠くなってきた時に近い感覚が身体を包む。
本格的な気怠さではないものの、理性という名のリミッターが甘くなって思い切った行動に出てみたくなる。飲み過ぎると文字通り身体に毒だろうが、適量なら思索に耽る助けにもなりそうだ。父がグラス片手に思案していたりするのはそのせ

いか。
「アンナ、お代わりをちょうだい」
「はい、リディアーヌ様」
「おい、リディアーヌ。初めてなのだろう？　少しペースが早いぞ。後で後悔したくなければ水を飲んでおけ」
「噂に聞く二日酔いですか」
まだ大丈夫だと思う。というか、その気になればアルコールも中和できるのでお腹いっぱいになるまで飲めるのだが……ここはリオネルの顔を立ててチェイサーを口にしておく。
「次はブランデーを試してみたいですね」
「あれはワインよりもかなり強いぞ。飲むなら心してかかると良い。……と、言っている傍から二杯目を空けようとするんじゃない」
「？　このワインは一本しかありませんが、念のため他のお酒も部屋に置いてありますよ。なくなったら新しいのを空ければいいのです」
「そういう事を言っているんじゃない。……おい、アンナ。こいつの限界酒量を憶

えて、止められるように訓練しておけ。オーレリアでは面白がりそうだからな」
「か、かしこまりました。ですが、リディアーヌ様の限界を『量』で測れるかどうか……」
　解毒魔法を使ったかどうか、逐一伝えないとわからないだろうからな。むしろ、ある程度飲んだら「魔法を使え」と合図してもらう方が良いかもしれない。
「リオネルさまこそ、あまりお酒が進んでいないのでは？　パーティー会場で飲まされ過ぎましたか？」
「それもあるが、私は嗜む程度だからな。どうやらあまり強くないらしい」
　すると、傍に控えているセルジュがふっと笑って、
「殿下はブランデーがあまりお好みではないのですよ。ワインの方が美味い、と専ら赤を飲まれております」
「セルジュ、そういう事をバラすんじゃない。こいつが調子に乗ったらどうする」
「良いではありませんか、リオネルさま。ここは社交の場ではありませんし、好きなように楽しめば良いのです。……というわけでアンナ、三杯目を」
「リディアーヌ様。お注ぎいたしますが、不安になるのでおつまみとお水を召し上

がってくださいね？」

結局、二人でワインボトル一本を空けるのにそう大した時間はかからなかった（ちなみに俺が三分の二近く飲んだ）。

もう一本開けようとしたらアンナに止められたので仕方なく断念しておく。

『また今度飲みましょう。そうね、明後日……いえ、明日にでも』

どうやら、アンリエットの指摘通り俺は酒好きらしい。なまじ高くて美味い酒を好きなだけ飲める身分だから余計に困る。肝臓への影響も魔法で消せるわけだが、なるべく酒量は控えるようにしようと思う。たぶんそう心がけていないと際限なく飲む。

アルコールでほんのり火照った身体がなんだか心地いい。

ただの氷水も身体に染みわたるような感じがして愛おしくなる。

「ここを離れる前に約束を果たせて良かった」

「リディアーヌ。……本当に行くつもりか？」

「今更何を仰っているのですか。行きますよ。あの国でわたしのやりたいことを実現してきます」

リオネルはどこか切なげに目を細め、俺に言った。
「少し、外で星を見ないか？」
「安全を考えればお断りするところなのでしょうけれど……少しくらいならお付き合いいたします」
「お互い、ままならない身分に生まれたものだな」
その夜、二人で見上げた夜空は本当に綺麗だった。
数日後、城の玉座の間にて俺とリオネルの婚約は正式に解消され、俺は王子の婚約者から隣国の王妃候補になった。
解消後もリオネルは俺のプレゼントした羊の角のアクセサリーを愛用し続けた。
そのせいか、俺たちの繋がりは切れていない――女王の夫となる可能性もあると噂が広がり、彼を軽視する動きは収まった。

リディアーヌの新人教育

「ソレイル王国から騎士見習いとして参りました、ジャンヌ・バダンデールと申します。……再びお目にかかることができ光栄でございます、リディアーヌ様」
「久しぶり、ジャンヌ。これからよろしくお願いね」
「はいっ。精一杯務めさせていただきます」
屋敷の玄関ホールに数人の女性たちが整列している。
異国式――ソレイルの衣装を纏った彼女たちはアンリエットが送ってきた俺の使用人・側近候補たちだ。代表して挨拶してくれたのは既に顔見知りであるジャンヌ。ただし、今回はアンリエットの姪ではなく俺の専属騎士としてここへ来ている。
ドレスではなく黒ベースの騎士装を纏い、髪を後ろで束ねた彼女はどこか凛々しい。同時に緊張しているのかだいぶ表情は硬かった。
「騎士は私の他に一名、メイドが二名、文官が一名。全てリディアーヌ様のために集められた者達でございます。輿入れまでの間、どうか厳しくご指導くださいますようお願い致します」

「ええ。部下となる人間に容赦をするつもりはないわ。……悪いけれど、厳しくいかせてもらうから覚悟してちょうだい」

ジャンヌたちがやってきたのは輿入れ前に側近を選別し、鍛えておくため。向こうへ行ってから教育を始めるのでは手間がかかりすぎる。輿入れ後はすぐに一流の仕事ができるよう、あらかじめリヴィエールに送り込まれてきたのだ。

本人のやる気を買われ、ジャンヌも無事に見習い騎士に任命された。このままきちんと務められれば正式に正妃の専属騎士である。

「あなたたちの教育係および先輩を紹介しておくわ」

専属メイド筆頭はアンナ。その下に元王族にして《漆黒の魔女》の異名を持つオーレリアと、

「ヴァイオレット・ルフォールと申します。メイドとしての経験は浅いため、皆様と一緒に教育を受けることになっております」

ソレイル行きが本決まりということでヴァイオレットも俺の専属として働き始めることになった。

メイド服姿はとても新鮮だが、お仕着せに身を包んでいてもなお妖精の儚げな美

しさは隠し切れていない。重い物とか持てるのか、と不安になってしまうが、侯爵令嬢としての豊富な魔力から来る身体強化で多少の肉体労働など物ともしない。

「わたしの専属ではないけれど、我が家のメイドであるエマにも教育に参加してもらうわ」

「よろしくお願いいたします」

淡々と、丁寧にお辞儀をするエマ。

平メイドでいい、と言い続けている彼女だが、丁寧かつてきぱきした仕事ぶりはメイド長や同僚にも評価されている。その結果「ソレイルに行かないのなら新人教育を」と最近は指導役を任されることが多くなった。ゆくゆくはメイド長を継ぐ可能性もあるかもしれない。

『わたしのメイドも随分増えたわね。まあ、アンナが一番なのは変わらないけれど』

新しく来た二人が使い物になればローテーションも随分楽になるだろう。そのためにもきっちり鍛えておかなくては――と。

「失礼ですが、アンナ様とエマ様の階級はどちらなのでしょうか」

「同僚なのだから呼び捨てで構わないわ。……アンナは男爵家出身で、エマは子爵

家の出よ」

「男爵家に、子爵家」

尋ねてきたのはメイドの片方。彼女は反復するように小さく呟いた後、俺の目を見て言ってくる。

「私は伯爵家の出身でございます」

『あ、そう。……で？』

内心で「期待の新人」から「問題児候補」にランクを引き下げつつ笑顔で応じる。

「なら、きっと十分な教育を受けてきたのでしょうね。頼もしいわ。……エマ」

「はい。荷物を置いていただいた後、実践形式で教育を開始します。実務経験が十分なのであれば基礎教育の時間を短縮できそうですね」

「はい。……え、あの、屋敷を案内していただく時間などは……？」

「案内はおいおい行います。この屋敷で働いていただくのは半年にも満たないのですから、最悪、自分の行動範囲のみ把握していれば問題ありません」

意訳すると「自信があるならさっそく腕前を見せてみろ」ということである。

ジャンヌが苦笑に近い笑みを浮かべて、

「さすがはシルヴェストル公爵家。十分に鍛えていただけそうです」
「あら、ジャンヌも他人事じゃないわ。騎士の教育はモニカに担当してもらいます」
「モニカ・モンターニュと申します。……私はリディアーヌ様に同行する事ができません。その分、貴女達を鍛え上げて送り出すつもりですので心してください」
「は、はいっ！」
なお、モニカが家に来られない日は騎士団の訓練場へ送るかモニカに連れ歩いてもらう予定だ。どの程度やる気と忠誠心があるかわからない人間に護衛を任せられるほど肝は据わっていない。
騎士に関しては基本的に任せるとして、
「さすがね。お茶の入れ方や椅子の引き方は何の問題もないわ」
「恐れ入ります」
少し褒められただけで「ふふん」といった表情になっている問題児候補か。
なんだろう。ソレイルは性格に難のある人間が多いのだろうか。……俺自身を鑑みれば答えはだいたいわかるか。
「では、基本を元にリディアーヌ様のやり方に合わせられるよう学んでもらいま

しょう」
「お任せください。すぐに覚えてみせます」
「頼もしいわ。……じゃあ、今日のところはわたしの傍に控えてアンナたちの仕事ぶりを見てもらいましょうか」
「かしこまりました」
そこからは普段通り、勉強をしたり魔道具の製作をしたり。
アンナは俺の勉強道具を準備したり先生を出迎えたり素材をあれこれ準備したりしてくれる。既に慣れているので手際がよくてきぱきとしている。
しばらくそれを観察していた例のメイドは不思議そうに、
「アンナだけですか？　オーレリア様――オーレリアは何をしているのでしょう？」
「オーレリアは王家や騎士団の依頼に携わっているから、外出するか部屋に籠もって作業していることが多いわ」
「では、実質メイドはアンナだけなのですね」
「ええ。わたしの身の回りの世話はほぼアンナが一人でこなしているの」

「そうなのですね」

なら楽勝だ、という顔をするメイド。俺はとりあえずそれをスルーして、暗くなるまで普通に過ごす。風呂は屋敷のメイドたちに手伝ってもらい、新しいメイドたちは傍に立たせておく。

家族全員での夕食を済ませて、食後の紅茶を楽しんでいるところでセレスティーヌが二人に水を向ける。

「半日過ごして、これからも役割を続けていけそうですか？」

「はい、もちろんでございます、奥様」

「それは良かった。……では、本日の夕食の献立、およびリディアーヌが今飲んでいる紅茶の銘柄を答えられますか？」

「……え？」

『出たわね。お養母さまの指導』

涼しい顔で容赦ない言葉を浴びせてくるから性質が悪い。慣れていない新人たちは目を白黒させている。

「どうしました？　自信のあるようだった貴女からで構いません。答えてくださ

い」
「え、ええと……リディアーヌ様はお肉だけでなく野菜や豆などをバランスよく召し上がっていらっしゃいました。量は一般的な令嬢と同程度で……」
「料理の内容と、使われていた食材はわかりますか？」
「……申し訳ありません、そこまでは」
一見しゅんとした様子で頭を下げる彼女。果たしてそこまでは「憶えきれませんでした」なのか「憶える気がありませんでした」なのか。いずれにせよ、体裁をある程度取り繕える分だけレティシアやグレゴールよりはマシかもしれない。
セレスティーヌは「そうですか」と頷き、もう一人のメイドに視線を向けた。もう一人が自己主張強めなのもあって控えめというか地味な印象を受ける娘だ。歳はアンナより若干若いだろうか。
「貴女はどうですか？」
「はい。あの……まず前菜が」
少し怯えた様子でゆっくりと答え始めた彼女は、意外なことにもう一人よりもよほどしっかりと夕食の内容を記憶していた。

食事風景をただ眺めていたのではなく観察していた証だ。俺は彼女の評価をワンランク引き上げる。

メイド長がすかさず口を開いて、

「主の食事内容は重要事項です。パーティーで料理の取り分けを任された際に主の好みを把握していなければ困りますし、もし食事に毒物が混入していた場合、何をどれだけ召し上がられていたかの情報が生死を左右することもありえます」

「で、ですが、それはおいおい憶えていけば――」

「あら？　あなたは輿入れの際に完璧な仕事ができるようにここへ派遣されてきたんじゃないの？」

「っ」

お喋りな方が唇を噛む。

「で、では、彼女――ヴァイオレットはどうなのですか？」

「ヴァイオレットには尋ねるまでもありません」

セレスティーヌは事もなげに切って捨てる。その上で銀髪の少女が俺が好む紅茶の銘柄やここ二週間分ほどの俺の食事内容などをすらすらと口にしてみせるとさす

がにメイドも何も言えなくなった。

ヴァイオレットはここしばらくアンナと手紙をやり取りしてまで俺に関する情報を集めていた。なので、こと「リディアーヌ・シルヴェストル用のメイド」としての能力はかなり高いのである。むしろ熱心すぎて若干怖いくらいだ。

しかし、初日から少しいじめ過ぎただろうか。

「寝泊まりについては使用人部屋を用意してあるわ。一般メイドは二人部屋だけど、それなりに広さはあるはずだから我慢してね」

今日はゆっくり休むといいと俺は新人メイドたちを部屋に向かわせた。

「さて。……魔道具の調子はどうかしら」

部屋に戻った俺は耳栓のような形状をした魔道具を片耳に装着した。

新人たちに宛がった部屋には単なる調度品と見せかけた盗聴用の魔道具が置いてある。一つの宝石を二つに割って発信側と受信側の魔道具を作ることで念話の原理に近い――現状考えうる限りにおいてはかなり魔力効率のいい音声伝達が可能となっている。

それでも同じ屋敷内で使うのがせいぜい、魔力満タンの状態からでも一晩ももた

ないのだが。

『ああもう、なんなのよ！　長旅で疲れてるのに初日からこんなに大変だなんて！』

『仕方ないわ。時間がないんだもの。陛下が少しでもお元気なうちに婚礼を済ませなければいけない、と、アンリエット様も仰っていたでしょう？』

『そんな事はわかってるわよ！』

おお、荒れている。あまり行儀のよくない行為だとわかっていてなおこういう魔道具を用意したのは彼女たちのこういう本音が聞きたかったからだ。

『何よあんた。随分いい子ぶっちゃって。リディアーヌ様に気に入られようと必死なわけ？』

『そんな事……。貴女だって正妃付きのメイドになるためならなんでもするって言っていたじゃない』

『言ったわよ！　だけど、男爵家出身のアンナなんかにべったりで、侯爵令嬢のメイドまでいるんじゃどうやって取り入ったらいいのよ』

とまあ、こんな感じで、二人の会話はお喋りな方が大人しい方へほぼ一方的に話

しかけるような展開が続いた。どうやら二人の精神的な上下関係にはだいぶ差があるらしい。

「なるほど、ね」

「リディアーヌ様。明日からの教育はどういたしますか？」

「そうね。それじゃあ――」

エマの静かな問いかけに、俺は少し考えながら答えた。

そして。

「本日からはリディアーヌ様の専属となるにあたり必要な知識を蓄えてもらいます」

「知識、ですか？」

「はい。リディアーヌ様が勉強熱心かつ魔法に長けている事は昨日の時点で理解できたはず。ですので、貴女達にはその補佐ができるように勉強をしてもらいます」

教育係にはエマがつき、別室で猛勉強である。ただ俺の傍に立たせておくよりはその方がよほど役に立つというわけだが、これに案の定噛みついてくる者が。

「勉強なんて……！　食事のメニューや紅茶の銘柄なら実地で覚えられます！　今さらわざわざ座学なんてする必要が――」

「では、主要な宝石の種類と名前、その性質。それぞれの石を魔石にした場合にどのような属性と親和性を持つか、知っていますか？」

俺は魔石づくりに宝石を多用するので結構重要である。「サファイアを取ってくれる？　……ああ、違うわ。それはブルートパーズ」とかいちいちやっていたらキリがない。

が。

「魔道具の製作なんて正妃様の仕事ではありません。リディアーヌ様がなさる必要はないと思います。そもそも、向こうに行ったらそんな暇――」

「ああ、そう？　なら貴女、もう帰っていいわ」

言っても聞かないのでとりあえず「クビ」を宣言した。

紅髪の次期女王

「それじゃあ、行ってきます」

十三歳の春。

俺は準備万端整えた馬車複数台が待つ屋敷の庭に立った。

見送りには父と養母、それからアランとシャルロット。家族勢揃いのうえ、屋敷の使用人たちまで全員揃っている。警備の兵も可能な限りの人数が出てきてくれた。

「お姉様、本当にお気をつけて。何かあったらすぐに帰ってきてくださいね」

「大丈夫よ、シャルロット。いざとなったら追っ手を全員やっつけて、歩いてでも帰ってくるわ」

昨日までの間に十分別れは惜しんだにも関わらず、妹は既に泣きそうである。彼女ももう十二歳。どんどん女性らしくなってくる年頃だというのに、本当に心配してくれているのだなと嬉しくなる。

身長のほとんど変わらなくなった彼女の身体を抱きしめ、美しい金色の髪を優し

く撫でる。
　別れの抱擁は数十秒もの長さに及んだ。
「お兄さまも、学園に入学されてお忙しい中、わざわざありがとうございます」
「何を言っているんだ。今日ばかりはたとえ王命があろうとリディを優先したよ」
　兄のアランは十五歳になり、めでたく学園に入学した。次期宰相最有力候補がいよいよ本格的に活動を始めるとあって貴族社会からも関心が集まっている。彼ならきっとこれから更に成長して父の跡を立派に継いでくれることだろう。
　今度は逆に逞しい兄の身体に抱き寄せられる。昔は女装の似合う（※残念ながら実際にしてもらったことはない）美少年だった彼はすっかり男らしくなり、一見すると細身ながら筋肉もしっかりと付いている。
　兄弟でも年頃の男女はほいほい抱き合うものではないのだが……兄が若干涙ぐんでいるのに気づき、俺は野暮なことを言うのを避けた。
「お父さま、今までお世話になりました」
「嫁入りに行くような挨拶は止めなさい、リディ」
「旦那様。ような、ではなく嫁入りです」

「だとしても、だ。年頃を迎える頃に未亡人となる可能性も高い。行くあてがなくなれば帰ってくる場所はここなのだから、長い別れではあるまい」
「ええ、そうね。なるべく近いうちに里帰りはするつもりよ」
くすりと笑って父に軽くハグをしてやる。感極まった父に抱きしめられそうになったのでそれはすっと避ける。この人に捕まると一体どのくらい時間がかかるかわかったものではない。
出発の挨拶を簡略化するために前もって記念パーティーやら何やらも開いたのだ。十分に話もしたし、なんなら頑張れば念話も可能である。
「お養母さま。あまりエマをいじめないでくださいね」
「わかっています。……リディアーヌ。別れの場だというのに言う事がそれですか」
体裁を取り繕う事にかけては右に出る者のいないセレスティーヌが珍しく露骨に呆れた表情を浮かべ、俺の前に進み出てくる。
いつ以来だろうか。
抱き寄せられ、身体を抱きしめられた。あの頃に比べると俺の身長が伸びたせいか、養母の顔がかなり近くに感じられる。

「行って来なさい。王妃として、女王として、そして私達の娘として恥ずかしくないように務めを果たしてきてください」
「もちろん。邪魔する奴らは全員叩きのめして、わたしのための国を作ってやるわ」
身を離し、見上げて笑うと優しい微笑が返ってくる。
くるりと振り返れば、五人のメイドと二人の騎士、それから一人の文官が揃っていた。
「待たせたわね、みんな」
「いいえ。むしろ、お時間は大丈夫ですからもう少しお話をされてはいかがですか？」
気遣わしげに尋ねてくれたのはソレイル側から派遣されてきたメイドの一人。来て早々に軽いボイコットを宣言したあのお喋りなメイドである。
当初、俺を軽く見ており出世しか頭になかった彼女は事あるごとに仕事に音を上げてくれたが、その度に説教をしクビをちらつかせていたら次第に態度が改善されていった。
ひょっとすると「実力が見たい」と言われて彼女の全力の魔法防壁を素手で割っ

てやったのが効いたのかもしれないが。

今では仕事を卒なくこなしながら笑顔を振りまくムードメーカー。俺にもあれこれ話しかけてくれるのはもちろん、他のメイドたちとも積極的に交流して噂を集めてくれるようになった。意外な才能の開花に一番喜んだのはヴァイオレットで、諜報用の部下として使えるよう嬉々として調教――もとい教育をしていた。

「忘れ物はございませんか？　孤児院の子供達からの餞別は全て揃っておりますでしょうか」

「大丈夫。……向こうまで持って行くと無くしそうだから、公爵邸にでも預かってもらわなくちゃね」

もう一人の大人しいメイドは記憶力と観察力なら五人の中でもトップクラス。もともと真面目で忠誠心は高かったし、本好きという性格もあってこちらの国でも可能な限りの書物を読み漁って多くの知識を蓄えている。

オーレリアに便利使いされた結果、本で読んだ内容限定ではあるが「思い出す魔法」の独自修得に成功しており、俺も困った時は頼らせてもらおうと思っている。

「リディアーヌ様。どうかお気をつけて。貴女にお仕えできた事を心より嬉しく思

います」
「絶対にご無事でいてください。それから、私が合流する前に国を掌握しきってしまうのも止めてください。仕事がなくなってしまうので」
「ええ。モニカとノエルも元気でね。また会いましょう」
家族とは別に立っていたこちらでの護衛騎士たちにも声をかけ、馬車へと乗り込んだ。
国境まではリヴィエールの騎士団が随行して護衛してくれることになっている。そこからはソレイル側の騎士団に引き継ぎを行って王都まで移動する手はずだ。
到着までには早くて一週間。
途中、公爵邸にも宿泊できるそうなので正直少し楽しみである。無理にでも時間を作ってソフィと話をしたり、羊の顔を見たりしたい。
「陛下や皆さまにもよろしく」
窓から顔を出し、城からの使いにそう告げる。走り出した馬車はゆっくりと速度を増しながら屋敷から離れて行った。
大通りはちょっとしたパレードのごとく人々が集まっていた。めでたい事だと宣

伝され平民街にも酒や食べ物が振る舞われたせいもあるだろうが、みんな歓声と共に送り出してくれる。

ある程度進んで下町に差し掛かったあたりで孤児院の子供たちの姿も見えた。手を振ってやるとみんな嬉しそうに手を振り返してくれる。あそこの運営についてはシャルロットとセリアに引き継いできたし、それを浸透させる時間は半年以上もあったのでうまいこと受け入れてもらえた。

ただ一人、最後まで納得しなかった我が儘娘がいたが、

『元気でいなさいよ、ルネ』

俺と目が合った彼女は恥ずかしそうに目を逸らし、それでもその場を走り去ることなく見送りを続けてくれた。

そして。

馬車が王都を出ようという頃、城の方から太い光が俺たちの行く手に向かって伸びた。光は二色。護衛たちは一瞬何事かとどよめいたが、俺には誰の仕業か一目でわかった。

「ありがとう。十分に伝わったわ」

だから前もって別れを済ませたというのに、どうしてこうもみんなサプライズが好きなのか。

俺は笑って窓の外へ手を伸ばした。手のひらから炎の蝶と鳥が舞い、王都上空へ向けて羽ばたいていく。コントロールし続けるのは今でも困難だが、動きをプログラムして消滅するまで飛ばせるだけなら複数種類の生成もそこそこ精度が上がってきた。

頑張って底上げしてきた魔力は《漆黒の魔女》と遜色ないレベルに達した。身体が成長しきるまでにはまだまだ時間があるので、この調子で師匠越えを狙うつもりである。

「さて。待っていなさい、ソレイル」

母が再び訪れることのなかった祖国でもある。

荒れに荒れてしまっているし、母は赤ん坊の頃に出てしまっているわけだから感慨深いというわけではないが、見てみたいという気持ちも正直ある。

自分の目で見た結果「あ、大した事ないな」とか「駄目ね、これは」と思った場合には、

『遠慮なく改革してやるわ。わたしの野望のためだもの。常識だの伝統なんて知るもんですか！』

まずは、どこまで織り込み済みで暗躍していたのか怪しい後援者――正妃アンリエットから。

彼女の鼻っ柱をへし折って制御下に置く。実行犯は排除したが、未だ当時の命令者が誰かは確定していない。少しでも反抗的な態度を見せるようなら容赦をするつもりはない。

『わたしはただの令嬢じゃない。悪役令嬢だもの』

膝に乗せるようにして携帯している宝剣を軽く撫でながら、俺は遠い空を紅蓮の瞳でじっと見つめた。

◆　◆　◆

あの少女が国を去ってから二年が経った。

リヴィエール王国第三王子リオネル・ド・リヴィエールは馬車の窓から外の景色

を眺めながらあらためて思った。
「早いものだな」
同乗する従者のセルジュはその短い言葉だけで意図を察して言葉を返してくる。
「ええ。この二年で殿下もご立派になられました」
「当たり前だ。私とて遊んでいたつもりはない」
目線の高さはもう従者とそれほど変わらない。母親似の柔らかな顔立ちは令嬢達によると「バランスが良い」らしく婚約を解消して以来、求婚の類は増える一方だ。
剣の稽古も頭脳の鍛錬も、魔法の修行も欠かしていない。
二番目の兄に一番目の兄、同年齢の癖に天才的すぎる『聖女』――自分より上の人間へ積極的に教えを乞うた結果か、彼らには敵わないまでもそれなりの実力に達したと思う。
剣の腕で敵わなければ身体強化の精度や魔法による小技で追いつく。剣で鍛えた瞬間的な思考能力はチェスでも役に立つ。魔法の才で劣ろうとも恵まれた身体を武器に婦女子を守ることができる。
なんにでもすぐ手を伸ばしていたあれの真似ではないが、リオネルは突出したと

ころのない能力を柔軟に生かす事を覚えた。
「そうですね。きっと学園でもいい成績を残せるでしょう」
彼らが向かっているのは年頃を迎えた貴族達の学び舎――『学園』である。
今日が登校初日であり、リオネルが纏っているのも真新しい制服だ。完全なお仕着せではなく、色などの大まかな形状さえ決まっていれば後はアレンジが自由という仕様だが、これを纏った兄達を羨ましく思ったのはよく覚えている。
「良い成績か。ならば、学年首席はどうだ？」
「……さあ、それはどうでしょうね」
セルジュは目を細めて笑った。普通ならお世辞でも頷くところだが、リオネルは苦笑でこれを流した。
「そうだな。何しろ、予測不可能な奴がいる」
プリエール女男爵――聖女セリアもリオネルと同学年である。少なくとも彼女に魔法で勝てる気は全くしないし、他の分野とて気は抜けない。何しろ相手は世界で二人しかいない希少な存在だ。
そして。

（何よりもあいつらだ）

リオネルが到着すると、校門をくぐった先には既に多くの子女が集まっていた。既に社交が始まっている、というのもあるだろうし、今年入学する王子や聖女に会いたかったから、というのもあるだろう。

しかし、ひょっとすると一番のお目当ては違うかもしれない。

群がってくる同世代の貴族達に表向きにこやかな対応を行いながら、リオネルはとある人物の姿を探した。同じように身動きを封じられているセリアと目が合ったが、今話をしたいのは彼女ではない。

と。

校門の方がにわかに騒がしくなった。どうやら新たに到着した一台の馬車が原因らしい。その色と、車体に描かれた紋章を見て思わず笑みが浮かんだ。

扉が開く。

十九歳――成人女性としての美と貫録を手に入れた騎士ノエル・クラヴィルが先に降り、中にいた少女へ手を差しのべる。

そうしてゆっくりと下りてきた彼女は、一目でわかるほど上等な黒の制服を身に

纏っていた。

（ああ、そうだ。黒と赤でこいつに敵うわけがない）

目の覚めるような紅の髪と瞳。

身長は成人女性と比べるとやや小柄だ。体格も特段がっしりした印象はないものの、その胸元は十分以上に豊かに実っている。肌は白く、見える範囲には傷一つない。

腰に下げるのは一目で一級品とわかる剣。以前に見たことのあるリオネルにはそれが武器というよりも魔法の補助具であるとわかる。

気の強そうな、強い光を放つ瞳に目が吸い込まれる。少女もまたリオネルを見て、にっこりと笑った。それを合図にしたように人の波が割れて二人の間に道ができた。

一歩。

進むごとに胸が騒がしくなる。柄にもなく緊張しているらしい。悟られるのは男の沽券に関わると必死に自分を宥めて歩いた。

「ごきげんよう、リオネルさま」

「リディアーヌ・アン・ソレイル王妃殿下。これはこれはようこそ参られました。我が『学園』は貴殿を歓迎いたします」

外向けに作った笑顔で恭しく言えば、少女がくすりと笑った。若干むっとしつつ、リオネルもまた笑顔になって告げる。

「元気そうだな。もう少し向こうで苦労しているかと思ったが」

「あら。それはもう苦労してきました。ですから、こうしてこの地を踏みしめられるのを楽しみにしていたのです」

嘯くように告げる彼女の後ろからアンナとヴァイオレットがやってくる。アンナはソレイル式のメイド服姿だが、ヴァイオレットはリディアーヌのものに似た制服姿だ。

（そう。この二人を相手にしなければならないのだからな）

軽く「一位を取ってみせる」などとは言えない。戦いが厳しいものになることを予感しながら息を吐いた。

「まさか、留学などという手段で来るとは思わなかったぞ」

「だって、向こうの学校は程度が低いんですもの。権威に阿りすぎて教育機関とし

ての権威が落ちているの。改革は進めているけれど、早期の改善にはお手本がいるでしょう？　だからこっちで学ぶことにしたの」
「それにしたってよく許可が下りたな。陛下もお歳だろう」
「そっちは問題ないわ。陛下はわたしが初めてお会いした頃より元気なくらいだもの」
　確かに。リオネルもソレイル国王が未だ目立った病気もせず健在だという情報を聞いている。その原因が、王妃となったリディアーヌが食生活の改善、仕事量の調整、定期的な運動の実施など健康のための世話をせっせと指示したからだとも。
「若い娘から献身的に世話を焼かれているのだ。それは嬉しかっただろうな」
「もしかして嫌味かしら？　心配しなくても陛下とは清い関係よ。祖父と孫と言った方が近いかしら。純粋に身体を気遣ってくれる王族なんて殆どいなかったらしいからそれはもう喜んじゃって」
　そのあたりで咳ばらいを打ち、惚気話（？）を中断させた。
「それで留学に許可が出たわけか。向こうの方は大丈夫なのか？」
「もちろん。二年の間に引き入れて教育した人材がしっかり働いてくれているし、

週末は向こうに戻るつもりだもの。そのための魔道具も準備してきたの」
「それは聞いているが……本当に無茶をするな、お前は」
リディアーヌは教国がかつて各国に贈ったとされる転移の魔道具――それとよく似たものを新造したのだ。それも、留学という大胆な行為を認めさせるためだけに。
原理としては対になった魔道具同士を共鳴させ、一定範囲内に存在する物をそっくり入れ替えるらしいが、そんな胡乱な代物を本気で研究して実用化してしまうあたりが恐ろしい。オーレリアともどもやりたい放題できる環境に送ったら二年でこれである。
「ご心配なく。もし向こうにある魔道具が壊されるようなことがあれば重罪です。わたしがいざとなったら本気でやる人間だということは十分に知れ渡っていますから、それでも壊すような人間は自殺志願者ですね」
「ほどほどにしてやれ、と言うしかないな。……まあ、しかしある意味安心した」
二年ぶりだというのに相変わらずにも程がある。
以前にも増して美しくなった容姿とは裏腹にリディアーヌの内面は変わっていない。むしろ以前よりも自由奔放で輝いているように見える。

「その様子なら結婚相手など見繕う余裕もなかっただろう」
　すると少女は不敵に笑って、
「それはまあ、わたしはまだ人妻ですからね。……そういうリオネルさまこそ、お相手は見つかったのですか」
　リオネルは、ふっと笑って口を開いた。
　この無駄な言いあいに二年ぶりに興じられることを心の底から楽しみながら。
「私を馬鹿にするなよ、リディアーヌ。この二年でどれだけ成長したか、じっくりと思い知らせてやる」

　本作はここでいったん完結とします。
　お読みいただきましてありがとうございました。
　本章を書き始めた時点で旅立ちから留学による帰還で一区切りをつける予定でした。
　物語としてはそこで読み終えてもいいし、間の話をのんびり続けることもでき

る、という形です。
ただ、残念ながらモチベーションが続かなくなってしまったので続きを書くかは未定です。
気が向いた時に書くかもしれませんし、このまま完結のままにするかもしれません。

TS転生令嬢は『カウンター悪役令嬢』を目指す

著者　緑茶わいん

発行日　2023年1月1日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/291096/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。